# THE CENTRAL REVIEW

# 中央公論

## 二月號

第四十二年　第二號　第四百六十九號


春のお支度は
松屋へ
松屋呉服店
東京銀座



ORGANO-THERAPEUTISCHE WERKE G.m.b.H. OSNABRÜCK
高血壓症に
アニマザ
壯(さ)年者の貴重なる生命を脅威する……
動脈硬化症及腦溢血の治療及豫防劑として多數の臨床報告並びに批判の結果世界的に効果を確認されたる脈管臓器製劑なり。
神經の昂奮、精神の過勞、酒・煙草……
の中毒その他現代の緊張生活は、生理的血管硬化(七十歲)を待たずして人生の收穫季にある四十乃至五十歲の壯年者をして早くも血管緊張し老衰を來さ又は短命に導きつゝあり。
一時的の血壓低下劑にあらず……
血管の病的變化に直接作用して原因的に奏効す、その適用により徐々に血壓を低下するに止まらず、頭痛、眩暈、不眠、耳鳴等を消失せしめ生活及び業務上の愉悅を恢復す。
說明書進呈
五〇錠
一〇〇錠…六圓八十錢
獨逸オスナブルク臓器治療藥會社日本總代理店
株式會社 田邊元三郎商店
東京市日本橋區本町四丁目

□



歯を強く
美しくする
チューブ入
クラブ煉歯磨
磨けば光る歯と心
（口腔衛生標語）



春客　　森田恒友筆

昭和二年

# 中央公論

二月一日發行

## 二月號

第四十二年第二號

第四百六十九號

# 先帝崩御と恩赦

先帝の崩御に伴つて刑獄の人に恩赦の命あるべきを傳ふ。所謂罪恩枯骨に及ぶもの、畏きあたりの仁慈の深き、たゞ〳〵感激の外ないが、朝命を承つて事を掌るの當局に向つては、國民の一人として亦一二希望を述ぶべきものがないではない。そは恩命の御趣意を完全に徹底せしむる爲には、一には刑獄の人達をして普ねく至仁の恩澤に浴せしむると共に、又一には之に依て些でも社會の安寧を害してはならぬと思ふからである。

私共の聞く所に依れば、從來の經驗に徴するに、恩赦に浴して出獄した者の其後に於ける成績は概して思はしくないと云ふ。或程その通りだらうと察せらるる。只刑期を短縮するといふだけでは、その當人に取て大なる恩澤たるべきは云ふを俟たないが、爲に往々社會全般に不良の結果を生ずることあるは決して豫想し難いことではない。されば隨分古くから斯の慣例に對しては疑を挿むものがあつたのだ。我國に於ても既に明治二年の昔、當時刑法官權判事たりし津田眞道先生は、公議所に對つて「赦令御廢止可然議」といふを提出して居る。卓抜なる一見識として今日に於ても之を味うて見る必要はある。

竊ニ案スルニ　朝廷ニ吉凶ノ大禮アル每ニ赦令ヲ行ヒ罪人ヲ放ツコトハ和漢古今ノ常典ナリ。然レトモ其理ハ頗ル不經ニ屬スル者アリ。夫レ人君ノ人ヲ刑スルハ好テ之ヲ爲スニ非ス。寧ロ一人ヲ罰シテ數人ヲ救ハントノ趣意ナレハ、其形ハ不仁ニ似タレトモ其實ハ至仁ヲ行フナリ。之ニ反シテ赦令ヲ行フ時ハ、一人ヲ救ハンカ爲ニ寧ロ數人ヲ陷レントノ趣意ニ當リテ、其形ハ至仁ニ似タレトモ其實ハ不仁ノ甚シキナリ。且夫罪輕クシテ赦スヘキ者ナレハ　朝廷ニ大禮ナシト雖トモ之ヲ赦スヘシ。又罪重クシテ赦スヘカラサル者ナレハ　朝廷ニ大禮アリト雖赦スヘカラス。赦スモ赦サヽルモ　朝廷ノ大禮ニ關係スヘキコトニ非ス。況ヤ刑律ハ永世ノ法ナリ、赦令ハ一時ノ事ナリ。一時ノ事ヲ以テ永世ノ法ヲ破ル、可ナランヤ。此數ノ者皆義ニ戻リ理ニ反ス。故ニ云、頗ル不經ニ屬スル者アリト。方今文明日進ノ際、此等ノ事モ亦御改正アルヘキニ似タリ。如何。

併し私共が茲にこの一文を引用したのは、すべて恩赦を無用と主張せんが爲ではない。刑獄の人達も亦陛下の赤子である。枯骨にも恩惠を施し給はんとするの聖旨は、飽くまで之を徹底させなくてはならぬ。只問題は、徒らに刑期を短縮することが果して恩赦の御趣旨を貫く唯一の方法かどうかと云ふ點である。尤も傳ふる所に依れば、之等の點は既に當局の間に於ても問題となつて居ると云ふ。賢明なる措置の執らるることを疑はぬも、強て野人の希望を述ぶるを許さるるなら、私共は此際特に次の四點に注意を傾けられたいと思ふのである。

一、刑獄の目的が、單に惡性の者を社會より隔離して一般民生の安寧を防衞することのみならず、併せてまた其惡事に相當するだけの懲罰をも加へんとするに在りとした時代に在ては、事實上社會的に觀て適當とする刑期以上に罪人を牢獄に繋ぎ留めるといふこともあり得る。從て刑期の短縮が社會に實害を與へぬ場合もあつたに相違ない。所が今日は刑罰の目的が昔とは變つて來た。そこで恩赦を與ふるに先つて社會の安寧と云ふことが痛切に考慮せられなければならぬことになるのである。

二、從來恩赦の命に浴して出獄せる者の概して成績不良なりしに付ては、外にまた出獄人を待つ社會の用意が不十分であつたと云ふことも一つの大なる原因を爲しては居なかつたか。この點も決して看過することは出來ぬと思ふ。從て社會の安寧の防衞に腐心するの餘り、恩赦の發令を不當に出し惜むことなき樣、戒心することも亦大に必要である。之と同時に出獄人を待つ社會の用意を整備するの急務なるは言ふを待たない。

三、刑獄の人達に取て最も大なる福音は、言ふまでもなく、刑期の短縮に相違ない。他に實害を及ぼさぬ限り、恩命の先づこの形で現はれることが何よりも望ましい。而して若し之に出づるを可ならずとするものある場合、始めて別に刑獄に在てなほ聖恩の忝なきを思はしむる所以の途を講ずべきであらう。

四　要するに所謂恩赦に付ては、敢て從來の慣行に拘泥せず　必しもその形式を劃一にすることなく、普ねく刑獄のすべての人をして聖旨の渥き惠に浴せしむるの方法を講ずることが肝要だ。斯くして皇室の下萬民をいつくしみ、同時に亦刑獄の人達までを憫み給ふの聖意は十分に徹底することが出來るのである。

中央公論



第四十二年第二號
二月號
第四百六十九號

# 象徴主義文化の建設

田中王堂

## 一　閑却されたる高遠にして緊切なる一大要件

今日、世上の識者、即ち、わが國の運命の支持と改進とを彼等の双肩に荷ふと自任し、他稱さるゝ人々に依つて閑却されたる、否、一層事實に即して語れば、全然彼等に依つて其れが存在することにさへも氣付かれざる高遠にして、緊切なる一大要件がある。其等の識者は學者として、教師として、官吏として、乃至實業家としてそれぞれ彼等の屬する階級に首班を占める者である。彼等の地位と職業とが、おのづから暗示するところのものを其れの表記價値に於て取れ

ば、わが國は恰かも、彼等を通して、其れの幸福と興隆とのために、現に其れが利用し得る最優の才幹を最善の方法にはたらかして居ると想像されるであらう。然し、事實、果してさうであらうか、事實は果して、どこまでこの想像を裏書きするであらうか。

わたくしの所見に隨ひ、わたくしの所信を告白するならば、彼等はわが國が使用し得る最優の才幹でもないし、又、其れが最善のエコノミイに依つてはたらかされても居らないと言はなければならない。其れは、既に彼等は、近世的の意味に於て、わが國の要求する文化は如何なる種のものであるべきかといふ考慮に依つて教養されなかつた上に、彼等は如何なる種の文化を建設しようと志すことが、最も適當にわが國の環境と資力とを擇用するの道であるかといふ考慮に依つて彼等の疎漫な理會と方針とを修正しようとしないところから來たるのである。

わたくし共が近世文明に就いて語る時に、そこには形式的の意義と、本質的の意義との二つあることを知らねばならぬ。苟くも生を現代に享け、其れを將來に亘つて續けて行かうとする國民は、是非とも近世文明に順應しなければならぬといふ時には、わたくし共は其れを形式的に語つて居るのである。近世文明は一々の國民に依つて彼等の傳統とカルチュアとを基礎として獨自に創造されねばならぬといふ時には、わたくし共は其れを實質的に語つて居るのである。わたくし共が、近世文明を總べての國民に共通の通用貨幣の如く考へるのは、其れを形式的に語つて居る時に限つてである。わたくし共にして、一度、其れを實質的に語ることになると、其れは品性のあらゆる側面、若しくは、發動と等しく、一つの民族より他の民族にまで借りたり、貸したり、若しくは、眞似たり、眞似られたりしてはたらないものであるのみならず、又、さうすることの出來ないものである。其れは、徹上徹下、個性のものであり、特殊性のものであり、自立性のものであり、不可分性のものである。

わが同胞は近世文明を形式的に語ることだけは知つて居るが、まだ其れを實質的に語ることを知らない。彼等が實在

すると想像する近世文明は纔かに抽象觀念として形式的に彼等の心の中に浮動するに過ぎないのであつて、眞に實在する近世文明は獨り嚴密なる時處位の條件に制限された實質的のものに限られるといふことを覺るに至らない。畢竟するに、わが同胞は近世文明に關して一つも正しき理會を有たず、確たる思想を作らず、たゞ誤つて文明國民と呼ばれて居る人々の所爲を模倣し、其れに追隨するだけに依つて、徒らに近世文明を體現しようとして居るのである。彼等にしてかうすることに浮身を窶し、其れが近世文明を生活することであると眞面目に、精一杯に考へて居る間は、現に、彼等の生活に於て醞釀されて居るやうな矛盾や、消耗や、過失が日夜に醞釀されてもそこに何等の不思議もない。彼等がさうすることを止めない限り、そこに若し不思議とすべきものが一つでもあるならば、其れは現に醞釀されて居るものよりも、更らに大なる矛盾や消耗や、過失が更らに一層數多く醞釀されないことであらねばならぬ。

わたくし共日本人が正しく近世文明を體得し、體現する上に取つて、決して閑却されてはならない一大要件があるが、不幸にして其れはわが同胞に依つて閑却され、そして、閑却されて居ることに氣付かれもされないのである。彼等に依つて近世文明に關はるあらゆる問題が攻究される時に、彼等はわたくし共日本人に取つては、この要件が其等の總べてのものに光被し、最後に其等の意義に點睛するものとして儼存するのに氣付かずして、其れの此岸に横はるものに終始するのを常とする。

この要件とは他ではない。わたくし共が近世文明を思惟する時に、其れの Chat に當らずして、其れの What に當り、更らに進んで其れの How に當るものである。一層詳しくこの意味を敷衍するならば、近世文明に依つてわたくし共の傳統とカルチュアとを擴張し、わたくし共の傳統とカルチュアとに依つて近世文明を補正し、充填する方法として象徴主義文化を建設することである。わたくしの考へるところに依れば、今日に於て、わたくし共日本人が象徴主義文化を企畫し、建設するといふことは個人的に、國民的に、そして、國際的に、實行的にと等しく審美的に、刻下に於

けるわたくし共の生活を經濟的に、即ち、合理的に統一し、分化する最善の覺悟であり、方針となるのである。わたくしがわが國のために象徴主義文化の建設を唱道するのは、遠き未來に於て或る結果を齎らすのを目的としてではなく、直前の現在に於てわたくし共の態度を決定するのを目的としてである。わたくしは百年の長計として其れを唱道するのではなくして、今日の實策として其れを唱道するのである。今日、わたくし共が具體的の意味に於て、即ち、わたくし共自づからに取つての近世文明を生活するのに、眞實にして的確なる方位と方便とをわたくし共に供給するものは、獨り象徴主義文化の觀念だけである。されば、わたくし共にして一日其れの建設を延ばすといふことは、取りも直さずわたくし共の生活を其れの現時の混沌たる、そして、昏迷せる狀態より救ひ出すことを一日怠るといふことを意味するのである。

如何なる程度の小錢にでも兩替出來ない大きな貨幣といふものがあるならば、其れは贋物たるに相違ない。わたくしの唱道する象徴主義文化にしたところで、其れの志向するところのものが正しく理會され、運出される時、其れがわたくし共の日常生活の最小部分の意義と方向との決定に些しも影響するところなく、わたくし共の日常生活は今日處置される形のまゝで殘され、象徴主義文化はたゞ一つの不換概念として其れの上に塡置されるに過ぎないものならば、其れは一つの贋物でないと誰れが保證し得るか。象徴主義文化は高遠ではあるが、同時に、緊切なる理想である。否、其れが高遠なるが故に、始めて緊切であり得る理想であり、一層事實に即して語れば、緊切であるの目的を以てのみ、一途に高遠ならんと努める理想である。

## 二　國書復刊の意義幾許ぞ

「近年一種の流行となつた國書の復刊は昨年に至つて空前の盛況を呈した。苟くも其れがわが國の過去の文化の所産で

ある限り、歴史に關するもの、文學に關するもの、思想に關するもの、乃至、國民の道德と經濟とに關するもの等、支那流の分類に隨へば、經、子、史、集に屬するものの悉とくは複刊された。わが國の出版業者が相競うてこの新流行を促進したのには、財界の不況につれて彼等の資金の融通に關する思惑が多分に含まれて居るといふことをわたくしは聞いた。或はさういふことがあるかも知れない。わたくしは、或る意味に於て、織物の新流行が織物業者に依つて創造されると等しく、書物の流行が出版業者に依つて創造されることを疑はない。然し、孰づれの場合に於ても、當業者が一つの新流行に思惑を立て、そして、其れが相應な程度に滿たされるのには、彼等は、顧客の側に於て、尠なくとも衝動の形にでなくとも、其れに對する欲求の目安を見出だして居るに相違ない。どんなに巧妙な手段を弄しても、當業者は顧客の心の中に全然潛在して居らない欲求を彼等の一手で創造するわけには行かない。彼等の爲し得るところの總べては、漠然已に衝動として浮動して居るものを組織して、其れに的確な形と方角とを與へるだけである。

さうすると、昨年空前の隆盛を極めた國書の復刊も極めて微弱な力としてではあるが、先づ其れを要求する衝動が漠然世人の或るもの丶心の中にはたらいて居たと見なければならない。然し、それだけのことは何人と雖も疑ふことの出來ない事實であるとしても、其れの意義を如何に解釋すべきかは細心の考慮を要することである。

『決定は否定である』といふ諺がある。人間には澤山の欲望が生起する。其れ等を實現する方便としても澤山のものが著想される。然し事實として其等の欲望としても、又、其等の方便にしても、決して悉とく並立し得るものではない。無限の欲求を滿たすに纔かに有限の力しか有たない人間に在つては、自然、其等の或るものは他の或るものと矛盾し、衝突するを免かれない。二つ、若しくは、二つ以上の欲望、又は、方便が矛盾し、衝突する場合に、其等の孰づれかの一つを取れば、他の二つ、若しくは、其れ以上のものは勢ひ捨てられざるを得ない。一旦、其等の總べてが、或は欲望として彼れの心の中に生起し、或は其れを滿たす方便として彼れに依つて著想されるからには、相當な價値は其等の總

べてに含まれて居るに相違ない。決して取られるものだけが價値の全部を占めるがために取られ、捨てられるものが何等の價値をも有たないために捨てられるのではない。たゞ一つの特定の場合の要求を標準とし、其の場合に限つて其等の各が含む異なる價値の上に比較評價が施される結果として、其等のものの間に取捨が行はれることになるのである。決定は、畢竟するに、否定である。一つの價値を有つ欲望、若しくは、其れの方便を決定することは、其れと兩立することの出來ない總べての他の欲望、若しくは、方便を否定し、其等と一緒に其等の價値を否定することである。斯くして、必然に人間の選擇作用は絶對價値と絶對無價値との間にはたらかずして、異なる種の相對價値の間にはたらくものとして、其れより生ずる滿足の純粹であることは稀れである。其れには殆んど常に不滿と諦めとが伴なふ。

古來、人間は合理的動物と定義されて來たが、彼れを不合理的動物と定義する方が反つて事實に合する場合が尠くない。その時々の必要に應じて生活の方針を作るためには、其の方針を標準として、彼れの情操や、彼れの觀念や、行動を統一して、苟くも其れを攪亂し、若しくは、其れと背馳する總べての他の情操や、觀念や、行爲を排斥して行かねばならぬ。さうすると、人間として生きて行くにはさうするより他に道はないのであるが、一面からすれば、彼れがだんだんに多く彼れの生活に條理を立てて行くことは、それだけ彼れはだんだんに彼れの活動と變化との可能性を狹めることとも見られ得る。これがために、彼れは、折にふれて、其れの心像の遙かに生氣あり、其れの色彩の遙かに絢爛であり、其れの聯想の遙かに奔放であつた彼れの生活の原始狀態を想像し、其れに對して感傷と痛恨との情緒に浸らうとする傾がある。此れは、確かに、南向して北斗の見えざるを嘆つと等しく、實利の原理よりすれば確かに不合理なことである。然し、其れも人間に內具する根本性情の一部であるとすれば、たゞわたくし共の爲すべきことは、現在に於て改造さるべき生活の一要素にまで化し、其れを利用し、其れの不合理性を合理化することにあると思はれる。

わたくし共日本人は嘗て生死の岐路に置かれたのであつた。その時に、わたくし共の取つた方策は全然九死に一生を

得る見地より著想され、攻究されたのであつた。其の結果はどんなに犧牲を拂つても、どんなに苦痛を忍んでも、個人とし、國民としてわたくし共の生存を全うするためには、近世文明の側面の中でも、當時の父老たちに依つて彼等の祖國の存在に取つて絶大の關係あるものと解釋されたる側面、即ち、其れの唯物的にして實利的の側面だけが採取されることになり、わが國に傳來する文化と其れの所產とを保存することの如きは、この目的に對して無用であり、有害であると速了されたのであつた。近世文明の皮相が其れの全體として盲信されると同時に、わが國の古美術が全然其れの價値を失なつて、多くの名品が二束三文で海外に持ち運ばれ、又は、風景絶勝の地の山水が毀たれ、樹木が伐られて、その跡にペンキ塗りの橋が架つたり、安價な木造の西洋家屋が建てられたり、小學讀本までが無趣味な西洋ものの粗末な飜譯であつたりした時代の長く續いたのも、この勢に依つて馴致された後果である。

然し、これだけの必要と理由とで、三千年の久しき過去に亘つて涵養され、蓄積された文化が抑壓しきれるものではない。其れに對して憧憬の念と纒綿の情との、惻々として生ずることのあるのも極めて自然である。今日に於て、わが國の過去の文化が回想され、其れの所產たる歷史や、文學や、思想や、道德や、經濟に關する國書の復刊が沛然として勃興したのに、何んの不思議もない。たゞ、この現象をしてわが國の文化の將來に關係せしめた上、其れに如何なる價値を與へるかは全然別個の問題である。

世上の識者の一部は無雜作にこの現象を以て國民的自覺の一徴候と解釋し、其れに大なる希望を繫けて居るやうである。わたくしはこの安價な樂天觀に同ずることは出來ない。わたくしとしては、最も善意に其れを評價したところで、其れは正しき方向にはたらいて居る一つの衝動に過ぎない。其れを親切に利導し、賢く啓發して行けば、國民的自覺の端緒ともなり、動力ともなり得るものではあるが、其れが今日在るまゝでは、國民的自覺といふやうなものよりは遙かに隔たつたものとしか見ないのである。わたくしがこの運動を目してまだ國民的自覺とするに足らないとする倔強の理

由は、其れが近世文明とおのれとの關係を反省せず、其の關係よりして近世文明の構成の改造を考へ、おのれの意義の改釋を考へたことの一度もないことである。そして、一方に於て、沒反省的に近世文明の模倣を事としながら、他の一方に於て、本能的に、孤立的に、固有の文化の傳習を事として居る、隨つて、兩者は全然二つの事件であつて、其等の間に共通精神と協用作用とが尠しもはたらいて居らないことである。

現代に生を享け、其れを將來に亘つて悠久に其れを續けて行く欲求と氣魄とを有する總べての民族、若しくは、國民が是非ともさうしなければならない通り、わたくし共日本人にしても、最高義、若しくは、最深義に於て近世文明を生活して行かなければならぬといふことだけは未來永劫儼然として決定されて居る事柄である。たとひ天柱折れ、地軸摧けるとも、この一事だけは其れの一部の變改をも許さぬのがわが國の國是である。されば、現代に於てわたくし共が固有の文化を鑑賞するといふことは、必然に近世文明的に其れを改釋して其れを鑑賞することを意味しなければならないし、わたくし共にしても其れを繼承するといへば、必然に近世文明史的に其れを改造して其れを繼承することを意味さなければならない。

然し、今日の國書復刊の流行には全然この反省と知見とが缺けて居るとわたくしは謂ふのである。

## 三　近世文明に對する吾人の態度を決定せし二事情

わたくし共日本人が初めて近世文明に接觸し、採用するに方つて、それから以後、今日に至るまでのわたくし共の態度と氣分とを決定した二つの事情がある。其等の一つは、わたくし共が近世文明を採用し始めたのは自國の文化を修飾しようとするやうな悠長な考慮からではなくして、自國の獨立を保障しようとする切羽つまつた方策からであつたといふことであり、他の一つは、この當面の目的と其れに關聯した事柄からすれば、わが國の文化は西洋の其れに比して到

底較べものにならないほど異なり、且つ、劣つて居たといふことである。わたくしの觀るところでは、此等の二つの事情が實に重大なる意味を有つたものであるから、啻に當時の責任者であつたわたくし共の父老たちの近世文明に對する態度と氣分とを決定したのみたらず、其れに對して、長い期間に亘つて彼等の子孫たる日本人の態度と氣分とを決定して了つたのである。

わたくし共の父老たちは好いて近世文明を取り入れたのではない。嫌で嫌で仕方が無かつたが、力及ばずして其れを取り入れたのである。若し出來得べくんば近世文明なぞは國内へ侵入するのを防いで居いた方が彼等の望むところであつたのである。この一點に關しては、當時鎬を削つて爭つた鎖港論者と開國論者との間に何等の相違もなかつたのである。たゞ、鎖港論者の彼我の力の優劣を知らずに、兵力を以て其れの侵入を防がうとする暴擧を企てて居たのに反して、開國論者は彼我の力の優劣に關して多少知るところがあつたために、暫らく其れの輸入を忍ぶことの已むを得ずとして居たことである。それから以後に展開された時代の傾向よりすれば、無論、開國論者の政策は鎖港論者の政策よりも其の當を得て居たといふことにはなるが、知見といふことに就いて評價すれば、兩者の間には五十歩、百歩さへの相違もなかつたのである。

わが國と西洋諸國との間の大規模なる、そして、眞劍なる接觸は鎖港、開國の問題を通してであり、この問題は獨りわが國の兵力の强弱に依つて決せられるものであつたのである。そして、わが國の兵力が劣弱なるがために残念ながら開國を餘儀なくせしめられたわが國が、西洋諸國との交通貿易より獲得しようとした一事は、當時のわが國の文化では到底著想することも出來ず、完成することも出來なかつた兵制と兵器とを出來合のまゝ彼の土より輸入することであつた。そして、事實として、わが國の文化と、其等の兵制や兵器とを實現せしめた文化との間に餘りに大なる懸隔があつたために、西洋人の役目は其等の計畫者、若しくは、其等の創造者たるにある、日本人の役目は永久に其等の使用者、

運用者たるに止まると風に分限を立てゝ了つた。

かういふ理會の下に、焦眉の急を救ふために剏りに、鋭意、兵制と兵器とを輸入して行つたのであるが、よくよく彼の土の實情を見たり、又、自づから事理を考へて見たりするに及んで、孰づれの國と雖も強兵といふことは獨立した事柄ではあり得ない。強兵には必然に之れが後勁として富國といふ事柄が成り立つて居らなければならないといふ重要な事實を發見したのであつた。然し、富國にしたところで獨立して天より降つた事柄ではない。其れは何よりも先きに産業に依つて培はれねばならぬ。同じ道理で、産業にしたところでおのづからに自然地上より湧き出た事柄ではない。其れは差し當り交通の便と機械の發明とに依つて養はれねばならぬ。かういふ風にして、其れから其れへと、近世文明の諸の機關の相關關係を尋ねて行くと、衞生でも、教育でも、政治でも、道徳でも、苟くも近世生活のヴェヒクルとなつて居るものは何一つとして強兵に無關係のものはなく、其等の孰づれの一つを缺いても強兵の術を全うするといふことは困難であるといふことを朧ろ氣ながら彼等はだんだんに覺つて行つたのである。さうして行つた結果として、彼等は多少見當違ひの獨り合點より、富國強兵の實を擧げて西洋諸國と對抗するには、彼の土に於て見出されるものを悉とく一揃ひに移植するの一途にありと速斷して、其等のものの歴史も、意義も、相互の關係も一切考慮することなく、又、考慮するだけの知識も、知見も有たないで、見付かるまゝに、手當り次第に、鵜戴し、陸揚げしたのであつた。斯くして、數年ならずして近世文明の諸の機關の形體と使用とだけはきれぎれながらこの土に移植された。

西洋の文物に對する彼等の無智の程度と當時のわが國の危急の情勢とを察する時、わたくしはわたくし共の父老たちの古今に匹儔なき進取の精神と勇敢なる行爲とを嘆美しようとは思ふが、妙しでも、其等に對して批評の言を爲さうとは考へない。然し、こゝに、當時より後年に亘つてわたくし共日本人の近世文明に對する態度を決定するに與つて絶大なる感化としてはたらいたものとして特筆しなければならない一事がある。其れは他でもない、最初に自國の獨立を保

障する方便として一向に純實利の考慮を以て近世文明の一つの機關を採用し始めた態度は遂に其れのあらゆる機關を採用し盡すに至つても、猶ほ依然として改められなかつた。不思議にも、わが國語を排して其れに代えるに英語を以てしなければならぬとか、わが人種を改良するのには歐米人の血液を輸入することが最上策であるとかいふやうな極端な意見を主張しながらも、其れの根本動機はどこまでも一向に純實利の見地より自國の獨立を保障する方便としてであつたことである。かういふわけで、近世文明の機關はどんなに手廣く移植され奴隷的に模倣されても、其等はどこどこまでもわたくし共の生活の外的道具たるに止まつて、內的構造にまで組織されるに至らなかつた。

如何なるものに就いて言つても同じであるが、人は其れの創造者となつて、始めて其れに對する親密なる鑑賞が生ずるのである。西洋文明に對して其れの創造者たり得ぬことは謂ふまでもなく、其れの運用者ともなり得ずして、纔かに使用者たるに甘んずるわたくし共が、其れに對して正當なる理會をも有ち得ないのに大した不思議はない。

明治維新の當初より今日に至るまで、近世文明に對してわたくし共日本人の取つた態度は大體三つの範圍を脫することは出來なかつた。其等は時代の相違と事柄の相違とに依つて自然相違はあるが、純然たる模倣と、部分的の、そして、見當違ひの反撥と、衝動的の、隨つて、非組織的の二元主義であつた。此等の現象の孰づれにしても、わたくし共がまだ近世文明に對して正當なる理會と親密なる鑑賞とを以て其れの改造者となり得ない何よりの證據である。

近世文明はこれまで人間に依つて著想され完成された文明の中で最も自由な、そして、個體の尊重と個體の發達とを主眼とする種の文明である。わたくしが其れをあらゆる文明の中で最も精神的であるとするのもこの點に存するのである。さうであるに拘はらず、事實、わたくし共の手にある、否、わたくし共の頭を抑へる近世文明は、最も不自由にして、個體を無視し、個性の發達を妨害するものとなつて居るのである。

わたくし共日本人は近世文明の發動とし、機關として西洋に於て完成された、發生した乃至、萌芽しつゝある學說

や、主張や、運動や、制度を使々手として輸入し、移植し、模倣することに浮身を窶す前に、わたくし共が全然閑却して居る一代緊急事のあることを覺らねばならぬ。それは、これまでわたくし共の爲したとは全然異なつた態度を以て、其れの淵源を洞察し、其れに對してこれまでわたくし共が成し得たとは全然異なつた知見に達することである。さうしたならば、始めて、わたくし共は自分の意思の發動とし、自分の個性の表現とし、自分の憧憬の現實化として、こゝに、從來孰づれの國土に於て發生し、完成されたあらゆる文明よりも異なり、そして、其等よりも遙かに優れた種の文明をわたくし共の手に依つて發生させ、發展させることが出來るであらう。

## 四　吾人は近世文明の同化の意義と工夫とを知らず

植物にしても、動物にしても、其れが一つの風土より他の風土にまで移された時には、其れを新風土の條件に慣すまでには、いろいろと特別の注意と取り扱ひとを要する。其れを移したまゝで放任すれば、その結果はたゞ死あるのみである。そして、動物、若しくは、植物が新風土の條件に慣れるといふことは、取りも直さず其れに順應するやうに其れの組織其のものが變るといふことである。

植物や動物の移植に關しても、これだけの考慮は必要であるのに、其等よりも其れの構造に於て遙かに微妙であり、其れの意味に於て遙かに複雜である近世文明に就いては其れをこの土に移しただけで、其れを風土化することに一向に手數を掛けることなく、そのまゝで健全なる發達を遂げると、無雜作に想像して居るのがわが同胞の大多數者の心意氣である。

前年、東京大學の法學部に一人の經濟學の外國教師があつた。彼れは獨逸人であつた。當時、わたくしは彼れが彼れの見聞に基づく考察に隨つて、わが國の學生の根本缺陷と彼れが思惟したものに關する彼の忌憚なき意見の公表を讀ん

だことがあつた。

總じて日本の學生は西洋の經濟學者が工夫し組織した學說を固定的に完成されたものと速了して其れが如何なる事情の下に、試驗的に組織され、如何なる趨勢に添うて改造されて來て、終に、其れが今日取る樣式を取つて居るかを尠しも考へて居ない。其れが特殊の經濟現象を說明することを目的とする特殊の學說であることを忘れて、一般の經濟現象を說明することの出來る普遍の學說であると迷信する。隨つて、其れの全體より其れの根本精神と、其れに依つて形造られた研究方法とを抽出し、其れを自由化し、流動化して、其の理會を以て、新たに、獨自に、わが國に特有なる經濟現象を觀察し、新たに、獨立して、其等に對して最も適切なる、隨つて、最も、眞實なる學說を組織することが出來ないのみならず、さうすることが唯一の正しき意味に於いて、日本人に取つての經濟學說であるといふことに氣付かない。日本に於けるとは非常に異なつた事情の下に發生し、非常に異なつた歷史の下に完成された外國の經濟學は自國に取つても唯一のものであるとの心得違ひをし、さうすることより生ずる大なる矛盾の性質にも氣付かずして、反つて、自國の經濟現象を無理に其の學說に當て篏めようとして居る。學生として彼等の爲すべきことは、先づ、自國に現存する經濟現象に順應して、一つの奔放なる、而かも、適切なる學說を工夫し、組織するにあることを忘れて、纔かに其れの解釋に依つて始めて其の意義と効用との發揮さるべき統計や何かの末節に齷齪し、沒頭して居る。此れが日本に於て經濟學の進步し、發達しない最大原因である。

斯くの如きは、大體、彼れの意見の骨子に隨つて、わたくしの言葉で其れを敷衍したものである

こゝに、彼れはわが國に於ける經濟學の缺陷として論じて居るのであるが、此れは確かにわが國に於ける經濟學の缺陷であるのみならず、わが國に於けるあらゆる學問の缺陷である。啻にわが國に於けるあらゆる學問の缺陷であるのみならず、近世文明の移植に依つて發生し、若しくは、變更されたあらゆる制度、あらゆる計畫、あらゆる設備、そし

て、あらゆる運動が自然に胚胎するに至る、胚胎しなければ止まない共通の缺陷である。されば、彼れのこの忠告は直ちに移して以てわが國の現存文化の全體に對する忠告とすることが出來る。わたくし共日本人はこの忠告の趣意に就いて再思し、三思すべきである。

わたくしはどう考へても、わが國の將來の文化は、わたくし共が現に有てるあらゆる善きものを最も完全に發揮することの出來る文化は、即ち、正當なる、そして、嚴密なる意味に於てわたくし共のものと呼び得る文化は、近世文明の志向と理想とを以て其れの基調としなければならぬと信ずるが故に、わたくし共が正しく其れを理會し、評價することのわたくし共に取つて如何に無上に大切なものであるかを彼等に說明し、高調するの義務を一段と感ずるのである。

わたくし共は、この六十年間、走馬燈の慌だしさを以て、夜を日に繼いで近世文明の利器の最新式なるものを略取して來ながら、近世文明そのものを培養することには全然迂濶であつた。其れは丁度、完全に金卵を拾ひ集める最善の方法は、其れを產む金牝鷄を生捕りにして、其れを自分の家に飼つて置くことであるのに、尠しも金牝鷄を捕へる工夫を運らさないで、たゞ金卵を探し廻るのに心を奪れて居るやうなものであつた。

それならば、近世文明を同化してわたくし共の生活の所產に等しきものとし、わたくし共の行動のヴェヒクルとするには如何なる工夫が必要とされるか。其れには、わたくし共の資力と理想とを基本とし、標準として、一、其れの發生を進化論的に考察し、二、其れの意義を作用的に改釋することが必要とされねばならぬ。

物事の發生を進化論的に考察するといへば、其等は生活のエコノミイに依つて分化し來たり、整齊されて居ると假定し、其の假定の下に其等の存在の理由とはたらきの性質とを理會しようとすることである。例へば、こゝに、一見したところ、どんなにわたくし共のものとは違つた美感、若しくは、道德觀念があるにしたところで、根本に於てわたくし共と其等の所持者との間に共通なる人間性の存在を假定した上で、わたくし共のものから其等のものが相違する諸點

を、其等が取り卷かれる環境と、其等が因襲する傳統との關係に歸し、其等の特徴を說明し、是認しようとするのが物事の發生を進化論的に考察するといふのである。一度わたくし共がこの態度を取ることにすると、其れが如何なる種の文化の所產であるにしても、わたくし共は其れに對して極めて自然な考察と、極めて同情ある鑑賞とをすることが出來る、わたくし共は羅馬の詩人テレンスと共に、『總べて人間的のものをして、わたくしと沒交涉であらせたくない、』といふ境地に生きることが出來る。

然し、其等がわたくし共の生活とは大分に相違した生活に於て、其れの表現とし、統制力として組織され、はたらいたものならば、其の生活に取つてどのやうな特殊な、そして、重大な意義を有つたものであつても、わたくし共の生活と其の生活との間に橫はる相違の性質と程度とに應じて、其等の意義はわたくし共に依つて別に新たに改釋されねばならぬ。嚴密に言ふと、わたくし共に取つての其等の意義は、わたくし共が其れを改釋することに依つて其れを創造するまでは如何なる意味にでも全然存在しないのである。勿論、わたくし共にして人間性を有つ限り、苟くも人間の所產であるものは、其れが如何なる文化の下に、如何なる國民に依つて著想され、完成されたものであるにしても、其れはわたくし共が取つて以て其れの上に意義を組織し得る資料にはならねばならぬ。然し、嚴密には、この天地間にわたくし共に取つての或るものの意義は、わたくし共が其れを創造すると同時に初めて出現するものなのである。物事の意義を作用的に改釋するとは、この事實と其れの經過とを指すのである。

わたくし共が近世文明を同化してわたくし共の生活の所產として生きるものにするのには、わたくし共の資力と理想、即ち、わたくし共の文化の指示と傾向とを基本とし、標準として、其れに對して此等二重の工夫を施こすことが必須とされるとわたくしは謂ふのである。如今、わが國の文化は是非とも猛然一轉向を劃さなければならない氣運に際會して居る。わたくしは、わが同胞に向つて、正しく、そして、親密に近世文明を同化し、運用する最初の手順として、其れに

對して從來彼等の取つた態度の如何に誤れるかを點検することを切に彼等に勸告する者である。

わたくし共が西洋文明に接觸し、其れと應酬し始めてより、既に六十年にもなる。然し、適確に其れの特異性が何であるかと突き止めて居る者がわが同胞の中に果して幾人あるであらうか。

## 五　西洋文明の特異性

世には西洋文明を物質的として擯斥し、東洋文明を精神的として稱揚して居る人々がある。又、世には西洋文明と東洋文明とより、それぞれ其れの長を取り、短を捨てゝ、こゝに兩者の融合を圖らなければならぬと説いて居る人々がある。然し、わたくしからすれば、彼等の言動に徴して、孰づれの種に屬するにしても、彼等は尠しも西洋文明の特異性をはつきりと理會するところのないことだけは明らかである。東洋文明を稱揚して西洋文明を擯斥するにしても、又は、兩者の長所の融合を圖ると説くにしても、彼等は西洋文明の正體を捕へることなく、たゞ暗中模索を事として居るに過ぎない。

確かに西洋文明と東洋文明との間には、其れの精神に於て、其れの構造に於て、何人と雖も見逃がすことの出來ない相違がある。そこで、異なる人々は、彼等の趣味や、僻見や、教養や、知力や、性格や、彼等の屬する國民性の異なるに隨つて、彼等が其の相違と認めるものをいろいろと異なつた言葉で形容するのである。彼等の或る者は、西洋文明の特徴は複雜なるにあり、東洋文明の特徴は單調なるにあるとする。彼等の或る者は、西洋文明の特徴は知力的なるにあり、東洋文明の特徴は直感的なるにあるとする。彼等の或る者は、西洋文明の特徴は分析的なるにあり、東洋文明の特徴は總合的なるにあるとする。彼等の或る者は西洋文明の特徴は活動的なるにあり、東洋文明の特徴は瞑想的なるにあるとする。彼等の或る者は西洋文明の特徴は節慾的なるにあり、東洋文明の特徴は逸樂的なるにあるとする。更に、彼

等の或る者は西洋文明の特徴は其れの道德理想の人格的なるにあり、東洋文明の特徴は其れの道德理想の非人格的なるにあるとする。また、この外に西洋文明と東洋文明の反襯性を指示したものにはいろいろあらうが、偶まわたくしの見聞に觸れたものの中から、思ひ付くまゝに、記憶を呼び起しただけでもこれだけはある。此等の觀察の中には、事實に近いものもあれば、遙かに其れより遠ざかつたものもある。又、神妙に事實を語つて居るものもあれば、又、故らに誇張して其れを語つて居るものもある。たゞ、總じて此等の各の等しく病とするところは、恰も群盲が象を相するに等しく、其れの發動の一部分を捕へて、其れの精神の全體に擬して居ることである。

若しわたくし共にして最も概括的な、そして、最も内充的な意味で、西洋文明の特徴は改造的なところにあり、東洋文明の特徴は保守的なるところにあるとしたならば、簡潔ながら、可成り正鵠を得た見解であるが、これとて、主として其れの發動を語つて居るもので、其れの本質を語るものではない。わたくし共は、更らに一歩を進めて、西洋文明をして改造的の發動を取らしめる本質の何んであるかを追窮せねばならぬ。

昔も、今も、生活の道具としては、西洋人の有つて生れた衝動も、東洋人が有つて生れた衝動も、根本的に相違したものであると考へることは出來ない。そして、事實、彼等がそれぞれ其等の生活の道具を以て生活を續けて行つて、如何なる意味にでも彼等に特定の文化と呼ばれ得るものを組織するに至るまでは、彼等は大抵同じやうに彼等の衝動をはたらかせて居たのである。一層嚴密に考察すれば、この時期に於てさへも、彼等は彼等の置かれた境遇に順應するがために、若しくは、其等を支配するために、それぞれ、如何て感知することが出來ない程度になりとも、尠しづつ其等の衝動を異なつてはたらかせ、隨つて、尠しづつ其等を變更して行かねばならなかつたといふことは容易に推測出來るが、又、假定しなければならぬが、感知される程度に、其れが事實として表面に現はれたのは、衝動のはたらいた樣式が習慣として蓄積されるに隨つて、衝動と習慣との關係よりして、もともと衝動の備へて居た其れの理想的側面が其れ

の現實的側面より觀念的に識別されるやうになつてからのことである。通例、新らしき衝動が古き習慣に依つて支配された民族に在つては、生活の理想的側面は其れの現實的側面より遮斷されるか、若しくは、現實的側面に依つて窒息されることになる。之れに反して、新らしさ衝動に依つて適宜に古き習慣が改造される、尠なくとも、さうすることに興味と能力とを有する民族に在つては、生活の理想的側面と其れの現實的側面とは、觀念的に同一境涯の中に於て、適當に相互に對して刺激と統制との役目を滿たして居るのである。古代に方つては、當時世界の表面に散住する民族の殆ど總べては、前の型に屬して居たのであつて、不思議にも後の型に屬して居た民族は獨り希臘人だけであつた。

希臘人の生活理想は保守的であつたと言はれて居る、然し、さう見られるのはルネサンス以後の歐羅巴の近世人の生活理想に比較されるからのことであつて、當時の他の最も優れた文化民族の生活理想と比較しても、希臘人の其れが彼等の其れとはどれだけ多く質的に異なつて改造的であつたかは一目瞭然たる事實である。他の殆ど總べての民族がまだ蠢爾として神話と習慣と教權との壓迫の下に棲息して居たあの時代に於て、自由討議を以て政治の手續きとし、自由研究を以て學問の精神として居たことは、萬古に亘つて歷史上の驚異である。其れは、他の其等の民族に優れて、始めより、彼等が生活を組織する其れの理想的側面、即ち、指示的側面と現實的側面、即ち、內容的側面との關係、若しくは、相互感化の性質に關して尠なくとも正しき直覺、若しくは、豫覺を有し、この直覺、若しくは、豫覺の力に依つて、希臘民族は他の其等の民族が夢想することも出來なかつた風に、程度に、深刻に、自由におのれの生活のはたらき振りを觀察し、其れの本質と構造とに就いて反省したからのことである。

然し、希臘民族に特有なるあの驚くべき直覺、若しくは、豫覺が嚴密なる意味で理命と良心とにまで洗錬され、組織されたのはソクラティスの知見と誠實とのはたらきに依つてであつた。ソフィスト等の極端なる懷疑主義に依つて、表面、紛々に破碎された彼等の生活の統一意識はソクラティスをおのれの代表として其れの回復を謀つたのである。そ

こで、希臘民族に特有なものの中でも最も美しきもの、優れたものは、彼れの性格を通して毅然としてはたらき出し、彼れは啻に十二分にソフィスト等の懐疑主義の根柢を顚したのみならず、一擧にして、永遠に亘つて人間性を享有する限り、あらゆる人類に對して學問と政治との正しき基礎を据えたのであつた。其れは、(たとひ其の方法に於ては缺陥を含み、隨つて、其れの結果に於ては、誤謬を含むことを免かれなかつたが、)彼れが始めて實際に人間の協同生活のはたらき振りを觀察し、其のはたらき振りを分析することに依つて、苟くも協同生活の成り立つには、どうしても其れの存在を假定しなければならぬ或るものの存在を發見し、其れの機能を見究めたことであつた。一層詳しくこの間の消息を說明するならば、それまで否、其れから以後久しい間でも、殆ど總べての他の民族の間に於ては、生活を其れが現に見られるやうに組織し、はたらかせて居る其れの現實的、即ち、內容的側面と、其れの理想的、即ち、指示的側面とを隔離し、一方は人間的、自然的であり、他の一方は神的、超自然的であるとして、全然、起原を異にし、價値を異にする二つの原理であると漠然と想像されて居た其等の二側面は、畢竟するに、二つの原理ではなくして、生活の內に起るはたらきの上の對立であることを的確に理會し、明白に他に向つて指摘することであつた。

ソクラティスはソフィスト等の懐疑に依つて彼れの心の中に惹き起させられた問題を解決するために先づ事實を觀察し、其の觀察された事實のはたらき振りを說明するために、歸納の方法に依つて其れに內具する傾向を發見し、法則化したのであつた。

ソクラティスの始めた事業はプラトオとアリストオトルとの努力に依つてますます嚴密にされ、豐富にされ、深遠にされ、幽玄にされて、こゝに初めて、最も正確なる意味で、永遠に人間に依つて營まれるあらゆる種の學問の根本原理が建立されたのであつた。無論、事實としては、彼等の知見と研究方法との應用されたのは主として人間の道德活動だけであつて、彼れを取り卷き、彼れの認識作用に依つて統一される自然現象は、不思議にも彼等に依つて、全然、其の

研究方法の外に置かれるか、若しくは、馬鹿らしいほどに其れの精神と背反する想像上の先斷に依つて說過されたのである。然し、道德活動と言ひ、自然現象と言つても、等しく彼れの認識作用に依つて統一される彼れの生活內の事件である以上は、道德活動の說明として正しき原理は、一旦時機が來て、其れに適當な變更が施され自然現象の說明にまで擴張される時には、そこにも當然好結果を齎らす原理として證據立てられるに相違ない。文藝復興期に方つて未曾有の形と力とを以て自然現象の統一の側面に於て起つた驚くべき運動と出來事とは雄辯にこの假定の眞實性を物語るものである。

わたくし共は道德活動に關する推理を辯證と呼び、自然現象に關する推理を實驗と呼ぶ。そして、通例、此等の二種の推理は其れの精神に於て非常に扞挌するもののやうに解釋されて居るが、正しく理會された時に、決してそんなものではない。どちらも人間の經驗の成立に假定される繼續性、若しくは普遍性に信賴しながら、既知の事實に關聯して未知の事實を測知し一層大なる經驗の統一を圖るのである。強いて辯證と實驗との間の相違を求むれば主として其等の各は、其れが用ゐられた生活理想の特徵を分受する結果、辯證は傳統理想を支持して保守に傾き、實驗は個性觀念を尊重して進步に傾くことだけである。されば、どちらにしても改造的なることを生活理想とする民族の中に限つてのみ發生するのであつて、辯證は推理の先驅であり推理は辯證の成果であるに過ぎない。

一般に、希臘文明は保守的なるを其れの特色とし、近世文明は進步的なるを其れの特色とする。そして、此等の二種の文明を不思議に劃するのは文藝復興であつたと理會されて居る。成るほど、其れの發動の側面に即して考察するならば、この理會には十分の根柢がある。然し、兩者の相違は主として原理を應用する氣分と實利との相違より來たるのであつて、原理そのものは全然同一である。希臘文明が其れの原理として先づはたらかないならば、近世文明なるものは到底實現するの機會を有たず、又、繼續するの可能性を有たないものである。

それでは、希臘人に依つて其れの方法の著想され、近世人に依つて其れの應用の擴張された西洋文明の特異性の中核を爲すものは何んであるか。其れは次のやうな言葉で言ひ表はすことが出來るとわたくしは思ふ。

一、其れの學問と政治とは觀察と辯證とに依つて生活の現實的側面と、理想的側面とを等分に尊重しながら、生活のはたらき振りを醇化することに依つて、其れを支配する法律とし、其れの指標たる法則とする。從つて、其等は能く生活の樣式の變遷と俱に推移して其れの權威を保つ。

一、斯くして其等は最も合理的に、そして、最も節約的に人間の要求を滿たし、且つ、代表する當然の結果として、其等は必然にデモクラシイと科學との精神と形とを取ることになる。

一、其等の思索方法の特徵はあらゆる可能的經驗の底に橫はり、其等を結び付けて其等の成立を支へる普遍性をしつかりと掴み、其れの力に依つて既知の事實より未知の事實に推理し、現在の出來事より離在の出來事にまで推理するが故に、其れは自進的に、自產的に、無限に廣汎なる經驗の統一原理としてはたらく。

以上の條目の蘊意を追窮するならば、何人と雖も、容易に其等が近世文明に必須にして、且つ、獨特な性質を言ひ盡して居ることを認得し、同時に、其れが如何に遠く嚴密な意味で近世文明と呼ばれざるものと異なるかを看取するであらう。わたくし共にして外に在る擅意に依つて勝手に支配されるのを非立憲的と呼び、內にはたらく協同意の合議の結果、其等が達した一つの方針に依つて支持されるのを立憲的と呼ぶならば、わたくし共は此等の政治上の術語を更らに深化し、一般化して近世文明以外のものを非立憲的とし、近世文明を立憲的とするには十分の理由がある。

亞米利加の赤子は最初には地球上に見出だされるあらゆる國語に含まれる音を發すると或る米國の言語學者は注意した。然し、事實として彼れが英語を彼れの國語として選ばしめられ、だんだんに其れに訓練を受けるに隨つて、彼れの發音の能力は英語に含まれる音以外のものには全然不適當になるやうに狹められて了ふ。此れは無數の矛盾する欲求ど

可能性とを以て生活を始める人間に在つては、一つの欲望を成就するといふことは直ちに他の多くの欲望を放棄するといふことを意味し、一つの技藝に熟練するといふことは、直ちに他の多くの技藝の熟練に不適當になるといふことを意味する。文明の性質に關しても理屈は全然同樣である。文明にしても、單なる萌芽としては、互ひに矛盾し、排斥する無數の種のものが並存し得る。一つの民族、又は國民にして其等の中の一つの文明だけを選擇し、完成する自由と能力としか與へられて居らないならば、彼等は餘儀なく其れ以外の種の文明の一切を見棄てなければならない。

かういふわけで、確かに西洋文明と東洋文明とか儼然として二つの型に屬する文明ならば、人間の生活の方便として卓越性を有つたものは悉とく西洋文明に取り盡され、東洋文明にまで殘されたものは、唯、不卓越性のものばかりだといふことは道理にも叶はず、事實にも反した想像であらう。特に審美的の見地より任意に觀照すれば、東洋文明の中にも美感に關し、藝術衝動に關し、道德思想に關して、到底、西洋文明の中に見出だすことの出來ない獨自の卓越性の有ることをわたくし共は優に見出だすのである。然し、一度、わたくし共が人間の性情の根本特徴に鑑み、彼れの文化の終極趨歸に照らす時に、彼れに取つての永遠の王道は大體に於て西洋文明に依つて開かれた種のものであつて、殘念ながら、これまでのところ、東洋文明の作つて來たものは纔かに其れと併行する、若しくは、其れに落ち合ふべき野徑、村路に過ぎないと言はなければならない。

わたくしは、こゝでわたくしの語つて居るものの意味を、も尠し詳しく說明しなければならない。

明治初年に方つて、高思、達情、頻りに近世文明を鼓吹した福澤諭吉は、近世文明と言へば歐米人に依つて始められ、現に彼等の社會に於て展開されて居るのが唯一のものである。わたくし共日本人が近世文明に進むといへば、其れを模範として、其れに向つて一線上に步み寄ることであると確く信じて居たのである。然し、わたくしがこゝで念頭に置いて居る近世文明なるものはそんなものではない。こゝでわたくしが念頭に置いて居る近世文明は、正に其れの志向とわた

くしが考べるものに當るのであつて、其れの發動を指すのではない。民族性や、過去の歴史や、現在の境遇や、未来に亘つての理想の如何に多く相違するかに拘はらず、人間の性情の根本特徴に鑑み、彼れの文化の終極趨歸に照して、總べての民族が、彼等にして人間性を分受する限り、永遠の文化の行程に於て、いつか一度は是非とも經過しなければならない生活の様式一般に當るのであつて、今日、歐米人の淺慮短行のために傷けられ、蹂躙された其の様式の醜き形態を指すのではない。表現を變へて、更らに一段と剴切に言つて見れば、わたくし共日本人が其れを適用するならば、正しき意味に於て、最も自然に、最も自由に、そして、最も完全にわたくし共の國民性と個有の文化との發達を幇助するものに當るのであつて、其れを歪めたり、妨害したりするものを指すのではない。

## 六　近世文明を物質的とする究竟意義

物質的、精神的の對立は其等と同屬なる靈、肉の對立と等しく、過去に於て文化の或る段階に方つて彼れの生活を指揮するに恰好な概念として人間に依つて著想され、posit されたものである。此等の孰づれもが、現代に於ける彼れの生活の道具として不妥當のものたるのは、欲求のはたらく様式の相違とし、其等を作用的に識別することに依つて、始めて事實の眞相は得られるのに、欲求の性質そのものの相違と誤想し、随つて、強いてさう曲說して其等を本質的に分離して了ふからである。

欲求に關する價値の相違の一切は其等のはたらき振りより生ずるのであつて、其等に固有する性質より生ずるのではない。一層詳しく說明すれば、欲求の孰づれにしても他の欲求と協調してはたらけば、價値あるものとなり、之れに反して、其れが他の欲求との協調を破つて單獨にはたらくことになると、價値を傷けるものとなる。善とは前の種のはたらき振りを呼ぶ名稱であつて、惡とは後の種のはたらき振りを呼ぶ名稱である。然し、善と惡とが個々の欲求が有つ本

質そのものの差別であると解釋されて居た時代に方つては、この誤解より遡つて、一つの神話が創造され、本來人間には善惡二つの相反する價値を追求する二つの相鬪ふ原格があるとされたのであつた。そして、其等の一方に靈の實體と精神的の性質とを賦與し、他の一方に肉の實體と物質的の性質とを賦與したのであつた。

精神的と物質的との概念、及び名稱の成立がかうしたものであるとすると、わたくし共は現代の生活のエコノミイと理想とに即して、物質的を孤立的、若しくは、(其れの結果より見て)、分裂的と翻し、精神的を協調的、若しくは、(其れの結果より見て)統一的と翻して、そこに何等の扞格するものもなく、渣滓も殘らざるべきである。

物質的、精神的なる言葉を斯く釋明した上、(今日に於ても猶ほ物質的、精神的といふやうな神話的形容詞を用ゐながら、わたくし共の生活に當て嵌めて、そこに、其れの合理性を見出ださうとすれば、さうするより他は道はないから、)わたくし共が近世文明を物質的と特視し、特稱する時に、嚴密に檢討して、そこにどれだけ確なか根據があるか、若しあるとしたならば、其れは如何なる形態を取つて居るか。其れは如何にして胚胎せられたか。

物質的といふことを、分裂して調和を缺くといふ意味に取れば、畢竟するに、其れは生活の理想的側面と、現實的側面との間に其等の本來の機能たる相互の交渉が完全に行はれないところから來たるのであるから、生活にいろいろの型がある通り、物質文明にもいろいろの種類のあることを認めねばならぬ。そして、事實、理想的側面と現實的側面との間の交渉は可なり透徹に行はれて居るが、たゞ、其れが個々の欲望に限られて、欲望全體に亘らないところから生ずる西洋に於ける物質文明は、理想的側面の大部分が現實的側面との交渉より遊離して、空想と嗜欲との間に永遠の溝渠が堀られて居る印度に於ける物質文明や、理想的側面と現實的側面との交渉は纔かに形式的であつて、性急なる美感が欲望の或るものの表面を整理するに止まつて居る支那に於ける物質文明に比すれば、遙かに價値の優れたものであることはいふまでもない。されば口を開けば忽ち無思慮に、無反省に、西洋文明は物質的である、獨り精神的であるのは東洋

文明だけである。と高唱する人々の如きは、物質的、精神的の言葉の意味の何たるかを理會せず、又、努めて其れを探究しようともしないのであるから、彼等の云爲は全然意に介するに足らぬこととする。こゝには別の、そして一層根本的の見地より近世文明が一つの物質文明とされなければならぬ理由と、其れがさうなるに至つた由來とを究明するところがなければならない。

近世文明は經驗主義に依つて始められ、今日に至るまで、主として經驗主義に依つて支配された文明である。勢ひ、其れが經驗主義の長所と倂せて短所に對して其れの責任を分擔しなければならないといふことは洵に止むを得ない。近世文明の首唱者であり、計畫者であつたフランシス・ベエコンは當時社會が汚穢、貧困、疾病、惡意、爭鬪、罪惡に充つるのは、其れまで絕對の權威を逞うして居たスカラ哲學が眞の學問としての役目を滿たさないからであるとして、其れに代つて此等の積年の弊害を人生より一掃して眞の學問の役目を滿たすものを全然新らしき觀察と推理との方法の上に組み立てようと企てたのであつた。彼れは其れを新學問と名付けたほど、其れは總べての點に於て在來のスカラ哲學とは異なつたものであると思惟したのであつた。

終にベエコンが理想とした新學問は起つた。そして、其れは以後四世紀に亘つて人目を眩惑するやうな燦爛たる果を結んで居る。學術としての其れの建設に關して、彼れが直接に大した貢獻を爲さなかつたといふことは哲學史家の一般に一致するところである。然し、ベエコンが其れの氣運の養成と其れに必要なる情操の鼓吹とに與つて、多分何人にも優れて功勞のあつたことに就いては一點の疑を挾む餘地はない。

『知識は力である』とベエコンが言つた。又『知識はおのれ自づからの正しき用を知らぬ、其れを正しく用ゐるものは知識の外にあり、上にある知慧である』とも彼れは言つた。わたくし共は此等の彼れの言葉を通して、經驗主義の缺陷を、隨つて、其れより近世文明の分受した缺陷を具さに髣髴することが出來るやうに思はれるのである。

ベエコンは一方に於て知識は力であると考へながら、他の一方に於て知識はおのれの正しき用を知らぬと考へて居る。此等の二つの思想を綜合して、知識が力であるのは纔かに方便としてである。生活に對して其れを正用し、若しくは、誤用するものは、其れの外に、上にある動機であるといふことになる。さうするとベエコンは折角新學問を唱へながら、全然新人とは成り切らずして、彼れの心の底には舊人として、大分舊思想に捕はれて居たところがあつたとせねばならぬ。一體、スカラ哲學があんなに信用を失なつて了つたのは、其れに於て動機と方便とが沒交渉にまで分割され、方便となることとの出來ない、方便にまで素直に發展することとの出來ない動機の瞑想にのみ沒頭して居たためではないか。されば、苟くも其れを根柢より覆へさうとして起つた經驗主義にして、力たる知識の創造を標榜して立つ以上は、其の知識は方便と動機との合致したものであり、其の始め、正しき動機であるが故に、自然に正しき方便にまで發展したものでなければならないのである。道理はどうしてもさうなければならないに拘はらず、彼れが知識の本質を限つて動機を伴はない方便とし、其れの運用を支配する動機としてはたらく智慧を其れの外に求めたのは、確かに彼れが依然としてスカラ哲學の窠臼に陷つて居たからであつて、この一事を以てすると、彼れは毫しも經驗主義の眞髓を理會しなかつたのである。

ベエコンがあんなに旺んな意氣ごみを以て唱道した知識にしても若し其れが單なる方便であつて、其れがおのれの正しき用を保障する智慧たる側面を伴はないならば、其れは其れの運用を支配する動機たることを裝うて來たるあらゆる種の要請者の飜弄するところとなる虞れがあるではないか。こゝに、夙に其れの志向からすれば、これまで人類に依つて工夫された文明の中で最も精神的なる近世文明も、其れの發動からすれば物質的たるに堕するの禍根が醸せられた。

ベエコンに次いで起り、彼れの遺業を完成して行つた新學問、卽ち、科學の信仰者、研究者たちは悉とく生活改善に熱心なる人道主義者であつた。彼等がスカラ主義を弊履の如く擲ち、經驗主義を歡迎したのは、彼等が人道主義者とし

て生活改善の方便を獨り科學の中にのみ見出だしたからである。彼等の豫期した通り、學問がスカラ主義より經驗主義に移つた時に、其れはもはや議論に依つて新らしい欲求を舊い制度や信仰に服從せしめる道具ではなくして、實驗に依つて新らしい欲求を滿たす新らしい方便を發見し、組織する道具となつたのであつた。

學問として實驗主義の職分とするところは情操として生活の改善を空想するのではなくして、事質的仕事として生活の改善を圖るのにある。生活の改善が事實的のものである限り、其れは必然に個々一つ一つの構式を取らねばならぬ。一時に全體としての生活の改善といふことは不可能のことであり、實在し得べからざることである。其れが個々一つ一つの構式を取つて、一時に方つて生活の特定の個處に其れの手掛りを求めなければならぬところから、其れを適當に指導する動機はおのづから常に其れに伴なつて居るとの假定の下に、意識的には方便としてはたらくことになるのである。

こゝに經驗主義を其れのヴエヒクルとする近世文明の特色がある。其れは他の事ではない。近世文明に於ては、總べて稱讃さるべき動機は直接に情操として發動せずして、間接に方便の樣式を取つてはたらくがために、其れの動力たり、精神たる理想的意義は、顯然、其れとして表面に認められないといふことである。この事實よりして、其れをはたらかす當人と雖も、往々其れの實利的効用に沒頭して、其れを成り立たせて居る理想的意義を閑却することもあるし、甚だしきに至つては、其れの實利的効用を擧げるに急なるの餘り、反つて、其れの理想的意義を排斥するに近い行動を敢てするのも決して稀有でないことである。

斯くして近世文明の眞の缺陷が胚胎されることになる。其れの動機たる理想的意義が其れの方便たる實利的効用と表面的に結び付けられないために、動機を運出するために計畫された方便が、實際には其の動機を實現するには不十分となり、不適當となるといふのが、即ち、其れである。世人が漠然と近世文明を物質的であると非難して居るのは、近世

文明に於ける其れの動機と其れの方便との間のこの不一致を指して言つて居るのである。

一體、近世文明の創始者たちは總じて現實を忘れて、一向に理想の境地に憧憬して居た人道主義者として、餘りに單純に、世界の善良性と人間の高潔性とを過信したのであつた。彼等はこの過信より、理論の上では、一つの方便は其れの外にあつて、其れを支配する動機に依つて支配されなければならぬといふやうな意見を持しながら、實行の上では、其れより一層正しき彼等の本能に依つて動かされて、苟くも或る方便にして善き動機より、其れの發動の樣式として、自然に分化したものならば、絕えず明白に其の動機よりおのれの正しき用を警告され、拘束されずとも、其れの起原はおのづから己れの正しきはたらきを十分に保障するものであると臆斷し、この臆斷の下に彼等は大膽に行動したのであつた。この臆斷は徹底した經驗主義者としての本能より來たつたものであるから、固より正しいものであるが、彼等にしてこの臆斷に隨つて行動するからには、其の見地よりして、方便そのものの構成に對して彼等が餘りに樂天的に依して居たものとは全然別個の工夫を施すことが必要とされたのであつた。詳しく言へば、其れがはたらく度毎に、其れの實利的効用と共に、おのづから、端的に、顯著に其れの理想的意義が發揮されるやうに、其れの構成は改造されなければならなかつたのである。

近世文明は人間の欲求を滿たす方便を改造することに與つて、既に驚くべき貢獻を爲した、そして、現に爲しつゝもある。然し、人間の幸福に取つて一層根本的の問題は欲求そのものゝ整頓にあるが、この點に關して、近世文明は一向に何等の工夫をも費して居らない。近世文明が物質的であるといふのは、欲求そのものを整頓せず、其れの跳梁跋扈に任せて置きながら、唯、其等を滿たす方便の加增と洗練とだけに沒頭する自然の結果である。

此れは近世文明に對する月並の非難ではあるが、確かに事實の一面には當つて居る。この非難に對して、或ひは、次のやうに辯駁するかも知れない。

生活の改善、即ち、欲求の改善の志が先づ動くにあらざれば、どんなことをしても其等を滿たす方便の改善の志の生じ來たる譯はないではないか。空想としては兎に角、實際の仕事としての欲求の改善は、是非とも其等を滿たす方便の改善より始められなければならない。されば、一歩欲求を滿たす方便の改善に進むといふことは、あらゆる實際的の意味に於て、一歩欲望そのものの改善に進む方法なのである。欲求の改善は獨り其の方便の改善に依つて實現されるといふ眞理を發見したところに、近世文明のあらゆる種の文明に優れて聰明であり、偉大であるところがあるのである。

形式的に考察するならば、此れは如何にも侮り難き有力なる答辯に相違ない。然し、この答辯を首肯するには、其の方便の實體が正しく欲求の整頓に適するやうに作られて居るならばといふ條件で、其れを限定してからのことであらねばならぬ。若し不幸にして其等の方便がさうするのに適するやうに作られて居らないならば、加增され洗練されるに隨つて、其等はますます欲求そのものの混亂と相互の矛盾とを助ける道具として役立つに過ぎない。さうすると、わたくし共の篤と吟味しなければならないことは、近世文明に於ける欲求と其れを滿たす方便とが實際どういふ關係にあるかといふことでなければならない。そして、若し此等の兩者の間に扞格するとか、背馳するとか、沒交涉であるとかいふものが見出だされるならば、わたくし共は近世文明の根本志向と窮極趣歸より、其等を匡正し、融合し、調和するの道を講ぜねばならない。否れば、其等の方便が分化し來たつた動機は全然異なる、寧ろ其れの敵たる動機に依つて飜弄されることとなきを保し難い。

近世文明の二大支柱たる科學もデモクラシイも、欲求を滿たす方便として個體の尊重と個性の發展とを其れの最後の目的とするところから、俗人に依つては理想的意義を缺き、實利的效用のみを有つものと誤解される。この誤解は一向に進步の光明を拒んで保守の暗黑を抱く過去の時代の殘存者のために乘ぜられる隙となり、彼等の無智と專橫とを通して、科學もデモクラシイも對人的に、社會的に、そして、國際的に誤用され、濫用され、惡用されることになるのであ

る。事理に盲なる輩はこの悲しむべき、嘆ずべき狀態を擧げて、悉とく其れを科學とデモクラシイとの責任に歸さうとするのである。然し、若しそこに眞に科學とデモクラシイとが負はなければならない責任があるならば、其れは、其れに特有なる組織が實利的効用を獲得するに專らであつて、理想的意義を發揮するに疎であるといふに過ぎない。

然し、近世文明の本來の志向に根柢して如何に釋明し、辯護するにしても、其れに其れの缺陷と認めらるべきものが含まれて居ることだけは到底否むことは出來ない。然し、わたくしがこゝに其れの由來を敍述し、其れの特徴を闡明して居るところに隨つて、其れの實相を發見する考慮も、其れの缺點を塡補する方案も既に十分暗示されて居る筈である。然らば、其の考慮とは何んであるか。其の方案とは何んであるか。

## 七　在來の理想主義の誤謬

經驗主義の主張と、其れに依つて建設された近世文明の傾向とは、到底世人を滿足させるものではなかつた。そこで、經驗主義の缺陷と併せて近世文明の缺陷を匡正しようとする運動、若しくは、學説がいろいろの形を以て起つた。わたくしは便宜のため其等を總括して理想主義と呼ぶであらう。

理想主義の根本誤謬は、經驗主義の原理の理解に關して其れの淺見を襲套して、其れの見地の地平線の上に一歩も出ることなく、其れの批判と改造とを企てゝ居たことである。文化史的に考察すれば、經驗主義と理想主義とは同一運動の自然の發展であつて、理想主義は經驗主義の創めたものを完成するために來たつたのであるとして、始めて兩方共に一つの意味を有ち得るのである。然るに、理想主義の首唱者たちの解釋に隨へば、經驗主義と理想主義とは二つの異なつた精神の發動である。理想主義の使命は經驗主義を助成することに依つてではなく、其れを拘束し、場合に依つて

は、其れを撲滅することに依つてのみ滿たされるものなのであつたのである。其れは、一層廣い興味より經驗主義を抱擁し、一層高い見地より其れを醇化して出來る理想主義ではなくして、其れと同等の地位に立ち、其れを排斥して、始めて成立する理想主義であつたのである。されば、理想主義の新たな發見として誇つた理想なるものは、經驗主義が輕卒に單なる現實と見て居たものを改釋することに依つて、その中に自然に見出だされることになつた理想ではなくして、經驗主義が最後の宣告を與へた通り、そこには微塵の理想もないとし、極めて不自然な考へ方で其れとは全然別の世界に於て探し當てたと彼等が想像した理想であつたのである。

かうした結果、理想主義は現代文明の特徴たる二元觀を、理論的にと等しく審美的に、殆ど無數の形で生活のあらゆる側面に作り出すことになつた。狹義の、即ち、哲學上に於ける理想主義の殆ど總べてが、公然にか、隱約にか二元的の精神を取るのは偶まこの廣義の、即ち、社會現象としての理想主義の一縮圖に過ぎない。

實利的効用と理想的意義とは（前にも説明した通り）、相寄り、相助けて人間の生活を形造る二側面である。此等の二つは、便宜上、作用的に識別することは差支へないが、若し其等を本質的に分離しようとすれば、忽ち無意味に陷つて了ふやうな微妙な關係にあるのである。經驗主義は理想的意義より獨立してはたらく實利的効用を假定して失敗したが、理想主義は經驗主義の陷つた誤謬を訂正するつもりで、實利的効用に對立しながら其れを克服する理想的意義を假定して失敗して居る。そして、理想主義の誤謬の程度は經驗主義の其れに比して決して劣らない。

理想主義は經驗主義、及び、其れが建設した近世文明を物質的と非難するのが常である。然しながら、理想主義にして物質的なる言葉の眞の意味の何たるかを知つて居るならば、現代生活の物質的なることに對してさう非難して居る理想主義そのものが多分に其の責を分つべきであることに氣付かねばならぬ。何故ならば、わたくしの考へるところに依れば、一度理想主義が間違つた見地より、間違つた方法に依つて、間違つた學説を立て、其れを通して人間の一切の生

の活動を考察し、説明し始めてから、先きに經驗主義の作り出した諸の物質的のものの上に、其れと經驗主義との矛盾より、及び、其れと生活の事實との矛盾より、更らに多くの物質的のものを作り出し、そして、其等に付け加へたからである。理想主義の出現のために現代文明は決して其れが物質的たることより救はれては居ない、反つて、さうであることの深みに引きこまれて行つて居るといふのが儼たる事實に據る鐵案であらねばならぬ。

實を言ふと、經驗主義の力では徹底的に經驗化され、作用化され盡されるに至らず、漠然と、人間の生活の中には普通の經驗的事實の外に何か一つ不思議なはたらきを有つ超經驗的要素があると信じられて居たのである。近世文明の好ましからざる成績に照らして、經驗主義の根本假定の缺陷がだんだんに明瞭に暴露されるにつれて、この信仰、否、この迷信はやゝ其れの外形を改めただけで再び其れの勢力を回復して人間の意識の中に擡頭することになつた。この趨勢が理想主義を化成したのである。

理想主義の出現は、歐羅巴人の生活を二つの部門に分割して了つた。今日、彼等は情操に於ては神秘主義者であり、實行に於ては唯物主義者である。彼等は決して實行して居ることを信ぜず、信じて居ることを、若しくは、信じて居ると告白して居ることを實行しない。彼等の信じて居ること、若しくは、信ずると告白して居ることは一つの事柄である。彼等が實行して居るものは全然他の事柄である。彼等の中で、其の時々の風潮に隨がひ、流行を追ひ、醉生夢死するの徒は姑らく措く、苟くも全體として彼等の生活を考察し、其れの意義を把持しようと志す識者にしたならば、そこに情操と實行との間の矛盾の必然の所産として、いろいろの形を取つた彼等の生活の破綻を見出だした時に、彼等は坐ろに痛恨と苦悶との情に堪えないのが當然であらねばならぬ。然し、彼等の幾人かゞ、果して聰明に其れの病原を發見し、勇敢に之れが治療の方策を立て得るであらうか。

彼等の中で、彼等の現代文明のこの慨嘆すべき爲體に慊らないが、其れに對して適當な方策を案出し得ない或る者

は、盲目の憧憬より、或は放逸なる好奇心より、此れが救濟の智慧を、時としては、中世紀のトオマス・アクヰナスの神學に、時としては、印度、若しくは、支那の文化に求めようとして居る。勿論、此等と雖も、其れの用ゐ方に依つては、尠なくとも、其等は悉とく人間の或る部分に依つて、生活の方針として眞劍に工夫され、創造されたものであるといふ單純な事由からして、或る効力があるには定まつて居る。然しながら、彼等にして彼等の現代文明の缺陷の眞相は如何なるものであるか。其れは如何なる歴史を有ち、如何なる事情の下に化醸されたかといふことを彼等が現に爲して居るよりも、爲し得るところのものよりも遙かに的確に理會しての後でなければ、トオマス・アクヰナスの神學や、印度、若しくは、支那の文化の如きは彼等の現代文明をますます混亂と昏迷とに陥れることとはなれ、決して、其等より其れを救ひ出すこととはならないことは、何人にしても事理に通ずる者の容易に逆睹し得、斷言し得るところのものである。

わたくしは、今日の歐羅巴人が、彼等自づからの文化に對して滿腔の信用を置くことの出來ないのを彼等のために憐れむものである。わたくしは、彼等が、折角これまでのところ、最も卓越せる種の文化を繼承しながら、其の卓越性の憑據するところのものを明白に意識し、自覺しないところから、一時の事情と行き掛り上より發生した一時の困難に遭遇して、輙ち其の卓越性を泥土に委さうと擬して居ることを彼等のために憐れむ者である。

わたくしは彼等に對つて、彼等は彼等の文化の崩壞を防ぐものを外に向つて求めるには及ばない。其れの根柢たるべきものは既に彼等の文化の中に具はつて居る。されば、彼等の爲さなければならない唯一の仕事は、其等に内具する作用を發揮せしむるために、其等の指標に隨つて、新たに其れの改築を圖るだけのことであると慇懃に彼等に對つて告げたいと思ふ。然し、彼等はわたくしのこの忠告を如何に理會し、如何なる程度にまで其れを柔順に採用するであらうか。

# 八　象徵主義を劃義す

經驗主義と理想主義とは相次いで起り、兩者の兄たり難く、弟たり難き不明は、近世文明の秀逸なる志向を殘害して、其れをして醜惡なる發動の形を取らしめたのであつた。其等が近世文明に對してさうした結果を齎らしたのは、其の行き方こそは大分違ふが、其の結果に就いて言へば、其れの成立と、健全なるはたらきとに必須なる實利的効用と理想的意義とに同等の注意を與へず、其等の孰づれかの一つを法外に尊重すると同時に、他の一つを法外に輕蔑し、若しくは、無視したからである。今、近世文明をして再び其れの本來の志向を回復し、其の志向に隨つて、將來に亘つて當然の發達を遂げ、當然の効果を擧げしめることは、現在のまゝの經驗主義に取つても、理想主義に取つても不可能な仕事のやうである。わたくしの考へるところでは、この困難なる、然し、光輝ある事業を企て、そして、成就し得るものは、獨り經驗主義より遙かに優れて經驗的であり、理想主義より遙かに優れて理想的であることに依つて、兩者よりも遙かに深く、且つ、精しく實利的考慮と理想的意義との融通し、交徹する理由と根柢とを識判し、味到するものでなければならない。わたくしは、其のやうな見方を、こゝでは假りに象徵主義と呼び、其のやうな見方で組織される文明を象徵主義文明と呼ぶであらう。

然し、近き將來に於ても、若しくは、遠き將來に至つても、このやうな種の文明の實現される機が來たるであらうか。若しかういふ疑問を發する者があるならば、わたくしは彼れに對つて、即坐に次のやうに反問するであらう。何人にしても、近世文明の志向が指示するところのものを色讀する時、彼れはどうして其れの自然の發展、若しくは、轉換として、將來に於て而かも、最も近き將來に差し迫つて、この種の文明が出現しないで止むといふことを信ずることが出來るであらうかと。

實に、わたくしの察するところに隨へば、理想主義文明の命數も、經驗主義文明の命數と等しく、既に盡き、其れに取つて代るべき象徴主義文明の起るのは正に目睫の間に迫つて居るのである。然し、何人の手に依つて其れが著想され、完成されるかは、誰れが、若しくは、誰等が最も正しく近世文明の志向を理會し、最も優れて其れを啓沃し得るかの一問答に依つて決せられるのである。たゞ、この問題に正しき解答を與へることの出來る者だけが、彼れの受けた血統や、彼れの屬する民族や、彼れの住む郷土の如何には尠しも拘束されるところなく、獨り神權に依つて、近世文明の正當なる相續者たる資格を以て、象徴主義文明の建設に携はるのである。

さうするとあらゆる國民に取つて、國際文化の一員として、何が最高のアンビッションであると言つて、正にこの地上に於て建設さるべき象徴主義文明の首唱者であることに如くものはない通り、わたくし共日本人に取つての最高のアンビッションもさうすることに如くものはない筈である。象徴主義の建設に關し、地球上に住む如何なる民族、若しくは、國民に對しても、之れが先鞭を著くるを爭ふのも、男子としてわたくし共日本人の本懐であらねばならぬ。

象徴主義文明の原理や、其れの組織や、其れの特徴や、其れとわたくし共の過去の文化との關係や、わたくし共の手に依つて其れを建設するに方つての必要なる手順と覺悟とやに就いて論述するに先立ち、わたくしは便宜のため豫め象徴主義に依つて如何なることをわたくしは考へて居るかを尠しく披瀝して置きたいと思ふ。

これまで象徴主義なる言葉は專ら藝術に關する一つの主張を言ひ表はすために鑄造され、通用されて來たのであつた。そして、彼等藝術家たちは、やゝ形容的に、其れを對義して、『象徴主義は瞬間の中に永遠を觀る』とか、『瞬間を以て永遠を捕へる』とかしたのであつた。わたくしは、一つの人生觀全體、若しくは、一つの生活樣式全體を言ひ表はすために、象徴主義なる言葉を用ゐようとするものであるから、わたくしの用語法は從來のものに比して、自づから其れの意味に於て遥かに豐實に、其れの應用の範圍に於て、遥かに廣汎であらねばならぬ。そこで、理論的と實行的と、審

美的との見地を總括して、わたくしは、

象徴主義は出來るだけ單純な方便を用ゐて、出來るだけ複雜な、若しくは、豐富な結果を舉げようとする原理である。

としようと思ふ。この一見したところ割合に簡單な表現が、わたくしの思想に於ては、どれだけのものを含蓄するかは、わたくしが追々に展開して行かねばならぬ事柄である。

## 九　象徴主義の心理的、及び、文化史的基礎

人間には彼れの生活の道具として衝動が賦與される。衝動は彼れが工夫し、建設し、完成して行く文化の種類と其等の一切の機關との基本である。すれば、わたくし共にして、單純なる形に於て象徴主義の組織とはたらきとを知らうと欲するならば、わたくし共は、まづ其れを衝動の原始作用の中に覓めねばならぬ。

衝動が生活の道具として人間に賦與されたものの一切であるところから、始めより統一的機能はおのづから其れの中に含まれて居らねばならぬ。生活の機關たる運命を擔ふ衝動が、必然に感覺たる內容の側面と意義たる關係の側面とを內具するといふことは極めて自然である。其の始め、渾沌不分の狀態にある此等の二側面は、個々の衝動が外に向つてはたらき、それぞれ、其れの素質に相當した結果を産出し、さうすることが度重なつて、其等の結果に關する記憶と豫想とが觀念として形造られて來ると、異なる衝動は其等の呼び起す結果の性質に隨つて組織されて、そこに、衝動の合議體が出現することになる。こゝに至つて、始めて顯著に、これまで衝動に潛在して居た其れの內容の側面と其れの意義の側面とが作用的に對立してはたらくことになる。其れから以後は、一つの衝動が發動する度毎に、其れと關係を有つ他の衝動は當の衝動を含めて一つの合議體を組織し、其れの性質に隨つて、其れを援助するか、拘束するか、又、援

助するにしても、如何なる風に、程度に、其れをするか。其れを拘束するにしても、如何なる風に、程度に其れをするかといふことを決定する。一つの衝動が發動するに方つて、作用的に識別される內容の側面と意義の側面とは、固より其の衝動のはたらく間に限つて存在するのであるが、總べての作用、若しくは、はたらきを其の當時の生活する上の便宜から、悉とく本體化した過去の時代に於ては、意義、即ち、支配する方の側面を天理、理性、乃至、靈と呼び、內容、即ち、支配される方の側面を人道、情欲、乃至、肉と呼びて、永久に對立する二つの存在としたのであつた。然し、これは無論想像力の爲した誤釋であつた。

此等の二つの側面の整齊は幸福を獲得すること、即ち、全體の利益を保ちながら、特殊の衝動の滿足を圖ることを目的として企てられる。然しながら意義、即ち、支配する側面の樣式は習慣となつて其の痕跡を殘して行く過去の成績を參照して作られるが故に、文明とカルチュアとの異なる時代、若しくは、異なる民族に應じて、此等の二つの側面は價値を異にし、勢威を異にすることになる。概して言へば、退嬰的時代、若しくは、保守的民族に在つては意義、即ち、支配する側面が敬崇されて生活は統一された。進歩的時代、若しくは、改造的民族に在つては、內容、即ち、支配される側面の要請が注意され、尊重されながら、生活の組織が更新されて行く。古典主義は前の生活樣式の典型として最醇なるものであり、象徵主義は後の生活樣式の典型として最醇なるものである。大觀すれば、政治や、道德や、藝術や、學問の理想、若しくは、はたらき振りに關して、其等の特徵を標識するために鑄造された幾十の、否、幾百の主義(isms.)は、「それぞれ異なる興味を以て斷片的に爲された異なる觀察の結果として、悉とく此等の兩極の中間に落つるものである。

古典主義と象徵主義とは醇乎として醇なる人間の生活の二大標準樣式として兩極端に立つがために、反つて、外形の一致を見るのである。兩者は兩者より同距離にあつて、意義、即ち、支配する側面と內容、即ち、支配さるゝ側面との

反撥を其れの特色とするロオマンチシズムを樞軸として、反對の理想に依つて、反對の方向を辿つて遂に一點に會した觀がある。隨つて、古典主義と象徵主義とはいろいろの見方から有効に反襯せしめることが出來る。試みに、偶ま思ひ付くまゝに、其等の二三を擧示して見ようか。

一、古典主義に在つては、實在の單位は、道德的にも、認識的にも、階級であつたが、象徵主義に在つては、其れが個體、若しくは、個性となつて居る。

一、古典主義に在つては、靜止が物の、及び、生活の常態であつたが、象徵主義に在つては、其れは運動となつた。

一、古典主義に在つては、美、及び法則は感覺的物質を排除して、始めて發見されたものであるが、象徵主義に在つては、其等は獨り知覺的經驗のはたらき振りそのものに外ならぬのである。

一、最後に、古典主義に在つては、眞理と道德とは既成の形を以て發見されるものと想像されたのであるが、象徵主義に在つては、其等は未定の可能性として、人間の努力に依つて時々刻々に構造され、改造されて始めて成立するものと思惟されるのである。

かういふ風に表示して見ると、一時の變態たるロオマンチシズムを中間に挾んで、人間の生活理想が如何なる志向を以て、如何なる方向に進んで來たかゞ解るのである。若しわたくし共にして個人の行爲より遡つて其れの原理と想像される彼れの品性の如何を推定することが許されるならば、同じ道理で、人間の思行の發動の歴史的進行より最初に彼れにまで塡置された彼れの根本性情の如何を推定することも許されねばならぬ。さうすると、大したパラドツクスなく、わたくし共は、人間の生活理想が古典主義より象徵主義に進むに隨つて、彼れはだんだんに一層自然に、一層自由に、一層大膽に彼れの根本性情を發動せしめることが出來て來たと言へるのである。最初に彼れに塡置された彼れの根本性情は、長い間の鬪爭と、反省とを經て、始めて外物の障碍を取り除いて、赤裸々に振舞ふことが出來て來たと言へるの

である。

其れはそれとして、人間は古典主義の生活理想より象徴主義の生活理想へ進むに随つて、其れの意義、即ち、支配する方の側面と、其れの內容、即ち、支配される方の側面との間の交涉樣式にどういふ變化を起したかといふことは、既に略叙したが、こゝには更らに一步を進めて、其等の變化の內的の動きをも少し詳しく諦察して見よう

人間の有てる欲求は殆ど無數であつて、矛盾するものであるに拘はらず、彼れのはたらかせ得る力量は極めて狹く限られて居る。然し、彼れはこの極めて狹く限られたる力量を基本として、其等の殆ど無數であり、且つ、矛盾する欲求を統一して行かねばならぬ。彼れはどうすることが出來るか。

かゝる條件の下に、彼れは唯一つのことしか爲し得ない。そして、實際に彼れが爲して居るのは其の一つのことだけである。其れは代償の方法に賴つて其れを爲すことである。代償の方法とは二つ以上の互ひに矛盾する欲求が起つて、其等の各がおのれの實現に就いて先を爭ふ時に、其等の孰づれかの一つを採つて、其れをして他のものを代償せしめることである。この方法に據るにあらざれば、どんなことをしても、矛盾する多數の欲求を整頓する道は一つもあり得ない。然し、この代償の方法がさうする實際の手段として有効であるのは、其等の表面互ひに矛盾する欲求と雖も、その實は、單一なる自己の部分的表現であるからである。既に其等の各が單一なる自己の部分的表現であるからには、當の場合を標準として、それぞれおのれの有てる價値を持ち寄り、比較し、評定することは可能であるに相違ない。そして、其れが可能であるとするならば、さうする手順を盡して居る內に、其等の間におのづから協調が成り立ち、部分的自己より還元されたる全體的自己の裁量に依つて、其等の中の孰づれかの一つは、其等の總べてを代表する資格を以て、其等の代償者としてはたらくのである。

斯くの如きは、大體に於いて、互ひに矛盾する欲求が統一されて、行爲となる一般樣式である。然し、わたくし共は

其れが古典主義の生活理想に依つて行はれるものと、象徴主義の生活理想に依つて行はれるものとの間には厳然たる相違のあることを認めねばならぬ。古典主義の生活理想の下に於ては、支配される側面を超えて、支配する側面は絶大なる威力を以てはたらいて居るが故に、互ひに矛盾する欲求にまで十分に合議し、協調する餘裕を與へずして、其等の外に超然たるやうに見える自己は勝手に其等の一つを引抜いて、其れを行爲にまで推し進めることになる。其れに反して、象徴主義の生活理想の下に於ては、互ひに矛盾する欲求にまで分たれた部分的の自己の外に、上に、特別の權威を有つた自己といふものはないから、其等の欲求が一つの行爲となるやうに進んで行く道は、其等が平等の地位に立つて合議し、協調する結果として、其等の各の中に含まれた部分的自己がおのづから作用的に全體的自己にまで還元され、さうして出來た全體的自己が、代表的に行爲にまで成熟せしめるために、其等の中より一つの欲求を選擇することになるのである。されば、完全に生活を組織するあらゆる欲求の交渉に依つて眞理や、善や、正義や、美や、中庸やの組織され、決定されるのは、獨り象徴主義の生活理想の下に於てだけである。

かういふ事實に基づいて、象徴主義の生活理想こそ、人間の性情が現に在るまゝに作られて居る限り、最も合理的なる、最も經濟なる、隨つて、最も顯著にそこにある卓越性の發揮される生活理想であるとわたくしは斷言するのである。

科學とデモクラシイとを其れの二大支柱とする近世文明には、確かに象徴主義の生活理想の萠芽が見出だされる。然しながら、不幸にして今日のところ、其れは象徴主義の生活理想の纔かに一側面と、其れのはたらきしか認識し、鑑賞することの出來ないやうな偏見に陷つて居る。其れを完全なる意味での象徴主義文明にまで補導し、完成することは、わたくし共の重大なる任務であらねばならぬ。

## 十　東洋文明は一か、多か

この論文に於けるわたくしの本旨は、わが國の固有の文化は、近世文明を匡正し、利導して、其れを一つの象徴主義文化にまで化すことにどれだけ多くの、そして、どれだけ獨自の貢獻を爲し得るかを考察するところにあるのである。然し、固と西洋人の物の見方に依つて鑄造された西洋文明、東洋文明といふ對立的言葉があるがために、今日に於ては、わたくし共日本人までが東洋文明といふ名稱の下に、印度の文明、支那の文明、自國の文明といふものを含めて考へて居る。東洋文明なる稱呼も消極的に西洋文明の特徴より此等の文明を識別するためには多少の便宜はないではないが、積極的に此等の文明の內容を標識しようとするならば、沒批判的にそんな稱呼の因となつてそんな考へ方をするより多く人を誤らせるものは無い。印度の文明と、支那の文明と、わが國の文明とは、たゞ地理的に、接壤して居ることの外、此等の間には文化史的には決して混同してはならない。そして、又、少しく事理に通ずる者ならば、混同することの出來ない相違があるのである。されば、此等のものを無差別に語るといふことは、西洋文明といふ名稱の下にチュウトン文明とラテン文明とを無差別に語るよりも幾層倍不合理な所爲であるか知れないほどである。

確かに印度の文明と支那の文明と日本の文明との間には　はつきりと識別し　强く力說しなければならない相違がある。わが國の文明は長い間、表面、印度の文明と支那の文明とを萬事につけて模範として仰いで來たのに拘はらず　わが國民性の自發的發動はおのづから其等とは非常に異なつた文化を築き上げたのであるから、わたくし共は、特に、この事實に留意して、わが國の文明を其等の文明より識別し、標揭するの理由を十分に體得するところがなければならない。

一口に印度の文明と、支那の文明と、日本の文明との各の特徴を其等が文化史的に是非とも混同されてはならない側

面に即して標別するならば、一般的の、然し、的確な意味に於て、印度の文明が神秘主義の文明であり、支那の文明が古典主義の文明である通り、わが國の文明は、象徴主義の文明であるとせねばならぬ。此等の三つの文明の三つの特徴は、其等をして近世文明に依つて改造される客體として三つの異なる價値を取らしめられ、近世文明を完成する主體として三つの價値を取ることになるのである。一層詳しく言へば、印度の文明と、支那の文明とは近世文明に依つて改造されるには日本の文明よりも遙かに困難であり、近世文明を完成することになると、日本の文明は其等の文明に比して貢獻するところが遙かに大きい。

## 十一　わが國の文明の由來と特徴

日本民族の特徴は印度民族の特徴より對角線的に異なると同時に、支那民族の特徴よりしても對角線的に異なつて居る。日本民族は印度民族のやうに瞑想的でもなく、支那民族のやうに文飾的でもない。然し、最も含蓄ある意味に於て實行的である。この特徴を其れの素質として、わたくし共は印度より將來された神秘主義と、支那より將來された古典主義との搖蕩の下に象徴主義を涵養し、其れを獨自の文明の基調としたのである。

由來、氣禀剛健にして快活なる上に、豐富にして奔放なる官能を具へたのはわたくし共日本民族である。そんな素質を有つた種族は、如何なる境遇に置かれ、如何なる感化の下にあるも、結局は象徴主義の文明の一種を醞釀し、沈澱するに至ることとは、さうまではつきりと言ひ切れないにしても、尠なくとも、神秘主義の文明や古典主義の文明よりも非常に異なつたものを醞釀し、沈澱するに至ることは極めて自然のやうに思はれる。印度文明たる神秘主義が彼等の野性を薫染して、其れを忍柔にし、支那文明たる古典主義が彼等の素質を洗練して、其れを醇雅なものにしたといふことはあらう。然し、其等は決して白紙を薫染し、洗練したのではない。未來に對つて一つの特定の發展を藏した一つの特定

の素質を薫染し、洗練したのである。其等の感化の下にわたくし共の祖先が、彼等の性情の發動とし、要求として、彼等に獨自の文明たる象徴主義を展開して行つたのは、此れが何よりの證據ではないか。

わたくし共の祖先は謙虚に、そして、悲しいかな、多くの場合に於て、盲目に印度文明と支那文明とを師範と仰いで居たのである。彼等の態度は適用の其れではなくして、純然たる模倣の其れであつた。然し、意識的に印度文明と支那文明との渇仰者であつた彼等は、不意識的には其等の改造者であり、超越者であつたのである。この不思議なる經過の結果として、彼等は絶えず彼等の慣習した理論を以て、其等の理論が到底當て嵌らない様式にまで彼等自づからの掌中に於て變更させ、發展させた文物を強いて改釋しようとし、改釋し去らうとする滑稽を演じて居たのである。そして、勿論、彼等はさうすることとの矛盾を覺らなかつたのである。然し、經緯はどうであつたにしても、こゝに一つ何人と雖も否定することの出來ない炳焉たる事實がある。其れは他でもない。其れは、彼等の內にはたらいて居たわが民族性は、其れの表現を求めてだんだんに神祕主義の文明や、古典主義の文明の皮殼を破つて、象徴主義の文明を形造つて行つたといふことである。

わたくしはさきに象徴主義を定義して、『出來るだけ單純なる方便を用ゐて出來るだけ複雜なる効果を擧げようとする努力である』としたのであつた。此れは最も含蓄ある意味で、即ち、理論的と實行的との意味を兼ねて理會さるべきであると同時に、審美的と創造的との意味をも兼ねて理會さるべきである。さうすると、何人にしてもわが國の文明の所産たる政治や、道徳や、宗教や、藝術や、學問やの孰づれかの一つを取つて、印度文明の産出した其れに、若しくは、支那文明の産出した其れに比較し、其のものが如何なる點に於て、如何なる風に、其等より異なるかを検討するならば、彼れは何故にわたくしが印度文明を神祕主義と呼び、支那文明を古典主義と呼ぶのに、わが國の文明を象徴主義と呼ぶかの理由を容易に了解するであらうと思ふ。概して、わが國の文明の所産のものは、其等の文明の所産のものより

も、其れの構造を遙かに簡約にするに拘はらず、其れの意義を遙かに豐富にし、其れの運用を遙かに柔軟にし、自由にするからである。

わたくしに之れが例證を擧げよとならば、わたくしはたゞ其れの餘りに饒多なるに苦しむのである。何故ならば、理屈として、苟くもわが國民性の浸潤と化育とに依つて創造され、若しくは、改造されたものである限り、事の大小に拘らず、其れが正しきパアスペクチイヴを通して、正しく觀照される時、悉とく象徴主義の色彩と傾向とを取らなければならない筈であるからである。先づ教理としては、(其れの外形だけに於てなりとも、神秘主義の拘束の中に跼蹐する象徴主義の精神を發揮するには最も不利な位地にあるに拘はらず、)能くわが國民性に依つて佛教を象徴主義化した眞宗と日蓮宗とを擧げることが出來る。次に、道德の一部として武士道を擧げることが出來る。概念としては、最初支那に發生したものにしても、體驗上の道德としての武士道は、どうしても獨り象徴主義の精神に依つて涵養され得るものであつて、其の他の精神に依つては發達し得ないものである。然し、何と言つても、わたくし共は象徴主義の文明の粹は、之れをわが國の產出した藝術の中に求めなければならない。中に就き、茶室と、俳句と、浮世繪とは粹の最も粹なるものである。此等はわが民族性が最も自由なる發動を以つて、最も不偏なる樣式を工夫した結果である。こゝにはわが民族性は『瞬間の中に永久を觀る、』若しくは、『瞬間を以て永久を捕へる』といふ象徴主義の標語が直ちに當て嵌るやうに、外面的の色彩と形象とは醇化されて內面的となり、出來るだけ單純なる方法を以て、出來るだけ複雜なる効果が達せられて居るがために、感覺的幽玄性、若しくは、官能的本體性といふやうな不思議に微妙な體驗が味はれるのである。そして、何人にしても、深刻に、到徹に、一國の文明の相關と交渉とのデリケエトなはたらきを考察しようとするならば、茶室や、俳句や、浮世繪のやうなものは纖藝細技に過ぎない、其等はわたくし共の國民生活に關して大した價値のあるものではないなどと速斷してはならない。其等はわが國民性が外部よりの拘束を感ぜず、若しくは、其等を破つて、

おのれに内具する傾向をはたらかせ、其れを練磨して行く時には、其れが如何なる發動の樣式を取るかといふことをわたくし共に説明し、説明するものである。其等は、たとひ意義に於てわが國民生活の中核であつたと言はれ得ないにしても、隙なくとも意識に於ては其れの前驅を成したものである。この意味に於て、其等はわが國民生活全體が自覺の燈火に依つておのれに含まれた靈素を焚き盡し、自然に結晶した實行であるとも見られるのである。

わたくしが斯かる言説を爲すがために、聊かにても讀者に依つてわたくしの眞意の誤解されることはわたくしの大いに迷惑を感ずることである。わたくしはわが民族性の發露であり、表現である象徴主義に對して、多大の讃美と敬意とを示すことを辭せぬ者である。然し、其れと同時に、わたくしは其れの功徳の有限性をも十分に認識して居る者である。わたくしは其れが涵養された社會狀態、及び、生活理想と、近世文明が涵養され、そして、現に要求されて居る社會狀態、及び、生活理想との間に、どれだけの扞格が橫はるかを十二分に知悉して居る者である。近世文明が其れの志向に隨つて正當なる發達を遂げれば、どうしても其れは象徴主義の形を取るに至らなければならないといふことは、わたくしの平生信ずるところのものであり、こゝに説いて居るところのものである。然し、さう信じ、さう説くからと言つて、過去に於てわたくし共日本民族に依つて着想され、完成された象徴主義が、其れの孰づれの部分にしても、一分を增さず、一分を減ぜず、直ちにさうして出現する象徴主義のモデルとなり得ると判斷し、速斷する者ではない。

近世文明の正當なる歸結として、將來に於て出現しなければならない種の象徴主義は、立憲的のものとして、科學とデモクラシイとの上に築かれたければならないものである。わたくし共日本民族の民族性の發露として沈澱し、結晶した種の象徴主義は、非立憲的のものとして、科學とデモクラシイとを全然無視して作られたものである。前者の要求を標準として後者を觀る時、自然わたくし共の眼に映ずるのは、後者の中に生きて居る部分と、死んで了つた部分との存することとである。そして、更らに一層正確に言ふと、其の生きて居る部分と雖も、眞に生きて居るのは其れに盛られた

内容ではなくして、一つの刺激、若しくは、暗示としてはたらく其れの性質である。

然し、過去に於てわが民族性に依つて醞醸された象徴主義の功徳の有限性に關して、斯くは淡白に、正直にわたくしの所信を告白するものの、今日、廣く世界を見渡したところ、近世文明を現に其れが彷徨しつゝある迷宮より救ひ出し、復び其れをして其れの本來の進路に著かしめるに必要なる刺激と覺醒とを與へ得るものは、獨り件の象徴主義だけであるやうに思はれる。近世文明の根本誤謬は、若し其れにして其れの本來の志向に隨つて正常なる發達を遂げるならば、最も優秀なる象徴主義文明にまで展開しなければならぬ構成を有ちながら、不幸にして其の本來の志向に對する理會と自覺とが足らなかつたがために、自縄自縛、其れの象徴主義文明への指標の蘊意を其れ自づからの力で讀み解くことが出來なくなつたところにあるのである。されば、其れをこの束縛より解放し得る者は、獨り其れをして、一旦、謙虚に其の志向の出つて生じた源頭にまで溯行せしめ、其の源頭に據つて、中正にそれぞれ相當な作用と價値とを其の志向から分派した諸の機關に分賦せしむる者に限られるのであるが、さうせしめることの出來るものは、近世文明の實利的効用、即ち、其れの文化の側面に些の損害をも與へないで、其れの理想的意義、即ち、其れの統一の側面を高調するわたくし共の象徴主義である。

實に、今日、世界文化の中に在つてわが國に固有の象徴主義は確かに卓然として獨特の性質と價値とを有つたものである、そして、一口に其れが獨特である所以を言つて見るならば、其れが一面に於て、原始的の單純と無邪氣とを保留しながら、他の一面に於ては、最も洗練された文化だけが可能とする均整、節約、謙譲、統一等の諸徳を總べての種の活動に對し、そして、總べての種の活動の間に優にはたらかして居るところにあるのである。わが國に固有の象徴主義文明は確かに原始的文化である。然し、其れは單なる原始的文化ではなくして、最高次にまで高められた原始的文化である。

更らに他の證例を引いてこの同一事實を說明して見れば、其れは多くの文化民族に依つて爲されたやうに、夙に直觀が知力に變形されて了つたり、直觀と知力とのはたらく分野が全然隔離されて了つたりして出來た文化ではなくして、知力としてのはたらきはどんなに洗練されても、其れはどこまでも直觀としての特徴に包まれてはたらくことに依つて出來た文化である。『大人は赤子の心を失はず』と孟子は言つたが、いつまで經つても、何處か原始生活の面影を保存して行つたのがわが國の文化の特徴である。アテンスの文化の最盛時に方つて、當時の哲人政治家ペリクリイスが其れの理想として、『吾人は美を愛して驕奢に流れず、學を好んで剛健を失はず』と言つた。この理想が案外容易にわたくし共日本人の日常生活の實際に於て實現されて居たのも、畢竟するに、類例稀なる程度に、原始的の直觀と、洗練された知力とが互ひに融通し、交徹してはたらいて居た賜である。

先きに、其れの志向からすれば、これまで人間に依つて著想され、建設されたあらゆる種の文明に優れて最も精神的たるべき、即ち、其れに於て生活の實利的效用と理想的意義とが最も完全に調和してはたらかなければならない近世文明も、一度其れの實利的效用だけを高調して、其れの理想的意義を閑却した經驗主義のために誤られて、物質的となり、再度其れの理想的意義を發揚するために其れの實利的效用を蔑視した理想主義のために誤られて、一層物質的とされたといふことを語つた。そして、今日の歐米人はいろいろの變形や、行き掛りに禍されて、此等の二つの氷炭相容れざる見地以外に、別に一つの見地を見出だし得ぬやうである。一見したところ、如何にも其の假定の根柢は堅牢を極め、其の推理の方法は精緻を極めて居るやうに思はれるあらゆる學說や主張と雖も、所詮は其の見地を經驗主義に置くか、若しくは、理想主義に置くかに出でない。

わたくしの觀るところ、信ずるところに依れば、わが民族性に依つて著想され、建設された象徴主義は、近世文明を其れの志向に隨つて正當に利導し、啓發するに與つて、此等の腐爛せる二主張が爲したもの、若しくは、爲し得るもの

の以外に、別に貢献するところがあり得るやうに思はれる。何故ならば、其れは生活の實利的効用と理想的意義との作用的交渉を徹底的に追窮することに依つて、其れを物質的であることから精神的にまで轉換しようとする見地が其れに特有のものであるからである。

## 十二　わが國に發生した象徴主義は如何なる感化を科學とデモクラシイとに與へ得るか

さきの節に於て、わたくしは近世文明の缺陷を指摘し、併せて、其れの由來を説明したのであつた。若しわたくしの指摘が事實に基づいたものであり、わたくしの説明が眞を得たものであるならば、其れは必然に何よりも先きに其れの二大ヴエヒクルたる科學、及び、デモクラシイの概念と運用とに現れねばならぬわけである。そして、又、わたくしが熱心に高調して居るやうに、わが國に發生した象徴主義の文化が他のあらゆるものの到底爲し得ない風に、近世文明の缺陷を匡正することが出來るといふわたくしの意見に何等かの確たる根柢があるならば、其れは直ちに科學とデモクラシイとの概念と運用とに有効に感化するところがあつて、始めて證明されるわけである。さうすると、この節に於てわたくしの爲すべき仕事は、わたくしに課せられたる義務は、科學とデモクラシイとに現在する缺陷は何か、そして、わが國に發生した象徴主義の文化は如何にして、如何なる程度にまで、其れを匡正することが出來るかを論述することであらねばならぬ。

わたくしは便宜上、わたくしの考察をまづデモクラシイより始めることにする。

世の中には一つの漠然たる情操として止まる間はたゞたゞ稱讃さるべきものであるが、一度其れが合理化され、理論化されて一つの主張にまで組立てられると、いろいろの誤謬や、矛盾に滿ちるやうになつて居るものが尠なくない。今

日、現に行はれて居る、若しくは、行はれて居ると信じられて居るデモクラシイの如きは確かに其等の顯著な一つである。たゞ理論上、か程までに支離滅裂な主張も、實際上は曲りなりにも或る効果を收めて行つて居るのは、あらゆる場合に於て何物にも優れて賢き、そして、其の賢さを失なふことのない生活そのものの本能に依つて、時に應じて補綴され、彌縫されて行つて居るからである。

わたくしの觀るところを以てすればデモクラシイの根本誤謬は、若し其れが永久に亘つて眞理の結成體たらんとすれば、是非とも要請と協同との作用的平等の主張であらねばならぬために、其れは纔かに要請だけの算數的平等の主張となつて居るところにあるのである。近世に於けるデモクラシイが、例へば端的に亞米利加の獨立の宣言の冒頭に於て、『總べての人々は、皆、平等に生る』と表白されたやうに、夙に要請の算數的平等の形を取つたのには、當時の被壓制者が壓制者に反抗して、彼等の將來の權利を回復し、これまで其等より受けた不正を賠償する方便として著想したのであるから、歴史上の行き掛りよりすれば、そこには十分の理由はあつたのである。然し、其れは人間の性情に基づく永久のロゴスたるデモクラシイが、偶ま一つの歴史上の機會に方つて、人間の生活内の一つの事實としてのデモクラシイとなつた破目に於てはたらいて居た人間の情操に過ぎないのであつた。されば、そんなデモクラシイは、其れが宣言された當初に於てさへも、尠しも實際には行はれなかつたものであるし、又、行はれる可能性を有つたものではなかつた。永久に亘つてますます展開され、建立されて行かなければならない最高義に於ける人間の生活理想としてのデモクラシイは、之れを彼れの情操に鑑みて靜觀し、之れを彼れの文化の進行に照らして精察するに、其れはどうしても一つの協同生活を組織する總べてのメムバアの要請と協同との作用的平等の主張であるとせねばならぬ。

かういふわけで、近世的の意義で一度デモクラシイが宣言されて以來、其れの理論上の根據と實際上の運用との間には、常に扞格が存して居た。然し、其れは、大體から見て、生活には都合のよいことであつたのである。何故ならば、

理論より一層劣き、若しくは、利口な實際は斯くして斷片的ではあるが、理論の矛盾を補綴し、其れの破綻を彌縫して行つたからである。が、如何に實際の有てる智慧が不具なる理論の筋積を合せて行つても、到底、其れを合せ切るものではないから、近世人が其の不具なる理論より蒙つた災害は實に言語に盡せぬほど廣大なものである。されば、當初より完全なるデモクラシイが宣言され、理會されて居つたならば、今日わたくし共が實際に有つとは全然異なつた政治機關や、經濟組織や、道德關係を有つたであらうと推測することは一片の空想に過ぎないと斷じ去ることは出來ない。

かういふ風に見て來ると、尠なくとも理論として、其れの反對者と等しく盲目的に其れの攻擊者に依つて懷抱されて居るデモクラシイの概念に含まれた誤謬は、二重に訂正されなければならないものである。そこに說かれる平等は算數的の意味のものでなくして、作用的の意味のものでなければならぬといふのが其等の一つであり、眞のデモクラシイは要請よりも協同を力說することに依つて、始めて實現されるといふのが其等の他の一つである。今、重きに隨つて此等の二つの觀察を綜合し、言葉を換へて言ひ表はすと、其れは意識的に現代のデモクラシイの缺陷となつて居るものは、生活の統制が內的となり、自由になればなるほど、ますます協同生活の統一と啓發とに必須となる人材の利用と尊重との思想を全然閑却して居るといふことになるのである。

今日、世間に有りふれた有象無象のデモクラシイ信者は大抵天才主義の盲目なる反對者である。然し、此れは深く物の道理を考へないために、固定概念に捕へられて居るのである。天才とか、偉人とかいふものは決してさう蛇蝎視すべきものではない、たゞ、正當に利用し、適度に尊重すべきものである。人間の性情が今日のやうなものである限り、隨つて、大體に於て、社會生活の組織が今日のやうである限りは、太古より現代に至るまでの通り、現代より未來永劫に至るまでも、協同生活は其れを組織する異なる才能の利用の階統に依つて統一され、發展させられるのである。されば、何時の時代、如何なる社會に在つても、機能の上から大別されて、指導者と民衆とは存在しなければならない。

たゞ變はるのは指導者の資格だけである。協同生活のエコノミイより、賢者、若しくは、賢者の一種なる強者は、必然に指導の位地に立ち、不賢者、若しくは、不賢者の一種なる弱者は必然に被指導者の位地に止まるといふ意味からして、啻に政治のみならず、協同生活の機關たるあらゆる組合は哲人主義の原理に依つて組織され、運用されなければならないのである。それであるから、普通、世の昧者が爲すやうに、哲人主義と民主主義とを對立させるのは其の當を失して居る。民主主義は哲人主義の一種に過ぎない。哲人主義は類名である。民主主義は種名である。眞に民主主義に對立させられるものがあるならば、其れは哲人主義でなくして、矢張り、哲人主義の一種たる專制主義でなければならない。一つの哲人主義が人文の發達の相違に隨つて、或る時は專制主義の形を取り、或る時は民主主義の形を取るのに過ぎない。

かゝる明白なる事理に徹しないで、デモクラシイの信者となると、彼が個人主義者であると社會主義者であるとに別なく、デモクラシイは、其の原理に於て才能の算數的平等の上に、即ち、賢愚の相違と才能の適應性の差別とを無視し、排斥して、始めて成立つ主張であると想像して居るところに彼等の醫すべからざる迷信がある。文字通りに解釋されるならば、そんなデモクラシイは一日と雖も協同生活の指導原理として役立つものではない。されば、事實、一日と雖もそんなデモクラシイが行はれたことはない。然しながら、現に世界に於てデモクラシイと名の付いたものにして多少なりと其れの誤れる理論に依つて、其れの正當なるはたらきを損害されて居らないものは殆んどない。

民衆の生活を形造る欲求は、獨り卓越せる指導者の誘掖と啓發に依つて醇化されてだんだんに卓越せる樣式を取ることになるのである。然し、指導者も、民衆も、彼等の德や智慧に於て平等である。彼等の投票は同等の價値しか有ち得ないといふ誤れる理論の上に立つデモクラシイの感化の中に在つては、協同生活の生活方針も、生活理想も、現在最多數の民衆の生活を支配して居る最强欲求の複合產物となる虞れがある。のみならず、確かにさういふ傾向が見出され

る。されば、たゞ比較的に顯著に哲人主義の精神が發揮されて居るところに限りて、比較的に能く第一義に於けるデモクラシイを保障され、成長されて居るのである。

事實さうであるとしたならば、なぜ世のデモクラシイ信者は素直に哲人主義の精神に依つて、實行に於てと等しく理論に於て、彼等のデモクラシイの主張を立て直さうとしないのであるか。哲人主義はわたくし共に告げるのに、若しどこまでも民衆の欲求を唯一の材料としながら、天才の其れに對して最後の樣式を與へるのが天才の職分であるとするのが、正しき、そして、唯一の意味に於けるデモクラシイであるならば、デモクラシイは政治、道德、產業、藝術、學問、社交生活に於ける最善の、そして最新の方針であることを以てするのである。

然しながら、今日のデモクラシイは其れ自づからにこの正道に立歸るには餘りに遠く邪路に踏み入つて居る。其れはデモクラシイに於ては普遍的、理想的意義はだんだんに內化され、作用化されて、個體的、實利的活動の中に融入されることになつたが、この微妙な進化は一般人に依つて了解されるところとならず、動やもすれば、理想や、智慧や、權威は永久に人間の生活から消え去つたと速斷されるのである。

出來るだけ單純なる方便を以て、出來るだけ複雜なる目的を達しようとする象徴主義は、自然、總べての個體を最も經濟的に、最も合理的に、即ち、美的に考察することに依つて、其れの中に現實と理想との一致を見出ださうとするのである。さうすると、デモクラシイは必然に生活の理想的意義と實利的效用との協同から成立しなければならない。それであるから、外的の傳統や權力が取り去られれば、去られるほど、其等の協同はますます完全になり、洗練されることを證據立てるのであるといふことをわたくし共に敎へるところのものは、象徴主義であらねばならぬ。

次に、わたくしは科學の缺陷に就いて考察するところがなければならない。

世の中に、現代人が科學に對する態度ほど曖昧にして不思議なものは他に見當たるまいと思はれる。其れは、彼等が

科學を離れては一日半夜と雖も生活出來ないほど、又、今日に於ては科學に依つて感化された以前の生活はどんなものであつたか殆ど想像が付かないほど科學の恩惠を受用しながら、そして、其の事實を十分に意識しながら、其れに對して不滿の情を斷たざることである、時としては、怨恨の念さへも發することである。現代人のこの矛盾する思惟は、主として人間には到底科學に依つては滿たすことの出來ない、遙かに高尙にして幽遠なる靈の欲求があるが、科學は卑近なる日常生活の欲求を滿たすのをおのれの手柄として、強いて近代人をしてそれだけに滿足して、其の高尙にして幽遠なる靈の欲求の存在を忘れしめようとして居る、ところが薄志弱行なる現代人は脆くも科學のこの誘說の犧牲とならうとする、或ひは、事實、既になつて居る、とする情操に依つて化醸されたものである。然し、世人は丁寧に分析し、適切にこの情操の出來と性質とを見究めることが出來ない。そこで、彼等は生活に取つて科學は結構なものであるが、其れに拘はらず、科學には何か間違つたところがあるやうだと危ぶみながら、生活して居るのである。

科學に對する現代人の情操を確たる事實として、其れは科學の側より生じたのであるが、若し眞にさうならば、其れは如何たる性質のものであるか、それとも、其れは科學に對する現代人の態度の側より生じたのであるか、若し眞にさうならば、其れは如何なる性質のものであるかとわたくし共は篤と吟味して見なければならない。

わたくしは、端的に、缺陷は科學の側と其れに對する現代人の、態度の側との兩方にある。何故ならば、結局此等のものは一つのものの二面の發露に過ぎないから。そして、其れは科學そのものの文化史的意味を理解することの出來ないところから來たつて居るのであると斷じようと思ふ。

生活統一の道具として、科學の構成は神話の構成や、宗教の構成や、スカラ哲學の構成やよりも遙かに有効なものであるといふ事實からしても、そこには其等に於てよりも遙かに豐かに人間の理想がはたらき、隨つて、其れは遙かに理想的のものであることは多辯を要せずして明白である。然し、科學に於て理想のはたらく方法は、極めて直接であり、

適切であつて、個々の事件、若しくは、經驗の外に立つて其等に命令することをせず、不可分離の關係に於て其等と一體となり、たゞ、其等の活力とし、精神としてはたらくために、理想の中で最も理想的なる科學は、反つて非理想的と誤認されることになる。甚だしきになると、反理想的とまで誤認される場合が尠なくない。理想が科學を其れのヴェヒクルとしてかういふ風にはたらくことになつたことは、確かに人間の生活がそれだけ合理的になつたことを示すものである。何故ならば、どう考へて見ても現在する生活を、あらゆる考慮から、出來るだけ善く其れを處理するといふことの外に一つでも他に理想に課せられた役目はない筈であるからである。然しながら、個々の事件や經驗の外に立つて、外的に、大業に時としては、横暴に其等を支配するものでなければ理想ではない、理想たるの資格を有ち得ないと教へられ、覺えこんだ現代人は、科學の内に於て淑きしやかに、謙遜にはたらく理想を理想と認識することが出來なかつた。彼等は依然として何處にか向つて、外的に、大業に、時としては、横暴にはたらくものを眞の理想として探し廻つて居たのである。

由來、おのれに課せられた天職に對して決して自覺を有たなかつた科學は、笑止にも世人のこの態度に知らず識らず欺かれ、惑はされて、法外におのれの職分を卑下して解釋し、其の誤れる解釋に隨つて、おのれの實際の仕事の志向を狹め、其れの價値を落下せしめたのであつた。極めて淺薄な意味に取つて、其れの目的全體は生活の實利的効用を增すだけのことに限られるのであつて、如何なる意味に於ても、其れの理想と意義との如きは全然其れの仕事の目的外に横はるものと想像したのであつた。そして、事實、果してさうであつたならば、其れがこれまでに擧げた成績は擧がるものではない。其れが現に從事して居る仕事の進行は即座に止んで了ふといふやうなことには尠しも氣付かないことになつた。

今日、科學を其れの宣言價値に取ることだけを知つて、其れの本質價値に取ることを知らない、隨つて、其れを俗育

に雷同して輕蔑することだけを知つて、獨自の高邁なる見識に依つて其れを尊敬するの道を講ずることを知らない哲學者たちは、哲學は價値の立場より生活の統一を圖るが、科學は價値の觀念を除外して、たゞ物質としての出來事の叙述を取り扱ふと言つたり、哲學の構成する概念は經驗の合理性に徹するといふ意味に於て純粹であるが、科學の捏造する概念は尠しも生活の合理性に徹せず、ほんの實用の目的のために偶然に空間的に共存し、若しくは、時間的に相續する事件を單に記憶のために結合するに過ぎないといふ意味に於て、經驗的であると言つたりして、恰かも神聖極まる大眞理でも發見し、捕捉したかの如く昂奮して語つて居るのを見ると、わたくしはたゞたゞ彼等の蒙昧さ加減に驚くばかりである。價値を保留し、若しくは、增進する考を以て人間の理想ははたらかない限り、どんなに原始的の形を有つた科學のどんな最小片と雖も組織され得るものではないからである。然し、彼等哲學者たちをしてそんな誤解を抱かしめた責任の半分は、おのれに委託された高貴な仕事の理想的意義を解せず、緩かに其れを實利的効用に限られたものと卑下して居る科學者自づからが負はなければならないところのものである。

斯くして、科學が其れの成立に必要なる理想的意義を閑却して、其れを、生活に於て單に實利的効果を增進する道具とのみ速了した結果、其れの研究方法も、其れの結果も等しく甚だしく道德や藝術の理想と扞格するものになり、終には、生活の統一を助けずして、反つて其れの分裂を催すこととなる。正しくは道德と藝術との手段であるべき科學が、おのれの天職に不明なるがために、偶ま其れの本來の志向に背いて其等の敵となるの形體を取るがために、科學に依つて淨化され、合理化されて、始めて本物となり得る道德も藝術も、今日のところ、科學の脅凌に對抗し、おのれを保護せんとして、反つて頑迷と不透明の度を增すことになつた。されば、今日、道德や藝術の不自然であり、稱氣紛々たるのも、科學がおのれの職分を十分に自覺するに至らない結果であるとせねばならぬ。何故らば、科學にして道德や、藝術や、其の他のあらゆる種の活動を含めて生活全體の統一に十分なるだけの理想を含有し、自覺しておのれの仕事の設計

に着手するならば、道徳や藝術は素直に其の事業を科學の手より受け取つて、それぞれおのれの役目に應じて、其れを適宜に變更し、發展さして行くだけに滿足して、別に Ought to Be の世界、又は、Would have Been の世界を想像する必要も感ぜず、餘地もないからである。そして、ヘエゲルと共に當り前のこととして、何んでも現存的のものは理性的のものであり、何んでも理性的のものは現存的のものであるといふ確信を以て生活することが出來たのである。

わたくし共はデモクラシイと共に科學の高貴な生誕を知るが故に、其れをして其れの本來の正道に立ち歸り、本來の役目を滿たさしめねばならぬ。然しながら、歴史が證明したやうな行き掛りと、わたくしがこの論文で説明したやうな理由とで、在來の理想主義は、さうすることが出來なかつたのみならず、反つて其の弊害を増したのであつたとしたならば、之れが救濟の方便として、相當な期待を以て試みられ得るものは、わたくしの知り得る限り、わが國の過去の文化が工夫し、完成した象徴主義だけであるやうに思はれる。

さう言つたところで、實際の問題として、其の象徴主義は如何にして科學にまで關係せしめられ得るか、如何に科學の缺陷を訂正することが出來ようか。

テニソンに、『ウオルフラワアに題す』といふ有名な詩句のあることは誰れでも知つて居ることである。其れの意味は、『これは極めて些細な草であるが、誰れでもこれの根から頭まですつかりと完全に知り盡すことが出來たならば、彼れは宇宙の秘密を解くことが出來るであらう』といふのである。此れは深遠な直觀と智慧との含まれたものとして、大分世間に持て囃されて居るものである。然し、此れは神秘主義であつて、わたくしがこゝで力説して居る象徴主義とは大分異つたものである。個々の事件や經驗を緣としながら、忽ち其れの特殊性を超越して、たゞ、其れと一層大なるものとの情操上の一致を享樂しようとする神秘主義である。そんなものは科學の缺陷を匡正する何等の手掛りをも有たな

い。象徵主義はどこまでも現在する個々の事件や經驗の個性と特殊性とを尊重し、そこに踏み止まりながら、其等の意義を豐富にすると同時に、限定するために、其等を成立さして居る他の事件、若しくは、經驗との關係を其等の內面より發展させるのであるから、象徵主義はたゞに科學のみならず、道德にしても、藝術にしても、おのれの片寄よつた興味と、抽象的見地と、機械的方法との犧牲となつて生活に對する正當なる關係を失はうとしてゐるものとは容易に關係を作り、適當に其れの缺陷を匡正することが出來るとわたくしは確く信ずる者である。

## 十三　象徵主義文明の建設に由る吾人の前途

象徵主義文明は近世文明の飜譯ではなくして、其れの繼續である。其れは相次いで純粹なる經驗主義と鈍重なる理想主義とに依つて化醱された幾多の誤謬を訂正して、近世文明を展開しようとする試みである。わたくしが洞察し得る限り、將來に向つて眞に有意義に生きようと志すあらゆる國民に取つては、象徵主義文化を生活する他に一つも道は無いやうである。たゞ、其れは僅に本能の仕事でもあり、小規模でもあつたが、過去に於てわが民族性は其れが實現される時には、其れは如何たる組織と精神とを取るべきかを適當に暗示する種の文化を工夫し、完成したから、わたくし共日本人は他の國民に比して聊か一日の長あるのを誇えるだけである。

今日わたくし共は國家多事の時に際會して居る。理化學の研究に依つて産業の獨立も圖らなければならないし、普通選擧の實施に依つて議會の改造も企てなければならない。其の他、教育制度にしても、道德觀念にしても、哲學研究の精神にしても、一として之れが改造の急を告げないものはない。然し、象徵主義文化の建設は此等の仕事を濟ましてから始めてもよいといふやうな性質のものでなくして、此等の差し迫つた改造を要する事柄が錯綜せるがために、即刻に始めなければならない性質のものである。わが國に於て根本的に改造されなければならない事柄の錯綜するといふの

も、この六十年に亘つて、わたくし共がわたくし共に取つての特有の文化を開拓し行く方法として、夙に象徴主義文化の建設に着想し、實施しなかつた咎でもあるのであるから、此等のものが一旦處置されて、其れが不聰明と不徹底であるところから、永く禍根を將來に遺さないためには、始めより象徴主義文明に依つて處置されるのを策の上乘とする。されば、わが國に於て、象徴主義は机上の議論や、書齋の空想ではなくして、市井の日常生活の事々物々に關はる態度であり、處置であらねばならぬ。

これまで、わが國に於ては眞の意味の改造もなく、進歩もなかつた。誤つてさう呼ばれ、輕薄にさう信じられて來たものは、悉とく西洋からの新たなる移植であつた、西洋の新たなる模倣であつた。そして、わが國の要求や、世界の文化の大勢を參照して、十分なる理由の上にさうするのでないから、往々にして、彼の土に於ては既に廢棄の運命にまで瀕して居たものも、たゞに見出だされるからと言つて取り入れられたのである。されば、間もなく彼の土に於て其れを廢棄するの運動が起つたと言つて、急に其れの後始末に狼狽する滑稽を演じたことも珍らしくはなかつた。堂々たる一國民として、餘りに眼先きの利かず、意氣地がない話ではないか。當時、生存の必要から其等を取り入れたにしても、何故、將に來らんとする大勢を逆睹して狼狽しない程度に改造した形に於て其等を適用し、運用しなかつたのであるか。

暗中に模索しながらも、兎に角、わたくし共は近世文明に關して六十年の經驗と試練とを積んで來て居る。今は、其れを以て自國の文化の改造を圖り、外國の文化の轉換に資し得る主張の一つぐらゐは發表してもよい時機ではないか。

わたくし共日本人は亞細亞人の先覺者を以て自任し、他稱されて居る。そして、事實、彼等の中には、わたくし共日本人を彼等の盟主として歡迎して居るものも尠なくないやうである。然し、果して先覺者ならば、わたくし共には彼等を覺醒に導く義務があるではないか。わたくし共の大數にして、沒批判的の西洋模倣と盲目的の西洋反撥との兩極端の

間に彷徨し、動揺して居るならば、何處に先覺者たる實があるか。わたくし共は、現代に於て眞の意味に於て生きるといふことは、自國の文化に依つて近世文明を改造し、近世文明に依つて自國の文化を發揚することの他に一つも意味の無いことを、先づ實踐を以て範を彼等に示し、彼等をして其れを參考として、それが自國の文化と近世文明との適宜な交渉と融通とを工夫せしむべきである。さうして始めてわたくし共日本人は名實兩つながら全き亞細亞の先覺者であると言ふべきである。徒らに、一方に依てレニンに附和しながら、他の一方に於てタゴオルに雷同して、其等の流行の間に何等の矛盾を感ぜず、わが國に特有なる情勢と理想とより、其等の上に何等の嚴正なる批判を施して取捨するところを知らない間は先覺者とは受取りにくいやうである。わたくしは、わが同胞にしてわが國の將來に向つての文化は、どうしても象徴主義の文化でなければならぬとの自覺を生ぜず、其の自覺に依つて政治や、道徳や、藝術や、學問が研究され始められない間は、嚴密なる意味に於て、わたくし共はまだ一歩も近世文明に足を踏み入れたとは信ずることは出來ないのである。

象徴主義文明の建設！わたくし共日本人が今日より將來に亘つて、一國民として生活して行くのにどれだけの聰明と力量とを具へて居るかを試すのに、之れに勝る適切な、そして、莊重な試驗石が又とあらうか。わたくし共は今日より一國を擧げてこの困難なる、然し光榮ある事業に取り掛らうではないか。

# 歐洲國際資本の注目すべき一動向

## ——中歐經濟同盟運動の史的意義の考察——

小島精一



### 一　戰後の國際結合運動の史的意義

現代産業の獨占組織は既に大戰前から國民經濟的領域を乘超えて國際的結合に迄進展して居た。ハルムスは一九一二年の著書に於て主要なる國際結合百十四個の概觀的調査を試みて居るが、夫れは決して當時存在した組織の全體を網羅するものではなかつた。

世界大戰中此運動は一時停頓したし、或者は當然崩壞もしたが、大戰後には再び復活して來、今日では益々發展する傾向がある。

私は一般的に見て此現象の將來の發展を豫想せしむるに足る理由として、取分け次の四個の事情を擧げられると思ふ。

第一には、戰時中及び戰後に各國何れも企業の集中が行はれ其國家的獨占體が發達した事である。凡そ國家的獨占が國際的結合の成立を容易にし其實力を確實にする事は今更說明を要するまい。

第二には各國共產業自立の思想が盛になり、保護政策が濃厚に、且普遍的に採用されて來た事である。此事實は又一方には戰後に於ける各國生產力の膨脹（戰時中破壞された生產力は概ね迅速に復舊され、且現代的設備に取換られた）他方には消化力の減退と云ふ二個の事實と相俟つて國際競爭を極めて激烈にする。が此競爭の激化自體が既に國際的結合への痛切なる欲求を刺激する許りではなく、相互の市場が關稅障壁等で保障されて居る爲に國際的提携にとつては好都合で且確實なる分野が自ら存在する事になるであらう。

第三に此傾向を助長するのは妥協的平和的心理の擡頭である。と言つても私は決して國際間殊に列强國間の經濟的及び政治的實力が一般に大戰前よりは均衡的になつて來、其爲に征服慾に代つて平和的妥協心が支配するやうになつたと云ふのではない。況や經濟的衝突の原因が假令一時的にせよ取除かれた杯とは考へるのではない。私は主として國際聯盟等を代表とする平和的運動と一味相通ずる國際資本の心理の發達を指すのであり、一般に其運動の最も力强き促進原因としては勞働者の革命的運動の發達を考へたいと思ふのである。換言すれば將來の戰爭は勞働者の革命運動を勃發させる危險が著しく增大したから其危險の自覺が自ら國際資本の政策を平和的に導くやうに考へるのである。戰爭に依つてどの資本家が其競爭者を壓倒し得にせよ、若し夫れが國際資本全體の仇敵に乘ぜしめる機會となるならば戰勝國の資本家にとつても戰爭は必ずしも望ましいものではない。「獨逸の資本か或は英、佛資本か誰が世界の鑛物資源を搾取するかと云ふ事よりも一個の搾取組織として全資本主義が存續し得るか否かと云ふ事が一層重大な問題」となつたし其の結果として「資本家と勞働者との國民的休戰に依つて外國資本家に對抗する」政策が不可能になつて「國際的ブルジョア間の休戰に依つて各國民の勞働階級に應戰する」政策が置き替へられるやうになつたのであらうと思ふのである。然し例へばエド、フインメンのやうに資本家は斷然相互の內訌を廢止し其征服的政策を一擲して專ら共同の强敵たる國際勞働に應戰するに到つたのだと迄言ふのは言ひ過ぎだと思ふ。今日でも國際資本の衝突の原因は依然として嚴在しその相互殺戮の危機は矢張發展しつゝある。が少くも斯る對勞働の意識が資本家の好戰的欲望を制肘し相互の妥協を促進するに與つて力がある事は疑はないのである。

第四には勞働運動の實力の伸張と其平和的政策の影響である。勞働者が資本家的侵略政策に反對である事は言ふ迄もないし其勞働者の實力が戰後著しく强大となつた事も說明を要しま

い。彼等は大體國內的にも國際的にも獨占的結合組織の發達を歡迎する。それは市場の安定及び整頓が賃銀其他勞働者の待遇を改善するに有利であるからである。例へば歷史的に見ても獨逸の勞働者はカルテルの成立を援助したし、近頃では英國の炭坑夫は國際的石炭業カルテルの創立を主張してサミユエル委員會の注意を惹いたのである（同委員會に於けるフランク、ホツチスの提案）。勿論彼等は其資本家的獨裁には極力反對するけれ共此組織の技術的効果たる生產及び分配の規律は尊重するのである。

大體右四個の事情に依つて國際的結合は少くも今日では促進される傾向があると、私は考へるのである。

勿論反面には此協定を裏切るやうな事情もないではない。否、國際競爭の銳化と云ふ事は其根抵には常に征服戰の危機を孕むで居るし、戰爭に依つて强められたと見える右の妥協的諸事情は恐らく尙第二の戰爭を廢止せしめるには力足らぬであらう。が、私はそれ迄云々しやうとするのではない。たゞ今日發展しつゝある國際的結合の事實の裏には斯る促進的事由が伏在する事を先づ念頭に意識し置かんと思ふまでである。

## 二　特に注目すべき歐洲國際資本の結合運動

戰後の國際經濟を一般的に見て、斯かる結合的傾向がある事は確に其の一特徵ではあるが、取分け私の注意を惹くのは近頃歐洲殊に中歐諸國間に於ける經濟的同盟の强烈なる氣勢であり、其先驅として又重要なる一實例としては獨佛兩國の重工業者を中心として最近に成立した歐洲鐵鋼業聯合の現象がある。從つて以下本編に於ては特に此の歐洲經濟同盟の機運に就て多少の考察を行はうと思ふ。本論に入る前に豫め注意し置くべきは所謂關稅同盟と國際カルテルとの關係である。勿論此二つの現象は其直接の目的も方向も効果も必ずしも同一ではない。國際カルテル等の結合運動は現在の國家的政治的障壁は其儘にして置き乍ら然も夫れを乘り超えて單に歐洲丈けでなく世界的に結合し提携せんとするものであるが、歐洲經濟同盟（關稅同盟は其中心をなす）は現在歐洲諸國間に不自然な孤立的、分裂的狀勢を生むだ處の政治的經濟的障壁——例へば大戰後に顯著なる保護關稅壁の如き——を相互に除去して歐洲全體を自由なる經濟活動の單位としやうとする運動である。又其包含する產業の範圍から云つても、カルテルは單一產業部門に限られて居るに反し後者は全產業的である。

斯くの如く一見甚だ相違するやうな此二つの運動も其背景たる促進劑は何れも同じ戰後歐洲經濟の行詰りにあつて性質上も

相互に補充的のものなのである。何故と云ふに先づ歐洲經濟同盟の成立は國際カルテル運動をば愈々鞏固ならしめるであらう。蓋し、さうなれば一應歐洲諸生產者間に激烈な自由競爭が行はれるかも知れぬが、夫れは從來狹隘な範圍內で不合理に形成されて居た結合の單位を開放し、擴大し、新しき合理的基礎の上に更に鞏固なる高級組織を出現せしむるであらうから。

又逆に今日の分裂的基礎の儘で國際結合が出來るからば、夫れも亦相互の提携と親善とに依つて疎隔の途を開き、一層組織を高級化するため相互の不合理な障壁を除去せんと務めるに到るであらう。

總て現實に於ても此兩運動は併行的に行はれ又屢々相互に補充的意味で主張されて居る。即ち現に普及しつゝある國際カルテルはやがて關稅同盟を實行して國家的障壁を撤去する際、過渡的ながら國家的產業に急激に加へられる外國競爭の弊害を緩和するものとして歡迎せられるのである。

## 三　大戰前後に於ける世界生產の趨勢

さて、歐洲國際資本の顯著なる、動向となつた國際經濟同盟運動は何によりも「世界經濟に於ける歐洲の位置の失墜」に依つて刺激されて居る。而して其失墜の原因は或者は恒久的であり自然的であるに反し、或者は一時的であり偶發的であり又平和條約の結果として現はれた人爲的なものである。

私は先づ此失墜の事實を概觀し進んで其原因を考察しやう。

失墜の事實を知る爲に大戰後に於ける(1)重要品の世界生產と歐洲の地位、及び(2)世界貿易と歐洲の地位(3)國際資本投下額と歐洲の地位の三點を一應檢討しやう。

大戰後の世界生產を大戰前十餘年間の趨勢と比較して見ると主要農產物に於ても鑛產物に於ても一見確に明白な變化を認められる。

私は茲へ詳しい引用を差控へねばならぬがウオイチンスキイ（Die Gesellschaft Sept. 1926）——重要農產物六種、鑛產物八種の各別調査——によると一九〇〇年乃至一九一三年の間には勿論昂低は免れなかつたが確然且整々然たる一般的增產の曲線を見出すに反し大戰後は概して停頓的であり多くは減產を示して居る。然し或種の產物例へば米とか綿糸（最近）とか、殊に揮發油、アルミニューム、下つて銅の如きは戰後に反つて激增さへして居ないではない。だから此十四種產物の調査丈けでも大戰後の一般的生產減退を云々するのは早計であり、寧ろ却つて生產品種に依つて曲線の方向が混亂分裂——或は跳躍し、或は下垂す——して居ることをこそ注目すべきであらう。且

又最近では一般に世界的恐慌から恢復しつゝあるを示すから戰後の激減も永續的の現象なりや否やは輕卒に斷言出來ないであらう。

此疑問は其他の重要な産業、例へば造船業（殊に一九一八年乃至一九二一年の驚くべき繁榮）電氣工業、製紙業、自働車製造業及びゴム工業等の生産膨脹を併せ考へると一層共感を深める。だから、やはり一般的減産の傾向と云ふよりは生産品種の均衡の破壞があると云ふべきである。中にも重大な變化と思はれるのは炭鐵業の不振に反し揮發油及び電氣工業の著しき伸張である。（但し銑鐵業の不振にも拘らず鋼鐵業は增産を示して居る。だから眞に好箇の比較對象となるのは寧ろ石炭と石油及び電氣である。そして其意味に就ては後に説明を加へるであらう。）

## 四　歐洲生産の著しき一般的減退

處が世界生産の概觀から其の五大陸別の統計に移ると其處では更に複雜な變化があり、殊に歐洲大陸の減産とアメリカ大陸の激增との目立つた對照的傾向を見出すのである。

先づ六大農産物の産額の比較は次表の通りである。

| 大陸別 | 年度（平均）生産額（百萬噸） 一九〇九—一三 | 一九—二三 | 增（+）減（−）率 |
|---|---|---|---|
| 歐洲 | 一二一、六 | 九〇、三 | （−）三一、四 |
| アジヤ | 九〇、七 | 一〇〇、五 | （+）九、八 |
| アメリカ | 一三九、六 | 一五八、五 | （+）一八、九 |
| アフリカ | 九、三 | 八、七 | （−）〇、六 |
| 濠洲 | 三、五 | 三、八 | （+）〇、三 |
| 合計 | 三六四、七 | 三六一、七 | （−）三、〇 |

大戰後の數字は一部は恐慌期をも含み且つ歐洲は未だ荒廢期を脱せぬのであるから傾向の觀察材料としては不適當な統計ではあるが兎も角も歐洲農産業の激減は注目に値する。

更に最も重要な鑛産物とされる石炭原油及び銑鐵の大戰前後の生産は次表の通りである。但し、一々引用するのは煩雜過ぎるから單に歐米兩大陸丈けを對比するに止め、他の諸洲は何れも多少の增産（絶體的にでも、全世界中の相對的割合にでも）となつて居ることを注意丈けして置かう。

大戰前後に於ける石炭原油及銑鐵産額增減比較表

| 大陸別 | 石炭 産額 | 石炭 全世界中の割合 | 原油 産額 | 原油 割合 | 銑鐵 産額 | 銑鐵 割合 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 歐洲 | 七三一—六四一 | 五五—四八 | 二一—九 | 二三—六 | 四六—三六 | 六八—五一 |
| アメリカ | 五三三—五九九 | 四〇—四五 | 三八—一二〇 | 七三—八七 | 三三—四一 | 四〇 |
| 全世界 | 一、三四〇—一、三三九 | 一〇〇 | 五三—一四三 | 一〇〇 | 七[illegible]—六九 | 一〇〇 |

（註）對比の年度は一九一三年對一九二三年（原油は二四年）、産額單位は百萬噸

此表でも同じ歐洲の減產が目立つが此表の意味はそれが從來の最も重要原料たる石炭及び鐵と今後或點迄は石炭を驅逐して共動力用としての位置に代替すると思はれる石油とを含むが故に甚だ注目に値する。

そこで此表から注意すべき點は

(イ)石油の世界產額が三倍せるに反し石炭及び鐵は靜止的であり之に依つて前者の動力用としての位置が著しく重要となつたこと

(ロ)歐洲は石炭及び鐵にては兎も角もアメリカと釣り合ひを保持して居るに反し石油にては全く比較にならぬ程劣勢なること

(ハ)然も石油の近時の增產は全くアメリカの驚くべき發展に基くこと

等である。

進んで其他の主要鑛產物たる銅、鉛、亞鉛、錫及びアルミニユームの五種の產額を見ると(數字略)茲でも歐洲の位置は何れも著しく失墜して居る。此五種の產額を綜合的に云ふと大戰前歐洲の產額はアメリカの倍額であつたのに一九二二年には反つてアメリカの方が二十萬噸も多額を產して居る。

略ぼ同じ趨勢が他の比較的加工部門に屬する重要產業たる機械製造、化學工業、造船業及び自働車製造業等にも觀取すとが出來る。(數字略)

ウオイチンスキイによると斯る狀勢は殆ど、どの產業をとつて考察しても略ぼ同樣に立證することが出來るさうである。例へば砂糖、紙、織物、ゴム、絹、染料等の生產、カ、オ、カフヱー、金、銀、白金等の消費等々何れも歐洲の慘しき失墜を物語つて居る。

そこで戰後の世界生產に就ては次のやうな重要な結論が下され得る。曰く、

世界生產を構成する重要產業相互間の發展上の釣合が崩壞すると同時に歐洲生產の位置が失墜した。それは一つにはアメリカに新產業が勃興し歐洲に重心を置く產業が廢れて來たことをも示す。

そこで問題となるのは、斯る狀勢はどこ迄自然的持續的であり、どこ迄一時的人爲的であるかと言ふことであるが夫れを考へる前に尙ほ歐洲經濟の失墜を物語る他の事實を示さう。

## 五　世界貿易に於ける歐洲の失墜

世界貿易を歐、米及び其他に三大別して大戰前後の狀勢を對比すると次表の通りである。

| 大陸別 | 全世界輸入中の割合(%) | | 輸出中の割合 | | 全貿易中の割合 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 一九一三年 | 二四年 | 一三年 | 二四年 | 一三年 | 二四年 |
| 歐洲 | 六九 | 六二 | 六二 | 五一 | 六六 | 五七 |
| 中部及東部歐洲 | (二一 | 一五) | (二二 | 一三) | (二一 | 一四) |
| アメリカ | 一九 | 二三 | 二五 | 三三 | 二二 | 二八 |
| 其他 | 三一 | 三八 | 三八 | 四九 | 三四 | 四三 |

(註)本表ハ Weltwirtschaft. Archiv Ap 1926 ニヨル

之によると歐洲の割合は全貿易額中でも減退したがそれは特に輸出に於て著しい。之に反してアメリカ及びアジア、濠洲等主として所謂植民地域は寧ろ輸出に於て激増して居る。

之は何れも全世界中の割合に於ける變化であるが、次に戰前(一九一三年)と一九二四年とを比較して夫々大陸別の增減を見ると歐洲の衰退は一層明白になる。

| 大陸別 | 輸入の增減割合 | 輸出の增減割合 | 全貿易增減割合 |
|---|---|---|---|
| 歐洲 | (−)一一 | (−)一八 | (−)一四 |
| アメリカ | (+)三四 | (+)四〇 | (+)三七 |
| アジア | (+)三七 | (+)三二 | (+)三五 |

(註)(−)は減退(+)は增加なり、出處同前

即ち歐洲は全世界中の相對的割合丈けでなく其貿易の絕對的價格に於ても激減して居り、殊に輸出の減退は甚しいのである。之に反して他の兩洲は何れも激增を示して居る。

更に歐洲諸國の中では槪して北部歐洲は輸出入共戰前より增加して居るに反し、中部及び東南部諸國は減退して居る。(數字略)。殊に主要輸出國たる英國は戰前の七八%に減じ、獨逸五一%、伊太利九〇%、スイス七五%、ホンガリイ六二%、佛國は一一八%であるが之は領土の膨脹を考へれば決して眞實の增加だとは云へない。但しひどいのはロシアで之は寧ろ孤立國とさへ云つた方が妥當な位である。(其輸出は僅に戰前の二〇%である。)

最後に歐洲貿易の方向に表はれた變化を見るに歐洲諸國相互間の貿易は輸出入共に減退して居る。即ち大戰前は歐洲全輸出中歐洲諸國に向けられたもの七七%なるに一九二四年には七三%に減じ又歐洲の全輸入中歐洲諸國からのものは七一%より六六%に減じて居る。之は勿論歐洲諸國間の連鎖關係が疎隔的になつたことを示すのである。恐らく主としてロシアとの貿易が恢復しない爲であらうが戰後多數の小國が分裂獨立したことを思ひ合せると元來は相互の貿易は增加する筈なのだから愈々以て疎隔の感を强めざるを得ない。殊に英佛獨白及び伊の五大貿易國を抽出して此一群に就て檢討しても略ぼ同じく所謂 Enteuropäisierung の現象が明確に摑めるのである。(數字略)

斯くて私は國際貿易の趨勢に於ては歐洲の位置の失墜然も主要輸出國の減退と歐洲諸國相互の貿易上の疎隔、要するに"Enteuropäisierung"の現象を知るのである。

問題は又玆からも起る。歐洲諸國は相互に孤立した儘主として其海外への輸出を恢復すべく將來の計劃を樹つべきか。そは植民地域の工業化と共に至難とならざるか。果して然らば相互の親善提携に依つて依存協立の途を開拓すべきものではないか。私は此問題に入る前に、もう一度他の視角から歐洲經濟の失墜を考察したい。

## 六　國際投資に於ける歐洲の失墜

國際投資上の位置から云つても歐洲の優越は全く失はれた。此場合にも主として對照となるのはアメリカとの比較に於てゞある。大戰前歐洲の三大投資國たる英佛獨三國の對外投資額は實に三百五十億弗に達すると計算されて居たに對し、アメリカ合衆國は一九一〇年に於て對外投資額僅に二十億弗、對外負債は六十五億弗に上る大債務國であつた。

處が大戰は此狀勢を一變して了つた。歐洲諸國は最近迄決して其對外投資を著しく增加することが出來ず、專ら戰時負債の償還に行き惱んで居るに反し、米國は其負債を大半償還した丈けでなく實に一九二六年に於ける對外投資額は百二十億弗るだらうと云はれて居る。之は此問題の最高權威と云はれるウインクラアの近頃の豫想であるが別にダン (Dunn. American Foreign Investments, 1926) が詳細に計算した處に依ると一九二三年現在の對外投資額八十一億弗、二四年現在では九十一億弗になつて居る。此二四年度の中五十三億弗は直接に產業に投下されたものである。又歐洲への投資は十九億弗であつて其他はカナダへ二十五億弗ラテン・アメリカへ四十億弗アジア及び濠洲へ合せて七億弗と云ふ狀態である。

で、資本的に云ふとカナダは勿論のこと全アメリカ大陸では米國の支配權は略ぼ確立されたと云へるやうだ。ダンの著書は詳細に其投資先を研究して居り甚だ興味ある觀察の材料を供給して居るが、私は玆に夫れを紹介する餘裕はない。が、其著しき一例としてカナダに於ける外國資本の交錯關係の發展を示さう。

其處では大戰前二十四億弗の外國資本が投下されて居り其中英國は十九億弗米國は僅に四億弗であつたのに、一九二三年では全外國資本四十六億弗の中英國資本は依然として十九億弗を出ないのに反し米國資本は實に二十四億弗に上つて居る。殊に興味あるのは同國の主なる重工業には米國資本の支配權が次に

表示するやうに英國を押しのけ更に土著資本をも壓倒し純乎たる經濟植民地の感を懷かせることである。

勿論カナダは特別だが兎も角も大戰後米國資本の膨脹の著大なことは如上の概觀で明白であらう。

一九二〇年に於ける加奈太產業の資本所有割合狀態

| | 土著資本 | 米國 | 英國 |
|---|---|---|---|
| 調査シタル三十三產業總體 | 六五% | 二四% | 一〇% |
| 其中　鐵鋼業 | 五八 | 四一 | 一 |
| 製銅業 | 一三 | 五二 | 三四 |
| 農具製造業 | 五〇 | 三九 | 一〇 |
| 鑄物及機械工物 | 四九 | 四〇 | 一一 |
| 電氣裝置 | 四三 | 四五 | 一〇 |
| 造船業 | 三八 | 三四 | 二五 |
| 自働車製造業 | 三一 | 六九 | — |

（其他　略之）

## 七　歐洲經濟力衰退の主要なる恒久的原因

私は既に歐洲經濟の位置の失墜を概視した。進んで其原因を檢討しやう。

此原因の中で兎も角も一時的と思はれるものは、何よりも大戰其者の影響である。即ち大戰に依る歐洲生產力及び消費力の破壞、米國及び植民地域の產業の擴大等は或程度迄一時的現象と見られ、從つて歐洲の恢復と共に消滅するであらうとも思はれる。然し歐洲の經濟力が復興されても米國及び植民地域の確立された產業力——其自立し開拓された經濟的勢力をば全く奪還することは出來まいから其限りでは此の原因に依る歐洲勢力の相對的失墜は恐らく恒久的のものであらう。例へば米國の國際投資上に於ける優越等にしても其感を免れない。が歐洲諸國にとつて甚だ重大な焦心の種子は何と言つても其海外植民地の經濟的獨立の傾向であらう。現に歐洲諸國は其本國の三十倍に近い海外植民地を保持して居り、其人口とても本國の三倍に餘るのであるが、本國の資本家に依る其搾取が土著資本家の擡頭で妨害されて來たことは、カナダは勿論のこと印度でも、エジプトでも、モロッコでも乃至支那でも明白な事實である。例へば英國の帝國會議の如きが本國資本家の狼狽と焦慮とを最も明白に物語つて居る。

次に歐洲經濟の失墜の自然的恒久的原因として最も痛心すべきものは石炭の經濟的價値の減退——夫れに代るべき石油及び水力資源の貧弱なことである。英、獨、白等大戰前の主要なる歐洲產業國は何れも石炭と鐵との豐富な天惠を其繁榮の土台として居たことは云ふ迄もない。處が大戰後其石炭の發展が停頓せるに反し、石油及び電力の發展が目醒しきことは前に說いた通

りである。蓋し石油は船舶の動力用として、水力電氣は陸上動力用として大戰以來確實に石炭の領域を侵略したのである。即ち大戰前動力船中石炭を使用せるもの八九%であつたのに一九二四年には六六%に減じたし、又電力の蒸氣力に對する使用割合は戰前一〇%だつたのに今日では三三%に達して居る。處で、石油の產額に於てはアメリカが全世界の八七%を占めて居るに對し歐洲は僅に六%に過ぎぬことは前述の通りである。水力を見ると全世界の分布と使用量（一九二〇年度）は次表の通りであつて玆にも歐洲の劣勢を見出すのである。

| 大陸別 | 水力存在量 | 使用量 |
|---|---|---|
| 歐洲 | 四五 | 九 |
| アジア | 七一 | 一 |
| アメリカ | 一一六 | 一三 |
| アフリカ | 一九〇 | — |
| 濠洲 | 一七 | — |
| 合計 | 四三九 | 二三 |

（註）單位百萬ＰＳ

斯くて水力と石油との領域では歐洲の位置は石炭と鐵との如く優越なものではないから前者が膨脹するにつれて歐洲の生產的位置は失墜するのを免れない。勿論今日此轉換の意味を餘り誇大して考へてはならないが、最近英國炭坑業の行詰りに依つても明示されたやうに石油と水力との侵略は既に濃厚な歐洲產業國の前途に與へて居るのである。

更に歐洲戰後の衰勢に少からぬ原因をなしたのは平和條約其者が齎した人爲的政治的變動である。即ち主として「佛蘭西の大陸政策上の步哨」として捻出されたと云ふユーゴースラヴイア、チエコス・ロヴアキア、ルーマニア、ポーランド、オストリア、ホンガリア等々中歐及び東歐の諸小國の分裂狀態が之である。大戰前歐洲には二十六個の關稅壁があつたのに今日では三十八個に上つて居り、又大戰前十三個の貨幣制度があつたのに今日では二十七個に上つて居る。それに伴つて國際交通網にも統一がなく、最も惡いことには夫等の國々が相互に不自然な經濟的障壁に依つて小さな孤立を保たうとする保護關稅の流行がある。是等の政治的境域は勿論經濟的考慮を無視して作られたものであるから謂はゞ經濟的不具者を多數に捻出して相互に消積な摑み合ひをやらせて居るやうなものである。そして此政策の張本と目される佛蘭西自らも亦經濟的不具に悩まねばならない有樣なのである。

歐洲諸國の分裂狀態はアメリカ大陸の統一と興味ある對象をなして居り、玆にも歐洲の相對的弱味を覩ふことが出來る。かくの如く歐洲は單に國家的に分裂して居るゞけでなく其國家の

中には比較的に政治勢力の强いものが割據し、反目して居るに反し、アメリカ大陸では獨立國家が少い丈けでなく夫れが經濟的には略ぼ合衆國の統一的支配に服して居る。(所謂モンロー主義又は汎米主義の支配)此の狀勢は歐洲の分裂と較べて見ると其經濟力の伸張に遙に有利であるに違ない。

最後に、然し、甚だ憂慮すべき打擊を歐洲の國際資本に與へて居るのはロシアを中心とする所謂赤化運動の發展である。歐洲大戰後の經濟的混亂と生產力の減退は其革命運動に基く所少からぬのは否むことが出來ぬ。そして今日各國の資本家的產業組織が行詰つて居るのは大戰後に著しく社會主義化した勞働爭議に禍されて居ることも明白な事實である。私は茲にはたゞ歐洲勞働の國際的團結の發展とそが歐洲國際資本に及ぼす影響の他の大陸よりは遙に深刻なるべきことを注意するに止める。

斯くて歐洲經濟の失墜は其一時的偶發的原因を除くと次の四個の事實に基くことが分る。

(イ)海外諸國の經濟的發展——及び其保護政策により市場奪還の困難

(ロ)石炭の經濟的價値の失墜——其代位者たる石油及び水力資源の歐洲に於ける缺乏

(ハ)平和條約に基く政治的分裂——經濟力の利用に及ぼす反目的政策の障碍

(ニ)ロシアを中心とする革命運動——歐洲勞働の國際化の發展

そして是等の原因は人爲的と自然的との差別こそあるが今の儘では何れも恒久的性質のものであり、且つ年を追ふて歐洲の經濟的失墜を深めるだらうと思はれるものである。

## 八　經濟力の變遷が齎らせる戰後の同盟運動の意義

私は既に歐洲經濟の失墜と其主因とを概觀した。進んで斯る環境が恐らく促進するだらうと想はれる、其の資本家的復興策としての結合運動を考察しやう。

若し歐洲を一體(例へば一聯邦)として其復興策を講ずると云ふならば問題はない。各邦内の資本家が其孤立的態度を棄てて協働するに若かぬことは論を俟たぬだらうし、夫れを促進するやうな(例へば各聯邦間の反目的障碍を除去するやうな)統一的融合政策が必ず採用されるに違ない。然し、問題は歐洲が現實に多數の政治的國家に分裂されて居り、其各國の獨立的發展が第一義なのであつて、其上に位する全歐洲の存亡如何は要するに第二義的關心を持ち得るに止まることから起る。だから

單に全歐洲の利害を標準としただけでは未だ何等の現實的政策は樹立され得ないのである。現に各國の保護政策の流行でも分るやうに、歐洲諸國は相互に相手國の犧牲に於て自國の利益丈け促進させることを主眼とするだらうからである。では、斯る保護主義の流れに沿うてどうして關稅同盟の如き自由主義が樹立され得るだらうか。

私は今此關稅同盟運動の歷史を敘べて居る暇はないが、第十九世紀末以來此種の運動は或は全英帝國統合運動として、或は汎米關稅同盟運動として、或は汎スラブ運動として、かなり屢屢討議されたものである。中歐關稅同盟論丈けでも曾てグルンツエル及びフイリツポヴイツチ等の獨墺同盟論があり、又シュヴエリン―ロエヴイツ伯等の中歐農業同盟論もあり、近くはヒルデブランドやナウマンが工業同盟論をさへ主張したことがある。が是等の大戰前の諸運動殊に中歐同盟論は何れも其實行上の技術的困難は兎も角として何よりも先づ政治的障碍に依つて其發展を妨げられて了つたのである。蓋し當時は中歐の諸產業國には海外にも發展の餘地があり、米國の脅威も左程差迫つたものではなく、又中歐自體も今日と較べれば割合に統一されて居り、且其生產力も順調に發展を續けて居たから、自國の權威を屈して妥協する必要はなく、反對に征服政策の可能性と蠱惑とが强かつたらしい。處が、今日では前述の如く中歐の事情は甚だ趣を異にして居る。其世界經濟上の位置は甚だしく失墜し、海外の市場は獨立して之を奪還することは難く、歐洲生產力の根源たる石炭の價値は下落し、剩へ政治的分裂と關聯の孤立主義とは經濟力の合理的利用を妨げて居り、胎內には猛烈なる勞働者の反逆運動が擡頭して來た。それに總ゆる事情から、征服戰爭を考へることは全く不可能である。斯る狀勢の激變が決して一時的偶發的事態でないとすると從來の狹隘な自立主義は最早や行はれ難いのみならず、私が本文の劈頭に述べ置いた通り、それでは所謂歐洲諸國は共倒れの憂目を覺悟せねばなるまい。此窮狀から脫れ出るには一國丈けの努力では困難である。少なくとも此分裂を廢めて、融和協調を計り、資源の交換を自由にして合理的經營の基礎を樹立せねばならない。大戰後中歐經濟同盟論や大英帝國會議等が熱心に攻究され、大に實際的進捗を見つゝあるのは恐らく矢張りかうした經濟力の變遷に直面した爲であらう。

## 九　同盟運動の政治的障碍と其緩和策たる國際カルテル運動

が、戰後の歐洲に現れた二つの同盟運動――夫れは大英帝國

運動と中歐同盟運動――の中、自分の植民地と特惠關税に依つて密接な連絡を保持しやうとする英國の運動は姑く措いて、從來敵對し合つた獨立國の關税壁が、どんな理由があるにせよ、果してさう手輕に、無條件で撤廢出來るであらうか。例へば大戰後喧ましくなつた所謂キイ、インダストリイス――それもやつと骨折つて築上げた許りの此重要産業を一朝にして外國（例へば獨逸と佛蘭西との仲のやうな仇敵國）の競爭に曝して顧みないと云ふことがどうして望み得やうか。

將來の戰爭を全然豫期しない者は或は此問題の解決を樂觀しやうが、さうでない限り、此運動はそう安々と解決されるものではあるまい。が然し窮乏せる者は自ら途を見出すものだ。私の見る處では國際カルテル運動こそは實に此問題の行き詰りに活路を與へるものである。けだし、國際カルテルによつて國家的團體の存立が保障されて居れば、それは關税よりも反つて有効な産業保護となるのであるから、安んじて關税壁を取除いてもいゝ譯である。即ち一方では自國の産業を支持し乍ら、他方では國際資源なり、市場なりへの自由なる接近が許され、國際的經濟の利益が收められるのである。だから現に經濟同盟論者も國際カルテル等の私的結合の發達を以て其運動の絶好の先驅と看做して居る次第である。

×　×　×

そこで私の叙述も再び國際カルテル運動に立ち歸るのであるが、私は説明を具體化させ、又其説明を最近歐洲結合運動の中心に導く爲に、以下姑く獨佛鐵鋼業結合を主題としやう。

## 一〇　獨佛重工業結合運動の史的展開

世界大戰の結果は決して列強間に蟠つた重工業の對立狀態を除却して此問題を解決することは出來なかつた。成程英佛兩國は獨逸の生産力を崩壞させることは出來、佛蘭西はエルザスロートリンゲンを恢復して其豐富な鐵鑛石を得たが、ルールの石炭とミネットの鐵鑛石とが分離されて居る限り難問は政治的にも經濟的にも依然として未解決の儘である。否自然的技術的見地から云へば歐洲重工業は一層不具になつた許りである。蓋し大戰前獨逸は四千二百億噸の石炭と十三億噸の鐵鑛石を持つて居たに對し、佛蘭西は百八十億噸の石炭と十一億噸の鐵鑛石を持つて居り、其豐富な鐵鑛石も石炭の貧弱な爲に寧ろ持て餘しの有樣であつた。處が平和條約によつて獨逸は鐵鑛石を失つたが佛國はたゞさへ持て餘した鑛石を更に倍加したに過ぎなかつた。石炭と鐵鑛石との結合から見れば事態は惡化されただけである。夫れで獨逸にとつては鑛石の缺乏佛蘭西にとつては

石炭の缺乏は一層痛切な苦痛となつた譯である。獨佛兩國重工業者の接近と結合とが熱心に主張されるに到つたのは何よりも此不几状態を脱却せんが爲である。

此事情に即して云へば、大戰前から獨佛重工業者の結合運動は無論行はれて居た。そして此結合は結局妥協的提携によるか、征服的壓倒によるかの二途の外ないのであるが、當時は政治的にも經濟的にも著しく優勢だつた獨逸の重工業者は妥協よりも寧ろ征服の途を選んだのは自然である。處が平和條約によつて此形勢は全く一變し獨逸は反つて受身の位置に立たねばならなくなつたのだが、夫れは佛國の優勢と云ふよりは寧ろ兩國の實力の均衡と云ふ方が適當であらう。此勢力關係の形勢から見ても妥協的提携の動向は著しくなつたと考へられる。斯くて自然的技術的要求によつて押進められた戰後の結合運動が征服の途をとらずして妥協的交渉の途を選んだのに不思議はない。

實際、戰後の賠償問題とルール占領問題の背後には絶えず圓滑なる兩國重工業者の提携運動が活躍して居たのを觀過することは出來ない。此歐洲經濟界の大問題の絲を操る者は兩國重工業者であつて、彼等の所謂の目的は各の結合を自家の有利に取結ばうとするに他ならなかつた。佛蘭西側から云へば賠償請求を種にとつてルール地方の軍事占領に迄漕付けたのはシユナイダア、ド・ウエンデル等の代表するコミテ・デ・フォーチの重工業者であるが其野心の底は石炭の支配、延いてはルール地方との資本家的結合に於ける支配權を確保することにあつた。だから此軍事的行動は獨逸との徹底的調停を目的とするよりは其重工業との提携交渉の一種の掛け引に過ぎないと考へられて居る。現に此ルール占領の前後に於て獨佛重工業者は熱心に秘密交渉を行つて屢々會合を續けたと云はれて居る。

さて、又獨逸から云へば佛蘭西軍のルール占領に對して表面は消極的抵抗政策を主張したスチンネス一派の眞意も亦決して佛蘭西側との徹底的鬪爭が目的ではなかつたらしい。フインメンに云はせるとスチンネスの腹ではルール地方の頑強な勞働者と重工業の自由活動に重荷干渉を行ふ政府の實力とを打碎くためにこそ、反て喜んで佛蘭西軍隊の侵入を迎へたのだと迄云つて居る。兎も角も、スチンネス派重工業者の政策が一方では政府干渉を排斥し乍ら、他方では佛國重工業との強固な結合によつて復興を講じやうとするにあることは疑ひのない事實であつたらしい。

處が賠償問題を利用して獨佛重工業の結合を解決せんとする此運動は主として獨逸の加工業に中心を置く他の對峙的勢力たるA・E・G及ボタルツプ、オツト・ヲオルフ等の親英政策によつ

て妨碍され、其爲に賠償問題は一轉して英米資本の指導の下に展開されることになつたのである。此展開は中歐同盟に對する英國重工業の焦慮に即して考へる興味ある國際資本の他の一動向を暗示するものだが、私は今は其問題には深入りしない。

かうして獨佛重工業の原料交換に基く結合は一頓挫を來したが、最近の歐洲鐵鋼業の行詰りにより、激化した鏖殺的競爭の重壓は先づ兎も角も國際カルテルの締結に依る販賣上の結合を出現せしむるに到つたのである。

私の知る限りでは最近に成立し去る十月一日から活動し始めたと云はれる中歐鐵鋼業同盟は獨、佛、白、ルキセンブルグ四國の製鋼量を制限し、協定率によつて夫々割當てを行ふものに止まつて居り、決して如上の獨佛結合運動の如く原料資源の交換とか利害協約の實行とかを意味せず、從て、其作用から云つても組織から見ても尙ほ極めて低級なものであるやうだが、それは中歐重工業者間の結合的發展への注目すべき一進出であり、從つて之に基いて更に高級な結合を實現すべき足場となるやうに思はれる。

歐洲鐵鋼業に此種の結合が出現する時は既に一九二四年の秋にもあつた程だから。其頃もう交渉はかなり進行して居たものらしいが、まだ鎭靜しきらぬ歐洲戰後の經濟的動搖が今日迄其實現を遲延させて居たらしい。

で此聯合の出現を理解するにはとりわけ一つには激烈な競爭狀態の繼續と二つには最近に到つて愈々最高の段階迄進展したと思はれる各國重工業の國家的結合の完成を知らねばならない。

私は玆でそれを詳述する暇はないから、極く概括的な說明をすると、大戰前に較べて歐洲產業國の製鐵能力は今日では概して著しく增大して居るにも拘らず其生產量は反つて減退して居る。例へば英國の能力は五〇%、獨逸は四〇%、（現在の領域丈けの比較）佛國は二五%、白國は三〇%增加したにも拘らず西歐諸國の製鐵量は銑鐵に於て三千七百萬噸から三千百萬噸へ（一九二五年）鋼鐵に於て三千三百萬噸から三千二百萬噸へと低減して居る。（一九二四年は一層低い。）國別に云ふと佛國はフランの下落の爲に割合に有利な位置にあるが英、獨、白等は何れもひどく行悩んで居る。處が國際的の協定がないから價格の下落は又ひどいもので、比較的に割高と云はれて居る英國でさへ鐵鋼品の指數は戰前の一八%增し（一般物價指數は五三%增しである）に迄落込んで居る。一方では著しき生產制限（獨逸製鋼組合では一九二五年末には參加率の六五%に迄生產を制限して居る）從つて原價昂騰があり、他方では著しき價格崩落があ

ることは之で分るだらう。各國の企業集中運動が最近に於て再び猛烈に進行したのは實に此苦境を能率の增進によつて幾分でも輕減せんとするものと思はれる。私は例へば企業組織の合理化を垂直的方向に振興して完成された獨逸鋼鐵合同（一九二六年一月に成立せるVereinigte Stahlwerke A.G.）を其恰好の一例として指摘することが出來る。

かくて、殘る處はたゞ國際的妥協だけであつた。そして私は一九二六年の初頭エコノミスト誌に於て中歐軌條聯合の成立を知り、又八月の同誌に於ては中歐鐵管聯合の成立が傳へられ、そして十月初頭には遂に鋼鐵に關する基本的聯合の成立を聞くに到つたのである。

前にも述べた通り鐵鋼聯合の成立はもつと一般的な經濟同盟運動の一先驅と見られて居る。もし、此聯合が成功すれば遲らす石炭聯合も出現し、化學工業や電氣工業の同盟もやがて相次で出現するであらうと云はれて居る。すべて必要は發明の母である。經濟力の行き詰りは反て其組織を合理化させ、資本家の立場の行き詰りは其協働意識を强め、愈々其提携を高級化するであらう。

## 二　歐洲國際資本の熱烈なる主張となれる同盟運動

さて、私は鐵鋼聯合から再び一般的中歐經濟同盟に轉筆するに當つて、既に一九一四年に獨逸の經濟學者ナウマンが「中歐論」（Mitteuropa）を著して讀者の注意を惹いたことを思ひ起した。彼は勿論獨逸の勝利を前提として立論して居るのであつたが、其所說の主眼はかく考察し來れば寧ろ今日に於てこそ愈々適切であるやうである。彼によれば既に單一國家の孤立する時代は過ぎて居り、將來は諸國民群の對立によつて展開されるであらう。それは大英帝國、ロシヤ、アメリカ、そして恐らく日本を中心とする極東の四群であるが、中歐諸國は依然の通り孤立的國境內に固着して分裂して居るか或は超國家的シンヂケートを形成して第五群となるべきであらうかと云ふのである。當時の獨逸が此中歐群の盟主として全世界に活步しやうとした計畫は昔日の夢となつたが、彼の指摘するやうに今日の經濟力は從來の狹隘な國境內には最早押し込め切れなくなつて居るのである。今日の大工業と其超國家的組織とは政治をも支配して、吾々は國家を單位とするよりは謂はゞ大陸を單位とする方に向つて動いて居る。此事は前に述べたやうに今日の歐洲

に於て特に共感が深いやうだ。

かくて幾多の障礙があるのは勿論だが、孤立的な保護政策に對しては次第に有力な反對運動が起つて來た。例へば全獨工業家組合が一九二五年末に發行した「獨逸經濟及び財政政策」と云ふ宣言的パンフレットには「此高率な關稅政策こそ結局は歐洲一般の物價平準を不自然な又不經濟な高さ迄釣上げ、其製品が世界市場で米國品と競爭出來なくするものである」と喝破して居る。歐洲同盟は此高い關稅を廢止することによつて物價を低くし、購買力を增し、販路を擴めやうとするものであるのは勿論だ。そして其同じパンフレットは更に云ふ。「商業政策や關稅は世界市場の必要な規律を實現することは出來ない。處が輸出市場の無制限な競爭戰があつては生產者は、最早堪へられないし戰爭からの經濟恢復は不可能だらう。國際カルテルこそ此損失を均らし恐慌の暴威を輕減するものである」と。

之と全く同じ趣旨を最近に國際商業會議所の會長たるウォルタア・リーフが或演說で公言して居る。そして、彼は國民的嫉妬が自殺的商業戰を行はしめることを歎じて居る。更に又極く最近には歐米主要工業家及び銀行家が國際商業の自由と國際金融の完備等を主張した所謂經濟復興の共同宣言を發表し、世界の識者の注意を惹いて居ることは讀者の熟知する處であらう。

かくて今日では歐洲經濟危機の病源は一般に認識され、且其治療の一般的方針も亦明確にされた。云ふ迄もなく、それは國際商業の自由な解放と國際的結合の促進とである。

私は最近に於ける歐洲國際資本の顯著なる一動向を略ぼ考察し終へた。

尙此論文で書き殘されて居ることは此運動に對する國際勞働の意向如何と及び英國資本の態度如何との二つの問題である。次節で私は簡短にそれを述べやう。

## 二、歐洲國際勞働も亦之を歡迎す

先づ國際勞働の態度を言へば少くとも其多數は此運動に賛成して居るやうだ。所謂共產系の左翼分子は國際資本の安定と復興とを少しでも援助するやうな此政策に關與しないのは勿論だが、其他の所謂第二及第二半の國際勞働は進んで此運動を助成しやうとさへして居る。夫れは彼等の根本的戰略が先づ資本家組織の安定乃至復興を急務とし、其上で漸次之を社會主義化しやうとするにあることからも自然に推論出來るのであるが、私は其の顯著な具體的實例を二、三說述して置かう。

先づ最近の例を言ふと一九二六年三月にブラッセルで中歐(佛、獨、白等)社會主義者代表が會合した際の決議には「國民間の經濟的相互依存及び相互浸透は國際經濟の一般的計畫の一要素としての歐洲關稅同盟の思想を輿論に親炙せしむべき商業條約の締結上必要であることが立證される」とある。

次にやはり一九二六年初頭に歐洲軌條カルテルが成立した際英國の鐵綱業聯合書記長ピューは「若し此種の協定の發達によつて、從來鏖殺的競爭のために生じた大陸勞働者の時間延長や賃銀引下げが阻止されるならば、此結果は確に有利であると言はねばならぬ。かゝる協定は避け難きものであり、又現代商業發展の方向に沿うて居るものである」と言つて居る。

私は、之と全く同じ理由で國際炭坑夫組合の書記長たるフランク・ホッヂスが一九二五―六年のサミュエル委員會に國際石炭カルテルの組織を獻議さへしたことを前に述べて置いた。

又獨逸に於けるカルテル組成の發達史に沿うて其勞働者が多くは之を援助したことも一言した通りである。

私は以上の數例を以て、國際勞働の意向は明確に摑み得ると思ふ。

## 一三、最も興味ある英國資本の立場と其態度

最後に、然し、最も興味あるは英國資本の態度であらう。先づ考ふべきは近來英本國が其廣大なる植民地との經濟的結合を緊密ならしめんと努めて居ること、(例へば特惠關稅政策や大英帝國會議等)そして、本國の國際貿易中に於ける植民地との取引が確實に其割合を增加して居ること等であつて、何れも植民地との連帶の上に立つ所謂經濟的帝國を鞏固ならしめんとする傾向を指示するものと言はれやう。が、同時に植民地の土着資本家が單純なる本國への原料供給者たるに滿足せず、自己の産業を發達させて、次第に本國の搾取から獨立するに到つたことも著しい事實である。此傾向が自然、本國から離れた、各植民地獨特の經濟政策の要求を生むだことも注目すべき事實である。從て、本國對植民地の經濟的融合政策は本國資本家の意向如何に關はらず、重大なる變色を被らざるを得ないやうである。が、私は今此問題を正面の題目とはしやうとはしない。ただ、此事實が英本國資本家の中歐同盟に對する態度に及ぼす影響を考慮に入れ度いのである。端的に言へば、假に中歐經濟同盟が其外圍に對しては關稅壁を設けることを前提としたならば英本國對植民地の關係はどう處理されるであらうかと言ふことを考へ度いのである。

此關係の考察には尙ほ次のやうな事項を參酌せねばならないだらう。

第一に、かう言ふ意味での中歐の團結は英本國の國際貿易にとつては大敵の出現であるに違ひないこと、

が第二に、かゝる結合が中歐の經濟的復興に寄與し得るとすれば、それは購買力の增加であり之と提携することは英本國の資本には有利であること、現に一九二五年の英國全輸出中歐洲

向きのものは其三二%（再輸出中六六%）を占めて居るから、此考慮は極めて重大なること。

かう考へて來ると、英國の立場はさう容易に推察することを許さないやうである。一方に中歐同盟との對立にはかなりの苦痛があり、夫れとの妥協にはかなりの利益があるが、若し、之に加入するとすれば、恐らく中歐とは其立場を著しく異にする植民地との提携は一層疎隔されるであらうし、又特に自由輸出國としての立場に加へられる拘束は英國人の傳統的に強く嫌惡する處であらう。

私は此多少豫想めく問題から離れて、現に出現した中歐鋼鐵カルテルに對する英國資本の態度を觀察するに止めやう。

第一の材料は去年十月二日のエコノミスト誌に載せられた、ある産業消息通の投書であつて、同じ九日の同誌の社説によれば、それは「英國の産業界に瀰漫せる見解を表はす」ものと考へられて居る。

此投書家は斷然英國の加入を不可として居る。彼によれば、過去の經驗に於ても英國は嘗て外國のカルテルやトラストによつて損害を被つたことはないが、逆に國際カルテルへ加入した場合は――例へば軌條カルテル――其割前は次第に確實に低下して居る。英國人は無拘束の競爭によつて初めて發展し得るものだと確信して居るのである。

之はエコノミストの社説も言ふ通り實に英國人の驚くべき特質的心理である。私は、又此同じ心理の強き表れを過般の炭坑爭議の際にも觀取したのである。それは、サミユエル委員會でフランク・ホツヂエスが英獨を中心とする石炭の國際カルテルを組織するやうに勸告した時、炭坑主側は競爭の拘束は常に社會に有害だと言つて、にべもなく峻拒したことであつた。

其時にもエコノミストの社説は英國産業家の餘りに頑迷な保守的態度を批難したことであつたが、今度も十月九日の社説で右の投書に同じ批判を加へ、此國際組織の教訓に就ては充分慎重に學ぶべきであることを說いて居る。が、此組成の形式が單に生産の制限に止まり、從て、競爭の阻止によつて進歩を鈍らす虞れのあることを指摘し、（十月九日のステチスト誌にも同樣の意見があつた）決して早急な參加を勸めては居ない。其論說で特に注目に價ひすると思はれるのは、現前の問題としては國内の生産者が統整されて居ないから、參加は實際困難であると言ふこと、先づ何によりも全國的協同組織を完成する必要があること、かゝる組織は單に生産量や價格の支配を目的とせずに、生産の能率を高める仕組み即ち最も優秀な工場へ生産を集中するものでなくてはならないこと等を說いた點である。で、此論文には主旨として大陸同盟に參加することの可否そのものは明白にされて居ないが、かゝるカルテルが不合理なるヴェルサイユ條約の「裂け目」を修補するものであり、最近の關稅戰爭の弊害を除却する意義ある企圖であることは充分認識して居る。

保守的なタイムスも十月七日に此問題を論じて居るが、其論

旨はエコノミストと大差がない。即ち、國内の生産者が合理的組織を建設するのは正に其實際であり、其際大陸の經驗によつて學ぶべき點が多いことを敍べては居るが、今日はまだ、此國際カルテルに參加することは實際上不可能だと言つて居る。

ここに言及した其他の專門機關の意見も大體同じやうであつた。要するに理論上には今日英國の態度は不明であり、一方には可なり親密な提携的傾向も窺はれるが、（例へば十月初頭の英獨生鐵企業家の會談の如き）他方には傳統的に孤立の自由を尊重する心理も依然として強い。實際問題としては其國内の統一が實現されない限り——そして、之はまだ、さう容易には實行されないだらうから——參加は不確實であらう。

勿論大陸カルテルは價格を釣上げるに違ひないから、當分は英國消費者にも有利な影響があり、或は其輸出市場を擴張するかも知れない。が、さうなると大陸カルテルも其組織を高級化して、英國を壓倒するに努めるであらうし、恐らく組織的な投資なども行ふであらう。エコノミスト誌は、さうなつた時こそ初めて、眞面目に加盟の可否を考究すべき時であらうとも言つて居る。

參加の可否は別として、此討議それ自身が英國生産者の集中運動には恐らく強い刺戟を與へつゝあることであらう。

單なる傾向として見れる限り、國内の集中が發展すればする程、カルテルとの關係は自然接近して行くことは勿論である。だから、此問題が、エコノミストの指摘するやうな成熟期に達する頃には英國生産者の意見も或は大分變化されて居るのではあるまいか。

では、米國資本の態度はどうか。妥協か鬪爭か。恐らく妥協であらう。ユー・エス・トラストの首領ゲーリイは前々からも、屢々國際協定の運動を試みて居るし、今度も新カルテルとの友誼的態度を宣言して居る。それに中歐諸國へ投下された米國資本の著しき膨脹と、大戰後の國際資本の融和的傾向等を考へれば、どうも妥協へ進んで行くものと思はざるを得ない。

かくして豫想されるのは、國際資本の新しき提携を土台とした安定の時期であるが、それがいつ迄繼續するか、如何にして破裂するか、こんなことは私は知らない。

（注）此論文は去年の十一月の初めに書き上げたのを、最後の第十三節だけ今年の一月に加筆したものである。それ故、例へば十月下旬に歐米十六國の資本家の發表した有名な自由貿易歎願共同宣言書等も引用することが出來なかつた。（エコノミスト、十月二十二日號參照）

又此國際聯合運動の反面としては歐洲に於ける所謂産業合理化運動を考察しなければならないのだが、夫れは別の機會に譲る。殊に、一九二六年に於ける獨逸工業のトラスト運動——即ちカルテル→コンツエルン→トラストと言ふ順序に於ける組織の高級化が行き詰つた經濟の復興に如何に寄與したか、そして、夫れが勞働者にどんな影響を與へつゝあるか、之れこそ此問題と同時に考察されねばならない現象であることを指摘して置く。——（一九二七・一・一三）——

# 作州山中百姓一揆

黒正巌

## はしがき

### —百姓一揆の研究に就て—

被支配階級が時の支配階級に對して反抗運動をなす事は、社會に支配關係が存在し、階級が相對立して居る限りに於て、當然に生起すべき社會現象である。即ちかゝる鬪爭的反抗運動といへる社會現象は、何等かの支配關係の存在を前提とするものである。而てこの支配關係はその時、その所を異にするに從ひ種々の形態を以つて現はれて來る。例へば我國の歴史を顧みるに、莊園經濟の下に於ては浪人問題として現はれ、封建制度の下に於ては土一揆、百姓一揆として現はれ、更に現代の如き資本主義社會の下に於ては、同盟罷業となり、小作爭議となつて現はれる。又之を他の觀點より見れば、宗教的支配關係、政治的支配關係、經濟的支配關係によつて、それ〴〵特異の現象形態をとるものである。かくの如く反抗運動は一の現象形態としては種々の樣相をもつものであるが、併しその根柢を流れて居る本質的なものは、即ち何等かの意味に於ける支配關係でなければならぬ。

百姓一揆が封建制度の必然的所産である事を明かにするには先づ封建制度そのものゝ本質の研究を試みねばならぬのであるが、茲ではその問題を別としておく。百姓一揆は必しも我國の封建制度の下に於てのみ發生した社會現象ではなく、歐洲の諸國に於ても屢々起つたのである。併し歐洲の封建制度と我國の夫れとを類型的に見れば、一のフォイダリスムスといふ事が出來るが、然かも種々の點に於て著しい差異を有すると同じく、彼等の百姓一揆又は農民戰爭も夫々特異性を有する。我國の百姓一揆が歐洲の百姓一揆に比して特に顯著なる特性を現はして居るのはその頻發反復性である。歐洲には極めて大規模な農民戰爭があつたが、我國に於ては百姓一揆が長きに亘つて斷續的に反復して、比較的に小規模なものが、所々方々に起つた事には

も注目すべき點である。然る所、かくの如く我國の百姓一揆が反覆性を有せし事は、我國の封建制度の推移、從て又當時の社會經濟の發轉を究明する上に、甚だ好都合なる根據を與ふるものである。成る程、德川時代の社會經濟の本質の發展は、之を交通、貨幣經濟、商業、財政その他種々の觀點から統一的に考察する事が出來よう。又ある人々達の考ふる樣に、「社會の生産力の發展」といへる好都合な統一物によつて說明する事も出來よう。併し交通、貨幣經濟、商業、財政などはある土臺の上に立つてゐる上部構造に過ぎない。又生産力の發展といふ最後の遁辭は史觀上の概念であつて、歷史學の硏究によつて初めて「生産力の發展」なるものが具體的に說明し得らるゝにすぎないのである。歷史學には假說はない。「生産力の發展」といへる證明せられざる空な定理で歷史學を硏究する事は出來ない。とは云へ固より私は「社會の生産力」といふ事を無視するものではない。只我々は「生産力の發展」そのものが何人によつて、何處に行はれ、而て如何にあつたかを先づ硏究してかゝらねばならぬ。而てこの生産力の發展は何人によつて支持せられて居たかが最も重要な問題である。言ふ迄もなく德川時代に於て社會の生産力發展の如何は一に農民階級の双肩に在つた。德川の封建制度は農民階級の生産力と共に消長推移して行つたのであるが、その生産力の消長がエクスプリチツトに現はれて居る所を
さぬ限り、只單に農民階級を中心とする生産力といへる抽
なるものによつて歷史を片づけて行く事は出來ない。我々史學の硏究に與はるものは、本質と現象とを表裏の關係に於て認識しなければならぬのである。この意味に於て、德川時代二百六十年間に反覆して頻發せし百姓一揆を硏究する事は、德川の封建制度の發轉を統一的に且つ本質的に觀察する上に最も重要な事である。

右の如き立場からして、私は久しく百姓一揆の硏究に沒頭してゐる。之に就ては種々の困難があつて、今後尙ほ多くの年月と勞力と費用とを必要とする。今迄の所ではまだ〳〵材料蒐集に忙はしく、從て百姓一揆そのものを一つかみにして、統一的に解釋しうる丈けの事情に到達してはゐないが、併し私の努力によつて蒐集し得たる資料のみにつきても、大體のアウトラインを把むことが出來る程度になつて居る。それで私の考へでは、日本全國に亘つて一々百姓一揆の事例を蒐集し、之を時間的及び地理的分布に於て觀察する事が、先づ最初に試みらるべき事と思ふ。之によつて時間的幷に地理的に百姓一揆發生の密度を知る事が出來、從て何れの時代に於て、又何れの地方に於て、生産力の擔當者たる農民が如何に動いたかを的確に統一して理解す

る事が出來る。或は百姓一揆の類類である。徳川時代には農民が團體的に騒擾をなした場合が淨山にあつて、從來所謂百姓一揆の名を以て示されてゐる所の政治的身分的支配關係に基く百姓の徒黨による反抗運動計りではない。元來徒黨とは「何事によらず宜しからざる事百姓大勢申合せ候」事である。即ちある目的の爲めに――それは支配者たる武士階級より見て宜しからざる目的の爲めに、團結する事が徒黨である。この團結に於て決議されたる民衆の意思は遂に何等發現せらるゝ事なくして終る場合もあるが、大抵は何等かの形に於て實行に這入つて來る。而て所謂「宜しからざる事」は必ずしも武士階級に對する直接の反抗運動のみとは限られない。彼等が徒黨し騒擾する事は當時の社會秩序を亂り、安寧を妨ぐるものであるから「宜しからざる事」であつたに違ない。然らば武士階級に對する直接の反抗運動以外のものは如何なるものかといふに色々ある。例へば或る村の百姓と他の村の百姓とが團結して水利や入相權に關して爭論し、果ては互に暴力に訴へるといふ風になれば固より社會の安寧秩序を妨害するものとして武士階級の糺彈せし所である。又村の商人や町の商人共が暴利を貪るなどの爲めに百姓の利益が損傷せらるゝ場合に、百姓が團結して町人共を膺懲した事も屢々あつた、之は町人が米價騰貴の際などに米屋や富家を襲撃した所謂打毀ちと似て非なるものである。併し之等は當時の被支配階級たる農民相互の間の爭鬪なるか、又は百姓と町人との爭鬪であつて、その間には經濟的にも政治的にも何等支配關係を有しない、只對等者間の利害不一致に基く爭鬪である。然るに當時に於ても經濟的に貧富の懸隔を生じ、有産者と無産者の社會的分化の過程が行はれてゐた。固より封建社會に於ても經濟的支配關係と政治的支配關係とが表裏して存在してゐたのではあるが、當時に在りては政治的支配關係が主であつて、この支配關係に基き經濟的支配關係が派生したのである。今日の社會とは正に反對の事情にあつた。從て直接に政治上の支配力を有せざるものは、充分に經濟的支配力を獲得する事は出來ず、事實上富の力を有するものも、常に政治的支配の下に立たねばならなかつた。富の力は潛在力として抑へられてゐたのである。併しこの富の力の反撥力をどこ迄も政治的支配力によつて抑壓する事は出來ず、徐々に然かも頑強に富の支配力が擡頭しつゝあつた。即ち政治的關係とは無關係に、富の力それ自身がある支配力を振ふようになつた。玆に經濟的支配關係が生じたわけである。此經濟的支配關係は又必然的に、階級的對立を現はし、爭鬪を生ぜしめた。併し同一村落内に於ける農民間には假令有産農民と無産農民との分化が行はれてゐたにしても、こ

の二つの階級が相對立して抗爭するが如き事は極めて稀れであつた。只武士階級に對する暴動の際にかゝる有産農民を襲撃した場合が多く、純粹に同一村内の富農征伐の爲めに一揆の起つた場合は極めて少い。最初から富農又は地主に對して一揆の起るのは不在地主の場合であつて、之は請負新田地に於ける地主に對して多く起つた事に徴しても明かである。何れにするも全體的に見て此種の徒黨は少い。又武士階級が以て「宜しからざる事」となす徒黨は、主として直接に武士階級に對する反抗的徒黨を意味してゐるといつてよい。此種の反抗的徒黨こそ封建制度特有のものであつて、他のものは同一意味に於て且つ同一の形態に於て、如何なる社會にも起りうる可能を有するものである。

第三には一揆發生の原因及び一揆の主張を研究する事である。一揆發生の原因は時と所とによつて異つて居る。大量的に見れば、現に負擔せる經濟的社會的苦痛の輕減又は將に加へられんとする苦痛の排除が最大多數を占めてゐるが、之れとても時代の推移と共に變化し、又之を地理的分布につきて見るも、夫々地方色を有してゐる。更に一揆に現れたる主義主張も變化してゐる。之等の問題も封建社會の消長を考ふる上に極めて必要なとである。次に一揆の形態も亦時間的地理的に種々の樣相を以つて現はれて來る。例へばある時代に於ては消極的方法によつて逃散を行ひ、ある時代に於ては積極的に堂々と武士の如爭し、自己の利益を自己の力によつて確保せんとする。之は地理的にもそれ〳〵差異がある。此外武士側より見ても、百姓一揆に對する鎭壓方法が時代と共に變化して居るが、之等も當時の社會の推移と連關して說明することが出來る。尙ほ百姓一揆の特質につきては種々の方面から類型的觀察を下す事が出來ると思ふが、之れには出來る丈け多くの資料を集め、之によつて大量觀察を下すの外はない。即ち百姓一揆を地理的時間的に大量觀察をなす事によつて、當時の生產力の擔當者たる農民階級が如何に變轉せしか、之が當時の文化の變動に對して如何なる意味を有するかゞ明かにされた時に、初めて我々は統一的に德川時代の本體を把捉する事が出來ると思ふ。私は百姓一揆の研究に對し先に述べたるが如き意味を認め、而て數頁を費して說明せし研究の方針と態度とを以て、百姓一揆の研究に從事してゐる。併し歷史が普遍性と特殊性との結合關係に基く個性的存在を研究する學問たる限りに於て、その個性を無視する程度に大量觀察をなし、普遍化を行ふ事は出來ない。大量は常に個性に立脚してゐなければならぬ。故に先づ個性の記述を行ふて然る後に大量觀察が歷史學的意義を有ちうるのである。この意味に於て最も特徴ある百姓一揆につきては、ある人々をして餘りにくど〳〵し

いと思はしむる迄に、詳細なる記述をも敢えて私は辭しない。

私が本文に於て紹介せんとする享保十一年作州の西部山中地方に於て勃發せし百姓一揆は、徳川時代封建制度の爛熟期に於ける典型的なる百姓一揆の一つである。典型的なる丈け別に稀有の諸相を備へてはゐないが、徳川時代の百姓一揆を理解する上に、最も必要な事であり、又興味の存する事である。

## 一 一揆國としての作州

作州は四面山を以て圍まれ、極めて交通の不便な小國にして、最近漸く一部に鐵道の敷設せらるゝに及び、他地方との接觸が容易となり開發せらるゝに至つた有樣である。それが徳川時代に於ては如何に孤立の狀態にあつたかは想像に難くない。殊に作州は小藩に分裂し且つ到る所に幕領が介在し、一層國内の統一が不完全であつた。孤立と不統一の存する所には經濟の發達、文化の進展を見る事が出來ない。加ふるに山地徒らに多くして、當時の經濟社會に於て最も有力なる生産手段であり勞働手段たる耕地は著しく欠乏を告げて居た。武士階級はあらゆる方策を講じて耕地の擴張を計つたが、狹小なる山國の事とて之は殆ど不可能であつた。幕政初期に於て、平地に散在せる村落を山附けに移轉せしめたるが如き、如何に耕地擴張に汲々たりしかを推察するに足る。生産手段たる耕地が不足する以上、農民は折角の勞働力を最大限に發揮する事は出來ない。又作州が寒冷な國なるが故に、一年の間に農民の勞働しうる時日は極めて少い、さりとて之等の勞働を工業化するには當時の經濟社會は餘り幼稚であり狹少であつた。從て人口は必然的に制限せられ、その人口の性的組み合せの如きは、徳川時代一般の傾向ではあつたが、その不健全なる狀態は殊に顯著に現はれ、一村の人口中、男子二人に對して女子一人といふが如き割合のもの甚だ多きに徴し、作州の農民生活の窮迫せし有樣を窺ふ事が出來よう。

百姓一揆發生の基地として最も重要なる意義を有するものは、其地方の傳統的精神である。此傳統的精神は唯物論者の云ふが如く經濟的事情によつて生成せられたものではない、經濟的事情はその傳統的精神發現の一條件にすぎない。故に同じ樣な經濟的事情の下に於ても、其地方の傳統によつて必しも百姓一揆が起つて來るとは限らない。然るに作州に於ては右の如き百姓一揆發生の條件として、經濟生活の困難の存する上に、その地方の百姓が單なる土百姓でない。備前や備中の南部の百姓は皆諸方から來た純粹な移民者であるが、作州の百姓は大昔からの土着の百姓であり、又新參の者と雖も由緒ある落人の末裔が多い。作州の百姓に名門舊族の多いのは世間周知の事實で

る。かゝる百姓が新分限の武士の專制に反抗し、擁護するのは必然の事である。この事は必しも作州に限つた事ではなく、他の地方でも百姓一揆の頻發せる地方を見ると大抵かくの如き素地を有して居る。傳統的精神が百姓一揆の發生と如何に密接の關係あるかは、百姓一揆の頭目の出る村が何時でも同一である事を常とするに徴しても明かである。

今一つ百姓一揆發生の素因として注目すべきものは領主の更替である。領主の交替は色々の意味で百姓一揆の發生の動機となる。從來からの領主と離別する事を哀惜して一揆を起す場合もあれば、國替混亂の機に乘じて一揆を起す事もある。又領主更替後、新領主との意思の疏通を欠ぎ、親愛畏敬の念が薄らいだために騷動を起す場合もある。作州では屢々領主が更替してゐる上に、享保十一年には時の領主が嗣子なくして減封された。山中一揆は此時に起つたのである。記録によれば、山中地方は僻遠の地にして減封の際には幕領となり。從て掠從騷動をなすも、一旦幕領となつてしまへば、前の領内に於ける騷動は問題にならないと考へて一揆を起したのだとも傳へられて居る。何れにするも作州は百姓一揆發生の素地を充分に包藏して居たのである。されば何故に作州が有數の百姓一揆國であり、然かも其一揆たるや常に猛然なる者であつた事を理解する事が出來よう。

## 二　山中一揆の發端

山中地方は作州の内でも西部山間に位し經濟的には最もみぢめな所であつて、平年でも窮迫の下に百姓共は生活してゐたのである。然るに享保十一年前數年間は凶作の年とこたなく、百姓は何等か積極的なる方法によらざる限り、生きかへる事の出來ない事情に在つた。固よりかくの如き百姓の窮状は幾分失政に基因するものもあらう、併し多くの人々が考ふる様に、一個人の代官の非違貪欲のみに歸する事は出來ない。代官の誅求があつたにしても、それは當時の社會組成の反映であり、代辯者であつたにすぎない。從來山中一揆の事を書いたものを見ると、三木代官を惡人の標本の如く罵つて居るが、之は問題である。一揆が起つた時にも代官そのものに對しては別に暴行を加へず、反抗的態度に出てはゐない事に徴するも、代官の非違がこの百姓一揆の原因ではなかつた事が察せられる。ありふれたる百姓一揆と同じやうに、平素の苦痛と鬱憤とを只の一時でもよいから晴やし度いといふ氣分、政府の混亂に乘じての反抗といつた様な氣配が、この一揆に現はれてゐる。又封建社會の顚覆とか社會改造といつた様な思想的背景があつたとも思はれない。當時、津山十萬石の領主松平淺五郎は漸く十一歳に達し

たので豫ねて官服の願を出してゐたが、幕府は容易に之を許可すべくもなく、且つ病身であつた爲め、萬一領主死亡する事でもあれば當然に減封又は國除せらるべきものであるから、津山藩家中の不安は極度に達してゐた。如何なる事情に出るかは知れぬが、その年に限り勘定奉行久保新平は納税期を繰り上げ然かも秋初上納を倍加し之を十一月二十五日迄に完納せしむる事とした。之れ恐らくは領主官服の事絶望にして減封が已定の事實であつたものと思はれる。果して十月になつて江戸大目付柴崎勘右衛門は早追にて津山に來り、家中物半減を宣し、大小身の侍二十人にお暇を與へ次で物頭遠山利右衛門も亦その祿を失つた。家中爲めに騒ぐ、玆に於て勘定奉行久保新平は、先に定めた租税完納期限を更に十月十五日に繰り上げ、麥蒔等をも一切停止し、男女は專ら晝夜米搗をなすべきを命じた。而て期日の十月十五日迄には八歩四五厘に該る租税を徴收する事が出來た。事情を詳にしない百姓は不平と憤怒とに滿ちた。かくする間に形勢一變して幕府は領主淺五郎の官服願を許可する事となつたので、十一月十日江戸より大目付増井平馬到來し、その旨を傳へた。併し官服の儀を行ふには先づ金が必要であつた。町方へ御用金を命じたが充分に金子の調達が出來ず、勘定奉行和田某は大坂迄即日借金に出かけるといふ有樣であつた。然るに十一月十八日に至つて、領主淺五郎は遂に十一月十一日死亡の旨を報ずる飛脚が到來し、藩内益々大混亂となり、種々の流言蜚語が傳へられた。米切手の如きも無效になるとの説が流布せられ、何れも切手を持出して正米二斗八升或は三斗位にて引き換へるといふ有樣であつた。而て當時十才の松平亦三郎は五萬石を食みて津山城主となり、舊領地の多くは所屬が變改せらるる事となつた。豫ねてより經濟的に窮迫せし農民は期せずして團結し、九月以來過重に賦課せられたる租貢を回收し、尚ほ將來の減免及び救助米の要求をなさんと企つるに至つた。

## 三　津山藩内農民の蜂起

右の如き藩内の不滿、不安、混亂とは、長く經濟的苦痛の下に壓せられし農民の蜂起に對し充分の素地を與へたのである。農民は何時蜂起するか分らぬ狀態となつた。藩の當局は萬一に備ふる爲め諸方に張番を派遣して大に警戒に力めた、偶々十一月二十日夜、河内觸大庄屋近藤忠右衛門、中庄屋三郎兵衛は流言蜚語に惑はされ、豫ねて西原の郷藏に托せし自分持の米八十四俵が沒收せらるべしと誤解し、兩人ひそかに藏を開きて之を取出したるも、後その非を悟り、二十一日夜再び郷藏に積み返へした。近在の農民は盜賊が入込みたるものと騒ぎ立ち、米の

運搬者に狼藉の行爲があつた。庄屋の處置は必しも不正のものではないが、豫ねて人罷とせられてゐた西原村加右衛門といへる惡人は私かに歸來して、事を之に構へ騷擾を煽動したのである。然るに右兩人の庄屋は事件の眞相を報告すべく津山出張を命ぜらるゝや、處罰を恐れて何れかへ欠落してしまつた。之れで一と先づ騷ぎは鎭靜した。併し之が山中大一揆の導火線になつたのである。十一月晦日より湯本小童谷三家觸の農民も亦大に騷ぎ立ち、十二月二日に至つて各村より農民が參加し來り、三日には右三觸の百姓總代二十余人は代官詰所たる久世に赴きて四步加免の願を提出した。更に四日夜群集せる農民は益々昂奮し遂に暴動と化した。先づ平素より怨府となれる目木村大庄屋中庄屋を襲撃して家財を破却し、勢に乘じて附近六觸の農民四千人は久世町に押しよせた。そして「津山城下へ、津山城下へ」と、簑笠に鎌熊手を携へたる農民は町中に充滿して示威運動をなした。役人共は周章してなす所を知らなかつた。其時勘定奉行出九太夫は久世に出張中であつたから、願の筋があれば承屈け遣はすべしと鎭撫に力めたが百姓等は喧騷を極めて聞かず、右の九太夫及び積出し役人吉村武助森田橫八等の旅宿を包圍して威嚇した。又久世より大阪への登せ米を積み出す舟十六艘の內三艘を抑留し、米二百十俵を町中に積み上げ、更に兵糧もなくなつたので飢渇を凌ぐ爲めに扶持米を要求した。農民代表者仲間村の內牧分の徳右衛門、小童谷村の內日南の牛六等は次の如き願書を呈出した。

　奉願候事

一　當午の御年貢米、一石口米、一駄藥代米、

一　諸給米

　右當年御年貢米本途八步六厘先達て遂上納候相殘る一步四厘未納御免可被下候事

一　四步加免御免可被下候事

一　大庄屋加判借米返濟御赦免可被下候事

一　大豆納并山働年貢物而諸運上銀御免可被下候事

一　大庄屋中庄屋村庄屋役御取上村々へ狀差相立御辨可申事

一　大庄屋中庄屋村庄屋方へ有之候御下ケ札諸帳面不殘村方百姓へ御渡可被下候事

　右之條々西六觸之總百姓奉願候已上

　午十二月　三家、小童谷、湯本、目木、河內、富觸百姓

右の願は當時の武士としては到底之を承認し得ざるものである、最後の二ヶ條はある意味に於て百姓の自治を要求するものであつて、かくの如き要求が充たさるゝたらば、結局封建制度そのものが崩壞する事となる。併し乍ら之を全然拒否するに於

ては事態が如何になるかも知れないので、山中代官三木甚左衛門、目木河内代官山田文八は取鎭めの爲め久世に來り、願の筋は大體之を認許し、只諸運上大豆納口米糠藁諸給米諸借米は天下一統の故を以て許さなかつた。その代り山中三觸は最も生活困難であるとて救米内貸として藏切手千八百俵分を渡した。固より武士がかくの如くあつさりと百姓の要求を容れたのは權宜の策として行つた詐術であつて、事件落着の後は取消す積りであつたかも知れぬが、とに角之れにて農民も納得し、七八日の頃には農民は久世を引き上げた。

然るに東山中の小中原、阿波、物見方面に天狗状が廻つて來た。之には「西山中の百姓は久世へ罷出づるにつき行動を共にすべき事、若し之に參加せざる村々は燒打すべし」とあつた。又西山中よりも一味のものが這入り込んで勸誘した。東山中の形勢不隱となりしを以て役人等急行せしに何の事もなく、役人は空しく十二日中何れも津山に引き上げた、併し之は計畫の暴露を防がんが爲めに殊更にに靜謐にして居たのである。役人の引き上げた十二日夜、先づ小中原の百姓等は津山近在一の宮六ツ塚迄進出、之に參加するもの綾部、一の宮、野介代、川邊の農民であつた。十三日暮には一同勢揃をなし、六ツ塚の百姓林四反程を伐り開き、竈二十八口を立て兵糧の準備を整へた。併し西山中の如く少しも暴動をしなかつた。その要求も西山中と何等異る所はなかつたので、鎭定の爲め出張せし三木甚左衛門、山田文八、吉川庄太、木村源兵衛、村瀨八兵衛等は願の筋を容れた。庄屋の如きも直ちに罷免したので農民等は十五日朝迄に殘らず退散した。十五、六、七日には津山西在の塚谷、院之庄、二宮地方不隱なりしも大事に及ばずして終末した。二十七日には同じく西在に於て暴動あり、薪森原の庄屋破壞を企てたので、三木代官等四十七人富筋に出張して主謀者六人を捕縛して歸つた。

右の騷動によつて藩の威信は大に傷けられたるのみならず、財政上にも、總四歩加免一萬千四十八俵、一割四歩未納赦免二萬二千俵の損失を蒙つたのである。封祿が半減された上に三萬三千餘俵の損失である。藩政府の苦痛の程も察せられる。殊に古來よりの庄屋を罷免するに至つては、藩政府が如何に事件を重大視してゐたかを察するに難くない。斯の如き當局の讓歩は併し乍ら未だ以て農民の不平を全く除去する事は出來なかつた。農民等は當局の弱腰を見すかして仕舞つた。そして西山中僻遠地の農民は今後當然に天領民となりうるが故に、大にあばれ平素の欝憤を晴すはこの時だと考へ、騷動むし返しの策を樹つるに至つた。

# 四　山中一揆再發の慘劇

農民等は初め要求せる願意が聽き屆けられたに拘はらず、西山中の農民は未だ退散せず、所在に亂暴を續けた。首謀者の考へでは、豫ねて山中三觸に與へられたる千八百俵の藏切手は高分りの節は無效のものとなるに違ないから、即座に現米と引きかへておくの必要ありと稱し、現米を所藏する富裕なる農民の家に押しよせ、暴力を以て現米と引き換へ又は金銀家財を强奪するに至つた。又西原村の加右衛門の如きは先年追放闕所になつてゐたのが、動亂に乘じて歸村し、勝手に山林などを取り返へし橫暴を極め、秩序は全くなくなつてしまつた。之を放任しておけば西山中は亡所となるの虞があつた。有產者は生命財產の危難に襲はれ救濟方を藩に申請したが、何分極月末の事ではあり、又中陰の事とて處置を遲延して居た。併し乍ら事態は益々險惡となつたので、藩當局も大に決心する所あり、正月四日御用席に於て同地方の代官三木甚左衛門、山田文八等呼び出され、鎭撫に關して意見を徵せられた。兩代官は「當局が之れ程に讓步せるに拘はらず、殊には中陰をも顧みず亂暴狼籍をなす以上、も早徹底的に糺彈するの外はない。就ては兩代官に生殺與奪の權を與へらるべく、反抗者は片つ端しから銃砲にて打殺し、又は捕縛と同時に斬罪に處するの外ない」と主張し、年寄當役下村友右衛門は之を諒として「萬端御仕置之筋立被申付共上不屆之儀於有之は搦捕又は打捨に成共其時宜被取斗候」と令し、補佐として山田兵內に同行を命じた。

かくして正月六日朝七つ時、山田兵內、三木山田の兩代官七十人にて津山を發足した。而て同行の足輕は藩の武士には非ずして、實は津山邊に流浪せる牢人にて、臨時に擬作して足輕組を作つたものである、之は大に注目すべき點である。彼等が新庄村附近に至るや湯原、三家、小童谷三觸の百性等新庄の奥山に集合し、猪鎗鐵砲を携へて反抗せんとの氣勢ありと傳へらる。流石に鎭撫に出かけし役人等も恐れをなし、津山に狀勢を報じた。藩は更に援兵を送り炮玉三荷、鐵砲直し等を送る事になつた。併し乍ら流言蜚語頻りに行はれ、それに山中不便の地とて眞相が少しも分らぬ。そこで間諜を發しようとしたが、內通者を見出す事が困難であつた。嘗つて牧の德右衛門が宿泊せし尾谷屋平兵衛を捉へんとせしも已に出奔して姿をかくし、その悴を捕へしも德右衛門の動靜を詳かにせず、已むなく手錠を加へて町年寄に監視せしめた。更に八日各地よりの注進によれば、德右衛門、半六等の率ゐる五百人の百姓が黑田村に屯集して居ると傳へらる。役人は黑田村附近まで進出したが、飛道具

を携へて居るといふので、令を發して一若し飛道具鎗等にて反抗するに於ては、假令全村亡所となるも妻子一切をも死刑に處すべき旨を宣し、同時に徳右衛門に出頭すべきを命じた。百姓等は之を聞きて反抗を中止したけれども徳右衛門が出て來る筈はない。徳右衛門に九日に至つて次の樣な一札を上つた。

差上申一札之事

一、此度三觸の百姓共新庄へ罷出可申所に村々大小之百姓共より書付御取被遊百姓共不殘在所へ罷歸申此以後無法之儀仕間敷候爲其一札差上申候

享保十二年未正月九日、牧村總代、徳右衛門御代官所

百姓等が飛道具などにて反抗するといふのは全く流言にすぎなかつた。徳右衛門が役人に差出した退散一札は嘘言ではあるまい。百姓の團結が次第にゆるみ百姓が積極的に武士と抗爭するの勇氣がなくなつたのに失望せる徳右衛門の僞らざる一札であつたに相違ない。何分にも十一月以來家を外にして抗爭せるのみならず、藩兵の糺彈が峻烈となつて見れば、そろ／＼百姓も恐ろしくなつた。藩兵は益々增遣され。鐵砲も多く運ばれた。併し藩兵は暗中模索の事とて前進する事も出來ず、專ら偵察に力を盡した。偶々徳右衛門の一味たる新庄村新兵衛なるものを捕へたので、彼をして徳右衛門の動靜を探らしむる事とした。即ち新兵衛は美甘村治八と共に三木山田の兩代官の案内をたす事となつた。利兵衛治八の二人はたとひ命は助けられたとはいへ、徳右衛門と初め行動を共にした一味であるに拘らず、役人のスパイとなつたのである。百姓の團結は弛緩し、反逆者が出た。一揆の運命は已に決せられた。日向の牛六の如きも形勢非なるを見て十日遂に伯耆に欠落した。利兵衛治八の兩人は十一日夜暗に乘じ牧分に至つて徳右衛門の動靜を探りて機未だ至らざる事を報じた。翌十二日大に雪降る。役人等はこの時なりと、先に新庄村に於て捕へし百姓五人を今井河原に斬りて血祭りに上げ、更に同日夜半山田兵内、三木代官の使者等土居村に忍び入り、徳右衛門以下三十一人を捕へた。徳右衛門及び茅部の喜平次は重科の故を以て津山へ護送せられ、四人は放免せられた、翌十三日雪ばれの朝、殘る二十五人は土居河原に於て斬に處せられた。首十三を三坂山に、十二を歸路尾山に梟首し大にその威力を示す。

農民等は徹底的なる糺彈を見て色を失ひ、土居河原集合の爲めに出かゝりたる湯原川筋の者共は退散し、農民の團結は收拾すべからざる混亂を來し、首謀者等は今や薬の施し樣がなくなつた。藩兵は破竹の勢を以て、險難なる雪解けの道をものともせず山を越え渓を渡つて攻め入つた。陰慘なる雪雲低く垂れ、

湯原川一帶は恐怖におそはれた。首謀者等は茫然自失せるものの如く、或は家に歸りて靜かに縛を待つものあり、或は山中に逃走せるものもあつた。役人等は村々を虱殺しに檢察し、村民をして逃走者の在かを探がさしめ、十四日には大抵重立ちたるものを捕縛し之を津山に送つた。見尾の彌次郎は村の天狗山巣が獄の岩窟に於て捕へられた。又日向の牛六は一時伯州に逃亡せしも親類妻子等捕縛せられしを以て之を救はんが爲めに歸來し自ら縛についた。併し乍ら之にて檢擧糺彈は未だ中止せられなかつた。同月二十五日には湯原に於て殘黨八人を梟首し、更に引き返へして閏正月二日久世西原の張本人等七人を斬し、尚ほ罪の決し難き者二十八人をつれて津山に歸還した。

藩當局の彈壓に恐をなせる百姓等は、騷擾中に掠取せる米銀を返還し、先に呈出せる願書の撤回を申出づる村もあり、又已に放免されたる本途年貢米一歩四厘をも上納すべき旨を申出でるものもあつた。庄屋も今迄通りでよいと願ひ、一時罷免されたる庄屋も復職した。結局農民は徒らに[illegible]時日の騷動に藥を購ふして大なる物質的損失を蒙つた以外に殆ど何物をも得なかつた。

この騷動に連座して入牢せるもの百五十人を越え、捕縛と同時に斬に處せられたるもの四十五人の多きに達した。最も罪の重きものは津山に於て裁判を受け、その内六人は三月十二日お仕置を受けた。即ち牧の德右衛門見尾彌次郎は町を引き廻はされたる後、二宮と院庄との境目滑川の川尻に磔となり、他は獄門討捨となつた。磔の當日は町在より千余人の見物人が押しよせた。而て德右衛門は磔上に上るも尚ほ不平不滿を述べ立てたが、彌次郎は少しも言を發しなかつたといふ。德右衛門が如何なる事を述べたかは記錄にない。又村預けとせられたもの四十七人、落髮して助命されしもの十七人である。その他は何れも放免せられ、村々よりは「誤り證文」を入れた。

この騷動は固より農民のみの損失ではなかつた。藩の損失も亦少くない。津山藩は已に封祿を半減せらるゝ事となつてゐたので、事件の落着と共に、見幡大小の役人はその祿を步ふ事になつた。藩兵が徹底的なる糺彈をなしたるは、農民が余りに藩の弱腰につけ込み、傍若無人の非道ありしにも基くが、行先不安の武士の悲觀的氣分の影響する所も[illegible]れ[illegible]く[illegible]の生活に脾肉の歎に耐えなかつた多くの浪人が[illegible]撫に出かけた事は慘劇を一層甚しからしめたものといはねばならぬ。

## 五　隣國の驚愕

徳川時代の百姓一揆の傳播性は主として同一領内に限られ、他領に迄波及するが如きは極めて稀れであつた。併し中世以後は何れの封領に於ても一揆發生の素地が充分に培はれて居たから、他領に一揆が起つた場合にも警戒に力めた。作州の山中一揆は當時中國地方に於ける最も大規模な、そして最も慘憺たるものであつたゝめ、隣藩諸侯大に驚愕し、或は作州の國境に出張し、或は忍人を入國せしめて一揆の顚末を搜索せしめた。例へば備中新見の領主關但馬守は備中阿賀郡河口村へ郷方目附以下足輕五十人、鐵砲を携へた捕手十五人を、菅木村へ三十人を派遣して國境を守り、その他備前侯も澤山の使者を以て見屆をなし、藝州、伯州、雲州等よりも使者の往來に忙はしく、流言蜚語頻りに傳へられ、國境の人々は戰々兢々たる有樣であつた。又備前國境では役人が出張して通路を遮斷し、逃亡者が領内に侵入したり、或は混亂に乘じて盜み取りたるものを搬入し又は之を預る事を嚴禁した。之等の事情に由るも山中一揆が如何に隣藩を震駭せしめたかは明であらう。

## 六　山中一揆に於ける挿話

百姓一揆は百姓が經濟的苦痛に耐えかねてその苦痛を輕減脱却せんとする絶望的な反抗であるが、吾々が百姓一揆といふ詞を聞く時には必ずや、鎭守の森、陰慘な夜の村寄ひ、天狗狀、お仕おき場等の劇的場面を思ひ浮べさせられるであらう。併し又實際に於て百姓一揆が起れば筋書通りに悲劇、慘劇が演ぜられる。そこには色々のエピソードが生れ、更にそのエピソードは一揆の犧牲になつた村の總代達を徹崇するの情が手傳つて、膺劇化せられるのが常である。一揆發頭人がお仕置場の磔上で今將に殺されんとする時に、領主より特赦の使者が早馬で走せつけたのを感違ひして「早く殺せ」との報せと思つて殺してしまつたなどは、大抵の百姓一揆の大團圓である。併しこんな事はどちらになつても大した問題ではないが、他人のエピソードが附會され、一揆に於て大に働いた人が却て忘れられるが如きは吾人の注意を要する點である。

山中百姓一揆に於て今日尚ほ山中地方の人々の耳朶に深く傳へられてゐるのは、見尾村の彌次郎である。固より彼もこの一揆の首謀者であつて、大に奮鬪した人ではあるが、第一の首謀者たる牧の徳右衛門が案外人氣を博して居ない。そして彌次郎には色々のエピソードがある。藩兵の糺彈峻烈を極めたので、疲勞と困憊と恐怖に襲はれたる百姓共が一人逃げ二人退散して首謀者等は策の施し樣のなくなつた時、長く家を留守にしてゐた首謀者も流石に家懐しく逃げ歸つた。併し藩兵の追求益々急

にして首謀者等は最早逃れる事は出來なくなつた。彌次郎は村の南方に當る聖ケ嶽の岩窟に逃げ込んだ。その岩窟からは丁度自分の家が眼下に見おろされる。捕手の役人は村を探し廻る、村の者は彌次郎を捕へる事を強制せられた。彌次郎は豫ねてより一匹の愛犬を飼つて居た。愛犬は人目を忍んで毎日彌次郎の所へ食物を運んだ。併し消え殘る雪の上に日夜通ふ愛犬の小道がついた、之が爲めに遂に彌次郎の在りかが發見された。彌次郎は附近から大石小石を集めておいて捕手の役人が來れば、之を投げつけて防いだため役人は如何とも出來なかつた。そこで役人は彌次郎一家のものを捕縛して津山へ送る事とした。繩にかかつた罪なき妻子が役人に引き立てられて、聖ケ嶽の傾斜が湯原川に絕壁となつて終る所、此の細道を過ぎ行くを見た彌次郎は、一散に山をかけ下つて縛につき妻子の繩目を申しうけた。津山二宮川原で磔にかゝつた彌次郎の屍が見尾村に送り返された時愛犬も死んだ。彌次郎と愛犬とは相並んで心計りの墓を樹てもらつた。

之が今でも見尾村の人々の言ひ傳ふる彌次郎插話である。なる程、彌次郎の墓の隣に小祠があつて之に愛犬が祀つてあるといふ、そしてこの犬塚はどうした理由か婦人の病氣に靈驗ありといふので、地方人は參詣するとの事である。併しこの彌次郎に關する插話には混雜がある樣に思はれる。彌次郎が岩窟内で捕縛された事は確かに當時の記錄に殘つてゐるが、彌次郎を捕縛する事が出來ないので、方策としてその妻子に繩をかけたとは思はれない。何となれば彌次郎の子供は逸早く逃げ出して、ある寺にかくれ剃髮して難をのがれ、役人がその引渡しを要求したが遂に引き戾す事が出來なかつた旨が記錄に殘つてゐるからである。かの日向の半六は浪人となつて來たものである。本來は藝州の人高橋半六政教といふ劍客であつて、彼は一揆の劃策には大に力をつくしたが、形勢の非なるを悟つて作州に逃亡した。それが妻子親類の捕縛をきゝて再び歸還し縛に就いた事は已に述べた通りである。彌次郎のエピソードは恐らくこの半六のエピソードと混入したものに違ひあるまい。

## 餘　言

作州は百姓一揆の頻繁に行はれた國の一つであつて、延寶元年に農民の大逃散があつて以來種々の形態を以て十六回も百姓騷動が起つた。作州の百姓一揆には殺伐なものが極めて多く、武士なども他藩と異り甚だ勇敢且つ毅然な態度を以て之にのぞんで居る。その最も典型的なものがこの山中一揆である。五十一人の百姓を一度に斬り殺した百姓一揆は恐らく他に類例がある

まい。

山中の百姓一揆もその他の作州の諸一揆も封建制度の下に於ける必然的現象である。封建制度が農民の生産力の基礎上に立脚するものなる限り、その生産力を搾る事によつて初めて存立しうるのである。從て作州の一揆も封建的壓迫と苦痛とよりして發生したる點は、他の諸地方に行はれたるものと何等異る所なきものである。換言せばその本質に於ては德川時代通有の百姓一揆にすぎない。然かも作州の百姓一揆が何れも殺伐であり慘憺たるものとなつて現はれて居るのは何に基因するか。我々は社會の變轉の根柢を流るゝものが經濟力の變動であると認むるに吝かでない。併し普遍性のみを見て特殊性を顧みないで歷史の存立し得ざる事は已に最初に述べた通りである。我我が個性の研究を旨とする以上、どうしても現象形態を研究しなければならぬ。而してその現象形態を決定するのは決して單一なるものではない。物以上のあるものゝ厳として存在する事を否定するわけにいかぬ。物は只一つ條件にすぎない様な感じがする。私は百姓一揆を統一的に研究し、百姓一揆發生の地理的分布及びその地方色を闡明する事によつて、何故にかくも地方的特性を有するかを只單に爲政者の暴虐、經濟上の苦痛、生産力の拘束といふ點のみから說明し得ない事を深く感銘した。百姓一揆の發生それ自身に對しては生産力の拘束といふ事が必要條件であらうが、一旦勃發した百姓一揆が如何なる現象形態をとつて現はれて來るかは、人間の精神的素質又は社會の素質によつて決定せらるゝものと思ふ。

附記　本稿は作州津山の郷土史家矢吹金一郎氏の秘藏せる享保十一年美作山中騷動一件、同津山在中騷動記、同在中騷動書、山中一揆領歷日記によつたものである。之は騷動の最中に記されたるものにして文献としては最も信憑するに足る好個の資料である。かくの如き貴重なる文献を快く貸與せられ、私の研究に示教を與へられたる矢吹氏の好誼を衷心より感謝してこの稿を了る。

# 支那の對外運動と各國對支政策の轉向

## 英國の關稅提案並に最近租界事件

法學博士　米田實

一

關稅問題絶へざる中國の中華民國では又た復た關稅問題を發生してゐる。近く之を發生せしめたものゝ一は昨年十二月イギリス政府の關稅附加稅即時實行の提案であつた、即ち北京駐箚イギリス代理公使オマリー氏は十二月十八日、北京外交團の非公式會議席上に『ワシントン關稅條約に代はる二分五厘及び五分の關稅付加稅を即時支那全部に亘つて[illegible]べし』といふ提議を爲した。その際オマリー氏は種々稱する所あり、イギリスはワシントン會議の精神を重んずると共に、その執るべき政策は支那の時局に適合するものでなければならぬこと、又支那には現在當事者たる中央政府の存在せざるを當然とするといふやうなことを述べて、右二分五厘及び五分の附加稅による增收を、支那各地の所謂地方官憲收入に委せんとするが如きことをも、共に述べたのであつた。イギリスが斯の如き態度に出でたことは今までの各國間の交渉行態に照らして、どうも當然と見るべきものではなかつた。そこで我日本の如きは無論之に不贊成を唱へ、その後北京外交團會議は一月上旬にかけ四五回に亘つて行はれ、しばく協定の道を開かうとしたけれども、日本は之に贊せず一月四日我芳澤公使はその反對意見を新聞記者その他にも公然談話することともなり、フランスも亦之に反對を表した。之については一部では我石井大使とフランス外務大臣ブリアン氏との間に意見交換があつた爲めともいはれ　又支那國内の局面がイギリスの提案に不可なるものあるをフランスが看取した

爲めでもあるといはれるが、之れ等は玆に言及すべき必要はない。とにかく日佛兩國が不贊成側に立つたのは事實である。

アメリカは最初イギリス案に贊成なるが如く見えたが、後支那の形勢イギリス案に不可なるの姿が見えると、是亦顧みて幾分態度を變ずるが如き風に傾いて來た。之は各國の對支態度であるが、支那側においては殊の外反對が甚しかつた。何故支那側がひどく反對するかといふに北方側にありては例へば關稅增收を地方官憲に委するが如きことになれば、今日の所謂南方政府に對し大いに便宜を圖ることゝなると考へたのは勿論だが、就中支那國論が二分五厘及び五分の附加稅に滿足せざる狀態にあることが、主に北京政府をして不滿足の態度を示さしめた所以であらうと思ふ。一方南方政府側においても無論イギリスの提案たる關稅增加には今まで自己が唱へ來つた主張に照して滿足することは出來なかつた。即ち稅權の完全なる回復寧ろ外國との交涉を待たず、支那が勝手に稅權を回復すべしとの過激急進論をさへ唱へたる南方としては、やはり反對の態度を執らざるを得なかつたであらう。

イギリス案はイギリス側としては、支那南方政府の態度を緩和する協和的の案で、謂ばイギリスが支那に對する一種友愛的たる案として支那自身も必ず喜ぶものと想像したのに、事志と違ひ自から窮境に立たねばならぬ破目に陷つたのであるが、事件の發展は獨り是れのみに止まらなかつた。イギリスの不徹底なる關稅附加稅即時實行の提案は、預て凝結せんとしつゝあつた排英感情をこの機において凝結させ結晶せしむる機會をさへ作つたのであつた。即ち排英の空氣は關稅問題において作られたるにあらずして、既に存在して居た。けれども既に存在せる空氣を一層結晶せしめ來るには、何かの機會を待たねばならぬ、その結晶機會の一例として一昨年五月三十日上海租界におけるイギリス警吏の支那人學生射殺事件の如きも當然擧げることができるが、今度の支那の好意を得んとして企てられたりと思はるゝ關稅增徵案が、却つてその不徹底不十分なるために、更に排英熱再燃の口火を作つたといふ如きは、抑々も何んたる皮肉であらうか、恐らくイギリス人も思つたことが思ひ通りにならず、意外の結果を招き來つて人事の測り知るべからざるに驚き、且自ら批判して獨り默笑しつゝあるかも知れぬ、それは何かといへば本年一月三四日頃に起つた漢口の騷動であつた。イギリスの不徹底な關稅附加稅提案は支那人殊に南方系の支那人をして、イギリスを罵詈し嘲笑し又自から憤慨せしむる機會を作つたが、斯く高まつた排英空氣の裡に一月三日漢口イギリス租界の稅關河岸に集まつて居た正月休みの多數勞働者に對する宣傳演說が行はれたのである、イギリス警官はこの數千を超ゆる群衆が排英演說を聽きつゝある姿を見て危險と見做し退

夫を命じた、演説に激昂せる群衆は石を投げ棍棒を揮つて暴行を働き、遂に警官と彼等との衝突となり、やがてイギリス水兵義勇兵の出動を見るに至つた。然も暴衆は熱狂して鎭靜せず鐵條網を潜つて租界に迫る有様にて、結局イギリス側の要求により支那兵の出動となり、更に一轉して遂に支那側の士官よりする英兵撤退の要求ともなつて、三日及び四日に至り支那兵は英兵に代り英租界を警備することゝなつた。斯くしていよ／＼支那側の英租界占領と化し、更に六日の武漢國民政府會議においては英租界臨時管理委員會を組織し、外交部交通部財政部より各一名の代表者を出し、國民黨代表外交部長陳友仁並に衛戍司令部漢口市長の五名を以て、英租界の司法行政警察一切の權を管理することに決定し、五日イギリス領事に通告するに至つた。その以後種々の進行を見てゐるが、これは此處に述ぶる要はあるまい。ともかくもイギリスが八十五年前即ち一八四二年江寧條約以來の諸條約に基いて有せる權利が、圖らずも一朝の騷動に利用され、公式交渉成立の結果を待たずして支那に占領され[illegible]てゐる。之は無論關稅問題そのものの爲めではない、抑もの根本は支那側の種々の國權回復熱が原因となつて居ると見られる。然かもともかく關稅問題が擡頭してゐた際に起つたのに鑑み、予は少しく最近のイギリスの二分五厘及び五分の關稅附加稅提案問題を顧み、並に支那が當り單獨に行はんとする如き姿を呈せる關稅回復の事に言及して見やうと思ふ。

## 二

然らばイギリスは何が故に今日附加稅二分五厘、五分の即時實行、並にこの關稅附收入を支那地方官憲に委するといふ如き案を立てたのであるか、極めて近き原因と見るべきものは恐らく昨年十月十日廣東國民政府において、對英同盟罷業中止に伴ふ新課稅案を決定したことに基くであらう。昨年十月廣東政府は廣東罷業委員會と協議の結果、十月十日限りイギリスに對するボイコットを停止すると共に、ボイコット中止に要する種々の費用捻出のため、今度廣東港よりする輸出入品に對し普通品二分五厘、奢侈品五分の附加稅を課することに決定し、この旨廣東駐劄イギリス領事に通告したのである。當時廣東政府の見たる所にては斯く新方針に決定せることは、第一、蔣介石氏から觀[illegible]ること、[illegible]作戰か到る處に勝利を博し勞働者を使用する範圍が狭くなり從つて今廣東勞働者を武漢に送る必要があり、一時罷業を解決しても勞働者に迷惑をかけなくなつたこと、及び同盟罷業が長引けば却つて怠惰の勞働者を増し、勞働階級に不利益なりといふ如きことが罷業中止の所以であると政府自から發表してゐる。しかし吾々は廣東政府の對英罷業中

止の動機及び之を導きたる事情が何れにあつたか、今探索すべき必要はない。要するに同盟罷業を中止し以て、その費用捻出の意味において二分五厘及び五分の附加税を課することゝしたのが主要の點でなければならぬ。廣東政府自身は之を以て關税にあらず內地特別税なりと稱し、十月二十三日付の廣東政府公報において釋明してゐる。廣東政府自身の立場はそれであるとしても、外交團側においては斯く見ることはできなかつたので、既に廣東政府の釋明あるに拘らず、それに先ち廣東各國領事團側にては之を不當と見做し、北京外交團にても廣東政府の課税事件並に以外の山東その他における不當課税事件などを加へて會議の問題と爲し、しば〳〵對策を協議して居た。その間イギリスの態度は極めて曖昧で急に交渉は纏まらなかつたが、遂に十一月十三日の外交團會議において右廣東政府の課税を不當と認むることに決し、即ち首席公使より『廣東山東その他における支那官憲の外國貿易に對する課税に關し北京における關係代表者は直接條約の趣旨に反する右措置を正當なりと認むるを得ざることを聲明す』といふ通告を北京政府になしたのである。斯の如くにしてこの問題は國內税と稱する廣東政府側と、之を國內税にあらず關税と認め關税なる以上今日支那は各國との條約に基き相互の協定によるにあらざれば現狀を變更し能はざることになつてゐるので、廣東の課税を不當なりとする列國側とが互に紛糾を極むることゝなつたのである。ところがこの問題で多少板挾みの地位に立つたものはイギリスであつた。それは何故かといふに、イギリスは實をいへば廣東政府の二分五厘及び五分の附加税賦課の如きには賛成したかつた、徒らに賛成したいのでない、もし之によつて今日まで香港が苦んだボイコットが終熄し、今後再び繰返さるゝことがなければイギリスの幸は大なるものがあるからである。誰も知るやうにイギリスは一八四二年の條約によつて香港を支那から割譲せしめて以來、力を盡して之が發展を期し併て若干の漁民しか居なかつた荒地の島は、今や極東貿易の中心地となつてゐる。ところが之に對し一昨年六月に始まり十六個月に亘つた廣東側の出來に基く極めて長きボイコットは、恐ろしくイギリス人を苦めた、廣東政府は種々巧妙なる手段によつて、香港の商業に對し或は船舶に對して、或は家族生活に對して非常たる威嚇を加へ、イギリス人の店舗若くはその他外人の店舗に働く支那人に對しては種々たる脅迫威嚇を施してたが、就中大切な點は、廣東厦門を始めその他南支各港においてイギリス品及びイギリス船舶に對してボイコットを行ひ、もし香港に立寄る船舶ある時は同船に對し支那各港において貨物の積卸しを禁じた、之が爲め香港の商業は非常に蹉跌し、香港を中心として發達してゐる各種工業も亦衰微せざるを得なくなり、香港の商業は遂に五割の減退を示すに至つたこ

の原因はいふまでもなく第一、一昨年五月三十日上海租界におけるイギリス警官の支那人學生射殺事件に端を發し、續いて同年六月廣東において同樣英支人間に衝突があつた廣東政府は之を非常に重大視し之によつていよ〱排英熱を高め、六月にはボイコットが開始せられ、實に昨年十月まで繼續せられたのである、斯の如き悲慘なる罷業終了せらるゝと及び之を再びせざるはイギリスに取つて極めて大切なことで、それがため若干の附加税賦課の如きは忍ぶも可なりと、イギリス人側では考へた。

だが是れだけではなかつた、長く南方政府を敵視したイギリスの態度は、近頃南方政府と接近するを便とする如き立場に變更して來たのである。それは南方國民軍が漸次北進し所謂北伐において大成功を收め、將來支那において有力なる地歩を占むるものは是れではないかと考へられて來たからである。誰も知ることではあるが、蔣介石氏を總司令とせる北方征伐が、廣東[redacted]のは實に昨年七月末で、同月廿五日蔣介石氏は總司令として準備を整へ廣東を出發した、それが一度湖南に入り更に北進して殆ど向ふ所敵なく、破竹の如き勢ひを以て九月二日には長驅武昌を包圍し、九月七日には漢陽を陷落せしめた、その後江西に入り南昌を占領するかと思へば、先年武漢において革命軍が清朝に叛旗を飜した紀念日十月十日（支那にては義を起したる紀念祭として國慶日になつてゐる）の前日九日には僅に武昌占領を斷行したのであつた。その後十一月には九江を占領し、今や形勢拔くべからざる有樣となり、揚子江一帶は正に南方國民軍の勢力下に置かるゝ勢ひとなりかけてゐる。斯の如くなつたのは取りも直さず支那における北伐國民軍の將來あることを示すものであつた、殊に個人本位の軍閥は個人本位なるが故に何等の政綱即ちプラットホームを有せざるに對し、南方の國民政府側獨り明確なる主張を有ち明確なる主義を有して居り、それだけ南方軍隊は學生青年の共鳴を得て人氣を增し、又た戰ふ士卒も或る主張の爲めに戰ふの自覺があり、熱があり、自ら何の爲めに戰ふかを知らぬ軍閥の兵に對し、勝利又勝利を重ねたのも、何の不思議も無い所であつた。

ところがこの形勢は支那の現狀を極めて注意深く見てゐるイギリスの看過する所とならう道理はなかつた、殊に又たイギリスは香港との利害關係において南方政府と仲惡しからざるを便とするのみならず、もし南方政府にして將來支那に大なる地步を有するに至り、殊に長江一帶に重大なる勢力を振ふこと〻なれば、之と親善となることの益重大とならざるを得ない事情があつた。何ぞや、他無し、揚子江一帶は既にイギリス人自から自己の勢力區域内とする所で、蓋しイギリスは一六三七年支那に

入り一七〇〇年には舟山列島方面に活動し、一八四二年においては支那に迫つて上海を開港せしめた。謂ば揚子江のあの大河はイギリス人の力によつて開かれたものと思つてゐる。從つて過去の外交に照らすも一八九八年にマクドナルド公使の名を以て、イギリスは支那の總理衙門との間に揚子江沿岸不割讓の外交文書を交換した。次で同年英獨銀行團間には山東及び黃河方面はドイツの鐵道經營區域と認むるが、揚子江流域はイギリスの鐵道經營地域とする協約を作り、更に翌一八九九年にはロシヤ外務卿ムラヴィヨンとイギリス大使スコット卿との間に、揚子江流域をイギリスの鐵道區域とし相妨ぐるなきことを約束した位であつた。更らに現在はどうかといふに、鐵道線では北京浦口間の所謂津浦鐵道南段の揚子江に接近する部分にはイギリス資本投下せられ、名こそ支那の鐵道であるが對英借款の爲め事實上英人の支配下に屬するはいふまでもない。その他上海南京間の滬寧鐵道、上海より浙江杭州に至り更に寧波に走るの杭甬鐵道、その外揚子江一帶にある各種の鐵道にはイギリス資本が投下されてゐることは誰も知る所であると同時に、鑛山などにもイギリス資本は深く投ぜられてゐる。又此地位はイギリス人の著述などにも現はれ古きものにありてはベレスフォード卿の「支那分割問題」マッケンヂー氏の「假面を脫せる東邦」といふ如き著述などに見ても揚子江はイギリスの勢力區域內とする主張を取つてゐる。又日英同盟の歷史に顧ても林董公使とランスダウン卿との間においても、イギリス側が揚子江における自國の利益關係を主張せるは外交通の齊しく知る所である。斯の如く揚子江に深き地盤を有するイギリスである以上、今日國民軍が揚子江方面において地步を占めつゝあるに當つては、之と妥協し之と接近し親善ならんと考へるに、何んの不思議もない所である。殊に最近イギリス國論に鑑るも在野黨ではあるが勞働黨首領マクドナルド氏、自由黨首領ロイドヂョージ氏の如きは、現保守黨が支那國民黨政府に對する態度宜しきを得ざるを攻擊し、是れとの親善策の必要なることを呼號してゐるなど、大いに政府を刺戟する所あり、新任北京駐剳イギリス公使ランプトン氏は、昨秋の本國を出發する前本問題につき協議する所あつた、次でいよ〳〵支那に赴任するや、昨年十二月漢口を訪ふて所謂北伐軍首腦者と會見し以てその親善政策をも示した。斯る關係あるが故にイギリスとしては廣東國民黨政府が附加稅普通品二分五厘奢侈品五分課稅によつて、財政上の便宜を圖らんとする案に好意を表せんと考へたのは洵に自然であらねばならぬ。だが廣東政府が決定したる關稅は列國の條約に違反し外交團の抗議ともならざるを得なかつたので。イギリスは、一方資

としては「列國側として新しく變つた形式において自發的に附加税普通品二分五厘奢侈品五分の即時實行を認むること」の手段を提議したのである、即ち之が行はるれば、その以後に在りては、廣東政府の新關税策は自然適法化せられて來るからである。斯の如くにして廣東政府との親善策を行はんとしたのがイギリス新提案の眞相であると思ふ。

がイギリスの意は無論是れのみではない、本來イギリスは差當り支那において一九二二年二月ワシントン關税條約に明示された附加税普通品二分五厘奢侈品五分丈けの實行を以て、支那の現狀にも副ひ又たイギリスの利益をも害せざる方法と考へてゐた、故に又この機會を捉へ二分五厘、五分の附加税案の實現を期したと言ふ事情もあつた。尤もイギリスは本來附加税二分五厘及び五分の課税論者ではなかつた、一昨年十月二十六日より開かれ昨年七月二日頃に終つた關税會議におけるイギリスの主[redacted]主張を有し、關税増加を附加税二分五厘及び五分に止めずして一割若しくはそれ以上にも達すべき關税増加案を採用せんと考へてゐたのである、それは關税會議において一旦略ぼ決定せられた新税率即ち最低二分五厘最高二割二分五厘まで七等に分けた暫定差等税率なるものとなつて現はれたのであつた。それは何故であるか日本の如き國柄からいへば我國の産品は支那において生産し得る程度のもの多きが故に、ワシントン會議で決定した税率に對しては今更容喙すべきものでないとしても、それ以上の増加になると日本に取つても多少の苦痛を感じない譯に行かぬ。何となれば關税率増加する時は支那内地品と日本品との競爭起り、日本品の不利大なるものあるからである。然るにイギリス品は之と異り多く高等品にして支那において生産せられざるものである、故によしやワシントン會議の附加税率以上に關税率を増加するとも、之が爲めに支那人の購買力を減少せざる程度の増加ならば、その負擔は支那顧客に轉嫁せらるる丈けで從つてイギリス貿易に害を及ぼさない、かう言ふイギリス品の立場は支那人の歡心を得やうといふ立場と共にイギリス人を驅つて一旦ワシントン條約以上の附加税率増加を主張せしめたのであつた、しかし之は關税會議前半だけのことであつた、換言すれば昨年四月十日北京に政變起り段祺瑞氏下野すると共にイギリスの態度は一變し、それ以來ワシントン會議決定の附加税普通品二分五厘奢侈品五分の増加實行を以て、會議を打切るべきものなりとの主張に變つたのである。何故斯の如き主張を爲したか、それには別に事情の存するものがあつた。即ち我日本が關税會議の劈頭において提議し遂に同會議をして決定せしめん

として居た『三年後に於ける支那關税自主權の回復』は、イギリスが衷心、大に反對せざるを得ずと考へた所であつた。蓋しいよ／＼關税自主權回復が行はるゝ時は、支那は勝手に自己の關税率を如何やうにも増加し以てイギリス品を苦しめ得るからである、イギリス貿易の利益からいへば支那内國産の競爭品を有せざるが故に、前に述べた如く或程度までの税率の増加ならば別段支那人の英品購買力に影響を生ぜぬのである、然かも若し支那の關税自主權が回復され支那が勝手に關税を増加し得ることゝなれば、支那はイギリス品に對し支那人の購買力に影響する程度まで、その關税を引上げることも容易に出來る。玆においてかイギリスは支那の關税自主權回復には内心反對せざるを得なかつた。併しながら關税自主權回復が名分正しき以上、何れの國と雖も公然に之に反對すること能はず、さすがのイギリスも止むなく日本に引摺られつゝ遂に關税自主權回復の主張に贊成したのであつたが、機會さへあれば之を破壊せんと考へて居た。

ところが支那に取つて幸か不幸か、イギリスにその望んで居た一の機會を與へたものは段祺瑞氏の下野であつた、イギリスは支那のこの滅裂な態に對して關税において多大の讓歩を爲すも何んの効果があらうと言ひ出し、差當つてワシントン會議決定程度において之を纒めんとし出したのである。即ち自己の最初主張せる差等税率を犠牲にすることに依つて、日本の主張せる關税自主權回復をも見合せる機會をも造り、すべて新らしき案を葬り、唯ワシントン會議にて已に決定せることだけを實行せしめんとする政策に變つて來たのである。然るに折角のイギリスの此主張も我日本の反對に會し、四月より六月上旬に亘る會議において局面行詰り、遂にイギリスの提案により未決定のまゝ支那の時局を理由とし、同國に相手とすべき政府の實現するまでといふ口實の下に七月上旬會議を解散して了つたのである。要するにイギリスは、最近イギリスに有害な自主權回復案を葬る爲めに、すべての新提案を排除し、唯だワシントン會議の既定の附加税普通品二分五厘、奢侈品五分だけに止むるを便宜且つ有利とするに至つてゐたのである、此イギリスの立場も又た此度の廣東課税案を好機として二分五厘、五分附加税提案をなさしめた一理由たるや想像するに難くない所である。

## 三

以上はイギリスの態度について説明を加へたものである、然らば一轉目下支那側がイギリス側の想像に反對し、その提案に反對しつゝある所以は如何なる理由であるか、少しく之を檢討し度いと思ふ。

支那側南北両派のイギリス提案反對には種々の原因がある。第一に吾はイギリスに對する支那側の不信を擧げたいのである。誰も知る如く今を去ること八十五年前の江寧條約は、彼の非人道な阿片戰爭に於ける勝利の結果種々の獲物を支那から強取したものである、先づ香港を割讓せしめた、又た治外法權が出來たのも、關稅の拘束を見たのも、支那人が最も憤慨せる國中國を作るが如き租界なるものが出來たのも、此條約並に翌一八四三年の條約の爲であつた、他の諸國は多く最惠國條款によつてイギリスの利益に均霑したといつて宜い程度である。又イギリスが最近問題の相手とせる南方國民黨政府側からいへば、それが廣東を根據として居るだけそれだけ自己の眼前に橫はるイギリス領香港は大いに彼等の神經を刺戟する所である。この外イギリスは一八六〇年條約において香港の對岸九龍の市街を租借地として割讓せしめ、更に一八九八年には香港防衞の軍事上必要なりとの理由を以て九龍一帶三百五十六ケマイルの面積を九十九ケ年間に亘つて租借したのである。この外揚子江一帶において鐵道鑛山其他に亘つて扶植せられて居るイギリスの權利々益。上海共同租界に於ける英人の地位は絶大なものがある。次ぎに支那の稅關行政の如きも英人の下に置かれてゐる。支那稅關行政においてはイギリスは多大の功勞があり、吾々は一概にイギリスを非難せんとするものではないが、而も英國人が中心となり之を支配しつゝあるは何人も認むる所である。即ち一八五四年始めて稅關行政が外國人の中に移つた時は英米佛などより各委員を任命して居たが、然も最初より英人ウエード氏が最も有力であつた、その後レーン氏之に代り次で有名なサー・ロバート・ハート氏の如きは極めて長年月に亘り支那總稅務司として稅關行政に當つた人である。その後ブレドン之に當り次でアグレン氏之に代つた。斯の如く變遷はあつたが、稅關行政が常にイギリスの手に在るにつきては、支那人側では之れをも一種の國際管理と見做し居るは止むを得ざる所と思ふ。

斯ういふ現象は必ずしも今日の英人の罪といふのではない、イギリス人は今日偶然にも支那において歷史上斯の如き地位に置かれたものとも言へる、然かも英人が支那において斯る地位を占めつゝあると共に一度地位を占めたる以上、人情の常として自己の地位利權等を容易に拋棄すまいと考へるは寧ろ自然である。それだけ支那人側がイギリス人に對して不信の念を有つのは當然でなければならぬ、殊に關稅問題が現に支那を惱ましつゝあるが、此拘束の本たる從價五分の片務的協定は實に前に言つた阿片戰爭の結果一八四二年の條約に萌芽を發し、翌一八四三年の協定において明確に現はれた規定である。のみならず

この不當なる五分税率がその後長く維持せられたのも、イギリス貿易が最も支那に重きを占むる丈けそれだけ英人の力が重きを爲せることも疑ひなき所である、是等が支那人の對英人不安不信の念の源となり、偶々今回の關税提案に對しても之を迎へた支那人の心理の上に大いに働いてゐることは、吾人の忘れてはならぬ所である。

しかし以上の點は猶ほ輕いものではないかと思ふ。然らば支那人のイギリス提案反對について最も重きを爲す原因は何んであるかと言ふとやはりイギリスの提案たる二分五厘、五分の附加税率が支那關税改正策として支那人にとりて極めて不十分なることであらう。蓋し支那人はこの程度の税率修正に滿足せんとするものでないことを、長き年月において度々明かにしてゐたのである。先づ一九一九年パリー講和會議に際し支那は國權問題について提議を爲し、關税は差當つて一割二分五厘の程度たらざるべからざること又た或時期を經過したる後は支那は完全に關税自主權を回復し、列國の拘束を受けずして、自から關税率を他國同樣に決定し得る自由權利を有つべきものたることを主張してゐる。次にワシントン會議においては一九二一年十一月二十三日開かれた所謂太平洋極東委員會席上、支那代表顧維鈞氏は關税五分を一割二分五厘に上げんことを主張し、同時に將來は關税自主權回復を求むる意味をも聲明して居る。而して同會議においては種々列國側と協定の結果差當つて支那關税を現實五分とすること、次で附加税普通品二分五厘奢侈品五分を許すことが定めらるゝと支那側では之に同意したもの、決して眞に滿足すべきものにあらざることを明かにし、將來眞の關權回復を求むる所以の意味を發表した。ともかく支那側でも一時的意味で二分五厘及び五分の附加税に同意したが、それも直に實行せらるゝものとしてゞあつた、ところが同税率の實施は支那フランス間における金フラン問題の紛糾で、恐ろしく延引したのである、即ちフランスは金フラン問題解決せざる限りワシントン條約を批准せずと敦圉き、脇道の問題に影響せられて少くとも各國の條約批准交換は二三年間遷延を見るに至つたのである。最初よりワシントン會議の附加税率に滿足しなかつた支那は、年月遷延し實行延るれば延るゝだけ最初決定せる程度の税率増加に滿足し難きは已むを得ぬことゝいはねばならぬ。況んや目下支那は財政困難であり、關税は年々増收を見つゝあるも尚難局を救濟するにはとても足るべくもない。蓋し二分五厘、五分の附加税を實行すれば如何なる増收を見るかといふに、一年三千萬元位にしか達しない、是等の點に鑑みて支那側における主張は益關税の根本的變改に向つて進んだ。それは實

に一昨年十月二十六日以來開かれて居た關稅會議における支那の主張に十分現はれてゐる、就中國民黨政府は關稅問題について最も强硬であり、現に總司令蔣介石氏は進軍し、九江その他に來るや關稅自主權回復を主張し、十一月各方面に發表した布告書の如きにも之が明確に書かれた所である。之丈けでも南方支那が、イギリス案に同意する道理なかつたのである。

ところが、更らに一轉、昨年に於ける關稅會議の經過を檢すると、同關稅會議が進み得たる程度に對しても、支那人としてはイギリスの提案の餘りに不十分過ぎることを考へざるを得ないのであらう。何ぞや、昨年の關稅會議は支那側の批評があつたに拘らず、同會議が破壞せらるゝまでに相應の進捗を示し、成功を現はしつゝあつたのである。試みに見よ同會議は第一に支那側が熱望する關稅自主權回復を決定したのでは無かつたか。即ち十月二十六日開會當時、我日置全權の同情ある演述に端を開し、十一月三日、[redacted]回復案」提唱となり、その後我全權の盡力繼續せられ、一昨年十一月十九日の委員會で支那側の王全權より「一九一九年（大正八年）一月一日より支那の關稅制限撤廢、國定稅率實施を見ることを、支那以外の締約國承認し、同時に支那は國定稅率實施と共に釐金を廢止するを約し、之本會議に成立す可き條約中に挿入すること」を提案し、各國全權同意したのである、尤も之と共に地理的、經濟的關係相近き日支兩國間には互惠條約の方法に依つて日本貨物に對する惡影響を防護するの案、別に日支兩國間に存したのは言ふ迄も無い。かくて支那が一九一八年のパリ講和會議、一九二一年のワシントン會議其他に亘つて夙に熱求したものが、一應遠からざる期間に實現せらるゝこととなつてゐたのである。ところが此關稅自主權回復は、三年後を待たねばならぬのだから、それ迄の間、支那關稅をドうするかと云ふのが問題であつた。ソコデ此暫時の期間、ワシントン會議決定の附加稅二分五厘及五分を實行せんとの議論もあつたがそれでは支那の年收增加が三千萬元に過ぎぬので、窮乏財政救濟の適法にあらずと考へられ、茲に會議は第二として暫定差等稅率を案出したのであつた。それは二分五厘を最低とし、一割二分五厘を最高としたの中間に、五分、七分、七分五厘、一割、[redacted]の五級を含み即ち七級から成つたものであつた。之に依るとワシントン條約の二分五厘、五分よりも非常に支那に有利であり、即ち支那は同稅率を十三億五七十七萬八千元の貿易額に適用すると、增收九千萬三千元（即ちワシントン條約の稅率の增收三千萬元の三倍）となる譯であつた。（序でに記するが、此稅率は最初日本に非常に不利ならん

と思はれたが、實際日本品は支那人の必需品が多い丈け、必需品を低くし、奢侈品を高くする主義に割當てゝ見ると、日本對支輸出品の約六割は二分五厘級、約二割は五分級に當り、實際高い税を拂ふのは重に歐米品となつたのである。）而してワシントン條約の所謂二分五厘及五分の附加税率は如何なる地位を占むる形勢であつたかと言ふと、自主權回復及暫定差等税率等北京關税會議の新決定を含む條約が出來たる曉、各國政府の批准手續に一年若くは一年半の時日が必要なのだから、その批准が終了する迄の一年若くは一年半間、ワシントン條約既定の二分五厘、五分の附加税率を實行し置かんと言ふのであつた、即ち同會議が略ぼ成就せんとし、唯だ段政府沒落で蹉跌を見た事業そのものは、實に重に「自主權回復」と暫定差等税率とであつた、然るに今回のイギリスの提案は、此支那に有利な二大要項を除き、支那に與ふるすべてを五年前のワシントン會議程度に逆轉せしめたものである、のみならず、支那にして右提案を承諾したとすれば、それは一應「關税問題の解決」となり、今後税權協議の機を遼遠にするものでは無い乎。

斯く撿して來ると、支那側のイギリス提案反對も、毫も怪むに足らぬのである。

四

以上で支那側の反對せる事情は明確になつたと信ずる、だが更に吾人の前に問題を投げるものがある、これはいふまでもなく今日支那人側が暴力によつて關税問題のみならず、他の各種國權回復問題を解決しやうとの措置に出て居る觀あることとである。その一端は最近の國民黨政府側の主張にしば〳〵反映してゐる、即ち支那側は列國との協調を待たずして治外法權を撤廢せんとし、又た關税問題をも決定しやうと主張してゐる。之は國民黨政府ばかりでなく北京政府側でもその氣分濃厚である、所謂通商條約改訂問題の如きも、從來支那と各國との通商條約においては相互の同意なければ、改訂出來ぬやうな規定あるに拘らず、之を無視せんとして居る、彼のベルギーとの通商條約問題においても支那が極端な態度を取れるは誰も記憶する所である、斯ういふ空氣の中にある爲めでもあるが、今回漢口に紛議が起るや國民政府は之を機會としイギリスとの合議によるにあらずして、遂に英租界を占領し、その司法行政警察事務を自己の委員に行はしむる態度を取つてゐるのである。予の本論文は主に關税問題を本として論じて居るけれども、此點は獨り關税問題のみでなく各種支那國權回復問題に編れてゐる問題なのは言ふ迄も無い、是れ容易ならさる問題と言はねばならぬ、抑

もどうして支那人が斯の如き態度を取つて來たかといふに、それは列國が作つてゐる對支那條約の拘束程度が餘りに甚しきものであること、そしてその條約拘束の期間が餘りに長いことの爲めに、支那人の不滿の念大なるものあるだけそれだけ幾分狂熱的に陷つた點もある、又たロシア的勢力も入つて居ることも關係があらう。例へば廣東にはボローヂンが居り、廣東政府部内には右黨も相當に居るが、所謂過激ロシア系統のものも相當に居ることなども關係があらう。しかし予の觀る所を以てすれば、今日支那問題に關する列國會議なるものが、餘りに支那のために圖つて十分でないものが多く、支那人をして幾らか失望せしめて來たことなど、特に識者の猛省を要すると思ふ、一體之は國際會議の欠陷でもあるが、國際會議は列國協調してやるので、よく決定を見れば極めて力强きものである、誰やらもいつたと記憶するが、玆に十二頭の馬がある、その十二頭が力を合せて一方に進む[redacted]

もし十二頭の馬が各異る方面に走る時においては、一歩も進むことを得ないのである。支那の問題も同樣各國共通の問題であつて、會議において決定せねば實行甚だ困難であるが、唯だ最近までの經過に見るに或は軋轢を事として終るもあり、時には意見の相違を外形として、此間に巧みに支那國權回復を遲延せしめ、然かも共同的な會議なのに乘じて責任を曖昧にし得つゝ欣ぶやうな狡猾なものもある、恐らくかういふことが支那人の國際會議なるものに失望し來り、別案を考へ付くやうになつた點であらうと思ふ、而して國際會議に失望せる支那人は勢ひ關稅問題を含める各種の國權回復問題について、近頃國別談判にしたらどうかといふ考へを有つに至つたのである。それは我日本が明治二十七年の條約、稅權回復及び治外法權撤廢に成功したのは、國別談判に依つたのであつて列國會議に依つたのでは無かつたからである、陸奥伯外相時代、寧ろそれ以前から或はアメリカと談判し或はイギリスと交涉し以て、その志の大分をなし得たのであつた。是れ支那側に在つて會議よりは國別談判に依らんとの論が起つた所以である、併し乍ら支那の今の場合は、ワシントン會議及條約といふ歷史的關係、行懸りに累せられ、國權回復問題は國別談判では道り悪い立場に置かれてゐ[redacted]せる支那の狂熱的愛國者を驅つて、今の如き暴力論、單獨行動論に奔らしめつゝあることを思ふと、予は失望の結果此種の態度に出でんとするを、氣の毒に感ぜぬ譯にはいかぬのである。

猶ほこの點において吾々の忘れてならぬのは、亞細亞系統の他の部分に、暴力策によつて國權回復を行つた例あることも、

やはり支那の或部分の人達に一敎訓を與へたではあるまい乎と言ふ事だ。その例はトルコにある、トルコは以前久しく支那と同様關税權の制限と、治外法權とに惱んで居た。トルコは是等の拘束より脫せんと非常なる努力を拂つたが却々成功もせず、世界戰爭に至るも、ドイツ側に味方せる結果戰敗國となつたので、一九二〇年八月十日セーブル條約においては少しも自己の國權回復を行ふを得なかつた、のみならずその領土は驚くべき程減少せられた。トルコ政府も當初大いに反對したが、遂に屈服して了つたのである、ところがムスタフア、ケマルパシヤ等の愛國者はアンゴラに國民黨政府を造り恣に旗を擧げ、遂にギリシヤと干戈を交へ、結局一九二三年ローザンヌ會議を經て、領土を廣き程度において回復したのみならず、遂に關税の拘束を免れ又た治外法權の撤廢をも見るに成功したのである、次に是れ程の例ではないがイギリス對ペルシヤの關係に見るも、イギリスは一九一九年ペルシヤとの條約で、表面同盟の形式を取り、事實之を自己の保護下に置くことにしたのである、ところがペルシヤの國權主義者共は容易に是に屈せず反抗を續け、イギリスとの條約がペルシヤ議會に提出せらるれば、議員は常に欠席に次ぐに欠席を以てし批准を拒み、反抗を續けたのであつた、かくて形勢漸く激成された結果（尤も之れにはロシアの力も入つて居たとイギリス側では主張してゐるが）遂にイギリスは大局に鑑み、ペルシヤ國民を敵とし之をロシア側に味方せしむるよりは自己の態度を變更するを便とし、一九二一年（大正十年）に至り自から右條約を放棄したのである。

國權回復に熱狂せる支那人中の外國形勢通の面々は是等亞細亞民族の遣口を見て、會議そのものに餘り望みなく、國別談判又困難なるに失望して直接行動若くは暴力主義に傾いたことは無かつたとは言へぬのである。

## 五

要するに予は斯の如き立場に陷れるに對し少からず同情を禁じ能はさものである。之は茲に切言し置き度い、併しながら斯の如き支那の暴力主義が果して支那人の爲めに賢明なる策なりやと言ふと、予は大いに疑問とする所である、支那は予が述べたところのトルコの事情ペルシヤの事情などとは自から異つてゐる、又列國の對支那利益關係の重大さも決してトルコ、ペルシヤの比ではないのである、獨りイギリスといはず各國の支那に於ける利益關係は非常に重大だ。故にトルコで成功しても、支那に成功するとは限らぬのである。此事情は長文になりかけたので茲に詳述するを得ぬを悲む、要するに予は支那人が暴力主

義を採るべきでない、今少しく隱忍自重することが南方國民黨政府に取り眞に有利であることを指摘し、希望し置き度いと思ふ、尤も、唯列國の神經を刺戟し覺醒を早め何等かの行動に出でしめんとする一時的便法としてやるならば予は之を論ぜない、然らずして眞にこの方法により單獨以て國權回復問題を解決せんとするならば、その禍測るべからざるものありはせぬかと、支那の爲めに憂ふるのである、併し南方政府にも眼識ある人物もあるので、恐らくは進退の道を誤らぬだらうと信ずる、だが同時に玆に問題となるは列國としては之に對し如何に處せんとするかである。支那の努力による國權運動が盛になれば必ずイギリスその他において、殊にイギリスの如き議會に壓倒的多數を占めてゐる保守黨政府の力ある今日にありては、今後の成行如何に依つては、妥協策を中止して出兵論など起さぬとはいへぬ、併し之は根本的に支那問題に資する道では無い、今の局面に於て、[redacted]を以て支那人の正當な國權回復の希望の實現を策することであらう、而してワシントン條約の存在し繼續しゝある以上、その歴史因緣に鑑みるもこの際各國は協調策を取らずして、支那の國權回復問題を處分することは出來ぬのだから、列國は支那の大勢を顧み速かに列國會議を開いて支那人の希望の實現を圖る事であらう、殊に他につきては多少論議の點があるにせよ、その中の重要問題たる關稅問題については、吾々は速かに支那の國勢に鑑み列國が昨年七月上旬一度停滯せる關稅會議を更に召集し、僅かに殘されてゐた點を處理して、同會議がなし得て居たところを完成し支那をして出來るだけ滿足を得せしむるの策に出づるのが至當だらうと思ふ。斯くいへばイギリス側その他は必ずいふであらう、支那には今安定せる中央政府がないではないかと、しかし予は之に對して問はんと欲する、此處十年間北京政府は果して安定して居たか、又一昨年十月二十六日關稅會議開會當時の支那政局は果して安定してゐたか、段政府は支那全土を支配してゐたのであるかと聽きたい、誰も然りと答ふるものがあるまい、蓋し支那の過去五十年間の歴史は、殆んど悲慘なるもので、唯一九一三年乃至一四年、即ち民國二年より三年に亘れるあの時を除いて、戰爭のない年はなかつた。一支那人の記錄にもあるやうに「この五十年間に支那には百五十の戰爭がありその中大戰爭と見るべきものは三十七を數へ、然も是等戰爭は田舍に於て行はれず、都會又は人口多き所において行はれるを常とした」のである。殊に袁世凱氏が民國五年六月極度の神經衰弱に罹り悶死して以來、所謂直隸、安徽兩派の爭ひを生じ一勝一敗を見て遂に安直戰爭となり、或は奉直戰爭と

なり又第二奉直戰となるなど、戰亂常に絕へず、督軍は到る處に割據し北京政府あれどもその威令は北京の周圍數十マイル外に及ばざる有樣となつて居たのである、軍閥の爭ひは最早十年を超へ一昨年關稅會議開催當時には成程段祺瑞氏は北京政府の中心たる形式にあつたが、唯名目のみにて力なく、北京政府そのものも決して安定して居なかつた、中部支那には孫傳芳、吳佩孚兩氏が居り南方には國民黨政府があり支那は正に四分五裂の姿を呈して居たのである、それに拘らず、列國は會議を開いたではなかつたか、會議を開いた以上は問題を決定する目的ではなかつたか。吾々は昨年七月の時局を本として俄かに會議を閉鎖せしめたイギリスその他の遁口には如何にしても贊成することができぬ、しかし過去は敢て問はぬ、吾々は玆に一の提案をしたい、もし時局に安定なく中心政府なしといふならば、何故目下支那に於ける北方及び南方の有力なる兩政府代表者をも含めた國際會議を開かないかといふことである、完全な統一を待つことは容易でないが今日の時局難に處する立場から、兩派の代表者を加へることは最も適當な措置ではなからうか、さうなれば或ものはいはん、それは一國内における二つの政府から代表者を出さする譯にはいかぬと、然らば吾々は更にいひたい、「列國はヨーロッパにおいて現にさういふことをやつたではないか」と、何ぞやその顯著なる例はトルコとの談判である。即ち一九二二年二月二十二日より三月十四日に亘つて開かれたロンドン會議の例はどうであつたか。右はいふまでもなくトルコ問題に關するものであつた、同會議に列せるはヨーロッパ諸大國の代表者、ギリシャ政府代表者等であつたが、當時トルコは君府に正當なる政府があり、更にアンゴラには一種の革命政府があつた、そこで列國はトルコ問題協議のために、君府政府代表者を招くと共にアンゴラ革命政府代表者も便宜上出席せしめたのではなかつたか、理窟をいへばどうにでも付くが、斯の如きは實際上如何なる方法もあるといふことを示せるものである、支那關稅問題の如きも要するにこのトルコにおける行き方を學ぶべきである。況んや最近イギリスは二分五厘、五分の新提案を爲すと共に、關稅增收を地方政府に委せんとしたのではなかつたか、それ位ゐの案を出し得るイギリスに地方政府の代表者をも國際會議に加へ得ぬ道理があらうか、少くとも最も有力なる南北兩政府だけでも加へて、列國は速かに關稅問題を協議し、局面を決定することが必要ではあるまいか、ヨーロッパで行つたことが東洋で行はれ得ないとは、如何なる詭辯者と雖もいひ得ない所であらう。之が最近支那時局に對する予の所見である、江湖の諸賢、如何に之を見るやは、予の固より知らざる所である。

# 現下における對支諸意見の解剖と批判

小村俊三郎

## 一

本年初頭の漢口九江事件は、一昨年夏の上海廣東事件よりも、世界に與へたショックとセンセーションとが、遙かに大きい。一昨年以來の騷ぎは、排日が始めて排英に轉じ、上海における排英暴動や、廣東における英貨排斥が、餘りに猛烈且深刻に行はれた爲に、頗る世界の耳目を聳動さした。しかし今年のは、それにもまして、直接行動と暴力手段により、漢口九江の英國租界を奪回し、稅關事務と共に、租界の行政をも、支那の手[redacted]へば、いはゆる不平等條約撤廢の一部であり、帝國主義打破の手始めであるが、これを列國からいへば、既成條約の破棄であり、既得權の蹂躪である以上に、國際現狀の根本的大破壞である。支那は大膽不敵にも、かゝる革命的手段により、八十年前の阿片戰爭以來、列國が金城鐵壁と恃んで來た傳統的優越權の一角を擊破し、就中世界環視の面前において、先づ大英帝國の威信に泥を塗つた。世界がこれが爲甚大のショックを受け、甚深のセンセーションを起したのは無理もない。單にそのショックとセンセーションの程度のみからいへば、一九〇〇年の義和團事變にも比することが出來やう。

一昨年の上海事件の結果、猛烈なる支那民衆の排英運動に辟易した列國は、關稅會議法權調査委員會を北京に開くことを承諾し、就中日本の援助によつて、關稅自主權の回復を原則的に承認した。その關稅會議には、尚不徹底な態度を持することを免れ[redacted]における深刻な排英運動には堪へ切れず、ついに自ら進んで新對支政策なるものを提唱し、附加稅の賦課を無條件に承認せんとするに至つた。列國のこの態度は、勿論徹底的根本的なものではないが、それでも尚これを今日まで彼等が支那に對して執り來つた態度に比すれば、非常な相違である。彼等はこの特典的讓歩を以て、支那の不平を緩和

し、これに希望を繋がしめて、合理合法な國權回復の手段に滿足するものと信じ、假令南方派といへども、破壞的方法によつて、その目的を達せんとするのものとは、夢想だにしなかつた。然るに今度の漢口九江事件である。そのショックとセンセーションの大きいのも、最もな次第である。

支那は南北を問はず、自己の成功に自負し、列國の狼狽を冷笑してをるが、列國は恐怖と失望の餘り、從來の如き寛容の態度を一變し、再び高壓手段に逆戻りせんとしつゝある。漢口九江事件の爲に、[上海廣東事件以前の事態に逆轉せんとしつゝある。折角接近しかけて來た支那と列國との關係は、これが爲大なる間隔を生ずるに至つた。これ大いに悲しむべきとである。尤も列國といつても、本文起草の時迄は、肝腎な英國も、却つてその態度を明かにしない。本國のロンドンでは、一體ヤング・チャイニースにやられたジョン・ブルは、腹立つとを忘れたのかと思ふ程に、落付いてゐる。それはむしろ驚きの餘り度を失ふた爲かも知れぬが、しかし、その方が、うつかり口を開いて腹を見する小田の蛙よりも遙かに悧口かも知れぬ。たゞ上海の方からは、頻りに英國側の態度が强硬で、大々的なガンボート・ポリシーによつて、漢口を取返さうといきまきつゝあるやうであるが、それが果して本國の意思であるかどうかは疑はしい。英米はミリタリズムよりも、ネーヴアリズムの國である。日本も追々その傾きが强くなりかけて來たが、英國の對支政策は、その南支那に關する限り、元來香港政廳と支那艦隊司令官との力によつて、左右せらるゝとが多かつた。又これによつて誤られて來たとも多く、近くは廣東問題、萬縣事件等が即ちその適例である。

當の英國の態度がそんな風である位であるから、米佛諸國の意嚮も善くは分らぬ。彼等は勿論南方派の戰略は いはゆる各個擊破であつて、英國の次ぎには、自國の番であるとを知らぬではないが、それだけにまた容易にその腹を見せない。肝腎な英國にもまして、遙かに騷ぎの大きくなつたのは、わが日本である。その日本では、南方の排外が、主として排英を目的とし、日本に對しては、寧ろ好意を表してゐるやうにも受取られ迫てはこれを免れぬにしても、目前の無事に、刹那の安を偸む一方には、英國の難儀を他人の身の上として、餘りにこれを重大視せぬ風すらあつた。たゞ將來何時かは北伐軍と奉天軍との衝突の結果、問題が再び滿洲に飛火して來るであらうとし、これのみが主たる心配であつた。しかし、それもまだ間のあることであるし、且張作霖の運命も、追々末路に近づきつゝあるとが、やゝ明白に我國民の眼にも映ずるやうにもなつて來た等の關係

から、張作霖を援助しての赤化防止論など、一部軍人の運動程にはきき目がなくなりかけてゐた。

然るに、漢口事件の勃發以後、わが國における騷ぎは、遙かに大きくなつて來た。漢口事件直接の被害者は、勿論英國であるが、しかし、その本國は支那を距ること遠く、我れとの距離は近い。且、英國の被害は、遡つて日本にも及ぶのであるから、いはゆる對岸の火災視してをる譯には行かぬ。寧ろその覺醒を遲しとする位である。われ等はそれ故、支那の國民革命が、その對內對外共に非常な重大性を帶びてゐることを、不斷に警告して來たのである。その警告は、勿論これによつて、その重大性を認むると共に、豫め必要な自省と愼慮をし、正當な對策を講ぜしめんとする爲に外ならなかつた。然るに、今日までその重大性に氣付かず、心に十分な用意のなかつた國民は、今度の漢口事件に驚き慌て、必要な反省と愼慮とをする代りに、甚[redacted]な方向を取らんとする傾向があるに至つた。支那の行爲は、勿論亂暴至極な不法行爲である。これが爲列國の憤りを買ふに至つたのは、支那自ら招くところである。われ等は支那の爲にこれを悲しむ。日本が列國と共に、これに抗議し、自衞の道を講ずるとは、當然の措置である。一應この措置を講じて置くとは、事件をより以上に擴大せしめざる爲にも、彼我の利益である。しかしながら、今ま遽かに慌て、それ以上の行動に出づるとは、反對に事件をより以上に紛糾せしむる所以で列國の爲にも利益であるまい。

## 二

で、漢口事件が起つてから、わが國で遽かに騷ぎ立てられる議論は、大體

一、條約の不可侵權
二、支那の赤化防止
三、不干涉主義の撤廢
四、中間勢力の援助
五、列國との協調
六、日本の單獨行動

等である。以下先づそれ等の諸項につき、先づこれを解剖し、批判して見る。漢口事件について、第一に問題となるのは、條約の不可侵權である。支那が英國租界を武力により占領し、管理せんとするのは、これ即ち條約蹂躪以上に、國際現狀の破壞である。列國がこれに向つて抗議をし警告をするのは、當然過ぎた程のとである。われ等も勿論これに贊成である。だがこれには幾多の疑問がある。第一には實際上の疑問である。

直接の被害者である肝腎な英國が、先づこれに抗議をし、その返還を支那に迫るかどうかは、今のところ尙明白でない。抗議して返還を迫り、而してはね付けられた場合には、恥の上塗である。この恥辱を免るゝ爲には、何時の場合にも、抗議に伴ふ制裁力が必要である。この制裁力には、又勿論相當の効力が伴はねばならぬ。これまで、列國が支那に向ふには、たとひ單獨でも將た聯合でも、强者の弱者に對する一種の威力があつた。これが即ちブルジョア帝國主義の有する無形の威力であつた。しかし、大戰以後この威力は、漸次に衰へて來た。たゞ一片の最後通牒だけでは、トルコを動かすこと能はぬやうに、支那をも動かすことが出來ぬ。廣東事件でなま血の出るやうな新經驗を嘗めさせられた英國は、漢口事件に對しても、容易にその拳を振り上げやうとしないのは、この爲であらう。

この無形の威力以外に、實際の威力をその抗議に伴はしむるには、勢ひそれだけの武力を用ゆる外には、道がない。當の英國はそれをも考へてゐる。しかし、南京にその軍艦を集中することは出來ても、冬期減水の關係で、漢口まで必要な艦船を溯行せしむることが出來ぬかも知れぬ。假令又漢口以上の奥地における居留英人全部を上海に避難せしめ、漢口だけを砲撃し占領して見たところで、若し北伐軍が四川の山奥にでも逃げ込むこと、猶義和團の時における西太后の如くであつたなら、矢張八ケ國掛つても、これをどうすることも出來まい。老功な英國はこれをも考へてゐるかも知れない。兎に角、今の時代には、實力なき抗議は、何の効力もない。これを知つた英國が、當の原告でありながら、何の告訴もしないのに、直接の被害者でもない日本その他の諸國が、これを告發して見たところで、裁判官でもない支那の被告には、何の痛痒をも感ぜしめぬであらう。しかし、假令その抗議は、いかにフキーブルで無効であること、丁度今わが霞ケ關外務省の試みてゐる、北京政府の附加税實行に對する抗議のやうなものであつても、その抗議はたゞ抗議せん爲の抗議、抗議せぬのは、これを承認したことになるのを恐れるからだといふだけの、所謂ペーパー・プロテストであるなら、勿論これをするだけはせねばならぬが、同時にそれでは大した効力もなく、且それで問題が何等の解決を告ぐるといふ譯でもあるまい。

次には理論上の疑問である。これはキリスト教的文明國家乃至白人優越の見地からは、勿論問題とならぬが、反對にその資本主義帝國主義の犠牲となつた所謂劣等民族からは、幾多の抗議がある。そも〳〵、舊政治學の思想に隨へば、白人は神の使命を帶び、キリスト教的文明を世界に宣布するもので、これに

隨はぬ劣等民族は、強制的にこれを制服しても構はぬと敎へてゐる。日本でも大戰以前まで盛んに讀まれたパーチエスの政治學などにも、立派にその記錄を留めてゐる。かゝる原理から成立つた劣等民族の條約――ペヨネツトの先きで締結されるのを原則とした弱國の條約――現に阿片戰爭、北支那戰爭以來、一砲門の前で調印せしめられた支那の條約――それがその當時から八十年の今日に現存してゐる條約を、他の文明國家、對等政府の間に交換された條約同然、飽迄神聖不可侵なものとして、それを遵奉せしめやうとする十分な忠誠心を、支那やその他に要求することが、果して現在の正義觀念と一致するであらうか。假令強制的でも既に調印したには、遵守の義務があることは勿論であるが、しかし、右は何れも單なる法理論であつて、道德論ではなく、そして、その法理論としては、實際の制裁力が伴はねば無効であるし、道德論としても、時代と共にその主觀に相違のあるを知らねばならぬ。

法律學者は、總べて既成の法律を重んじ、國際法學者も、また總べて既成の條約を重んずる。これを重んずるとは、即ち既成の文明、既成の社會を重んじ、その法律と秩序を維持する上に、絶對の必要があるからである。しかし、その既成の文明社會に加入する資格のない國家や、民族と認められたものには、またこれ程不利不便な約束はない。現にわが國は維新以後三十年を經て、始めて條約改正の目的を達した時、歐米の文明國家から、また始めてジ・コミテイー・オヴ・ネーションス、即ち國際禮讓の仲間に這入つたものとして取扱はれることが出來た。對等の國家として認め、その禮讓の仲間には入れぬが、しかし、劣等民族は優等民族に對し、如何に不利なる條約でも、その信義を守らねばならぬといふのが、白色人種から有色人種に對する約束であつた。わが維新以前の愛國青年は、勿論これに不服であつた。伊藤井上の如き少年が、高輪東禪寺に焼打をやれば、薩長諸藩は外國船焼拂をも實行した。その子孫である現代の日本人は、他の歐米人よりは、少しは違つた感情を以て、隣國支那の國民革命を見てやつてもよからう。當時窮境にあつた日本には、幸ひアメリカ人が同情して與れた。その時のアメリカ人は、幾分獨立時代の精神を維持してゐた爲に、わが日本の同情者ともなり、指導者ともなつて與れた。その通りにわが日本は、支那の同情者となり、指導者となる順序であつたのに、日本の代りにロシヤ人があつた。第二の赤化問題は即ち、これから起るのである。

## 三

支那の赤化論は、勿論漢口事件以後に始まつたものではないが、眼前に極端な實例を見せつけられ、遽かに恐怖觀念を增して來たわが國民には、そのプロパガンデイストに據り、最も有效な時機である。が、こゝに斷つて置かねばならぬことは、われ等も決して支那の赤化を輕視し、否認するものではない。否な何人よりも先きにその恐怖すべきことに氣附いてゐる。さればこそ、その對策を惱まねばならぬといふのである。赤化の結果に驚いて、下手な療治をする代りに、その原因に溯つて、根本的な方法を講ぜよといふのである。且、かゝるプロパガンダを聽く前に、記憶して置かねばならぬことは、支那の排日排英や、國權恢復は、支那とロシアが手を結ぶ前からのことであるといふことである。支那の排外運動や思想起原は、そもそも外國との交通が始まつて、その壓迫を受くるやうになつてからのことである。林則徐の阿片燒却や、義和團事變も、その曲直を別にして、共に同一な思想と行動との歷史的な發現である。新時代の新思想でもなければ、また決して外來の思想ばかりではない。それ等のことは、支那の對外運動云々との題下で、大正十四年九月號の本誌で、國內思想の變化、世界思想の影響その他の十數項に分つて、詳細にこれを說明して置いたものがあるから、こゝではこれを繰返さぬが、要するに、今日支那の排外思想と運動とは、それ自身內在的に固有したものが大部分であつて、ロシアの影響を受けたものは、その細胞組織や、戰術戰略や、いはゆるボルセヴヰーキの革命手段等に過ぎぬのである。故にロシアの指導を受けなくとも、排外の原因は現存し、またたとひ赤化防止の手段により、その影響を受けた部分を除いたとしても、その排外の運動は、勿論無限に繼續せられ、その方法も惡化せられて行くことであらう。結極赤化防止が、問題解決の全部でないといふことを忘れてはならぬ。

兎に角漢口事件の前後から、支那赤化のプロパガンダが、遽かにその調子を高めて來た。その材料の蒐集者散布者は、主として陸軍軍人であるやうだが、最近に至り、彼等は裏面にばかり隱れてゐず、公然とその赤化防止を宣傳するやうになつた。これと同時に、漢口事件の爲に、恐怖觀念を加へて來た上海の居留民や、紡績事業の關係者も、內地に向つて同樣の宣傳に從事するやうになつた。また內地においても、東西の對支關係實業家の間に、これと相呼應して强硬論が唱へらるるに至つた。是等の宣傳は、たゞ支那の赤化の爲に、その排外運動がますます惡化して、既得の條約もその基礎を動搖せられ、投資企業航海貿易の前途が、甚だしき危險を感ずるのみでなく、支那における共產主義の實行は、その國家組織社會思想を根柢破壞し、

朝鮮人臺灣人をも誘惑し、わが內地の人心にも影響し、その安寧を脅かしつゝあるといふのである。で、問題は獨り支那の赤化が、その排外運動を激成するといふのみでなく、共產主義の實行が、日本の存立をも危くするといふ迄に擴大されて來た。で、これを聞くものゝ心には、何となく、シベリヤ出兵當初の赤化防止熱が再燃したと、同じやうな空氣にひたされる感じがする。

これ等のプロパガンデイストは、いかにして國民黨とロシアの共產黨とが握手し、孫文の使者たる故廖仲愷が、熱海においてヨツフエと會見し、蔣介石がモスコーに赴き、歸つて廣東に軍官學堂を創設し、ボロヂン・ガローン以下の顧問總勢二百餘人が、廣東政府に入るやうになつたかの歷史から、ソヴヰエートロシアの細胞組織を輸入して、政治軍事の組織聯絡とその從事者の人格にまで、完全なる革命を加へ、これを勞働者、農民、學生に及ぼし、現在の北伐軍に從事せしめて、恐ろしき成功を擧げつゝある實況を、手に取る如くに、これを筆にし口にするのである。これ等は主としてソヴヰエート組織と、ボルセヴヰーキの手段とに過ぎまいが、彼等はまたその上に、支那は同時に共產主義化し、世界革命化し、その毒手がわが植民地を越へて、國內にも侵入し、傳播するものゝ如くに說き、政治、經濟、思想、國防の諸方面に亘り、支那及び日本との關係を、勞農露國の赤色インキで眞赤に塗り上げ、その赤禍の恐るべき所以を描きて、反動者流の耳を聳てしむるのである。

で、こゝで讀者の注意を促がしたいのは、彼等の宣傳が、その範圍を單なる排外問題から、內政問題に及ぼし、支那がボルセヴヰーキ流義の手段により、わが條約その他の權利を廢棄し、破壞する恐れがあるといふばかりでなく、支那は更に勞農露國の共產主義を學び、且つ第三インタナショナールに加はつて、わが植民地及び內地にも、その毒手を伸ばすといふに至つたとである。これが爲わが國は列國と協調し、若くは單獨にても、何等か斷然たる措置に出でよといふのである。そうしてこれと同じやうな主張は、前にいつた在支商人や、內地關係業者の間からも唱へられる。彼等の意見は、元來自衛的の見地に出てたものであらうが、その自衛を全くする爲には、假令ば紡績業者ならば、その勞働爭議やストライキが、常に共產主義者や、インタナショナールに煽動され、指導される關係がある。又た在支商人からいへば、漢口九江の直接行動暴力手段は、漸次上海其の他に及び、これまた共產主義者等に煽動され、指導されるのである。そこで、たゞ尋常一樣な自衛手段よりも、更に一步を進めて、支那の赤化そのものを防止することを、必要と考ゆ

るやうになり、その結論においては、期せずして一部軍人その他これに雷同する反動者流と、その軌を一にするに至つた譯であらう。平和を希求し、經濟的發展を希望すべき貿易業者、實業家等の口から、不干涉主義の是非を疑ひ、假令單獨にても、斷然たる手段に出でよとの叫びが擧げられるに至つたとは、頗る顯著な事實であり、重大な現象であるといはねばならぬ。

## 四

兎に角、この内政干涉論によつて、問題は單純な條約不可侵論からの抗議警告や、自衞手段に止まらず、こゝに第三の不干涉主義の撤廢論が起るに至つた。自衞以上に强硬手段を取るとは、即ち内政干涉であつて、支那の内政に干涉するからには、先づ從來の不干涉主義を撤廢せねばならぬからである。支那のやうな國柄を相手にしては、純理通りの不干涉主義は成立し兼ねる。日本が張作霖を助けぬといつても、總べての關係は、間接直接にこれを助けてゐると同然である。またこのやうな關係から、支那の疑惑を免るゝ爲、張作霖の入關を阻止するといつたら、これはまた一種の干涉である。現に孫文未だ在世の頃、段張孫の三角同盟で、吳佩孚に當らんとしてをる時、汪兆銘や胡漢民は、上海で新聞記者に對し、日本政府は總領事宛の電報を以て、張作霖の出兵を阻止した、日本は不干涉を標榜してゐるにも拘らず、是れ明かなる干涉ではないか、と詰め寄せたことがある。同時に英米人は、暗に吳佩孚側を援助してゐた。たゞ不干涉主義の効能は、これを標榜することにより、列國同志の間に、公然の拔掛けを許さぬことゝ、一國内においても、これを黑命の垣として、二重外交その他の弊害を防ぎ得ることである。この點からこれを見て、政府としては容易に不干涉主義の撤廢をしてはならぬ、が、同時にこれを撤廢せねば、仕事の出來ぬ場合があらう。又た時と場合とによつては、不干涉主義を抛たねばならぬこともある。況んや支那と日本との關係の如き、必ずしも膠柱鼓瑟の不干涉主義を要とせぬ。時には大に一方を援助し支那の利益を擁護してやらねばならぬこともある。しかし、今一部の論者が、不干涉主義の撤廢を願ふのは、これによつて、いはゆる赤化防止の目的を達せんが爲である。それには先づ赤化とは何かとの問題から極めてかゝらねばならぬ。然らずして妄りにその赤化を防止したなら、却つて支那の進化か革命かを阻止することゝなつて、兩國の利益とはなるまい。よしまたその赤化を防止することが、支那は兎に角自國の利益であつても、それが不可能なことであるなら、時の政府は何迄不干涉主義を確守して、一部野心家の陰謀を禁遏し、國家の危險と損失とを防禦し

なければならぬ。

以上を假りに不干渉主義の原則とし、これを現在の支那問題に應てはめて見れば、一部の論者は、支那の對外運動を以て、專らロシアの煽動や指導によるものとし、また支那の赤化は、單にボルシエヴヰーキ的革命の手段を用ゐるばかりでなく、その共産主義を奉じインタナシヨナールに加入するものであるから、これを根本的に防止する爲、或る干渉の手段を要するといふのである。しかし、支那の對外運動は、決して論者のいふ如く、ロシアの煽動指導のみによるものではない。その證據には、過去において、勞農露國と關係のない以前から、支那には矢張對外運動があり、又現在においても、赤化防止を看板とする北方政府の頑陋官僚ですら、無條件附加稅の任意實施の如き、不法行爲を敢てするではないか。同樣に假令國民黨の右派にしても、その關稅自主の實行は左派に劣らぬであらう。支那の對外運動は、赤化防止のみにより、これを阻絶し得るものではない。次ぎに、支那が單なる過激化以上に、共産化し、世界革命化するかどうかは、これを確知することは出來ぬが、果してそうだとしたところで、支那のやうな國柄では決して他國の壓力を以て、これをどうすることも出來る筈がない。もし、これが一國內のことであつたら、ドイツのスパルタカス、イタリーの共産運動の如く、ヒンデンブルグや、ムツソリニーを以て、これを撲滅することが出來るかも知れぬが、他國の場合には、これを許されぬ。且支那のやうな國柄では、如何なる危險や損失を招く結果となるかも知れぬ。殷鑑遠からず、シベリヤ出兵にある。故にこの目的からする不干渉主義の拋棄は、問題とはならぬ。

## 五

假りに一歩を讓り、その不干渉主義の拋棄を是なりとし、その結果の干渉主義によつて、一部論者の爲さんとするところは、果して何かといへば、即ち中間勢力の援助による赤化の防止である。これまで、その赤化防止論には、呉佩孚か張作霖かを助けて、これをやらせるといふのとその兩軍閥を提携せしめて、これをやらせるといふのがあつた。そうしてその何れも、獨り日本人のみならず、英國人等によつても試みられた。張作霖の西北國民軍討伐も、赤化防止の名によつて行はれ、呉張の聯盟もまた同樣の名によつて行はれた。從來英米派と稱せられてゐた呉佩孚の許に、日本人の策士が往來し、日本の軍人顧問ばかりかと思はれた張作霖の處に、各國の軍人顧問が居り、何れもまた赤化防止の名によつて、その頭目を擁いてゐた。就中張作霖のところに、ゼネラル、サツトンといふ英國人

で、兵器廠の顧問技師を務めてゐるものがある。ゼネラルとは、高が奉天製で、元は義勇兵か何かで大戰に出征し、塹壕の中で腕を負傷したため、一名片腕のサットンとも呼ばれる先生である。この先生大に張作霖の爲に肩を入れ、昨年の夏かに、北京天津タイムス紙に、色々と張作霖の頌德表を掲げ、ピー、テイー、タイムスはまた御丁寧に、社說でこれを紹介し、吳張だけでは困るが、これに孫傳芳が參加する事になれば、英國は大にその吳張孫三角同盟を援助して、赤化防止をやらせるがよいと主張したと杯がある。たゞし、肝腎な吳佩孚は、流れ相撲の蹴取見たやうに、憐れな末路を告げ、一時飛ぶ鳥を落とした滿洲大王も、いよ〳〵足許が暗くなりかけて來た。故に國民黨や國民軍と正面の敵である吳佩孚は勿論のと、張作霖を援助して赤化防止をやらせる議論は、その左右の軍人顧問を除いては、昨今餘り振はぬやうである。

　これに代つた赤化防止は、最新のところで、孫傳芳の援助說と、國民黨の右傾派援助論との二つに分れてゐるやうである。孫傳芳は日本留學出身で、部下にもわが士官學校卒業生が多く、何れも皆な新式の軍人で、比較的新思想を諒解し、從來多少の德政を施して來た爲、地方の人望を繫いでをるから、これを助けて一の中間地帶を作り、赤化の蔓延を防止しやうといふのであるやうだ。しかし、孫傳芳の部下で、股肱心腹と頼まれ、湖北、福建から浙江、江蘇に轉戰し、百戰の師と稱された連中は、南軍の爲に江西で殲滅同樣の運命に遭はされ、孫傳芳自身も、これと前後して、一旦敗軍の將となり、自ら天津に赴いた、昨日迄正面の敵であつた張作霖の軍門に降つた位であるから、第一肝腎な軍事上において、その資格を缺いでをる。その他孫傳芳も元來山東出身の北方軍閥であり、政治思想抔餘り問題とはならぬ上、所謂德政の裏面には、營私の事實もあり、比較的人望があるといふのも、要するに南軍と相容れぬ資本家や、進步黨系のいふとであり、江蘇浙江における多數の人心は、寧ろ南軍の進出を希望してをる。たゞ孫を中間勢力とすれば、一方は蛇蝎の如く憎まれてゐる山東軍や奉天軍の再來を防ぎ、一方は赤化の南軍を阻止するとにもなるのである爲、漢江九江の風聲鶴唳に驚く上海の日英居留民、一部の支那商人には、誠かに請けのよくなつた模樣である。これによつて、一時なりとも、その禍を緩ふすることは結構には相違ないが、但し何時の場合でも、赤化防止の爲の堤防築造は、果してその堤防が十分に堅固であれば格別、然らざる場合、一たびその堤防が、洪水の爲に破壞されたら、その被害は却つて烈しいかも知れぬ。中間勢力の援助は、勿論一の內政干涉、內亂助長であり、又た勿論こ

れを秘密にさるべきものであらうか、支那において秘密の保たれることは甚だ六かしく一たびそれが暴露したら、また却つてその禍が烈しいかも知れぬ。

今一つの右傾派援助論は、要するに國民黨中の非共産派を助けて、共産派に當らしめ、これによつて、同じく赤化防止の目的を達せんとするものであらう。この派の説によれば、獨り上海に盤居しておる右派の長老には、現に國民黨軍の將領で、黨の青年幹部の專制に快からぬ方面から、窃かに欵を通じて來るものもあり、黨軍の中には分解作用が起り、右翼非共産派の擡頭を見ることを遠からずと、唱へてゐるものがあるやうである。彼等右翼の非共産派が、左翼の共産派に對抗し、苦節を守つてをるとは、大に同情に値する。又た黨軍中には、必ず不平分子もあらう。分解作用の起ることもあらう。それは要するに彼等内部のことであり、且つ未知數のことに屬する。もし、それを當てにして、これを援助し、そうして又反對の結果に終つたら、その影響は、前の孫傳芳援助の説について、述べたところと同然であらう。國民黨の長老分子は、その新進分子よりも、わが日本人と縁故が多い。同樣に孫傳芳の部下も、日本軍人との關係が深い。人おの〳〵その同情するところに向つて、精神的援助を與ふることは、已むを得ぬとしても成るべく自力によつて、その運命を開拓して行くことを忠告すべきである。もし、その出でて、物質的援助を與へ、そしてそれが失敗に終つたならその不良な影響は、獨りその人々がこれを蒙るばかりでなく、わが國民全體がこれを受けねばならぬ。

この中間勢力援助については、古今東西に失敗の鏡が少くない。近いところでは、ロシア革命に對する反動勢力の援助ほど、顯著な失敗の歴史はあるまい。北はアルカンゲル、南はオデッサから、東はウラジオストックから、聯合諸國が總がかりで、デニキン、コルチャコフその他の白派を援助しても、結局何の甲斐もなかつたのみでなく、日本の如きは、そのお附合に六七億の金を浪費した。凡そこれ程馬鹿げた戦爭はあるまい。就中浦鹽最後の引上げの時程、見じめな引上げはなかつた。ウスリー線をイマン、スパスカヤ、ニコリスクと、白露と共に退却し、ついにニコリスクから浦鹽半島を節々退却し、赤軍が浦鹽市街に入つた時、白露の首領は我軍を後にし、逸早く元山へと逃げ去つた。當時我軍は、海岸から市街に面する要衝に、土嚢を積んで砲列を布き、背後の乘船作業を掩護する積りであつた。もし、赤軍との妥協が出來なかつたら、如何にしてその引上げを行つたであらうか。筆者は、當時この情境を目撃し、大に立花司令官以下の苦心努力に同情し、敬服した。兎に角、こ

のシベリヤ出兵の最後引上げは、わが國史に取つて、餘り光榮のページではない。島津義弘、加藤清正の勇戰によつて、やうやく釜山乘船作業を全くした朝鮮後役は、やゝこれに比すべきであるが、尙これに百濟の中間勢力を援助し、ついに唐軍と衝突し、白村江即ち群山江に大敗を取つた天智鎌足時代の朝鮮戰役を加へ、我が外征の三大不幸とすることが出來る。我が外征は必ずしも明治の二大戰役の如く、大捷を以てのみ飾られてはゐない。殊に何物かの中間勢力を利用した時程、その失敗は顯著である。天智鎌足の君臣を以てしても、これを救ふことが出來なかつた。後人の鑒とするに足りるであらう。

## 六

次ぎに來るものは、列國との協調回復と、日英同盟の回復說とである。けだし、支那の不法行爲に對する抗議警告、乃至は自衞手段を講ずるにしても、或は又進んで干涉手段を取り、中間勢力の援助等により、赤化防止の目的を達し得る見込があるとしても、或一國だけでこれに當ることは、その能率が少い反對に、危險率が多い。それ故自然に、旣に破鍋に綴蓋同樣の列國協調、乃至覆水盆に返らぬ日英同盟をも、復活して見たいことにもなるのである。さりながら、その列國協調は、如何にして壞れたか。それには大略二つの原因がある。一つは列國の對支協調を形ち造り、これをコンクリートなものとした義和團議定書の調印國中、獨墺露の三國が脫退し、就中露國は、世界のブルジョア國に抗爭する無產國の盟主として、支那の味方となつたことである。今一つは、殘つた議定書調印の國中に不和が起り、一致を缺ぐに至つたことである。然らばその不和と不一致とは、いかにして起つたか。そも〳〵の原因は、寧ろわが日本にある。歐洲大戰の初期に、大隈內閣が二十一ヶ條の要求をし、鬼の留守に洗濯をせんとしたことは、聯合國間の信義を破り、自己の利益に急なるものであるとし、痛く英米の反感を買つた。續いてまた寺內內閣時代に、所謂西原借款により、莫大なる利權を獨占せんとしたことは、これ亦列國の恨みを招いた。主としてこの二原因だけからでも、戰後には猛烈な報復を受くるの恐れがあつた。巴里會議とワシントン會議とは、即ちその機會であつた。米國は支那を助けて、その國權を恢復せしめ、英國も亦たこれを助けたが、實際英米の失ふたところは、極めて少く、日本の失ふたところは、甚だ多かつた。英國はついに日本を振棄てゝ、同盟をも廢棄した。爾來日本は發憤して節を折り、英米に背いても、支那に親しむ政策を取つた。その政策の最高潮に達したのは、臨城事件、上海事件を經て北京の關稅會議であつ

た。そうしてその結果が排日が排英となり、親米が親日となつて來た。日本と英米との對支協調の行はれぬのは、當然の運命であつて、日本は英米よりも支那を必要とした。そうしてやゝその目的を達せんとしてをる。それに今度支那を離れて、英米と親しみ、その協調を回復せんとするのには、餘程の理由があり、且つこれに深思熟慮を費やした上でなければ、容易に決定は出來ない筈の事である。

勿論その協調の回復によつて、果して支那の不法行爲に對する抗議自衞や、所謂赤化の防止に効力がある譯ならば、兎に角であるが、前にもいつたことのある通り、支那に對する列國の無能力は、獨りその協調の力が乏しくなつたばかりでなく、大戰以後の世界的影響によつて、支那に對する列國の威力が地に墜ちた。既に列國の威力が衰へた以上、その協調にも亦威力が少くなるのは、當然の勢である。故に假令その威力の少ない協調を回復して見たところで、支那を威嚇して、その目的を達することは出來ない。歐土の戰爭は、英佛協調の出來にくい適例であるが、その協調の出來ぬのには、それだけの利害感情がある爲であり、又たとひその協調が出來たとしても戰後の世界では、最早無暗にトルコを屈服せしむることは、出來なかつたであらう。そうして、この事例は、正に支那に對する日英の關係に比較して見ることが、出來るのであらうと思う。

この一年間は、過去の數年間に引續き大英帝國の運命に取り、悲しき弔鐘が續いた。植民地は猶林檎の如く、熟すれば落ちるといはれてゐた通り、いよ／＼大きな林檎が落ちかけた。支那では、その王領植民地の香港が、半死半生の目に遭はされた。つゞいて本年に入り、漢口九江の自國租界を失つた。しかも、それはたゞ英國だけである。租界と税關とは、就中英國に取つて、對支優越權のストロング・ホールドである。これをあのやうな事情で失ふたことは、大英帝國に取り、その一指を剪るのと同然であらう。しかし、英國はこの一年間、支那に關して、既に無上の苦惱を體驗した。過去の一年間、上海を中に、北は北京から南は香港まで、苦々しい經驗を嘗めつゝ、人々の意見は所々の意見と共に、區々まち／＼であつた。香港政廳、海軍軍人、公使館、領事館、貿易商人、新聞記者皆それ／＼に意見を異にした。その上、在支英人と本國政府、本國政府と反對黨との間にも、又おの／＼その所說を異にした。その矛盾撞着は、滑稽を極めた程であつた。隨つて又その對支政策も同様に、その調和統一を缺いだことは、關稅會議に對する前後の態度が、不一致であつた通りである。しかし、英國はその苦しい呼吸の中から、一大決心をした。それは即ち

所謂新自由政策として表現された、對支態度の根本的變更である。不幸にしてその政策は、南方派の爲に歡迎されず、折角の苦心も水の泡となつた。右の新自由政策は、固より十分徹底したものではあり得なかつたが、しかし、從來の政策とは大なるデパーチユアであつた。英國以外の何國よりも、全然に進歩的なものである。問題は、英國がやつとのことで、こゝまで進んで來たものを、今度の漢口事件で、忽ちに又逆戻りをするかどうか。第一支那の出方にもよるが、兎に角英國は、このところ、焦慮と默思との混線時間であらう。

英國はかゝる事態にあつて、恐らく未だその一歩を進むべきかも退くべきかも決し兼ねてゐやう。從つて單純なる自衞の外には、容易に列國と何を協調すべきかも、決し得ぬであらう。日英同盟の復活抔に至つては猶更のことである。英國を除き米國は、一方には法律思想で固まつた行政部に對し、ボラーやポーターのやうな理想派を有する議政府がある。ポーターは、過日も對支條約單獨改訂に關して決議案を出したが、しかし、幾ら理想派でも、一方法律家の頭にもなつて考へ、支那が段々赤化して暴力行爲に訴ふる時、同じ理由を以て赤露の承認を堅拒してる米國は、支那に對してばかり寛大である譯には行かぬと考へるやうになるかも知れぬ。故に米國も、自衞手段以上には、急に態度を決して、他國と協調する譯には行くまいと考へられる。そこで日本の協調論者であるが、列國にはまだ昨今日本の貴族院議員や實業家達の如く、强硬手段や、干渉政策を大聲叱呼してゐるものはない。從つてその協調論もまた、何を目的にその協調をするといふのかたゞの自衞手段だけならば、豫てから列國領事と、海軍司令官の間に相當の協調が保持されてゐる。それ以上の强硬手段や干渉政策を、日本自ら先づこれを提議して、そして、その列國の協調を要求するといふのか。是れわが帝國自身の爲、日支兩國の特殊關係上、誠に重大な影響のある言動といはねばならぬ。以上列國協調についての議論は、今度の事件を主とした政治的方面のみに關したものであるが、事衍も經濟問題に關した通商條約、關税税率等については、元來各國共にその利害を異にしてゐるものであるから、國際會議の形式を以て、その協調を保ちつゝ、これを商議して行くこと抔は、元々無理な話である。從つて北京關税會議や、南北の附加税問題等につき、列國の一致せぬとは當然過ぎた次第であるが、こゝにはこれに論及せぬ。

## 七

上述の如き强硬手段や、干渉政策を取る爲に、それ等の

は、列國の協調を要すと說くのであるが、その不可能な場合には、單獨行動をも敢て辭せずとは、東西實業家の宣言書にも見へてゐる。その宣言書なるものは、大要わが條約上の權利に對し、直接不法の行動を爲す時は、如何なる方法を以てするも、これを擁護すべく、列國の協調不可能の場合には、單獨自衞の途を執るべきであるといふのである。しかして、その中には、關稅の自由增加をも加へてゐるが、これはこれまで公表された對支意見中でも、最も具體的な一例であつて、又最も强硬的な一例でもある。平和的經濟的であるべき實業家、しかも未だ英國の如くには、その利益を脅かされてゐないわが日本側から、此の如き强硬な意見の公表されたのを見れば、漢口事件が上海から大坂、東京にかけ、いかに深大な激動を與へたかを知ることが出來る。この一大宣言によつて、わが實業家の受けた感觸を、逆まに相手の支那に知らしむることは、決して無益ではあるまい。さりながら、この警告にも拘らず、尚支那がわが條約橫蹂躙の擧に出でたなら、果して如何なる實際手段を取るべきであるか。關稅の自由增率にも、同樣の最後手段に出づべしとあるに對しては、最早列國の協調を得る見込がないから、日本は直ちに南北双方に向け、所謂單獨自衞の途を採るべき順序であるが、果して如何なる有效手段があるか。一般國民としても、これを承知して置かねばならぬ。何となれば、若し政府が是實業家の意見を採用する時、その全體の影響は、多數國民の上にかゝるからである。

實業家の宣言なるものは、恐らく一時の感情に驅られ、特に彼等の有する實際の利害に逼られ、その十分な効果と、重大な影響とを考へて、しかしてこれをかの宣言書に表現した譯でもあるまい。しかし、現在既に危機に瀕してをる在支利益は、この後更に如何なる侵害を蒙らずとも限らない。この場合、通常の自衞手段ならば兎に角、これに向つて最强硬な方法を以て臨むとすれば、列國の協調は、前にも述べて置いた如く、その必得を期し難いから、即ちわが實業家の宣言の如く、全く單獨を以てこれに當る覺悟を要する。從つてわが國民においても、亦その場合のことを豫め考慮して置く必要がある。尚實業家の主張は、たゞ主としてわが條約上の利權が、直接行動によつて侵犯された時、これを擁護するといふに過ぎぬが、その外には、前に列述して來た通り、支那の赤化防止の爲に、何等か斷乎たる行動を起せとの議論もある。これが爲の中間勢力の利用や、列國との協調は、大體見込がなささうに思はるゝが、それが果して然りであるとし、是等のショウヴヰニスト、ジンゴイストの中から、或はまた全くわが國單獨で、直接に赤化防止に當る

こと、猶わが實業家の條約權擁護の爲の單獨行動と、略ぼ同一の意味に出づることを主張するものが、飛出して來ぬとも限らぬ。この場合のことも、またわが國民としては、一應その利害影響に考へ及んで置かなければなるまい。しかしまだ、既にこの論文の最初から、章を分ち段を逐ふて、解剖し批判し來つた如く、當然な抗議と、正當な自衞手段以外、廣義な赤化防止の爲に、干渉政策强硬手段に依り、中間勢力を援助するか、又は列國の協調に依り、その目的を達し得べきかと問へば、何れも皆な可能性や有効性に富んだものが、甚だ少いのである。さればとて、前段の單獨行動は、假令實業家の宣言である條約權擁護の場合でも、附加税の增率を、南北共に阻止するをさへ、容易に實行出來そうにもない。況んや最も廣義な赤化防止を、わが國單獨でやらんとするやうな議論は、實際問題としては、最早こゝにこれを考慮して見る價値もあるまいと思ふ。

## 八

かやうにたゞ生きた利害感情の重大問題をつかまへて、醫學生徒が死んだムグラを解剖するやうに取扱ふて仕舞へば、何の興味もないことになる。しかし、所謂人間は感情の動物である。然るが故に、人間の政治はまた感情の政治である。理性の指さす方向だけにはその政治は動いて行かぬ。實際支那の行動が餘りに挑發的であるならば、支那に對する日本及び列國の感情は、如何なる事態に、その關係を導びくやうになるかも知れぬ。現在列國の支那に對する感情は、ロシア革命の恐怖時代にも似通ふてをる。このロシアに對する感情は、列國を驅つてあのやうな馬鹿な眞似をもせしむるに至つた。最近英國のマグドナルドが、漢口事件を論じた言葉の中にも、支那現在の如く、暴徒まかせであるならば、英支の衝突は免れまいといつてをる。英國の勞働黨は、最早支那の國民黨に取つては、良友でないかも知れぬが、しかし、マグドナルドでない各國の自由主義者で、支那の同情者であつたものは、支那にかゝる暴力沙汰の頻發する毎に、次第にオークワードな地位に置かれることになる。社會主義者でも、自由主義者でも、苟くも共産主義者か、サンデイカリストかでない限り、直接行動と暴力手段には、反對せざることを得ぬ。況んやこれより右翼の反動團體においておやである。

これについては尙英國史によつて思ひ出されることがある。アメリカ革命から、フランス革命の前後程、英國に自由主義の大政治家、大思想家、大雄辯家が、世を同じうして輩出したことはあるまい。チヤタム、バーク、フオックス、ピット是れであ

る。チヤタム、バーク、フオツクス何れも皆なアメリカの革命や、印度問題に自由正義寛大の思想を以て臨んだが、ことに興味の深いのは、即ち彼等がフランス革命に臨んだ時の事である。フランス革命の初期時代には、英國の識者は皆なクロムウエルの革命を追想して、フランスに人民政治の確立さるゝに至るであらうことを喜んでゐた位である。然るに漸次恐怖時代に入るに及んでから、ロンドンの社會は顏色を青くした。この時バークの『フランス革命に關するレフレクション』一書が出で、人々爭ふてこれを讀んだ。曾て議會においてヘスティングスを彈劾し、正義自由の神の如くに思はれたその大雄辯家の筆によつて、フランス革命の罪惡を糾彈したのであるから、英國の人心は一朝に變じた。かのピットは、初めレアツセフエーアの非干渉主義を持してゐたのであるが、フランス革命派が、今のベルジユームに侵入した報道と殆ど同時に、ルイ十六世の斬首せられた報道が、ロンドンに達した爲、擧國狂するが如く、ピットもついに英佛の開戰を阻止するを得なかつた。かくしてこゝに二十餘年に亘る大陸戰爭が始まつた。フオツクスのみは、獨り冷靜を失はなかつたのであるが、それも後年入閣して、帝國の事を觀るに及び、矢張フランス嫌ひの仲間になつたといはれてゐる。英國はこのフランス嫌ひと、長期に亘る戰爭の爲に幾らの損をしたかも分らぬ。戰爭の爲には、長く財政經濟上の困難を來たしたとはいふまでもないが、フランス嫌ひの爲には、極端な反動思想の勃興となつて、種々の改革案に、これが爲に阻止せらるゝものが多かつた。政治の停滯と經濟の困難は、後年相依つて急進的社會運動の原因をなし、動、反動、反々動の順次を、その原則通りに通過した。フランスの受けた影響は、特にこゝに擧ぐる必要もあるまい。元來支那國民革命の事業を、現時の程度において、これをフランスに比照するとは、大に不倫であるに相違ない。たゞし、それは、その有する事物そのものを比較する積りでなく、事實を借りて、その有する感情を表現せしめ、革命と反動と、共にその極端に流るゝとの、兩つながら相損する所以であるとをいふに過ぎなかつた。

最後に自分は自分の結論をこれに付し、多少の意見を添ふる積りであつたが、〆切最後に筆を執り初め、時間の餘裕を失ふた爲に、以上の史論を以て、假りに結論に代はらしめ、自分のレフレクションをこれに寓せしめることにした。

一九二七年、一、一五

# 時評

## 解散か總辭職か

吉野作造

昭和二年初頭の我が政界の形情は、暗中模索と云ふ一語で盡くる。登場の役者は目當てもなくて頻りに何物かを探ぐり摑まうとして居る。摑むべきものの何であるか又之を摑むにはどうすればいゝかは、固より見物人には分つて居る。而して之と本當の芝居との異る所は、後者に於ては見物人が役者の活動を面白がつて見て居るのに、前者に在ては役者が極度の緊張振りを見せて居るに拘らず、見物人が一向氣乘りのせぬばかりか、中には宜い加減に切り上げて呉れればいゝと苦り切つて居る者の多いことである。

憲政會は取つた天下を離すまいとする。併し下院に過半數の味方を有たぬ彼れに、固より永く之が壟斷を主張する權利はない。只倖にして他にこの讓渡を主張し得る正當の資格者が現はれないので、此處まだ暫くは天下をお預り申して居れるのだ。今の若槻内閣は謂はば正當の主の現はれるまでの間の遺失物保管者といふ形のものに過ぎない。

若槻君の一派にして遺失物保管の任に當れるものなら俺だつてそれをやれぬことはない、と云ふのが在野兩黨の肚だ。何とかして代つて自分が之をやつて見たいと云ふのがそれ〴〵兩黨の切望であるらしい。併し惜むらくは彼等には表面から之を要請するの權利はない。兩人聯合すれば資格の略ぼ備はることに大抵間違はないが、天下を取つた上の實の分配に關し兩者に相容れざる根本的の阻隔がある所から、熟柿を鼻の先きに眺めつつも斷乎として男らしき提携の實を舉げ得ずに居る。一時の野合に正當の資格がつかぬは論を待たず、さりとて後勝手程度の媒合では猶更世上の疑の深くなるを如何せん。こゝに在野兩黨の煩悶があるのだ。

何時まで天下を持ち續けるか分らぬと云ふ有樣を見ては、田中黨にしても床次黨にしても、いま〳〵しくつて堪らぬものがあるに相違ない。滑稽でもあるが亦眞に同情にも値する。

そこで在野兩黨は、進んで取るの權利も方法もないのにあきらめをつけ、今や政府をして投げ出させるの方策に、戰術を轉換じた。その爲に選んだ手段には二つある。一は現内閣には遺失物を管理するの資格も能力もないと頻りに糺彈の大砲を放つことである。或は現内閣の政策を批駁してその所謂失態を數へ、又或は其等の失政如何に拘らず根本的の心掛が土臺不埒を極めて居ると罵るなど、皆この目的に出づるものである。二は出來る丈けの力をつくして遺失物の實際管理を不便ならしむることである。或は貴族院の多數派を動かして政府を牽制せしめんとしたり、又或は下院に於ける各種委員長を野黨に獨占して政府の手足を封ぜんとしたりする。之には政府も大に困らされそうだ。併しそれかとて政府が野黨の期待通りに預つたものををめ〳〵投げ出すかどうかは今のところ未だ分らない。

政府には解散と云ふ武器がある。今の議員は朝野兩黨を通じひとしく皆解散を嫌がつて居ることは疑ない。併し個々の議員の立場を離れて黨全體としての利害を考ふれば、解散の政府黨に有利なるは固よりいふまでもない。それ丈け解散の威は在野黨の大に苦痛とする所である。さればこそ彼等は解散なし政權投げ出しといふ蟲のいゝ注文をつけてゐるのではないか。所でこんな蟲のいゝ注文は一體多少でも實現の可能性があるものだらうか。一寸考へると、如何に貧弱な若槻内閣でも、斯んな子供だまし見たやうな落し穴には陷らぬだらうと思はれるが、實は必しもさうではないのである。必しも理路の命ずるが儘に動かぬ所に、いつも云ふ事だが、我が國政界の變態たる所以が存するのだ。然らば如何なる場合にその實現の可能性があるかといふに、(1)政本兩黨の本當の緊密な提携が出來、從つて、(2)之に應じて貴族院の多數派が確實に憲政會を見すてたとき、即ち是れである。斯うなれば否應なしに若槻内閣は詰め腹を切らさるるにきまつて居る。だから政本兩黨の何等かの提携に依て政局の轉換を企圖するものは、一に皆この目標を狙つて邁進するのである。が、色々な行掛りはまたなか〳〵その完全なる實現を許しさうにない。而して之に類した又は之に近い形勢を無理に作り又は徒らに之を誇示する丈けでは、容易に内閣を倒すことは出來ないと思ふのである。

若槻内閣は貴族院に運動することに依て政本提携の進行を阻止せんとしつゝあると云ふ。研究會を通じて政友本黨を牽制すると云ふは在來慣用の方略には相違ないが、研究會の今なほ

易に動かないのは寧ろ政本提携の眞の實現に未だ十二分の信頼を置かぬからではあるまいか。在野兩黨の提携が護憲運動當時の如き緊密な成立を見んか、如何に若槻首相の懇切なる哀願があつたとて、あの研究會は決して今の樣な態度を持ちつゞけるものではない。現内閣の上院操縦を全然無効無用とは云はないが、政本兩黨の眞の提携の成否は上院の態度如何に因ると考ふる者あらば、それは大なる誤りであらう。

政本兩黨の眞の提携が完全に出來て居ないと云ふ所に、憲政會内閣が動もすれば解散の武器を振りかざし得る餘地がある。正當な所有主が現れたでなし、無理に預りものを渡せと迫るなら、解散を以て天下の判斷に之を爭ふと云ふのは、蓋し理の當然でもあるからだ。そこで今度の議會は果してこの勢の示す通り解散になるだらうかが問題となるのである。

政界が斯うした形勢にまで持つて行かれたことはいゝのか惡いのかは姑く別問題として、こゝまで持つて來たに付ての殊勳者は疑もなく政友本黨である。併し政友本黨は何の爲に斯かる努力に骨折つたのか。憲政會と絕ち政友會に接近するの結果或は解散に導くことあるべきは元來豫期し得ざる所ではない。而して解散は政友本黨の最も厭ふ所ではないか。之に依て彼は徐々その勢力を縮殺さるる恐れあるを以てである。尤も彼は憲政會と結んで居つても稍勢の促進を避け得なかつた。於是今や彼は寢ても不利起きても不利と云ふ極めて都合のわるい窮境に陷つたわけである。何とかして局面の轉回を圖らずしては、或は恐る遂に自滅の運命を免れぬかを。而も自らを救ふ唯一の途は云ふまでもなく政權を握ることの外にはない。政權に對する慾望は無論政友會にもある。併し政友本黨に取つては之が實に死活の問題なのだ。政友本黨最近の行動の中には實にこの根本動機から觀察しないと分らないことが多い。

床次總裁は去秋若槻首相を官邸に訪ねてそれとなく政權の圓滿授受を求めたといふ風說がある。その眞僞は姑く措くとして、首相に快く讓るの考なきを見抜いた以上（而して自分には正當の權利として之を要求するの資格なき限り）、何とかして相手方に投出さすより外に自ら之を掴む道はない。即ち現内閣をして政權を投げ出さざるを得さらしむべく苦心する所以である。それには政友會と或る程度まで結ばなければならぬ。結んで互に力を合せ、之で押したなら或は期待通り投げ出さぬだらうかと云ふのが、包む所なき彼等の肚裡だらうと思はれる。然るに之には新に一つの離隔が現れて來る。政友會と結んで現内閣を倒すに成功した曉その跡を誰が取るか。當然に問題になるのは、政友本黨よりも數的に優勢な政友會であるまいか。それで

は何にもならぬ。本黨としては、已むなくんば自分に都合のい內閣を作ることで滿足する。孰れにしても政友會內閣の出現だけは妨ぐる必要がある。是れ彼が政友會との提携を策するに當り、內閣倒壞といふ共同の目的には力をあはせるも、それ以後の政局拾收は白紙で行きたいと主張する所以である。そこで政本提携は遂に本物になり得ないのだ。從てまた弱い若槻內閣までが之を見透かして强がつて居れる所以なのでもある。

斯く觀ずると、最近の政局は要するに政友本黨の打つた芝居の展開に外ならない。うまく行けば政府に投げ出させ自分が之を拾ひ得るかも知れぬ（自分が拾ひ得ると本黨の考へるのは、どうせ野黨の地位に下るものとせば憲政會は政友會と結んで自分達に當るよりも、多分暗に自分等を援けるだらうと豫想するからである）。けれども わるくすると解散と來な いとも限らない。解散はいやだが、此儘ぢッとしても居れぬので動いては見たっけれども政局の展開が意外の方向を取り、結局解散とでもなりそうなら彼等はまた別に考へ直さぬとも限らない。どう考へ直すかは今より豫測は出來ないが、兎に角政局の今後どう發展するかは一に繫りて本黨の態度如何に在ることだけは明白だ。本黨もあゝまで力み返つた以上今更拔いた刀を故なく鞘にもおさめられまい。故に自然の勢として解散を見るは本來必然の數だとは思ふけれども、鍵を握る者の眞の要求の那邊に在る思ふとき、或は意外の局面轉回を見ぬとも限らないのである。少くとも內閣の總辭職を見るの見込は思つた程濃厚でないことだけは明だ。諒闇と關連して考ふると、この考は一層强くなる。故に問題は寧ろ解散か總辭職かと云ふに非ずして、或は解散か居据わりかといふ形になるのかも知れぬとさへ思はるる。

併し斯んな事柄は我々の周圍の人々に取て更に興味を惹く問題ではない。そんなら我々は政治に興味を有たぬのかと云ふに、さうではない。無產政黨問題などの八釜しく論ぜらるる所を見ると、寧ろ最近一般民衆は政治に對して殊に著しく興味を感じ始めたと謂つてよからうと思ふ。然るにも拘らず、現實の政治狀勢に痛痒を感ぜざること斯くも甚しいのは、畢竟當今政客の關心する所全然我々の利害と沒交涉だからではあるまいか。亡ぶべき階級のことは深く硏究するの必要もない樣なものの、無產階級の政治運動が普選の實施と共に具體化し、新に之等政黨の間に馬を進めて劃策する所あらんとするのなら、矢張り這般の情誼にも若干通じておくの必要はあらうかと考へる。

× × × ×

以上は現在の政局を有りの儘に觀て正直に之を解剖したのであるが、之に對して吾人は如何の判斷を爲すべきであるか。寧

ろこの方の考察が我々に取つて必要である。殊に各方面の政客が各々爲にする所あつて説く所の言論主張に對しては、我々は常に特に不偏不黨の見識を以て之に臨むの必要がある。斯う云ふ立場から私は次に最近唱へられて居る二三の問題につき卑見の一端を述べておかうと思ふ。

第一に問題となるのは諒闇と政爭との關係に付てである。諒闇中といへども國家の大事は放擲することが出來ない爭ふべきは大に爭ふと、野黨側には無遠慮な挑戰的態度を宣示するものがある。すると之に對して政府側も亦同じく國家の大事に藉口して、諒闇中といへども解散の奏請を遲疑せざるべき旨の決心を諷示したりする。正直な國民は御大喪を控へて心の鎭た安まらざるに、斯んな物騒な宣傳の投げ合に遭うて氣が氣でない。一體之はどんな風にあつていゝものか。

私人の間に在ても喪に服して靜肅謹愼を尙ぶは人情の常だ。況んや國家の大喪に會してをや。故に諒闇に際して大抵の爭は之を差控へよと命ずるは、國民の良心の聲として之を聽くべく又輿論の要求として政界に之を迫つてもいゝ。但し諒闇中といへども國家の大事は放擲すべきでないと云ふは、理に於て固より正しい。故に眞に國家の大事ならんか、吾人は之に就て政界に波瀾の起るをも辭すべきでない。が、只問題はその事の果して國家の大事なりや否やの點である。國家の大事といふに口實を藉りて無用の爭を起すの弊は、此際特に戒飭するの必要あるを信ずる。

この點に關しては、今のところ朝野兩黨とも頗る不謹愼なるの嫌なきを得るか。

就中私共の最も不快に感ずることは、去年の秋以來はじまつた内閣倒壞運動を在野兩黨が諒闇明けまで待ち切れず、議會の開ける早々再び之を繼續せんとして居ることである。諒闇の不幸が無かつたら、若槻内閣は今頃は疾うに倒壞して居たかも知れぬ。天下の不幸のお蔭で消え掛つた生命の延びたのは　在野黨の甚だ心外とする所であらう。此上永く續かれては實際の打算の上から云つても非常に損だ。そこで何とかして一日も早くその倒壞をはからんと焦慮するに無理もない。が、併し我々國民の立場からいへば、諒闇の此際何も急いで内閣を換へねばならぬ必要を見ないのである。我々は固より若槻内閣に滿足して居るものではない。けれども之に代つて如何なる良い内閣の出來る見込があるか。權兵衞に代ふるに田吾作を以てする丈けの話なら、何も無用の大騷ぎに心を痛めて内閣の更迭を求むるの必要はなからう。故に内閣倒壞の問題は、成る程政黨に取ては大事だらうが、國民に取ては實は大事でも何でもない。少くと

も諒闇に拘らず急いで之を持ち出すを許さねばならぬ底の大事では斷じてない。況んや政黨者流の內閣倒壞運動には、中にまた多くの忌むべき陰謀的分子を伴ふものあるに於てをや。

× × × ×

第二に議會に過半數を制せざるに至つた現內閣は當然辭職すべきであると云ふ議論がある。最近論壇の一部に之を主張するものあるが、之は多分佛蘭西あたりの慣行を誤解した說だらうと思ふ。議會に於ける形勢の變化に伴つて內閣の如何に行動すべきやに付ては元來英國式と佛國式との二つのやり方がある。議會に過半數を制し得るものでなければ內閣を作れぬとする點は双方とも同一だ。從て現在の內閣が何等かの事由に依てこの過半數の基礎を失つたとすれば、彼れはその儘その地位に留ることが出來なくなる。然らばその場合どうするかといふ段になると、英と佛と其のやり方が違つて來る。英國式では議會に解散を命じ總選擧の結果に依て去就をきめるのだが、佛國式では總辭職の決行に續いて新に議會諸黨派の新聯合を策し、その支持に依て別個の內閣を造らしむる。解散するが如きは殆んどない。而して英國と佛國とこの二つの式を別々に發達し來つたに付ては、各々その由て來る所がある。之を無視して一を他に强ふるの許しがたきは固より云ふまでもない。

若槻內閣の前身たる加藤內閣は護憲三派の支持する所であつた。三派の協調破れて後の第二次加藤內閣は一轉して政友本黨の事實上の支持を受け、依然として議會の過半數を制することが出來たのであつた。然るに最近に至り政友本黨は若槻內閣の支持を公然斷つた。のみならず野黨の政友會と結托せんとするの色をさへ示して居る。之が若し佛蘭西であつたら、議會開會の劈頭政府信任案の提出を見、之が政府の不利に決定されて總辭職となるのが當然の順序である。斯くありて世人は毫も之を怪まず政界亦而之を面倒とせぬ。今一部の論者が若槻內閣に總辭職を迫り解散奏請の不當を說くのは、思ふにこの佛國式の慣行をその儘我國に移さんとするものではあるまいか。

外國の慣行を眞似るといふことにはそれ自身何のわるいこともない。併しいま卒然として從來に例の乏しい佛國式慣行に倣はんとするに付ては、先づいろ〳〵考へて置かねばならぬ事がある。第一に佛國の慣行は同國特有の小黨分立の政情に基いて發達したものである。第二に我國では從來主として英國の式に則つて來た。その結果第三に俄に慣行を代へるに付ては新に整備せねばならぬ事柄が澤山ある。少くとも以上の三點を考慮しなくては俄に佛國式慣行を我國に移す譯には行くまいと思ふ。

佛國の政黨が十數個の小黨に分れ、その最も大なるものでも

三つ四つを合せないでは過半數を制し得ぬことは、人の知る所である。昔はさうでもなかつたが、今は之で政界の形勢がかたまり、何度選擧をやり直したツて英國のやうに一黨を以て議會に優勢を張り得ると云ふ見込は全然ない。加之それ等多數の小黨間には、遠心的傾向が格別に强くして合併聯携などいふことは到底期待されない。況して選擧に臨む爲の聯携の如きは、昨今問題に上つたことすらない。故に佛國では、選擧はたゞ政界在來の分野に多少の小變動を來すにとゞまり、政界の難關を疏通する役には一向立たぬのである。是れ佛國に於て英國式の事實上到底採用され難き所以である。

我國の政界が結局英國の樣な大政黨主義に落ち付くか佛國の樣な小黨分立に歸着するか、今の所はよく分らぬと云はなければならぬ。議會開設の當初は何れかといへば小黨分立に近い形勢であつた。それが段々大政黨に統一され、殊に明治から大正に掛けては殆んど英國と同じ樣な形勢になつたと謂てい〻。從て今日のところ政界の多くの慣行は主として英國式に則つて居るのである。政友會分裂以來新に三派鼎立の新形勢を馴致したが、若し普選の實施が無かつたら、之がいつまで續くかは大なる疑問であつたと思ふ。普選に依て無產政黨が出現する。之が或る意味に於て政界混亂の一因をなし、遂に我國をして小黨分立の國たらしむることがないだらうか。之等の點に付ては猶ほ論ずべき點多々あるも、之は別の機會にゆづるとして、玆には唯從來我國は政界の行事につき多く英國式に則つて來たことを注意すればい〻。將來或は之に依り難き日の來ることあるべしとするも、今の所は英國式の慣行を原則と看做して怪むものはないやうだ。加之政界の現狀も亦之を原則とするに甚しき矛盾もないのである。何となれば今は一黨にして過半數を制するものはないけれども、解散に依て斯かるものの現出するは必しも不可能に非ず、少くとも佛國の樣な決定的小黨分立の形勢は急には來ぬだらうと思はるるからである。

以上の觀測は、少くとも當分我國の政界では英國式の慣行を行はれしめても差支はないとの結論に到達せしむるものである。而して立憲政治は民意を基礎とするものなる以上、外に之を非とする理由なき限り屢々民意に問ふを不可ならずとする以上、解散を以て政界疏通の一便法とするは理に於て當然でもある。して観れば我國論壇の大多數が今日の政局の當然の歸結として近き將來に於ける解散を期待し、且つ政府に迫つて必ずしも之を回避すべきに非るを說くのは、正當の見解といはねばならぬ。

假りに我國政界の現狀が英國式に則り難き特殊の事情に在り

としても、之に代ふるに佛國式を以てする爲には、豫め幾多の特殊慣行が成立して居なければならぬのである。例を佛蘭西に取るに、内閣が議會過半數の支持を失つて總辭職を決行したとする。辭表を受取つた大統領は直に上下兩院の正副議長をその官邸に招いで、誰に後繼内閣の組織を托すべきやを相談する。正副議長は希に議會内部の形勢を按じ、此人ならばこれ〳〵の黨派の支持をうけて過半數を制し得べしと見込をつけて適任者を推擧する。そこで大統領は改めてその指定された人を招ぎ組閣の事を托する。不幸にして承諾を得ねば正副議長會議を幾度も繰り返して結局適任者を見出すまで努力するのであるが、幸にしてその推擧する所の人が承諾を與へると、今度は彼が各方面の政友と相談する段取りになる。斯くて顔觸れをきめ、又その閣僚なるべき人を通じてそれ〴〵所屬の政黨の諒解を求めて、始めて新内閣は出來上るのである。斯う云ふ所から佛國の政界には始めから絕對的の敵味方といふものはない。政策の持ち寄りでどの黨派も妥協に應ずるを苦としない。否、妥協の用意を常に有つて居ればこそ内閣の成立も可能なのである。絕對に妥協を排してはてんで政治は出來ぬからだ。是れサンヂカリズムが獨り佛國に於て盛なる所以でもある。餘談は兎も角、以上の如き慣行がすら〳〵と殆んど自働的に行はれるので、内閣は輕々しく辭職することも出來るわけである。然るに我國は何。内閣は辭職してもその跡を何處でどうして決めるか。之を決めるに付て議會各派の意向がどれ丈け顧慮さるるか。之等の點が丸で豫定されて居ないでは、迂つかり内閣にやめられて跡がどうなるか分つたものでない。やめて行くものはいゝとしても、夫れでは國民がこまる。跡をどうして纏めるかの合理的な慣行が或る程度まで確立されなくては、容易に佛國式は眞似るべきものではないと考へる。

× × × ×

さうすると第三に現内閣としては此際どう處すれば國民の要求に合うかの問題が起る。私は前段に於て、佛國式に則つて總辭職を迫るの頗る理にもどる所以を指摘した。併し之は野黨が政府に辭職を要求するの謂れなきを說くにとゞまり、政府の進んで辭職するを阻む意味ではない。解散しても次の選擧に勝算なきことの極めて明白な場合には、無用の擾亂から社會を救ふ爲から云つても、おとなしく辭職した方がいゝといふ理窟もある。萬一を僥倖して勝手に公器を弄ばれては堪らない。選擧に在ても相當の投票を得るの見込もなくて世間を騷がす者を取締るため、二千圓の供託金を沒收するの規定を設けて居るではないか。供託金の沒收に値する程度のものなら始めから斷念した方

が德義上の要求にも合する。之と同じ意味で、現内閣がこの先きの勝算覺束なきにあきらめて男らしく投げ出さうといふのなら、我々敢て之を引き留むるの理由はないのである。

併し事實、政府は自らの立場をさう卑下しても居まいし、從來の例に徴し或は意外の成績を總選擧の結果に期待して居ぬとも限らない。實際問題として自發的辭職は先づないと觀ていゝのだらう。然らば結局落ち行く先きは解散の外に途はないことになる。

繰り返していふ、この際解散を見るのは國民として誠に迷惑の至りだ。諒闇中の事でもある。我々はモ少しの閒靜肅愼重の態度を持ち續けて行きたい。併し勢のやむべからざるものあらば、解散も致方がないとしよう。只この場合我々の切望に堪へぬのは、如何に處置するにしても、理義の明白なる筋道だけは徹頭徹尾踏み誤らざらんことである。若し夫れ將來の問題として、我國の政界が英佛二式の孰れを多く則るべきやに付ては、總選擧の結果に依て徐ろに研究するを便とすべきであらう。政界最近の形勢より推し、且つ普選の之に及ぼす影響を考へると、總選擧後の政界の分野は或は意外の變調を呈することがないとも限らない。この分野を早くきめる爲にも、或は解散はよろこんで之を迎へた方がいゝのかも知れぬ。

## 無産階級の陣營に於ける内部闘争

文部當局の研究自由壓迫方策に對して多年極力反抗の共同戰線を張つて來た學者思想家敎育者評論家の間に、去年の學生大檢擧事件の發生以來漸次悲しむべき龜裂の生じ始めたことは蔽ひ難い事實である。文部當局の取締手段を否とし殊に學生の行動に關し大袈裟な檢擧拘留を以て臨んだことを遺憾とする點に於ては、今日なほ一人の異論もないやうだ。たゞ學生の現に懐く所の思想幷に現に執る所の行動を如何に評價すべきやになると、彼等の間に著しき見解の相違あることが昨今明白にされたのである。

學者思想家等の一團は、その始めひとしなみに青年學生の社會科學研究には多大の同情を寄せてゐた。之を抑壓せんとする文部當局の時勢を知らざるの甚しきには、憤りもし又呆れもし

た。從て事ある毎に彼等は無條件に學生側の味方であつたのだ。それが檢擧事件の顚末を聞くに至つて少しづゝ變つて來る。固より社會科學の研究に從事する青年學生の誠實と熱意とには今仍ほ多くの同情を寄せては居る。が、その懐抱する思想と現に爲しつゝある行動とを聞くに及んで、彼等の或る者は實に意外の感にうたれたのである。尤も一部の人の意外とするものを、他に徹頭徹尾賞讃に値すると觀て居る人もないではない。要するに斯くして學生の思想行動に對する學者思想家等の評價は今昨大に動搖を來して居る。二つの立場の孰れを正しと觀るべきかは別に論ずるとして、斯うした事實の存在することだけは今日何人も之を認めずばなるまい。

この點に於て學友新居格君が「新潮」一月號に寄せたる「共産主義は正に學生のもの」中の次の一節の如きは、最も注目に値するものであらう。曰く「學生は社會科學研究の名に於いてコンミユニズムを研究する。學徒として社會科學を研究して居ると云ふよりも、青年コンミユニストを以つて任じながらコンミユニズムを研究して居ると云ふのが當つてゐる。これに對する壓迫の手が下れば、學徒としての研究の自由を防遏するのだと抗議する。彼等は兩と乎との二つをもつてゐる。前の方が學徒としての研究の自由であつて、乎の方がコンミユニズムの研究である。私はしかしその態度をむしろ快なりと見る……社會科學研究會に當局の壓迫が來ると、明らかに共産主義を奉じてゐない左傾思想者をも誘ひ込んで、共同して抗議しようと提議する」云々と。新居君のこの說明には私も或る點まで同感の意を表するに躊躇しない。之と同じ樣な感想をいだく人は世間にまだ澤山あらう。要するに青年學生の社會科學研究は、その内容を純共産主義に限局しその行動の方針を純共産主義的戰術に凝りかためた點に於て、今や識者の問題に上つて居るわけである。

× × × × ×

同じ樣な立場から來る評價の相違は、無産階級の政治運動に付しても起つた。昨年の後半季勞働農民黨の分裂より多數の無産政黨の簇出を見るに至るまでの經緯は、一時世人をして之に[illegible]の去就に迷はしめたのである。單一無産政黨主義の文字通りの贊成者でないまでも、無産大衆の出來るだけ廣汎に結束すべき必要のあること、殊に政治上經濟上その要求を十分に貫徹せんが爲には鞏固なる共同戰線を張らねばならぬこと等は、何人も異議を唱へぬ所であつた。所が實際に於てそれがどうも旨く行かぬ。局外の傍觀者ははじめ之を無産階級の無教養に歸した。或は相爭ふ當事者の一方の主張をきいて、左翼進出がわるいの

右翼の消極主義がわるいのと云つても見た。併し結局問題は所謂共産主義の思想及び戰術の良否如何といふことに落ち付いたではないか。斯く考へて見ると、無産階級の政治運動に就て、同一の行動に對し相異る評價の附せらるるに至つたのも、その根本に遡れば學生檢擧事件に於けるものと殆んど異る所はないのである。

若し夫れ文藝の分野に至ては、之に類した論爭は既に數年前から開始されて居る。而して社會科學研究の問題や無産政黨の問題の論議に促されて更に一層強く鬪はるべきの萌しは、昨今既に一層著しく顯はれて居る。同じく「新潮」一月號に出た林癸未夫氏の卷頭論文『笛吹けども踊らず』の如きはこの意味に於て頗る注目に値するものと思ふ。

× × × ×

斯う云ふ新しい現象に對して所謂共産系の人達が極度の憤激を示すのは亦之を察するに難くない。彼等は定めて今後數ケ月間は丸で狂氣の如く反對派の人々を惡罵するに全力を傾けるだらう。自分の意の如くならざるにいらいらするのも尤もだが、社會改造の唯一の正しい途は自分達の抱持する所の主義だけだと自信して居る所から、自分に反對する者を目して直に社會改造に全然熱意なきものと斷じ去り、心から之を憤慨するのも考へて見ればいさゝか同情に値する。併し本當の社會改造の方針は斯うした彼等の頭の中から出て來るものではない。彼等の間から彼等に疑を差し向けるものが起つて始めて段々本當の光が現れて來る。彼等の奉ずる辨證法から云ても、彼等の陣營に内部鬪爭の始まるのは亦必然の一過程だといふべきであらう。反を伴はざる正だけでは、一段の高い綜合は得られない。

私の古い經驗をいふと、日露戰爭直後我が國に社會主義の大に勃興した當時、私は或る雜誌に據て盛に社會主義の思想的基調を攻撃したことがある。すると幸徳氏の一派は大にいきまいてそんならお前はこの社會の慘狀に目を蔽ふのかと逆襲して來た。そこで私は社會主義の主張は社會問題存在の認識その事とは違ふ旨を辯じ、解決を要する問題の存在を認めるからとてその解決案の一種たる社會主義を奉ぜねばならぬ道理はなく、社會主義を奉ぜぬからとて社會問題の存在までを否認するとされては甚だ迷惑だと答へたのであつた。新しい運動の初期に於てはとかく斯うした誤りが繰り返されるものと見える。今日でも共産系の人達の言ひ分に少しでも反對すると、直に無産大衆を裏切つてブルジョア階級の走狗となるものだなどと痛罵を浴せる。つまり共産主義者の命令を奉ぜざる者に對しては、直に無産階級の利福をはからざるものと折紙をつけてしまふのだ。此派

の人達の頭は、社會主義と社會問題の存在の認識とを混同した素朴な當年の社會主義者と比較して、果して今どれだけの進歩を見せてをるだらうか。

幸にして世間は馬鹿ばかりでない。社會一般の進歩に連れて無産階級の友を以て任ずるものの頭も大に開けて來た。斯くして始めて無産階級の本當の利福は正しく營まれ得るに至るのだらう。昨今無産階級の陣營内に所謂内部鬪爭の盛ならんとする傾向あるは、一面に於て喜ばしい現象と云はねばならぬ。只その爭ひが動もすれば醜惡なる人身攻撃に墮するの嫌あるは遺憾至極だけれども、併し之は無産階級に限つたことではなく、謂はば日本人共通の缺陷として別に救濟の道を講ずべきものであらう。之あるが故を以て内部鬪爭を無理に阻止すべき理由は毫末もない。況んや斯は實に無産階級の發達に避くべからざる必然の一過程なるに於てをや。

# 基督教徒の宗教法案反對運動

文部省の立案し調査委員會の諮詢を經て成案を見たる宗教法案の將に今期議會に提出せられんとする矢先き、思ひ掛けなくも基督教徒の間から突如猛然たる反對運動が起つた。官廳の威信役人の面目を國家生民の利福以上に重視する當世の習ひとて、政府は無理にも議會の上程を急いでその通過をはかるだらう。故に事實の問題として該法案の運命は既に略ぼ定つて居るとみていゝ。併し理論の問題としては、右の反對運動の主張にも大に傾聽すべきものあるを認めざるを得ぬ。一體文部省はもと何に血迷て斯んなベラ棒な法律を作る氣になつたのだらう。

× × × ×

今度の宗教法案を國家の宗教政策上如何に觀るべきかに就ては、私は去年九月の本誌に於て「メキシコの宗教紛爭の教訓」を論ずるついでに少しく之に說き及んだのであつた。私は『國家の宗教政策を樹つるにつき最も戒心すべきは宗教の私的性質を徹底する』に在る旨を力說し、この點から是非とも避けねばならぬものは、公認保護政策と指導政策とであると述べた。而して今度の宗教法案に現はれた政府の方針が『一から十まで教へ導き、干渉し又監督し、凡ゆる宗教團體が政府の欲するが儘に出來上る樣に仕組まれてあるから』、私の所謂指導政策なることは一點の疑を容れない。『宗教までに御用をつとめさせようとするのは餘りに盲目的な國家主義の中毒』であらうと說いたのであつた（拙著「問題と解決」三一二頁參照）。之等の引用に依

ても明なるが如く、私は(一)本來宗教に關する斯種法規の無用有害なるを信ずるものであり、(二)殊に本法の指導政策を基調とする點には根本的の不滿を感ずるものである。從て私は當局者に向ては本法の撤回を希望し、議會に向つてはその無條件否決を要求する者である。斯く私は始めから本法の不成立を希望して居たので、その細目の條項等については深く之を追及するの必要を見なかつたのである。

× × × × ×

基督教徒側では更に該法案の條項を細密に點檢し、頗る基督教界の實狀に適合せざるものあるを發見したと云ふ。加之その文字通りの强行はまた他日著大なる不便と不利とを教會にもち來すべきを力說してやまない。併し之等の點は該法案の基礎を根本的に論ずる者に取ては實は大した問題ではない。故に私も前掲の論文に於て全然この點には觸れなかつた。始めからその無用有害なるを主張して居るのだから、細目の個條などはどうでもよかつたのである。併し實際問題として政府が無理にも之を實施しようとするとなると、せめて教會の現實に蒙る不便と不利とは是非とも除いて貰はねばなるまい。この點に於て基督教側の列擧する所は當局として大に與り聞くの必要があらう。當局も該法案を起草するに當りては迂濶にも基督教各派の內情は殆と等閑に附してゐたものらしい。

× × × × ×

どんなに基督教側の說明を容れて十分の改正を加へたとしても、之が爲に宗教法案は斷じて結構な法律と變る性質のものではない。それは國法を以て信仰の內容に立ち入るといふ根本的過誤を犯して居るからである。信仰の實質に立ち入つて甲乙の區別をつけるは構はないとして、その間の生存競爭は本來自然に放任した方がいゝ。政府には固より之を識別するの能力あるに非ず、假令あつたとしても一々法律を以て之を指示するのは、丁度子供の教育に獨案內を持たすやうなものだからである。苦んで苦んで苦み拔いて惡いものから段々と善いものに遷らしむる所に、始めて內面的の健實なる發達がある。文部省の役人には斯んなことの分るものは一人もないのであらうか。

と云つて私は宗教に對する官憲の取締りを全然不用とするものではない。それは吾人の宗教生活に在ては、宗教の本質に屬せざる部分に付ては大に官憲の保護と監督とを要するからである。例へば基督教に在ては會堂並に儀式用什器、佛教に在ては寺院並に境內地域及び所屬財產の管理、之等のものにつきては國家の保護と監督とに待つべきものが多々ある。世人が宗教に關して何等かの法規を必要とするのも實は之等の點にその必要を認めたからだ。故に私はこの際宗教法を作るなら、その內容をば全然右の點にとゞめて貰ひたいと思ふ。この埒外に出づるものは、何等の理由をかゝぐるとも、宗教法案としては斷じて僭越不當の法規たるを免れないと確信する。

永年難治の習慣も忽ち改まる

# 簡易な禁煙方法

## 驚くべき「カロット」の効力

昨年三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角、煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ樣になるので、不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものでない所が、茲に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き清涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて斷じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する効力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまずくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此効力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら屹度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵の大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

# 山東京山と鈴木牧之

## （北越雪譜上梓の苦心）

市島春城




### （一）牧之と馬琴及び京山

雪の越後を初めて全國に紹介した好著として「北越雪譜」の名は其頃中央の讀書界に喧傳したもので、鄕國の人は今に至つて尙ほ此書を珍重して居るが、殊に此書に關係したものが曲亭馬琴、山東京傳、同じく京山といふ如き當時一流の小說作家であつた點からも、一層世上に著聞したものである。自分は曾て鄕里越後の南魚沼郡鹽澤村の鈴木家から此書の著者たる先代の鈴木牧之が江戶の戲作者山東京山と往復した書簡集を借り受けて一覽したことがあるが、京山は半紙の罫紙に手紙を書くのが例であつたものと見え、往復書簡の全部が罫紙に書かれてあつて、それを綴つた冊子が二冊出來て居る。何れも百五十枚許りを綴つてあるから二冊で三百枚近い大冊であるが、それを讀むとなか〱面白い上に、「北越雪譜」の出版になるまでの經路が、至つて細かに書かれてあるから、雪譜編纂の小史とも見るべきものである。又單にそれのみでなく、牧之の事や京山自身の事其他種々なる事柄が此書簡中に現はれてゐるので自分は覺えず渺然たる興味に浸ることが出來た。そこでこれらの書簡を通じて窺ひ得た雪譜編纂當時の經緯を中心に、此兩人の友情や性格などに就て感じた所を叙して見やう。

鈴木牧之は天保の末頃まで在世した人で、生地の越後南魚沼郡は鄕人一般の知る如く雪で名高い北越の中にも特に雪の深い土地で、若しも越後に就て問はんとすれば、此地方の人をして答へしむるが最も適任といはねばならぬ。牧之はたま〱斯うし

た雪深い中に生れた。そして家には相當の資産も有し、又幼少から文藝に志があつて、詩も賦する、狂歌も詠ずる。俳句も作れば畫もかくといふ多才多藝の人であつた。既に文字に因緣深く文藝に嗜み淺からぬ當時の豪家としては、自ら吟詠して樂しむといふばかりでなく、更に遠近同好の士と文墨上の交りを訂するといふことは、まつたく自然の傾向であつた。牧之が夙に江戸の文人と書簡の往復によつて風流の交際を續けてゐたのも、要するに斯ういふ欲求に其端を發したものと思はれる。

所謂文學が媒となつて、牧之は馬琴にも交はり京山にも交はつた。其他當時江戸で著名な文士雅客とも書狀の往復で多く交際のあつたことは鈴木家に藏する書簡に徵しても首肯されて、其交遊の廣かつたことに驚かされる。而もこれら多くの文人中に、最も交際を長く續け且つ親密であつたものは馬琴、京山の兩人で、此兩人に對しては親族以上にも親しかつたものらしい。

一年に何回といふ不便不自由を極めた當時の飛脚便によつて手紙の往復を續けたのであるが、双方から發する一通の手紙が、何れも半紙罫紙拾枚位に亘つて居て、殆ど相對して歡談して居るかの如くに、時には文藝上の事許りでなく一家の私事についても隔てなく通信し合つてゐたものである。

## （二）京傳と馬琴約を果さず

牧之が「北越雪譜」を世に公けにせんと志すに至つた動機は、當時江戸に於ける作者と交際があつたからにも因るであらうが、彼れは敢て著作家でこそなけれ、自分で畫も描けば相當文章も作れる人で、且つ鄕國の雪に興味を感じてゐた所から、何とかして全國に第一位を占むる鄕里の雪を、江戸を始め九州邊の雪の多く積らぬ國に住む人達へ知らせたい。殊に雪國特有の風俗習慣、さては用具までも全國に紹介して見たいといふ考を起して、爾來其實現に努めたのであつた。

京山の兄で、馬琴の師に當る京傳と、牧之との關係は如何といふに、牧之が抑も第一に「北越雪譜」の著作を依賴したのが京傳であつた。其間の消息は詳しく知らぬが、著作に經驗なき牧之は、京傳の如き文名を世に馳せてゐる著作家に囑し之に材料を與へて代筆を乞ひ、江湖に其書を流布せうと謀つたのであらう。此想像は後に馬琴に對しても京山に對しても自分の草稿をその儘出版して吳れと賴んだわけでなく、材料は牧之から提供する、執筆は著作家に任せるといふことになつてゐる點から考へても、必ず誤つた觀察ではあるまいと思ふ。即ち京傳にも矢張り此形式で委囑したものと推斷してよからう。

牧之が「北越雪譜」の著作を京傳に賴んだ時には、まだ玉山といふ高名な畫家も存命であつた。玉山は浮世繪師で、曾ては「太閤記」の畫をかいたので頗る名聲を博した人である。尤も其「太閤記」は當時徳川氏の忌諱に觸れて、絶版となつたのであるが、其爲めに却つて玉山が世に持て囃さるることにもなつた。又鈴木芙蓉といふ畫家も居た。俗に木芙蓉（鈴木の木を取つた略稱）とも呼ばれた人で、これが又越後へ遊んだことのある關係から牧之はこれにも畫を托しやうとした。即ち文章は京傳に、畫は玉山、芙蓉に囑せんとする段取であつた。これが抑も牧之が雪譜を世に出さんと謀つた發端である。

ところが京傳も机の上の甚だ多忙な作者である。受け込みはしたが遂に果すことが出來ないうちに歿してしまつた。そこで一時は畫家の玉山に畫と共に文章をも賴まうと考へた。これは玉山が才氣ある男で文章の素養にも乏しくなかつたからであるが、此事は馬琴にも相談をしたものと見えて、文政五年五月十七日附の馬琴の書簡で、此間の消息を知ることが出來る。しかし其うちに玉山も芙蓉も亦地下の人となつたので、更に當時江戸に於て戯作者中第一の學者として名のあつた曲亭馬琴に著作を托した。馬琴も無論自己の手で之を版にしたい意はあつたらしいが、これも机上の多忙な作者で、幾年經つても其約を果さない。兎角するうちに牧之も追々老年となる。馬琴は牧之より年長だから益々老いて行くので殆ど絶望狀態に陷つたのである。ところへ偶ま京山からこの雪の話は曾て亡兄京傳へ御依賴になつた緣故もあるから、一つ私にその材料を遣はされたい。自分の考では繪草紙様の物にして越後の雪の驚くべき面白い話を世に紹介して見たいといふ事を牧之の許まで云ふて來た。京山の意では牧之からは唯材料を得て本は自分の著作にして世に出したい考であつたらしい。然るに當時は馬琴と牧之との間にまだ手が切れて居なかつたので、どうも似た樣なものを出させるといふことは馬琴に對しての遠慮もあつて、牧之は京山の此申込を一應は斷つたのであるが、さりとて馬琴に囑して置いても何時出來る事か亡羊の歎に堪へぬわけで、寧ろ之と手を切つて京山をして代らしめるが捷徑だと考へたので、斷然馬琴と絶緣して京山に之を托することに決した。

## （三）上梓までに三十年

抑も京山が最初牧之に草双紙としての著作を申込んだのは文政の頃で、いよ／＼馬琴とは手が切れて京山自身の著作に移つたのは天保に入つてからの事であつた。そして天保七年、超えて八年に至つて漸く前編が出來た。勿論全部京山の著作に成つた

のではあるが、それを京山の自著とせず、牧之の著作で京山は唯だ代筆したに過ぎぬ事にして世に公けにされた。詳しく云へば序文から中に收められた詩、歌、俳句の類に至るまで大抵京山の代筆したもので名義丈けを牧之の名に於て出版したに止まつて居る。こんな譯で牧之積年の宿志は京山によつて始めて達することが出來た。今は正確に調べても居らぬが、なんでも牧之がこの志を起し、そして宿志を達する迄には少なくとも三十年の長年月を要したと聞いてゐる。京傳―馬琴―京山を經て兎も角前篇の脫稿出版されたのが牧之六十七歲の時であるから、如何にも永い歲月を費したもので、一の著述をするにしても當時はなか〳〵容易でなかつた消息がこれによつても察するに餘りある。

牧之はこれが爲めに幾度も〳〵同じ圖と同じ文章とを書き送つた。最初京傳に賴む時に送つた草稿は、火災で燒いてしまつた（尤も之はずつと後に至つて火災から免かれたのを發見したが、此時は燒亡したと信じられてゐたのである）といふので、其後馬琴に依賴する時には、再び同じ草稿を書いた。此草稿は何故か馬琴は事に托して返却しなかつたといふ。牧之は斯うして何度も草稿を書き直す勞を取つた上に、尙ほそれが上梓さるる迄の間に起つた種々苦心の跡については追々と敍述するつもりであるが、兎も角も「北越雪譜」の出版はまつたく大なる成功であつた。此成功は筆者京山の努力によることは無論であるが、一には當時雪譜の未だ出版されざる前から、早く評判されて新刊物の番附に小結の地位を占めたといふやうな事にも因つた。如何に前景氣がよかつたかは此一事でも知ることが出來る。これは勿論京山が如才なく種々なる廣告法を行つた結果で、其一端を云へば「北越雪譜」の著者としての牧之の名を豫め出版界へ弘めさせる意味に於て、或は自分のいろ〳〵の出版物に京山の代筆で牧之の序文を揭げて見たり或は牧之の詩歌を載せて見たり、美人の錦繪にまで牧之の名で狂歌を揭げるといふ如く、鈴木牧之と「北越雪譜」この二つの名を弘めるとに甚だ努めたのであつた。

京山は出版界の情僞に深く通じてゐた。隨つて讀者の心理作用なるものを充分に會得し、人心に投ずるやうに巧みに趣向を考へたものである。其結果は「北越雪譜」は非常に廣く世に行はれた。其結果は單に越後の雪ばかりでなく、それに附帶した越後の風俗習慣を世の中に始めて此書が傳へたのである。凡そ越後文人の文藝的著書で古來全國にひろがつた點に於て、此「北越雪譜」に匹敵するものはなからう。越後の物で全國に評判されたものは越後の七不思議などではなくて、實際此書を推すべき

である。雪は全國中何れの地方にも多少は降るが、而かも越後魚沼深山の堆雪、殆ど山岳の如きを見るに至つては、七不思議以上に之を奇とせねばならぬ。果して「北越雪譜」は一種の奇書として奥羽の端から西國の果までも盛んに賣れた。江戸に於ても幾百軒の貸本屋全部は、此書幾部かを備へ置くにあらざれば營業の出來なかつた程であつた。これは全く其話に大なる趣味があつたからである。雪譜の爲めに殆ど一生を捧げた牧之の苦心も斯くして酬ゐられたと云ふてもよからう。それに當時江戸の出版界では前篇を出して見て餘程の好評を博するのでなければ、後篇は出し得ないことになつて居た。それが「北越雪譜」は前篇天地人を出して間もなく後篇春夏秋冬の四冊を出版したに徴しても、いかに此書が出版界に持て囃され讀書界に歡迎されたかの一端を知ることが出來る。

## (四) 越後國雪物語

以上は「北越雪譜」が出版さるるに至つた迄の顚末を便宜上先づざつと錄したに過ぎない。云ひ換へれば以下記述せんとする其序說で、偖これからは京山が牧之に與へた書簡を中心に書かうと思ふが、何にしても十八行罫紙で三百枚からもあり、年に積れば十年以上にも亘つてゐるそれを多く引いて居る餘地もないので、主として「北越雪譜」著作に關する肝要の部分、或は牧之と京山との交情に關する部分其他多少興味ある部分などを聊か引用するに止める。それも考證家の如くに種々解說を附したり他の書物などから取り來つて詳しく說明することを避ける。而かも自分がそれを語るよりも事實上の雪譜著者たる京山をして自ら語らしめるほうが却つて興味があると思ふので、その書簡の要所々々を引いて書くことにする。又京山の書簡は極めて解し易くは書いてあるが、併し今日の時文とは甚だ異つた字面などもあるから、さういふ點には多少の說明を加へやう、或は稀に雪譜と無關係の事も交るであらうが、それは書簡の順序等に依る結果で、それらには又別種の趣味があらうと考へる。

前にも略叙した如くに京山は雪の話を双子體に八冊許りのものとなし、牧之の著作として出版して見たいといふ氣が起つて其意味の手紙を牧之に與へた事がある。それは文政十二年の事で左の如く云ふて居る。

昨夜枕上にてふと心つき申候間申上候、先年貴國雪中の事を述作致し可申樣亡兄へ被仰、雪中の具とも雛形など迄細に被遣、是に小冊添被成候を年來所藏致候處、此度池魚に災はれ殘念至極に御座候、さておもへらく北越雪談と致し繪入讀み本五冊として雪の故事古歌などを加へ出版いたさん

と存付候は亡兄の趣向にも候へ共、讀本にて手重に相成雜費も餘程に、作もむつかしく候故つい〳〵延引致候事に候當時草双子のなり行きを考ふるによき時節と存候間北越雪談を

越後國雪物語

越後鹽澤秋月庵牧之作
東京山東庵京山校合

全八冊　歌川國貞畫

右の通り草双子にいたし出版仕候はどうれ可申かと存候御冬ごもりの内著述御旅費等一切相掛け申間敷候

此書簡によつて見ると、京傳の頼まれた時は、京傳は「北越雪談」と名づけ繪入りの讀み本とする積りであつたと見える。即ち讀み本五冊として出版する趣向であつたことが判る。雪の故事古歌、いろ〳〵の考證を附する遣り口で、一種の隨筆の如き恰好にせんとしたのが京傳の考案であつたのである。

## (五) 馬琴への義理立て

京山の考では、どうも讀み本では大分重くるしいものになるし、此時分は草双子流行の時代でもあつて大抵のものは双子にさへすればよく賣れるといふ所からして、之を極めて解し易く婦女子迄も讀み得るものにしてはといふ趣向で「越後國雪物語」といふ平易な名を冠する考へであつたらしい。尚ほここにはそれを引かないが、此雪物語を作るに就て、斯く斯くの材料が要るといふ事が詳しく書かれてある。それは越後の大雪について何人も興味を感じ且人の意外に思ふやうなことを列擧して、こんな樣な材料が入用であるとて恰も牧之に敎ふるが如く懇切にこれを書き列ね、一番終りの大團圓については例のめでたしめでたしで了る趣向で、そこの所へは牧之翁の「寄雪祝」の歌でも入れたい、そうして畫は松竹梅を載せた島臺の上に雪の降りかかつて居る所をかいてはどうかといふので、此書簡中には京山自ら島臺雪の圖などを書いて居る。しかし京山の此書簡に對しては牧之は斷りをいふたものと見える。その次第は兎も角も既に馬琴に托してあるのに、本の體裁も趣向も多少變るにしても、似寄りのものを他に囑するのはどうであらうかと、律義一遍の牧之であるから折角の京山の思ひ立ではあつたが、一應それを斷つた。それに對して京山は又左の如く云ふて居る。

北越雪譜の事馬琴、玉山兩翁に存立(存じ立ちか 原文不明)も未だ上梓に及ばず依て私より申上候等の草紙も御著作被成がたき由御尤も千萬奉存候、ふとうかみし儘申入候、御一笑被下度候

玉山の雪の消えたる跡なれば
我笠のかくもいらぬものとや

いかに雪の物語なればとて、うつめおくもおしきものに御座候春に相成申候はゞどうか御相談致し方もあるべくや

櫻木に早く上せて見たきもの
雪とみやまの物かたりをば

この書簡によると牧之の馬琴に對する義理立ても尤もであるが、併し畫をかく約束の玉山は既に歿し馬琴も引受けながら埋歿に附して其約を果さぬ。それを其儘にして置くは惜しいから活かしては如何といふて居るので、歌の意味はこゝに云ふ迄もないが、玉山とは雪に因んでいふたので、簑笠は馬琴の號であつて、それも亦雪に引懸けて詠じたのである。春になつたら出版したいといふ所から櫻木の文字を使つてゐるが、櫻木とはこれ亦板木は櫻で作るので出版を意味して居る。更に玉山については京山の書狀中にも斯う云ふて居る。

玉山存在の節太閤記に付この雪の圖可相遊御示し被成候由おもしろきはなしに御坐候、玉山も畫に於ては東都にても雷鳴致し候、亡兄へ度々文通もいたし候事も見事にて才子と見へ申候

玉山と牧之との間に交はりのあつたことは前にも書いたが、此書簡にある太閤記の畫をかいた時、牧之が雪の圖について、玉山に注意した事などは餘り世の中に知られて居らぬ事實である。又玉山は世間に多い尋常浮世繪師ではなくして書に就ても造詣の深いものがあつた事も、此書簡で始めて知る事が出來る。

## (六) 馬琴との絕緣

其翌年には、新年早々京山から牧之に一書を寄せて切に「北越雪譜」の出版を慫慂して居る。其中に曰く

越後雪物語の事さて／＼殘念に奉存候、つら／＼おもふに右の趣向の元祖と申すは亡兄が起立にて御坐候間馬琴にかまはず先年被下候貴君の草稿を種といたし合卷に作り候趣序文へしるし著述いたし候はゞ馬琴がいかんとも申かたくあらんと存候、いかんとなれば右雪の趣向は京傳馬琴に先だつ事十年程と存候、先生の思召如何に御座候哉御伺ひ御指圖次第に可仕候

又同じ書簡に重ねて曰く

前に申上候如く、雪の合卷如何に御座候哉、此事先生は御存なく出版の上京山が北越の雪を新作に致候是は先年京傳へ掛合いさゝかの草稿つかはし申候是を京山が種にいたし作意いたし候事と存候とかなんとか申被遣候はゞ可然哉、私先生へ御あいさつなく作意候ても私へ罪を御せめ被成候事にもある間敷馬琴より馬のしりをよこし候事もある間敷

やおぼしめしを伺ひ申候御へだてなく御申越被下度候

即ち京山は百尺竿頭一歩を進めて、全體此雪の問題は自分の兄が思ひ立つたから生れ出たものである、此點からいへば自分の方が本家本元であるから、自分があなたに御相談なしに亡兄の遣り殘しの仕事だと言ひ立てゝ出版したからとてあなたから御叱りを受くべき筈の物でもあるまいし、馬琴からあなたに掛合があつても、それは俺の知らぬ事で、俺の方から京傳へ賴んだ當時遣つて置いた材料が殘つてあつたのを種に、勝手に著作したのであるとあなたから御挨拶になつたら、馬琴から苦情の出る餘地もなからうと、兎も角熱心に慫慂を試みて居る。

此幾回かの慫慂に對しては、さすがの牧之も心を動かさずには居られなかつた。それも實は道理あることで、京山の書簡によつて見ても牧之が京傳に賴んでからも既に十年も經過して居る。馬琴に賴んでからは幾年になるか判らぬが、これ亦數年かかつて更に一枚の原稿さへ出來ぬといふわけで、牧之もだんだん老境に入つて來る。自然京山の熱心な勸めに對して應じたくもなつて來る。併しながら馬琴がなか／＼面倒な人物であることは牧之もよく／＼承知して居るので、如何にして之と手を切るべきかと頗る苦心したらしいが、結局手切れの談判と意を決して、そしてつひに絶縁を申込んだものと見え、その意味の事が牧之から京山に通ぜられて居る。

## （七）畫工其他に就ての配慮

京山から牧之宛の書狀中から二三の事を抄錄すれば

京山のいふには馬琴は自負の人であつて雪の隨筆と云ふが如き類のものは當世筆を取り得る者は乃公一人で他人の能く成し遂げ得べき事ではないと實は高を括つて今日迄放却して延引を重ねて來たものである。然るに先生が手を切つていよ／＼私に御任せになつたと馬琴が聞いたならば首を傾けてどんな事を云ひ出すかもわからない。其邊の事は能く／＼呑込んで居らねばならぬ。又馬琴の所へはあなたの方から色々の材料が行つて居る。先づ其材料を取り戻す事が肝腎ではあるが下手にひねくれられると材料も戻さぬと云ひ出すかも知れない。

こんな事を注意してゐる。果して京山の氣遣つた如くに、馬琴は結局京山に編纂を任せることに同意はしたが、牧之から送つた材料は戻さなかつた。其理由として折角あなたの筆に成つた好記念物である。自分は著作を成し得なかつたのは誠に濟まなかつたが、しかし永い間種々考案を廻らして來て居る。就ては材料は私へ下さい、自分は表裝をして家に遺したいといふに

在つて、到頭圖も草稿も戻さず仕舞になつた。此事に就ては鈴木家に殘つてゐる馬琴の手柬集、それは凡そ二百枚近くのもので大きな冊子に作られてあるが其卷頭に牧之がそれに就ての序文を書いて居るが、之を讀むと何故に馬琴は材料を戻さなかつたのであらう、自分は斯かるものの他の手に殘る事を恥とする。よつて種々馬琴に談じては見たが、遂に戻さなかつたと云ふて何となく不快の筆致が見えてゐる。

京山は前の如くに書き終つて後、同じ書簡中に早くも著述する時の種々なる考案に言ひ及ぼしてゐる。

私存寄にては讀本の形にいたし、雪の圖なればうすゞみの彩色を入れたる所もありたり（彩色本國禁なれ共墨濺は制外なり）又人物を見せたる所細畫の所色々取りまぜ目を驚らせたし。北齋の筆なれば上々、次には英泉なるべし、國貞などの筆の物でなし、唐畫家に書かせては俗に落ち不申、うりものにはあしく候、上梓のうり物は文晁でもあしく候、先年亡兄へ被遣候同草稿の時よりは乍憚御畫も御進み雪の事は段々詳しくならせられ候事と存候儘此節又々草稿被成候はゞ目を驚かし申す事と存候、貴君を發起として亡兄や、玉山、曲亭など上梓の意ある事は書林などは更に不存處、草稿を見せ候はゞ刻する心に相成可申かと存候、先づ下ごしらへの御草稿おぼしめし次第早々御取りかゝり可然候、雪を鋸にて引わり申候處の圖などは大きく見せたし、めづらしき事に候、市中の有様と山中の有様と雪中鳥を取る事、漁獵山獵の圖も面白かるべし、かくべつ御念入りたる圖にも及ばず眞畫にては御手もかゝるべくと存候

さすがに京山は繪入物の著作にかけては經驗がある故、誰に畫をかかせやうかと云ふ事は此書簡によつても早く既に工夫する所があつて畫家の選び方など考へたものである。如何にも文晁でもなく南畫の畑でもない。さうかと云つて國貞のやうな人物を畫くには妙手であつても風景畫に拙なるものでも駄目である。北齋ならば上乘だと云つてゐるが、如何にも、尤もの月旦である。又其後に京山から左の如き書簡を牧之に與へてゐる。

雪話の御草稿昨夜中八ツ頃迄に荒々拜見仕候、圖などは一しほ玉手を勞させ給ひたる事おしはかり申候、御文章の内貴國の方言にて御しるし被成候處々に江戸人にはさとり難き事も見へ申候、熟覽の上推敲に落ちざる所は跡より御尋ね可申候すべて著述は机上に筆を採りて幾百萬人に示し候ものゆゑ獨り合點にてはこまやかにさとしがたくよんでわからぬとおもしろからぬ始り也

○雪中の圖ともさて／＼目を驚かし申候、圖の中に人家の

かたわらに水瓶ともおぼしきものの大なるを、こもにて包みあるが家毎に見え申候是は雪中に水を貯え置き候にや、大家にては三つも四つも貯へたる様也、是は人かず多く候故の事に御座候や如何に哉

○御草稿拜見してつら〳〵思ふに、越後の鈴木より國の名物として魚類、青物、品々山東へおくり是を料理しては江戸の人及び京浪花の人にも口にあひ候樣に振舞候へ共おくられたる魚類青物を見て献立をして、なます、ひらしる其外種々に料理し、膳立までしていざ食し給へと云ふ様なものにて、折角めづらしき雪話といふ趣味をふあんばいにしてたべさせ候ては、一椀を喫して今一杯と申す間敷此處に於て筆をとるに心あるべき事と存候間よく〳〵熟覽いたし、北越の雪をよく腹へしみこませて筆をとり可申候

追々と京山が氣乘りがして來て、料理にたとへる所などは作者の極意を云ふてゐるものと見るべく、天水桶の凍るのを防ぐ爲めに菰にて卷かれてあるのを圖に見て、京山が飲料水と解釋したなどは江戸人として無理からぬ事ではあるが、越後人から見れば聊か滑稽の感がないでもない。

## （八）材料發見の喜び

前にも少し書いて置いたが牧之が最初京傳に著作を頼んだ時、草稿は勿論、雪に關する圖其他雪國の種々なる用具、例へば橇、かんじき、雪下駄の類をわざと小さな模型に作つて多く參考に京傳の許へ送つてあつたものである。京山がいよ〳〵著作するについて之等のものは至極大切のものであるが、京山の家は不幸にしてこんな交渉を重ねつゝある間に火災に罹り家財の殆んど凡てを擧げて失つたので、其後土藏を建て直すことなどの混雜があつて、京傳が牧之から預つてゐた材料を一時見失つてしまつた。此一事は京山の非常に悲しんだ所であつたが、其燒失したと信じてゐた品が、後で燒けずにあつたのを發見した時の京山の喜びは名狀す可らざるもので、其狂喜の情を牧之に報じた書簡には、細かな目錄まで書き添えて左の如くしるされて居る。

拙家此節土藏建替申候に付土藏に納め置候雜具書籍の雪とも見世二階へ移し申候に付火器用心の品は親類共土藏へあづけ申候、依之亡兄手澤の抄錄など取調べ申候內に小風呂敷に包出火持退と申札紙附のものありひらき見候へば前年貴君より御認め被下し二季雪話と申す横本の繪抄并に越後國繪圖一枚、渋紙小包の內に雪車、すかり、かちきの類の雛形あり、去年大火の節持出したるつゞら二つ燒亡いたし

候故、右品も其内に焼け失ひ候事と殘念がりしに今此風呂敷包を得て泥中に玉を拾ひたる心地して、黄泉の亡兄を思ひ出し、萬歲の貴老雪に御深切なるをかんしん仕候て三十年の昔一日の如くに存候云々

右申上候先年の圖を見出し候故、先づは腹にのみ込み申候、しかのみならず九月末に奉公人召抱申候、此者は越後國魚沼郡千駄ケ谷藤澤村百姓市二郎二男吉藏當年廿才に相成申候老實の者にて此吉藏に貴君の雪の圖を見せこれはかうであるか、これはかうかと受け給はり前年の雛形を見せ、雪車の使ひ方、雪中の働き其外雪のはなしきゝ申すと一文不通の者故はなしも前後錯雜いたし國の話をする時は一しほ國ことばに相成りきゝわけ難き事多く、はからず一笑を催し申候され共目前にはなしを其人に聞き候故發明の事も多く御座候

曲亭よりも音信ありて雪話の事私へも曲亭よりたのみたしとの事上首尾安心仕候

これによつて見ると幸にして失せたと思つたものが發見されたので如何に京山が喜んだかといふことがわかる。何にしても越後の事情を更に知らぬ作者が、書信の往復のみで材料を得るのだから、如何に模型を手許に送つて貰つたにしても、それがどう用ゐられるのか、江戸の人などが想像の及ぶ所ではない。然るにそれが雪の深い所のものを抱え入れて、それに取敢ず雪の話を聞いた一齣の如きは、讀んで頗る興味を感ずる話である。

## (九) 馬琴と京山の疎隔

前項の書狀の末段には馬琴もいよ〱承諾して京山へも其旨を申越して來たといふので、京山は案ずる程でもなく甚だ好結果であつたと喜んで居るが、こゝに聊か馬琴と京山との間柄に就て書く必要がある。全體誰も知る如く馬琴は文壇に雷名を博した人であるが、實は京山の亡兄京傳を師として戯作の修業をしたものである。馬琴は京山より年長であるから云はゞ先輩の地位ではあるが、併し自分の師の弟たる京山に對しては馬琴と雖もそこには多少義理もなければならぬ筈である。年始中元などの季節には互に往來もしなければならぬわけであるのに此二人は殆んど吳越も啻ならぬ程に疎遠で、馬琴は曾て一度も師家なる京山を訪ねたこともなければ、京山も亦馬琴の消息は牧之の書簡によつて始めて知る位であつた。これは馬琴の傲岸なる氣質が因をなしてゐるに外ならぬのであるが是非の判斷は他に讓つて兎も角二人は甚だ相和さなかつた。之に對して律義なる牧之は頗る面白からず思ひ、書簡のついでには京山に向つて

「忍」の一字を說いてゐた。話がつい岐路に入つた形であるが、問題の雪譜がいよ〳〵馬琴の手から離れて京山に移つたについては、牧之は益々此兩者間の疎隔を解きたいと考へて、どうか是非馬琴と往來して貰ひたいと京山に向つて切に勸めた。牧之の書簡に答へた京山は此事について左の如く云つてゐる。

馬琴へしたしみを結び私罷越、翁が起居をも尋ね候樣にと御心そへ被下ありがたく呉越の如く更に音信も聞き不申候故に眼病の由も鈍翁御書中にて始めて存じ申候、著作堂と申す人腰はぬけるとも右の手さへ自在ならば机上に黃金を排し可申候へ共眼病とはさて〳〵氣の毒千萬也、何れ鈍意に任せ近日わざ〳〵御尋ね可申候

馬琴の眼病といふことは江戸に居る著作者仲間では唯一人知らぬものはない位であるのに、それすら京山は知らずに居て、牧之の書信で始めて知つたといふ事から考へても、その疎遠の程度がわかる。この一節は天保六年とも思はるる正月廿四日附の書簡に詳しく書かれてゐる。

## (十) 京水と雪譜

更に又「北越雪譜」の問題に戻るが、天保六年九月九日の書簡には左の如く認めてゐる。

私ねがひには雪志初篇來春三月迄に上梓發兌して評判もよろしく書肆後篇もと申候節にいたりて五月京水を具して貴堂へ草鞋をとき、後篇の御相談いたし京水眞景を寫し候事もあるべし、かくあらば上々の首尾也表題の事學友達へも相談いたし候處、話の字よりは志の字の方可ならんと皆申候ゆゑ十目の視る處に從ふ

北越雪志……………著
三卷……………校
此書は……………書肆文溪堂梓

右日向半紙一枚半にすり申候もの江戸中大屋へくばり申候、是を書林のことばにびらと申候、賣り出しまへにくばる也、右は十枚ばかりやがてさし上可申候。

これによると兎も角相當に筆も捗つて先づ凡そ其時分の習慣として「ちらし」を撒く迄に進んだのである。且つ又若しも成功すれば思ひ出で畫のかける京水を伴ひ後篇出版の相談に越後行の段取迄してゐることが窺はれる。

尚ほ此京水について少しく書いて置くべきことは、京水は此作者の片腕ともなるべき大切の働きをしたもので、畫が相當に描かれた爲めに、雪譜著作前の事ではあるが、京山は京水を伴

ふて熱海に遊び數日そこに入浴した際も京水に熱海の風景を描かせて、それに京山の文章を添え「熱海圖景」と題して世に出したこともある。更にそれに附記すべきは「北越雪譜」の挿畫の大部分は京水の手に成つたものである。

## （十一）越後下りの前觸れ

京山は又同一書簡の中に、いよ〳〵越後へ下つて牧之を訪ねる時の事を豫め左の如く書いて居る。

さきの長き事を今申すも老の癖なり、わたくし命ありて、家内も無事にて來年貴堂へ京水同道參上の節相願ひ候約言左の如し

一、滯留の節被下候御膳御家内末席につらなり御一同樣と同じ惣菜いたゞき度事。別段の御馳走は堅く御斷り申上候却つてうまくたべ不申候事

一、夜具絹類御無用、是等堅く御ことはり申上候私共平日木綿夜具相用ゐ申候事。並に夜具の上げおろし自身に仕度事

一、下足のあつかひ等まですべて御家來の御世話に相成候ては却つて迷惑いたし候間自身にいたし度候事

一、萬端客のあつかひは御免可被下候御親族末席の者同樣に奉希上候

右の如くに候へば心よく足をのばし逗留もいたされ候いか樣粗末に御取扱被下候とも決して御恨み不申候旅行者則て堪忍大明神と心掛申候御一笑〳〵

京山の此書簡は實に委曲を盡したもので殆んど對坐して語るが如きは筆のまはる人の常であるが、特に此書簡を掲げるのは京山の文才を示すと共に其人格の一端を知らせたい爲である。京山は江戸に居ては當時頗る文名の高かつた人であるが、その割合に質素の生活で、酒も飲ます贅澤もせぬといふ平生の狀が此書中からも偲ばれるといへば云ひ得る。

## （十二）書名漸く定まる

同じ天保六年五月の書簡中に曰く

つら〳〵おもふに此度雪譜の一擧、貴翁畫を能し給ふ故、圖あり說ありて成れる也、余幸にこれに與りてその全をなせり、一度梓に上りては海内に布き候て不朽にも傳ふべし、拙文の代筆に尊名を穢すと雖も天幸を得て世に行はれたる、翁が名を他國に雷同せん事我に於て雀躍に不堪候翁が年來の御望み一時に成就せん事良緣の時を得たるに在り、可賀〳〵

一昨日（五月廿日）書肆文溪堂の番頭嘉七と申者訪ひ來り、雪上の巻、筆耕之校合持參申候、さて主人口上に、雪志之外題相成るべき事ならば雪譜と申被成度、右は唱へもよろしく且亦先達而中より京、大坂、名古屋本屋共へも此度雪譜と申すものほり立てやがてうり出し候噂も申つかはしおき候、その返事に雪譜〳〵と申越し或は又馬琴著述の末にも此名見申候ゆゑ、他國本屋共も雪譜方請よろしく故なるべき事ならば雪譜にいたし度、それとも先生思召次第と申候ゆゑ、私言下之答へに譜も志も字意は遠からず、志とする所以は馬琴が題したるがいやさ故也、これは此方のまけ惜み也、馬琴が一笑は滄海の一粟也、譜とすべし〳〵と答へ申候、此段左様に思召被下度候、さて此嘉七へ酒肴をもてなし、しばらく物語の内に雪譜はいつ之頃よりうり出しに成るべきやと尋ね候へば嘉七曰く色々ほり立て候物御座候故、先づ五月金と存候と申候、此の五月金とは來春につり出して五月掛をとる事を云ふ也、これは仲間同志の通言なれ共、京山は作者故、仲間の通言を以て答へし也、來春出版大當りを願ふ可賀〳〵

嘉七が言ばを聞いてうれしく即興

ほり上て積み重ぬべき雪の巻

　消ぬ言ばをたのみこそすれ

前に掲げた書簡中にもある如く百里から離れた遠隔の土地で互に見もせぬ人が殆んど江戸に於ては想像のつかぬ大雪の本を書く。それがともかく纏まるやうになつたといふのも、畢竟京山と牧之との間に種々微細に亘つて文書の往復があり、或は京山から質問して來た草稿を牧之が見てこれは斯うありたい、こゝは間違ひであると一々訂正したりして種々なる面倒を繰返した其勞苦の大なるに因ることと思ふ。随つて其文書は何時も数十枚に亘つた細書である。又同じ書簡中にある如く、抑も雪譜のまとまつた所以は主として牧之といふ人に畫才のあつたことが關係をもつてゐる。粗雜ながらも文筆の及ばぬ所を畫で寫すといふことが詰り雪譜成功の基で、それは京山の言の如くである。又その表題については京山は或は雪話とつけ、或は友人に相談して雪志と改めもしたりしたが遂にそれを雪譜と名くるに至つたのである。前にも書いたやうに馬琴は牧之から著作を托されて、遂にそれを果さなかつたが、併し雪譜の命名者で、此名を弘めるには大功があつた。最初表題を雪譜などがよからうと言ひ出したのは馬琴で、自然に其名が定まつた上に、馬琴の著はした随筆「玄同放言」の終りに、まだ筆を執らないこの雪の話を「北越雪譜」として廣告もしてある。こんな事から諸方の書

肆仲間或は讀者の間にも其名が知られてゐたので本屋から雪譜雪譜と迫られるに至つたのは無理もない。多分京山自身も其位の事は承知してゐたであらう。其書簡にもある如く馬琴の跡を踏まない樣にといふことで、志とか話とか附けたのであるが、それが遂には馬琴の定めた名に戻つて、其名で出版された顚末は前掲書簡の言ふて居る通りである。

## (十三) 著作料僅に五兩

又同じ書簡中に於て、再び越後へ漫遊することに就て言ひ及んでゐる。

　來年五月私父子遊歷之節は、油屋翁善光寺迄御案内もあらん樣に御申のよし、ありがたく存じ候、蒲原七奇も新潟も遊覽いたし度候、併し文藻を挾んで漫遊する文人多くは〇之爲なり、余も其同臭ありと雖も絶窮にはあらざれば錢を見ること蠅の血を見るが如くにはあらず。五六七月の間拔を賣つて嚢中十金（十二）餘せば足るべし、嗚呼拙技を賣つてこれを得んこと難かるべし、玆に尊翁が庇護を希ふのみ、遠近之諸友へ御噂御ひろめをねがひ上る

この書簡によつて見ても、先づ京山が頗る眞摯の性格だといふことがわかる。馬琴ならばもう少し偉さうに書くであらうと思ふ所を、敢て錢が欲しくないと言はぬが、三ケ月も越後に滯在して結局望みはどれ丈けであるかといふに、拾兩、それを更に訂正して拾貳兩を得れば足ると云つて居る。どちらにしても餘り大なる望みとは思はれぬ。勿論此時分の金の貴いことは今の想像の及ばぬ位のものではあるが、現に六七年もかゝつて非常に勞をとつた「北越雪譜」が、どれ丈けの著作料を牧之に約束したかといふに、只僅に金五兩であつた。而も其中には息子の京水が殆ど七八分通り畫筆を揮つた其畫料をも包含して居ることを考へると、いよ〳〵十二金といふものは其當時として少ない金でもなからうが、併し先づ大體に於て小なる希望といふてよろしい。

## (十四) 京山の馬琴訪問

京山の牧之に與へた同じ書狀中に、馬琴に關する一齣がある。

　馬琴が臺所蕭然たらんとて御憐察御厚情也平日白頭いたさぬ謙德の人ならば書畫會でもすゝめ幸によりては四五十金は得可申候へ共老驕喬木に款立（原字不明）して人を燕雀にする氣質故、これらの事すゝめもしがたく又平日人に交はらぬ

人ゆゑ書畫會の五十金は千門萬戸へ腰をかゞめねばならず、今更左様にもなるまじ、嗚呼悲い哉

今日（菊月廿五日）當神へ參詣之歸るさ馬琴を訪ひ候處、もはや明き家也、飯田町へつぼみ候事と存候、塀より見やる庭前の紅葉ばかりが時知り顏にくれなゐを示したるを見て悲涙一滴せり

あるじなき明家の庭に錦して

紅葉（此間文字不明）照りまさりけり

明き家のかどに空荷のつなぎ馬

琴は隣りにかきならしけり

住みすてしあるじ尋ねて此頃に

逢ひ瀧澤が宿札のあと

など思ひつゞけ宿へ歸り申候

京山は牧之から頻りに馬琴を訪ねるやうに勸められ、始めて訪問して見ると、空家になつて居たと知らせて來た書簡である。其時分馬琴は湯島に居たので、京山は湯島天神へ參詣の序（ついで）に訪づれたものと見える。併し空家と見たのは京山の間違で、門札がとつてあつて、戸がしまつてゐた爲め始めて訪問した京山は馬琴が家計不如意の爲め遣り切れなくなつて轉宅したものと早呑込をしたものであらうが、實は後に掲げる書簡にもある如く、馬琴は矢張りまだそこに住んでゐたのであつた。

然るに京山が馬琴を訪づれた日に宅へ歸つて見ると馬琴から牧之へ宛てた書狀が到着してゐた。此時分は京山の方が馬琴よりも「北越雪譜」の關係で牧之と書信の往復を重ねてゐたので馬琴から牧之へ屆ける書狀は京山の所へ持つて來て、更にそれを幸便に托して送つたもので、その事は京山の書簡中にも見えてゐる。京山は此書狀に就て不圖考へたのに、書狀は牧之宛であるが之を開封したならば馬琴の消息が知れやうと感じたのである。ところで玆に書くべきことは牧之は豫て京山に對して馬琴からの書狀は開封苦しからずと云ふことを許してあつたものらしい。その事も亦京山の書狀中にチラホラ見えてゐる。其わけは察するに馬琴の書狀が越後へ屆いてそれから牧之が見て、そして其中に認められてある事を更に江戸へ報じて來るといふ事になると、其間大變な日子を要し時に甚だ遲れることもあるので、便宜上先づ開封してよろしいといふことにしたのであらう。そこで京山は開封して讀んだのであるが、當時京山から牧之に宛てた書中には左の如く書いてある。

翁への返書とて懷中より出し候ゆゑに馬翁が身の上のことも此書にあらんと存じ且つは兼々御差圖にまかせ内見して御屆け申候、是より馬琴の書簡を見んとて先づ筆を此處に

とどむ

## （十五）一覽火中記

さて京山が馬琴より牧之宛の書狀を内見してみると、玆に京山には默視されぬことが書かれてあつた。試みに其内容を云ふて見ると、牧之が雪譜の著述を京山に任せそれが漸く成功せんとする場合に臨んで、馬琴は其功の全く京山に歸せんことを妬ましく感じたかの如く、例の馬琴の筆法で、實は雪譜の板元丁字屋には自分からも懇々賴んで置いた、その結果として丁字屋も快く引受けた、といふやうな事を書いて、非常に御爲めごかしを云つてゐる。其内に京山から言はすれば頗る虛僞の言を弄してゐる樣な點が散見されるので京山は一讀大に憤つた。そこで早速筆を執り馬琴の言に對して辨駁書を書いた。それは「一覽火中記」と題する四五枚のもので、さすがに痛快に駁して居つて、何人が讀んでも馬琴が僞君子であることを思はしむるに足るものである。一々此處に其長い文章を引くわけには行かぬが、全體馬琴といふ人は非常に自負心の强い人で、それが爲めに往々非難を受けた。且つ著作者などといふものの癖として、兎角同業者間相互誹謗を敢てするが通弊で、馬琴亦此弊中の人たるを免れ得ないわけであるが、單に此時ばかりではない。それより後に至つて馬琴の題せる雪譜といふ名を用ゐて居る事に就ても何か誇り顏に云々して、牧之に書狀を寄せて居る位で、この「一覽火中記」の一番末に京山は例の狂歌二首を載せて馬琴を罵倒して居る。

狐のみ人をばかすと思ひしに
　馬の狐にまさるにくさよ
乘せ掛てさて喜ばす馬なれば
　ひそかに人をけることもあり

これは勿論馬琴が「北越雪譜」の著述を引受け、長く牧之を悅ばせてゐて、到頭出來ずに終つた事を諷したのである。

一體馬琴の性質として一度自分の繩張内に入つたものを人手に渡すといふ事は、餘程遺憾とする方であるから、何かにつけて文句が起りはせぬかとは、豫て京山も恐れ且つ期して居たのであつたが、馬琴の書狀を見て、そろ〱起つて來たわいと感じたのである。それよりズツト後の書簡中にも京山は他日の事を心配して云々してゐる所がある。それは雪譜前篇を世に出して、それが若し成功したとなると、馬琴は或は書肆の方へ手を廻して、書肆の方から牧之に向つて後篇を馬琴に賴むやうに云はせて、後篇著作の野心を起さぬとも限らぬ。どうか萬一さういふ事が起つても、もう後篇の草稿は略ぼ出來上つてゐるし尙

は其細目、閾なんどについて相談の爲めに京山が越後へ下ること迄なつてゐるといふ事で御斷はりに相成りたいと豫め牧之に注意を與へてゐる。京山の此取越苦勞に對しては幸に其事なくして濟んだのであつたが、京山が斯く迄懸念したことも、馬琴の性格にそれ丈け彼れをして警戒せしむるものがあつたからである。

## （十六）道樂ものの北馬

天保六年拾月廿一日附の京山の書簡にも越後に行くことについて細々と書いて居る中に一笑を催させる文章がある。

來夏私遊節の節、先觸の事など御眞情被仰下ありがたく、私も問屋帳にて往來すべき心掛也、北馬妓館へ逗留中厚く御取扱のよしは北馬よりも聞き申候、人之佶は萬歲不消、北馬は酒色をこのみ候人物ゆゑ、尋常逗留中も妓樓へ登り候事しばしばなる由も北馬かたり申候、私は二十年以來もとめて妓樓へ登る事をせず、又偶ま〳〵富人に誘はれ妓席[illegible]あれど閨房に入ることをせず、賢人顏して色を好まざるにあらず、頗る名を貴り候故京山が如何なることを云ひしやなどと其妓に尋ねる人もあるべし閨中の話は何れ痴情なるものゆゑ一言に名を穢すもいや也又一度限りにて再び其妓をむかへざれば遊里の情情を知らぬ奴と言はれても口惜く、寧ろ妓に近よらざるがまし也と、九年面壁之悟りをひらき候、江都の遊廓ですら如斯、況や村妓驛娼に於てをや、たとへ新潟之遊廓にたてこもる八百八後家ど（此間文字不明）めへつた孔明の八陣を布き八方より取りかこみ、ふんどしの旗をひるがへし虱の雨を降らすとも京山文作の矛先を以て突破り先生さんわしにも扇を一本かいてくんなさろと降參させん事余が胸中に在り此義に於ては

御安心可被下候

この書簡は最早追々越後へ旅行の期が迫るについて、更に旅行用先きの事迄書き立てたものである。此先觸れ或は問屋帳といふ事は、今人には一寸判り兼ねるであらうが、何も徳川家の家來或は士籍に在るものゝ旅行に當つての特權ともいふべきもので、これが爲めには少なからぬ便利を得る。先觸れを發して宿泊所を定め、人足を徴發するなどのことをいふたのである。

又此書簡によつて牧之が北馬に交りのあつたとも知られるが、北馬は北齋の門人で浮世繪を書いて相當に名聲を得たものである。しかし永い間放埒をしてゐたらしい[illegible]を異にし、放埒はせぬといふて獨自の地歩を占めてゐるところ文字の間に歴々としてゐる。斯くていよいよ天保七年の夏には

京山は牧之を訪ふ事になつたので、約の如くそれ迄に是非雪譜三冊を版にして、それを土產に持つて行かねばならぬといふので、其頃の書簡には頻りに版の督促をしてゐる事が書いてある。若し間に合はねば校正刷でも取揃へて持參せうと、氣を揉んでゐることも書面の上に見えてゐる。

## （十七）父子相携へて越後へ

京山書簡集の最後に、天保七年五月發の書狀がある。これはいよ／＼東京發足に近づいた場合の書狀で、その中には左の如く書かれてある。

此度旅行は御本丸御數寄屋組頭野村休成内岩瀨理一郎と申先觸れにて旅行仕候（右は私は茶道の師也）

江戸發足より七泊りにて御地へ着の心得也

先觸れは鹽澤留りに可致候（發足前日にも先觸れ出し可申と存候）

此書簡は即ち、先觸れ、問屋帳などを說明してゐる。元來京山は茶人であつて自分の家にも釜をかけて幾何かの弟子をとつて居た位で、この書簡に幕府の茶の役人の門人であると書いてあるのは其故である。岩瀨理一郎といふのは京山自身のことで、京山は又百樹とも稱した。さて此の茶の御役人は石州流の茶人であるから京山も亦石州流であつたことは云ふ迄もない。兎に角四十年の交はりで、交通は頻々とやつてゐたが、まだ一度も顏を見たこともない其人と、手を把つて互に談ずるのも近きにある事を喜んでゐる樣子が此書簡には躍如としてゐる。

斯うして京山は遂に約を履んで天保七年夏、子息京水を伴ふてはる／＼鹽澤迄下つて草鞋を鈴木家に解いたのであつた。そして漸く出來た「北越雪譜」――恐らくこれはまだ板に彫刻しただけの校正刷を、假とぢにしたものであらうが――を、待ちこがれてゐた牧之に土產として贈つたことゝ思はれるし、之を受けた牧之の喜びは實に喩ふるに物がない位であつたと察せられる。何にしても牧之が雪譜著作の考を起して京傳に囑して以來、三十年の星霜を經てヤツとの事で出來たのであるから、その喜悅はまつたく想察するに餘りある。

さて京山といふ男も兄京傳の關係から慾德をはなれて全然好意的に此著述をなし且詩歌俳句までも悉く代作をしてあるのに、何處までも牧之の著として世に出したことも矢張り好意の一つである。尙は其人の著作であるから、どこ迄も其人の意に副はねばならぬといふ所から、細大となく牧之に相談した。從つてその往復書簡は實に澤山のものである。何れにしても著作には經驗のない田舍風流人の牧之の事であるから種々なる注文難

画が書簡の折々に云はれてあるのを京山は又少しもそれをうるさからずに、云ふて來た事柄について改むべきは直ちに改め又牧之の云ふ事が誤つて居る事は懇切に説明して、毫末も倨傲の氣を示さず、牧之をして快く納得せしめ、そして此一篇の「北越雪譜」が出來上つた。斯う考へると多年に亘る京山の心勞を察すべきで、若し京山が勝手に書く自著であつたら恐らく五年もかゝるものを半年位でさつさと書き上げてしまつたであらう。それをば幾んど雪譜の原稿にも近い程の紙數の書簡を積んで、しばしば往復を重ねたといふことは他の文人達のなし能はざる所を爲したといはねばならぬ。且越後の地を曾て踏んだこともなく、越後人でも雪の薄い地方のものは想像も及ばぬ大雪の有樣を餘り間違もなく、さながら越人の寫實的に書いたものであるかの如くに現はし得たのは、畢竟細目に亘つて非常に煩はしい往復を重ねた結果で雪譜が江戸の人の手に成つたにも拘はらず、それが全く土地の人牧之の筆に成つた如く見えるといふのは、京山勉強の力によるといふべきである。

## （十八）牧之の中風再發

「北越雪譜」に收めてある幾多の畫は、最初の計畫では國貞といふ浮世繪師に書かせる筈であつたが、それが採取らぬ爲め僅に印ばかりに此人の描いたものが載せられてある。その他の大部分は京山の息子京水で、親父の傍らに在つてその指圖のまにまに筆を執るから畫と草稿としつくりと合つてゐる。一軒の家に文章を書くものと畫をかくものとが揃つて居るなどは稀有の事で、雪譜成功の一原因は確に此處にもあると云ひ得るのである。

京山の書簡はすべて野紙に書かれてゐて、之を集めれば直ちに冊子になるやうな體裁になつて居るから百四五十枚宛を綴ぢて大きな厚い二冊の本に仕立てゝある。而して其卷端に牧之が「兒孫に寄す」と題書して京山との交際、雪譜編纂の始末を叙して居る。但しこれは兼て牧之が中風の氣があつたところ、恰も京山が越後の鹽澤へ訪ねて行つた時に、又々それが再發して折角珍客の來たのを家に留め置き、自分は三週間ばかりどこかの湯治場へ出かけ、それから中風がだん／＼重くなつて餘程不自由になつた。その後書簡を冊子に綴り、きはらぬ筆を強ひて書いたものであるが、その文を讀んで見ても大部分の意味はわかる。一寸文章の通じない所もあるが、なるべく意味を取違へぬやうに自分で補つて聊か筆も加へた上、左にそれを掲げやう。

兒孫に示す

山東庵京山は涼仙と號し通稱は岩瀬理一郎、故人京傳之

舍弟にて兄五十餘歳急病にて物故、實子なき爲め其跡を受く、京山子青山侯之近侍たりし時武藝を好み其修養あり、又篆刻をも能くせり、而して山東庵一流の戯作をなして世を渡る、余此兄弟と魚雁往來すること四十年、余が一生の志願は北越雪譜を著して普く海内に流布せんとするに在り、初め雪譜と説とを京傳に寄せ余の爲めに一書を著さん事を托し京傳も諾し繪は玉山芙蓉に托しこれも諾したるに梓前後して黃泉の客となり、志願行届かず、其後馬琴翁と交はる事深ければ之に托することゝなり翁は越後雪譜の表題を選び玄同放言に掲示迄しながら机上の耕生活世話敷とて徒らに星霜を重ね馬翁もはや六十の坂を四ツ越し居れば成功覺束なく依て之を断り更に京山に托せし所いとたやすく引請剰へ余が著述名義にて聊かの謝金にて引請開板前より江戸に評判立ち近年の著述番附の小結びの地位を占むるに至りたるは偏に京山の取計らひによる事也、馬翁も後悔して京山を誹謗し悪口を申越したれど余は京山に忍耐を説きしばらく馬翁を訪はしめたり、京山も兄以來の舊交を忘れず遠路を意とせずことし天保七年五月廿日餘り机上の耕を廢し子息京水を伴ひ尋ね來り、積る話に日の移るを知らず、水無月半ばかりにして自分の中風發し三廻りの入浴を要する爲め留守之寰應を牧山に托したり余が病は其後漸く重く京山滞留六十日に及び京山善光寺を廻り歸府せり、實に今生の別れと京山の消息を病中のつれ〲に取集め牧原にさし閲して冊を合綴し永く記念となす、兒孫みだりに之を反故となす莫れ

この自叙によつて京山と牧之との交情がわかる。即ち前に記述した事實がこゝに簡單に裏書されてゐるやうなものである。

## (十九) 京山と越後

京山の書簡なるものは、彼が鹽澤に牧之を尋ねた所までしか書かれてないので、鹽澤に於ける京山の消息、江戸へ戻つて雪譜後編を著はすまでには四年もかゝつてゐるが、この間に牧之とどんな往復を重ねたものか、その點が甚だ明確でない。京山の書簡集は今一册あるといふから、それを見ればおのづから判斷もつくであらうが、寓目する機會を得ぬので想像して見るほかはないが、只雪譜後編を讀むと、京山が越後に於て見聞したことがチラホラ載せられてあるので、それによつて消息の一端は窺はれる。第一京山は越後を如何に見たかといふに實は京山は息子を連れて越後へ行つたが、越後でも山の多い殊に深山地の魚沼地方を見た丈で、新潟にも寺泊にも行く事を期して居た

に拘はらず、折ふし下人役の牧之が中風に罹つて湯治に出かけるといふ騒で萬事心の儘に行かなかつた事情もあつて殆ど何處へも行かずに江戸へ立歸つたと見える。雪譜後編に京山の錄して居るのを見ると、鹽澤滯在四十日、鹽澤をはなれて小千谷へ遊んだのが十數日、小千谷には岩居といふ人が居て、姓はわからぬが牧之とは親戚關係にあるものらしく、京山はこれを頼つてその家に滯在し、それから江戸へ歸つた。折角百里を遠しとせずして出かけた京山は、山を見て歸つたに過ぎぬ。鹽澤は別して山地、滯在中の四十日間は殆ど一同も鮮魚といふものを客にすることが出來なかつた。小千谷に至つて始めてこれも川魚であるが鮮魚を口にしたのである。

併し京山の越後へ着後は熱心に雪の問題を研究した。其中でも、新興味を感じたのは雪中の家居の構造であつたらしい。即ち雪國特有の雁木を見て不思議の眼をみはつたのであつた。それから雪中歩行の用具「かんじき」の如き實物を見たのは始めてとあつて、京山はこれを自ら穿き試みなどしたものであつた。牧之の家人はそれを穿いて、あ[illegible]くるしいものを[illegible]在に操縦するのに、京山は穿いて見ると身動きもならなかつたといふ笑話もある。

又小千谷滯在中獨りで、郊外に散策を試みた事がある。さう

するど物を衒ふた二人の女に出逢ふた。此二人の女は物を衒ふては居るがよく見ると都にはめづらしい程の美人なので、越後には美人が多いと豫て聞き及んだ如く實際美人國であると感じ、さすがの京山も見とれて恍然となつた程であつたが、岩居の家に歸つて其事を話すと、一同は笑つて、其女こそ此邊の盛多の姫や娘で誰も相手にするものはないと云はれて一笑したといふことや、又同じく小千谷滯在中地獄谷で遊んだのであるが、其時岩居は氣を利かせて、土地の藝妓二三名を杯盤の間に侍せしむるため、豫め先に遣つて置いた。さて京山は行つて見ると、まことに嶮岨なる道に、崩れかゝつた茶屋が僅に一軒あるやうな山間に、其近所には見られないやうな女が居て茶を侑める、酒を勸する、これにも吃驚して譯を聞いて見ると、小千谷の妓なる事がわかつてさうかと領いたのであつたが、歸途連れ立つて戻つた時に孰れも草鞋をはいて歩き出したのを見て、これはとても都會には見られぬ一種の風俗だと頗る面白がつた事などが書かれてある。又三國峠を通つて或茶店に憩ふ[illegible]を」といふと砂糖の代りに白粉をかけて出されたのには京山も避易して衒ふてゐた行李の中から砂糖を取り出しかけ直したといふことも載つてゐる。

## （二十）京山と其家庭

ついでながら京山についてもう少し錄して置かう。それは雪譜のことに關係する以外、しば／＼の往復に京山が其書簡中に現はしてゐる事實で稍趣味ありと思ふ京山の身の上についてゞある。京山は牧之と同甲で四十年交つたといふその交情は友人といふより寧ろ親戚の味ひがある。從つて書簡のはしには必ず互に親族合の事迄も叙するのが常であつて、それによつて兩者家庭の事もおのづから窺はれる。

京山には三四人の娘があつて、三人いづれも諸侯に仕へてゐた。中にも二人の娘は長州侯に召されてその中の一人はお妾になつて二人の子まで擧げて居る。そしてその娘は侯から京といふ名を與へられて居た。その妹も亦長州侯に仕へて居る事實が京山の書狀中に見えて居る。この事について牧之は例の「兒孫に示す」の序文の終りに附記して居る事があるから、それをここに抄錄して見る。

京山余と同齡ながら白髮なく眼明かに上下の齒鮮か也云云

又序にいふ京山娘五人の内兩人踊り上手にて長州侯（萩の城主松平大膳太夫）に御覽に入れ候處御滿悅の上兩人共におそば奉公に參上候樣（花士の跡は芝居也）仰せあり出東答に賤き者の娘第一仕付が大金故力不及と申すを恨々中より物入りは此方にて致すとの事につき差上る。間もなく一女は中老に立身、殿樣よりお京と名を賜はり寵遇渥く後には御部屋となり、姫君翌年若君誕生、斯くなれば親元より願出れば親元へ三百石被下家例なれども山東願出す、併し山東部屋へ出れば羽鬢よしとの事、妹は若君御膳番と申す事故に女は氏なくして玉輿にのると是等をいはむ

京山の書簡にも文政十二年如月廿二日附の分にその娘を萩に遣はした事が一寸書いてある。

去年卯月十六日娘二人松平大膳様御供にて三百里外の旅路を長門之萩に發足、いまだ年行行かぬ者共故一ヶ年之在勤心元なく、妻をも番頭お乳の人に付てつかはし跡は男くらし之私並倅兩人、おろかなる手代小者など、味噌桶之世話までいたし男やもめ之うぢ／＼くらし居り、殊之外繁雜云云。妻並娘も所々見物いたし當春三月廿四日めでたく歸着いたし候へ共娘共はもとより櫻田御屋敷に罷在り燒原よりは歸り不申、今に男くらしいたし居り申候

これで娘の消息がわかる。全體世間には山東京傳、京山をいろ／＼研究する人があつて此兩人は殿樣の落胤だなどといふ說もある。其眞否は知らないが、さう思はるゝ節は滿更無いでも

ない。考證家の說は姑く措いて、若し或人のいふが如く洒脫であるとすれば京山の女が多く諸侯に仕へて居る點からいふと變因變果ともいふべきものがあるようにも思はれる。流石に京山に學問があつた丈けに牧之の自叙傳文にもあるが如く自分の娘の故を以て三百石の扶持を受くる事はしなかつた。これは京山の見識として認めねばなるまい。

又文政十一年九月の書狀中に、惣領娘の事をいふて居る。この惣領娘も亦大名へ行つて居るのであるが、これは秋に行つて居るのとは違ふ、その書簡には

私は惣領娘お増とて廿三才當時松平大和守樣へ中老をつとめ居、伜京屋伊織廿一才、次にお京とて十八才、次に今とて十六才、此兩人は松平大膳樣へ御奉公いたし、京は殿樣若年寄つとめ居候、末之男子は京水にて梅作と申候

といふて居る。これによると惣領娘の次に長男、其次に娘二人末が男子の五人の子供の內、娘三人までが諸侯の奥づとめをして居たのである。京山は倘ほ自分の子供に對する家庭の實況について寫實的に興味のある光景を左の如く云ふて居る。

親の子に於ける胡蝶が菊を作る樣のものにて苗より種々丹精いたし、花の頃は己が胡蝶故、いつか老にのぞみ申候、伜未だ獨身にて近來花柳に狂ひ出し大に散財致し候、依つて未だ家事を許し難く、私浪人にて刀を差し候へ共十疊の片身かはりにて机の上に帳面をひらき筆下に十露盤をたらすかと思へば細筆に擂詞を連ね、印をほるかと見れば猥褻を丸め、袴をぬげば前だれを結び、田舍芝居の由良之助五段六段の狂言綺語、世話しき中に釜をかけて松風を樂しみ申す事瞬省にあらず、茶師に氣を養ひし迄に御座候

此書狀もなかく趣のある書きぶりで彼れの日常や家庭の樣樣が簡單に叙されて居る。卽ち武士かと思へば町人、戲作者かと思へば茶人、やはらかいもの許り書くかと思へば印刀を取つて篆字を刻する、その日まぐらしいやうな生活が如實に描き出されて居る。

## （二十一）京山の餘技と嗜好

そこで京山が茶人といふことに就て少し書くが、前に錄した祝融の災に罹つて京山が、あらゆる物を失つた時分、しばく牧之に書を寄せて田舍の山村邊に麁細工で極めてさびたものはあるまいか [illegible] とて圖まで書いてどうか捜してもらひ度いと申し越したことなどが見える。なかく茶には京山も餘程趣味があつたものと見えて、忙しい間にも時々定つた日には師匠の茶會へも出席し或

ば自分の家で友人と茶會を催した事が書いてある。それに篆刻の技もかなりの處まで練達してゐたらしく牧之に與へた京山自刻の印が書簡の餘白に四ツ五ツ押してあるのを見るに、今日では自分等その事に趣味を有してゐる者から云はせれば餘り上手とは評されぬが、兎に角先づ一通りは出來てゐる。隨分當時京山の文壇に於ける名聲を聞いて、印を托した者も尠くなかつたやうで筆を執る忙しい間には、時に印を刻してそれを生計の補にあてたものである。

十數年に亙る京山と牧之の交際に於て、互に物を贈答したことも多かつたが、牧之は常に味噌漬を贈つた。又寒晒し（片栗）を贈り時には鹽引を贈つて居る。その他種々なる越後の土産を贈るのが例であつたが、京山が何時も頻りに御禮を云ふて喜んで居たのは重にこの味噌漬、片栗、鹽引の三品であつた。當時は今の如くに小包郵便のあるわけではなく飛脚が擔いで江戸迄持つて行くのであるから、輕いものでなければ土産として甚だ不便である。片栗にせよ、味噌漬にせよ鹽引にせよ、分量は少なくとも重量は相當にある。それを何時も贈るので京山は費用を構はずに贈つてくる此土産に對しては、いかにも御厚意有難かたしとて繰返し感謝してゐた。越後の味噌漬は其時分の江戸の食道樂者間にも餘程珍とせられたものと見えて、味噌漬の「ちそ大」。根、茄子の類を京山の臺所では頗る大切にしてゐた事が其書簡に謝されて居る。又寒晒しも江戸には類似のものはあつても全く製法が違ふので京山は下戸であつた所から別して之を喜んだ。且つ自分の娘共が大名に仕へて居たので、この味噌漬、片栗は必ず幾何かを割愛して娘だちに贈つたもので、娘は又それを殿樣に獻上して居る。或は片栗が若君の食料に自然供せられる所から大名に於ても喜んでゐたといふ消息が常に牧之に報じてある。京山を通じて越後の産物が當時西國の大名の味はふ處となつたのも亦興味ある事と思ふ。

## （二十二）二三の餘談

### 馬琴と北齋の不和

以上で京山と牧之を中心としての「北越雪譜」著作苦心談は略ぼ叙し盡したが、こゝに聊か餘談として附け加へたいことがある。それは馬琴に關しての事であるが、恰も京山の書翰集を一應供覽し終つた頃に、矢張り鹽澤の鈴木家から其保存されてゐた馬琴の書簡集一冊をも借りて讀む機會を得た。それは文政五年といふ年の一年分の馬琴の書狀を綴つたもので其一年間丈けでも罫紙百枚以上からある大冊子となつて居る。偶まそれを繙いて見ると一番先に綴られてあるのが牧之から「北越雪譜」編輯

あ事を托され、それに對して認められた返翰である。

文政五年戊寅五月十七日附馬琴の書翰には牧之から囑された雲譜編集について色々意見を述べてゐる。第一は挿畫について、第二は此書の編集について實地を見るの要ある事、第三には表題の事等について書いてある。先づ第一の挿畫についてどんなに認めてあるかといふに

古人玉山は自然と板下の畫に妙を得たる人也、さして學問はなけれど才子なるべし、著述之事はいさしらず、此人世に在つて繪をたのみ、野生著述いたし候はゞ尤もよろしかるべし、江戸にては北齋之外此繪をかゝすべき者なし乍去彼人はちとむつかしき仁故久しく敬して遠さけ其後は何もたのみ不申殊に畫料なども格外之高料故板元も鼻び申間敷しからば誰と一人に定めず東海道名所圖繪の如く唐畫浮世繪そのムキ〱にてより合畫にいたさせ可申哉これも畫師一人ならねば跡方のかけ合格外わづらはしく候へ共山水などは江戸の浮世畫師之手際に行く事にあらず又婦人その外市人の形は浮世繪によらねば損也、兩樣をかねたるもの北齋のみなれ共右の意味合なればより合畫に可致哉と存候事

前にも書いた如く牧之は太閤記の畫で有名な玉山が越後に赴いた時に、之に畫をかゝせる計畫で雪譜著作の事を話したことがあつた。馬琴の考も、かゝせるには玉山が宜いといふので牧之の考と一致したのであるが、しかし著作の事まで之に委せることは贊成出來ぬ、それは自分などが書くべきものであらうと馬琴らしい自負をほのめかしてゐる。そこで畫に就ては既に世に亡い玉山は今更止を得ぬとして、彼れよりも以上で必ず世人の共鳴を博する畫家としては北齋に限ると馬琴は說くのであるが、しかし馬琴と北齋とは此時分に不和の間柄であつた。當時北齋の畫名は頗る高く、門前市を成すばかりに繁昌して居た。その爲めでもあつたらうか、自ら見識を持して居たので、動もすれば馬琴と衝突した。馬琴の言ふが儘にはなつて居ない。遂には兩人喧嘩をするに至つて其間が疎隔してゐた事も事實である。馬琴が北齋に向つて惡聲を放つことを辭せぬには、いくらかこの意味が含まれての事らしい。

### 雪譜と馬琴の心事

元來一人で山水にも可、人物にも妙といふ兩者兼ね能くする畫工は容易にあるわけがない。そこで馬琴が止を得ず寄合畫を工夫するに至つたので、例へば人物を浮世繪師に書かせ、風景を南畫趣味の者に書かせるといふ如く各其向々によつて長を採び粹を鍾める方法を執らうとしたのも一應無理のない計畫とい

はねばなるまい。

其文には實地に臨み越の山、越の川、さては其風俗人情まで親しく視察を遂げた上でなければ、執筆は出來ないと云ふて、其書翰に左の如く書いて居る。

右の一著述あらまし認め被遣候趣にてつゞり候へば、さしてむつかしき事にはあらぬを、愚意の趣にすれば甚だ甚だ手おも也、所詮御地を一見せずには筆を起し難かるべきかと存候、乍去旅行のことは前にも申候通り三里五里之歩行も自由ならず、且つ諸費をいとはずにといふ程の餘力も無之故、中々急には思ひ企てがたき業なれ共何とぞ明年明明春までに御すゝめ之湯治をかね、せめて御地を踏候てその上にて著述いたし候はゞ後悔も少く筆もとり安くと存候この儀はかく存候までを申也、我身ながらわが自在にもなりかね候故申すまでにておぼつかなき事に御座候今十年も昔に候はゞ如何ともなり候何事も時節おくれ心のまゝにならずこれのみ殘念の至りに御座候

馬琴の如き綿密周到なる作者としては、只牧之から與へられた草稿を書き直す丈けでは到底滿足する事はできなかつたことであらう。且つ京山は自分が執筆しても京山自身の著作とせず、牧之の著として世に出さうとしたのに、馬琴は然らず、彼れ自らの著作として牧之が考訂するといふ形式をとらうとしたので京山の時とは全く逆に出やうとしたのであるから出來細心の馬琴としては實境を見んとしたのも當然である。殊に江戸に於ては殆ど想像のつかぬ大雪の事を書かうといふのであるから土地の事情をも見、まのあたり牧之にも逢ふて種々質問した上でなければ迂濶に筆は執れぬといふ感じを起したのも自然である。

併し此書簡にもあるやうに、さうしたいとは言ひ乍らも、眞實さうする意があつたわけではない。馬琴としては例へ越後漫遊の望みはあつたものとしても當時の事情が許さなかつたのであつて、この書簡から見て到底出來ないといふことを暗示して居るやうな氣がする。又果してそれは實現せずして終つたのである。馬琴は書物の表題について又斯う云ふて居る。

外題の事色々考見候處、北越雪中闘會などいたし候ては、只今闘會ものすたり候故をかしからず又北越雪話などいたし候ては外題かろく、わづか二三冊之半紙本めきて損也、又先年北越奇談と申す書世にあらはれ候へ共當地にては評判どつともいたし不申北越之二字先をこされ今更人まねする様にて殘念也、依之「越後國雪中奇觀」と可致哉と存候へ共、雪中の二字未だ落ち着不致候様に存候、いづれ尚又

近々之內とくと考へ玄同放言與目錄中へ右之外題をあらはしその外追々拙著へ右外題を書載せ世之人に知らせおき可申候、左樣に候へばうり出し之節大につよみになり申候、尤も越後鹽澤鈴木牧之考訂といたし申候、隨分御骨折らせられ出版成就之節御亡父樣への御孝養にもと存候事に御座候奇觀之二字は動くまじくと被存候、いかゞ、六出玉屑みな雪の事なれ共さては俗へ遠くて損也、雪中之二字とくと考可申候事

◇

前揭馬琴の書簡を通讀して見ても、當時彼れが頻りに外題の事で苦心して居たことがわかる。實は本の賣れると否とは主として外題の附け方如何に在るので、作者としては第一に其選定に心を碎くが古今共通である。依賴を受けるとゝ匆々、眞先にこの外題について馬琴が意を用ゐたのは無理からぬ事である。

そこでいろ〳〵考案の結果、遂に雪譜といふ字を考へ出したのはこの書簡を發してから後の事に屬する。鈴木家から借覽した馬琴の書簡集も調べて見たが、雪譜と命名するに至つたことを認めた書簡は見出さなかつたから、それ丈けが缺けて居るのであらう。尤も綴られた書簡中に、雪譜云々といふことが散見されるから察すると、命名に關する書簡が其間にどうしてもなければならぬ筈なのに、これが缺けて居る所以は恐らく其分丈けが半切れか何かに書かれてあつて、一定の用紙に書かれた書簡のみを綴る場合に、それを挿む事が不便であつた爲めに此分丈け逸したのであらう。兎に角雪譜の名が馬琴によつて選ばれたことはたしかで、後に其著作が馬琴の手を離れてからも其名を用ゐなければならなかつた次第も前に擧げた通りである。細琴の書簡として引用した前揭三斷の音信は、實は皆連絡したものので同一便に寄せもたので便宜上三つに分けて說明を加へたのであるが、この書簡は牧之が雪譜編纂の事を馬琴に托した當時の事情を語るもので、又一面にはまだ京山の引受けない前の經緯を推知する資料ともなるものである。

尙ほ終りに書き加へるが、文政五年といふ僅か一年の間に牧之に與へた馬琴の書簡は罫紙で百枚以上二百枚近くになつてゐることは前にも書いたが、此他に散逸した書狀はいくらあるかわからないから、之をも集めたら非常な量を示すことであらう。當時の人は書簡を認めるに堪能であつたからでもあらうが、馬琴の如くに筆硯の忙しい寸陰をも惜むその人が、よくも斯うまで努めたものだとつく〴〵感じ入るのほかはない。

# 舊石器時代の洞窟壁畫を訪ふの記

在巴里　森口多里

## 一

聖誕祭の前夜で、夜なかの十二時を合圖に急に寺々の鐘が鳴りひゞき、街上にも人の氣はひが繁くなつたが、疲れてゐるので出てみるのはやめた。それまで私は寢台の上で案內記を讀んでゐた。――「レ・ゼイジエ」がこの町から遠くないことを知つたのは、その夜であつた。Les Eyzier の發音はどうも私には窮屈でならない。この名高い舊石器時代の遺跡所謂「有史以前の首都」の名前は、渡歐前にも幾度びか目にとめたのだが、斯うして佛蘭西の中南部の旅に志しながら、つい記憶に浮んでこなかつたといふのも、やつぱりこの地名が、西班牙の「アルタミラ」と違つて發音が妙に窮屈だからであらう。なんにしても、永年複寫圖で見慣れて、其度每に謎めいた畸異の美にうたれてきた「人類の最初の藝術」の發祥地に偶然にも立寄れるといふのは、大した儲けものである。

一九二四年十二月二十三日の夜行で巴里を立つて、翌日の未明に、脹らんだ雜嚢と寫眞器の革函とを十文字に外套の肩から吊した旅姿の私は漂然とリモージ驛に下りた。リモージは其日のうちに見てしまつて午后の汽車でペリグオウに向つた。中世紀のペリゴール派建築を代表する寺院がこの町に遺つてゐるからである。着いたのは夕刻、道は泥濘つてゐる、おまけに廣くもない街上にレールが引かれて堂々と大型の汽車が通るのだ。私は地圖を賴りに宿屋の所在地までこの人通りの少ない裏道を步いてゐる途中、行きずりの自働車に忽ち頭から足のさきまで泥の飛沫をかけられた。おやと驚いたときには既に自働車は遠退いてゐた。そこで私は、なるほど此處は巴里ではなかつた！と考へてひとり苦笑するよりほかなかつたのである。

この國の首都に落着いて一年になるが、ひとりで巴里を離れて旅に出たのはこれが最初である。思出してみると、學生の時分、漫然と知らない土地が巡りたくなつて、先づ鎌倉を振出し

に、其日のうちに江の島も見物したが、段々夕暮が近づくに從つて知らぬ宿屋の敷居を跨ぐのが空怖ろしくなつて、とう〳〵一晩も泊らずに東京に引返したことがあつた。こんどの獨旅(ひとりたび)にしたところで、談話にも未だ碌々慣れてゐない國の遠い田舍を巡るのであるから、いろいろ取越苦勞も出てくるが、宿屋に着いてみると、直ぐに快よく室をあてがはれたので、先づ第一番目の難關は無事に通過したわけだ、しかも晩飯には小鳥の料理まで食べさしてくれたので、當時――目下はシャトウブリアンに立身したが、――當時馬肉のビフテキを有難がつてゐた貧乏學徒は、これにすつかり滿足して、食後聖誕祭前夜の町の景氣を見に外へ出た。

町の中央の廣場は折から祭市(フオアール)で、大小の屋台店や輕業小屋が立並んで、殊にも福引で物品を商ふ屋台店では、電燈の光が瀬戸物や玻璃器の陳列に煌々と照映ゆる前で、道化役に假裝した男が、軒端に吊した景品の雉の尾をつまんでみせたり、野兎の尻の孔を嗅いでみせたりして、立寄る多勢の客を笑はせてゐる。奥に陣取つた輕業の小屋は勿體ぶつて中々開かない。その近くの、未だ人の寄らない針廻しの「當てもの」の小屋では、積みたてた籠のなかで澤山の鳩が不安の目玉を動かしてゐる。やがて人が集つて、廻された針が「當り」を指せば、この平和の象徵は、亭主の武骨な手で「張見世」から摑みだされて、當てた客に引渡されるのである。空の一隅には、黑い屋並を越して中世の石の寺院の球蓋(キユポラ)が仄白く浮んでゐるのが目につく。――ふと氣がついてみると、なんとなく足の裏の感觸がいつもと違ふ。が、その不審は忽ち解ける。私が踏んでゐるのは黑い「土」だからである。この一年間といふもの、鋪床(いしじき)の道ばかり歩いてゐて、つい雨あがりの黑土を踏む機會がなかつたので、いま廣場の裸かの土の濕めりが、靴と靴下とを透して足の裏に柔かで水つぽい彈力性の感觸を與へるのである。同時に、巴里の私の室の旅嚢のなかに押籠められてゐるオヴアー・シーズが思出されておかしくなつた。東京を立つときわざ〳〵新調したのだが、一度も使はれないで新聞にくるまつてゐる若隱居のオヴアー・シーズである。

## 二

元氣のいゝ鐘の音の跳躍は、時刻が既に聖誕祭(ノエール)の朝に移つたことを告げるのであるが、私は二度目の外出がおつくうで案內記を伏せて睡つてしまつた。

明くれば聖誕祭の日、しかし旅びとは地圖を案じながら古い建築を見て歩かなければならぬ。リモージでもさうであつた

が、このペリグオウの町の二つの石づくりの寺でも、内部の奧の小さな一隅が恰度日本の山車を思出させるやうな作りものゝ岩組で縁取られて、その龕のなかでは可愛いゝベテレヘムの旅籠の庭先が明るく豆電燈に照らされてゐる、そして厩の前には槽のなかに裸かの小さなイエス、その傍に小さなマリア、それから奉納の小さな蠟燭……そこで善男善女も片膝をついて小さくなつて拜まなければならぬ。

　時間に都合をつけて町立の博物館も訪ねた。この「ミューゼ・デ・ペリゴール」の數室はこの地方に於ける有史以前の遺跡の發掘品で充たされてゐて、しかも其等の陳列品を精細に分類記述したコレクション・プレイストリク專用のカタログまでが出來てゐるのには意外の思ひをした。其後度々旅をつゞけてゐる間に經驗したことだが、田舍の町を訪れて、案外にもその町のモニュマンや蒐集品に關する適當の解說書かカタログの類がちやんと刊行されてゐるのを見出したときには、少なからず嬉しいものである。その町全體が奥ゆかしく思はれるものである。それに反して相當に大きな都會でありながら、ミューゼのカタログ一冊出來てゐないのを見ると、思はず「ふん」と言ひたくなる。そして旅の先々で買ひあつめてきた其等のローカルの刊行物といふものは、なんといふ閑樸の愉しみを與へてくれることであらう！

　さてコレクション・プレイストリクのうちの石器時代の遺品の室に入つて、忽ち私の目を惹きつけたものがあつた。それは石器類の陳列棚の上に乘つかかつてゐる日本の酒樽であつた。置所がないので異國の石器骨器と同居させられてゐるのであらうが、一體土俗品として保存されてゐるのであらうか、それとも工産美術として保存されてゐるのであらうか。まアいづれでもよい、虛心坦懷に觀照したまへ。その用途にきつちりと適合した構體、材料の性質を活かして構造的必然性と素樸な形態的變化とを同時に實現してゐるところの竹の輪の帶、全體としての安定のある形相、それから、黑くぴつたりと印されてゐる傳統的商標の求心作用、——まことに工産美術としての精髓を立派に表現してゐるではないか。そこで私は、この酒の空樽が日本の工産美術を代表して遙々ペリゴールに出張つてゐることを、決して不足に思はないことにした。いや、他日帝國美術院展覽會なるものに工産美術部が設けられた場合、この酒樽を落選せしめる程に自信を有する審査員は一人でも居るだらうか。

　石器時代の遺品に交つて日本の酒樽が一箇存在するのを不思議に思つたが、この廣間の隣に附屬してゐる長方形の狹い薄暗い一室に入つて見て、成程と私は頷いた。其處の壁に沿ふた硝

近々之内とくと考へ又同故言奥目錄中へ右之外題をあらはしその外追々拙著へ右外題を書載せ世之人に知らせおき可申候、左様に候へばうり出し之節大につよみになり申候、尤も越後鹽澤鈴木牧之考訂といたし申候、随分御骨折らせられ出版成就之節御亡父様への御孝養にもと存候事に御座候奇觀之二字は動くまじくと被存候、いかゞ、六出玉屑みな雪の事なれ共さては俗へ遠くて損也、雪中之二字とくと考可申候事

◇

前掲馬琴の書簡を通讀して見ても、當時彼れが頻りに外題の事で苦心して居たことがわかる。實は本の賣れると否とは主として外題の附け方如何に在るので、作者としては第一に其選定に心を碎くが古今共通である。依頼を受けると匆々、眞先にこの外題について馬琴が意を用ゐたのは無理からぬ事である。

そこでいろいろ考案の結果、遂に雪譜といふ字を考へ出したのはこの書簡を發してから後の事に屬する。鈴木家から借覽した馬琴の書簡集も調べて見たが、雪譜と命名するに至つたことを認めた書簡は見出さなかつたから、それ丈けが缺けて居るのであらう。尤も綴られた書簡中に、雪譜云々といふことが散見されるから察すると、命名に關する書簡が其間にどうしてもなければならぬ筈なのに、これが缺けて居る所以は恐らく其[illegible]けが半切れか何かに書かれてあつて、一定の用紙に書かれた[illegible]簡のみを綴る場合に、それを挿む事が不便であつた爲めに此分丈け逸したのであらう。兎に角雪譜の名が馬琴によつて選ばれたことはたしかで、後に其著作が馬琴の手を離れてからも其名を用ゐなければならなかつた次第も前に擧げた通りである。猶馬琴の書簡として引用した前揭三斷の音信は、實は皆連絡したもので同一便に寄せもたので便宜上三つに分けて説明を加へたのであるが、この書簡は牧之が雪譜編纂の事を馬琴に托した當時の事情を語るもので、又一面にはまだ京山の引受けない前の經緯を推知する資料ともなるものである。

尙ほ終りに書き加へるが、文政五年といふ僅か一年の間に牧之に與へた馬琴の書簡は罫紙で百枚以上二百枚近くになつてゐることは前にも書いたが、此他に散逸した書狀はいくらあるかわからないから、之をも集めたら非常な數を示すことであらう。當時の人は書簡を認めるに堪能であつたからでもあらうが、馬琴の如くに筆硯の忙しい寸陰をも惜むその人が、よくも斯うまで努めたものだとつくづく感じ入るのほかはない。

子の箱の中はは、妻楊子の小箱、紙雛、めんこ、櫛、簪、といつたやうなこまごました、安くて可愛い日本の「御土產品」が一杯にならんでゐるのであつた。反對側の壁には新しい手拭が一本、掛物かなんかのやうに吊されてゐる。裏面がこちらに向いてゐることは文字によつて分るか、染色が兩面均しいので、漢字を知らぬ館員は、裏面を見せてすましてゐるのである。この手拭は軍人の肖像を染出したもので、上部に「海軍中將上村將軍」の八字が二行に染拔かれてゐる。傍には解說の小札が附してある、曰く、

Serviette Japonaise

Au Japon la serviette sert de bonnet aux femmes, de centure aux hommes ou l'on sert humide le plus part du temps.

日本のセルヴィエット

日本にてはセルヴィエットは、女の頭巾ともなり、男の帶ともなる、且つ多くの場合濡らして使用さる。

この手拭によつて考へれば、是等の土俗品は日露戰爭直後の製產であるにちがひない。それも外人客かお上りさんを相手にして賣られたものらしく、例へば小箱の表裝にしろ千代紙にしろ、質の悪い西洋紙にけばけばしい色の西洋インクで刷つて金箔を加へたものであり、ハンケチの名所繪も落着きの悪い銅版印刷かなんかである。この種の品は日本で今でもよく見るもので、ちらほらと目につくときは格別何とも思はないが、かうして一室に寄せならべて眺めるといふと、いかにも明治大正時代の或る時期の趣味好尙の一分野がはつきりと浮びあがつてくる。いづれも幼稚で安つぽい工藝ではあるが、しかし回顧的に見れば稍々慕かしくもある。同時に、これが歐羅巴のミューゼの陳列品になつてゐることを考へると、內心くすぐつたくもある。

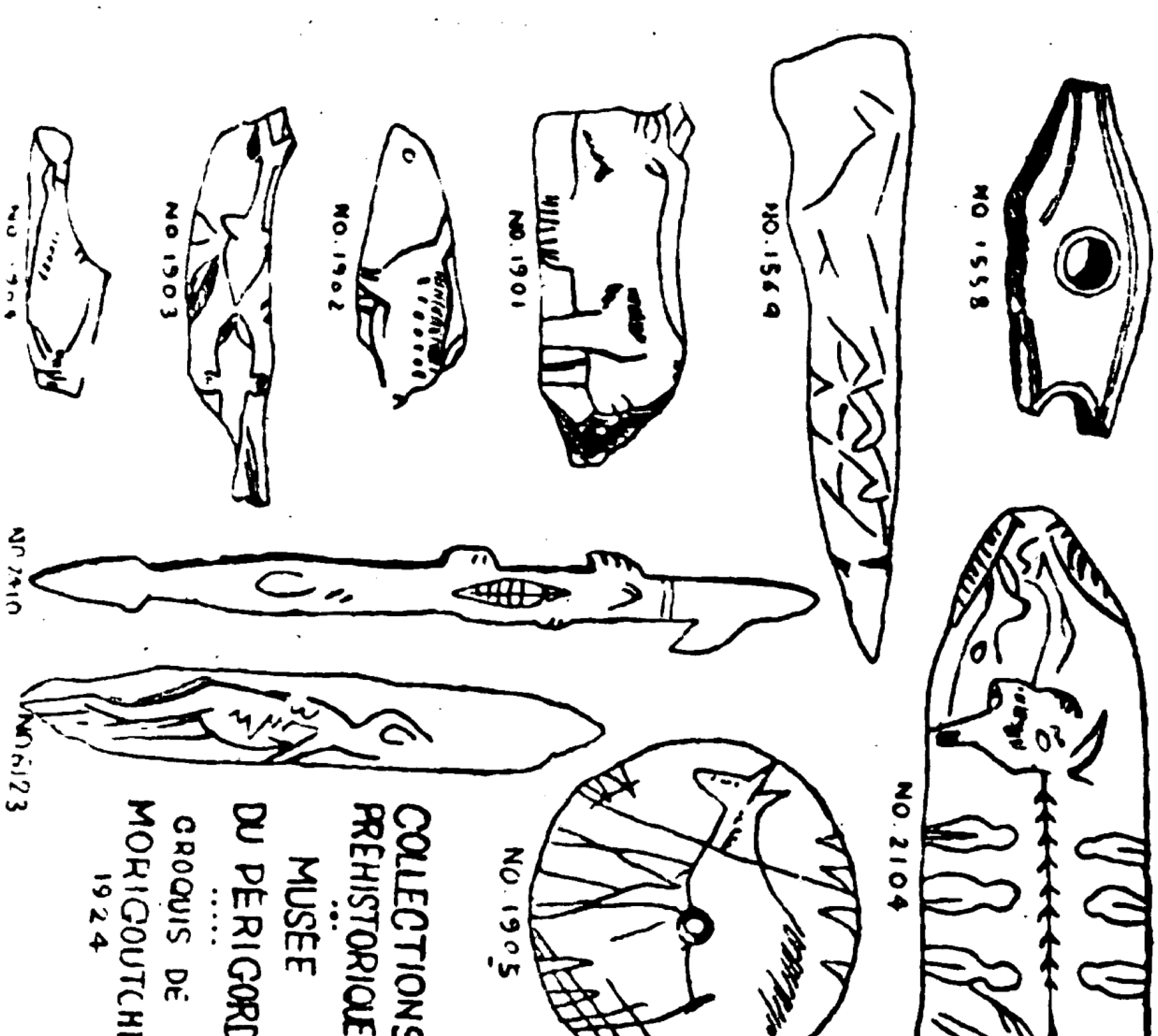
## 三

翌日（廿六日）の午前に再び博物館を訪ねて骨や角に施された舊石器時代の線彫を拾ばかり寫した。このコレクション・プレイストリクの廣間には、所謂「第四紀」の作品が丹念に分類して陳列されてゐる。「第四紀」が舊石器時代と新石器時代とに二大別されることは說明するまでもないが、更にこの新舊兩時代の細分は、カタログの序文でみると、原則としてガブリエル・ド・モルティルレ氏の分類方法に據つたものださうである。ド・モルティルレ氏の「ル・プレイストリク」（一八八三年版）は私も手許に持つてゐるが、矢張り日本でも一部で行はれてゐるやうに、舊石器時代の方は、シュレアン（氣候熱くして

濕潤）ムステリアン（氣候寒くして濕潤）ソリュトレアン（氣候溫和）及びマグダレニアン（氣候寒くして乾燥）の四期に大別してゐる。すべて人間の工作品の變遷に從つて區分したのであるが、私どものやうな藝術史專攻の者にとつては、植物に準據した區分などよりもこの方が調法である。現在では一般に過渡期として、シュレアンとムステリアンとの間にアシウレアン（寒くして濕潤）を挿み、ムステリアンとソリュトレアンとの間にアウリニアシアン（寒くして乾燥）を挿み、マグダレニアンの次ぎにアジリアンを加へる。

このうち私どもに一番面白いのは最後のマグダレニアン期である。何故といふに「第四紀」は最小限十二萬五千年續いたさうだが（René Verneau, les Origines de l' Humanité. 1926, P. 14）、シュレアン期の人間にしろムステリアン期の人間にしろ石の獵器の類を作ることは知つてゐても、物象を表現するまでには至らなかつたのである。表現藝術はアウリニアシアン期に萠芽してマグダレニアン期に滿開の驚異を現出してゐるのである、乃ち人間が物象の表現に熟達するまでには拾余萬年を費さなければならなかつたわけである。

挿繪の第一はペリグオウの博物館で寫してきたもので、硝子盖の上から眺めて早々に鉛筆を走らせたのであるから、決して科學的の精寫ではないが、大體を想像する役には立つであらう。左に番號に從つて、カタログ（par Maurice Féaux. 1905）が解說するところのものを譯載する。




第一圖

（一五五八番）――ル・スウシ（ラランド町）出土。マグダレニアン期。孔を穿ちたる馴鹿の角の斷片。大いに粧飾されたものらしいが、動物の表現は無い。孔は溝の輪で圍まれてゐる。一方の緣に沿うて深い溝が走つてゐたらしい。他方の緣に沿うても同樣の溝があるが突出

した箇所までゞ切れてゐる。この角器は何に使用されたものか分らない。ラルテ氏はこれを指揮棒と呼んでゐる。人によつては、或は馬の手綱押へであるとし、或は天幕の綱を張りおさへるものであるとする。しかしこの類の有孔骨器の大部分は、そのやうな力の要る役に用ゐるべく、余りに薄い。寧ろ是は身飾品である。ショエテンサク博士は是を衣服を支へる一種の止針と見てゐる、乃ち衣服の端を孔の一つに通すのである。この說の可能性を認容したとして、私は更にもひとつの用途を是に與へるであらう、そして護符、フェテイシュ等を結びつけるべき一種の懸吊品と見做すであらう。近代の蠻人、就中黑奴が、動物の角や蹄、ふさふさした毛、種子、といつたやうながらくたを衣服に懸けつるしてゐることは、人のよく知るところである。

(一五六九番)——ル・スウシ出土。マグダレニアン期。骨器、一種の錐、その先端を欠く。片面に線彫が施されてゐる、乃ち、左手には一匹の馬の前半身の形、右手にはこれと反對の方向に向いてゐる他の四匹のヨリ小なる馬。

(一九〇一番)——ラウジュリー・バッス(レ・ゼイジエ町)出土。マグダレニアン期。骨の斷片、その面に强く引かれたる線で一匹の馴鹿が彫られてゐる。これが馴鹿であるといふことは、その角と、頸に下に垂れたる長い毛のふさとで判かる。この線彫は不幸にして動物の半身と頭部とが疾くに缺損してゐる。

(一九〇二番)——ラウジュリー・バッス出土。マグダレニアン期。平らな骨でつくられたる懸吊品、その面には一匹の四足獸が線彫されたが後半身しか殘つて居らぬ。この動物は角を有し、今尙その先端を見ることが出來る、そして前出の線彫に於けると同樣に角は脊の上に橫はつてゐたらしく見える。其故にこれも矢張り馴鹿であらう。

(一九〇三番)——ラウジュリー・バッス出土。マグダレニアン期。骨の平板の斷片、その面に一枚の羽根と二匹の魚(?)とが線彫されてゐる。

(一九〇四番)——ラウジュリー・バッス出土。マグダレニアン期。鳥の骨の小片、その面に一箇の馬の首が線彫されてゐる。頭部は古い割目によつて失はれてゐる。

(一九〇五番)——ラウジュリー・バッス出土。マグダレニアン期。孔を穿てる骨の環、その兩面に線彫を有す。一つの面には前方に曲がれる角を持てる動物の立姿を表はす。これは牝山羊或は羚羊である。他の面にも類似の動物が彫られてゐるが、これには角が無く、且つ寢てゐる姿に表はされてゐる。尙周圍の一部には犬齒狀の線彫が施されてゐる。

(二一〇四番)——レエモンダン(シャンスラード町)出土。マグダレニアン期。不幸にして一部缺損せる骨の平板。その先端に一箇の孔の痕を殘してゐる。疑ひもなく是は懸吊品であつて、不可思議に粧飾された貴重の品であつた。この裝飾品の最も興味のある部分は、反芻類乃至野牛の首である。ミシエル・アルデイに從へば、是はその隆起せる前額と角と頸に垂れてゐる長い毛とを特徵とする麝香牛の首である。麝香牛は、今日までその骨が幾つか第四紀の鑛床から採集されたゞけで、表現されたものとしては是が唯一の標本であらう。首の前には橫に馬(?)の二本の脚が彫られてゐる。首の後ろの部分は短い毛のついた一本の穗で仕切られ、人物(?)が二列、互に頭を向合はせて並んでゐて、極めて注目に値する。エヅアール・アルレ氏がグールダン(オート・ガロンヌ)の洞窟で採集した骨の篦に線彫されてゐる給畫の形象と一寸も違はない。かういふ全く特殊の性質の線彫の類似が

存在する以上、是等は同一の手によつて施工されたものではないかと考へることができる。

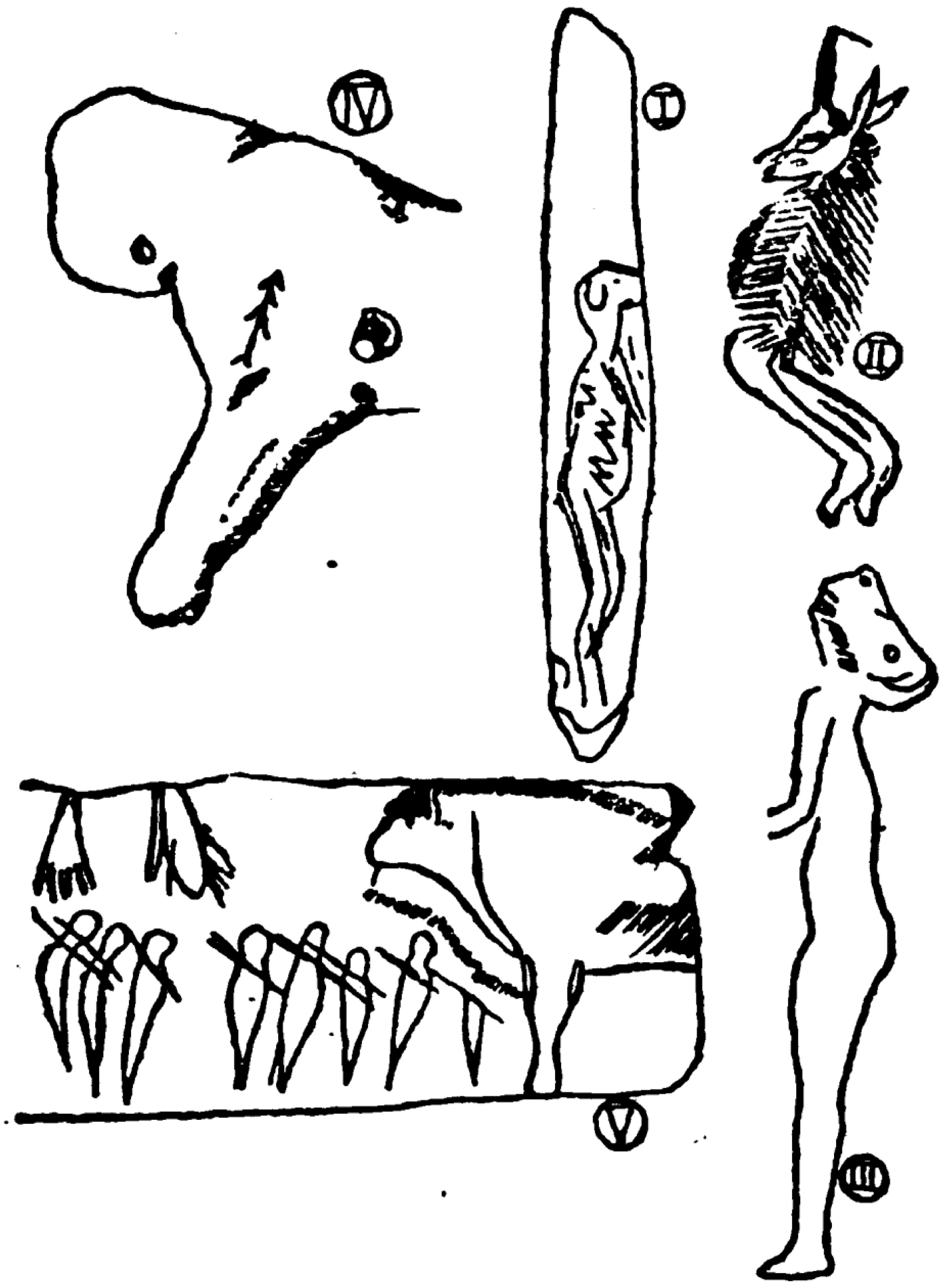
（二四一〇番）――ラ・ロク（トレモラ町）出土。マグダレニアン期。線形の痕を有する銛、一部欠損、楕圓形の突起せる荒玉が二つ、表面を飾つてゐる。あまり見かけない飾りである。

（六一二三番）――クロ・マニョン（タイヤク町）出土。マグダレニアン期。肋骨の斷片、その面に、大きい併し深くない線で、一人の女の姿が横向きに彫られてゐる。線彫は、一部分は明瞭確然としてゐるが、他の部分は曖昧で、そのため或る細部は漠然としてゐる。右の耳は極めて大きく、是と目とはよく分かる、しかるに顔の線は不分明で、骨の緣で消え失せてゐる、そしてこの部分は殆んど全長罅が入つてゐる。右の腕は、その前半就中手のあたりが輕く表示されて前に曲げられてゐる。左の腕は、その一方の線が胸部の線と混同し、胸の少し前で突然切斷されたかのやうである、しかし腕を横ぎる線は、前述の罅から來てゐる。そこで、少し注意して見れば、腕が續いてゐて下方に曲がつてゐることが分る。胸部は低く且つ延びてゐる。腹部の線はその正しい曲線をよく描いてゐる。脊の線は二度引かれてゐる。線のかき足しは、最初の線を改め且つ腰の凹みを表示するために行はれた、また腿と脛が長くて細いので、右の腿を少し太くするためにも線がかき足されたのである。膝は輕く曲がつてゐる。脚の脊面の輪廓の曲線は、若しも正面の線が殆んどそれに平行してゐなかつたなら、充分に發達したふくらはぎを表示したであらう。足は存在して居らない。山形の線の一組は、右腕に沿うて降下し、他の一組は腹の一部を占めてゐる。この線形は疑ひもなく、しつかりした、熟練した手で施されたものである。或る線の明瞭方正はそれを確かに證據立てゝゐる。しかるに、馬、馴鹿、山羊等の諸動物を表現せる同時代の多くの作品に見出されるところの驚くべき藝術的感覺は、これには現はれて居らぬ。何故か？　當時の人間にとつて、周圍の生きた動物を彫形なり彫刻なりで表現することは一つの遊戯であつたが、人間そのものゝ影像を表現することは怖ろしいことであつたらしいから、この種の作品の拙劣は、かゝる事實に起因したものであらうか。事實、人間の描寫は有史以前の遺跡には極めて稀れである。

## 四

以上がカタログの解說である。このうち最後の「六一二三番」の記述には私の作つた略寫圖に符合しない點があるので、試みに、サロモン・エナク氏の「第四紀藝術圖錄」のページを繰つてみた。挿繪第二のIは乃ち同書のなかに見出された同一遺品の寫生である。これとてもカタログの記述としつくり合致しては居らない。私の略寫圖は顔の大半を見落して單に大きな耳だけが現はれてゐるが、「第四紀藝術圖錄」のそれには犬のやうな顔がはつきり描かれてゐる。若しこの線彫が所謂「クロ・マニョンの女」を表はしたものであるならば、この顔は恐らく彼女がかぶつてゐる動物の假面であらう。この事はトーテミスムの上から想像することができるし、且つ實際に假面をつけた人物を表はした舊石器時代の作品が小數存在するのである。次

ぎに胴體についてゐる山形の連續は？　同時代の線彫家は動物の毛の表現を極めて寫實的に行つてゐるから、人間の身體の毛をこんな恰好に表はす筈がない。これも多分魔術上の假裝或は日常の衣服の一部を暗示したものであらう。挿繪第二のIIはド




第二圖

ルドーニュ出土の鹿角の「指揮棒」に施された線彫(G. H. Luquet, l' Art la Religion des Hommes fossiles, fig.111)で、羚羊に假裝した人間を表はしたもの、IIIはラ・マドレエヌ出土の砕石の上に施された線彫(D. Peyrony, El'ements de Préhistoire, fig. 55)で、假面をつけた人物を表はしたものである。この二つは、私の想像を裏書きしてくれるやうに思はれる。

「一五五八番」は一般に「指揮棒」――日本流に言へば「笏」である。――と呼ばれてゐるものであるけれども、孔の説明はつかない。しかもこの遺品に於ては、孔の周圍に溝がめぐらされて、孔の存在を高調してゐる。若し指揮棒であるとすれば、この孔には効驗あらたかなる呪禁(まじなひ)の品がつながれたであらう。

「一五六九番」は簡單な輪廓だけであるが、馬であることは瞭然と判る。馬はマグダレニアン人にとつては最も馴染の深い動物の一つで、極めて熟練した寫實的技巧でもつて、馴鹿の角などに馬の首を丸彫したものが遺つてゐて、實に生氣潑剌たるものである。馬と言つても、舊石器時代には牧畜を行つた形跡がないさうであるから、野馬である。舊石器時代の人間にとつては馬の肉は結構なお馳走だつたのであらう。ソリュトレ――ソリュトレアンの名稱はこの地名より出づ、――の斷崖の脚下に見出された骨の塚、乃ち食べた殘りの骨などを捨てた跡には、十萬頭以上の馬の骨があつたさうである(Verneau, op. cit. p. 48)。毛唐が、神經衰弱の藥だと稱して、馬の挽肉(ひきにく)を生のまゝスープに入れて食べるのを、時々レストランで見かけるが、彼等

にとつては、クロ・マニヨンのこの健啖はさぞかし羨望のたねであらう。

〔一九〇五番〕は紐でつるされた身飾品の一つである。乃ち人間の最古の美身衛動を物語るところのものである。ド・モルテイルレ氏は是を釦と裝飾とを兼ねたものであると見做してゐる（G. et A. de Mortillet, Musée Préhistorique fig 192)。孔は摩擦で穿たれたのであるから、日本の曲玉と同樣に、表面に近づくほど孔の直經が小さくなつてゐる。この環の周圍に沿うて表はされた、犬齒狀の並列は何であらう？山羊を追込んで捕へるための矢來であらうか。若しさうだとすれば、相對して直立する物體を平面上に鳥瞰圖式表現したことになる。

私どもの想像性を最も多く刺戟するところのものは蓋し「二一〇四番」の題材であらう。牛の首の前に突きでゝゐるのは慥かに前脚である。しからば同じ牛の前脚と見做して差支へないだらうか？細長い物體の表面に或る動物の姿――多分疾走の姿であらう、――を表現する場合、マグダレニアン人が首の前方に横に揃へて前脚を描いた實例は、他にも存在する。しかし是が「馬」の脚だとすれば、この假定は崩れる。それから首の後に續く魚の脊骨のやうな線に至つては何とも說明がつかない。挿繪第二のⅣはバッス・ピレネエ出土の馴鹿の角で、野猫丸彫であるが、その身體に射られた矢が明瞭に表はされてゐる（Luquet, op. cit, fig. 92)。是れと彼との間には一見して類似がある。しからば「二一〇四番」のそれは、一直線に飛んで行く矢の時間的連續を、原始的感覺で、平面に固定させて表はしたものであらうか。この直線の兩側に並列してゐるは、人か鳥か？サロモン・レエナク氏の「第四紀藝術圖錄」にも同一物の寫生圖が出てゐて「人間或はペングイン？」と註されてゐる。マグダレニアン期には佛蘭西の土地に馴鹿が夥しく棲息してゐたほどであるから、ペングイン鳥も存在したかも知れぬ。且つこの線彫だけ見れば成程鳥らしくも見える。私の郷里地方の八幡神社で古くから板行してゐる護符には、たんじやく形の紙に鳩の黑影を刷つたものがあつて、その黑影の輪廓は、この所謂ペングイン鳥によく似てゐる。しかし私は矢張人間の表現であると思ふ。挿繪第二のⅤはレ・ゼイジエ出土の肋骨線彫で、全く同じ形式の影像が表現されてゐる、（Luquet op. cit. fig. 113)。そして影像が各自肩に棒のやうなものを擔うてゐるところから判斷すれば、これはどうしても人間以外の何ものでもあり得ない。これより類推すれば「二一〇四番」のそれもまた人間でなければならぬ。そして下段の右端の人物の肩のところから發出してゐるフォーク形の線は矢張り彼が手に携へてゐる何物かであら

う。是等の人物は巨牛を獵しつゝあるところの勢子であるか、それとも、場面がトーテミスム的儀式の執行の現狀を表はし、人物はその場の參列者であるか？これは判斷が困難であるが、いづれにしても、〔一九〇五番〕の犬齒狀と同樣に、相對して直立してゐる横列の人物を平面上に鳥瞰圖式に表現したものであることは慥である。

## 五

是だけの極めて小數の略寫圖によつても、マグダレニアンの獵人が、自然の敏感な觀察者で、そして卓拔な素描家であつたことが想像できるであらう。彼等は單獨の動物を表はしたばかりでなく、屢々、群集してゐる動物の活動さへも取扱つてゐる。しかも其等の動物は極端に單純化されて彫られてゐるのであるのであるが、生態的特徵は完全に表現されてゐる、しかも肝要の細部は決して見落されてゐない、殊に動物の身體の毛のごときは、巧みな手彫で要領よく點ぜられてゐる。〔一九〇四番〕の馬首の毛のごときは、極めて鋭い蘇の形に刻まれてゐる。〔一五六九番〕や〔一九〇二番〕の線には强い一種の筆意さへも認められるのであつて、決して未熟なる機械的の「輪廓」ではない。また彼等は或る劇的場面を取扱ふときには、〔二一〇四番〕に見るごとく鳥瞰圖式表現を計畫してゐる。そしてそれが偶々一種の裝飾的構圖を齎らしてゐる。光琳が意織的に行つた構圖の裝飾美は、極めて幼稚な萠芽としてゞはあるが、マグダレニアンの藝術家によつて無意識に形成されたのである。

しからばこのマグダレニアンの民とはどんな人間であつたか。彼等は、クロ・マニョン人と同一系統の種族であつたが、脊丈が低く、且つ顏立がヨリ多く整つてゐる點で、クロ・マニョン人と違つてゐたさうである。そして現代のエスキモーとマグダレニアン人とが生理的にも土俗的にもよく類似してゐるところから見れば、後者が北に移住して行く途中遺して行つた傳統が現在前者の間に見出されるのであると考へることができる（Capitan & Peyrony, l'Humanite Primitive dans la Région des Eyzies,p.92)。このマグダレニアン人は或る不明の地方で既にヨリ多く發達した文化をもつて生活してゐたが、それが何かの理由で佛蘭西の中南部に移住してきて、先住者のソリユトレアン人（クロ・マニョン人）を追佛ひ或は征服するに至つたので、この時以來ソリユトレアンの文化は全く絶滅してしまつたのである(Id.p.62)。爾來歲月を閲すること、二萬年であるか、一萬年であるか、それとも八千年であるか、正確の勘定は不可能であらうが、現代においてマグダレニアン人の傳統を保有してゐるも

のは北極地方の住民で、クロ・マニユヨン人の直接の後裔は南亞弗利加のブッシマンだらうである（Id.p.93）。

私は人類學の素養も人種學の智識も缺いてゐるので、かういふ問題に關しては全く判斷力を失ふ。人種學は兎も角として、人類學は純然たる理學である。私ごとき者が手を出せる學問ではない。こんなことは言ふまでもない話であるかもしれないが、人類學も人種學も考古學もごッちやになり、時として極めて常識的な思想で「人類學」といふ言葉を弄んでゐる世の中に於ては、學問の範疇を正確に定めておく必要があるであらう。私は單にその專攻の藝術史が比較的古い時代のそれであるところから所謂 Archéologie préhistorique の一小部分を覗き、そして人間の最初の藝術的活動に眺めいり、その驚異に觸れ、時として太古的神秘とでも言ふべきものに誘はれるのを喜べば、それで足りるのである。

## 六

午前の豫定を濟ませたので、私は停車場前の小さなレストランで午食をとり、そしてペリグオウの町を立つた。汽車がレ・ゼイジエに近づくに從つて窓外の眺望は全然異つたものになつた。ひろびろとした平野、耕地、ほそぼそとつゞく並木、寺の塔、それから遠く、地平線を限つて低く長く延びてゐる優しい丘陵（コトウ）、これが普通に佛蘭西の田園の景觀を支配してゐる要素である。しかるにいま窓外につゞく自然は、兩側から迫つてくる懸崖である。かういふ山峽的景觀は佛蘭西では珍らしい。右手には時々、斷崖のおもてに口を開いゐる洞窟が、前を流れる河の岸の樹々の間から隱見して、いかにも「有史以前の首都（キャピタール・プレイストリク）」の遺跡に近づいたことを想はしめる。

一軒立の小さな田舍停車場の前には、右から左へと走る白い道路を差挾んで、雜草に蔽はれた懸崖が高く立ちはだかつてゐる。道を右にとつて少し進んだところに草色に塗つた旅館が左側に一軒立つてゐる。それから暫くの間寂しい百姓家がつゞいて、やがて屋並は途斷えてしまふ。私は案内記の地圖を頼りに歩いてゐるのだが、かういふ寒村の名所地は極く大體の道筋しか引かれてゐないので、街道の岐れ目に出遭ふごとに立ちどまつて考へなければならなかつた。一度などは間違つた道を選んで、十間ほども歩いてから思ひなほして引返したこともあつた。生憎と人も余り通つてゐない。今年の春某々の兩君が、私から場所を聽いてこの村を訪ねたが、兩君は自働車で遺跡を一週したさうである。最近英米人の旅客が激增したので、この田舍でもさういふ便利な設備をはじめたのであらう。私が行つ

た頃には、どうも自働車などはありさうにも思はれなかつた。またたとへあつたところで、私のことであるから乘らないにきまつてゐる。——あゝ、永久に貧しい旅びと！私は永久に雜囊と寫眞器とを下げて、——そのフイルム・パックさも思へもふやうに買へないのを嘆じながら、——ひとり漂々と歩かなければならないであらう、學藝の道を。

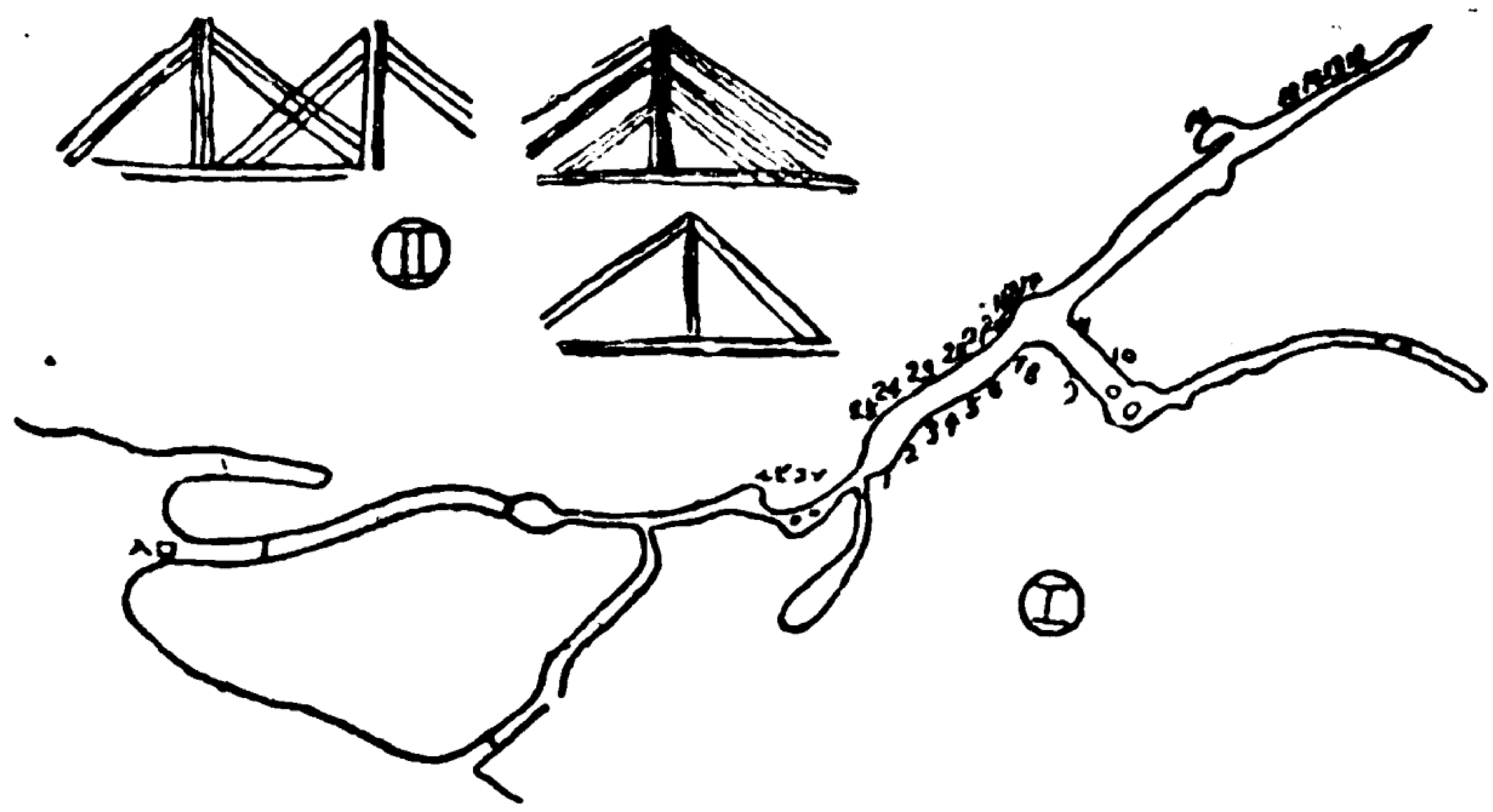
さて漸く目的とするフオン・ド・ゴウム洞の看守人の家の前に辿りついた。家は道の左側にあつて、開つ放しの戸口をはいると、そこは直ぐ板敷の廣間で、眞中におかれた大きな机——夜は食卓になるのであらう——の上には胡桃(?)が一杯にひろげられてゐて、その向ふの窓際で四五人の女同士が靜かに編物かなにかを續けてゐる。戸口の蔭の卓では二人の若い水兵がビールを飲んでゐたが私と入れかわつて出て行つた。そのあとの卓の上に雜囊と寫眞器とをおろして待つてゐると、次ぎの室から黑い衣物の老婆が鍵をさげて現はれて、道の向ふ側を指して、「先に行つて居れ、」と言ふ。道の向ふ側は傾斜の緩やかな低い丘で、その傾斜の盡きるところに巨大な懸崖が聳立つてゐる。洞窟は懸崖の頂上にでもあるのか。なんにしても初めての者が獨りで先に行つて居られるものではないので、道傍にぼんやり佇んで待つてゐると、老婆は戸口から出てきて、私の先に立つて坂路を上つて行く。

傾斜を辿つて懸崖の裾をめぐると、洞窟の前に出る。入口には玩具（おもちや）のやうに小さい柏形の葉や楓形の葉が一面に散り積つてゐる。そしてみんな化石のやうにからからに乾いてゐる。そのとき拾つて案内記のページの間に挿んできたものが二三枚、今でも殘つてゐるが、白々と乾きゝつてゐながらも、もとの色の黄なり赤なりが仄かに葉のおもてを染めてゐる。

老婆は入口の机の抽出しから入場券を一枚取出して一フランを要求する。入場券を受取つて見てみると、ルーヴルのそれと寸分異はないものである。成程この洞窟其自身が一の國有美術館を構成してゐるわけだナ、と斯う考へて私は入場料のほか案内役のチップとして一フランを老婆に與へた。しかるに老婆は遠慮なしに是では不足だと言出したので、私は苦笑しながら更に一フランを彼女の掌にのせてやつた。慾深婆は是で滿足して、矢來の錠をはづし、電氣のスヰッチをひねつた。すると岩壁に沿うて要所々々に取附けられた電燈が一時にもとつて洞内は急に明るくなつた。

このフオン・ド・ゴウム洞は、一九〇一年の九月、ペイロニー氏が最初探索して、最小限八千年前に逆のぼる時代の見事な壁畫が存在することを知り、不取敢協力者のキャピタン、ブルイ

ル兩氏に急告して三人で研究に着手し、後ちに國有として保存されることゝなつたものである。洞窟は長さ約一二〇米突の細廊を形づくり、三ケ所に一五米突、二一米突、及び四八米突の支線が派出してゐる。細廊の幅は一米突乃至二米突、その天井



第三圖

は高さ二米以上のところもあるが、低い箇所では腰を曲げなければ通れないほどである。洞内に這入つて、最初六五米突の間は變つたこともない。單に電燈の光を反映する岩壁の凹凸を見るだけである。しかるに六五米突の奥に至つて、氣をとめて岩壁のおもてを凝視するならば、忽然として謎の啓示のごとく顯出するものがあるであらう。それは石筍の柱の蔭、床から三乃至四米突の高さのところに明瞭に彫まれたる tectiformes である。是が最初に訪客を待設けてゐるマグダレニアン人の筆の跡であるが、永年復寫圖によつて空想を刺戟されてきた九千年前の野獸の表現を早く目のあたりに見たい氣持が勝つてゐるので、この謎めいた線の組合せの前は早々に通過ぎて尚も奥に進んだ。やがて「ルビコン」と名づけられてゐる箇所に至る。これは床の上一米突七〇の高さまで立つてゐる巨大な石筍の壁を貫いてゐる狭い通路である。さて「ルビコン」を越せば、私どもの身體は一つの廣間に呑まれる。奥行約五五米突、間口二乃至三米突、高さ五乃六米突の廣い一室である。マグダレニアンの神秘の壁畫が最初に見出されるのは、この廣間に於てゞある。挿繪第三の1はフォン・ド・ゴウム洞の平面(プラン)であるが、記入の番號は壁畫の存在する箇所を示したもので、次ぎにこの番號に從て各壁畫の題材其他を約説してみる。(Peyrony, les Eyzies et les Environs p. 26)

## 七

(1) 一匹の野牛、首だけが極めて明瞭である。
(2) 一匹の野牛の後軀。
(3) 一匹の見事なる動物、輪廓は黑にて引き、體は赤にて彩らる。
(4) 大なる頭瘤を有する一匹の美しき野牛、その描法は前者に同じ
(5) 向合つてゐる二匹の野牛、一は赤く、一は黑い。
(6) 大なる瘤を有する一匹の野牛、その脚は巧みに表現されてゐる

(挿繪第四)

(7) 黑にて彩られたる一匹の野牛。

(8) 前者の下部に他の一匹の野牛の姿、その後軀は石筍の下に消えてゐる。横腹のところに一匹の小なる野牛が黑にて描かれてゐる。

(9) 支線に這入つて約十米突の奥、高さ四米突の所に美しき疾驅の馬が一匹描かれ、炭酸石灰の薄層で蔽はれてゐる。前方に他の一匹の馬、その臀部、足、及び腿は二つの鐘乳石にて形づくられてゐる。

(10) 前者と向合つてゐる壁の面に、一匹の羚羊の美しき首が、彩色と線彫とで表はされてゐる。

(11) 二本の廊の分岐點、右側の壁面、四米突の高さの所に一匹の馬その輪廓は簡單、そして一匹の馴鹿と重さなり合つてゐる。前方に意味の分らぬデッサン、その次ぎに他の一匹の馴鹿、その身體の一部は石筍の層の下に隱れ、延びたる角がその層の蔭から差出てゐる。

(12) 馬或は角なき麋(おほじか)の美しき首一つ、その輪廓は赤にて描かれてゐる。

(13) 仕切られた鼻孔を有する一匹の見事なる犀、全身、赤で描かれてゐる(挿繪第五)

(14) 黑で描かれてゐる一匹の野牛、次ぎの動物と一緒になつてゐるやうに見える。

(15) 全體黑で描かれたる一匹の美しき小さき牛、その下部に人間の首の不思議な横顔が黑で描かれてゐる。

(16) 短かき支廊で、「野牛の廣間」である。見よ、天井と言はず壁と言はず一面に見事に野牛の繪で粧はれてゐる。その數は十三、或るものは極めて奇異な姿勢で表はされてゐる。是等の影像は全く藝術家の作品である。

(17) 一匹の野牛の姿。

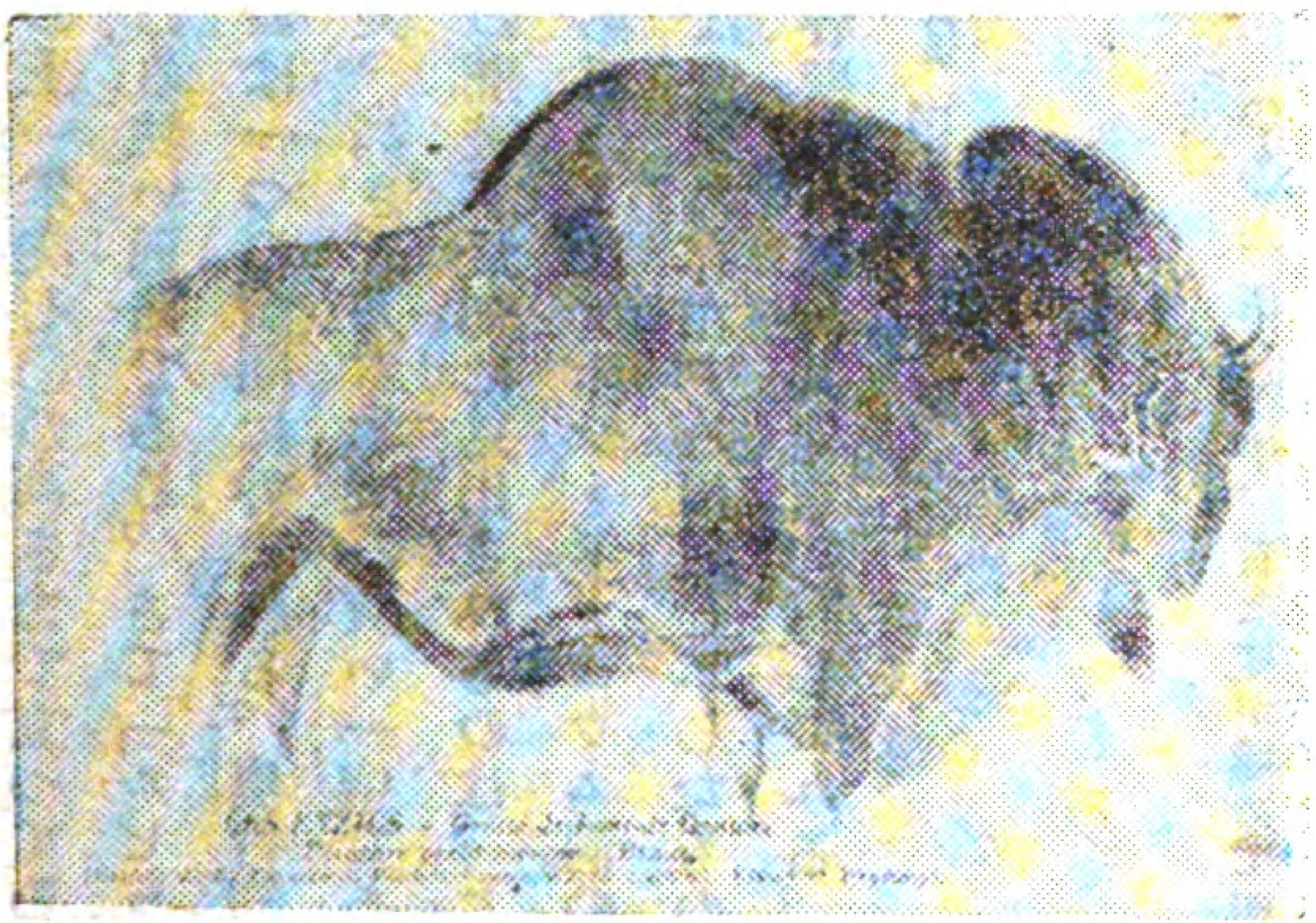
(18) 一匹の野牛、その上に一匹の鹿屬の動物が描かれてゐる。

(19) 黑にて描かれたる一匹の大なる獸、その首は明瞭を欠く。

(20) 向合つてゐる二匹の素晴しい馴鹿。首は見事に線彫されてゐる。角と身體の輪廓とは赤黑二色で彩られてゐる。この二匹の動物の姿態、その線の細緻と正確、制作の仕上げ、——これらはレ・ゼイジエ及びラ・マドレエヌの洞より出でたる石及び骨の見事なる線彫の驚くべき技法を思出させる。馴鹿の下部に赤色の tectiformes が見られる。

(21) 一匹の小なる黑色の野牛。

(22) 長さ二米突一〇の一匹の大なる赤色の牛科動物。それの上に二つのテイクテイフオルムと一匹の小なるマンモースの線彫とが見られる。



第四圖

(23) 線彫の馴鹿の首一つ。

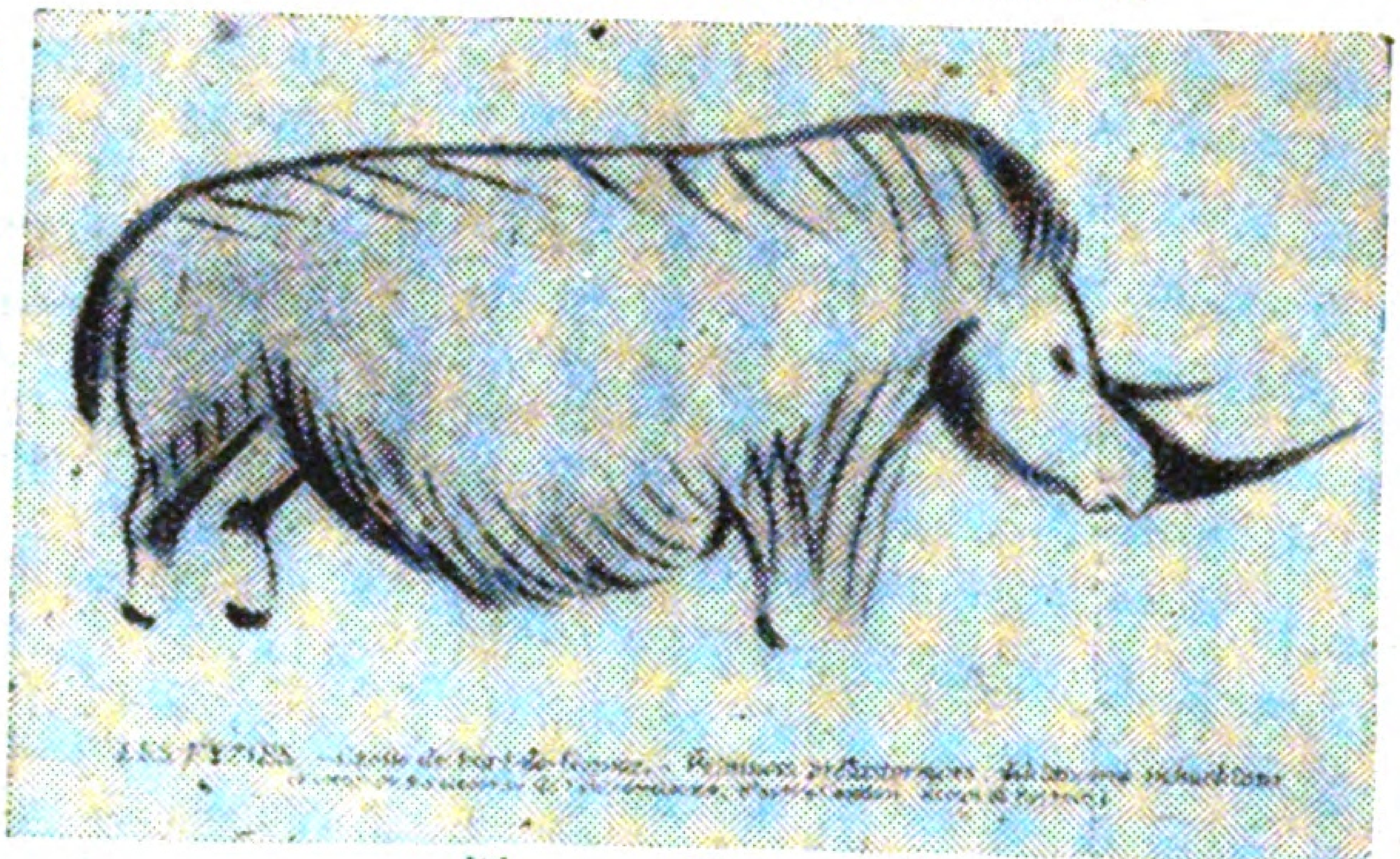
(24) 幾匹かのマンモースの線彫、その下に一匹の大なる赤色の野牛

(25) 「ルビコン」より約四米突の所、岩の突出せる下に、地上から〇米突五〇の位置に、點線が引かれて赤色でHの形に引かれてゐる。

（Ibid. p. 27–29）

## 八

案内の老婆が電燈を近づけて照らしてくれる壁面に、赤と黒



第五圖

との凝雲のやうなニユアンスをもツて浮びでるさまざまの姿態の動物の奇異な影像の前に、私は全く何かに憑かれてゐるやうな氣持で佇む、それから老婆に促がされてまた歩を進める。この黒衣の慾深婆の肩の上で、ともすれば梟が目を光らせてゐたのかもしれぬ、私はこの洞穴のなかで彼女の暗闇の妖法の虜になつてゐるのかもしれぬ、老婆は狹隘な「野牛の廣間」に私ひとりを促し入れて、自分は巖蔭に隱れてしまつた、あゝ、私は忽ち小さな異様な牛どもの群れに取卷かれた、牛どもは唸る、動く、刻々と數を增す……。

これは空想だ。私は頭を冷靜にして觀察しなければならぬ。是等の動物の影像の或るものは色刷の寫眞になつて既に世間に流布してゐるので、私も渡歐前から熟知してゐた、しかし其等の寫眞は大抵ブルイル氏の寫生圖の復寫であつて、明るい地の上に印刷されてゐるので、今かうして實際に巖壁のおもてに見るものとは、その全體の色調の感じが全く異つてゐる。乃ち前者にあつては白い紙のおもてに影像が鮮やかにかつきりと浮びあがつてゐるのに反して後者にあつては黒と赤とのニユアンスが一種の濕つぽい感觸と共に黄褐色の巖壁のおもてににぢんでゐるのである。若しも原初には黒赤二色のほかに他の有機性顔料の彩色が加へられてあつたと假定するならば（ Jacqu.s de Morgan, l' Hurranité préhistorique, p. 218 ）、描かれた當時の色感はまた今とは隨分異つたものであつたであらう。現在見るところのものを以て判斷すれば、マグダレニアンの壁畫家は、多分炭或は石黄（オークル）でもつて大體の形を描き、それから燧石の鑿で餘り深くはなく必要の線を引き、最後に紅殼（オークル・ルージユ）或は滿俺（マンガン）の黒鑛を、油乃至脂肪、或は水でもつて練つて、それで全體の設色を仕上げたのである（Ibid. p. 216）。其故に彼等の壁畫の大多數は線彫と彩色との合體である。後世の支那の陶器に施された裝飾文樣に、私どもは同樣の表現技法を見出すであらう。マ

グダレニアンの藝術家は、繪畫に線彫を適用したばかりでなく、この洞窟の壁畫の【9】の馬に見るごとく、巖の凹凸さへも動物のモデリングに利用したのである。殊に角や骨に施された彫刻にあつては、その角や骨の輪廓或は凹凸が屢々動物の形狀の表現或はモデリングに巧みに利用されてゐる。或る無生物の形狀が偶然或る生物の姿を聯想させるやうな恰好に見えたことが、最初の藝術家をして其形狀を利用して物象を表現させるに至らしめた抑々の嚆矢であると斯う藝術の起源を考へる人々にとつては、前述の事實は最もよい例證の一つであらう。

　前にペリグオウの博物館の標本によつて、マグダレニアンの線彫家が敏感な自然の觀察者であることを見たが、フオン・ド・ゴウム洞の壁畫家も矢張り聰明な自然主義者（ナチユラリスト）である。そしてここでは、骨角器の線彫裝飾の持たぬ彩色が用ゐられてゐるので、その設色のモデリングが、彼等の寫實的効果を全く近代的ならしめてゐるのである。彼等はどんな筆を用ゐたのか分らぬが、巖壁の粗面ににぢみながら走つてゐる黑線は實に勁拔で、ついせんだつて狩野派の名手によつて引かれた墨痕でゞもあるかのやうである。――だが、この洞窟の影像には單に一口に「寫實」とだけ言つてしまふことのできない神秘なる何ものかゞある。それは八千年といふ餘りに漠大な歳月の隔たりの故であらうか、赤と黑とのニユアンスが形づくる秘密めく色感の故であらうか、見慣れぬ獸類の畸異なる姿態の故であらうか、それとも制作の動機の考察に伴ふ魔術的豫感の故であらうか……。

## 九

私は是を「壁畫」と呼んだ。――壁畫は人間を樂しませるためにのみ作られるものとは限らぬ。法隆寺の壁畫はお上りさんを喜ばせ案内人に儲けさせるために描かれたものではない。壁畫は屢々神佛を樂しませるために作られる、いや時として壁畫は神佛そのものである。しからば最小限八千年の昔に遡ぼるべきフオン・ド・ゴウム洞の壁畫の製作動機は？

　最初に考へなければならぬことは、この洞には人の住んだ形跡が少しも見つからないといふ事實である。(Capitan & Peyrony, op. cit. P. 94) 人の住まぬ洞窟に人を樂しませるための壁畫裝飾が施される筈がない。しかし舊石器時代の獵人が洞窟を住居として利用したこともまた事實である。しからば住居として用ゐられた洞窟に對して別に他の超人間的の目的に用ゐられた聖洞が存在したことになる。フオン・ド・ゴウム洞は乃ち後者の一つでなければならぬ。そしてマグダレニアンの民が、希臘人のごとく神々を崇拜することもなく、印度人のごとく佛陀を禮讃することもなかつた以上、彼等の壁畫は神佛を慰め樂しませるために作られたものではなく、寧ろ其等の洞窟壁畫は總て神佛に均しい或る神秘の超人間的靈性そのものであつたにちがひない。洞窟の奧で、獸油の燈火か何かを賴りにして鑛物性の顏料で粗い巖面に描くといふことは、決して容易の業ではなかつた

であらう。しかしマグダレニアンの藝術家は、さあ壁畫を作るといふ場合にも、あわてゝパトロンに連れられて壁畫見學とかいふ赤毛布洋行に飛出す必要はなかつたのである。幸福なるマグダレニアンの壁畫家よ！彼等は唯だ單純に根氣よく描いた、しかし彼等はその製作の動機に「必然」を感じ、その制作の結晶に「神性」を認めたのである。かくて彼等の壁畫は、彼等の氏族全體に狩獵の豐饒と生活の安定とを齎らすものとして暗黑の聖洞の奧に常に祀られたのである。

この聖洞は奧の內壁ばかりでなくその外面や入口の壁面も均しく繪畫で粧はれてゐたであらうか（de Morgan op. cit. p. 216）この問題は急に解決することが困難である、それから、マグダレニアン人は洞窟を住居とする以外に、地上に簡單な小屋を作らなかつたであらうか。この問題も實證によつて解決することは不可能であるが、小屋の構體を表現したものではないかと疑はしめるところの線畫は遺つてゐる。挿繪第三のⅡは乃ちそれである。これは小屋であるか、それとも罠であるか、判斷に苦るしむが若し小屋の表現であるとすれば、所謂「天地根元作り」の組織であつて、人間の最古の建築樣式を示すものである。

## 十

洞窟を出て私は歸路をいそいだ。レ・ゼイジエの村の入口の高いテラスの上に、この邊の發堀品を蒐めた小博物館があるので、其處に立寄らなければならぬ。テラスは路傍の民家を遙かに高く拔いて山峽の村を瞰下してゐる、そしてその更に上には巨大な懸崖の連らなりが物々しく蔽ひかぶさつてゐる。本道から斜めに右手に岐れる坂路をのぼると、それが頂上で左に鍬の手に折れる、そしてその突當りに石の障壁に穿たれたアーチの門が開いてゐる。この博物館は中世記の孤城の遺構を利用したものであるから、この石の拱門も封建の世の名殘りであらう。私は門の方立に垂れてゐる針金を引いた、すると內でベルが朗らかな音を響かせ、同時に可愛いゝ少年が走つてきた。私は少年に誘かれて更に石の段々を上つた。博物館の入口にはお上さんが立つてゐて、私の顏を見て、もう開館の時刻は過ぎたと氣の毒さうに言ふのであつた。成程時計は既に四時を過ぎてゐる、しかしこんな僻遠の土地に二度と出直して來られるものでなし、それに今夜の汽車で立たねばならぬ身であるから、その旨を訴へると、そこへ亭主も出て來て、特別に入れて貰へることになつた。博物館と言つても極く小さな蒐集館で、それに重要の發堀品は大抵巴里郊外のミューゼに收容されてゐるので、觀覽するのに時間はかゝらぬ。亭主は狹い庭先で席を取除けて、其處にころがつてゐる石のおもてを指した。粗い石のおもてには動物の輪廓が太く彫まれてゐた。主婦は電燈の設備がないのでよく見えないだらうと斷つて私を館內に誘きいれた。館內は既に薄暗い。私は一通り陳列を見て繪葉書や二三の冊子を買つて、館を出た。そして坂を下る前に、テラスの一端に張出

てゐる見晴しの台に獨り上つて足もとの眺望を暫時ほしいまゝにした。山峽は刻々と夕暮の色を濃くして行く。

停車場に着いたときには日は全く暮れてゐた。待合室は薄暗で人ひとり居ない。あたりには他に家もないのでしんとしてゐる。若しや汽車の發着がおしまひになつたのではないかと私はれもしたが、新刊の時間表を調べてきたのであるから間違ひがあらう筈はない。それにしても暗闇のなかで待つのはつまらないので、私は引返して宿屋に這入つて、命肉か何か、煮燒の手間のかゝらぬ晩飯を注文した。このあたりで明るいのはこの宿屋一軒だけである。入口が直ぐ廣間兼食堂に續いて、此處は流石に電燈——いや瓦斯燈だつたかも知れぬ、——が煌々と大きな食卓を照してゐる。煖爐の前では、矢張り汽車を待つらしい田舍の婦人客が二三人物靜かに座つてゐる。宿の主婦は私を快よく迎へて、いきなり、何とかを訪ねないのかと訊く。私は、その「何とか」が解らなくて返答に窮してゐると、主婦は粗削のパンフレットを一冊取出してきて私に見せた。その表紙には Les Fouilles de M. J. A. Le. Bel と標題が刷つてある。ル・ベル氏の發掘の跡を訪ねないのかと訊いたのか、それともル・ベル氏を訪ねないのかと訊いたのか、問返してもみなかつた。そして今夜の七時何十分の汽車で此處を立たねばならないのだと答へると、主婦は、それでは次ぎの休暇にまた來いと快活に受ける。その調子に安易を感じたので、私はパンフレットを讓つてくれと申し出た。この本は著者から贈られたのだから讓るわけには行かない、と言ひながら主婦は表紙を繰つてみせた。成程表紙の裏には著者の自筆で獻辭がしるされてゐる。しかし私が執拗に欲しさうな顔をしたので、主婦は直ちに私の欲求をいれてくれた。代價はいらないと云つたが、私は無理に主婦の掌に二フランの銀貨を載せた。こんな場合には、異國の「若い學生」と見做されてゐるおかげで、萬事氣輕に運んで行ける。

簡單な晩飯をすませて私は宿を出た。道は眞暗だ。さつきの婦人客が私の前方で、黑い夜色のなかに更に黑い影となつて動いてゐる。停車場の待合室には未だ灯がついてゐない。やがて汽車の到着の時間が迫つた頃、漸くこの荒れ果てた怪物屋敷のやうな待合室の窓の一つが音もなく開かれて、そこから薄暗く火のともつた汚いランプを握つた手が一つ現はれた……。

夜汽車といふものは何處の土地でも寂しいものである。私はゆくりなく中學初年級の頃の追憶に襲はれた。下宿に歸るために日曜日の夜汽車に乘つて、その冷たい硝子窓のそとが眞闇な暗に閉さゝれてゐるのを見てゐると、格別學校に通ふのが辛いわけでもなかつたのに、また其程生家が戀しいわけでもなかつたのに、いつともなく私の頰には少しの涙が傳はつてゐるのであつた。——今夜の泊りはアジアンである。

（附記）石器時代の文化の興味を最初に私に教へて下すつたのは佐藤功一先生であつた。今その思出としてこの小篇を先生の案下に捧ぐ。

一九二六・九・二八

# 無産者の實驗した普通選擧

爲藤五郎

## 一　試驗劑として

昨年十二月十九日、東京市隣接の西巣鴨町に於て、町會議員の總選擧が行はれた。

單なる町會議員の總選擧は、社會的にも政治的にも、取立てて言ふべき程の事件ではないが、右西巣鴨町會議員の總選擧は、

一、日本に於ける最初の普通選擧による町會議員の選擧であり、

二、地は輦轂の下の、政界の注目を惹き易い中央であり、

三、時は、帝國議會の解散非解散の岐路を前にして、總選擧——普選の問題に直面し、

四、殊に新興無産政黨が蜂起し、分裂し、政界の興味は、既に既成政黨を離れて、この新興政黨に集中しつゝあるの時であり、

五、西巣鴨町は、町とは言へど人口十萬を超え、日本に於て第二十位内外の大都會である、

といふ種々の點に於て、右町會議員の總選擧、並にその結果は、現在の政界並に社會に多くの意義を投じたものと思はなければならない。

それ故に、町會議員そのものは、必ずしも吾々無産階級の利益を伸張するに多くの權能と機會とを與へるものではないとしても、この意義多き衆議院議員選擧に於ける普選の前衛戰とも見るべき試驗台に立つの意義に於て、一方にはまた、普選に當面する新興階級結束の捨石ともなり、その基礎工事を施すの意味に於て、私は右の總選擧に立候補したのであつたが、その結果は自らも意外とする多數得票を以て、定員三十人中第六位を以て當選することが出來た。

この自らも意外とする多數得票こそ、選擧界に於ける處女原野たる新興階級が、まだ汚れて居ないことを語るものであり、政治行動に於ける新興階級の前途に、大なる力と光とを投ずる

ものであることを信ずる。それを私が言ひ得る理由は、私の今回の選擧運動が、最も正確に普選法を試驗する爲に、自らその試驗劑となり、試驗台に立つの覺悟を以て、徹底的に普選法の一切の條項を正直に實驗し得たが故である。

それ故に、私がその實驗の結果を報告するといふことは、當然なすべき一つの義務でもあり、また豫定の一つでもあつたのである。普選による市會議員の選擧は、既に濱松に於て、また北海道の數市に於て施行せられ、無産階級より數名の人が當選したが、まだ遺憾にもこれ等の實驗者の報告には接せずに居る。私はここに、右報告の義務の重きを感ずるのである。

## 二　町村制中の缺陷

西巣鴨町は現に人口十萬を超え、戸數二萬、舊選擧法時代には有權者約五千であつたが、普選によつて有權者は一萬三千に増加した。右に對し町會議員の定員は三十人である。新選擧は一昨年五月に行つたのであるが、たま／＼投票中に一票の無効投票のあつたことに端を發し、而かも最低點當選者と次點者との得票差が僅かに一票であつたことに基因し、昨年九月廿三日、右に關する異議申立に對し、行政裁判所は、全部の當選を無効とするの判決を下した。

ために、西巣鴨町は、ここに日本に於ける最初の普選法による町會議員の選擧を行ふことになり、昨年十二月十九日を以て、その投票期日と定めたのである。が、この不用意の間に事實として表はれた普選に對し、先づ最も面喰つたものは、在來の金權、情實、殊に戸別訪問を以て唯一の運動法として選擧を爭つて來た面々である。戸別訪問が出來ないとすれば、金權情實も殆んど施すにその術がない。それが彼等の最も苦惱とするところであつた。

が、それかと言つて、金權情實を無用とする無産階級候補者の前にも亦容易ならぬ障壁が横つて居ることが發見せられた。といふのは、それまで、普選法と言へば直ちに衆議院議員に於けるそれのみが問題とされ、それの準用たる町村會議員の新選擧法には、多くの注意が拂はれて居なかつたのだが、いよ／＼實際問題として當面して見ると、そこには甚だしい缺陷のあることが發見せられたからである。

それは、町村會議員の選擧には、衆議院の場合の如く、郵便物の有權者一人につき一回の無料遞送、學校その他公營造物の演說會無料使用等が認められて居ないに拘らず、そして制限選擧撤廢のために、有權者は右の如く約三倍に増加して居るに拘らず、衆議院または府縣市會の選擧の如く、運動費の制限とい

ふことは一切掲げられて居ないのである。これは、何と言つても、新町村制中の一大缺陷であり、同時に無產階級立候補者に取つての、何よりの障壁であることは明らかである。

斯くて、金權者は金權者として、無產者は無產者として、夫夫別個の惱みの中に逡巡して、立候補の狀勢は、混沌として臆測を許さず、選擧期日に、而する約三週間の十一月下旬に迫つて所轄警察署より候補者協議會招集のあつた時に於てさへ、未だに立候補を宣言し、また屆出るものとてなく、警察署に於ては、諸種の情報材料を綜合して、やつと候補者と解釋し得るものを招集するといふ程度であつたのである。

## 三　所謂「紳士協約」

普選法、殊にその準用たる新町村制中の選擧に關する規定に、いかに不備の點が多いかといふことは、右法律勅令の外に、新に候補者間の協定を必要としたことによつても說明せらるゝであらう。

右、警察署に於ける候補者、警察署長、檢事立會の下に開かれたる協議會は、その趣旨の下に開かれたのである。

その協定事項は、一、議員候補者選擧事務長選擧委員に關する事項六項。二、選擧事務所並に休憩所に關する事項四項。三、選擧運動の費用に關する事項四項。四、印刷物及標識等に關する事項一項（以上條文省略）であつたが、この中、協議會の席上に於て問題となつたものを擧げよう。

一、選擧委員と選擧事務員、これはそのまゝ適用される法律規定の中にもある事項であるが、一體、選擧委員と選擧事務員とは何によつて區別すべきであるか。從來は選擧運動と言へば戶別訪問であつたが、既に戶別訪問を絕對的に禁止した以上、如何なる仕事に携はるものを選擧委員とすべきであるか。應援演說をすることは選擧運動以外と規定されてある。それを除けば、結局選擧運動といふのは、文書の宣傳發送に過ぎないであらう。而かもそれ等は何れも從來の所謂選擧事務に屬する事項であらう。して見れば一切の選擧事務に携はるものを一括して選擧運動と稱するの外はないが、その選擧運動に携はるものに制限があつて見れば、候補者の妻、子供が封筒を書いたり、發送の準備をしたりすることも違犯になる譯だ。協議會に於ける官憲のこれに對する答辯は極めて曖昧であつた。殊に、その條規の上に、既に選擧委員と事務員との區別がある以上、曲りなりにもその差別を設けて置かなければ、といふので、主として屋外の事務に從ふものを選擧委員、屋內で從事するものを選擧事務員、とするといふ苦しい解釋をさへしなければならぬ程であつた。

二、右の樣な事情で、右協定案の原案には、「有權者にあらざるものを選擧運動に使用せしめざること」とあつたのを撤回して、「粗暴過激素行不修者にして警察署より注意ありたるものは選擧運動に使用せざること」と修正されるの外はなかつた。

三、選擧費用に關しては、警察署の原案に、三百五十圓以內とあり、

之れに就いては議論沸騰、それでは過少で到底實行不可能だとする多數說、衆議院選擧法の費用制限に比例すれば、これでも多すぎるといふ少數說、互に論難したが、警察の原案以上に增額しては、第一回に町議の普選を行ふ手前、惡例を殘すものである、として、結局は少數說が後には多數になつて勝ちを占むるに至つた。

四、尙、右に聯關して「演說又は推薦による選擧運動の費用にして候補者、事務長、委員、事務員以外のものが候補者又は事務長と意思を通じなくて支出したものはその費用中に加算せず」といふ原案であつたが、之れは、最も胡魔化しの出來易い條項であるとして、この一項は削除された。それは衆議院選擧法のこの條項に對する有力なる間接の修正とも見るべきものである。

五、ポスターに對しては、原案には、演說會に關するものはその終了後、その他のポスターに對しては選擧修了後直ちに撤去すること、といふだけであつたのを、之れは協議の結果、著しく嚴格なものにした。卽ち、ポスターは演說會に關するもの以外には絕對に掲揚せざること、演說會に關するものは、演說會開催の三日前に貼附し、終了後は直ちに之を撤去すること、といふことに決定された。このポスターに關するこの制限は、たしかにお祭騷ぎを防止するに有效なものであつた。

以上の協定事項は所謂「紳士協約」であつて、これに違犯した所で法律上の所罰はない譯であるが、この外、その選擧法の罰則に觸るゝもので、協議會上の問題となり、これに對する官憲當局さへその解釋に迷つた點は數項あるが、それは追つて述べることにする。

兎も角、正直なところを言へば、私共無產階級の候補に立つものは、この協定事項——と言つても選擧費の制限が主なるものであるが——の成立によつて、初めて立候補の決意が出來たものだつたと言つてよい。

よつて、以下、私自身の實驗した選擧運動そのものの有りのまゝを述べよう。私は、自らの今回の選擧運動を稱して、選擧運動の創作だと稱して居る。それは、勿論獨創的な妙案を發明したといふ意味ではない。たゞ、極度に從來の選擧運動の轍に習ふことを避け、候補者それ自身が最初の立候補であつたと同樣に、それに對する選擧運動が、餘りにも在來の選擧運動を無視し、若くばそれから超越して居たといふ意味である。殊に、その陣容の貧弱さに於ては、恐らく日本に於ける選擧運動の記錄破りではなかつたらうかと思ふ。

## 四　選擧運動員はたゞ三名

町會議員の選擧には、衆議院のそれの如く、選擧委員の制限といふものがない。それ故に、右警察並に候補者の協定によつて、選擧委員の數は七名を限度とした。が、これは協定であつて罰則に觸れないが故に、表面は七名であつても、十名二十名、五六十名も置いた候補者が少くなかつた樣に思ふ。しか

し、私の選擧運動には、その七名の委員にさへ永らく空位があつた。それは選擧委員を得るにも得られなかつたし、また得られたにしても、その必要を認めなかつたからである。それは、在來では、選擧運動の重要な仕事は戸別訪問であり、運動員は即ち戸別訪問員であつたのだが、そんなことを諸々とするやうな人は、私の周圍には見附からないし、町内の有志といふものに、不幸にして一人たりとも別懇者を私は有つて居なかつた。のみならず、旣に戸別訪問やお祭騷ぎを一切必要としない私に取つては、それは全然必要のないことなのであつた。正直なところ、最初事務長として屆け出した青年は、故障のため正味四五日しか運動に從事しなかつたし、それを外にしては選擧事務員男三名、これ等は何れも私の平生の仕事を手傳つて居るものが、その精力の一部分を割いて居たに過ぎぬ。屆出には外に女二名を加へてあつたが、その中一名だけが封筒書きに從事して居たに過ぎぬ。いよ〳〵選擧が終へて開票となつた二十日、定規により各候補者は二名づつの有權者をして開票を參觀せしむることが出來たのだが、運動員中一人の有權者を有たぬ私は、候補者自ら開票所に行つて一日參觀するといふ外はなかつた。各候補者夫々數人十數人の運動員を開票所の內外に陣取らせて居る光景に比し、私のこの有樣は、餘りにも面白い對照ではなかつたらうか。よくも運動員三名で選擧が出來たものだと、今から回想すれば、眞に奇蹟の樣である。

## 五、後ればせの立看板

私は、これは全然無意義なものと信じて居た。それで、方々に各候補のそれが立並べられたのを見ても（尤も一候補者十枚に限定されたが）それを立てる準備をしなかつた。ところが、その中に友人が、君はあれでは本氣にやつて居るやうに見えぬ、と言つて呉れた。成程考へて見れば、その時宣言書もまた起草さへして居ないし、最初は豫定の演說會までにも相當に間がある。して見れば立候補の意志を宣傳する何等の方法も出來て居ない。と思つて小割の材料を材木屋から買つて來て、これを運動員の手で自作した。が、その十枚の中の何枚かは、立てる場所がなくてそのまゝ暫くの間放置されて居た。立看板を置くことを依賴するさへ自分の氣持が咎められたからである。

## 六　有權者名簿三册

何百册といふ有權者名簿を準備して、大勢の運動員に利用させた候補者もあると聞いたが、運動員ただ三名しかない私の選擧運動には、名簿はただ三册しか必要がなかつた。それも、そ

の中の二冊は製本を崩して五十音別の名簿に仕直した。殘る所はただ一冊の名簿のみである。情實を廻らず、戸別訪問をしない以上は、名簿はただ文書發送の宛名書きに必要であるのみである。

## 七　立候補挨拶狀

濱松で配布された各候補者の宣言書なるものを、或る人の好意で手に入れたが、それ等は普通選擧になつたからと言つて、何等の新味を見せて居ない。その頃各候補者から續々發送されるものを見ても、何れも文字の形骸を並べたもののみに過ぎない觀があつた。ただその中にあつて、市電自治會から立候補した秋葉加藤君のだけは、内容も豐富であり、着眼點も非常にいいものであつた。そのことは同じ無産階級を味方とするものに取つて、どんなに心强いことであつたか知れなかつた。

私の挨拶狀の出來たのは、選擧期日が既に二週間に迫つた十二月六日であつた。實は選擧運動に事實着手したのもやつとその頃であつたが、運動に着手したとは言つても、人勝れて忙しい自分の生活の道の片手間にすることであるから、時間のないことお話にならない。その暇を偸んで作製した挨拶狀は、

一、普選によつて新興すべき無産階級結束の捨石となること、

二、町稅百十萬圓の過半額を占むる教育費の使途を意義あらしめること、

三、大都會隣接町の惠まれざる生活機關を改革すること、

の三項を擧げた後、後尾に左の政策を添へたものであつた。

政策

左記の諸項は最善の努力を以てその實現を計りたいと考へて居るもの丶一斑であります。

一、町の財政を豐かにするために
　滯納者の絶無を計ること

一、子供を幸福にするために
　1、小學校舍の增築—二部教授の撤廢
　2、教員平均給の增額—優良教師の增加
　3、專科教員の充實

一、體の健康を願ふが故に
　1、上水道の新設促進　2、下水道の新設　塵芥處分の徹底

一、働くもの丶負擔を輕くするために
　1、兒童授業料の廢止　2、託兒所の公設　3、兒童職業紹介に關する新施設　4、實費診療所の新設

一、災難から免れるために
　1、公設街燈の設置　2、消防機關の整備　3、道路の改修促進

町の文化向上のために
　1、青年團處女會の自治的發達

2、成人教育機關の設置　3、簡易圖書館の設立　4、公會堂の設立

尙、右挨拶狀に添へ、候補者自らを紹介するため、略歷を記したものをすべて同封した。

## 八　推薦狀は百通

各政黨關係のお歷々、若くば有權者に親しみを與へる効果の上からだらう、多くの候補者は堂々たる推薦狀を配布したが、私は本來推薦狀といふものを重視しない。(例へば書物の序文に對してでも)それは多くの場合、推薦される人の作製したものだからである。それ故に、私の立候補に對しては、種々の意味に於いて、多くの有力者が應援して呉れ、また演說にも出て呉れたのであるから、推薦狀に名前を借りることは易々たることであつたが、私は全然その氣にならなかつた。ところが全く推薦者自身の好意から、極めて限定された少數に對し、進んで推薦狀を發していただいたものが二種あつた。が、その發送數は合計して百通にも滿ちなかつた。一萬三千の有權者に對しては、正に百三十分の一にしか當らない數である。尙、私は名刺といふものは一枚をも使用しなかつた。

## 九　文書宣傳の作戰

これと演說會とが、私の選擧運動に於ける二大仕事であつた。殊に文書宣傳に對して、最も苦心したのはその徹底の方法である。

普通選擧法の罰則の中には「何人と雖も投票を得、又は得しめざる目的を以て戶別訪問をすることを得ず」としてあつて、それは改正選擧法の大眼目とも言へる。が、問題は「何人と雖も」といふその解釋である。苟くも「何人と雖も」とある限りは、人間のする戶別訪問は一切いけない、といふことに解釋することが正當であらうが、しかし郵便に托して文書を遞送することが戶別訪問にならぬことは、衆議院の場合、一人一回は無料遞送の出來る規定があるによつても察知せられる。して見れば、これに對する解釋は、候補者、運動員、その他それ等の親族、或は有權者がしてはいけないといふまでであつて、郵便の如く料金を支拂つて一般的に配布することは違犯にならない筈だ。從つて人夫を傭つて戶々に配布することは戶別訪問にはならないことになる。この私の解釋を以て協議會當時、檢事、警視廳當事者立會の席上に私が質問した際、官憲は、左樣に解釋して差支ないとの答辯を以てした。

私が、かゝる方法を案出した動機は、全有權者一萬三千全部に文書を郵送するとすれば、その料金二百六十圓、それに用紙印刷料を加へただけで、旣に制限の選擧費に達するのみならず、かゝる莫大な郵税は到底吾々の堪へ得る所でない。と言つても、全有權者に政見を徹底させることは、立候補本來の任務でなければならない。その結果、この無理を解決するために選ばれた方法は、これより外になかつたのである。

每日約三人の人夫はそのために準備せられた。それに番地入りの地圖三枚。準備せられた封筒はすべて番地順に整理され、それを各區（と言つても選擧區があるのではない。町政上の十五區）に配布さして見ると、素人ながら一人一日八百通位は配布が出來た。その結果二百六十圓の郵税を要すべき發送費は、その十分の一約二十五圓位で濟んだであらう。而かも、それは郵便と違つて、その配着の時刻が豫定され得るの强味もあつた。

尙又、その配布の時期は、他の候補者の宣言發送が大半終へた頃を以て、私は潮時とした。それは早すぎては印象が薄くなるし、最も文書戰の激烈な時には、一々披見するの餘裕を有權者が有たないだらうと考へたからである。殊に、私の最も鋭敏な注意を拂つたのは、その文書配達は、出來得る限り、その配布すべき當該地域に於ける演說會の前日若くばその當日を以てした。そして、常に演說會へ案内のビラを入れること、並に表面に「演說會案内」の文字を入れることを忘れなかつた。これは、一方には演說會の宣傳のために、一方には、それによつておのづから他の趣意書に目を注ぐの機會を作るためであつたが、この方法は明らかに成功したと信ずる。私の演說會が、特別に聽衆の多かつたといふことは、一方には應援辯士の顏振れがよかつたことと、他方にはこの種の宣傳が効を奏したためであることと信じて居る。

## 一〇　演說會の記錄破り

立候補の最初、玄人筋から全然問題視されなかつた私の選擧の形勢が、中頃「景氣が大變いゝ」と言はれ、最後に「最高點かも知れぬ」と言はれ、結果に於て三十人中の第六位の好成績を得たことは、主として演說會の賜であることを信ずる。

私の演說會は、自身主催のものが六回、他の連合に出席したのが二回であつた。自身主催六回の演說會に、應援辯士數は廿五人、延人數は三十人、即ち同一の人で一回以上の應援をして異れたことは五回しかない。毎日毎夜四五の同じ顏觸れの應援辯士のみを以て開會する例の多い中に、時日の異る毎に、辯士が異つたといふことは、私の演說會が最

も多くの聽衆を吸收し得た主要なる原因だと思ふ。或る寄席に於ける安部磯雄、鈴木文治兩氏の應援演說の夜はその寄席初つて以來の大入で、四百五十の定員に六百以上の入場者があつて尙這入れなかつたものが多數あつた。

尙、私の演說に於て、私は、自分に投票して吳れといふことは。殆んど言つたことがなかつた。たゞ、意義ある選擧權を、一切の情實を排して行使するの必要を力說するのみであつた。

## 一一　演說會のビラ

演說會のビラは、自分から意匠したものを石版刷にしたが、それは非常に印象强いものであつたとして、可なり評判になつたが、それを揭載し得られないのを遺憾とする。

たゞここに興味のあつた事實は、前揭協定事項にあつたが如く、ビラは演說會に關するもの以外、一切貼らないことに限定したことが、當時は何の問題にもならなかつたのだが、いよいよ運動が熾烈になつて見ると、演說會をするものゝみは、そのビラを無制限に貼つて、一方にはそれを景氣附けの宣傳に利用するに至つたに拘らず、演說會を催さない候補者は、一枚のビラだに貼り得ないといふ不利に立至つたことである。そのために、中には演說會のためのビラ貼りではなく、ビラ貼りのための演說會を開くといふ、餘興的な現象さへ見るに至つたものである。

## 一二　選擧當日に於ける制限

新選擧法には、選擧當日に限り投票所を設けたる入口より三町以內の區域に選擧事務所を設けてはならぬ、又、文書圖畫も同じく當日に限り右三町以內に於ては之を頒布しまた揭示してはならぬ、となつて居る。

然るに、本來この新選擧法が、いかに衆議院のそれの場合のことのみを眼中に置き、町村會の場合を全然無視して立案したものであるかといふことは、今回の西巢鴨町の選擧に於ては、投票所が全部で六箇所設けられ、しかも候補者の數は四十九名の多數に達したが故に、候補者中には、投票所より三町以內に居住するものが少くなく、當日態々事務所を移轉しなければならぬものが、多數あつたといふ實狀である。

尤も、それを別にしては、當日三町以內に一切の休憩所やビラを禁止したことは、從來のお祭騷ぎを一掃する結果になつて、非常に氣持がよかつた。が、ただそのビラを剝がすための苦心に至つては大抵ではなかつた。先づ前夜投票所數の六枚の地圖を用意し、それに投票所の入口を中心とする三町の圓を描き、それ〲部署を定め、その範圍內の道路といふ道路を巡視して、

一枚たりともビラの影を止めることのないやうにするため、銘々は深更まで努力するの外はなかつた。假りに一枚でもビラが殘つて居ては、違犯になるからである。尚新法には、一枚のビラと雖も、それに責任者の住所氏名を記入して置かなければならぬとになつて居るので面喰つた候補者も頗る多かつた。

## 一三　開票の結果

斯くて、愈々十九日を以て投票は行はれたが、投票の結果は、

全有權者數　一三、二八〇
投票數　九、四八四

即ち棄權者數は二割八分五厘に當り、普選第一回の成績としては、決して不結果ではなかつた。

右に對し翌日開票の結果は、

最高點　四四八　　最低點　一五〇
次點　一四四　　最低點　三〇

といふ結果を示した。尚、計算の結果は次の如き結果を示した。

| | | |
|---|---|---|
| 當選者（三十人） | 得票總數 | 七、四〇一 |
| 落選者（一九人） | 得票總數 | 一、九七〇 |
| 無效投票 | | 一一三 |
| | 計 | 九、四八四 |
| 當選者一人得票平均 | | 二四七 |
| 落選者一人得票平均 | | 一〇三 |
| | 差 | 一四四 |

更に無產階級を標榜して立候補したものに對する結果は次の通りである。

| | |
|---|---|
| 社會民衆黨 | 二九六（第六位） |
| 自治會 | 二四四（第十三位） |
| 借家人同盟 | 一五〇（第二十九位） |
| 勞農黨 | 三〇（落） |

四人の中、勞農黨ただ一人落選したのは遺憾であつたが、これは立候補の時期が非常に後れたことと、運動費の準備不十分であつたためだと聞いて居る。無產階級候補の成績は、濱松、北海道の何れに比しても優良であつたと言ひ得ると思ふ。

## 一四　總勘定

さて、私は右社會民衆黨の候補として、意外にも第六位を以て當選したものであるが、何の力によつてこの成績を占め得たかといへば、それは一般民衆の選擧に對する自覺が、選擧權の無產者への擴張を機會に發露したのである、といふこと以外には何物もないと言ひ得ると思ふ。それが候補者たりし私としての偽らざる直覺である。

それは以下の諸事實に就いて明かに立證せられるであらう。

實は、今回の選擧に對する最初から最後までの私の自身に對する觀測は、豫想外の多數で當選するか、豫想外の少數で落選するか、の二途を出でないことを信じて居た。といふのは、

第一、私は在來の金權候補者が有する武器の一つをだに有たなかつた。運動員が三名に過ぎなかつたは既に述べたが、そのことから想察され得るが如く、地盤といふものを全然私は有たなかつた。西巣鴨町は町政區劃として、十五區に別つて居る。これは選擧區ではないが、各候補者は、大抵その地域の町內會、青年團、在郷軍人團、消防、その他の所謂有志階級を味方に有ち、或は區內、町內の詮衡や推薦によつて、大凡當選點に近いだけの得票數を豫想し得たのであるが、私には區內町內に一人の有志者をも有たなかつたし、賴みともしなかつた。

次には、だと言つて他の無産階級候補者諸君の如く、階級的組合の背景をも全然有たなかつた。强いて言へば、約三四十に近い教育者の投票を味方に考へ得られたかとも思ふ位である。

更にまた、候補者自身は勿論、運動員乃至この周圍の人々は、選擧運動の實際に對して全然未經驗のものばかりである。また、文書宣傳をしたところで、他の候補者は麗々しく奉書の封筒に入れられた仰々しい宣言書推薦狀を、中には數回も發送したものさへあるに拘らず、私はハトロンの貧弱な封筒を用ひて、ただ一回を投じたのみである。

斯くして、私の選擧運動なるものは、全有權者へ一回一通の挨拶狀、六回の演說會、ただそれ以外には、何物もない運動であつたのである。それ故に、有權者が尙在來の選擧に對する意識によつて動くならば、私は豫想外の少數で落選するであらうし、さうでなくして、選擧界に或る意義ある機運が動いて居るとすれば、私の文書演說により、一切を判斷して選擧權を行使するであらうことによつて、私は豫想外の多數得票で當選するであらう、と考へて居た。その後の豫測が當つたといふ事は、蓋し、私、並に私の政見以外には選擧を爭ふために何物をも必要としなかつた、といふ結論を與へて呉れたものである。

更に、それを裏書する事實として、今回の選擧に於て、某々區の如く、約一千票に近い有權者を有し、それを協定して獨占しようとし、極度に他區候補者の侵入を防いで運動したに拘らず、氣の毒な慘敗をした金權者、地主等があつた。また、前議員であり、一方の頭目として當選確實を傳へられながら、演說會を開かず、文書の宣傳を怠つて居たために、同樣な慘敗をした二三の例さへある。

私の運動に於て、費用の主なるものは印刷物と演說會場費であつて、辨當代は二十數回に充たず、一盃の酒だに要しなかつたといふことは、すべてを語るものであると信ずるのである。

以上が、私の普通選擧實驗に依て得た有りの儘の事實である。

(左記は運動費總額である。)

選擧運動ノ費用支出總額　三四三、四四

支出明細

| | | | |
|---|---|---|---|
| 報酬 | ナシ | 廣告費 | ナシ |
| 家屋費（選擧事務所 | ナシ | 筆紙墨費 | 三、三三 |
| 家屋費（集會會場 | 一三五、〇〇 | 休泊費 | ナシ |
| 通信費 | 二六、〇六 | 飲食物費 | 二六、五〇 |
| 船車馬費 | 四、五〇 | 雜費 | 三六、七五 |
| 印刷費 | 一一二、四〇 | | |

# 見世物研究（技術篇）

朝倉無聲

## 第十九　百眼と七面相

百眼はもと七變目又は七ツ目と呼び、目鬘によつて顏面を七通りに變化させる伎である。天明六年版本『惡七變目景淸』に

重忠目鬘といふ物を工夫し、これを吉原の太鼓持目吉に傳へける、今座敷藝にする七變目といふは是なり、「この次は色目と番取り眼でござります。

とあるのに據ると、天明の頃吉原の幇間目吉が、酒宴席上の一興として、演じたのが始めである。其後引續き文化年代に至るまで、座敷藝として行はれてゐた事は、文化三年版本『即興跡引上戸』開運七ツ目の條に

目鬘は厚き紙にて拵へ、兩端へ紙捻をつけて耳へかける、紙は肉色に染めてよし、最初目鬘を膝の下に重ね入置き、先づ初め灸の目をすべきなり、仕樣は俯むきて居ながら目鬘をかけて、左に現はす灸の文句をいふ内も、始終俯むきになりて云ふなり、扨其文句の終りに、「アヽコリヤ」といふ所にて、ぐつと顏をあげて、「アツ……と皮切りの熱きを堪ゆる仕打あるべし。



天明版「惡七變目景淸」所載

目鬘の口上

是は開運七ツ目と申す思ひ付きで御座ります、扨私亥の年で御座りますれば、亥の日亥の時に亥の目をすへますと、萬病を除くと申す事で御座りますから、灸事を致しませう、コレお鍋どんどうぞおめへちよつくりすへてくんな、其代りうめへものを奢りやせう、サア〳〵えいか、コレいつけたらいつけたと云つてくんな、ヤアもういつけた、こゝが辛抱どころだ、アヽコリヤ「アツ……。

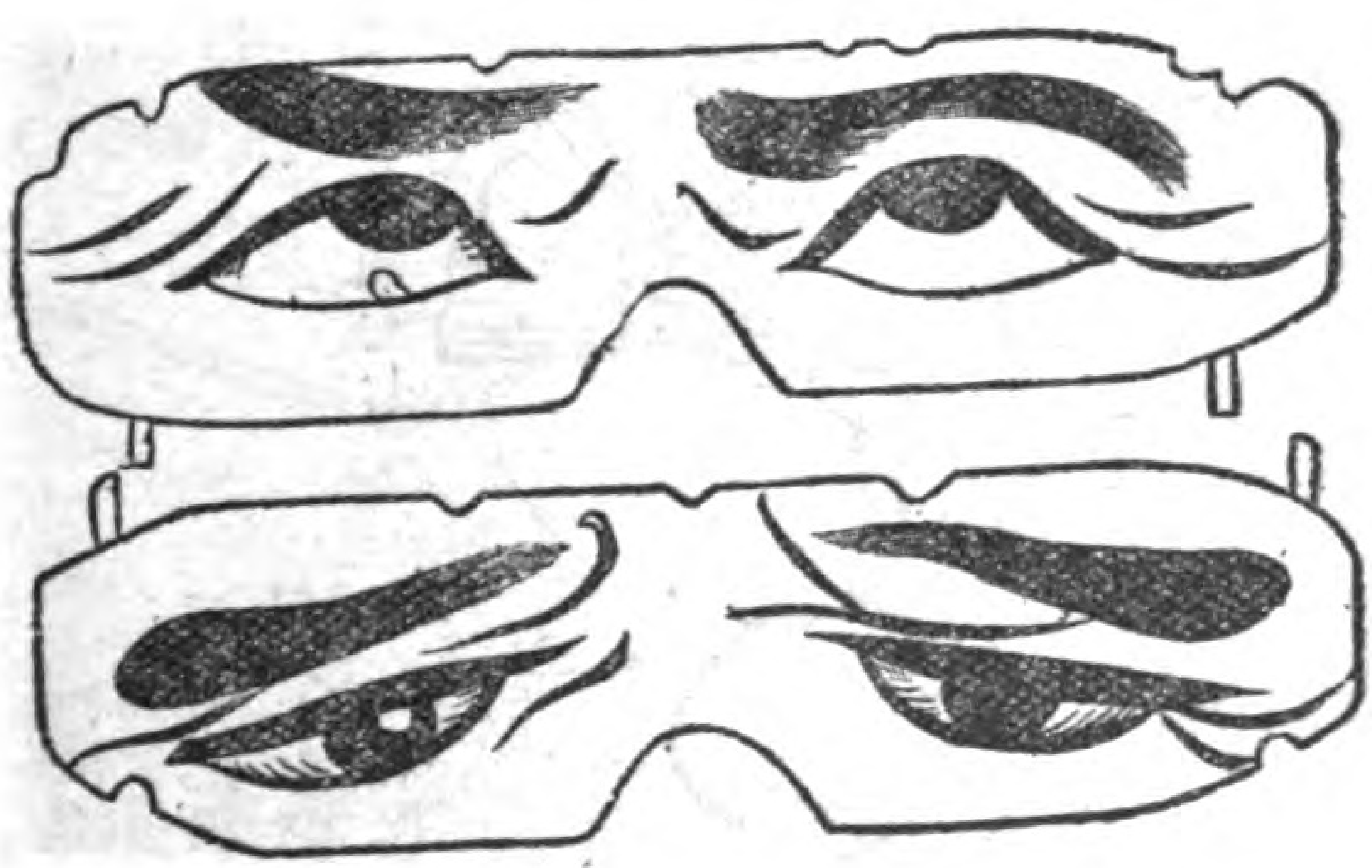
とあるので、其方法をも合せて知る事が出來る。この流行を見て落語家三笑亭可樂門人可上は、是を高座で利用せんと思ひ立つて、更に工夫を凝した結果、創製したのは差目鬘である。左に載せたの

は、即ち可上自製の差目鬘で、眼に淡青色を施した外は、總て代赭色をした厚紙製の物である。其上圖の裏に富士登り三、又下圖の裏に富士登り二と記し、孰れも左右に割り竹をつけて、一は上から二は下から挾むやうになつてゐる。されば可上が富士登山の光景を演ずる時には、先づ紙捻のついたのを一枚耳にかけ、其上に一は上から二は下からとのやうに、割竹で挾み置く事七八枚、扨一合目から二合三合四合目と、登山の疲勞が次第に增す身振とゝもに、巧みに一枚づゝ拔去つて、顏面を變らせては、觀客を笑殺せしめたのである。

可上の創製した差目鬘を、百眼と號けたのは師匠の可樂で、文化の中頃から市中の寄席へ、百眼元祖可上の看板を揭げて興行した事は、彼の遺稿『歌俳百人選註釋』に

予文化年中の頃より、落し咄の中へ戲れに種々いろ〳〵の眼眞似を致せしを、三笑亭の主可樂といふ人是を一見して、百眼と題し名付けくれたり、今は一夫より三ケの津は更なり諸國に弘まりて、今は一流百眼落し咄の鼻祖とはなれり。

とあつて、其末に百眼工夫祖三笑亭可上と記してゐる。この滑稽を極めた百眼は、時尙に投じて大いに流行したが、後には『近世商賈盡狂歌合』百眼の條に



三笑亭可上自製差目鬘の圖

噺家元祖可樂門人三笑亭可上といふ者再興し、百眼に妙を得たり、夫より錦繪に出し張拔きに作り、都下は勿論在々に至る迄、是を翫ぶ事とはなりぬ。

とのやうに、翫具となつて永く世に行はれたのは、實に可上の名譽である。

可上の門人は、春風亭千枝を初め四五名あつたが、新機軸を出す程の俊才がなかつたと見え、嘉永度には『近世商賈盡狂歌合』に

五番 百眼

よし悪しの早替りする人ごゝろ見する可上の工夫こそよき。

吉井火打鎌 勝

火打鎌きたへ吉井と兎さへかち〳〵山で手柄見せけり。

とあつて、四方梅彦の判に

話家の百眼替りたる趣向も見えねば、昔話の兎の方がかち〳〵山々。

とのやうに、新曲を演ずる者がなかつたので、はや飽かれ氣味になつてゐた。當時下谷大音寺前で、梅勢散といふ齒磨を鬻いでゐた米吉は、寄席で見覺えたのであらう、百眼に巧みであつた所から、是を御愛敬に梅勢散を賣弘めやうと思ひ立つた。そこで身には紺の香高き腹掛け股引の上に、童子格子のドテラ

に絞りの浴衣を重ねたのを着て、七三に尻からげの突掛け草履といふイナセな扮裝、腰には一尺もあらうと思はるゝ大煙草入を提げ、手には眞鍮惣金具の横に目鬘の繪と大音寺前と書いた歯磨入れの箱を持つて、日々江戸市中を振賣したのである。其呼聲は

江戸の花梅勢散薬歯磨きッ、本家本元大音寺前、御求めの方には新工夫の百眼を御覧に入れる。

といふので、買手があると目鬘をかけて、鳶に油揚を攫はれた身振可笑しく

「ホイ、油揚を取られた、イメエマシイ、アレアレ〳〵、屋根で喰らつていらア、尿とんびめが。

との聲色に、見物の笑ひを取つたのである。この珍らしい行商人の噂は、忽ち四方に喧傳されたので、商家店頭の暇々、或は裏店の鐵棒引き等は、孰れも米吉の來るを待つて歯磨を買求め、滑稽な百眼の身振に抱腹絶倒したのである。されば當時百眼米吉の名は、三尺の童子すら知らぬ者がない程有名だつたので、嘉永六年二月六日から、河原崎座切狂言『假色連一群』の景事に、大坂新下り嵐璃●が米吉に扮して、百眼の身振を眞似たので、大いに喝采を博したのである。従つて百眼米吉の名は益々高く、歯磨粉の梅勢散も誰云ふとなく百眼歯磨と呼び、市中所々に取次販賣店も出來る程流行したので、大いに利潤を得た米吉は、文久の頃店を番頭に委ねて、其身は向島に樂隱居をしたと云ひ傳へられた。斯く歯磨賣の御愛敬に演じた百眼が大いに流行してからは、寄席の百眼は自から廢れて了つた。



安政版「狂歌俳優人物」所載

右の百眼に類似したもので、七面相といふのがあつた。それは高座で鬘や頭巾其他の物をつけて、挿圖のやうに顔面を七通りに替へる所から、名付けられたものである。

七面相は何人の創意であるか詳かではないが文政の初年から江戸の寄席で早瀬渡平が此伎を演じてゐた。其後名古屋で興行して好評であつたが後繼者がなかつたので中絶した者か、『落語家奇奴部類』に、扇玉や鶴松が恵比壽大黒の顔を能くすとあるの外、更に文籍に見えない。此七面相を再興したのは、落語家の松柳亭鶴枝で、明治十七八年頃から百面相と號け、東京市中の寄席へ現はれたが、歿後は二代目鶴枝が其業を繼いで、今も尙寄席に出演してゐる。

## 第廿　曲吹きと曲搗き

曲吹きとは飴の曲吹きで、飴細工の進歩したものである。飴細工は大道商人が辻々で子供を相手に、細い管の先へ軟かい白飴の小玉をつけ、其管を吹いて瓢簞や鳥の形を造つては、淡彩を施して子供に鬻いだのである。この飴細工に妙を得た者が、飴の曲吹きと名付けて、初めて大阪道頓堀の觀場へ出演したのは、寛政三年の春であつた。然るに『近世商買盡狂歌合』飴曲吹きの條に、或老人の話に、安永年中葺屋町河岸小芝居にて、大阪下り飴の曲吹き見世物出で〻評判なりしとあるのは、老人の記憶違ひで、安永は恐らく享和の誤りであらう。

享和元年に大阪の道頓堀で、飴の曲吹きを演じた吉本林平は、斯道の名人だけに種々の形を吹いて、觀客を驚かしたのであるが、翌二年に江戸へ下り、葺屋町河岸の小芝居で興行した。當時林平の吹いた曲は、山東京傳作黄表紙『五人切西瓜斬賣』（文化元年版本）に

葺屋町河岸の小芝居にて、大當りせし飴の曲吹きの太夫吉本林平、得たり賢しと竹の管を振廻はし、惣身の力を息に込め、或は瓢簞蹴鞠の形、戸塚の金玉流星の星下り、夕貌の蔓神道の玉襷、蜘手結葉十文ふくろ、又は竹割り甘露糖、榧の狹切り壹割り飴、微塵になれと吹き立てしは、古今稀なる藝術やと、感ぜぬものこそなかりける。

とあるので知れると同時に、この妙技は江戸の人氣を呼び、大當りを取つたので斯く黄表紙に迄當込まれた事も明かである。



三世豐國畫　嵐璃玨扮百眼米吉之圖

文政九年の五月から、名古屋で興行した棒呑み太夫更科荒太郎は、其前藝に飴の曲吹きを演じた事は、『見世物雜志』文政九年の條に、五月下旬より若宮にて棒呑み興行、前藝飴吹きなり、太夫更科荒太郎、太夫本須本卯之助、飴吹きは飴に管をさして、いろ〳〵奇妙なる吹きやうをなして見すとある。この更科一座を最後として、見世物界に飴の曲吹きの絶えたのは、大道商人の飴細工に、熊吉を初め名人の輩出した爲であらう。

曲搗きとは、粟餅や伊吾餅を曲搗きする大道商人であるが、粟餅の曲搗は、寛政の頃生玉屋正六の仕出しであると云ひ傳へられてゐる。それは搗手と担手と二人で餅を搗くうち、掛聲とともに杵を空へ投上げ、又杵の下りる刹那に、餅を兩手に捧げて、空臼を搗かさうとすると、其手は食はぬと杵を擔いで見得

を切るなど、種々滑稽の身振可笑しく

名代／＼、是はお江戸で御評判の生玉屋正六が家の看板、粟餅の曲搗きじや、ソリヤいくヤレつく、つく／＼／＼何をつく、麥つく米つく䄶をつく、證文手形に判をつく、日那の尻へ供がつく、女郎はお客の襟につく、朝のわかれに山寺の／＼、ずんぼらぼんの坊さん鐘をつく、嘘つく抱きつく喰ひつく、璧の金玉砂がつく、さつさ／＼／＼。

との戯言を吐きながら搗終る。曲搗きをした者は其餅をちぎつては丸め、丈餘を隔てた屋臺の上に在る三個の木鉢へ投入れる。其早さは實に眼もとまらぬ程で、終には二ツ三ツ一緒に投出すと、誤たず三個の木鉢へ、一ツ宛轉び入る練磨には、見物を驚感せしめたと云ふ。尤も木鉢の所に若者が居て、投入れらるゝとゝもに、是も手際よく餡豆粉胡麻をつけて、それを盆に盛り或は竹の皮つゝみにして鬻いだのである。この滑稽を極た曲搗きと戯言とは、當時の人氣に投じて大いに行はれ、後には文化三年版本『即興跡引上戸』に、前に掲げた戯言を載せて、これも酒の上にて戯れに能くする事なりとのやうに、酒宴席上の一興として演ぜられ、又吉原の俄にも脚色まれた事は、天保七年版本『春色恵の花』に

揚屋町その裏茶屋の奥の方、確にこれは里八とか里吉とかいふ男藝者の住所と見えて、三四人寄りて俄の稽古の體、「だれだと思ふ奴だぞ、滅多にからうす搗くものか、「中見て底つけ啌つき彌次郎、とゝんがどつこい、「ヨイ／＼／＼、これはさてあれはさて、「よい／＼／＼、「これは御存じ粟餅の曲搗き、「名代は砂糖も雪太白、きな粉も餡も一粒選り、「衣紋をつくろふ大門口、「しんな座敷や間夫の床、さて青樓は夜ぞ更けて、「ふけたら持て來い餡にもせう、「搗いたらきなこお誂へ、「これは御存じ名代名代、アゝくたびれたと杵を投出す。



「猿猴庵日記」所載

とあるので知れやう。

伊吾餅は、小さき餅に餡や豆粉や胡麻等をまぶしたもので、寛政八年二月に、芝泉岳寺八相曼茶羅開帳とゝもに、義士の遺物を見せたので、其時門前の商人が、忠臣藏の狂言に擬へて、伊吾餅を鬻いだのが初めである。これも曲搗きの方法は、粟餅と殆んど同樣であつた。この伊吾餅と粟餅の曲搗とが、文政天保

度に大坂と名古屋とで、見世物として興行された。それは『浪華見世物年鑑』文政七年の條に、伊吾餅曲つき（江戸芝名物）難波新地にて興行と見え、又『見世物雜志』天保四年の條に、九月五日より大須落し咄小屋跡にて、物眞似曲餅興行、江戸繁造外三名、曲餅八百德外一名と見えてゐる。斯く曲搗きは名古屋以西の觀場で興行されたにも拘らず、江戸に絕えて其沙汰のなかつたのは、『近世商賈盡狂歌合』粟餅曲搗きの條に

南傳馬町一丁目東側に、間口三間程にて、加納屋富五郎といふ者、曲搗き揑取り餅をちぎる手際の働き面白きとて、江戸中に其名を現はし、上聞に達せしにや、忝くも上樣上覽に出たり、爰に於て曲搗きの節は、店先に見物群集する事、廣き往來を半ば塞げ押合ふ程なりし。

とのやうに、上覽になつた程の妙曲でも、唯で見物が出來たからであらう。

## 第廿一　南京あやつり

南京あやつりは、一に絲あやつり又は釣人形とも呼んで、小さい人形に絲をつけ、上から其糸を牽いては、種々の動作をなさしめるものである。南京とは江戸時代の通言で、南京玉又は南京鼠とのやうに、小さくて愛らしい物の形容詞であるから、支那の南京から傳來したといふ意で、名付けられたのではない。併し支那でも南京あやつりの事を、提傀儡又は傘絲傀儡とも呼んで、古くから行はれてゐた事は、『類書纂要』に、提傀儡は木の偶人の線を牽きて戯れを作す、□元英の『談叢』に、韓□胃は暮年冬月を以て、家を携へ西湖に遊ぶ、席間に傘絲傀儡を献ずるありとあるので知れやう。本邦では寛文延寶の頃から、大坂の伊藤出羽椽芝居や、京都の山本角太夫芝居で、操人形とともに南京あやつりを遣つたのが始めである。寶歷六年版本『竹豐故事』に、南京糸操は、寛文延寶の頃より遣ひはじめし由、京都山本角太夫芝居に專ら遣ひしなりとあり。又元祿年間版本『好色由來揃』に、からくり人形糸づかひの名人は大坂又八、其後武田四郎兵衛とあるから、操芝居の南京あやつりは、專ら是等の者が、角太夫節に合はして遣つたのである。



文化版「五人切西瓜斬賣」所載

山本角太夫の正本で、延寶六年版本『しのだ妻』を見ると、安倍保名は一條の橋で、道滿法師の爲に寸斷に斬殺される。すると烏や鳶や犬などが群り、手足や肉を銜へ飛去つて了ふ。そこへ晴明が通りかゝり、この有樣を見て大いに驚き、父を蘇生せしめやうと、橋上に壇を構へて祈るや否や、以前の烏や鳶や犬等は、各手足や肉を銜へて來る。そこで晴明が更に烈しく祈

ると、手足や肉が一々髑に繋がり、元の姿となつて保名が蘇生する一段は、専ら南京あやつりを應用して、然も大仕懸けで演ぜられたやうである。

元祿度には、京都四條の見世物小芝居でも、亦南京あやつりを興行したと見え、元祿六年版本『西鶴置土産』に、雨蛙の芝居なる小見世物とある小見世物は、南京あやつりであつた。それは寳曆十二年版本『歌舞妓事始』に、芝居四條中島にありし時類燒し、雨かいるといへる南京あやつりの小芝居一軒殘れりとあるので知れる。享保三年版本『猿源氏色芝居』に、人を遣ふこと南京人形の糸をさばくよりもやすくとあるのも、恐らく此見世物の事を云つたのであらう。かく流行した上方の南京あやつりも、明和二年版本『禁短氣』二編に、近年絶えたるもの南京あやつりとあるから、寳曆度に絶滅した事が知れる。

南京あやつりの江戸に流行を及ぼしたのは元祿年代で、『百戲述略』所載元祿年間江戸芝居町圖中、堺町に南きん人形操座



天保版『豐年武教英』所載

とある。是恐らく元祿年間版本『好色由來揃』に、からくり人形糸つかひの名人は江戸傳內、とある傳內の興行したものであらう。其後中絶してゐたのを安永五年に再興されて、中洲新地で興行した。安永六年版本『放屁論』後編見世物評判の條に、牽糸傀儡古を以て新しく、田舍道者の目を悦ばしめ、とある再興後の南京あやつりは、說敎節に合せて、酒顚童子や虎狩などを演じたのであるが、木戸番は聲張上げて、『叶福助略緣起』所載の

「御存じの南京操、いらつしやい〱今が虎狩、太夫揃ひ、初まつたのは負けます、跡札〱。

と客を呼んだのである。斯く安永に再興した南京あやつりは、天明から寛政へかけて大いに行はれ、寛政三年版本『青樓晝之世界錦の裏』吉原の條に、商人通りさま〲の呼聲きこへる、「さんばさう〱南京あやつり。とのやうに玩具にも模造された程である。

名古屋では、南京あやつりの事を釣人形と呼んで、寛政から文化へかけて、藤井長之助といふ者が自から元祖と稱し、七ツ

寺境内を初め所々で興行した。この長之助は頗る名人で、『猿猴庵日記』享和三年正月の條に

十四日より七ツ　寺境内にて釣人形芝居興行、元祖藤井長之助名人にて、色々狂言段物等道具建奇麗に仕立て、其人形の働く事操人形より宜しく、尤も出遣ひなどあり、取分け評判にて見物群集す。

とのやうに、大いに行はれたから、引續き文化三年と同四年とに大須で興行した。其後釣人形の事は、『見世物雜志』文政元年の條に

四月清壽院にて釣人形興行、名前知らず考ふべし

との外文籍に見えないのと、月光亭墨僊が文化十二年に名古屋の風俗を畫いた『寫眞學筆』に、乞食が巷街で釣人形を遣ふ態を畫いてゐるとの二點から推すと、名古屋に於ける見世物界の釣人形は、文化の末年に早くも衰微して、非人の手に移つたが、文政以後終に廢れたものと思はれる。

江戸の南京あやつりは、『あすか川』に、この山下の賑ひ、文政の頃は祭文のあやつり座とあり、又明治十年の冬齋藤月岑が、東京府知事宛の書上に



文化版「二人虚無僧」所載

上野山下は、文政天保の頃まで糸操相殘り、義太夫節にはこれなく、祭文節相語り見世札に致し候處、當時これなく候、然れどもたま〳〵寄場へ罷出で、義太夫淨瑠璃に合はせ、糸操偶人を遣ひ候者も御座候。

とあるのに據ると、文政度から專ら上野山下で、祭文節に合はせて演じてゐたが、同地は天保十四年に東叡山の圍ひ地となつて、觀場や床店を取拂はれた。そこで市中の寄席で演ずる事となつてからは、義太夫節に合はせて遣ふやうになつたが、明治維新以後も尙色物席に出演してゐた。それは結城孫三郎一座と、鳥羽屋紫蝶一座とで、鳥羽屋は明治の中程に絶えたが、結城は江戸の餘波を今にとゞめて、園遊會の餘興などに出演してゐる。

四五年前から人形芝居と稱して、所々で演ぜられた西洋糸操人形は、伊太利の流行を模倣したのに發したのである。この西洋糸操人形を本邦で初めて興行したのは、英國人ダーク一座で、明治卅一二年の頃であつた。當時ダーク一座から、人形の遣ひ方を習つた松根末吉は、後一座を組織して淺草の花屋敷などで、化物旅館、牛肉屋、理髮店と題した喜劇物を演じたのである。それが鳴物入りで、桃太郎や岡崎

の猫等の日本物となつたのは大正元年からであつたが、惜い哉翌二年に一座の解散となつて了つた。其後前のべた伊太利人形芝居の演ぜられたのが動機となつて、ダーク系統の西洋糸操人形も、亦松根末吉の孫松島龜之助によつて復活し、大正十二年の春から淺草の花屋敷で、不思議な金庫や猿蟹合戰などを、電氣應用で演じたのである。今や大阪文樂座の操人形は曩日の盛觀なく、又南京操の結城一座も衰微してゐる折柄、ひとり西洋糸操人形のみが、華々しく活躍してゐる。併し是とても永續の可能性が、乏しいやうに思はれるのは、筆者の僻目であれば幸ひである。

## 第廿二　狂　言

茲に云ふ狂言とは、曾て見世物として興行された壬生、俄、照葉の三狂言を指すのである。壬生狂言は、云ふ迄もなく京都の壬生寺で、毎年三月十四日から廿四日に至り、大念佛を修する時に、上人が堂上で狂言をする所から發した名目である。狂言の名題は、十王、餓鬼、腹膨、桶取、猿等で演者は孰れも假面をかぶつて無言ではあるが、巧みな身振で其筋を見物に知らせつゝ演ずるのであつた。



安永版「眠覺繪姿」所載

中にも猿は秘曲と見え、壬生狂言に猿の綱を渡る事あり、狂言あまたある中に是を最上とすと、『拾葉抄』に記してゐる。

壬生狂言を見世物として興行したのは、寛政二年三月から江戸深川八幡で、京都大佛內の辨才天が開帳のあつた時に、同境內で興行したのが始めである。何しろ古來名代の壬生狂言が、旅費入らずに僅の端錢で見られるといふので、江戸中の大評判となつて、日々深川をさして押寄せた人々は、辨天の開帳は見向きもせず、孰れも壬生狂言の小屋へと殺到した。されば當時の戯言に、「開帳が七分はづれて壬生あたる」とのやうに、永當永當の大入りであつた。この流行を見た香具師は、早速部下の物眞似師に見覺えさせ、兩國廣小路の見世物小屋前へ、壬生狂言と染拔いた大幟を立て、チキ〳〵チヤン〳〵チチヤン〳〵との囃子に客を呼んだか、是亦大當りを取つた。併し稽古の足らぬ爲に、深川のそれに較べて、大いに劣つてゐた事は、寛政二年版本『壬生狂言噓口占』に、惜い哉兩國の壬生狂言は、咲ける花の匂ひなきが如く、其形はうつすといへども、其氣取りの屆かぬ事多しと見えてゐる。斯く壬生狂

言が流行したので、幇間は酒宴席上の一興として演じ、又市中の子供は紙製の假面をかぶつて、其眞似をする程であつたが、更に翌三年初春に出版した黄表紙中、『壬生狂言唐本寢言直讀見寨萩』『壬生男聲色名代振袖心中』『廿日餘四十兩盡用而二分狂言』等は、孰れも壬生狂言を脚色んだものであるから、當時如何に江戸で持囃されたかゞ知れやう。因みに、右三種の黄表紙中二分狂言は、實に曲亭馬琴の處女作で、京傳門人大榮山人と署名して、和泉屋から出版されたのである。

天保十一年四月から芝神明社内で、天滿宮自筆像開帳の時に、同境内で京下り壬生狂言を見世物にしたが、豫期したやうに入りがなかつたので、更に淺草奧山で興行した。斯く所をかへたもの丶、『武江年表』に、面白き事にて有りしが、さして流行らずとある通り、全く人氣がなかつたので、早々に閉場して歸洛した。

俄狂言は、俄に案出した當意即妙の滑稽を演じる所から起つた名目で、其萌芽は天和二年版本『好色一代男』に、島原遊廓で幇間等が文作の條に見えてゐる。この文作を俄と稱したのは正徳享保の頃で、夏祭に賤民醜怪の狀をなし、「にわか」と書きたる行燈を持ち、群をなして市中を横行す、所望といへば滑稽の身振に戯語を弄せしは、正徳享保の頃より初まると、『よしあし草』に記して居る。斯く發生期の俄は、往來で演じたので、是を後に流し俄と呼び、座敷俄の現はれてからは、紙臺に芝居の衣裳を用ゐて、やゝ筋の通つた狂言を演ずるやうになつた。併し座敷俄と流し俄とを問はず、孰れも自他の一興としたので、所謂法樂の素人藝であつた。

俄狂言を見世物としたのは、嘉永の初年に大坂の宇蝶が頭取となり、新蝶、三貴、新玉、市丸等を幹部として、難波新地の小屋で興行したのが始めである。其後一座の花形であつた新玉と市丸とが江戸へ下り、嘉永四年の春から兩國橋西詰の小屋で、一九の膝栗毛を脚色んだ狂言を演じた。初めは評判區々であつたが、江戸の茶番とは又別の興味がある上に、續き狂言で見ごたへがあるといふ所から大いに行はれ、兩國打出し後は、淺草奧山や芝神明で興行を續けて歸坂した。『藤岡屋日記』嘉永四年秋世の有樣を關取千兩幟淨瑠璃文句に見立てた條に、魂膽も工夫もして見にやならぬ、兩國のニハカとあるのは、恐らく膝栗毛を巧みに脚色んだ苦心を賞したものであらう。この新玉一座が再び江戸へ下つたのは安政四年で、西兩國の寄席へ出演したが、今度は左のみ流行らなかつたものか、『籠耳』安政四年正月の條に、例の俄も大阪の新玉再び下つて、兩國橋の西右の寄席に出でたるが、先年に及ばずと見えてゐる。

明治初年の大阪俄界は曾て新玉の一座であつた尾半の獨占であつたが、明治の中程には、寶樂を初め田蝶や鶴屋團十郎等が、千日前に頡頭して大入りを爭うてゐた。當時京都の大虎座では、正玉や馬鹿八等が新聞俄と號け、三面記事を脚色んだ俄を、地毛の儘演じて大當りを取つたが、是ぞ後出新派喜劇の濫觴である。大阪俄も鶴屋團十郎が、東京で興行した時分は、未だ密んで

あつたが、歿後に門人團九郎が、二代目を襲名した前後から、曾我廼家一座の喜劇が勃興した爲に又振はず、次第に衰微したのは、畢竟時代の推移につれて、趣味の變化してゐるのに心付かず、依然として陳腐の場當り藝を續けてゐた結果である。

照葉狂言は、能の間の狂言を主として、それに芝居狂言や俄狂言をまぜて演じたものである。例へば萩大名の狂言に、大名は素袍に烏帽子、太郎冠者と亭主は上下姿で、太郎冠者の去つた後、亭主から其歌はと問はれて、大名は歌を忘れた苦しまぎれに、さなきだにと云ひ出すや否や、世界は忽ち忠臣藏三段目と變はる。そこで大名は師直となり、亭主は判官となつて、芝居狂言を演ずるなどの類である。尤も芝居狂言の代りに、滑稽の踊や、俄狂言を演じて、觀客を笑殺せしめる事もあつた。

照葉狂言の起源と名義に就いては、嘉永の頃大阪の蕩子四五人合議の上、初めて是を行ふたが、照葉は天爾波俄狂言の訛略であると『守貞漫稿』に記してゐる。

照葉狂言を大坂で興行した始めは、恐らく安政初年の事であらう。同四年正月二日の夜から、江戸堀町樂屋新道の寄席五鱗亭で、照葉狂言盡の看板を掲げ、大坂初下り山本春三郎の一座が出演した。其狂言番組は

三番叟、梟山伏、鍋八撥、三人片輪、萩大名。

等で、狂言は夜毎に番組を改めたが、三番叟のみは操人形の身振りで、毎夜演じたといふ。斯く照葉狂言は、大體能の間の狂言で、俄狂言に較べて高尚であつたから、見物人も武家の家族や富家の隠居などが多く、連夜大入りであつた。この山本一座からやや遅れて、大坂の俄師虎丸一座が、淺草奥山で照葉狂言を興行した。『籠耳』に虎丸一座の技藝を評して、山本の徒よりは劣れりとあるから、山本一座のやうに行はれなかつたものと思はれる。

大坂の照葉狂言は、幕末から引續いて明治廿四五年頃まで、千日前で興行してゐたが、其後何時しか絶えたのは、蓋し俄に比して一般向きではなかつたが爲であらう。

（永らく連載中の見世物研究（技術篇）は本號にて完結のところ紙面の都合にて後半を次號へ割愛したり此段筆者並に讀者の御諒恕を乞ふ。）

# 癖物語

## 愛人と漫畫家と

佐藤春夫



癖といふものは面白いものだ。人間はもとより動物にも皆ある。僕は同じ種類の動物を二疋以上飼ふのは、彼等の癖を見比べられるのが面白いからだ。機械にまで癖があるのだから面白い。少しづつ左の方へ滑りたがる車、遅れることの好きな時計、持ち方でインキの出なくなる萬年筆……

癖といふものは御存じのとほり、誰しも持つてゐながら誰しも自分では氣がつかない。人から言はれて始めて思ひ當る。

一たい僕は人格的の大きな癖――惡德は多いかも知れないが、謂ふところの癖なるものはさう澤山ないつもりである。自分で今氣がついてゐるのは、まづ三つある。

第一には、拇指と人差指とで自分の鼻を二三度輕くつづけさまにつまみ上げる癖だ。これは話をしてゐる時など度々やるらしい。

第二には、手を着物の袂から入れて、腰のあたりへ、その手をちやうど水差瓶の把手のやうな形で支へる――「右へナラヘ！」の時の手の形だ。これは洋服の時には反つてやらないで、和服の時に限るやうだ。この癖は前こごみで猫背の惡い姿勢と關係があるらしい。

第三のものは、やはり姿勢と關係があるらしいが、それは講演などの場合に、卓子を兩手でしつかりと押へつけてゐることだ。

僕のこれら三つの癖の發見者が面白い――と、僕は思つてゐる。第一のものと第二のものとは或る時代の愛人が發見して、よくそれを眞似ては僕をからかつた。又、岡本一平君が漫畫を描くために僕を見物に來られて、早速捉へた形も、第二の癖をやつてゐるところだつた。第三の癖もが同じ岡本君によつて描かれた。漫畫の鏡にうつされてみると、いづれも甚だ貧相なものだつた。漫畫家と愛人といふ對照を僕は面白がるのだ。愛人が愛人の微細な動作を見ること、正に專門家の如く機敏で精密である！即ち知る、愛は職業の如く強し！

「飽きつぽいのがあなたの最も惡い癖だ。――品物でも女房でも」から、うちの山の神がいふ。どうもさうではないと反駁しがたいやうな氣もする。しかし、僕は一度愛讀した書物なら何度でも思ひ出して讀む。僕は始めて本を讀むよりも、馴染のある本を見る方がずつと好きだ。そこにはいつもその時々に新らしく生き〳〵とした感動がある。飽かれる品物や、飽かれる女房よ、注意せよ、お前たちはきつとあまり傑作ではないかも知れないのだ。就中、古來、女の傑作は稀なる哉。――こんなことを言つたら、また最近の家庭爭議には一つ細目が增加するかも知れぬが、これは常識也。

常識と言へば、僕はまたひどく常識を言ふ癖がある。今もさうだつたが、うつかり言つてはならぬやうな常識をつひ言つてしまふ。（この常識愛好は僕の家系の病氣のやうだ――血を引いた癖だ。）つひ、といふのは氣がつかないのぢやない。氣がついてゐても、思ひつくと言はずにはゐられなくなつてしまふのだ。「警拔な一句のためには友人の一人ぐらゐ失つてもいい」やうなへんな情熱が湧くと見える。さう言へば一度、こんな事があつた――

或る友人の家で誰かが「一たい女にはユウモアがないからいけないのだ」と言ふと、そこの細君が、少しきげんの惡い折からの事で「たくでもそんな事を言ひました。一たいそのユウモアとは何です？」そこで僕はつい言つてしまつたものだ「ユウモアといふのは、まあ、睾丸のやうなものですね」細君は僕のたとへの野卑なのに先づヘキエキしたらしい。無言で疑問の顏をしてみせる。僕は更に答へた「ね、第一、女には無いものだし……」それ以來僕はその細君からは言葉の下品な、心の不眞面目な人物と判決されてしまつたやうな傾があつた。

君子愛口――下司亦愛口――そらまたくだらない常識だ。閉口。

# 不勝情不勝癖

水島爾保布

なくて七癖あつて四十八癖といふ。どこから割り出した數字か知らないが、これを分目類別したら先大ていの癖は七癖乃至四十八癖のどれかに入るんだらう。などと、何かといへば數字を擔出すのもいはゞ人間の性癖習癖の一つに相違ない。若人間からこの習癖つまり數字に囚はれる癖を取り除いたら、宗教も科學も哲學も政治も經濟も盡く殆ど理論的立場を失つちまふんだから痛快だ。

うつちやつとくと癖になる。……能くいふやつだ。習ひ性となる賴もしからぬ結果を慮つての文句らしい、つまりは「癖」そのものを「習慣の一種」と判じてゐるわけで、一種といふのは變態を意味し偏頗を意味する。旣に變態でさうして偏頗な習慣となれば、道は一筋松澤村へと通じてゐる。とすると「癖」の極端は氣違ひ、「瘋癲」の輕微なうちは「癖」つてことになる。然らば人として癖のない奴はない限り、人として氣違ひたる素質を有たないものはないつて事も、眞逆の場合でなくてもいへる道理だ。で、是をもつて之を觀ればと持ち出したくなる。人間も下らなくヤキモキするよりは一そ氣違ひにでもなつちまふ方が、少くともその當人丈は仕合せであるやうに、「癖」なら「癖」で思ふさま「癖」を發揮し、「癖」に沒頭してゐる事が却つて癖の本人には幸福であるに相違ない。骨董ほじりの習癖のある人には、骨董をほじつてゐる時が一番人生の愉快と幸福に醉つてゐる時であるんだから、貧乏ゆすりをすることを得意とする人には、大に貧乏ゆすりをさせておく方がよろしい。

……などと、マクラを振つてゐる中にふと思ひ出した。この四十八癖の中に潔癖といふ奴がある。たしか鳩翁道話だと覺えてゐる。それにこの潔癖の茶人の話が出てゐた。お客をしようといふので下女下男に茶亭の拭き掃除を命じる。一通り終つたといふので主人公見分にやつて來る。壁の隅々疊の引き合せ、見るといふより嗅いで廻るといふやうな嚴密さだ。殊に障子の桟などは用意の蟲眼鏡で一コマ一コマたんねんに調べるといつ、

有様、如何な入念な掃除だつてこれぢやお氣に入りさうな筈はない。

「一通り出來てはゐるやうぢやが、これではまだお客は出來ん。誰ぞわいの掃除道具持つて來てくれんか。」

とホロ苦い命令だ。女中は諸事心得てゐる。早速に主人の居間から手慣れの、小箱を持つて來る。蓋を開いて取り出したものはと見れば、魚串のやうに先を削り尖らした竹條、絹布巾、筆軸ほどの竹管、羽箒き、……といつた種類、で、その魚串まがひのものへ濡らした絹布巾を卷きつけて、障子の棧の隅々へ溜つた埃を取る。竹の管で壁の隅を吹いて掃き殘りの塵を立たせる。さうして羽箒で拂ふ。といつた段取りでともかくも一かたつく。そこでやれ一吹くとばかり部屋の眞中へ烟草盆を据ゑて、じつくり座つて席の四方天井かけて見廻してゐると、折から西へ廻つた洩れ日が突き上げの窓へと射してゐる。その明るい日ざしの中に撚れた烟のやうな微塵ゴミが遊んでゐる。大將即に眼かどを立て「こりやいかんとばかり居合ひ腰だ。

「桶に水を入れて、朝鮮團扇と一しよに持つて來てくれんか」

とあはたゞしい下知。團扇に水をつけて、日烟りの中のゴミを拂ひ取らうといふのである。

この位の潔癖ならまだありさうな話だが更にこんな潔癖になつたのに、左の如き一挿話がある。米元章倪元鎭二人の潔癖就いて情史はかう誌してゐる。

米元章潔癖有り。或ひと其の癖なるを言ふ。宗室華原郡王仲御の家、聲伎多し、嘗て之れを驗せんと欲し、大に賓客を會し獨り一榻を設けて之れを待ち、數卒をして衣を解き臂を袒し其の酒饌を奉ぜしむ。姬侍他客を環りて杯盤狼藉たり。之れを久しうして亦た自ら坐を衆賓の間に遷す。

元鎭の女色に於ける意に當る所少し。一日金陵の趙歌姬を眷し別業に留宿す。心に不潔を疑ひ之を浴せしむ。既に榻に登るや、手を以つて項より蹠に至る迄且つ捫で且嗅ぐ。捫でゝに至り復浴せしむること凡そ再四、東方既に白く、復巫山の夢を作さず。

情史子是を評して元章の癖は其の情に勝たず。元鎭の情は其の癖に勝たず。畢竟の情を忘るゝ能はざるは一也」といつてゐる。この米元章には娘が二人あつた。長女のお婿さんの段拂といふ人は字を去塵といつたが、始め其の人の名を聞き其の字を見て既に拂面して去塵、眞に我が家の婿たるべき人なりつてわけで、娘をもつて妻はせたのださうだ。

この潔癖二者とは反對な積穢家に倪世某だの趙飾だのつて奴があるが、猥褻は避けやう。

# 癖論

木村荘八

此の題、くせと扱はず、へきとさせて下さい。「癖」は面白いものだと思ひます。人間に個性がなかつたらさぞつまらないでせうが、個人に癖が無かつたら同じくつまらなからうと思ふ。その代り、癖を眞向にかざゝれた日には、緊に堪へません。個性をかざすを以つて目的とする場合の仕事の忌はしさと同じです。

繪を見ると殊に此の感を深くします。癖の無い繪と云ふ奴は大賢か、然らざれば、索莫砂の如きものです。大賢は稀だが、砂詰の畫は澤山にあつて、つまらぬ。かと云つて、癖ばかりの繪は、之れは大賢たるに甚だ遠い。一隅の存在物とはなりますが、忌はしさは免かれないと思ふ。

歌六や甑太郎の藝風は「癖」だつたらうと思ひます。少くも藝道の大賢とは云へない樣です。只「癖」がいかんとも煮つまつて來ると、そこで「格」となる變通はある樣です。格に入つても癖では何と云つても舞台の全幅は動きませんが、否、之れが益々舞台の動かないものとなり切るに從つて、癖の變ひたる忌はしさは愈々消滅するやうです。つまりその邊で「格」となるいはれでせう、――近頃の藝には、癖の忌はしいもの、が澤山に有ると思ふ。忌はしくない癖一境のものに至つては、僅少です。

或ひは舞台それ自身が縮小して、本來の格を問ふにそぐはなくなつたものかも知れません

繪でも文でも、一般藝事でも、人事でも、何にでも之れを感じます。

稍具體的に云ふと、悉く昔の十圓紙幣が今の百圓に當るおかしさです。三十歳の片々たる畫工が夙に他人の畫を采否する立場に立つて見たり、同じく若優に大役がついて見たり、若槻さんの首相たること、云々……隨筆文字の流行なども、怪しい。

そこで程が忘れられて、假りの名を實と感違ひすると、癖にして天下を取る樣ないゝかげんも生ずるでせう。――それでは

濃季で、くだらぬ。

　吉岡憲房だつたかと思ひますが、さう云ふ名剣士のところへ、まだ無名時代の塚原卜傳か誰か、兎に角後年ものに成つた剣士が、立合を挑みに行つた話があります。立合の後に老人が壯者を批評して云つたと云ふ「大變よく斬れる剣だが、惜しい哉太刀筋に我流がある。それが無くなれば適れ名剣となるだらう」と評したと云ふのです。――若い卜傳か誰かはそこで翻然と悟つて、もう一度武者修行をやり直した、と「逸話」になる――眞偽穿鑿は兎に角、この話には、うそでないところがあると思ひます。

　強く「辯」と云ひ、強く「個性」と云ふ。つまりこの「我流」だと思はれます。將棋に所謂定跡ならぬ手口です。少くも定跡如何を問はぬ、無手勝流でせう。屢々深川正二郎は市川猿之助位ひの話手は通り越して、從横に働らく工合ですが、市川中車に出逢ふと、決して、天地の差を開いて了ひます。「辯」ではとても合邦の様なことになると、その動かぬところに出逢ふと一分一厘も全く動かない、そつまゝの、暗黒世界にぶつかる。

　近頃の散文、稍もすると同じで、韻文には所演の所定狂言がないので、大變結構でしたが、然しながら台本は無からうがそ

れだけにもつと怖いものは有りますな。何にも無いところに、然しながら立どころに何でもつきとまる、凝集空氣の様なイキがある。

　川端龍子の線の方が吉川靈華の線より斷れることは確かと思ひます。古刀の無銘ものと、在銘新刀の、次郎長あたりが振つたトギトギする奴との差だ。只近頃揭驗のところへ行くと、龍子の線ではどうにも斷れない、違ふ硬度の行で、人物なり波なりが出來てゐた。所謂、歯が立ちません。

　然もお互ひの凝集空氣――畫面の形ちのことです――これがいつも明ける夜の目の通り、當節の細かきは、どうせその元値のまんまでむごく年々俎上に乘る仕組のものですから、之れを怖いと云つたのです

　然らば當時珍しく古刀ながらの靈華を第一文字とか何とか云ふもののところへ持つて行くに、如何。この間の晴介、燕雄は、人をして、いつそ磨ぎばなしのギラギラする新刀を差しとしやうと思はしめるかも知れぬ。所謂、イヤになつて了ふばかりです。

　強く「辯」ばかりでは駄目です。そこの我流が無くなつて、所謂本筋を通さなければ、諸事前節合邦になぞらへて云つた醍醐味のところは、斷じて、手がつけられません。昇亭北壽と

歌撰位の收拾し難い差になつて了ふでせう。と云つて、本行本筋ばかりでもとぼ〳〵として困りますな。羽左衛門の延年の舞の方がぞんざいながら三津五郎の緊密なる鷺娘より興をかけさせる道理です。當時離騷は上等のものだつたが、必ずしも上等それ自身離騷とならないのは、口惜しい。上に當時、と付くのが小うるさい。

恐らくは林中の歌、團十郎の藝、圓朝の說話。蜀文に就いては引例するまでもありますまい、——あの邊まで行かないと、大歌舞伎は動かしにくいやうです。松尾太夫では内端へばかり片付いて、乏しい感がします。——團十郎はたしか對面曾我か何かに甲兜武者鞋の五郎で出たことがありますとか聞きますが、と云ふのは、あの人に「癖」の甚だしかつた點を申したいからです。好んで大森彦七の様な愚劇を平氣で演出してゐます。

恐らくは之れを演じて、「癖」倒れに止まぬ、その裏通りを忽ち通り越した、眞髄間の「格」が——「腹が」とも「人物が」とも云へませう——痴漢彦七を振ひ立たしめたものだらうと思ひます。云はば底の抜けたる支那の大將位ゐのものには。今の役者がやれば、あの役はどう轉んでも後備體操教師位ひの働きしか受取れません。

・林中の乗合船に縮々たる怪しい萬才が現はれるやうです。あの萬才の件りだけを取り出して、更に油で炒つて、捻つたり錬つたりすると、舞台は一寸角しか動かぬ偏奇そのものとなる。但し動いたが最後、底無しの奈落迄動き徹さずに止まぬ、前出、天下の「癖」甑太郎の通人もどきに至らうと思はれます。

蓋し時あつて甑太郎を座頭にするとしたら、三語樓が落語の元締となつて、田中さんが山縣元帥となります。バカバカしいだけである。

癖のよく格に通ずるものなく、まして癖を化して自家の奇藥と變ずる大才なしとする。どう云ふことになるものでせうかな。——大きに器癖文癖を武器なりと奉戴するだけでも、明治大正の慌忙たる時節では小十年の學問を要したわけでせうから、問題は、段々と之れからのことでせう。

結何理に陥つ。之れにて。

# 若槻氏の癖

矢田挿雲

每年議會期の一つの樂みは岡本一平君の漫畫、漫詩が見られることだ。小川（鄕）博士の演說振りを會中の方から寫生して『足が地に着かぬ――』云々と漫詩を添えたのや、加藤（高明）内閣の初頭に『こんなデリケートなひねり方も御覽に入れます』と註をして、若槻内相の髭のひねりかたを寫生したものなどは面白くて今に忘れられない。面白いと云つたゞけでは盡きない。文學青年の口吻に從えば、個性の中心生命をギユッと把捉して、それをパット開いて我々に見せたわけだ。足を爪立て息を切らして演壇に伸びあがり『先生モウわかりました』と半鐘を投げられても夢中になつて理想論を吐く小川博士、野黨の猛々の火の如き反對演說を、冷笑するような、馬鹿にするような態度で、一種の髭いぢりに餘念なき若槻内相、それが紙面に躍つて居た。

昨年内閣改造說が沸騰して、例の如く研究會の態度が天下の視聽を集めし時、氏は新聞記者に向い『私が内相を兼攝して居たいのに、此件内相ができると云うのは妙ですネ、併し研究會側の氣分は一日も早くつかみ度いと思つてます』と云つた。此一言を私は頗る面白く感じた。髭の藝當以上に率直の感を受けた。新時代の政治家として是ぐらいの程度の正直さは當然であるのだけれど、夫れすら現在の一般標準から云うと、珍しく思われた。

昨年初夏の候、私たちの俳句仲間で大宮公園え吟行した日に、憲政會支部大會が催されて、若槻總裁はフロックコートで乘込んだ。私も人垣の後ろから首を出して氏を迎えた。その朝の新聞に片肌ぬぎの着流し姿で大弓を引きしぼり『流は有りません。若槻流です』と云つてゐる肖像を見たばかりの眼には、あの長い〳〵鳥居道を徒歩して、大宮神社に參拜する禮服の風容が鮮明な對象を成した。

それは好いが支部大會後、歡迎宴會に臨んで氏は腰を据えてしまつたわけだ。私たちは議會の大臣席に髭の藝當を拜見する

ことわスキだが、都塵を避けて吟行せんとする時、總理大臣や地方有志の疾驅する自働車わ甚だ邪魔ッけで仕様がない。其の日も悉く大宮公園の『我黨化』したのにヒンシュクして、有志と折詰蟻酒との公園からのがれて、田中の清流のほとりに時を經たし、もうソロ〳〵大丈夫と引返して見ると、依然として公園附近に有志の匂が漂つて居る。聞けば若槻總理わ、好い氣持で醉つて了い、三時何分かの上り列車を遣りすごし、此のぶんでわ歸りわ何時になるかわからぬと云う噂であつた。

おかげで見送り人の列わ數時間、驛頭に待ちぼけを食つた揚句、微苦笑して解散し、若槻氏わ汽車を已めて、自働車の夕風に醉を吹かせつゝ、大いに陶然として都門に歸つたとある。そう云えば氏の乘つた自働車が大宮神社の境内で我々一行の側を通過する時、ガソリンの匂よりも酒の香の方が高かつたように思う。

氏の酒量が毎度問題になる。醉つて上機嫌にわなるが、殆んど氏の醉態とゆうものを見た人が無いからである。私生活の話のうちに、毎晩十二時頃歸宅して熱燗を一本傾けながら百本以上の私信を處理し『我が妻よ、御身もし余を愛するならば、余に話しかけて余の仕事を妨ぐる勿れ』と箝口令を發布する由が出て居た。夫子自身もいつか『晩酌わ一合だ』と釋明したことが有つたように記憶するから、一應わ开う信じて置いてもいゝが、晩酌の前に宴會が幾つあるかわかつたもので無いし、朝酒を呼ばぬ限りも無い。極く確かなる筋から聞くところに據れば『若槻さんの酒量わ底ぬけだ』と云うことになつて居る。

いくら飲んでも玉山崩れず、呂律濫らず、否寧ろ頭が益々冴えて來て、當年の秀才ぶりが仄めく中に、三分の茶味がにぢみ出て、線わ太く祖わ細かく、それで居て見る〳〵目がほそくなる位が關の山、ほとんど素面のような顔附をして歸ると、直に熱燗一本を追加し、優に百數十通の書信を處理して誤らないのだから、非常に事務的な正覺坊と謂い得る。

若槻氏の演說の音調わ我が太田雅光畫伯の形容に『桶の底で話すような聲』とある一種のクヽミ聲で、お聞きの通りお國訛りをムキ出しである。氏わ松島事件の僞證問題でわ早くも『嘘突き』の烙印を打たれて居るけれど、其演說を聞くと、ラク〳〵と有りのまゝを話して居ると云う印象を受ける。もとより調子にも身振りにも他所行きらしい俤わ微塵も無く、私生活に於ける談笑も殆んどアレと同じだそうである。そうゆう印象と今一つわ話術の間に窺われる氏の『頭の好さ』と此の二つが、氏の演說を重からしめてゐる。氏の演說を聞いて尾崎行雄氏の演說を想うと、時代わ明らかに變つて居るとの感を禁じ得ない。

併し氏が演壇に立つた時の態度を莊重の二字で評することわできない。是わ勿論本人が演說とゆうものを特別莊重なものと解せず、莊重なものに取扱わうとせず、單に座談の延長と思つ

て居るからでもあろうが、それにしても餘りに家常茶飯的に過ぎる。机上の草稿を絶えず兩手で手まさぐりつゝ、兩足の爪先で交互にフロアを撫でまわしつゝ、諄々と說き去り說き來る樣わ面倒臭そうでもある、その反對に羞かしげでもある。疲れたかにも見える。それで居ながら實わそれ等のどれでも無く、斷續々、水落ち石出で、道窮りて道通じ、のちほど面白くて行くのわ、正に至藝である。ところがそれほどの名演說も最近のラヂオ放送では、お孫さんに『お祖父さんのわ駄目だ』と落第點をつけられたのだから、どんな大政治家もお孫さんにわかなわない。

# どうせここら役者七癖

鬼太郎

## 役の納まらぬ癖

それは重々御道理でも御座いませうけれど、少しはこつちの身にもなつて見て下さいな、どうせ私が座頭と云ふでは無し、偉い方も大勢出てゐらつしやるのですから、いゝ役ばかりしたいの、出し物が難しいのと、そんな贅澤を云ふ譯ぢやアありませんが、一番目は仕出し同樣、二番目もお附合、唯ツた一つ性立つた中幕のお役だつて、上の方は些とも附合つて下さらないんぢやありませんか、上の方の中幕が本當の中幕で、下の方は丁度お辨當處でせう、私も隨分長い事此の一座に辛抱してゐますのに、芝居の度每、こんなぢやア、行末が案じられますね、外には役がない役がないと仰しやるけれど、初手から私なんぞ眼中に置いて下さらないんですもの、はまつた役のあらう筈がありませんや、何時も何時も文句を云ふやうですが、聞かされるあなたの方より、言ふこつちの方が、どのくらゐ忌だか知れやしません、本當にクサクサしてしまひますよ。

ト、いつも奥役を悩ます、ニチャニチャした人の癖。

## 稽古嫌ひの癖

あの阿爺さんにも困るなア、自分だつて他の者だつて、二度

も五度も演つて、分かり切つてゐるものを、毎日毎日やらされちやア、參つちまう、エ、何、一も二も在り物だアね、明日もう一日も讀み合せをしたら、明後日は休で好からう、實は僕は用もあるんだ、ねえ福島、どうだい、此のマッチ入はオッだらう、當り前さ、見た事のない筈だ、昨日フランスから歸つたばかりの人の土産さ、佛地でもまだ出來立ての珍品なんださうだ。

ト、兎角無駄話と持物いぢりに氣が入つて、稽古場で肝腎の稽古にトンと身の入らぬ辭。

## 臺詞の筋を言ふ辭

エッ、世話場での遣り取りの件だつて、違つてゐない意だ知な「に」ぢやアない「へ」だつて、むづかしいな、あんな書き雑りの、呂律の廻らねえ臺詞を宛がつて置きながら、一字違つたの二字違つたのと云はれちやア敵はねえ、そんな嚴しく云ふのなら、どつちを先へ言つても好いやうな、締まらない文句を書かないがいゝや、エ、宜い宜い、書拔をもう一遍さらひ直して、精々間違はないやうに致しませう。

ト、狂言方には云つて置いて、作者が苦心の利き臺詞など、一切おかまひなしに、似つこらしい自作の臺詞で用を足す辭。

## 拵へに迷ふ辭

昨日家の者が見ての話にも、お客様達の評判にも、あんまり着附が黒ッぽ過ぎるさうだ、それはモウ、考證家のお見立だから、故實には合つてゐるのだらうが、さう寫實寫實とばかりでも困るからね、此の反物かい、これも駄目だね、色目が惡いや、それは又變な模樣だね、もう少し何うにか氣の利いた物がありさうなものぢやアないか、そんな横段は前興業に着たばかりだよ、駄目だよ、何か捜して來て貰はう、二番目の八反だつて、何んだいありやア、丸で不見點の書生羽織だ、序にあいつも取替へて貰はう、帶だつて、仕方がなしに我慢してゐるんだ。

ト、外々の役との釣合などは關はず、あれにしようか、これにしようかと、二日目三日目あたりまで、衣裳屋を手古摺らす氣迷ひの辭。

## 註文澤山の辭

幾ら客が手を叩からうが怒鳴らうが、こんな道具で芝居が出來るものか、だから昨日、あれ程念を押して置いたのだ、此の下手の木は切出しではいけない、丸物にしてくれと、あんなに賴んで置いたものを、第一此の垣根は何んだい、註文より四五寸

も高いちやないか、早く切らしてくれ、用道具はいゝかい、茶香茶碗は三つ來てゐるだらうね、穢いのだよ、本當に世話を焼かすッちやありやアしない。

ト、唯さへ長い初日の幕の、明く先へ立つて、思ひ遣りもない註文、自分が急に模様替への駄目を出した事は、丸で忘れてゐるやうな、手前勝手のやかまし屋の癖。

## 舞臺に身の入らぬ癖

宮崎と根岸との此處の議論は實に長いな、しも、活版本でザッと一頁ぐらゐづゝあるんだからな、よくもよくも、濟度なしに書いたもんだ、こつちが口を出すまでには、大抵眠くなつてしまはア、ヤレヤレ方々で欠だ、御無理も御座いません、おれは此位の物識だと云ふ所を、文學者先生、一世一代に書き並べたんだからな、見物は倦るだらうよ、あのハイカラも參つたと見えて、チューイングガムを噛り始めたぜ、前列りに白粉を附けて、飛び模様の紋附で、さうだな、四十五六かナ、ア、アア、附けて貰つてゐながら、宮崎の奴、ウンウン詰まつてゐやがる、覺えてゐる振りなんかするから惡いや、と、そろそろこつちが臺詞を云ふ番か、イヤ實に御退屈様な役もあればあるもんだ。

ト、自分が心棒の役でゞもなければ、どうも舞臺に氣が乘らす、惡氣ではなく、種々の無駄事を、頭の中で考へる癖。

## 人の評判をする癖

何んだいあの狀は、幹部だの古老だのと、頭の禿だけはお立派だが、新作物と來ると、頭鍼の蛸もよろしくだ、木曾屋だの彥目那だのと、天下の名題を鳴らす心得てゐるやうな事を云つたつて、こなひだの仁木は、ありやア何んだい、旅の時の松王の不思議さ加減たんてものは、東京の客に見せたかつたよ、實物にしてゐる八郎兵衛だつて、江戶とも附かず大阪とも附かず、だがね、今度の所作の方がもつと珍さ、小倉の奴の六歌仙と來た日にやア、成ツちやゐないね、情輪の平次に賦つさしたやうな黑だけにでもして置きやア、先ア先ア勘辨のしてやりやうもあるけれど、文屋實は癪糖の中風れ、喜撰實は権坊主と來ちやア、檢舞臺が泣いてしまうテ、これに唄と囃子の捌さ加減、お手揃申し分なしだ、これでも見物や批評家は有難いものさ、大根だなひ大歌舞伎と來たね、鴫尾の奴もおれの親類だが、ア、舞臺の息と云ふものが、些とも分からねえんだからなア、おれの親父なんぞが生きてゐて、今の立者共を見たら、何んと云ふだらう、ア、ア、いやになつちまう。

ト、他人のする事は、何でも彼でも下手糞に見えて、とても默つてはゐられぬ癖。

# 芭蕉の南蠻紅毛趣味

小宮豐隆

南蠻紅毛に因みある古俳諧は、いろんな人達から、もう大抵は拾ひ悉された樣である。ただ不思議な事に、芭蕉のものには——特にその附句には——未だに殆んど誰も手をつけた人がない。是はどういふ理由から來るのか、私にはよくは分からないけれども、既に古俳諧の中から南蠻紅毛趣味の句を選り出して來る以上、芭蕉の（さうして芭蕉が一座した俳諧の卷の中の）句は、西鶴その他の談林の人達の句と同じ樣に、決して看過されてはならない筈のものである樣に、少くとも私には思はれる。殊に我我が、さういふ種類の句を通して、芭蕉の南蠻紅毛趣味の內容と、ひいては當時の南蠻紅毛趣味そのものに對する芭蕉の態度とでもいふ樣なものとを、假令朧げながらにでも、兎も角も髣髴する事が出來るとすれば、その提示と點檢とは、凡その南蠻紅毛ものに興味を持つ人と同時に（或はさういふ人よりも寧ろ）芭蕉の藝術に興味を持つ者にとつて、是非一度は着手して見なければならない、必要事であるとも言へさうである。南蠻紅毛趣味の方面には丸で知識のない私が、今此所で敢てそれを試みようとするのも、畢竟はこの必要の意識に基づくものであるに外ならない。

芭蕉の南蠻紅毛趣味は、今日までに知れてゐる限りでは、延寶四年（西曆一六七八）二月、素堂との兩吟の、『春納二百韻』（或は『江戶兩吟集』とも）の附句に、最も早く現はれてゐる樣である。その「半も初音」の卷の、三の表の十

二句目に

能因法師若集のとき　　桃青
照つけて色の黒きや佗つらん　　信章
わたもちのみいら眼前の月　　桃青

とあるのが、それである。芭蕉は此所で、砂漠の中にみいらがぽつねんところがつてゐるのに、ひたひたと月がさしてゐる光景を、我我に描いて見せてゐるのである。

——みいらといふ概念と言葉とが、元來いつ日本に渡つて來たものであるか、私は知らない。白石の『采覽異言』によると、元の陶九成の本の中に、木乃伊なる文字とそれに關する記述とが出てゐるとあるから、木乃伊といふ文字と木乃伊といふ概念とが日本に渡つて來たのは、或は南蠻紅毛の渡來よりも、もつと古い時代の事であるかも知れない。その上、木乃伊と書いて何故にみいらと訓むかに就いても、恐らくいろんな問題があつて、それを手繰つてゐる内には、或は、みいらと南蠻紅毛とは、到底喰つつき樣がなくなるといふ樣な、結果が出て來ないとも限られない。然し、さういふ問題は兎も角もとして、少くともみいらなる言葉と概念とが、南蠻紅毛の渡來とともに、日本人の頭の中に、よりリアルなものとして動き出したに違ひないといふ事丈は、充分想像され得る事の樣に思はれる。みいらは南蠻紅毛によつて、當時、一種の藥物として、日本に齎らされてゐたものの樣である。時代は少し後れるけれども、正德二年（一七一二）の序を持つた「倭漢三才圖會」には、阿蘭陀の部の「阿蘭陀土産」の中に、木乃伊の名前があげてある。享保七年（一七二二）に書かれた「むかし／＼物語」の中には、「昔は六七十年前みいらと云藥夥敷はやる……長崎屋などにて二十匁三十匁程に賣もあり赤坂のみいらは五匁三匁に賣る」とある。享保七年から六七十年前といへば、萬治（一六五八—一六六〇）の比にあたる。長崎屋といふのは、阿蘭陀の使節が泊る事になつてゐた長崎屋の事

を指すものに違ひない。即ち芭蕉のこの附句が出來る、十五年乃至五年前に、江戸では、恐らく長崎屋から賣り出した――換言すれば阿蘭陀を背景にして賣り出した――みいらの眞似をして、方方の藥屋から、それよりも廉く、みいらの藥を、盛に賣り出してゐるのである。

芭蕉は、自分の使つたみいらを、特に「わたもちのみいら」と斷つた。「わたもち」は必ず腸持ちであつて、恐らく是は、自分の言はうとするみいらが、藥のみいらではなく、本當の、人間の形を備へたみいらであるといふ事を、第三者にはつきりさせる爲の用意であるに違ひない。とすれば、芭蕉が此所に用ひてゐるみいらなる言葉は、時代的に見ても、また添へられた賓辭（アットリブート）の意味から見ても、その傳來の系統は兎も角、可也多分に南蠻紅毛の光を浴びてゐるものであると見る事に、恐らく誰も異論は挾まない。

當時の人達は、藥でない本物のみいらをどういふ姿（ビルト）として思料（コンシーウ）してゐたか、それと芭蕉の思料（コンシーウ）したみいらの姿（ビルト）とは何所が違ひ何所が合ふか、それとも二つのものは全然同じものであつたか。――さういふ問題を解決する爲には、私の持つてゐる材料は、甚だ貧弱である。然し、その貧弱な材料を通しても尙私には、當時の人達が思料（コンシーウ）してゐたみいらの姿の、凡そな所丈は、見當をつける事が出來る樣に思はれる。一口に言へば、彼等は、今日の我我と違つて、みいらを、凡て熱帶の砂漠の中にころがつてゐる、焦け死んだ人間の屍體として考へてゐた樣である。

延寶八年（一六八〇）の西鶴の『大矢數』第八十六貫何の追加の七句目には、「砂の岑木乃伊に月の照添て」といふ西鶴（この句は芭蕉の句と殆んど同じ事を言つてゐる。然もこの句が芭蕉の句よりも四年後れて出來てゐるといふ事は、この句の藝術的價値を半減する、然し暗合にしろ剽竊にしろ、大阪でこの句が存在を許されたといふ事は、大阪でも人人が當時みいらの姿をかういふ風に思料してゐたのだといふ事の、一つの明白な證明になる）の句がある。正德三年（一七一三）の序を持つた『采覽異言』の「アラビヤ」の部には、「此地出一種藥物。地名アラビヤデサル云是地極熱。暍死人肉。

焦爛而化。諸疾皆驗」と書いてゐる。島原の役の後に渡唐して、四十二年の間方方をうろついた揚句（凡そ天和の初比）日本に歸つて來たといふ、渡邊幸庵なる旗本の談話を、加賀の藩士が筆記して、是を松雲侯に上つたのだと言はれてゐる『渡邊幸庵對話』の中の、寶永六年（一七〇九）八月九日の條には、「ミイラは交趾と暹羅の間に三百里計の砂原あり此處往來は松木丸太船に乘り六尺計の小帆を懸け身は箕を著用すいかなれば風烈しく砂を吹懸る故也目計出して彼砂原を風にて走る也其節砂原に人の死骸の幾年か堅りたるを見付ては熊手の樣成物を兼て用意して打懸て引つり歸る也肌は干堅りても著用の木綿は其儘不朽故に是をミイラと云是を不慮に求得る事也夫故本ミイラは至て大切也あなたにても秘藏にする也其上人の形は死ては小く成事也まして干堅りたる故多くはあらず尤毎年有事にあらず往來の時自然に見付て求得る也時として日本へ渡るミイラは過半拵もの也是は火屋の柱に年々溜り申人油を取松脂の古きを以煉合する也人油故に是も功有」とある。

（幸庵がこの話をした時には、百二十八歳だつたさうである。しかし、いくら百二十八歳でも、幸庵は此所では、可也出鱈目を言つてゐる樣に思はれる。恐らく幸庵は、沙漠でミイラを見たのではあるまい。然し、幸庵が實際にミイラを見て來たものでなく、可い加減な噂を吐いたものであるとしても、この話の持つてゐる意義は變らない。寧ろ、それが作り噺であればあるほど、私には反つて役に立つものの樣にも考へられる。なぜなら、幸庵が潤色した部分とその潤色の方向とさへ見當がつけば、此所から我我は、割に樂に、當時の人達一般のみいらに關する知識をはじき出す事が出來るからである。——例へば、丸木船に乘つて砂漠を帆走るなどといふ事は、どうも出鱈目の樣である。箕を著て目計り出してあるいたり、熊手の樣なものでひつかけたりするといふのも、怪しい。然しミイラは向うでもさうさう澤山ある譯のものでないから、中中秘藏にするといふ樣な事は、それはまつたくその通りには違ひない。ただそれと同じ樣な事を、既に西鶴が『大矢數』で言つてゐる丈である。『大矢數』の第十四には、「木乃伊ゐは取は大事の花車」とある。——

―また例へば、日本に渡つて來る藥のみいらは、實は人油と松脂とを煉合せたものだといふ樣な、藥の種明しでも、今日でも用ゐでは藥は違ふがよく言はれる事である上に、「扨何樣の藥かと見るに何か藥種二三に松やにて煉たるやうなる藥なり」とデリケートに言つてゐる『むかし〳〵物語』の著者の言葉や、「猶是人肉藥物。煉和所成耳」と露骨に言つてゐる『采覽異言』の中の阿蘭陀人の言葉に比べて、それは別に大して違つた意見を述べてゐるものでもないのである。)

是等の記述を見てゐると、芭蕉は自分の句を作るに際して、みいらそのものの姿を、當時の誰彼が思料(コンシーヴ)してゐたと、殆んど同じ樣に思料(コンシーヴ)してゐたに違ひないといふ事が、自然に想像されて來る。然し、其所には唯一つ、著しい相違がある。それは芭蕉がみいらを、色が黑いと思料(コンシーヴ)してゐたといふ事である。芭蕉は、素堂の「照つけて色の黑きや」に對して、みいらを附けた。さうしてこの事は、――みいらが色が黑いといふ事は――白石にも幸庵にも西鶴にも西川にも、誰にも記述されてゐない所である。

みいらの色が黑いか黑くないかは、當時の人のみならず、今日の人といへども、恐らくは誰も知らない。然し熱帶の沙漠で太陽の光線に焦き殺されたものがみいらだと考へられてゐた以上、みいらの色は黑いと言はれたら、當時の人達は、なるほどそれはその通りに違ひないと思つたには違ひない。是は、一方から言へば、正に理窟である。然し、事實自分がさういふ姿を頭の中に持つてゐるのでなければ、(みいらと言はれて色が黑いといふ聯想を動かす事は優に可能ではあつても)「色の黑きや」と言はれて直ぐみいらといふ聯想が惹き出される事は殆んど不可能であるといふ意味で、理窟は同じ理窟でも、普通所謂理窟とは少少趣を異にする。即ちこの理窟は、假令その出發點は理窟ではあつても、今では既に一つの姿(ビルト)になつてゐる筈の理窟である。といふ事は、芭蕉が此所にみいらを置いたといふ事は、芭蕉が外の人達りも一層コンクリートにみいらの姿を描いてゐたといふ事を意味する。若し又それが、一層コンクリートにみいらの姿を描いてゐた證據にならないとすれば、それは芭蕉の聯想能力が異常に豐富であり又異常に活潑であつたといふ事の

證據になるのみである。

俳諧は、特に談林の俳諧は、人をあつと言はせる事をその眼目とする。要所要所は前句にちやんと附いてゐて、然も前句では到底豫想する事の出來なかつた、變化ある世界を附句で描寫して見せる――そこに、それぞれその內容は違ふが、古風談林蕉門を通じての、俳諧の眼目がある。その意味から言つて、この芭蕉の附句は、談林として充分成功してゐるものである。――「照つけて」はみいらででも受けてゐれば月ででも受けてゐる。「色の黑き」は無論みいらで受けてゐる。「色の黑きや佗つらん」は、みいらが月を眼前にして自分の色の黑い事を佗しく考へてゐるのだらうと想像する事によつて、みいらと眼前の月との結合で受けてゐる。かうして十重二十重に前句に絡みつきながら、この句が描き出して見せる世界は、能因法師の住む日本の世界ではなくて、卒然として、月皎皎と冴え亘るアラビアあたりの沙漠の眞ん中である。相手の素堂は無論の事、是は必ず當時の談林の徒を、あつと言はせたものであるに違ひない。

然もこの句は、一句立として見て、談林といふハンヂキャップなしに、普通の句として、可也の程度によく見る事の出來る可能性を、持つてゐる句だとも思ふ。此所には不思議な――グロテスクとでも言ひたい一種不思議な美しさがあるからである。後年の芭蕉の句を見ると、芭蕉はよく山の心だの月の心だのの中に這入つてゐる。芭蕉は此所では、ある怪奇な美しい光景を描くとともに、その怪奇な美しい光景の眞ん中に投り出されてゐるみいらの心持の中に、(假令その這入り方には寛文延寶の江戶の市民らしい色彩があるとしても)ある程度は這入つて行つてゐるのである。さうしてそれが、この句にある奧行を與へて、怪奇を一層怪奇なものにする。

同じ『兩吟二百韻』の「梅の風」の卷の、二の表の七句目には

王子の前やうちくたく覽　　桃青

傳聞唐のやうかんかすていら　　信章

といふのがある。この素堂の附句は、純粹に談林的なもので、談林を離れれば、いくら好意を持つてよく見ようとしても、到底よく見ようのない句である。その點では、前に觸れた芭蕉の句とは、大分趣を異にする句である。

——寶永五年（一七〇八）の冬に羅馬の宣教師シローテに會つて聽取した事を主材料にして書かれた、白石の『西洋紀聞』を見ると、その上卷に「またカステイラと申すはイタリヤなど聞えし地に近き國にてむかし其國にて作り出せし果子の此土に傳へしは今も候なる」と書いてある。また『三才圖會』には、「加須底羅」の條下に、「以西巴爾亞。保留土假留。加須底羅。同國の異名南蠻也。造法出於此。故名」と割註があつて、別項に「按加須底羅造法。每一升白沙糖二斤。用雞卵八個肉汁溲和。以銅鍋炭火。熬令黄色。用竹針爲竅孔。使火氣透於中。取出切用。最爲上品」と製法などを說明してゐる。素堂は凡そこの製法を知つてゐたから、玉子をうちくだくといふのにかすていらをつけ、玉子の前といふ玉藻の前のもじりと「うちくたく覽」のらんとに呼應して、謠曲もどきに傳へ聞くと劈頭に揭げ出して來たものと見える。

延寶六年（一六七八）の『江戶三吟』は、芭蕉と素堂と信德と三吟の三百韻である。その「いかのぼり」の卷の、初裏の十二句目と十三句目とには

夕間暮小風呂に流す水の月　　信德

木綿さらさの紅葉かたしく　　桃青

花に風荒木珍太をあたためて　　信章

といふのがある。

更紗に就いては、殊に更紗の名義に就いては、新村さんの『南蠻廣記』に精細な研究が載つてゐる。『三才圖會』によると、更紗は、華布とも書かれ遐羅染ともよばれて、「初出天竺遐羅。今出於中華者。爲唐華布。今本朝多炙用者。洗則華文易消耳」とある。此所の木綿さらさと普通所謂更紗とは同じものであるか、それとも違ふものであるか、それは私には、はつきりとは分からない。然し『通航一覽』の中の承應二年（一六五三）の阿蘭陀の獻上品目の中には、木綿紗羅陀島といふ名前が紗綾紗羅陀島といふ名前と並んで出てゐるさうだから、此所の木綿さらさは凡そ今日の印度更紗や瓜哇更紗の樣なものとして理解しても、大した間違はなささうに思はれる。芭蕉は此所で、月に對して紅葉を點出し、夕間暮に應じてかたしくと附ける。さうしてその紅葉を形容する爲に、瓜哇更紗の模樣と色彩とを援用してゐるのである。

素堂の附句は十三句目である。初裏の十三句目は、花の座になつてゐる。從つて此所では是が非でも花をよみ込まなければならない。然も前句までの三句にずうつと秋が續いて來てゐるから、リアルな花を此所に持ち出す爲には、リアルな花を持ち出して前句と矛盾の感を起させない樣にする爲には、或意味で非凡な力量を要する。素堂はそれを、花に風といふ樣な、具體とも抽象ともつかない、甚だ朦朧とした言葉で、朦朧と解決して、更に荒木珍太なるものを拉し來つて木綿さらさに對照させ、更にそれをあたためるといふ事によつて、紅葉をかたしくに呼應させた。是も談林の附合としては、まづ申分のない附合である。

荒木珍太といふのは、ごわ〳〵した木綿縞の着物を着た、田舍の劍客か何かの名前ででもありさうに思はれる。そこに素堂の得意とする所があつたのでもあらう。然し是は、人の名前でもなんでもなく、實は酒の名前である。珍太は、『三才圖會』にも同じ文字で出てゐて、或は珍陀酒とも書かれる、西班牙のチンタの事である。西班牙へ行くまでもなく、西班牙料理へ行きさへすれば、巴里で今日でも我我は、是を飲む事が出來る。荒木はアラキで、『三才圖會』の「燒酒」の條下には「阿剌吉酒」をあげ、別項に「阿蘭陀之阿剌吉酒。琉球及薩摩之泡盛酒。皆彼國燒酎。氣味甚辛烈。而

消痞抑積聚能防濕」と書いてある。又その咬𠺕吧（じやがたら）の部の「咬𠺕吧土產」の中には、阿刺吉酒の名前が出てゐる。マイエルの『百科辭典』にも、アラク若くはアラキは、瓜哇の產物だと書いてある。

即ち素堂は、ただ酒を嗜めるとしても可い所を、一つは前句のさらさの爲に、一つは人人をあつと言はせる爲に、アラキとチンタとを擔き出し、然もそれを荒木珍太と書き流す事によつて、二重に人をあつと言はせようとしたものである。――この荒木珍太が酒であつて外の何ものでもない事は あたためてがある事と前句にさらさがあり紅葉がある事とからも證明する事が出來るけれども、その次の「むねにつかえし霞ばれゆく」といふ信德の附句から、もつとよく證明する事が出來る樣である。さきに引用した『三才圖會』の說明の終に、アラキは痞へを消し積聚を抑へる效がある、とある。信德の「むねにつかえし」は、その點で前句の荒木に關係してゐるのである。

素堂のこの句と芭蕉の前句とを比較して見る。二つながら大したものでないには違ひないが、芭蕉のさらさの受とり方は、素堂のアラキやチンタの受とり方に比べて、割に內面的であると言へさうに思はれる。芭蕉の此所のさらさの使ひ方は、芭蕉が直接にさらさを見さうしてその美しさを實際に感じたに違ひないと想像させる所を、假令仄かではあつても、兎も角も持つてゐる。然るに素堂は、この前の例を見ても分かる樣に、カステイラと言ひアラキと言ひチンタと言つても、それに對する實感が丸でなくて、ただ言葉の響だけに興味を持つてゐるものとしか思はれない。素堂は、對象そのものの持つてゐる味、若くはその言葉の響が持つてゐる筈の異國情調なぞには丸でお構なしに、（若くは、さういふ方面を味つてゐるのだといふ事を第三者に示す事が出來ずに）、徹骨徹尾、寬文延寶の江戶の市民流に、若くは談林流に、外面的にさうして陽氣に活潑に、是等の言葉の上を滑走してゐるのみである。

同じ延寶六年の『江戶廣小路』には、芭蕉の發句十六と附句二十とが採錄されてゐる。その一つに

相場に立しよさの浦浪
紗綾りんすちやう島の子が玉手箱　桃青

といふのがある。

是は、前句のよさといふ言葉に與謝の外に、相場の方か何か商賣に關係のある言葉として、特別な意味がありさうに思はれるけれども、今の私には丸で見當がつかない。從つて今の私は、芭蕉のこの附句の紗綾綸子以下の織物の名前の前句への連絡を、「相場に立し」といふ部分だけにしか見出す事が出來ない。それだけの連絡でも無論差支はないのであるが、よさの今一つの意味がはつきりすれば、よさは紗綾綸子以下を更に適切に呼び出すものを持つてゐさうにも想像される。

今ひとまづ、よさに今一つの意味があり得るといふ想像を無視する事にして、與謝の浦の浦浪が立つたといふ事と相場に立つたといふ事と丈を一緒によんだものが前句であると假定すると、芭蕉のこの附句は、今も言つた樣に、「相場に立し」を「紗綾りんすちやう島」で受け、「よさの浦浪」を「ちやう島か子の玉手箱」で受け、更に（或は）「立し」を玉手箱の蓋を明けて白氣が立のぼつたといふ傳說的な事實を踏まへた事によつて受けてゐるといふ事になる。ちやう島（紗綾もりんずも日本に出來る、然し當時は支那あたりから渡つて來るものゝ方が上等とされてゐたらしいから、此所では或はこれらのものをも輸入品として扱つてゐるのかも知れない、さうしてその事は或はよさの意味で決定されるのかも知れない）は元より『三才圖會』が「按知也字西南外夷國名（是は新村さんによるとチヤウルといふ所なのださうである、寶永五年（一七〇八）の『華夷通商考』にもチヤウと出てゐて、「日本より三千八百り南天竺の內暖國也シヤムに近」と說明してある）出於此柳條絹。多縱筋小模樣。其地厚而滑美。來於阿蘭陀。又南京福建廣東之產。亦冊知也字柳條」と書いてゐる織物であつて、然も此所では浦島のもちりとして、第二の意味をも持たされてゐる言葉である。

この句の一句立としての身上は、ただこのもぢりにある。然もこのもぢりは、玉藻の前を王子の前ともぢるよりもつと気の利かない、又强ゐじみて亂暴なもぢりである。その亂暴な所に談林の談林たる所以のものが發揮されてゐると、見れば見られなくもないけれども、然し結局は愚劣な儀古に過ぎないと言つて可い。此所には、前に芭蕉と素堂とを區別した、對象から受けた實感の露出などといふものは、薬にしたくも見當らないで、ただ舶來物の名前を列べて、その名前の一つで輕業をして見せてゐるきりである。

同じ延寶六年の作と言はれる『芝肴』（俳書大系『芭蕉一代集』による、『俳諧書籍目錄』では天和元年の板とされてゐる）の中の「須磨の秋」の卷の、二の裏の五句目には

正　哉　勝　々　双　六　に　勝　　　似春
おもへらく輕板(カルタ)は釋迦の道也と　　　桃青

といふ句がある

南蠻紅毛傳來のカルタに關しては、古いところでは延寶六年（一六七八）の『色道大鏡』や貞享元年（一六八四）の『雍州府志』や元祿五年（一六九二）の『鹿の卷筆』やその他に斷片的な記述があり、近比では新村さんの『南蠻更紗』や尾佐竹猛さんの『賭博と掏摸の研究』の中に、精しい研究が載つてゐる。然し古い時分のカルタを見た事もない私には、それらのものに目を通して見ても、どうもよく分からない所が幾つもある。然し、ともかくも先輩の諸説を綜合して考へて見ると、芭蕉の此所の「輕板(カルタ)」（尾佐竹さんによると、ある時代にはカルタをかうも書いたのださうである）は後のめくり骨牌の方のカルタを意味するものらしい。めくり骨牌なるものは、一から十二までの札がそれぞれ四枚づつ、合計四十八枚あつて、その十の札の内の一枚が釋伽十と名づけられ、點數が五十になるとある。芭蕉の此所の

「釋迦」は、普通の意味の釋迦と釋伽十の意味の釋迦と、兩方に跨がせた用法に違ひないと思はれる。（『仙言集覽』を見ると、釋伽十の下に「カルタの書」と說明してある。『雍州府志』には「賀留多」の所に「凡賀留多有四種紋。一種各十二枚。通計四十八枚也」と記し、その四種の名前を、伊須、伊須波多、波宇、古津不、と呼ぶと言ひ、「第十番法師之形。是表佛形者也」と書いてある。この二つを併せ考へると、どの種の札であるかは分らないが、それらの佛形（是を坊主と言つてゐたらしい事は『大矢數』第三十七の附句から推定される）の畫の内の一つに、釋迦といふ名前を附けて、これを札の內の最高點としたものではないか。尾佐竹さんの引用された『博奕仕方』なるもののめくり骨牌に關する記述では、五十點（あるものは六十點になる）になるものは金泥で彩色されてゐるものが多く、札に描かれた模樣も、大波や海老や笹などをかいて、イスとかイスパダとかハウとかコップとかいふものの模樣とは丸で違つたものらしく、從つて延寶の時分のカルタとは少くとも繪が違つてゐる樣にも想像されるけれども、既に釋伽十といふ言葉があり、『大矢數』や『鹿の巻筆』などに出て來る馬といふ言葉もある以上、大體の打ち方に於いては、大差がなかつたものと見て差支なささうに思はれる。ただ『博奕仕方』の記述で類推するとなると、當時の釋迦や馬にも、或は何か特別な裝飾が施こされてゐたかも知れないといふ事になるのである。『雍州府志』には「第十一番騎馬人。是表士者也」とある『博奕仕方』には「十一之數にて馬高馬と唱金泥にて彩色數五十に相成申候」とあるとある。――特別の裝飾があつたかなかつたかは別問題として、佛形を表はす札の一枚が、當時、釋迦とよばれてゐた事丈は、恐らく間違ひはあるまい。もつとも『一葉集』が延寶七年（一六七九）と推定してゐる、芭蕉千春信德三吟の歌仙「わすれ草」の卷の、初裏の三句目「仇し世をかるたの釋迦の說れしは」といふ信德の句から推すと、カルタの札に當時釋迦もしくは釋迦らしい特別な繪がかかれてゐたのかも知れないとも思はれる。然し是も、佛形を表はす札の一枚が釋迦とよばれてゐたのだとすれば、何もこれに特別な裝飾がなくても、充分「かるたの釋迦」とは言へる筈でもある。）

此所でも、前のよさと同じ樣に、前句の「正哉勝々」といふ言葉に、その儘の意味でない意味が――やあ勝つた勝つたと勢ひ込んで喜ぶ心持を出す以外に、何か特別な意味がありさうにも思はれる。然し是も私にはよくは分からない

從つて私には、この芭蕉の句を、前句との照應（無論談林流に）からは、充分に味へない遺憾があるけれども　是は單に双六に對するものとして輕板を持ち出し　正哉勝々や双六に勝といふ言葉に對するものとして、諸行無常の釋迦の道を、若くは是程難有い可い道はないといふ意味での釋迦の道（次の「親仁の説法きけばきく程」の似春の解釋は正にこつちの方である。『鹿の巻筆』の中の『三人ろんが』には、カルタ好きの三郎兵衛が「かるたはばくちのだい一なり」と言はれて、「かるたもごしやうになるまじやそれかるたは人間のせいすいのもとされば佛法にいわんにはまづ四十八枚はみだの四十八ぐわんなり一より九までは四とをりにて四九三十六地の三十六ゐんをひやうし……」などと、カルタを佛法に引きつけて、滔滔とまくし立てる所から見ても、恐らく當時にはさういふ諺めくものが流行してゐたに違ひないと推測され、從つてさういふ考へ方の存在を背景に置けば、芭蕉のこの句は、無論後者の意味の釋迦の道として解釋すべきであるらしい、然し附味としては、榮枯盛衰諸行無常の釋迦の道として、負けた方の男が「おもへらく」と言つてゐるとした方が面白い樣である。それを次の句で、人から爪彈きされる博奕打の道樂息子の「おもへらく」に見立てたと見る方が、次の句も活きて來る。それでなければ、次の句に來てあまり變化がなさすぎると思ふ）を附けたと見ても、一句の價値には　大した相違が出て來ようとも思はれない。

（『雍州府志』には「其玩之法。其始三人或五人圍坐。其内一人。左手取持賀留多。以裹而上下混雜。不見其畫配分。而置各々之前。是謂切賀留多。其爲戲謂打賀留多。然後人々所得之札。數一二三次第。早拂盡所持之札。是爲勝。是謂讀。倭俗每事算之謂讀。又互所得之札。合其紋之同者。其紋無相同者。爲負。是謂合。言合其紋之義也」とある。『鹿の巻筆』には「三郎兵衛はかるたをすきてよみのあわせのかうなどといふ事のみ……」とか「よみのかるたは一枚のこりゝ

がられぬ事……」とかある。延寶の時分は何と言つてゐたか分からないけれども、やつぱり貞享元祿と同じ様によみとかあはせとか言つてゐたのではないかとも思ふ。もしさうだとすれば、芭蕉のこの句の打越には「錢の數兵嵩鳥よりも、讀初て」といふ句があるから、神經質に言へば、芭蕉は此所にカルタを出してはならない筈であつた。然し差合去嫌の七面倒な規則を無視する所にも談林の特徴はあつたのだから、假令此所にカルタを出す事が、掟の上からは遠慮すべきではあつても、當時の人達はそれを問題にするに値ひしない事と考へてゐたものかも知れない。また或は事によると、當時はまだよみとかあはせとかいふ、特別な名稱が出來てゐなかつたのだといふ事が、是で證明されないとも限らない。西鶴の『大矢數』には計へ加留多（第三十七）若くはかぞへ加留多（第九）といふ言葉はあるが、よみもあはせも、どうも見當らない樣である。）

この句は、一句立として見て、畢竟これだけの、然もなんとなく浮ついた感じの多い、下らない句の樣に思はれる。ただ附合として、然もその附方を、第一の方の意味にとるとすれば、後年の『猿蓑』の「さま〴〵に品かはりたる戀をして　凡兆」に「浮世の果は皆小町也　芭蕉」とつけた、あの附味に――前句に現はされた世界を、離れた所から全體として批評すると言つた樣な特別な附味（それが善い惡いは別問題として、芭蕉の後の附句にはこの型の附味が幾つも發見される）に通ずるものが、既に此所に見出される譯であつて、その意味では、注意に値する附合とも言ふ事が出來るのであるが、然しこの句そのものがどうにでもとれる以上、排他的にかうだと決定して了ふ譯にも行かない。

同じくカルタを取り扱つてゐるらしいものに、同じ延寶六年の『武藏下歌仙』（『芭蕉一代集』による）の第八、芭蕉春澄似春三吟の「江戸の秋」の卷の、二の表の十一句目に

古川のべにふたを見ましや　　春澄

「先爰にパウの二けんの杉高し」　似春

といふ句がある。が、是は「パウの二けんの」がどうも分からないので、なんとも解釋の下しやうがない。

このパウは恐らく『雍州府志』の「四種之紋」の内の一つの、波字に當り、前句のぶたと南蠻紅毛（新村さんの『異國俳趣記』によると、明和安永中出島の蘭館に十五夜の月を見て麥水が「いざたまへ家明月（フメイゲツ）と興ずべき」とよんだとある）で繋がるのではないか。もつとも尾佐竹さんの引用によると、『獨寢』や『加役書留』にぶたといふ言葉があつて、それは今日の二十一（ツウエンチーワン）のカルタ遊びに手札が二十二以上になつた樣な場合に適用される術語なのださうだから、若しこの言葉が延寶の時分にも存在してゐたとすれば、このぶたは勿論そのぶたと解釋されて、パウが出て來たものと見做す事も出來る。然し時代の所は、今のところ、私には到底判斷がつかない。

是も尾佐竹さんの引用された『博奕仕方』の中に、「貳之四枚の內……壹枚は青貳と唱青く彩色數五十に相成申候」とある。この句の「パウの二けん」は、その青貳と長さの二間とを一つにしたものではないか。もつとも『博奕仕方』の時代と延寶との間には、可也の時の隔りがある。從つて延寶の時分に青貳の定めがあつたかどうかは、充分疑問になり得る。然し、既に延寶に釋迦があり、馬がある所から推して、まづ青貳もあつたのだと假定すれば、『雍州府志』以後、パウは青色の義（パウは棍棒の義で青色の義でない事は、既に新村さんによつて正誤されてゐる。然し當時の人は、『雍州府志』の作者と同じ樣にパウは青色の義だと思ひ込んでゐたに違ひない）だとされて來た位だから、青貳をパウ二若くはパウの二と、言はなかつたとは斷言する事は出來まい。もつとも、さう解釋して見ても、「杉高し」のその杉の高さが二間であるといふのも、少少刻み過ぎる樣で、何となく落つきかねる。然し此所のパウがカルタに關係ある言葉であるに違ひない事は、次の芭蕉の「日待に來たか山郭鳥」といふ句からも、割にはつきり推定されさうである。カルタだから日待が出て來るのである、さうして、杉高しだから山郭公なのである。

『武藏十歌仙』の第九、同じく三吟の「旅させる」の卷の、初裏の二句目に

　　淀鳥羽も鐘のかげに見えたりや　　似　春

　　やよ郭公天帝のさた　　桃　青

といふ句がある。是は、言葉の連接工合で、どうも意味がはつきりしない。

「やよ郭公」だから、作者が郭公に呼び懸けてゐる事丈は確である。然し「天帝（ダイウス）のさた」を聞かして呉れといふのであるか、それとも「天帝（ダイウス）のさた」で來り「天帝（ダイ）のさた」をしたりするのはけしからんといふのであるか、是に附けた芭蕉の「爲ぬ不受不施だにも置ぬ世に」から考へて見ると、少くとも芭蕉は第三のけしからんといふ意味にこの句を解釋してゐるものらしくも思はれる。然し結局はどういふのか、はつきりとは分からない。ただこの句が、淀鳥羽に對して郭公を附け、「淀鳥羽も鐘のかげに見える」といふ事に、阿蘭陀渡りの硝子の鐘や遠眼鏡や幻燈や恐らくは又浮玻璃の鏡などの聯想から、「天帝（ダイウス）」や「天帝（ダイウス）のさた」を附けたものである事は、疑ひがない。「天帝（ダイウス）」がデウスの日本訛りである事は、言ふまでもない事であらう。

同じ『武藏十歌仙』の第十、同じく三吟の「都鳥」の卷の、初裏の第一句目には

　　南ろ吹出す山の秋風　　似　春

　　ふらすこの見えすく空に霧晴て　　桃　青

といふ句がある。

ふらすこに就いては、例の『三才圖會』の「硝子（びいどろ）」の條に、「自阿蘭陀來。琵瑠璃色方缶也。盛酒久不味變。盛油久不砂糖（布羅須古者缶之邦語也）本蠻阿蘭吉珍太等酒之缶也。如此器者倭未能之」と書いてある。今日でも北九州の田舍には、同じ言

葉が存在してゐて、大抵の硝子瓶をフラスコと言ひ、それは又主として酒を盛り時として酒の燗にも用ひられる。當時でもふらすこが主として酒器として用ひられてゐたらしい事は、『鹽尻』卷之四十一（正徳）に「佛來擦古は西番の波羅多伽兒國の人名にあり酒器のフラスコも此字なる歟」と書かれてゐる事からも、自然に推測される事である。もつとも次の春澄の「油なに〳〵雲ぞなだるゝ」の句を見ると、春澄は此所のふらすこを、油を入れるふらすこと見立ててゐる。すると、『三才圖會』の説明にもある通り、油を入れる器としてのふらすこも、當時の人達にとつては、それほど親しくないものではなかつたには違ひない、といふ事が推測される。然し、それならば、當時は可也貴重であつた筈の、そのふらすこに入れる油は、一體どんな油であつたか、又さういふふらすこはどんな形をしてゐたか、などといふ問題が起つて來るが、それは今の私にはまだはつきりしてゐない。ただ白石の『西洋紀聞』の下卷に添えた『羅馬人欵狀』の、シローテの所持品目の中に、「一　ふらすこに入候油　但壹箱に入小ふらすこ三ツに入置候」とあり、それに「此油異國人に相尋候處宗門之者大切成時爲呑申候油之由候」と注してある所から推して、さういふふらすこは形が小さくバルサムの類を入れたものだらう位に想像する計りである。

然し芭蕉が此所で使つたふらすこは、何も必ずしも酒を入れ油を入れるといふ様にその用途を限る必要のない、唯硝子製の、『三才圖會』の言葉を借りれば「碧瑠璃色」の、ふらすこそのものでさへあれば、形の大小さへ問題にならないふらすこである様に見える。前句に「高う吹出す」とある。芭蕉は或はふらすこの製法を聞き知つてゐて、その「高う吹き出す」からふらすこを聯想したのかも知れない。又「高う吹き出す」の高うは「ふらすこの見えすく空」の空にも關係する。「吹出す山の秋風」は「空に霧晴て」と照應を持つ。さうして芭蕉は「ふらすこの見えすく空」といふ言葉によつて、澄み切つた空は勿論の事、その空の色の碧さをも暗示しようとしたのではないかとも思はれる。

是も要するに、前句に旨く關係をつけて、然も思ひも寄らない事物の取り合せから、人をあつと言はせようとした、

談林一流の附句である事は爭はれない。然し此所で興味がある事は、「ふらすこの見えすく」といふ言葉を、「木綿さらさ」の場合と同じ樣に、空といふ言葉の枕詞めかしく使つてゐる事（是は何も必ずしも芭蕉のみに限られた事ではないが）と、然もその使ひ方が或意味で芭蕉の實感を――ふらすこをかういふ風に使ふ爲には芭蕉は少くとも一度はふらすこを透かして空を見た經驗があつた筈だといふ意味で――豫想させるといふ事である。

私が求め得た限りでは、例へば蕃椒や煙管や豕や西瓜や、さういふものを數へ上げて來ない限り、芭蕉の南蠻紅毛趣味は、是で盡きる樣に思はれる。換言すれば、今日までの文獻に現はれた芭蕉の南蠻趣味は、延寶四年から始まつて延寶七年（「阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍」を載せた『江戸蛇の鮓』は延寶七年の板である。歌仙「わすれ草」の卷を『一葉集』の編者が延寶七年と推定してゐる事は既に言つた）に終つてゐるのである。勿論その前後の一二年には、まだ私の眼の屆かない所で、それが藏されてゐないとは限られない。然し、少くとも延寶九年（天和元年、一六八一）以後の芭蕉自身の俳諧からは、所謂南蠻紅毛趣味は、全然姿を消して了つたと言ひ切つて了つても可い樣である。――從つて「かぴたんもつくばはせけり君が春」の句も、若し芭蕉の句であるとすれば（是は『芭蕉句解參考』と『一葉集』とに出てゐるのみで、まだ古い句集の中からは發見されてゐない）、當然この時期に編入されべきものであり、「雪の日や羅紗の羽折にたゝき鞘」の句（是も同樣に今のところ『一葉集』に載つてゐるのみである）も、若し芭蕉の句である事が明らかになれば、亦當然この時期に編入されべきものであると思はれる。

この事は――芭蕉の南蠻紅毛趣味が延寶四年前後に現はれて延寶七年前後に消えたといふ事は――抑何を意味するか。

南蠻紅毛趣味は、貞門の俳諧に於ても、可也な程度に發揮されてゐる。然し南蠻紅毛趣味を最も盛に發揮し、また是を最も弘く流布させたものは、寧ろ貞門を倒して起つた、談林の俳諧である。京の高政は伴天連高政とよばれた、大阪の西鶴は阿蘭陀西鶴と號した。延寶六年の『三鐵輪』の序では、西鶴は、「阿蘭陀流といへる俳諧は其姿すくれてけたかく心ふかく詞新しくよき所を今世間に是を聞覺えて……」とさへも言つて、阿蘭陀流の俳諧を鼓吹してゐる。

芭蕉が江戸に出て來たのは、寛文十二年（一六七二）の事だとなつてゐる。さうして田代松意が江戸に西山宗因を迎へて談林の百韵を興行し、次で『談林十百韵』を出板して、大に談林勃興の氣運に刺激を與へたのは、それより三年後の、延寶三年（一六七五）の事である。

芭蕉が寛文十二年江戸に出て來る前、その正月に郷國伊賀上野の天滿宮に奉納したものだと言はれる『貝おほひ』の中には、既に純粹に貞門でないもの（換言すれば談林めくもの）が可也多分に動いてゐる。從つて芭蕉の談林への改宗をはつきりいつと定める事は非常に困難な事である。然し芭蕉の改宗に決定的に誘ひ懸けたものは、江戸の俳壇の空氣とその空氣を代表する急先鋒としての『談林十百韵』とでなければならない以上、芭蕉の改宗は、少くとも芭蕉が江戸に出て來て、さうして『談林十百韵』が出た後でなければならないと見る事が最も合理的な見方だらうと思はれる。然も『談林十百韵』の奥附には「延寶三卯十一月吉日」（俳書大系『談林俳諧集』による）とある。さうして洒竹文庫本の『奉納二百韻』には稚彥の書入れとして、「延寶四年春二月」（是が興行年月を意味するものか出板年月を意味するものかは分からない、若し是が出板年月だとすれば、興行はもつと前になる筈である）とある。さうして『奉納二百韻』は、既に純然たる談林の俳諧である。といふ事は、『奉納二百韻』は恐らく、芭蕉が談林へ改宗した事の最初の確證になるものであり、然もその最初の確證の中に、また芭蕉の南蠻紅毛趣味の最初の現はれがあるといふ事、換言すれば、芭

蕉の南蠻趣味の出現は、芭蕉の歴然たる談林改宗の最初の證據と時を同じうするといふ事を意味する。

芭蕉がいつ談林を出たかを精密にはじき出すのは、芭蕉がいつ談林に這入つたかを精密にはじき出すのと、同樣に困難である。然し信徳の『七百五十韻』が出て、それに刺戟されて芭蕉の『次韻』が生れ、さうしてその『次韻』が芭蕉の純然たる蕉風への第一歩——若くは談林からの意識的な擺脫の第一歩——を示す（『次韻』を蕉風開基の第一歩と見る事は、既に去來も許六も述べてゐる、私も同意見である。然しその理由に就いては、『貝おほひ』に於ける芭蕉の態度の動揺に關する考察とともに、他日の機會に觸れる事にしたいと思ふ）ものである以上、『七百五十韻』や『次韻』の出現前後を以つて、芭蕉の談林時代が終るものと見做す事には、恐らく何人も異議を挾まない。さうして『七百五十韻』の出板は延寶九年（一六八一）の事であり、『次韻』の上梓も亦同年の事である。さうして芭蕉の南蠻紅毛趣味は凡そ延寶七年で終つてゐるのである。即ち芭蕉の南蠻紅毛趣味の消失は、芭蕉の談林からの擺脫と凡その時を同じうすると言つて可いといふ事になる。

（延寶八年の芭蕉の作とはつきり分かつてゐるものには、其角の『田舍句合』の判と嵐雪の『常盤屋之句合』の判とがある。判はもとより俳諧とは違つた氣分から生れるものである。從つて、此所に南蠻紅毛趣味が些しも出てゐないといふ事が、必ずしも同年の俳諧にもそれが出てゐないといふ事の證據にはならない。然し此所で特に著しく支配し始めてゐる莊子と唐宋詩との氣分は、芭蕉の第二轉向後の或時期——延寶末から天和を經て貞享の初めへかけて——を著しく彩どつてゐる氣分である。この氣分と芭蕉が談林を擺脫する事との間には、恐らく非常に重大な關係がある。從つてまたこの氣分の支配は、南蠻紅毛趣味の消失とも恐らく充分密接に關聯する。外の言葉で言へば、延寶八年は——少くとも延寶八年の句合の判は、『次韻』よりももう一年前の『次韻』であり、從つて芭蕉の南蠻紅毛趣味の消失だとまでは斷言出來ないにしても、必ずその減退期であつたに違ひないとは、言つてもよささうに思はれる）。

から言へば、私は、芭蕉の南蠻紅毛趣味を、芭蕉の談林時代の、唯一無二の象徴として見ようとしてゐる者の樣に、人からは見られるかも知れない。然しそれは誤解である。若しさういふ言葉を使ふとすれば、私は、芭蕉の南蠻紅毛趣味を、談林の芭蕉の一つの徴候として見ようとする者に外ならない。

談林は貞門の古びを打破する爲に起つた。談林は今までの美の標準を覆へして了つた。さうしてどんなものでも自由に俳諧の中によみ込まうとした。古びに對する新しみの要求である。從つて談林は、なんでも新しくさへあれば、その新しいといふ事の故に美があると考へた。そこから新しみに對する病的な探求が始つた。その一つの現はれが、貞門よりももつと極端な、南蠻紅毛に因みある、特別な言葉の驅使である。最も是を趣味と名づけて可いかどうかは疑問である。なぜなら彼等は、その言葉を通して異邦の珍奇な世界が持つてゐる筈の情趣を味ふといふのではなくて、唯言葉そのものが新しいから、事物そのものが珍らしいから、その新しいといふ事珍らしいといふ事それ自身を喜んでゐたに過ぎないのだから。(その點から言へば、談林も貞門も、少しの相違もない。相違は言葉を澤山使つたか使はなかつたかのみである。或意味から云ふと、貞門の或者の方がより多く情趣は味つてゐたかも知れない)。さうして芭蕉の南蠻紅毛趣味も、同程度の趣味に過ぎなかつたのである。

然し後年の芭蕉は、無限に高いものを目標として、絶えず自分と自分の藝術とに就いて、反省する事を忘れなかつた人であつた。さういふ芭蕉にとつて、假令いくら芭蕉が若かつたからと言つて、よろづ外面的な談林と談林の南蠻紅毛趣味とが、いつまでもその缺陥を暴露せずに置く筈がない。芭蕉の南蠻紅毛趣味の句には、まま、後年の芭蕉を豫言す

る様な、實感から出立して一つの世界を纏め上げるといふ態度が見えないでもないけれども、然し反省する芭蕉から見たら、もつと内面的なものにならない限りは、結句その南蠻紅毛趣味は、全體として、本當な詩を形成くる所以のものたるに足りないと思はれて來たに違ひない。それを内面的なものにする爲めには、もつとその對象の中に深入りしなくてはならない。深入りするとすれば、もつとその對象を愛しなければならない。然も芭蕉にはその對象を愛する氣になれたかどうかからが問題である。從つて芭蕉は、南蠻紅毛に因みあるものでも、自分達の生活とより密接であり、自分達にも充分それを味ふ事の出來る様なもの——換言すれば既に充分日本化されさうして日本的に親しみの持てる様な、南蠻紅毛のものを詩材として採り容れる以外は、全然南蠻紅毛趣味から離れて了つた。是を美意識といふ方面から見れば、後年の芭蕉を支配した美意識が、延寶八九年の比には、既に芭蕉の中に可也はつきりした貌をとつて來て、今まで出鱈目であり亂雜であつた美と不美とが、截然と區別され始め、南蠻紅毛趣味はその一つとして、不美として捨てられたと云ふ事になるのである。

# 文藝時評

菊池寛

## 文藝の大正時代

日本の文壇は、他の學問文化等に比べて歐洲のそれに追隨するのに、四半世紀だけ遲れたやうである。

學問文化は、維新と同時にすぐ外國のそれを移植し、明治四十年の交には、學問文物に於て歐米のそれと、何等變るところなき進歩を示してゐた。

これに反して、文藝は完全に四半世紀だけ遲くれてゐる。明治二十五年頃の日本文壇は全然、歐洲のそれと隔離してゐる。明治三十年頃より漸く接觸を始め、四十年の交に於て、始めて完全なる文藝上の維新が來たと云つてもいゝ。即ち自然主義の移植である。自然主義は、歐洲に於ては、十九世紀末葉の流行であるから、移植したとは云へ、猶二三十年は遲くれてゐたのである。だが、その後十數年の間に、わが文壇は過去に於ける歐洲文壇のあらゆる主義作者を、取り入れいつの間にか、完全に歩調を一にしたばかりでなく、文藝の隆昌に於ては、世界第一と云つてもいゝやうな現狀に達したのである。

從つて、文學史的に云へば明治四十年前の日本文學は、啓蒙時代であつて、四十年以後大正時代の壯觀に比して、到底比較し得べくもないものだらう。

文學的に云つて、大正時代の日本ほど、外國のあらゆる主義作家を貪り味つた時代はないだらう。米國があらゆる民

族を入れる大坩堝である如く、日本はあらゆる海外文學を入れる大坩堝であつた。日本ほど、敏感に素早く、かつ貪るやうにロシア文學を取り入れた國はないだらう、否北歐文學、英文學佛文學を取り入れた國はないだらう。ストリンドベリイ、イブセン、トルストイなどをこんなにまで完全に、咀嚼した國はないだらう。日本ほど、感受性に富んだ文學青年の多い國は、世界に絶無だらうと思ふ。曾つて、ゴルドン・クレイグの著書に外國に翻譯されたる順序を印刷してあるのを見たが、日本は八個國中第二番であつた。あらゆる新しい外國の文藝書についても、日本は翻譯することに於て第一番第二番だつたに違ひない。國語が飛び放れて了つてゐるために、著作權の侵害を訴へられないのを奇貨とし、いかに無斷であらゆる外國の文學作品を翻譯したことぞ。統計に依らなければ、正確なことは云へないが、日本位外國文學の翻譯の多い國にないと云つてもよいだらう。

さうした外國文學の受用は、日本文學をして、急速に進步發達せしめたと云つてもよい。しかも、外國文學の影響を受けると同時に、日本文學の傳統も、かうした影響に依つて、すぐ消されてしまふやうに脆弱なものではない。日本文壇が、日本乃至東洋の傳統の上に立つて外國文學の影響を受け、一種特異な發達をしてしまつたのは當然である。

現在の日本文學は、外國のそれに比して、優にその特異な位置を誇り得るものだと思ふ。

日本の醫學が外國のそれと何等遜色のないものであることに、何人も信じて疑はないところである。日本の軍事、學問文物が外國のそれに何等遜色のないことは何人もが信じてゐるところである。たゞ、文學が外國のそれに比し、何等遜色のないものであることを信ずる人の少ないのは甚だ遺憾である。

文學が、他の學問のやうに研究の報告ですぐ比較が出來たり、テニスや水泳のやうに競技が出來るものなら、日本文學の優越性は、大正五六年頃から既に外國に着いてゐると思ふ。

大正時代の文學は、日本の多くの作家が外國文學のあらゆる影響を受けて、その個性を發揮したことに於て文學史的

に云つても、恐らく異色ある時代であらう。維新時代が、文化史上千載一遇であつた如く、大正時代は文藝史上千載一遇の時代であつたと云つてもよい。何世紀間も蓄積されてゐた新鮮な歐洲文藝が束になつて、移植され、それから影響を受けるやうな幸福は、大正時代の作家のみが受けた幸運であつた。多少とも作家的素質があれば、かうしたありがたい幸運に際會すれば、相當な作品が書けるのは當然である。今後五十年や百年の間には、かうした重大な影響を受くるやうな時代は容易にないだらうと思ふ。

日本文學は前に云つたやうに、外國文學の影響を受けながら、しかも特異な發達をしてゐると思ふ。殊に作家の心境的發達に至つては到底、外國文學の及ばざるところであらう。古來の東洋的人生觀が、自然主義に依つて影響され、特異の人生觀、別種の生活態度として文藝に現はれてゐる。そして最後に心境小說なる名稱をさへ生むに至つた。それは、日本人は想像に乏しく、描寫に拙であるために、自然に、心境を磨く外はなかつたのであらう。たゞその弊として、たゞさうした心境的記錄を描き出すことを小說と稱するが如き、畸形的現象をさへ產むに至つた。元來日本人は、發句と云ひ、短歌と云ひ、個人の心境を見詰めることに長じた人間であるが、創作本位の小說までが、さうした主觀的部分を重んずるは、特異な點であると共に一個の邪道と云へるかも知れない。

さもあらばあれ、日本文學の達したある心境的高さは、外國文學などに到底見られない特異な發達であらう。さうして、かうした優越性は日本語の難解と相俟つて、世界的には容易に認められがたき優越性であるが。

## 文藝と社會意識

社會意識がないと云ふことは、現在の所謂ブルジョア文學に對する唯一の非難であるらしい。しかし、社會意識など云ふものが、文學的に云つてどれだけの價値があるだらう。今こそ、プロレタリヤが擡頭するにつれ、さうした非難を

我々に下してゐるが、これで日本にファスチシズムでも起れば、我々はまた民族意識がないとか國家意識がないとか云つて非難されるに違ひない。

社會意識など云ふものは、目下の社會にとつていかに重要なものであれ、民族意識國家意識などと同じ程度に、文學については無關係のものである。文學の上に現はれてもよければ、現はれなくても一向差支のないものである。

だが、社會意識を文學に現はさないからと云つて、我々所謂ブルジョア文學者に社會意識がないと云ふのではない。現代に生活してゐる以上、鈍感で馬鹿でない以上、資本主義制度の不正と、プロレタリヤ階級の當然なる擡頭を信じないものがあるだらうか。我々は、そんな意識位は、プロレタリヤ文學者と同程度に持つてゐるつもりだ。たゞ、何故にそれを作品の上に、出さないかと云へば、あまりに分り切つたことであり、文學的に多くの價値がないと思ふからだ。

資本家の不正を鳴らし、プロレタリヤの慘苦を描き、社會改造の必要を叫ぶことなどは、あまりに分り切つた大道だ。文學の道から云つてはあまりに、もつともすぎるのだ。文學上の題材は、そんな分り切つたところには存在しなくなるのだ。分り切つたことを更によく分るやうに描くのは、宣傳であつて文學ではなくなるのだ。

社會意識で物を觀るごとき、文學的に取つては、今や既に the old story である。我々が、正月號の藤森氏の社會劇を讀んで感ずる堪えがたき古さが、之れである。

社會主義的に階級が發見されたと同時に、文學にも階級が發見されたのだ。そのときにこそ、プロレタリヤ文藝は新鮮であり、題材の上から云つても新奇であり得た。

現在のプロレタリヤ文藝などその構想、その意圖、その觀照の上に於て、マンネリズムそのものである。

プロレタリヤの勃興につれて、プロレタリヤ文藝は、盛んになるに違ひない。しかし、現在のまゝでは、御用文學として、盛んになるだけであらう。眞のプロレタリヤ文藝は、現在のプロレタリヤ文學論などが、亡んだ後で、新興プロ

レタリヤに依つて、初て盛んになるだらうと思ふ。

## 書かなくてもよい作品

新年號の諸家の作品を見て、あまりにその人にとつて書かなくてもよい作品の多いのに驚いた。たゞ原稿料と編輯者への義理以外とには書く必要の少しもない作品があまり多すぎるやうである。

これは、第一に現在のジヤアナリズムの罪であらう、第二に作家の生活が不安定で、年末などにはぜひとも書かなければならないせいいだらう。

自分は、此頃つくづく感ずることであるが、作家が同じ題材と同じ觀方で、いくども〳〵書くことは、雁次郎が「梅忠」を左團次が「鳥邊山心中」を、幾く度も〳〵やるやうに、藝術的に云つては、不甲斐のないことではないかと思つてゐる。氣概のある畫家は、同じ畫因（モーチヴ）の繪を、一枚以上は決して書かないやうに、創作家も同じやうな作因の小説を三つ四つも描くことは、何うであらう。

同じ人生觀、同じ觀方、同じやうな題材で幾度も描いても相當の出來榮えを見せる作家が多い。然し、それはその人の藝であつて、雁次郎の藝左團次の藝と同じ程度のものであつて、ほんとうにその人の心から出た藝術とは云ひ得ないだらう。同じ、人生觀、同じ觀方、同じ題材では、小説はたゞ一つ描けばいゝのではないか。三つも四つも、乃至は十も二十も同じやうな小説を描くのは、畫家が帝展に入選した作品と同じやうな繪をいくつも描いて畫屋に賣つてゐるのも同じではない。外國の例を考へても、創作家が日本の作家のごとく似たり依つたりの作品を四つも五つも描いてゐる國があるだらうか。

我々は、俳優が同じ狂言を幾度もやるのを非難出來ないと思ふ。然し、作家の生活が現在の如く不安定である以上、

何かか書いてゐなければならず、仕方なく同じやうな作品をいくつも描くのであらう。しかし、理想を云へば、作家は新しい作因を得るに非ざれば創作しないでゐたいと思ふ。でなければ、畫家が帝展へ出す作品と書畫屋へ賣る作品を區別するやうに、我々も亦眞の創作動機から描いたものと、それの不足を他の不純なもので補つた作品との區別を、ハッキリつけたいと思ふ。

新年號の創作を見てゐると、あまりに書かなくてもよい作品が多すぎる。あれでは、常に帝展を見るつもりでゐる讀者には可なり氣の毒であると思ふ。

## 新年號の戲曲

▽里見氏の「紐」（女性）里見君のかいたいくつかの戲曲の中では、好ましいものである。かうした些細な事柄に、人間がみんな眞劍になつてゐる姿が、ユーモアを漂はしてうれしいと思ふ。氏のまごゝろ主義が、人生の重大事に現はれてゐるときは、あるイヤ味を感ずる自分も、かうした些細な事件だけに、愛嬌を感ずる。プロットの奇拔と、情景を描き出した手腕とは敬服である。たゞ田舍の老婆の描き方は下手だし、幕切に娘を手ばなしに泣かせたのも、作者の肚を見せすぎていけない。

▽久保田万太郎氏の「大寺學校」（女性）明治の末年頃まであつた個人經營の小學校のしがない有樣を描き出して面白いと思つた。殊に、自分は水天宮の近所にあつた大寺學校類似の山崎學校の有樣を、そこの卒業生の一人から、きいてゐたので、さらに感懷が深かつた。普通の規則的な學校には通ひ得ない藝者家の子女だとか、料理屋の子女とか、さうした不規則な放縱な家の子女を收容して、父兄から寄附を受けながらやつて行く情實本位の小學校の亡びゆく前の姿が、面白いと思つた。

これに比べると、同氏の中央公論にかいた「夜狼」は、氏のものとして、新味もなければ非戯曲的で、舊式で氏としては、むしろ書かなかつた方がよいものではなかつたかと思ふ。

▽關口次郎氏の「眞夜中」（女性）は、いろいろな事件を重ねて行つて眞夜中の空氣を出さうとしたものらしいが、成功の作ではない。自分は、狂女を出す芝居はきらひだ。だから坪内さんの芝居は嫌なのだ。狂女を出して、あるへンな効果を出さうとするのは、日本の能狂言と同じ位に古いと思ふ。

▽正宗白鳥氏の「勝敗」（中央公論）何が勝つて、何が負けたのか自分には分らない。事件も人物も、古くさくしかも通俗的である。たゞ、それを救つてゐるのは、氏一流の熟技巧傑手腕である。即ち、女主人公の姿をヘンな風にこはして見せたり、田舎の妙な兄貴を點出したりする點だけである。

▽岸田國士氏の「温室の前」（中央公論）「驟雨」や、屋上庭園」などでは、殆ど感心出來なかつたが、此の作は氏としては作作だらう。内容的にも氏の從來の作品よりも、もつと深さが加つてゐるやうに思はれる。いつものやうに饒舌でないのもよい。殊に、最後の幕を、ちつと抑へてしまつてゐるのは、氣に入つた。氏は、言葉の色、調子、意義を大切にする人である。だが　今後の氏がその言葉の奥にあるものを、もつと掘り下げて行くことを望むのは、自分だけではないだらう。

▽藤森成吉の「何が彼女をさうさせたか」（改造）自分は、藤森氏の前作には、相當感心したものであるが、此の作品には少しあきれた。社會劇と云ふ看板さへ出せば、こんな馬鹿々々しいものでもかいてよいのだらうか。どの臺詞も、どの事件も凡てこしらへものではないか。この位の社會劇なら新聞の三面を讀んだ丈でも、いくつでもつくれると思ふ。社會意識があれば、こんな古くさい戯曲でも、戯曲として通用するのだらうか。

ついでに言つて置くが、大抵の戯曲家の作品が頻々と上演される現代に、久保田氏の作品丈が殆ど上演される機會のないのは氏のために、氣の毒であると思ふ。東京語を正確に話し得る俳優のないことも、その重大な原因らしいが、しかしその困難だけで、氏の戯曲の上演が阻まれてゐることは不當だ思ふ。

# 軍港行進曲

宇野浩二

## 一

汽車がトンネルを出ると、突然目の下に、山ふところに抱かれた灣が現れた。淵のやうな色をした水の上には、灰色の砲艦とか水雷艇とかいつた風な、小型の軍艦が浮かんでゐる。山と海岸の間の僅な空地には、マチ箱のやうな、白い建物があちこちに並んでゐる。それから、水の上に一臺、遙かに目の眩むやうな光つた夏空に一臺、飛行機が浮かんでゐる。一臺は休息してゐるやうに水の上に浮かんでゐるのだが、一臺は空を飛んでゐるのだ。未だ飛行機の幼稚な時代で、つひ先達ても何處かで墜落したとか、乘手が一人死に、一人は重傷したとかいふ新聞記事が出てゐた頃だつた。

「追濱です。」

私たちの向側の、わざと少し離れた座席に坐つてゐた、八字髭を生やした大男の桂庵がいつた。

「これが逗……？」といひながら、私は連の女の、そして私自身の、氣を引立てる爲に、多少附け元氣も手傳つてゞあるが、それ以上に、初めて見る異様な、珍しい海と港の景色を見ようとして、腰を浮かす間もなく、汽車は又別のトンネルの暗に吸ひ込まれてしまつた。が、暗の中でも、しばらく今見た目の眩む油畫のやうな景色が目の中に殘つた。

この汽車の沿線は、彼女には無論、私にも初めての道中だつた。私はその二三年前、友人と逗子まで來たことがあつた。が、逗子から先と、逗子から此方とでは、窓の外の風景は著しく變つてゐる。景色が變つてゐる上に、未知の土地に踏み込まうとする不安と驚怖とを私たちの心臓はそれ〴〵違つた意味で期待してゐた。次のトンネルを出ると、汽車は小さな停車場に止まつた。私たちが腰かけたまゝで、首だけ延ばすやうにして、窓の外の立札を見ようとすると、

「この次です、」と向うの席から無口な桂庵がいつた。

二等車の中は殆どがら空きで、所々に黒い地味な洋服を着た人が、大抵腕組みをして、行儀よく腰かけてゐた。逗子から先は主にさういふ人たちばかりが殘り、さういふ人たちだけが乗込んで來た。彼等は顔を見合はすと、無言で擧手の敬禮をし合つた。目立たない短劍を腰に下げてゐる。

「明日からはこいつ等が一夜男か」と私は咄嗟にかう思ふと、彼等に敵意が感じられた。

私は並んで腰かけてゐる女の方を、恐わ恐わちらと見ると、不斷から青白い顔が一層青白く見え、昨日まであんなに事々にヒステリイを起して自分を困らした女だが、大人しくしてゐると、ひどくしよんぼりとつゝましやかに見えた。一段になつた、形のよい高い鼻は、上品ではあつたが、また薄命な運命の象徴のやうにも見えた。私と暮してゐた間、一日に一度は涙を湛えた、切長の秀麗な目は、白目が透き通つてゐるので水のやうに青く見えたが、私はこの目をヒステリイの徴と見たゞけで、或清い心の徴と見ることが出來なかつた。

彼女は自分でいひ出したのではあるが、私と僅三ケ月ばかり同棲してゐた後で、自分で自分を賣つて、横須賀へ藝者になりに行くのである。眉が少し怒つてゐたが、痩せた、背の高い女だつた。三ケ月ほど前、私はこの女を蠣殼町の所謂私娼の出入りする待合で初めて見たのであつた。私は當時學校を出たばかりで、勤め口もなく、これといふ仕事も見つからず、母と二人で眞に貧しい生活をしてゐた。が、この女に會ふと、無理して、一ケ月の中に三四度彼女の元に通ひつゞけた。そして、あわたゞしく、彼女と同棲することになつたのである。

彼女のいふところに依ると、彼女はその一年足らず前に兩親の家を脱け出して、桂庵にだまされてその町へ賣られたといふことだつた。また別の時彼女のいふところを聞くと、或夕方、何といふことなく世の中がつまらなくなつて、（或は姉と喧嘩したとか、父親に叱られたとか、）一人で町をさ迷ひ歩いてゐる中に、一人の男に呼びかけられて、結局蠣殼町のやうな町へ來ることになつたといふ話でもあつた。かと思ふと、親に定められた許婚者を嫌つて家出した末に、到頭そんな町の女になつたともいつた。が、その町に一年足らずゐる中に、彼女は若い女の欲しがる夏冬の着物やその他の物を（殊に冬のものは十分に）こしらへた。その間に、一ケ月ばかり或株式店員か何かと世帶のやうなものを持ち、又その間の一ケ月ほど彼女自身その男の勤めてゐる同じ店で事務員をしたことがあるなどといつた。

私は初めてその町で彼女に會つて、朝別れる時、改めて彼女の青白い、美しい顏を見直して、「又來るよ、」といふと、

「あたし近いうちにもうこゝにゐなくなるかも知れないのよ、」と彼女はその水のやうな光を湛えた青く澄んだ目で私を見ながらいつた。

「どうして？」と私は戀のために驚き易くなつた心臟を波打たしながら聞き返した

「だつて、近いうちに、あたしたちはもうこゝで商賣が出來なくなるんですもの。……」

「しかし、そんな噂は時々聞くが、いつでもお流れになつてしまふぢやないの？　今度は大分やかましいらしいが…」

と私も内心甚だ不安を感じながら、氣安めのやうにいつた。

「いゝえ〳〵、」と彼女は眞劍な顏つきで、「今度は駄目らしいの。今度の瀧澤といふ警視總監は餘程頑固なおぢさんなんですから。」

實際、その時の檢擧は思ひ切つて峻嚴で、徹底的だつたらしい。その證據に、それから二ケ月としないうちに、蠣殼町の私娼は全く跡を絕つてしまつた。だから、私が彼女と同棲するやうになつたのは、會ひ初めてから一ケ月以內のことだつた。彼女は私の職業が文筆の仕事であることに興味を持つたらしかつた。後で知つたのであるが、彼女の姉も亦、その頃私が寄稿してゐた雜誌の寄稿家だつた。自然、姉の寄稿してゐる雜誌を讀んでゐた彼女は、私の名を知つてゐたのであらう。多分、六月の頃で、「もう少しゐたら、あたしは夏の物がすつかりそろふのに、」と彼女はいつてゐたが、それでも、三箇の柳行李に一ぱい着物ばかり詰まつた荷物を持つて私の家へやつて來た。この人の家へ行つて、ぼつ〳〵夏の物を買ひそろへよう、と彼女は思つて來たに違ひない。

彼女はその町に居る頃春子と名乘つてゐた。藝妓と違つて、その町の女たちは普通に素人風の名を名乘つてゐたが、無論本名のものは殆んどなかつたから、彼女の名も假り名に違ひなかつたが、私は同棲してからも敢てそれを聞き正さうとはしなかつた。或晚、彼女は私に自分の家を教へやうといつて、本鄉の私たちの家から、下谷竹町の方へ步いて行つた。その時には初めてゞはなかつたが、彼女はよく彼女の家庭や、兩親や、伯父たちや、從兄弟たちの話を、實に懐しさうにすることがあつた。私たちは先にいつたやうに、そんなに馴染を重ねないうちに急に同棲するやうになつた仲だから、同じ家に住むやうになつてからも、未だ未だ互に自分たちの過去や思出やを語り盡さなかつたのだ。彼女の

父は町醫者だつた。先にいつた閨秀作家の姉と、彼女の妹と、三人姉妹で、母は岐阜の人らしかつた。夏休には、だから三人の姉妹は母の里である岐阜へよくいつだといふ話をして、そこには今でも母の母に當る祖母さんが居ると彼女はいつた。三人とも女姉妹でありながら、男のやうに活潑で、蟬取りや魚釣りにいつたといふ話を、彼女は町を歩きながら夢中でしてゐる時に、何かの拍子に、「君ちやん」とうつかりいつて、急に言葉を呑んで、彼女の姉が彼女を呼びかけた時の言葉をあはてゝ言ひ直したのを、私は聞きのがさなかつた。「はゝア、この女は君子といふのが本名なんだな、」と思つたが、私は聞かなかつた振をして、上野廣小路から、電車通りを御徒町の方へ、彼女と並んで歩いて行つた。人通りの少ない、明りの暗い所を行く時は、彼女は私と手をつないで、幼稚園の子供たちがするやうに、つないだ手を大きく振りながら歩いた。御徒町の電車通から、裏道へ入つて行つた時分から、

「もう直そこよ、」と彼女は手を離して、わざとらしく拔足をするやうな恰好で歩き出したので、私は彼女から少し離れて、呼吸を呑みながらついて行つた。しかし、それも隱れん坊か何かする、子供のやうな好奇心が半分手傳つてゞあつた。やがて彼女は振返りながら、手を上げて私を抑えるやうな恰好をして「…ほら、あそこ、明りのついてゐる、あの家よ。」

見ると、暗い、片側に溝の流れてゐる町筋に、一と所大きな、明りのついてゐる窓の家があつた。窓は荒い鐵格子で組まれて、中に磨硝子の障子が嵌められてあつた。思つた程立派な家ではなかつたが、その部屋は如何にも町醫者の患者の待合室らしく、あたりの家々が皆戸が閉まつてゐる中に、そこだけ大きな窓の明りを、前の溝川に映してゐるのが、幻燈の世界のやうに見えた。私たちは一層離れ離れになつて、呼吸を凝らし、足音を忍ばせながら、その家へ近づいて行つた。彼女の方が大膽で、尻込する私をしばしば手招きした。往來から溝川にかゝつた板の橋を渡つて出入りするやうになつてゐる門の柱に白い軒燈が出てゐて、「瀧澤醫院」とした看板の字が讀めた。更に、私に印象深く殘つたのは、

例の明るい窓の内側には、窓のすぐ傍に長椅子がおいてあるらしく、そこに掛けてゐるらしい向う向きの二人の人影が映つてゐたことであつた。一人は髪を地味な束髪に結つた老婦人で、一人は髪をお下げにした娘だつた。そして、その二箇の影法師は話をしてゐるやうな風には見えないで、別々に何か瞑想してやうな恰好をしてゐるのだ。それは丁度メエテルリンクの『内部』の舞臺面そつくりの畫だつた。

「母さんと雪ちやんよ、あれ、」と彼女は一間以上後にゐる私の方に振り返つて、首を縮めながら低い聲でいつた。

「もう歸らう、歸らう、」と私は口に手を喇叭型に當てゝ、一層低い聲で促した。そして、彼女が窓の直前の溝川の縁迄進んでゐるのを見捨てゝ、私は振り向き振り向き四五歩引返した。聲が出せないで、彼女に向つて「お出でお出で」の恰好に手を激しく振りながら。

そして又私たちは、竹町から上野廣小路、切通しと、暗いところでは、好いた同士といふよりは、先にいつたやうに子供同士のやうに握り合つた手を大きく振りながら、私たちの家の方へと歸つて行つた。

彼女の父は無名の町醫者であるが、父の三人兄弟である長兄は瀧澤收治といふ、勅選議員で、前の音樂學校の校長で、當時或有名な盲啞學校の經營者であつた。文學のことしか知らない私は、その人の名前は彼女に聞く迄知らなかつたが、その次の兄の瀧澤行男といふ名を聞いた時は驚いた。當時の警視總監の名だからである。

「ぢやア、君は——蠣殼町から——間接に君の伯父さんに迫害された譯だね？」と私が驚いていふと、

「さうよ。行伯父さん憎らしいわ。行伯父さんはそれや疳癪持なのよ。收治伯父さんも疳癪持だわ。あたいの父さんもさう〳〵、三人ともみんな疳癪持だわ、」と彼女は無邪氣な調子でいつた。

「さういふと、君も疳癪持だね、」と私はいつた。彼女を知つてから僅な日數にしかならないが、彼女はよく何でもない

事に怒つて、ヒステリイを起した。

「あたしのお父さんの家は信州なの。あたい一度も行つたことはないけれど。」と彼女はいつた。

「岐阜はお母さんの家なんだね？」

「さうなの。」

その後、いろ〳〵な人たちからいろ〳〵の機會に、私は瀧澤收治や瀧澤行男の逸話などを聞いたが、彼女の父の三人の兄弟が悉く有名な雄辯家であるといふ點は一致してゐるらしかつた。――最近の瀧澤行男氏の東京市長になり振りなどは、今になつて考へて見ると、彼の姪に當る私の女のした事と似てゐるやうにさへ思はれるのである。――

その頃の彼女の話に、

「行男伯父さんは、日本で一番年が若くて知事になつたのよ、三十幾つとかで。」といつたことをも私は思ひ出した。

彼女は私と同棲してから半月も經たないうちに、ぼつ〳〵その父親ゆづりの雄辯を爆發させ出したのだつた。彼女は夫である私が思ひの外貧乏であることに先づ不滿を感じ出した。私の書く一篇の物語が歌でもうたふやうに樂しく易々書けて、それが立ち所に私たちの活動見物の小遣になり、彼女の夏羽織の代になると思つてゐたのに、私の書く一篇の物語（而もそれは大人の小說ではなく、子供の讀むお伽話なのだ。）が容易に出來ない上に、やつと出來上つて雜誌社から貰つて來る金は、右から左に米屋とか薪屋とかに剝ぎとられるやうにとられてしまふやうな私たちの世帶だつた。彼女は家を飛び出してから、未だ十分にそろへ兼ねた夏着を買ふどころか、豐富に持つてゐた冬着を、一枚一枚と失なつて行かねばならなかつた。今書いてゐるのが出來たら、直に質屋から出すから、と私はしば〳〵いつて、彼女の着物を借りたが、約束はいつも果せなくて、書いたものが出來た時分には、それが直に米屋とか八百屋とかの借金取の餌食と

なる狀態だつた。

「お兄ちやん、」（彼女は最初私を呼んだ通り、いつもかういふ呼び方で呼んだ。）「あたし、醫者にならうかしら？　お兄ちやん知つてる人で、醫者居ない？」

或日、到頭彼女はこんな風にいつた。

「侑子はお兄ちやんが厭になつたの？」

彼女はかぶりを振つた。が、彼女の大きな、切の長い水色に澄んだ白目の目の中に、見る見る涙がたまつて來た。それを見ると、私の目にも……。

「お兄ちやんがあんまり貧乏だから……？」

彼女はかぶりを振つた。

「母さんがゐるから？」

彼女はかぶりを振つて、袖で顔を蔽つた。が、しばらくして、

「あたしがあんまりわが儘だから……」といつて、激しく泣き出すこともあつた。

が、今になつて考へて見ると、結局彼女はどうしてあんなにしば／＼泣いたか？　一口にいふと、この世の不如意を、或は彼女の排解の途が、あんなにしば／＼泣いたのではないかと思へるのだつた。

そして、昨日も今日もさういふ會話をくり返してゐるうちに、私の心に、さうだ、この方がいゝかも知れない、自分たちは少し早まり過ぎた、この際思ひ切つてこの女と別れて、私にして見ると、もう少し勉強する方が本當だらう、今の自分の力では、女どころか、母親をさへ、否々、自分自身をさへ養ふのがやつとの狀態ではないか？　といつて、た

とへ半月でも一ケ月でも夫婦になつた女を、而も自分の爲に何枚かの着物をなくした女が、藝者になるといふのに、手を貸すといふことは……？

「ねえ、お兄ちやん、あたし矢張りもう一度藝者になるわ。」と彼女はいつた。「その間に、お兄ちやんももつと勉强するといゝわ。……だけど、あたし、藝者になれるかしら？　あたし、三味線きらひなんだもの。前の蠣殼町のやうなとこ外にもうないかしら？　さう思ふと、行伯父さんほんとに憎らしいわ。お兄ちやん、どこか藝者屋を知らない、探して來てくれない？」

「さあ……」

そこで、或日私は、私が仕事をもらつて來る加藤といふ本屋にその話を打明けて相談して見たことがあつた。彼とは、私は學生の頃古本を賣買して知合ひになつたのだが、その頃彼は古本屋を止めて、出版屋の賣殘りの本を買ひ、それを夜店屋に卸す、ぞつき屋といふ商賣をしてゐた。傍ら、時々出版をするので、私は彼からその方の仕事をもらつてゐる關係だつたのだが、誰から聞くともなしに、彼は東京堂の小僧から番頭と仕上げて、やがて東京堂を出てから古本屋を始める迄の三四年の間、色んな事をして來た、所謂世故に通じた苦勞人だといふ話を聞いてゐた。しかし、そんな噂を聞いてゐなかつたとしても、彼と交際してゐるうちには、彼が並々ならぬ、色んな世渡りをして來た苦勞人だといふことはおのづから察せられるやうな人物だつた。

「加藤さん、突然ですが、藝者になるには色んな面倒な手續きが入るもんでせうか？」

「いや、コホン、私もよく知りませんが、」と加藤は慢性氣管支何とかいふ持病があつて、始終咽喉を鳴らして、痰を吐く癖があつた。「私もよく知りませんが、」といふのはこの男の癖の一つで、凡そこの男の知らないことは何一つないと思

はれる位だつたが、いつでもかういふのが口癖だつた。「それや譯はないでせう。私たちには出來ませんが、それ〴〵は道で、商賣人がありますから。」

「お察しでせうが、その藝者になりたいといふのは僕の家のヒステリイなんですが……」と私はいつた。

「いや、コホン、」と彼は私がいふ迄もなく承知してゐるといつた風で、「唯、しかし、春子さんはお幾つでしたかな？たしか未定年でなくても、藝者といふと、親の承諾が入るかと思ひますがね……しかし、それも何とかならないこともないでせうが。……」

春子の親といふと、その半月程前に、この本屋の加藤に賴んで、例の下谷竹町の彼女の親の家へ、彼女のことで話しに行つてもらつたことがあつた。幸、彼女の姉の秀子は××といふ雜誌に每號少女小說を書いてゐるのを利用して、出版社といふ肩書のある加藤の名刺を持つて、彼女を訪問した上で、實は妹御さんの君子さんのことで一寸お話に上つたのですが、といふやうな段取で、彼に行つてもらつたのであつた。彼が行つてゐる間、上野公園の西鄕隆盛の銅像の下で、私は彼を待つてゐた。

彼は首尾よく彼女の姉の秀子に會ふことは出來たが、例の溝川に面した、磨硝子の障子の嵌まつた窓のある、醫院の待合所の一隅で、秀子に會つて、早速「突然ですが、妹御さんの君子さんのことで……」といひ出すと、姉の秀子は忽ち顏色を變へて、「あんな者のことでお出でになつたのでしたら、すぐお歸り下さい、あれは私の家を出た者ですが、今では全く緣がないのですから、」といつたといふのである。

しばらく爭つてゐたが、姉の秀子も亦癇癪持と見えて、話の最中にぷいと席を立つたまゝ、奧の方へ入つてしまつた。後に加藤は手持無沙汰の恰好で、二十分近く待つてゐると、奧の間から五十餘りの母親らしい人が出て來て、やは

り不機嫌な態度で、

「あなたですか、加藤さんと仰しやるのは？」と尋ねてから、「どうぞ此方へ、」といつて、今度は藥局らしい部屋に案内された。

が、そこでも席に着くなり、「何か君子のことでお越し下すつたさうですが、あの娘は勘當しましたも同樣で、私の方では一切かまはないことにして居りますんですから、どういふ御用件か存じませんが、あれのことでしたら、どうぞそのまゝお引取り願ひたいのですが……」と母なる人がいつた。

「いゝえ、決してお宅樣に御迷惑になるやうな話を持つて參りました譯ではございませんから、どうぞ一應話だけでもお聞きを願ひたいと思ひまして……」と加藤は當時三十歳そこ〳〵だつたと思ふが、苦勞人らしい調子で話を進めた。

私は上野公園の山の上で、西郷の銅像を見ることにも倦きて、臺の端の下町を見下ろす欄干の傍に立つては、今加藤の訪問してゐる竹町の方角を眺めたり、氣をかへて、淺草の十二階や、觀音堂の方を眺めたりしながらも、加藤の話も氣にかゝり、一方家に待つてゐる女が、一寸加藤の木屋まで用事があるといつて出て來たが、滅多に一人で家にゐない彼女のことだから、今頃はヒステリイを起して、母を困らして居はしないかなど〻案じられたりした。

かれこれ二時間近く待つたと思つた時分に、突然背後の方に、コホン〳〵といふ、例の加藤獨特の咳の聲が聞えたので、振り向くと　彼の方でも私を探したと見えて、思はない方角からやつて來た。

「私には分りません、私には分りません、」と彼はいつた。「いや、もう散々でした。實にあの家の人たちは皆さん頑固です。お父さんといふ方には到頭會ひませんでした。うちは頑固ですから　お會ひになつても駄目でせう、とお母さんがいはれるのです。兎に角、君子さんも今ではだん〳〵大人しくなつて居られるやうですし、決して外に無理なこと

をお願ひする譯でなく、たとへ一ケ月に一度でも二度でも、お母さんや姉さんの所へ遊びに歸らしていたゞくといふやうなことが出來たら、屹度あゝいふ利口な方ですから　それに元々大人しい方のやうにお見受けしますから　だん〳〵よくおなりになるだらうと思ひます。——かういつても、いや、もうあんなものは家の娘だとは思つてゐません、どうかその話ならお止め下さい、の一點張りで、そこへいつの間にか姉さんの秀子さんも傍へ來て、あんなものは妹ぢやないと躍起になつて加勢するといつた風なんです。とても齒が立たないんです。時々妹さんでせう、心配さうにドアを細目に開けて、部屋の樣子をのぞきに來られたのが目につきました。妹さんには矢張り姉さんが懐しいらしいですな。——しかし、それだと、又今の連れ合ひの人と別れでもするやうなことがあつたら、あんな一徹な方のことですから、若しどんな間違ひでもありましたら……承りますのに、こちらの御親戚にはお歴々の名譽ある方々がおありになるのに、その方々のお名前にも……といひますと、いきなり姉さんの秀子さんが、そんなこと新聞に出たつて一日切りのことですわ、ほつといて下さい　とかう噛みつくやうな勢なんでせう。結局、嫁にするなり何なり、御勝手ですが　私の方とは一切關係ないことにしてお願ひしますといつたやうな御挨拶なんです。お話にも何にもやりやしないんです。だけど、歸りしなに、若しかと思つて、まア、しかし　突然私のやうな見ず知らずの者が參りまして、お宅の秘密をあばきに來たやうにも思はれますので、さぞお氣持をお惡くしたことと存じますが、もし私が歸りましてから、後で君子さんのことで何かお考へ下さいますやうなことがありましたら、いつでもこの名刺のところへお葉書を下さいますなり、どなたか代理の方でもお話にお出で下さいますなり、その時はいつでもお目にかゝりますし、又宜しい所まで私がおうかがひしても宜しうございますから、といつて歸つて來ましたんですがね……」そこで話手は幾つか辭の咳をした後で「だけど、どうも、どうですかね、餘程、お母さん迄が頑固な方のやうに見受けられますから。……」

私たちはそこで老人のやうに無言の溜息をつき合つて、それ以上多く話さなかつた。そして、暫くベンチに腰を落として、無心の目で目の下の都會の姿を眺めてゐたが、やがて私は腰を浮かして、

「いろ〳〵どうも有難う。ところで、加藤さん、御迷惑ついでに、家までこれから一所に行つて下すつて、あいつを連れて花屋敷へ行くのに附合つてくれませんか？」と私はたのんだ。

「お安い御用です。」

そして、私たちは池の端から、大學の横の道を通つて、本郷の私の家へ彼女を迎へに行つた。無論、加藤本屋に彼女の家へ行つてもらつたことなどは彼女には内所で、花屋敷と聞くと、大分機嫌を惡くしてゐた彼女は、忽ち子供のやうに勇んで、それから三人で淺草に向つた。が、花屋敷で、丁度二三ケ月ばかり前に生れたとかいふ仔獅子が、親獅子の乳を吸つてゐる檻の前に來た時、

「まア、可愛いこと！　お兄ちやん、春子にも獅子の仔買つてよオ、」などと彼女が機嫌のよい、甘たれた調子でいつたのと同時に、

「本當に可愛いもんですね、コホン、コホン、」と加藤が、彼としてはいつになく感慨深さうに、獨言のやうにいつた。

「こんな猛獸でも、こんなに子を育めるやうに可愛がつて居ますのにね。……」

私は忽ち感じて、彼女に聞えぬやうに、彼の耳の傍で、「その代り猛獸は警視總監にはなれませんよ、」とせい一ぱいの皮肉のつもりでいつた。――

さういふ色々ないきさつがあつた後で、或日、加藤の知つてゐる或待合からの紹介といふ名で、一人の桂庵が私の家へやつて來た。小柄な、如何にも桂庵らしい風采の男で、私の方（即、彼女）の要求を聞くと、

「いえ、もう、お話は大抵は加藤さん、――いえ、その大體伺つて參りました。唯その、親御さんの御承諾のないといふことが、一寸何ですが、なアに、いや、それも別に御心配はありません。その、警察の方の餘り喧しくない所で、所もさう遠い所でなく……幸、明日その先方の主人が此方へ用事があつて見えますのがありますから、いや、もうこの方なら、此方さへ御辛抱なさいます氣なら、大丈夫です。更に何、明日もう一度私がその主人と一所に參りますから……それで、その、お金の方は二百圓で宜しいんでございましたね？」といつて、彼はそこに持出された彼女の行李の中の着物を調べながら、「これだけあつたら、あり過ぎる位でございます、結構ですとも、出の着物は主人の方の持ですから。」

翌日、その男と、五十餘りの、角力取のやうな太つた男が連れ立つて、私の家へやつて來た。それが横須賀の藝者屋の主人で、太田原富松といふ男だつた。彼女はその前の晩に、寢てからしく／＼と泣き出して、「お兄ちやん、向うへ行つても、早く迎ひに來てね。いつ頃來てくれる？」といつたり、「それ迄にも時々會ひに來てくれる？……だけど、向うへ行く前に、せめて一日でも、お兄ちやんと二人で旅行したいわ。ね、今度のお金の中で、一日だけ行きませうよ。」などといつて、彼女はいろ／＼と買物の品書と計算を手帳に書きながら、「だけど二百圓ぢや足りないわ。二百五十圓借りられないかしら？　お兄ちやん、明日頼んで見てよ。」といつた。無論、その當時の金でいつても、二百五十圓は大金ではなかつたので、翌日桂庵と主人が來た時、その話をすると、これは直に成立つた。そして、手金として、二百圓受取り、來る何日に桂庵と一所に行くといふことに話が定つたのである。藝者屋の主人は話の間中、ぢろ／＼と絶えず私の行動を注視してゐるやうに見えた。私たちは、それから二日の間、彼女の買物に、朝から晩まで町を歩いた。買物する時の彼女は子供のやうに快活だつたが、夜寢る時には、屹度泣き出して、晝間買つた物の名をいつては「みんな入らないから、いつ迄もお兄ちやんと一所にゐる。」といつたりした。が、もうどうにもならなかつた。そこで、別れの記

念の爲に、前の日に、二人で羽根田の海水浴場へ行つた。彼女は新しく買つた、夏のコートを嬉しさうに着、私は新らしい夏の麥藁帽を被つて。——

そのたつた一日前の、羽根田行のことを思ひ出すと、私たちは並んで腰かけてゐる汽車の中で、一言も言葉を交さないうちから、目の中が熱くなつた。どういふ桂庵の計り事か知らないが、その日此間までの桂庵の家へ行くと、別の桂庵が待つてゐて、その男が送つて行つてくれることになつたのだ。その男が先にもいつたやうに大男で、鼻の下にカイゼル髭を生やした男なのだ。「見たところ恐かない人ですが、軍人さんで、淡白な人です、」と前の桂庵が紹介していつた。「なアに、若い時はお互様だ。苦勞が樂みで、樂みが苦勞だ。少し稼いだら、二百圓や三百圓の借金は一年もしたら拔けますよ、」とその男は汽車の時間を待つてゐた時にいつた。それ切り、汽車の中に乘り込んでからは、他人からは殆ど連れと見えない程、離れた所に彼は席を占めて、横濱驛で「お茶を飲みますか？」と一度聲をかけた切りだつた。その癖、私たちにとつては、向側の席に頑張つてゐるその大男は、鐵棒でも持つた番人のやうな恐ろしい人間に見えた。

汽車が横須賀驛に着くと、私は下りる前に、しばらくプラットフオームとは反對の側の、窓の傍に立つて行つて、外の景色を眺めた。目の下の細長い停車場の構内を越えて、その停車場の構内の水溜でゝもあるかのやうに、直そこに靑々とした海の水が、柵や、倉庫の間に輝いて見えた。柵や、倉庫の上に、無限にひろがつてゐるその海の上に、こゝにも灰色をした水雷艇が、つながれてある材木か、引上げられた魚かのやうに、無雜作に並んでゐるのであつたが、よく見ると、それ〳〵何本かの低いどつしりした煙突を持ち、水雷發射管があり、小型の大砲を具へてゐるのが分る。それ等の間を、何の練習をしてゐるのか、水兵が猿のやうに走り廻つてゐる。

少し離れた所に、『海軍何々倉庫』とした建物と並んで、見覺えのある一艘の軍艦がその艦尾を見せて繋がれてゐた。

一本帆柱、一本煙突の軍艦だ。日清戰爭の時に働いた『松島』『橋立』『嚴島』の姉妹艦の中の一艘に違ひない。私がその建物の蔭になつて、艦尾に記されてある名前が半分隱されてゐるのを、身體を延ばして「はし……」と讀んでゐると、

「お兄ちやん、何見てんのよ。」と女の呼ぶ聲と、

「さア、下りませう。」と桂庵の促す聲が聞えた。

「あなたも海軍ですか？」と私が聞くと、

「いや、私は陸軍です。」と髭の桂庵は答へた。

「あそこに着いてるのは『橋立』ですね。」

「『橋立』です。もう半年も前からあそこにつないであるんです。廢艦ですよ。」

それから、長いプラットフオームを通り過ぎて、改札口を出る迄も、私は妙に子供のやうな好奇心で、見え隱れする橋立艦に目を引かれながら、いつの間にか停車場の前の廣場に出てゐた。見ると、左手に海が迫つてゐるやうに、右手には斷崖の山が聳えてゐて、その山の下を、海に沿うて、一本の廣い道が山の麓について、通じてゐるらしい。水兵の一隊が陸戰隊の風をして歩いて來る。今先、私たちと同じ汽車に乘つてゐた黑服の人たちが、三々五々と歩いて行く。行違ふ陸戰隊の隊長が、大きな聲で號令をかけて、それ等の黑服の人たちに敬禮をする。その中を、先頭に太つた桂庵を乘せた車、その次に痩せた肩つきをした彼女の車、最後に私の車が走るのである。左側の粗末な板塀が一と所切れたところに、番兵の立つてゐる門があつて、門の內側の、五間と隔てないところに海の浪が打つてゐる。門の柱には、『海軍兵器廠』といふ看板が掛つてゐる。門の中から青服の職工の一隊が兵隊のやうに規則正しく、列を組んで出て來る。青服は賣られて行く女を見馴れたらしい目で、目と目で話し合ひながら、私の女を流し目に見て、私たちと同じ方角に進

んで行く。山と海岸に沿うた道が幾つか曲り曲りして行くと、突然行手の青空に、軍艦の何倍かもある、鯨の肋骨の見本かと思はれるやうな、鐵骨の籠のやうな建物が聳えてゐる。その籠の中に、きりぎりすが入つてゐるやうな恰好で、半分出來かゝつた軍艦が吊り下げられてゐる。ガラ〳〵ガラ〳〵と、その下の方で何か巨大なものが壞れるやうな音がする。

これは大變な町だ。私は車の上で引返したい思ひがした。が、先を見ると、桂庵の車と、その後から彼女の車とが、無神經にどこ迄もどこ迄も走つて行くのである。時々曲り角に來ると、前の車の彼女が私の方を振り返る。私はわざと笑つて見せたり、驚くべき機械の方を指さして見せたりする。彼女が前の日、羽根田へ行きしなに、本郷三丁目で買つた、黒と綠色の飾りのある、白地の洋傘の下で、彼女の青白い顏が如何にもいぢらしいもの丶やうに見えた。それ迄割合に平穩な日を送つて來た私は、何か底の知れない、未知の人生に乘り出した夢を見てゐるやうな氣がした。

## 二

私はその後この道を幾度往復したか知れない。

初めて行つた時、彼女の抱え主である藝者家の主人の太田原百松は、並んで坐つてゐる、同じやうな太つた女房に目配せして、彼等の背後に据えられてある牢屋のやうな體裁の金庫の中から、一束の札を取出さして、その中からほんのその百分の一位、ぱら〳〵と五枚の十圓札を拔き出し、女房が二度數へ、亭主が一度數へて、それを私と彼女との、どちらともつかない膝の前に置きながら、

「さあ、これで今日からわしの家の娘ぢや。」そして傍の茶簞笥の横手に貼りつけてある汽車の時間表を調べて、「おい、吉田、」と店の間の方へ聲をかけた。吉田といふのは、例の私たちを連れて來た、八字髭の桂庵の名前だ。吉田は店の間

に白いシュミーズを着て。だらしなく寝轉んだり、立膝をしたりしてゐる藝者たちの仲に入つて、特長のある口の重い笑談をいひながら、彼女たちにきやツ／＼と猿のやうな笑ひ聲を上げさしてゐた。不意にぐわー／＼ぐわー／＼といふ飛行機の爆音が、驚く程近くの頭の上に響いて來たので、吉田の返事は聞えなかつた。が、吉田と共に、二三人の藝者がばた／＼と帳場と店の間の間の、三坪足らずの庭に面した廊下から、空を見上げる爲に走つて來た。そして口々に、「三橋さんだわ、」「嘘よ、三橋さんは昨日飛んだばかりぢやないか？ 太野大尉よ、昨夜そ言つてたわ、」「畜生、しよつてらア！」などと叫びながら、廊下の手摺に押し合つて、空を見上げてゐた。

「こら／＼靜かにせい！」といひながら、主人の富松も、大儀さうに大きな腹を持上げて、帳場の側の縁側から空を見上げに行つた。

「これだから、飛行機は落ちるんだ。こんな低いとこを飛ぶやつがあるもんか。藝者町だけが低空飛行と來やがるんだからな、」と吉田が亭主と並んで、同じやうに空を見上げながらいつた。「おゝ、見える、見える、顏まで見えるぞ。さア、よく色男の顏をしらべて見ろ！」

その間に、彼女は疊の上に置かれた五枚の札を拾ひ上げて、一枚だけ自分の帶の間に挾み、後の四枚を私の膝の上に載せた。私はあわてゝそれを手で受取つて、流し目で見てゐるお上の手前、「ぢやア、これ、あのはうに、」と彼女に向つて赤くなつて、半分口の中でいひながら、袂に入れてあつた雜誌の間に挾んだ。前の晩、彼女がいつものやうに私の胸で泣きながら、「お兄ちやん。あたし後の五十圓みんな入らないから、お兄ちやん今のお仕事を止めて、そのお仕事の原稿料だけあたいが上げるから、その中から母さんに半分上げて、後の半分がある間、お兄ちやんの好きな小說をお書きなさい。そして、君子に讀まして。」『今のお仕事』といふのは、當時私が本屋の加藤から當てがはれて、毎日厭だ厭

だといひながらやつてゐた『小公子フオントルロイ』の飜譯だつた。

　そこへ、亭主と吉田とが座に歸つて來て、

「ぢやア、歸りませうか?」と吉田が私にいつた。「今度の汽車は……」

「五時二十分だ、」と主人の富松が即座に答へた。

「ぢやア、未だかれこれ一時間あるな。」

「あんたは横須賀は初めてか?」と富松が私に聞いた。

「えゝ。變つた町ですね。」

「あゝ、穴のやうな町だからな、」と富松は富松で彼の考へを述べていふのに、「何處から來るのにも一本道だし、どこへ行くのも一本道だからな。吉田、さすがに軍港だね、わし等の商賣にも要害堅固だよ。どんなにすばしこくずらかつても屹度大船迄へ行くには捕まるからな、」と吉田にいひながら、ぢろりと私の顏を睨んでいつた。一瞬間、私にはそれが何を意味するのか合點が行かなかつたが、

「この前に矢張り東京から來たのにひもがあつてね、」と彼はつゞけた。それはつまり私が女を連れ出しに來ても無駄だといふことを諷してゐるのだと分つた。「そいつはまご〳〵してゐて、汽車に乘り後れやがつて、停車場で捕まつてしまつたがね。……」そして、その大きな布袋のやうな腹をかゝへて笑つた。

　歸りの汽車の中で、私がどうかすると目と目の間がきゆつと差し込んで來るやうな感じを堪えながら、トンネルの中に入るのを待つては指の尖で涙を拭いてゐると、行きと違つて椎底の吉田は雄辯になつて、いろ〳〵私に慰めるやうな言葉をいつてくれた。彼は先づ私に大型の名刺をくれた。それには、肩書に公周旋業として、勳八等、吉川卯三郎とあ

つた。住所に、横濱市神奈川とあるのを指して、

「京濱電車の神奈川の驛のすぐ傍です、」と説明してから、「あの太田原富松といふ男は以前車屋をしてた男で、今のお上は矢張り横須賀の藝者だつたんですよ。あれで富松といふのは極くお人よしですが、お上の奴が中々喰へない奴でね。なアに、一本道だつて何だつて、逃げるやうにして逃げたら譯はありませんよ。私もしばらく一寸手の離せない忙しいことがあつて、これから家へ歸つて、今夜の夜行で靜岡まで行かなければならないんですが、いづれ又何かの御相談には乘りますよ。里吉なんかは腰拔だから、たよりになりやしません、」といつた。里吉といふのは、最初に私の所へ來た、加藤の紹介した桂庵の名である。

「いや、何分宜しく、」と私はその勳八等の桂庵が何といふことなく賴もしい氣がしたので、譯分らずに「何分宜しく」などといつて、頭を下げた。

「私もかういふ商賣は向かないんですがな、」と彼はつゞけた。「私の女房がやつぱり藝者なもんで、……そんな關係からつひこんな商賣にはまり込んでしまつたんですが、その、今夜靜岡へ行くのも、人の商賣でなしに、自分の女房のことで行くやうな譯なんです。」

それは何でも彼の女房が何かの事情で靜岡に出てゐるのを、手近の神奈川へ住み替へさせようと計畫してゐるらしいのだつた。汽車が横濱へ着いてからも、何か未だ話のつゞきをしてゐたので、私は神奈川といふのだから、この次でゝも下りるのかと思つてゐると、彼は發車間際になつて、あわてた風もなく、網棚から帽子をとると、「ぢや、御免。いづれ又、」と挨拶して下りて行つた。却つて私の方があわてゝ、半分腰を上げて挨拶を返したが、汽車が出てからも、何が「いづれ又」だらう？と氣になつた。

が、この勤八等の桂庵が別れ際にいつた「いづれ又」といふ言葉は、ずつと後になつて、私がこの桂庵の家を訪問する用事が起つた時、否、その時も思ひ出さなかつた、實際は今になつて思ひ當つたといつた方が本當かも知れない、それ程、私はその後次々と起つて來た事件の爲に、物を考へてゐるといふやうな暇を持たなかつた。何故といつて、彼女は行つた日から私に手紙をよこした。私も東京の停車場に着くと、本郷の家に歸る迄、別れた女のことばかり考へてゐた、考へてゐたよりも、彼女の思ひで一ぱいだつたといつた方が適當だらう。第一高等學校の前の電車を下りて、電車通でない廣い通を一町ばかり行く間も、コンクリートの道がどうかすると海の上を歩いてゐるかと間違つた程、足をつけてゐる土地がふわ〳〵に感じられ、目の前の景色が船に乘つて見てゐるやうに感じられた。かと思ふと、忽ち深い霧でも下りて來たやうに、目の前が模糊と霞んでしまつた。毎日見馴れてゐる近所の道具屋も、魚屋も、菓子屋も、表具屋も、何にも見えずに通つてしまつた。とある仕舞太家と、何某博士の邸との間の、路地の中にある自分の家へ、どうして着いたか、丁度酒飲みがぐでん〳〵に醉ひながら、我家を忘れずに着くやうに、私はその頃の私の唯一の愛物（ペット）であつた飼犬の鳴聲で、初めて自分の家の前に來たことを知つた。その家には、急にその子を他人の女にとられ、貧しさはいつになつても改まらず、昨日も今日も隣の間で子とその連れて來た女とが、痴情からか、女のヒステリイかの爲に、喧嘩してゐるのを聞きながら、米屋や酒屋のいひわけばかりして、瘠せて、一層年とつてしまつた母と、そして今いつた犬のルビとだ。彼女はトオイ・テリアの一種で、疊の上で飼つてあつた。かん〳〵と鐘を叩くやうな聲で鳴く犬だつた。そして彼女だけが、母とも、私とも、そして別れて行つた女とも、誰とも友達であつた。その少ない家族の中に、一ケ月餘り私たちの家族の一人であつた女はもう居ない譯だ。

「よし〳〵」と私は戸の外から犬に向つて呼びかけながら、自分の家の格子戸を開けて入ると、玄關の障子が開いて、

犬は彈丸のやうに土間に飛び下り、母がその後に立つてゐた。この犬はそのやうに喜ぶと、必ず少しばかり尿をする癖があつた。「よし〳〵」といふ人間の言葉を解することが出來た。が、彼女は粗相をしたことを知ると、喜びの中にも忽ちしよげて、尾と耳を下げるのが常だつたが。そこで「よし〳〵」といふ私の許しの言葉を聞くと、直に元氣をとり戻して、再びプロペラのやうに激しく尾をふつた。私は私自身物が皆濡れて見える目に、迎へに出た母の目が霑んでゐることを見たか、或は感じた。で、私たちは顔を見合はずに、次のやうにいつた。

「無事に落着いたか？」

「えゝ、中々いゝ家らしいです。よし〳〵、」と私はルビを抱き上げながら、母の先に立つて、茶の間へ行つた。

が、その翌日、私は今日から志を改めて、自分の仕事もし、又母にも孝行しようと思つて、午後、加藤の家へ、前の日のことを報告かた〴〵彼から貰つた翻譯の仕事も、これからは誰にも邪魔されずに出來るから、近い中に仕上げるといふやうな話をしに家を出かける時、ふと入口の土間に一枚の角型の封筒の手紙が來てゐるのを見出した。母は知らなかつた。私は彼女からの手紙だと思つたので、そのまゝ懷に入れて、往來を歩きながら讀んだ。鉛筆の走り書きで、いろ〳〵とあつて、私は矢張り早くお兄ちやんの傍に歸りたいと書いてあつた。私は電車の停留所の傍にある自働電話のボックスに飛び込んで、横須賀の彼女のゐる家の番號を尋ね、二十五錢奮發して電話をかけて見た。

「もし〳〵、」となるべく自分の不斷の聲でない聲で呼んだ。尤も、不斷の私の聲を向うで知る筈はないから、そんなことは何にもならなかつた。

「もし〳〵、」と答へたのは、女の聲だつたので、少し安心して、「喜京さんに一寸電話口へ、出てもらつてくれませんか」といつた。二十里も離れてゐるのに、市内の電話と聲が變らないのが私を喜ばした。が、喜んでゐる暇もなく、

「どなたですか？」と男の聲に變つた。聞覺えのある聲なので、私ははツとした。主人の富松の布袋のやうな顔が一時に目の前に立ちはだかつたやうな氣がした。先に電話に出たのはお上だつたのだ。彼女は大きなからだに似ず、可愛らしい聲だつたといふ記憶があつた。ついでに、勳八等の桂庵の顔も浮かんで來た。

私はあわてゝ、假り聲も何も忘れて、自分の本名を名乘ると、

「何用です？」と太つた聲が聞いた。

「ちよつと、その、忘れた用事があるものですから……」

「用事なら手紙でいゝぢやないか。電話賃だつてもつたいない。……本人は今風呂へ行つてゐるからことづけしませう。」

「ぢやア、手紙で書きます、」といつて、私はそこ／＼に電話を切つて、その電話の機械が大田原富松そのものであるかのやうに、あわたゞしくボツクスを飛び出した。出たところが、一團の高等學校の生徒の來る中に突き當つて、あやまりながら、停留所の電信柱の傍まで走つた。それから、その次には、二三日後、彼女と手紙で諜し合はしておいて、電話で話をしたが、その時もうまく行かなかつた。しかし、それから二三日して、主人夫婦が箱根へ四五日がけで行つたといふ彼女からの手紙を受取ると、私はそこ／＼に、今度は電話でなく、到頭横須賀へ出かけて行つたのだつた。

どういふ譯か、横須賀といふ町には、宿屋らしい宿屋がないのだ。恐らく日本の中で市と名のつく市で、横須賀ほど宿屋のない町は少ないだらうと思ふ。多分、横須賀に泊つて、何處へ見物に行くといふ所がないのが一つだらう。汽車は大船から一本の道で、そこが行き止まりになつてゐるが、そこは唯軍港であるだけで、商業も工業もない。三浦半島の三崎に行く客は、停車場からすぐ乘合自動車で旅をつゞけるのが普通になつてゐるらしい。軍用商人などといふ連中は、大方藝者の泊る料理屋兼旅館といふ家に泊るらしい。これは成程、大田原富松がいつた通り、要害堅固の土地に違ひ

なかつた。私は一人停車場で下りて、相變らず昨日と同じ恰好で、陸地と並んで横づけになつてゐる橋立艦を眺めながら、ぽかりぽかりと、南畫の景色に見るやうな、幅の狹い背の高い山が、道の片側に艦隊のやうに並んでゐる下を、水兵や、士官や、職工やがその往來する人々の八分通りである道を、一人でとぼ／＼と町に向つて歩いた。「海軍兵器廠」それから例の空中にぶら下つてゐるやうに見える鐵の籠、（後で聞いたところに依ると、軍艦をこしらへる機械ださうだ。）どことも知れず、ぐわら／＼ぐわら／＼と、巨大な鐵の鎖を打合はし、ほうり出すやうな音、喇叭の響、號令をかける聲、――この前車で通つた時から思ふと、十倍も長く思はれる道だ。二度ばかり途中で人に聞いて、やつとそこから市街の始まる、寫眞屋の前に出た。道はそこから市街になる代りに、これ迄の道の四分の一位の狹さになる、恐らく前のは軍用道路とでもいふのだらう、兩側の商店は靴屋でも、洋服屋でも、本屋でも、荒物屋でも、煎餅屋でも、看板とか、飾窓とか、どこかに軍艦とか、水雷とか、飛行機とか、水兵とかの文句か繪が書いてある。この町に來ると、海軍の人でなければ、人でないといはれるの尤もだ。

　しかし、その町を歩いてゐる時、私はふと遠い昔の、幾らかロマンテイツクな思出を思ひ出した。それは私自身のことで、私は子供の頃畫をかくことが好きで、暇さへあると畫をかいて居た。寫生もしたが、寫生の前か、その間にか、私が最も好んで描いたのは軍艦の畫だつた。菊版を横にした位の大きさで、横に靑い絹のリボンで綴ぢた『帝國軍艦帖』といふものがあつた。だん／＼贅澤になつて、普通の寫眞版では氣に入らなくなり、コロタイプ版のを好んだ。その時分としては、八十錢とか、一圓とかいふ可成り高價なものだつた。大抵一枚に一艘の軍艦の、或ものは浪を蹴り、黑い烟を吐いて走つてゐるもの、或は港に碇泊してゐるもの、滿艦飾をしてゐるもの。表紙は赤と金の日の丸の旗を圖案化したものとか、上等のは黑い革製のとかゞあつた。一冊で三十枚位のもの、五十枚位のもの、何でもそんなのを私は四五冊

持つてゐた。終には『帝國軍艦』ばかりでなく、『列國東洋艦隊寫眞帖』などといふのも買つた。どの寫眞帖だが覺えてゐないが、表紙の端に 1903 としてあつたのを、それが一番新しい本だつたことと、千九百三年などといふ、西洋暦を知つたことを覺えてゐるから、私の十二三歳の頃だつたらう。私はその軍艦帖の軍艦を片端から、殆一日に一枚づゝ位の割合で、畫用紙に、その頃はやつた擦筆畫といふ方法で模寫した。初めに鉛筆で主な輪廓をとつて、黑いところや、ぼかす所を、なめし革を筆の形にしたものの尖に、鉛筆の粉か、木炭の粉をつけて、濃淡を出すのである。帝國軍艦帖は必ず『三笠』が先頭に出てゐた。總噸數一萬五千何百噸、——どうしたつて『三笠』が一番噸數が多いのだ。それに『三笠』は黑い煙突に横に三本の白線が入つてゐる。私のその軍艦熱は千九百四年迄もつづいてゐたと見えて、日露戰爭の初期に新にアルゼンチンから讓つてもらつた『日進、』『春日』の二艦の入つてゐる軍艦帖を買つたことさへ覺えてゐる。『日進』『春日』は日露戰爭を始めた大日本海軍にとつて非常な喜びであつたが、私にとつても亦別の喜びだつた。といふのは、その頃未だ日本の海軍には、大抵二本帆柱一本煙突或は二本帆柱二本煙突、少し變つてゐるのが、『松島、』『橋立、』『嚴島』で各各一本帆柱一本煙突だつたが、それ等はもう日淸戰爭時分の老朽艦だつた。ところが、私の『列國東洋艦隊』(これも大抵一度づつ皆擦筆畫でかいたのだが、)には、四本煙突とか、三本煙突とか、又形からいつても強さうな、ハイカラな軍艦が、和蘭とか、西班牙とかいふやうな國でさへ持つてゐる。それに、日本は『三笠』でも、『富士』でも、『敷島』でも、『八島』でも、皆同じやうな平凡な形の艦ばかりだつた。外國のには舳の恰好などのも、隨分奇拔なのがある。名前にしても、片假名で、軍艦帖の頁の右の端から左の端までつゞいてゐるやうな長い名がある。その中愈々日露戰爭が始まつたのだが、私はだから露西亞の旅順にゐる軍艦も、浦鹽にゐる軍艦も大抵その名も形も知つてゐた。浦鹽艦隊が暴れた時など、『ロシア』とか『リユウリツク』とか、總て一度や二度擦筆畫でかいて知つてゐるので、それ等の軍艦が大海を走つ

てゐるのを幾度も夢に見た位だつた。――私はとある繪葉書屋の店頭に立止まつて、久しぶりで日本帝國軍艦の繪葉書を見た。私の畫をかいた頃は、繪葉書といふものが未だ存在しなかつた頃だ。『鹿島』、『鹿取』、『比叡』、『金剛』。――私が子供の頃にこれ等の軍艦を見たら、どんなに喜んだらう。恐らく二三枚づつ標準で描いて、親しい友達の間に一枚づつ配つてその喜びを分つて歩いたかも知れない。新しい型、新しい様式、煙突の形も、大砲の形も、その置き方も、悉く變つてゐる。私はしばらくそれ等の軍艦の寫眞を見て時を過ごした。『橋立』が停車場の隣の海につながれてゐるのは不思議でない。買はうと申し込んだら、賣つてくれるに違ひない。しかし、無論、軍艦どころか、私は横須賀まで來て、東京への歸りの汽車賃をやつと位の金しか持つてゐなかつた。おゝ、果敢なき橋立艦の夢よ！

（讀者よ、しかしこれは私の單なる果敢なき夢でないのだ。私の竹馬の友達で、大阪のことだ、××といふ鐵屑屋の息子があつた。小學校は違つたが、中學校の時は一所だつた。何故といつて、彼は砲兵工廠の職工の子だつた。私は小學校はブルジョア子弟を專門に教育する學校に行つてゐたのだが、家が近かつたので、町内の友達の紹介で彼を知つたのだが、その頃は彼の家は小さな鐵屑屋だつた。が、いつでも商賣などしてゐるやうに見えなかつた。さうだらう、親父は毎朝早く青い服を着て砲兵工廠に行くといふのだから、商賣など出來ないのだらうと私は思つてゐた。ところが、高等小學校の二年を出た頃、彼と同じ中學の試驗を受けたので、一層親しくなつた。誰かに聞いたのだが、彼の親父はその二三年前職工を止めて、大砲の破れたのとか、鐵砲の潰れたのなどを砲兵工廠から安く買つて、それで大變金持になつたといふのだ。それから又四五年後、日清戰爭の時、清國から分捕した鎭遠艦をその家で買つたといふ話を聞いた時には、私たちは皆感嘆した。何故かといつて、その一二年前の秋、海軍大演習が終つて、艦隊が大阪灣に來た時、私たちの見に行つたのは敷島艦だつた。小さな軍艦と違つて、大きな軍艦はそれぐ＼築橋の棧橋から離れたところに碇泊し

てゐたので、私たちは艀に乘つて、それぞれ目指す軍艦に向つて行つた。私たちの一隊の案內役は、敎頭の殿村といふ退役海軍大尉だつた。「殿村先生、あそこにゐる化體な恰好の軍艦は何といふんです？」と艀の中の學生の一人が尋ねた。見ると、甲板の低い、成程一見して風變りの船だつた。が、私は例の軍艦帖を模寫した智識で知つてゐた。「あれはこの前の日淸戰爭の時に分捕した『鎭遠』といふ軍艦だよ、」と私がいふと、舳にゐた殿村先生は、その日に限つて海軍々人の制服を着てゐたが、彼方の軍艦に向つて望遠鏡を向けてゐたが、「さうだ、えらいぞ、誰だ？　さうだ。『鎭遠』だ、」といつたので、私は大いに面目を施したことがあつた。その鎭遠をあの鐵屑屋は買つて、どうするのだらう、と私たちは思つた。すると、或日學校で誰かゞ「××の家の店に『鎭遠』の大砲が置いてあるぞ、」といひふらしたので、私も早速その日の放課後に行つて見た。すると、果して『鎭遠』の主砲が××の家の店から往來に向つて、象が鼻を上げたやうな恰好をして据ゑてあつた。その大砲の爲に、家の中へ出入りするのがやつとだつた。××はその大砲に片手をかけて、私たちが見に行くと、自慢さうにその大砲の腹を叩いてゐた。それで彼の家は忽ち數十萬圓の金持になつたといふ評判であつた。讀者よ、私が橋立艦を買ふ夢を見たのは全くの夢でないといふ所以である。）

　が、夢には違ひなかつた。道はやがて一つの大通に出て、見覺えのある郵便局の前を過ぎると、間もなく彼女のゐる町に出る筈である。それが横須賀の銀座通に當る所らしい。しかし、大通は何となく目につく氣がするので、私は左手に曲つて、大通と並行してゐると思はれる裏町に入つて行くと、思ひの外、目の前の町のはづれに、又近々と海が見えた。その海は停車場の邊の海と違つて、一面に青々として平和な浪が輝いてゐて、遙かに綠の樹木に蔽はれた島が浮かんでゐる。私はなるべく日の暮頃に彼女のゐる町に入りたいと思つてゐたので、時間を消す爲に海岸まで行つて見た。すると石垣で固められた海岸に近づくに從つて、家と家との間に仕切られて見えた海が次第に擴大すると共に、左手の

方に、忽ち軍港の海が案外間近に展開したのに驚かされた。列をなして海に迫つてゐる山の下に、建物といへば兵營のやうなのや、工場のやうなのや、煙突や、タンクや、例の軍艦を造る鐵筋や、ドックや、起重機や、その他、海の上には戰鬪艦、巡洋艦、砲艦、水雷艇、ランチ、——それ等のものが、斜めに夕日を受けて、或ものは白く、或ものは黄色に、赤に、青に、或は明るく、或は暗く、何か冒險小說の挿畫のやうな風景を、そしてそれ等のものから起る金屬を打合はすやうな、笛を吹くやうな、太鼓を叩くやうな、わめくやうな、吠えるやうな、種々樣々の雜音が律波の寄せて來るやうな響きを海の上に送つてゐる。が、その反對の、右手を見ると、港は全く別の景色を展開してゐた。夕日を背から浴びて、罘網のやうに見える穩かな形をした山に圍まれて、何處かその昔の漁村の面影を想像させるやうな、靜かな風景だつた。海岸には煙突のある建物など殆ど見えず、海には軍艦や水雷艇の影もなく、ゆるやかな曲線で海を抱いてゐる渚に沿うて、町は可成りの長さに延びてはゐるが、渚の近くまで突き出てゐる家は飛び飛びにしかないので、そこだけ見てゐると、廣重の景色を彷彿とさせて居るといつても誇張ではなかつた。家の形を見るのに、渚に突き出てゐる家は、多分料理屋のやうな建物に見えた。一番遠く、町から少し離れて、最も長く海中に突き出てゐる位置にある家など、誰かの別莊のやうにも見えたが、家の形からいつて、矢張り料理屋らしかつた。丁度、傍へ小學生らしい少年が口笛を吹きながらやつて來たので、尋ねると、「多度の鼻だよ、」といつた。

「所の名前ぢやない、あの家は何だと聞くんだよ、」と私がいふと、

「宿屋だよ、」と少年はいつて、「料理屋だよ、」といひ直した。

「何方さ?、」

「知らないよ、」といつて、彼はすた〳〵町の方へ引返して行つた。

その時、多度の鼻よりもつと近くの鼻の家から、鼓歌の聲が聞え出したので、私は思ひ立つて町の方へ引返した。町の中へ歸ると、案外あたりが暗くなつてゐるので、驚いて道を急いだ。この前に來た時は、車で來て車で歸つたばかりだから、初めての町に來たのと同じだつた。うつかり道を曲ると、又海の見える所へ出たり、反對の方へ少し歩いて行くと、先の郵便局のつゞきかと思へる銀座通のやうな町へ出たり、その中、とある狹い横町をうろ〳〵してゐると、突然、「眼鏡さん、眼鏡さん！」と呼びかけられてびつくりした。見ると、家並に玩具のやうな小さな格子戸の嵌まつた窓があつて、入口と覺しいところに短い暖簾が掛つてゐる。その前に申譯のやうに鉢植の木とか、二三本の竹の植込のやうなものがある。「眼鏡さん、眼鏡さん！」と呼ぶ聲は、その暖簾の下から聞えるのだ。見ると、その下の、入口の右手の障子が細目に開いてゐて、大きな束髮に結つた眞白な顏の女の顏が覗いてゐる。眞黑な束髮の頭に齒のやうに並んだ髮挿の石がきら〳〵光つて見える。口の中の金齒が又それと違つた色にきら〳〵と輝いてゐる。

「まア、樣子がいゝのね。一寸お入りよ。あんた、活辯さん？　一寸々々……」

　これはいけない、と思つて、足を早めて、曲り又曲りしてゐると、活動寫眞館の前に出た。この活動寫眞館はこの前來た時、大田原富松と、彼女と、私と三人で、公正役場とかへ出かけた時に、見たことがあつたのを思ひ出した。何れにしても、活動寫眞館や、銘酒屋のある所を見ると、花柳界もこの邊に違ひないと思つて、私は道を曲り又曲りして、その界隈を離れないように歩いた。と、ふと待合らしい、見覺えのあるやうな家を見出した。それは丁度町の角になつてゐた。門があつて、待合のやうな庭があつて、玄關へ通じてゐる敷石が見えた。軒燈を見ると、『富の家』としてある。はツとして私は足を早めて大急ぎで角を廻ると、同じ家の別の入口の格子戸を見て、一層驚いた。それは此間來た大田原富松の家である。富松の家は一方で藝者家をしてゐて、横町で、同じ棟つゞきの家で待合をしてゐるといふことを思

ひ出した。私は一旦大通へ出て、それから一町ばかり行つたところで、再び角を曲つて、裏通へ戻つて見た。それから恐る恐る『富の家』の見える所まで、何といふ譯もなくその家の有無しを確かめに行つて、又後戻りして、愈々この邊でどこか料理屋を見つけて入らうと思つた。もう町は大方暗くなつてゐた。とある、待合らしい、門から可成り長い植込の間を通して玄關の見える家の中から、一人の背の高い藝者が、座敷着で俯向いたまゝ出て來て、私の反對の方へ歩いて行つた。ふとその女について行つて、私は樣子を聞いて見ようかと思つたが、すぐ思ひ止まつて、元の道を進みながら、私の女もあんな風になつて、かういふ待合に出沒してゐるのだらうと思ふと、興奮と勇氣が湧いて來たので、いきなり目についた、大きな門構への料理屋に飛び込んだ。

料理屋の中は湧くやうな騷ぎだつた。餘程大きな宴會が始まつてゐるらしかつた。その宴會の騷ぎは私にとつて却つて好都合だつた。といふのは、私がそこの玄關に立つた時、宴會の、醉つてうたふ客たちが、彼等の部屋から溢れ出して、一列になつて玄關へ通ずる廊下に來かゝつてゐるところで、迎へに出た女中は私を「どうぞ、お早く、」といつて、あわたゞしく、奥の部屋に案内してくれた。しかし、私は女中の後について行く途で、宴會の醉拂ひの一行と擦れ違つた。客は海軍士官で、士官と藝者と、士官と藝者と、一人おきに一列に並んで、歌つてゐる歌が愉快ではないか。

「烟も見えず雲もなく
風も起らず波立たず
かゞみの如き黄海は
曇りそめたり時の間に」

足踏み鳴らして、どら聲と、黄色い聲と、手を叩く音と、三味線を掻き鳴らす音との、無限の進行なのだ。私はそれ

等の人々の顏は見なかつたが、女中の後について、顏を俯向けて歩く目に、不思議な行進曲を、目を上げて見るよりはつきりと見た。これが軍港行進曲（マーチ）といふのだ。

軍港行進曲のお蔭で、私は望み通り奥まつた部屋に通されて、酒が飲めないので、すぐに御飯を命じて、「あ、それから……」といつた。「あの、大富といふ藝者屋があつたね、あそこの喜京といふのを呼んでくれないか？」と賴んで、急いで煙草に火をつけた。「あ、一寸々々、姐さん……」と追つかけたが、もう聞えなかつた。彼女が若し出てゐなかつたら、彼女の手紙に書いて來た、彼女の一番仲よしだといふ勝栗といふ半玉を呼んでくれ、いや、ゐてもゐなくても、勝栗を呼んでやつてくれと手紙にあつたのを思ひ出して、その半玉もかけておかうと思つたのだが、遲かつた。丁度私の部屋の外の廊下を、軍港行進曲の一行が通りかゝつた。廊下で聞くのも、部屋で襖を隔てゝ聞いてゐるのも、同じ鼓膜を破る程の大騷ぎだ。

「未だ沈ますや定遠は」と一頻り頓狂な、調子外れの女の金切聲が聞えるかと思ふと、

「未だ沈ますや何とか何とかは……」と太い男の聲で、何とか何とかといふのは藝者の名らしかつた。

「きやーーツ！」と女の叫ぶ聲が起る。……

しばらくして、先の女中が入つて來て、廊下の群集から見えないやうに、後を大急ぎで締めて、膝を突きながら、

「喜京さん、今出たばかりださうですが……」と氣の毒さうにいつた。

「何にしても、その次にぢやア屹度此方へ廻るやうにしてくれ給へ。」

「はツ。しかし少しお暇がかゝるだらうと思ひますけど……？」

「暇がかゝつてもいゝ、是非、一寸でいゝんだから、會ひたいんだ。」

「はツ。」

「あ、一寸。それから、同じ家の半玉で勝栗といふのがゐたら……」

「勝ちやんはこちらの宴會に來て居りますんですが……」

「呼んでもらへないか？」

「まだ少し……」と女中は首を傾けながらいつた。

「ぢやア、食べる物を。」

外の軍港行進曲（マーチ）も少し下火になつたらしく、それよりも私は一層心細くなつて來た。若し幾ら待つても會へなかつたら、私は無錢飲食に近いことをする譯になるからだ。といつて、餘り急ぎ立てゝ、若し自分の風采などが向うの家に知れるやうなことがあつたら、それこそ絶對に彼女をよこさないだらう。いろ〳〵と思ふと、立つてもゐてもゐられなくなつて來た。食事を濟ましてからは一層氣が揉めて來た。私は手紙を書いて女中に、家へとゞけないで、箱屋にでも賴んで、それを本人にぢかに渡してくれさへしたら、來てくれなくてもいゝから、と賴んだ。來られなければ金をとゞけてくれ、と書いたのだ。女中も私の困つてゐるらしいのに同情して、だん〳〵親身になつて骨を折つてくれ出した。

いつか軍港行進曲（マーチ）も止んでしまつた。私は四疊半の部屋の、長細い庭に面した縁側の窓にもたれて、腕を組んでゐた。どうなるか知らと思つた。その庭に面して、同じやうな部屋が無數にあるらしかつた。それに二階建らしかつた。庭は木立で目隱しになつて、その向うに宴會用の廣間や、それに準じた廣間があるらしかつた。それも二階建で、何れも一二年前の新築らしく、東京の本郷あたりの大抵の下宿屋よりも大きかつた、或は大抵の大きな料理屋よりも大きかつたかも知れない。大きいのはかまはないが、私の右隣の部屋にも、左隣の部屋にも、一人づゝの客が來てゐて、一人

づつ藝者が來てゐる氣配だつた。その氣配は、軍港行進曲(マーチ)と逆つて、私を一層心細くした。が、逃げ出す譯にも行かなかつた。

ふと、その時どこかで人の聲がした。が、それは無論私に關係のない聲だと思つて耳に止めてゐなかつた。と、すつと靜かに唐紙の開く音がした。それも唐紙の開く音とは思はないで、何氣なく音の方へ目をやると、入口に立つてゐる女中の姿と、その下に坐つて此方に向つてお辭儀をしてゐる藝者の姿が見えた。顏を上げた時、彼女は聲を出さないで、「あ！」といつたやうに見えた。別の人かと思ふ程、奇麗な藝者になつてゐた。彼女の顏の唯一つの缺點である、上唇の厚いのを、白粉と紅とで化粧してあるのが、却つて美しく見えた。

「やア、」と私はいつた。

「お待遠さま、」と女中はいつて、すぐ引込んでしまつた。

しばらく向き合つて、默つてゐた後で、

「あたし、この手紙、今見たのよ、」と彼女は私の手紙を帶の間から出しながらいつた。「もう一足宿屋さんが遲かつたら、外へ廻るとこだつたのよ。あゝ、咽喉が渇いた。そのおサイダ頂戴！」

彼女は食台の上へ手を延ばして、私がそれをとつてやらうとする前に、私の飲みさしのコップのサイダを一息に飲んで、その上に私が新しく注いでやつたのを、次の一息で半分ほど飲むと、「あゝ、咽喉が渇いた。お兄ちやん、あたしの顏赤い？」と聞いた。

「靑いよ。」

「さう。あたしお酒を飲まされたの。」いひながら、帶の間から見覺えのある蟇口を出して、中から小さく疊んだ十圓札

と、銀貨を五六枚出して、「これだけあるわ。これで足りるでせう。こんな家高いから、今夜もう遅いから泊るでせう、どこか宿屋にお泊りなさいね。一所に出て探しませう。」

「ありがたう。」

私は唯それだけいつて、柱に具へつけてあるベルを押した。

表へ出た所で、暗い町を二人肩を並べて歩いた。彼女は割合に快活だつた。すつかり藝者の風になつた彼女と、久しぶりで夜の町を歩いてゐると、幸福がかへつて來たやうな氣がした。が、昔のやうに手をつないで、それを子供のやうに振つて歩くことはしなかつた。夕方通つた活動寫眞館が向うの町角に見えた。

「あの活動、昨日勝栄さんと見に行つたのよ。面白いわ。」東京のよりも馬鹿々々しくて面白いといふ意味らしかつた。

「勝栄さん、さつき呼んだんだが、あの家の宴會に來てるといふから、後で呼んでくれといつたんだが……」と私はいつた。

「さう、あたし、今行つてたお座敷で、あたしが行つた時入れ違ひで出て行つたわ。可愛い子よ。あした連れて行くわ。あそこよ、あんな宿屋しかないの、横須賀には、」といひながら、大通へ出て二三軒行つた先の、貧弱な一軒の宿屋を指さした。

「あゝ、いゝよ、いゝよ、なるべく安い宿屋でいゝよ。」

「ぢやあ、明日の朝、もう少しゲルド持つて行つて上げるわ、」と彼女はその宿屋の前で口早やにいつて、入口の所まで送つて來てくれた。そして、そこで歸りかけて、「一寸上つて部屋だけ見て行かう、」といつて、番頭の後につゞいて、私と一所にとつつきの階段を上つて行つた。

靜な部屋を望んだのだが、明日になつたら奥の離れが空きますからといつて、二三の通の見える二方障子の六疊の部屋に通された。

「これは退屈しなくていゝよ、」といひながら、私が障子を開け放しにして、手摺にもたれて表の通を見下してゐると、

「お兄ちやん。そんな所開けたら駄目ぢやないの。直そこが家だから、」と彼女はたしなめた。

「大變々々、」と私はわざと大仰にいつて、ぴつしやり障子を締めて、初めてゆつくりと彼女と向き合つて坐つた。私は二十七歳で、彼女は二十二歳だつた。私たちは初めてしみ〴〵と顔を近寄せた。

彼女は一寸部屋を見るだけといつて、三十分程ゐてしまつた。そして、「後で、又ちよつと來るかも知れないわ、」といつて、あわてゝ歸つて行つた。

## 三

その晩の十二時過、私が寢床に入らうとしてゐると、急に階段の方に彼女の聲と、そして二人らしい足音がして、がらりと障子が開くのと一所に彼女が現れ、その後に半玉らしい娘が覗くやうに現れた。

「勝ちやん、お入りなさい、」と彼女は促すやうにいつた。

私はこの時初めて噂に聞いてゐた勝栗を見たのである。勝栗とは、如何にも軍港の雛妓の名らしい。彼女はその時十五歳かであつた。無邪氣な可愛らしい娘だつた。

「あたし、この人だけがお友達よ、」と彼女は勝栗の肩を抱えるやうにして引寄せながら、「可愛いゝでせう?」といつた。

「あゝ。」私はこんな場合、直にお世辭の言葉が出ない質で、無理に笑顔をしながら、勝栗の派手な友禪の膝の邊に目を

落した。

「あたしお兄ちやんの所へ歸る時は、あたしのお人形さんみんな勝ちやんに上げて行くの。」

「姉さん、あの持つて來たものは？」と勝栗にいはれて、

「さう〳〵、出してごらん。」と彼女がいふと、勝栗は袂の下から竹の皮の包を出した。私の好きな餅菓子を持つて來たのだ。

しばらく話してゐた後で、二人は「又あした。」といつて歸つて行つた。

翌朝、私は少し遲く起きたが、それでも顏を洗つて、表通の見える廊下の、往來から此方の姿を見られない所をと思つて、隅つこの戸袋の陰に椅子を持出した時は、出勤する職工、兵曹、士官、學校へ行く學生たちが、三々伍々と往來する頃で、私は町を見下ろしながら、時々彼女のゐる家への曲り角や、向うの屋根越しに見えるペンキ塗りの活動寫眞館の塔やに目を放つて、未だ未だ大田原富松も、彼の女房も目を醒ますまい、もつと廊下の眞中へ出て、今のうちに横須賀の町を存分に見ておいてやらうと、戸袋の陰から椅子を乘り出した。と、向う横町の角の漬物屋のところに、不斷着を着てゐるのと、片手に風呂敷包を抱えてゐるのとで、昨夜と違つてひどくしよんぼりと見える勝栗が、ちらと栗鼠のやうな敏捷さで、後を振向いたかと思ふと、素早く斜めに町を突切つて、私の宿の方へ走つて來た。「おーい。」と私が上から聲をかけようとする間もないうちに、彼女は宿の表でも一度ちらと後を振向いて、入口に駈込んだらしい氣配がした。私はわざと迎へに出ずに待つてゐると、ばた〳〵と子供らしい足音で階段を上つて來て、呼吸を切らしながら、

「お兄ちやん。これお姉さんから。」といつて、抱えるやうにして持つて來た風呂敷包と手紙を渡した。「お姉さんもう一寸後から來ますつて。さよなら。」

「おい、待て待て、」と私が呼びかける聲に返事もしないで、極り惡さうに大急ぎで歸つてしまつた。風呂敷包の中は衣類らしかつた。手紙には、誰も起きない中にこれだけ持出しておいた、後で行つて相談すると書いてあつた。私はそれを見て彼女の無鐵砲よりも自分の無鐵砲だつたことを後悔し出した。

しかし、私はその時決心して、先を越して、私の、母のを借りてゐる時計を質に入れることにした。そこで宿屋のお上を呼んで、お上の手からそれを質入れさした。彼女は午後になつて、勝栗を連れてやつて來た。そして、私のしたことを聞くと、折角の自分の好意を無駄にするといつて怒つた。「やつとの思ひで持出して來たもの、持つて歸れやしないぢやないの？」と彼女は持前のヒステリイを起しさうな恐い顏になつていつた。「ぢやア、あたしこれを質に持つて行つて、勝ちやんにお人形さんを買つて上げるわ！」

「お姉さん、あたし又明日の朝早く起きて取りに來ますから、お兄ちやんと喧嘩しないでよ、」と傍から勝栗がとりなすやうにいつた。

「さうしてくれ、そしたら今度僕が來る時、法界屋さん（勝栗が餘り痩せつぽちなので、赤い着物を着てゐると、法界節の子供のやうに見えたので、私がそんな綽名をつけたのだ。）に東京からいゝお人形を買つて來てやるよ、」と私はいつた。

それから、私は東京と横須賀の間を何度か往復した。ところが、三度目だか、四度目だかの時、だつた。私はふと、さうだ、私の中學の級友に四五人も海軍兵學校に入つたものがあつたことを思ひ出した。私が今だに何にもになつてゐないのに、彼等はもう海軍中尉位になつてゐる筈だつた。すると、或時、例の宿屋へ彼女と勝栗が遊びに來た時、何かの話の次手に、

「あら、厭だ、お姉さん。あたし風はまさんきらひだわ、」と勝栗がいつてゐる言葉を私は聞きとがめて、

「何？　風はま？」と聞くと、

彼女が傍から、

「また、勝ちやん、風はまさんだつて、風はやさんよ、」と訂正した。

「かぜは、まさん、かぜは、まさん……」

「あら、音が解らないの？」

「おい／＼、風早といふのは少ない名だが、矢張り海軍士官か、位は何だ？」と私が傍から聞くと、

「中尉よ。」

「どんな顔の男だ、色が黒い？」

「あら、いやァだ、海軍士官は皆色が黒いわ、」と勝栗が笑つた。

「さうか、ぢやァ、背が高いか？」

「えゝ、高いわ。それやのつぽよ。」

「大阪ぢやないか、その男は？」と私は膝を乗り出して聞いた。

「どう？　お姉さん？」

「大阪だわ。」

「で、僕と同い年ぐらゐだね？　ぢやァ、矢張り風早だな、」と私は獨言つて、「その外にどんな海軍士官を知つてる、名前をいつて御覧。」

「それや無理だわ、」彼女は笑ひながら、「それよりお兄ちやんが知つてる人の名をいへばいゝぢやァないの。」

「それやさうだが、風早の外はみんな有り觸れた名だからね。」私はしかし思ひ出し思ひ出し、「それぢやア、矢崎といふのは？」

「矢崎さん知つてるわ、矢崎さん知つてるわ、」と勝榮が鬼の首でもとつたやうに叫んだ。「矢崎、矢崎、何とかいつたわ。矢崎、三次郎、ね、お姉さん？……」

「さうだ、えらい、その矢崎三次郎だ！」と私は思はず膝を乘り出して叫んだ。「矢崎三次郎も中尉か？」

「えゝ、さうよ。矢崎さんお兄ちやんのお友達？」と彼女がいつた。「勝ちやん岡惚れしてるのよ。」

「うそよオ、お姉さん！」

「だけど、あたしンちの小花さんのインチ（Intimate の略。海軍士官特有の隱語）なの。二人ともそれや大熱々よ。勝ちやん、あの二人の寫つてゐる寫眞を持つてない？」

「見せてくれよ、それ持つて來て、」と私はいつた。そして後は獨言で、「なアんだ、矢崎の奴も横須賀にゐたのか。何といふ軍艦に乘つてゐるんだ？」

「軍艦ぢやないわ、砲術學校だわ。」

「ぢやア、風早は？」

「風はまさんは……

「また風はまさんだつて、風早さんよ。」

「風はやさんは飛行機なのね、お姉さん？」

「へえ、風早は飛行機か、」と私は叫んだ。風早は中學時代から機械體操が巧くて、『大和魂』といふ、鐵の棒の上から

地上に飛び下りる瞬間に、空中で一度くるりと身體を轉廻させる術の出來るものは、學校中で彼一人だつた。鐵棒の上に兩手を突張つて、今や一と飛びで「大和魂」をやる前に、風早の顏は文字通り朱をそゝいだやうに紅くたつた。そして、機械體操の場の周圍に黑くなつて取卷いてゐる群集の目を集中しながら、はつと思ふ瞬間には、風早の身體は鐵の棒をくるりと半分廻つて、一度高く空に飛んだかと思ふと、毬のやうにくるりと轉廻して、二間ばかり向うの砂の上に立つてゐるのだつた。

「飛行機か、危い商賣だな。」と私が思はず嘆息していふと、

「さうよ、此間も齊樂さんといふ藝者衆のインチが落ちたのよ。」と彼女がいつた。

「それで死んだ？」

「えゝ、それも「新花屋」さんといふ藝者屋の屋根の上に落つこちたの。」

「その齊樂といふ藝者のゐる家か？」

「さうぢやないけど……。齊樂さんは一週間程病氣になつて休んだわ。」

その翌日だつたか、私は砲術學校に矢崎を訪ねたが、生憎辻堂の方へ演習に行つた留守だつたので、それから田浦まで汽車に乘つて、停車場から俥で追濱の航空學校に向つた。私は初めて横須賀に來た時、汽車の中から見下ろした追濱の灣に、その五六年も會はない舊友を訪ねて行つた。受附で風早中尉に面會したいと名刺を通じると、十分もかゝつて小使の老人は何處かへ行つて歸つて來た。そして、「唯今演習中ですが、三十分もお待ちになつたらお歸りになるでせう、お待ちになりますか。」といふので、私が待つてゐるといふと、「それでは此方へ」といつて、小使は私の先に立つて歩き出した。前には青い海が眩しい程きら／＼輝いてゐて、いつか見た時よりは水雷艇の數は、どこへ行つたかずつと少な

くなつてゐた。その代り遙か左手の沖に、今まで見たこともない不思議な恰好の船が浮いてゐた。

「あれは何です？」と私が歩きながら聞くと、

「ボカンです、」と前を草鞋のほこりを立てながら歩いて行く小使の老人は答へた。

「え？」と聞き返すと、

「飛行機の母艦です、」といふのだ。

その時、急にその飛行機母艦が舵の邊に水泡を立て出したと思ふと、ゆる／＼と牛のやうに動き出した。私たちはとある白塗の粗末なバラック建の建物の前に着いた。硝子戸が嵌まつてゐて、『控所』と記した札がかゝつてゐる。ふと遙かの空からプロペラの響が傳はつて來た。私は響の方を見上げたが、空の色が眩しくて、とても見つゞけて居られなかつた。小使の老人は空にも地にも何事も起つてゐないやうな冷靜さで、

「こゝでお待ち下さい、」とその硝子戸を一枚開けながらいつた。

「有難う、」と答へて、私がそのまゝ額に手をかざして、プロペラの音の方をうかゞつてゐると、

「百九十一號機かも知れませんな、」と老人はいつた。

「風早はあれに乘つてゐるんですか？」と聞くと、

「はい、さうです、」と彼は答へて、そのまゝ元の道へ引返して行つた。

いつ迄立つてゐても仕様がないし、炎天が暑くもあるので、私は控室の中に入つて休息してゐた。時々硝子戸の外を十人位一組の隊伍を組んだ水兵が通つた。兵曹位の水兵がその隊を指揮してゐた。それから、大勢の靴の音が起つた。硝子戸を開けて首を出すと、今度は二三十人の一隊で、若い士官（少尉か中尉か分らない、）がその先頭に立つてゐた。

一言もいはないで、靴の音だけさして通り過ぎて行つた。私は無意識に、「烟も見えず雲もなく」と口の中で歌つてゐた。この間見た盛んな、馬鹿々々しい宴會の行列の中にも、今見たやうな士官が無數にゐた。が、一人の士官があの時と今の時と、何といふ違ひだらう、といふやうな平凡なことがひどく感心して考へられた。

いつの間にか私はそこのベンチに腰かけて居眠りでもしてゐたと見えて、突然大砲の音を聞いた程驚いた。砂を蹴つて、人の走つて來る音と共に、がた〳〵と硝子戸を勢よく開ける人の姿は、私には咄嗟に潜水服を着た人を思ひ出させた。が、次の瞬間、それが飛行服だと分り、久し振りだな、風早勘吾！

私は笑顔をして立つて行つた。彼は見上げるやうな立派な男になつてゐた。中學時代の如く瘠せて背の高いのが、今の服装によく似合つた。鼻下に小さな髭をたくはえて、笑ふと口のまわりに出來る皺が子供のやうな顔に見せた。

「やア、よく來たな、しばらくだね、」といつて彼は手を出した。優しい顔に似ず、固い手だつた。

「今の飛行機で歸つて來たのか？」

「うむ。まあ、此方へ來い、」といつて、彼は控所から、又海岸を通つて、一町ばかり離れたところにある、その邊に並んでゐる一番の大きな建物の中へ案内して行つた。途々、

「どうしたんちや、突然？」と彼はいつた。

「うむ。横須賀に此頃時々來るもんだから、ふと君たちを思ひ出して、初に矢崎のところへ行つたんだ。」

「矢崎はゐなかつたらう？　演習に行つてる筈だ。しかし今夜あたりは歸つて來るだらう。」

「うむ。君はまだ忙しいんちやないか？」

「もういゝんだ。どうだ、少し休んで、横須賀へ飯でも食ひに行かうか？」

「さう出來るといゝな。」私は願つたりかなつたりだつた。

「貴樣、横須賀に何かあるんぢやないか？」と例の子供のやうな顔に見える笑顔をしていつた。

「馬鹿いへ。まあ、用事がないなら横須賀へ行かう。今日は海の上を飛んでたのか？」

「東京灣の半周だ。いつ死ぬか分らんよ。」

私はふと啞のやうに、受渡しの言葉に困つた。その時、丁度大きな白塗の建物の前に來たので、

「まあはいれよ、」と風早はいつて、石段を上つて行つた。そこの二階の『士官室第何號』といふのに入つて、向ひ合つて腰を下ろした。

「横須賀にはあの時分の連中は君と矢崎と二人か？」

「栗田が水雷學校にゐるよ。」

「なる程、色んな學校があるんだな。さういふのは朝から晩まで水雷でも發射してるやうな譯か？」

「さうでもないが、まあ實習といふやうなものがあつて、その時は毎日毎日その場所へ出かけて行つて、目標を目がけてはうつんだ。一發うつては又出直して、船を走らせながら射つんだ。馬鹿々々しいやうなもんだが、やつとかないと、いざといふ時役に立たんからな。さあ、それぢやアこんなとこにゐても仕樣がないから、出かけようか？」

「うむ、」といつて私も立ち上つた。「三村も海軍だつたらう？」と私は今まで考へることも、好奇心を持つこともなかつた海軍々人といふものに、ひどく興味をそゝられた。

「三村か。あいつは呉で潛水艦に乘つてるよ。」いひながら、窓の傍の洗面鉢の前へ行つて、風早はちやぶ〳〵と雀のやうに簡單に顔を洗つた。それが本當に二掬ひか三掬ひの水しか使はないので、

「随分水を倹約するんだね、此邊は水が少ないのか？」と聞くと、

「いや、さうでもないがね、我々軍艦に乗るものは、いつの間にか水を大事にする癖がつくんだね。」

「ふうん。」私は感嘆した。餘程感嘆したと見えて、その時はそれ程と思はなかつたが、私はその後顔を洗ふ時だけ、――顔を洗ふ時だけだが、――私は極く少しの水で洗ふ癖が、その時以來ついてしまつた。

五分間もかゝらないで、風早は黒の背廣に着更へて「お待遠」といつた。そして、二人でその建物を出て、元の道を門の方へ歩く途でも、私は例の私の女のことや、法界屋の勝栗のことを後廻しにして、

「そしたら、君、潜水艇に乗つてゐるものは、一日水の中へ入つてゐる譯かい？」

「どうしたんだい、探偵見たいに聞くぢやないか。それより貴様は何をしてるんだ？」

「俺か……」お伽話とも、少女小説ともいへなかつた。「小説を書くつもりなんだが、こいつはいつ卒業して、月給をもらふといふ譯に行かないもんでね。……」

「本屋から出版させて、うんと當てたらいゝぢやないか？」

「その小説といふものが中々むづかしいんでね。それやア飛行機も生命がけのもんだらうが、兎に角一と通り術を習へばいゝんだらう小説といふやつはさうは行かないんだ。」

「それやそんなものだが、これで毎日飛ぶ時は、無事に元の所へ歸つて來るかどうか分らんと思つて、機に乗るんだからな。」

「なる程、そいつも矢張り生命がけに違ひないな。しかし、お前の方は目に見えて生命がけといふだけで、俺の仕事の方は目に見えない、それで生命がけなんだよ。」

田浦の驛に着いて、汽車に乘り、横須賀に着いて、風早の案内で水交社に寄つて茶を飲んだ。氣がつくと、軍服でない、風早のやうな背廣を着た男たちは、皆申し合はしたやうに黑の背廣に、黑の中折を被つてゐた。

「軍服でなくても、その服裝が皆同じだから、軍人といふことは分るね、」といふと、

「これか、これは我々仲間では商人服（マーチャンドレッス）といふんだ、」と風早は持前の、自然に具はつた子供のやうな笑顏を浮かべていつた。そして、思ひ出したやうに、「矢崎の奴、歸つてるか聞いて見よう。おい、ボイ、砲術學校に電話をかけて、矢崎中尉の隊はもう歸つて來たか、いつ頃歸るのか聞いてくれ、」と命じた。

すると、都合よく矢崎は歸つてゐて、電話口に出たので、風早は自分で電話に出て、歸つて來ると「矢崎が今すぐこゝへ來るさうだから、少し待つてゝやらう、」といつた。

やがて、矢崎が來てからは、話が方向をすつかり變へて、

「どうだい、その後、小花（リツトルフラワ）は？」と風早は海軍士官獨得の、隱語にもならない直譯英語で尋ねた。

一瞬間、私はその直譯英語の意味が分らなかつたが、彼女や勝栗と交際してゐるうちに、大分海軍士官の遊蕩振りを會得してゐたので、

「いや、女子と小人は度し難いよ、」と矢崎が極り惡さうに答へるのを、

「風早、」と私は傍から口を出して、「君の勝栗（ビクトリアスチエスナット）はどうなんだい？」といふと、

風早は一寸目を丸くして、私の顏を見てゐたが　矢崎の方が早く分つたと見えて、

「此奴、隅におけないぞ、風早、勝栗、ヴイクトリイ・ナットのことをいふんだよ、」と註解する迄もなく、

「おい〳〵　貴樣、隅におけないぞ、」と風早が卓子を叩いて叫んだ。

「しかし　俺たちはそんな面倒なことはいはないんだ、」と矢崎は私の方を向いて、「ヴイタトリアス・チエスナットなんていはないで、ヴイタトリ・ナットで通用するんだ。それにしても、貴樣、どうしてチエスナットを知つてをるんだ？早く白狀してしまへ！」

「まア待てよ、」と私はわざと落着いて、「俺のことも聞いてもらひたいんだ。」

「こいつ、愈々隅におけないぞ！」と風早は例の皮肉笑ひを浮かべて卓子を叩きながらいつた。そして、腕時計を見ながら、矢崎の方に向つて、「おい、ぶらぶら步いて行つたらいゝ加減の時間だらう、行かうか。」といつた。

私は二人の「商人服」を着た海軍士官と共に、（彼等は「商人服」を着てゐても、一見して海軍士官と分るので、この町ではさきにも云つたやうに海軍士官でなければ人ではないといふやうな持て方だつたから、）この恐るべき町を、こんなに氣安く、威張つて步かうとは夢にも思はなかつた。全く『大船に乘つたやうな』氣持だつた。もう陸戰隊の風をした水兵の一隊も、空中に蟠屈してゐる軍艦製造機械も、宿屋の帳場に坐つてゐる人相の惡い亭主も、（何でも水兵上りださうだ、）ことに依つたら大川原高松だつても、恐ろしくなかつた。私の二人の友達は、朝起きたら、今日は命あつて飛行機と共に歸つて來られるか、今日は潛水艦と共に海から無事に浮び上れるか？――眞に水火を恐れぬ人たちだ。二掬ひの水で顏を洗ひ、立つたまゝで熟睡の出來る人たちだ。いつも生き死の上に立つてゐるだけに、どこか私のやうな懦夫を起たせる、何といふか、朗らかさのやうなものがあつた。途々、私はどうして自分が横須賀に來、どうして勝栗を知つてゐるかといふ譯を彼等に話した。單純な性質の彼等は直に私に同情してくれたが、しかし　そんなに愛する女を、どうしてこんな荒い土地で藝者になどしたのか、と尋ねた。

「ヒステリイといつたつて、貴樣がヒステリイにしたんだらう？」と風早はいつた。

「いや、そんな單純なものぢやないんだよ。一と口にいへないがね。しかし、俺がもつと彼女に氣儘な生活をさしてやることが出來たら、幾分かなほるかも知れないがね。といつて、何しろ俺はまだ謂はば砲術學校、水雷學校の初等科といふやうなもんで、小說學校の學生なんだ。自信はあるつもりだが、未だ二年はかゝると思ふんだ。しかし、二年辛抱したら、乾度ものになるつもりなんだ。まあ、やり上げて見るまで、今からそんなことをいつても仕樣がないがね、そんな譯で、喜京といふその女に、公然と會へないもんだから、そんな宿屋にこそ〳〵泊つて、勝栗（ビクトリーナット）などを手先にして會つてゐるといふやうな譯さ。」

「貴樣は中學時代から軟派だつたからな、」と鳳早がいつた。「まアいゝ。まアいゝ、今日は俺たちがちやんと會はしてやるよ。」

「あの富松といふおやぢは因業な奴だからな、」と矢崎はいつた。

「貴樣も經驗があるだらう？」と鳳早がからかふと、

「貴樣だつて、ヴイクトリは富松の家ぢやないか。近いうちに浦賀のドック會社の何とかいふ奴に××式をやられるといふ噂だぞ。」

「なアに、俺が先にやるよ。」

「多度にするか？」と矢崎がいつた。

「よからう。」

「多度といふと、大分遠いんだらう？」と私はいつかの少年に聞いた『多度の鼻』を思ひ出して聞くと、

「貴樣、中々横須賀に通じとるね。さつき大分哀れつぽいことをいつとつたが、內所でもう荒らしとるんぢやないか？」

「馬鹿いへ、それ位ならこんな苦勞をするかい。もつとも、たつた一度『やくも』とかいふ家へ行つたことがあるがね。」
「『やくも』か、新しい家だらう。宴會座敷が眞中にあつて、ぐるつとその廻りが庭になつてゐて、軍艦見たいな家だらう？」と矢崎がいつた。
「そこ迄詳しいことは知らないが、何しろ大きな家だね、僕は何でも小さな、陰氣な部屋に通されたが。」
「あの家はね、我々の宴會料理屋になつてゐるんだが、その宴會座敷のまわりが堀見たいに細い庭で取り卷いてあるんだ。その堀の向側に貴様の入つたやうな部屋が一列に、而も二階建で並んでゐるんだ。あのお陰で、大抵宴會の歸りに沈沒してしまふんぢや、海軍士官の落し穴だよ。少尉の時に通る門だ。」
　そんな話をしてゐるうちに、多度の『松島』といふ家に着いた。もうその邊は人家がまばらで、その大きな料理屋だけが往來から引込んだ海岸に、城のやうに立つてゐた。あたりが暗くて、その家だけが少なくとも十以上の窓に灯がついてゐて、そこから絃歌の聲が洩れて來るのだが、あたりが餘りがらんとしてゐる上に、左手は黒い海だし、後には遠く星空に黒い山の形が刻まれてゐるといふやうな場所なので、軍港らしくない、變に感傷的な景色だつた。が、近づくと、絃歌の聲といつても、軍歌とか、磯かとがいふ唄が荒い手拍子と共にどら聲で歌はれてゐる中に、女たちの金切聲が響いて來るやうな有樣なので、結局、いつかの『やくも』と變つた感じはなかつた。唯、『やくも』のやうな奇抜な建物でないだけで、待合としても、料理屋としても、矢張り軍艦のやうに、馬鹿げて大きいことは共通してゐた。
　早速、私の女の喜京が呼ばれた。小花と、外に風早の馴染らしい藝者と、勝栗なども呼ばれた。
「おい、喜京君、君がこの俺たちの舊い友達のインチとは知らなかつたね、」と矢崎がいふと、
「さう、矢崎さんのお友達なの、驚いたわ、」と小花がいつた。

「おい、勝果、貴樣は始終甘いとこを見せられてるんだらう、」と風早は例の笑顏を彼女の前にゆつと突出しながらいつた
私の女は私がゐたせゐか、人見知りしたやうに、餘り口數をきかなかつた。そのうち彼女の姿が座敷から見えなくなつたのを私は氣がついてゐたが、どこか外の座敷に挨拶にでも行つたのだらうと思ひ、それにさういふ座敷では彼女がゐない方が氣樂だつたので、私は別に氣にかけないでゐると、
「あなた、一寸、」と女中が誰を呼ぶのかと疑ふ迄もなく、たしかに私を招くらしい。私が躊躇してゐると、
「行つてやれよ、」と風早が背中を突くので、思ひ切つて立つて行つた。そして先に立つて行く女中の後について、階下に下り、長い廊下を幾つか廻つて、いつの間にか餘りあたりが靜かなので、氣味が惡くなつた時分に、とある部屋の前で女中が立止つたので、私も立ち止まつた。
「あなた、」と彼女は私の方を向いたと思ふと、次の瞬間入口の襖を開けて、輕く私のからだをその中に突き入れ、ぴしやりと後を閉めてしまつた。目の前に屛風が向う向きに立てゝあつて、屛風の向うに、夜のものゝ上に、盛裝したまゝの私の女が坐つてゐるのが見えた。
「びつくりしたらう？」といひながら、私は彼女の傍へ行つて倒れるやうに坐つて、「隨分すゝめられて飮んでたやうだが、苦しいんぢやない？」と顏を寄せていふと、彼女はかぶりを振つた。
が、しばらく默つてゐた彼女は靑白い顏を上げて、
「お兄ちやん、その窓を開けてごらん、」といつた。
障子を開けて、雨戶を開けると、目の下に眞黑な海が迫つてゐた。が、目を上げると、港の方は、何かあるやうに、彼方にも此方にも點々とあかりがついてゐた。陸にも、海にも。次第に暗に馴れた目で見ると、建物も、煙突も、山も、軍艦も、ランチも、それぞれ黑い形で夜の暗の中に刻まれて見えた。いつの間にか、彼女が私の傍に立つてゐて、

「恐い港でせう、」といつた。

その景色を、私たちは翌朝、早く、明け方の光の中に再び眺めた。夜の時と違つて、建物も、煙突も、山も、軍艦も、それぞれ指摘することが出來た。

「あれが停車場ね。ほら、あそこに見える白い軍艦がお兄ちやんの好きな『橋立』よ、」などと彼女はいつた。

間もなく女中の起きてゐる氣配がしたので、呼んで、矢崎と風早のことを聞くと、

「風早さんは學校が遠いから、一番の汽車でお歸りになりました。矢崎さんももう起きていらつしやいます、」といふ答だつた。

「なる程、軍人は早起だな、」と私は感歎していつた。

「小花さんは？」と彼女が聞くと、

「小花さんは昨夜のうちにお歸りになりました、」

「おやア、矢崎一人？」と私は聞いた。

二人で彼の部屋へ行つて見ると、矢崎は新聞の上に寢間着のまゝで、昨日は氣がつかなかつたが、小型の四角な鞄を、胡坐の上に載せて、その上に延べた紙に頻りに地圖のやうなものを書いてゐた。

「何だ、何してるんだ？」と私が聞くと、

「いや、戰術といふ奴なんだよ。此間うち演習に行つてたらう、あの時の奴だ。俺の方の軍が少し成績が惡かつたんだ、」と彼はいひながら、笑談もいはないで、鉛筆でその地圖の上にしるしのやうなものをつけたり、紙の端に代數のやうな計算をすることをつゞけてゐた。

風早は飛行機に乘りに追濱に歸り、こいつは待合で、負けた戰術の考察をしてゐる。俺は何をしてゐるのだ！と私は思はない譯には行かなかつた。

（なれは前篇です。作者）



# 乘合

宮嶋資夫

小口落し禁止と云ふ法令の實現に引續いて、新場橋警察の手が、兜町の變則な店の上に伸びて行つた。最初は帳簿が檢閲された。それから店員が引つ張られた。昨日も今日も、二十人、三十人と、警察へ引致される。そしてとう／＼今まで、公然と行はれてゐた直取引と云ふ取引が、今度の署長によつて賭博だと言明されてしまつたのだ。賭博を公然と行ふわけには行かない。そこでその取引も停止された。かうして何十軒かの店が、休業狀態に陷つてしまひ、何百人かの店員が、あぶれ者の失業者となつてしまつたのであつた。

『署長の權限位を以て、今迄の商習慣を破壞するなんて怪しからん』さう云つて憤慨する者もあつたが、それはたゞさういふだけの、ごまめの齒ぎしりに過ぎない事だつた。利を以て人々の集る場所である。勞働爭議や、演說會とは質が違つた。團結もなかつたし、抗議を申込む理由もなかつた。況して一番肝腎の金を持つて來る客人達は、さういふ危險な場所を嫌つた。盛んだつたこの町も、一時に火の消えた

やうにひつそりと靜かになつてしまつたのであつた。

　眞野利雄も、そのまき添を喰つた一人だつた。彼は幸ひに、帳簿を檢べられたり、警察に引かれるやうな憂目には會はなかつたが、それまで彼がやつてゐた××通信社と云ふ通信の名を利用して、直仲買の眞似をしてゐた商賣が上つてしまつて、收入の道は完全に途切れてしまつたのであつた。

　利雄は然し格別悲觀もしなかつた。と云つて、彼には働らかないでも喰つて行ける財産があるでもなく、おまけに彼の後ろには、伯父や伯母や從兄弟や彼の兄弟や、十五六人の人間が生活してる家庭をさへ控へてゐたが、取引が停止になつた時、

『この方が却つて好い。これから俺もまともにぶつかる』と彼は心で呟いた。そして、一度この泡く錢の入る商賣を離れると、みぢめに落ちぶれて行く人達が、彼の周圍で歎いたり妙に憤慨したりするのを尻目にかけて、

『ふゝん』と笑つた。彼はそれだけ、生活に對する才能の自信も無論持つてゐた。強てこの町で暮さうと考へれば、何とか轉身の法もあつたが、それよりも、彼はこの頃、たゞ徒らに惰性で引きづられるやうな生活に、全く嫌厭を感じてゐた。

『さうだ、これを機會にして、俺は本當に自分の進む方へ進まなければ』

　それから後も、利雄は毎日店に通つて來たが、善後策の相談にも乘らなかつた。強て誰かゞ相談をしかけると、

『駄目だよ君、こんな所にこびりついてゐたつて何になるものか、大體取引所なんて云ふものが、不合理極まる存在なのだ。だから、お互ひにいつでもこんな目に會ふんだよ。それよりも今度やるなら、もつと完全な、どんな株でも取引出來る完全な奴を國によつ立てゝ、こんなものはぶつつぶすんだ』、彼はさう云つて煙に卷いた。現に一年半程前に、利

雄はさういふ計畫を立てゝ、ある點迄實現しさうになつた事があつた。それだけに聞く者は、『成る程』と云つて引き下つた。然し、事實利雄の心は、もうそれ程に取引所にも執着してゐなかつた。

六月のはじめだつた。その日も、初夏の日の光が爽かに町の上をてらしてゐた。いつもならばもう、『一カイ二ヤリ、二カイ三ヤリ』と相場を通す小僧の聲が、町から町、角から角へ、勇しく響き渡る時刻であるのに、その聲さへも聞へないし、眼を光らせて、歩き廻る人もなかつた。職を失つた現物屋の若い衆らしい男達が、呪はしさうな眼つきをして、相變らず忙しさうな大きな店の前をぢろりと睨んで通つて行くと、そこから出て來た店員の眼には嘲りらしい色があつた。

利雄の店にも二三人の人が集つてゐた。彼等は利雄の伯父の肥田周造を相手にして、何かしきりと話してゐた。肥田はその昔將軍と謂はれた時分には、取引所の重役もした事がある男なので、彼に相談したならば、何か利益のある結果でも得られはしないかと云ふ樣子だつた。

利雄はもうきまり切つた、愚痴話を聞くのがいやなので、店の隅によりかゝつて、昨日岩井から借りた本を讀んでゐた。

『ねえ大將、これぢやあ何です、取引所も餘り人を馬鹿にしてると云ふもんです』來合せた仲間の中で一番雄辯らしい木田が、鬚だらけの顏にぎろ／＼する眼を光らせて、如何にも憤慨に堪えない調子で云つた。

『もし政府で差金取引がいけないつていふのなら、定期取引だつて、差金勘定をやつてゐまさ。それを何でさ、直だけがいけないなんて、そんな位なら、何も彼も實株でやる、現物ばかりにしたら好いんでさ。金のある奴にはいくらでも出來る定期だけを許しておいて、直はいけねえなんて、そんな馬鹿な話があるもんぢやねえ』木田が聲を勵ました

時、

『そりやあ何だよ、口錢の入り方が逆ふから仕方がねえんだ』 株取屋の中川が口をはさんだ。

『へ、つ口錢？ そんなら何か口錢が安けりやバクチになつて、口錢さへ高けりやバクチにはならないつて、そんな君バカな事が』 木田は皮肉らしい聲で高く笑つた。

『そりやさうさ、お花を引いたつてさうぢやねえか、現物屋の二階でやつてりや手がはいるが、誰かの別莊へでも行つてやつてて見ねえ、はゝゝまあ一口に云やそんなもんだ』

『バカにしてやがら』 木田は吐き出すやうな調子で云つたが、

「そんな事ぢや君、俺たちは安心して商賣が出來やしねえ。第一、仲買なんて云ふ奴が、皆な揃つて薄情なんだ。彼奴等だつて、元は皆な俺達と同じやうに、首に鞄をかけて駈け出してゐた癖に、こんな時には取引所に文句一つ云はねえんだから』

『だからまあ早く金を儲けて仲買の大將になるんだな。それでなけりや取引所の理事にでもよ』 中川は投げるやうにふゝんと笑つた。

『つまらない事を云つてやがら、それどころぢやねえやな、こつちは今、鼻の下が乾上るか餓死するかつて境ぢやねえか、ねえ大將、何かかう甘いお考へはありませんかね』 さつきから默つてゐた、客引の坂本が肥田の方へ話を向けた。

肥田はもう五十六七のでつぷり肥つた品の好い顔をした男だつた。今は零落してゐるけれど、昔は銀行の頭取や幾つかの會社の重役をしてゐただけに、どこか物靜かな落ついたところがあつた。さつきから片腕を組んで敷島を吹かしながら、彼等の話を子供の喧嘩をでも見るやうに、薄笑ひを洩しながら聞いてゐたが、坂本にさう云はれると、

『さあ』と云つて灰を一つ落して、
『何しろこれも時勢だからな』と靜かに云ふと、右の手を額に押しあて、ぢつと考へる風であつたが、
『これは何だな、今ここで仲買に相談をして見た所で、取引所に談判しても、結局物になりさうもありませんね、それよりも、直に代る現物の取引場でも別に作る運動をして、外から動かさなければ、取引所でもまともに考へはしなからう』
『なるほど』中川はまともらしくうなづいた。
『それには大將、何か甘いお考へでも』と坂本が訊き直すと、
『おい利雄』肥田は利雄の方をふり向いて、『いつかの趣意書はまだあつたかな』と訊ねた。
『はあ、あります』先刻から皆なの話を、面白くもなくちら〳〵と聞いてゐた利雄は、立ち上るとすぐに戸棚から、半紙を綴つた趣意書を取り出して、肥田のそばに持つて來た。
『ふん、これだな』肥田は一寸一枚めくつて見て、すぐにそれを木田に渡した。木田は熱心にそれを讀み初めた。そこには現在の取引所の制度の不完全な事から、外國の會員組織や何かの例を引いて、一切を現物取引にしない限り、投機に流れる惡弊を指摘して、取引所改善の急から、その方法までを精細に書いてあつた。
『面白い』と木田が云つた。中川も坂本もすぐと讀んだ。
『どうでせうか一つ、これでもつて運動を起したら』と中川が云つた時、
『やつて見たら好いでせう』利雄はにべもなくそれに答へた。
『だつて重野さん、あなたが折角かうやつて趣意書までこさへたんですから、あなたが一つ先きに立つて骨を折つてく

れませんか。それに何ですぜ、こいつが、甘く行きや可なり金も儲かるし、なあに甘く行かなくつたつて、運動費位相當に集りますよ。そこで何でさ、あたし達も働かせて貰ひますから、どうです一つ』中川は媚を含んだ態度で云つた。

『あたしは御免蒙る』利雄は再びきつぱり斷つてから、

『その代りその趣意書は君達に上げるから、君達がやつて見たら好いでせう。中川君の云ふ通り、甘く行けば大した金も儲かるし、行かなくつても、運動費位はきつと取れる』

『そりやいけませんよ利ちやん』子供の時からの知合で、可なり前まで惡い遊びの仲間でもあり、そのための金策の參謀にもよくなつた木田は、甘つたるい口調で呼びかけて、

『何しろこんな仕事は、肝腎の筋書を書いた人が一緒にやつてくれなけりや甘く行くもんぢやありませんからね。それに何でさ、あなただつて、直が休みになれば何かやらなきやならないんでせう。それなら一つ、この仕事の先きに立つて、やつてくれゝば好いぢやありませんか、あなただつて、折角これまで考へついた仕事ぢやありませんか』

『駄目だよ木田君』利雄はにやりと笑つたが、

『もう少し前だとね、あたしもやる氣があつたかも知れないさ。けれどももう今日では全くいやだ。取引所位、改善したつてしなくつたつて、大した問題ぢやありやしない。それより僕には、まだほかに考へなけりやならない事があるんだ。』

『どうかしてますね、今日は利ちやん』木田は不思議さうに利雄の顏を眺めかへした。

『あゝどうかしてる』と利雄は云つて、伯父の方をちらりと見たが、

『全く君、よく考へて見る時だぜ。直がなくなつたと云ふのは丁度好い時なんだ。さつき、君達は、定期は金持だけが

やるとか、仲買が威張つてゐるとか云つたけど、君達だつて金持にもなりたけりや、仲買にもなりたいんだ。金を持つてる奴が威張るから金持になりたいんだ。みんな同じこつたよ。定期は投機だから現物を、なんて云つても結局は同じ事さ。金を持つてる者が相場を張る。ない奴には張らせない。そこで君達は、我々が困る、なんて云ふけれど、君達が兜町を驅け廻つて歩かなくつても、世間ではちつとも困らないんだ。だから何百何千と云ふ人が、職業を失つたつて、何一つ言ふ事が出來やしないで、たゞかうやつて愚痴をこぼしてるだけの話ぢやないか。こんなとこに僕も、三十七までもぶら〳〵年を過して來た事が、この頃は全くつまらなくなつて來てね』利雄は自分の頭にもやついてゐる、變な想ひを一時に吐き出すやうに云つた。

『そりやあんた理屈ですよ。そんな事を云つてた日にや商賣は出來やしない』中川はまるで見當のつかない彼の話に反對した。

『はゝ、さうでないさ。今に判るよ、君達が、そんな事を言つてる中に世の中はどん〳〵變つてゆくんだ。ロシアを見給へ。すつかり變つてしまつたぢやないか。この間も東海道筋の金持で、どうも山林や田地を財産に持つてちや危險だから、山林を賣つて株を買ふんだつて心配して來た人があつたが、山林を持つてゝ危險な時分にや、株券なんかなくなつてしまふつて云つてやつたんだがね』

『そりや無茶だ』と阪本が叫んだ。

『あなたのやうな事を言つた日にや、第一取引所がなくなつて、場が立たなくなるぢやありませんか』中川は詰め寄るやうな調子で言つた。が彼の言葉には、世にも許し難い冒瀆者を責るがやうな響きがあつた。

『場が立たない』利雄は思はず訊き返したが、それと同時に

『あはゝゝ』と大きな聲で笑ひ出した。彼の笑ひは長く續いた。中川と阪本は、眼に涙をためて笑ふ利雄の顏を呆氣に取られて眺めてゐたが、木田だけは何か考へるやうに、ぢつと下を向いてゐた。

『どうしても駄目ですかね』しばらくたつて利雄の笑ひがおさまると、木田は眞面目な調子で訊ねた。

『本當さ』と利雄はきつぱり云つて、『全く僕はもうかういふ事はやる氣がなくなつたんだ。然し、その趣意書は甘く利用すれば、どうにか物になるかも知れないからね、君が、やつて見たら好いぢやないか』彼も木田には親しみを失つてゐなかつたが、

『はゝ、何しろ金儲けが嫌ひな男だから困つたものだ』今まで默つてゐた肥田が、重苦しい調子で、皮肉らしくぽつりと云つた。

利雄と肥田との性格の相違から、何かの議論になると伯父の與へる結論はいつもそれだつた。利雄は心でまたかと思つた。彼は木田の顏を見てちらりと笑ふと、

『まあやつて見給へ』と云ひすてゝ立ち上つた。そしてそのまゝ二階へ上つてしまつた。

洋館風の二階の窓越に、坂本公園が一目に見渡せた。彼はその窓際の椅子にどかりと腰を下して、初夏の光に輝く木木の若葉を眺めてゐた。が、考へるともなく今の話を考へると、一人して腹を抱へて笑ひ出したくなつてくるのだつた。

『それぢや、場が立たなくなるぢやありませんか』と云つた中川の言葉が、どう考へても可笑しかつた。

女郎屋の女は女郎らしい見解だけで人を見るし、藝妓は藝妓のやうに、御祝儀、花、粋、通、それ以外に世界のないやうな顏をして平氣で暮してゐる。中川も丁度それに似たものだと彼は考へた。若い時にはどうかして、その風習に

はまらうとして苦心した自分を顧みて、彼はふと苦笑した。

この小さな町で暮してゐる人達は、丁度あの狭い廓の中に閉ぢこめられてゐる人間みたいに、この町ばかりが、世界の凡てを支配してゐるやうに思ひ込んでしまつてゐる。その癖二言目には、世界の大勢だとか、世界的變動だとか口にするけれど、それはたゞ眼前の相場の動きに影響する間だけの話であつて、それよりほかには、自分の立つてゐる場所以外には何一つ眼が屆いてはゐないのだ。利雄はそれを考へると可笑しくつて堪らなかつた。いつか鹽水港製糖と云ふ株がはじめて場にかゝつた時、誰かゞ笑談に、『あれは鹽水から砂糖を取るのだ』と說明したら、『それなら儲かるだらう』と馳け出して買ひに行つた男もあつた。凡てが、それなのだ。金融機關の中樞だの何のと云つたつて、皆なそんな男の集りなのだ。平素から誰にともなく抱いてる反感が、堪らなく彼を可笑しくした。利雄は獨り、聲を忍んでくつくつと笑つてゐたが、階子段に誰かの足音がしたので、彼は强て眞面目な顏に返つて、椅子に肘をもたせて、窓の方へ首を伸した。

『おひまですか』と云つて、上つて來たのはさつき下にゐた連中でなく、子供の時から彼の家で使つてゐた水谷と云ふ、まだ二十四五の若い男だつた。あつさりした絣の着物に角帶をしめて、如何にも株屋らしい姿をした水谷は、扇子をぱちりといはせながらにこりと笑つて閾のそとに立つてゐたが、

『あゝ君か、いま考へ事をしてゐたんでね、まあこつちへお入り』と前の椅子をすゝめると、

『え有難う』と禮をして、『どうも仕樣が、ありませんねえこんな風ぢや』と云ひながら腰を下した。

『仕方がないさ、どうせまともな事をして飯を喰つてる人間の集りぢやないんだからな』

『へゝ、さう言へばまあそうですけれど。それにしてもどうもこれぢややり切れませんや』

水谷はまた扇子をぱちりといはせたが、彼は、何か思ひ出したやうににやりと笑つて、
「實はね、今日は面白い話を聞いて來たんですがね」と如何にも珍らしい事のあるやうな顔をした。
「面白い話? ふゝんどんなこと」重野は椅子をのり出した。
「大したこつちやないんですよ、だけどまあ退屈な時には面白い話ですよ」
「大分面白さうだね」
「へゝ、下らないこつてすがね、あの石川さんね、あの人は何でせう、照吉と云ふ女を買つてゐるんでせう」と水谷が云ひ出した。

重野は最初、また現物の賣物とか何とか云ふ事かと考へて、それほど興味ものらなかつたが、照吉と云はれると、彼は何か別な興味に引かされて、
「ふーん、それが」とまた一膝のり出した。石川と云ふのは、利雄の本宅の近くで店を出してゐる、唐物屋の主人だつた。商人ではあるけれど、英文科を出た男で、江戸趣味にも興味を持ち、新しい文學も愛好する、古いやうな新しいやうな男だつた。
「その照吉がどうしたんだね」重野はまた訊き返した。
「で、あれはなんでせう、石川さんが旦那になつてゐるんですね」今度は水谷が念を押すやうに訊き直した。
[redacted]それからも一本にさせてやつて毎月手當
ちやつてゐるんだが、それがどうかしたのかね」
「えゝそれだからです。それを何ですよ、⊖の店の芳公つて云ふ若い奴がね、どうも好い中になつてしまつたらしいの

です。そいつも何で、それがために金を使つて足を出して、店の方も工合が悪くなつたもんだから、あつしのとこへ相談に來たんですがね、いろ／＼話を聞いて見ると、あの照吉と仲がよくなつたために店の方をしくじつたんだが、この頃ではそんな風で、照吉の方で身上りをしてるんだつて、とう／＼惚氣まで聞かせやがつたんです。何でも先にあなたから、照吉は石川さんが世話を焼いてるつて話を聞いてたもんですから、それでちよいとお知らせに來たんですが』と云つて水谷は、可笑しさうににやりと笑つた。

『はゝこりや面白いことになつて來たね、石川に話したら驚くだろ、何しろあんな鼻つたらしみたいな女に、五百兩の千兩のつて金を出してバカ氣たことだから止せつて云ふのに、先生すつかり逆上せてゐたんだからな、その位のことは却つて藥になつて好いだらう。然し何かね、その相手の男つて云ふのはどんな男なんだね』

『そいつが、何ですよ、またバカ／＼しい、まだひよつ子な奴なんですからね、店の方が駄目なら何とかして、女とも話をつけたら好いぢやないかつて云ふと、涙を一杯眼にためてゐるんですからね、何しろまだ十八だつて云ふんですもの』

『ふゝん、十八、さうかね』と重野はぢつと眼をつぶつた。今はもう色でも慾でもない、得體の知れない疑惑にぶつかつて苦んでゐる彼自身も、十四五年前には藝妓と馳落ちもした事があり、朝鮮に行けばそこで出來た女を連れて、そつと內地に逃げても來た。これまでの生活が、たゞさうした情事ばかりを對象に生きて來た自分であるのに、今はもうまるでそれ等と係りのない、別種の世界に住んでゐる自分を、不思議な氣持で彼は顧みた。

『大層考へ込みますね、何か思ひ出したんぢやありませんか』水谷はさう云つてにこりと笑つた。

『笑談云つちやいけない、君こそさうだろ』重野も水谷が彼の店をよしてから引かせた女に逃げられて、氣遂ひのや

うになつてゐたのを、小新聞の漫畫にまでかかれた事のあるのを思ひ出してにやりと笑つたが、自分は床へ上つて好い心持になつて語つてゐた

『石川の奴、この前の常盤津のおさらひの時、照吉を引つ張つて來て、面白さうにげらげら笑つた。かその話を聞いたら驚くだろ』彼はさう云つてまた面白さうにげらげら笑つた。

『然し石川さんには氣の毒ですよ、何でもこの頃では、女の方で入れ上げてゐるつて云ふんですから、何にも知らないであの人が皆な出してるに違ひありませんよ』水谷が云つたので、

『そりやさうだね』と重野も眞顏に返つたが、『どうせ藝妓のことだからな、男位こさへるだらうよ、然しまあ何て云ふか、あとで行つて話して見よう。』その都合で、君にまた何か頼むかも知れないから、明日でも來て見てくれ給へ』

『えゝ來ますとも、どうせあたしもひまなんですから』それから水谷はまた、取引所の不當なことや、今度の事件は本仲買のある者の指金に出たことだとか話し出したが、重野が一向興味の乘つた顏をしないので、

『それではいづれまた明日』と云つて歸つて行つた。

その日の夕方、重野は晩飯を早くすますと石川の店へ訪ねて行つた。表通りにある、かなり大きな唐物屋の帳場には、小粋な細君が坐つてゐたが、重野の顏を見ると、

『あなた、重野さんがいらつしてよ』と奧の方へ大きく云つた。

『どうぞこちらへ』石川の大きな聲がしたのでいつも來つけてゐる彼は、さつさと奥へ通つて行つた。

[redacted]つてゐた。その狹い部屋の一方には、オランダだとかトルコだとかの古い陶器の壺が並べられ、一方の書棚には、和綴の本が大部をしめて、その傍に新刊の文學書や英書などがぎつしりとつまつてゐた。隅の方には、古風な小さい机があつて、机の上にも徳川時代の煙草の歷史

を書いた本や英語の小說本が並べてあつて、そのわきに、社會問題研究が十五六册重ねてあつた。石川は重野の顏を見ると、

『や、先夜はどうも失禮』と几帳面に挨拶して、

『どう、その後、場の方は？』と心配さうに訊ねた。

『どうだつて好いさ。どうせこつちにやる氣がないんだから』

『それが、いけないよ君、そんなことを云はないで商賣だから熱心にやり給へ』

重野は石川の世帶じみた口調を聞くと可笑しくなつて心で一寸笑つたが、

『君、この本はもうすつかり讀んだ？』と机のわきに重ねてある。社會問題研究に手をおいた。

『あゝそれ？、それはまだ讀まないが、もう役に立つたから好いんだよ。お返しするよ』

『役に立つたつて、可笑しいね』重野は不思議さうな顏をした。

『いゝえね、それにはわけがあるんだ。一昨夜の晩ね、山内君が遊びに來たんだよ、その時あの人がこの本を見てね。や君もこれを取つてるのか、つて訊くんだろ、僕も一寸何だつたから、あゝはじめつからずつと取つてるつて言つたらね、はゝあ、つて感心したよ、さうして、深川でこれを取つてるのは僕一人かと思つから君も取つてゐるんだ。さうすると深川ではきつと君と僕と二人だけだつて言つてゐたつけ、お蔭で大變面目を施したよ、どうも有難う』さう言つて、石川は無邪氣らしくにこりと笑つた。

重野は一寸呆れたが、

『そいつは面白いね』と同じく笑つた。變に負惜みの強い男だと彼は心で思つた。いつか、ロシア革命のことをこの男

に話して聞かせた事があつた。半年程前の冬だつた。重野の話を、恐ろしさうな顔をして石川は聞いてゐたが、すつかり聞き終ると、

『君、日本にもそんな事が起つたら大變だね』と聲を落して云つた。

『あゝいつ來るか判らないよ』からかひ半分に重野が答へると、

『それぢや僕はかうしよう。厚いラシャの外套をこさへておくんだ。それから、お金はみんな金貨とかへとくんだね。さうしてピストルを一挺買つておかう。ねえ君、さうすれば大丈夫だろ』と眞顔になつて云ふのであつた。

ロシアの話を聞いたゞけに、その時が、冬であつたとは云へ、厚いラシャの外套は面白いと重野は思つた。それから金貨にピストル。この男はどこまで無邪氣なのか、それとも子供らしい負惜みだけが強いのか、一週間ほど前、岩井に返すためにこのパンフレットを持つて歩つた時に、

『はあこれか、河上博士のね、これは是非讀みたいと思つてゐたんだから、四五日貸しておいてくれ給へ』とその晩にも讀み通してしまふやうに熱心な態度で云つた男が、今日はもう、山内に對抗し得た滿足だけで、もう返しても好いと云ふのだ。重野は笑ふにも笑へなかつた。

『君、今夜は少し話があるんだが、一寸一緒にそとへ出ないか』少時たつて重野が云つた。

『なに、なにか特別の用事なの？』

『大したことぢやないんだが、家では一寸工合が惡いのだ』

『さう。それなら行かう』石川は一寸帶をしめ直して、すぐに出て來た。

二人は行きつけのカフエーに入つた。幸ひに客も少く、蓄音器ばかりが唸りを立てゝ廻つてゐた。重野は卓子の上に

兩肘をついて顏をつき出して、

『君、照吉が、いろをこしらへてゐるぜ』といきなり云つた。石川は一寸驚いた顏をしたが、『へゝえ』と云つて、また何かいたづらでもするのだらうと云ふ風に、『ふゝん』と笑つて、『何かそんな事實でもあるのかね』と强て冷い調子で訊ねた。

『事實つて君實際だよ、實際だから僕は云ひに來たんだ』

『本當かねえ、私はどうも本當とは思へないがね』と云つたが、『然し、あゝした商賣をする女の事だから、斷じてないとは云へまいがね、まあどんな事をしたつて云ふのさ』彼はてんで信じない風だつた。

『今日僕は聞いたんだよ、家の店にゐた水谷ね、あれがわざ／＼知らせに來たんだ。相手は丸一の店にゐる芳公つて云ふ十八になる男ださうだがね』重野は今日水谷から聞いた事をみんな話した。さうして

『だから君、僕はあんな女に馬鹿氣た金を出すのはよせつて云つたんだ。それを君は何でもやるつて言ふから、男女の事は、はたから餘り何か言へないから引き下つたんだが、實際つまらない話ぢやないか』

『さうかねえ』話を聞き終ると石川はしばらくぢつと考へてゐたが、

『私はどうもまだすつかり信じ切れないね、然し、それなら今夜、これから女のとこへ行つて訊いて見よう』すぐにも立ち上りさうな形をした。

『馬鹿なことを、馬鹿なことを云つちや駄目だよ』重野はあはてゝ遮つた。

『考へても見給へ、今夜君が行つて訊いたところで、何で女がえゝさうですつて云ふものか、君にも似合はないね、そんな事をすれば、女はすぐに男に話すから、それですつかり蓋をされてしまふばかりさ。然し、君は僕の言つたゞけで

は、どうしても信じないと云ふのだね』
『あゝ私は信じない』石川はきつぱり言つた。
『よろしい』平野は少時考へたが、
『よし、それぢや明後日僕の店へ來てくれ給へ、斷じてあるかないか、そのときはつきり判るやうにして見せやう』彼は何か、思ひついた風に云つた。
『あゝ見せてくれ給へ、それがはつきり判れば僕だつて信じないわけには行かないからね。それで何時頃行つたら好いんだらう』
『さあ、後場の引け頃が、好いだらうから、二時か三時頃に來てくれ給へ、きつと判るやうにしておくから間違ひなくね』
『あゝきつと行くよ』
『それから斷つておくけれど、それまでに女に逢つて、先きに話をしてしまつちや駄目だぜ』
『そんなことをするもんか、僕だつて男だもの』
それつきり二人はその話にはふれなかつた。カフエーを出て二人は町をぶらついた。石川に別れて平野は薄暗い河岸通りを、一人ゆつくり歩いてゐた。河からくる涼しい風が、浴衣を透して氣持よく吹いて通つた。
平野は實際中川の云つたことを思ひ出すと、獨り可笑しくなつて思はず笑つた。が然し、彼はかうして中川のことを笑つたり、他愛もない石川の情事などにかゝり合つて、ひまをつぶしてる自分自身をふと考へると、何をしたら好いのか見當のつかない、自分に對して珍らしく變に寂しい氣持になつた。

『これも年の加減か』利雄はどんな植民地で、一人でぽつんと暮してゐた時にも、こんな氣持になつた事のない自分をせゝら笑つた。

『直が、なくなつたのが、丁度好いのだ、今度こそきつと方針をたてゝ見せる』彼は自分で自分を勵まして、家の方へ歸つて行つた。

翌日も利雄の店では、伯父の肥田を中心にして、彼の書いた趣意書を基に、何かしきりに相談してゐた。店にはまた、出入する人の數が俄かにふへて、何か論じ合ふ聲も高くなつて來たので、彼は二階に上つたまゝ一人で讀書に耽つてゐた。

午後になつて、昨日約束した通り水谷がやつて來ると、

『如何でした石川さんは』愛嬌のある笑ひをしてすぐに訊ねた。

『お話にならないよ、バカ〳〵しくつて俺も少し腹が立つた』利雄は昨夜石川に逢つた始末をすつかり話した。さうして、

『ところでどうだね、その芳公つて云ふのを明日の三時頃、この二階へ連れて來てくれないか、さうして君が、その何だ、何とかうまく話を釣り出して、女の事を喋舌らせてくれないか。それを僕が、石川と一緒に隣りの部屋にそつと引つ込んでゐて彼奴にも聞かせたら、いくら自惚が強いからつて、大抵眼が醒めると思ふんだがね』利雄は少し意地の惡い笑ひを浮べた。

『面白うございますね、承知しました。なあにわけはありませんよ。芳公の奴はいま店の方の話もあるし、女の事もいろ

いろ相談を持ちかけて來てゐるんですから、私が訊けばなんでも云ひまさ。連れて來ませう』と水谷は云つたが、

『然し何ですね、惚れるとそんなにも信用するもんですかね、石川さんだつてもう三十五六ぢやありませんか』如何にも解らない顔をした。

『それだからだよ、それだから夢中になるのさ、若い女が大事に見えるだらうからな。けれども、それも本當に心から信じ切つてるのかどうか僕には解らない、あの男はあれで、中々負惜みが强いからね、おいそれと承知するわけには行かないんだろ』

『それはさうかも知れませんね、然しともかくも大したもんですよ、明日連れて來て喋舌らせればすぐに解りまさ、ぢやいづれ明日また』

と云つて水谷は歸つて行つた。が、それと入れ違ひに、岩井が利雄の部屋に入つて來た。岩井は利雄より二つ三つ年下で、ずつと以前、利雄の伯父がまだ仲買をしてゐた時分、店員をしてゐたが、お定りの通り女のためにしくじつて、店を出されてしまつた男だつた。その時分、岩井は格別惡い事をしたでもなく、たゞ女に熱くなつたと云ふだけで、利雄が主唱者となつて店を出したといふ事をかなり恨んでゐた風であつたが、それから後十四五年の年月が二人の性格を全く變つたものにしてしまつた。

去年の夏、岩井はまたひよつくりこの店に現はれた。さうして利雄といろ〳〵話し合つた時、

『私はあの時分、隨分あなたを恨んでゐました。それに、道樂をするからいけないつて、私を追ひ出したあなたが、それから一年か二年とたゝない中に藝妓を連れて駈落ちまでしたんですからね、そんな位なら、こつちの事ももう少し解つてくれてもよかつたものだと思つたんです。お陰で隨分苦勞もしました』

皮肉らしく笑つて云つた。

『仕方がないさ、人間つてそんなもんだよ、僕も矢つ張り道樂はしたかつたのだが、君の方で先きにやつたものだから、自分もやつちや店の取締りがつかないと思つてね。それで一生懸命に我慢をしてゐたのさ、それが君が、ゐなくなつたから、ほつと安心すると氣がゆるんで、今度は自分で法返しがつかなくなつてしまつたんだ。まあさういふ成行だつたのさ』

　それで二人は心がとけて愉快に笑つた。それから利雄が、通信社の名を利用して、直仲買の眞似をやり初める時にも、岩井はそれを一緒に初めた。

『少し金が欲しいんです。別段金を儲けて仲買にならうつて氣もないんですが』と云つて、場内で利雄の代りをやつてゐた。さうして、金も少しは儲けたやうであつたが、入ればすぐに酒に代つた。

『いけませんねどうもかういふ商賣は、何しろ一日、賣つたの買つたの、高いか安いかつてな事ばかり考へてゐるものだから、氣が荒んで、夕方になると一杯やりたくなつてくるし、飲むと無茶苦茶になるもんですから、思つただけの金だつて仲々出來やしませんや』

　利雄が少し意見すると、岩井はさう云つて苦笑した。

『金を儲ける奴は、何より金が大切な奴でなければ儲かりませんよ、塵紙を伸ばすやうな工合に、紙幣の皺でもちやんと伸ばして、入つたら出さないぞつて云ふ位、金を可愛がる奴でなければ儲かりません、それでなければ、餘程意志の強い者でないと、或る時機の間はぢつと我慢するなんてなほ出來ない。私のやうな者ぢや、どうかした拍子に、どかりと思ひがけない金でも入つて來なけりやとても駄目です。何しろ意志薄弱ですからね』とも云つてゐた。

いつか利雄が、以前店にゐた頃の岩井は、小說が好きで、利雄の持つてゐた帝國文庫などを借りては讀んでゐた事を思ひ出して、

『この頃、何か面白い小說があるかね』と訊ねたら、

『ありますよ、面白い奴が』と云つて、その翌日、勞働者セヴィリオフを持つて來た。それから後も探偵小說じみた物を持つてくるかと思ふと、理屈つぽい本も持つて來た。利雄も中學を出た頃は、その時分の新しい俳句の先輩の門下になつたほど、文學は好きであつたが、久しく絶えてゐた讀書慾を刺激されて、とう〳〵今度は自分から、近所の圖書館の本を借り出して讀むやうになつてしまつた。

直取引が停止になつた時も、岩井は一寸弱つた顏をしたが、

『矢つ張りこんたことはない方が好いのかも知れません』と案外あつさり諦めた顏をして歸つたが、その翌朝、

『どうですこんな本は』と云つて持つて來たのが、いま利雄の讀んでゐる資本論解說だつた。

その日も岩井は入つてくると、

『どうですその本は、面白かつたですか』といきなり訊ねた。

『あゝなか〳〵面白い。今迄の經濟學の本を裏から說明したやうで、まるで氣のつかなかつた事をいろ〳〵敎へられるやうで愉快だつた』

『さうですね、殊にしまひの、勞働の方へ來ると、情熱的で、詩を讀むやうな氣がします』

『全くだ、然しこれで僕もすぐに、社會主義にならうと云ふ氣はしないがね』

『さうでせう、僕だつてそれによつて、僕全體を決しようなんて云ふ氣にはなりません。然し、好い事は誰が書いても

好いのだし、こちらは自分の氣に合つた、好いところだけを取れば好いんですからね、殊にゑらい奴なんて云ふものは、ドグマの大きな塊りみたいで、たゞ自分の向いた方向へ、白熱的に燃燒してるそのゑらさなんだから、それがそつくり、こちらを支配する事にはなりませんよ』

岩井の云つた、ドグマの大きな塊り、と云ふ言葉が、變に利雄の心を動かした。彼はしばらくぢつと考へ込んでゐたが、

『全くだ。そのドグマの塊りと云ふ奴が、僕にはちつともないんだからね、それでから變に間誤つくんだ。僕は子供の時からこの兜町で育つて來たが、その鞘相場が、どうも嫌いでね、だから臺灣へ行つたり朝鮮へ流れ込んだりしたんだけど、遣り損なふと結局またこゝへ舞ひ戻つて來るんだ。それが自分で癪にさわつてね、だから今度こそ直がなくなつたのを好い機會に何か自分で本當にやりたい事をやらうと思ふんだが、さてさうなると、何をやつて好いんだか判らなくつて困つてしまふんだ』

『そりやさうですよ、誰だつて本當に自分のやりたいと思ふ事をやつてられる人は世の中に尠いでせう、本當にやりたいと思ふ事が誰にでもやれるやうになれば、世の中はもつと穩かになるんでせうがね』

『解說も要らなくなるわけかね』利雄は一寸笑つたが、

『然し君人間はさうばかりでもないよ、昨日木川や中川がやつて來て、立會停止について愚痴を云つたり憤慨したりしてるんだ。それで結局、いつかの趣意書を持ち出して、對抗運動をやるつて事になつたんだがね、その時僕が世の中が變つて來た事を話して、まご〳〵すれば株式會社なんかなくなるかも知れないつて云つたらば、中川の奴、それぢやなんだ、第一、場が立たなくなるぢやありませんか、つて云ふんだ。僕も全く可笑しくなつてね』利雄はまた改めて笑ひ

出した。

『え、場が立たなくなるな、そりや面白いですね、そりや面白い』岩井は繰り返して云つてゐたが、やがて彼自身も堪らなくなつたやうに、二人は聲を合せて無暗に笑つた。

『ねえ君』少時たつて利雄が云つた。

『それも一つのドグマぢやないか』

『なるほどね、それにしても情けないドグマだ』

岩井が、今度はふゝんと笑つた。

『まだあるんだ面白い事が、石川が君、女をとられてね』と昨日からの出來事を話してから、

『それで明日、あいつにその芳公の惚氣を聞かせて、嘘か本當かはつきりさせてやらうと思つてゐるが』

『はゝ、ルパンの筆法を眞似たと云ふんですかね』岩井はくすりと笑つたが、

『然し、石川君なんか、そんな風にしていつまでも女に夢中になつてゐられるから好いんですね。こちらにはそんな氣なんかもう殆んど絶無と云つて好い位ですから』

『まさかさうでもないだろ』利雄は輕く笑つたが、

『然し僕もやつぱりそれを考へたよ、昨日石川が變に自信のあるやうな事を云つた時は、何だこの馬鹿野郎、と思つたが、考へ直して見るとあの男は若い中あんまり遊ばなかつた人間なんだ。それだけに、今日になつてもあゝやつて女に熱意が持てるんだが、こちらは少し遊び過ぎた傾きがあるからね』

『全くですな、あなたなんか殊に激しかつたから』

『君だつて。はゝ、然しそれはそれとして、僕なんかゞこんな風に常にトチルのも結局女にも興味がなくなつた故かも知れない。けれどもまた、女にも興味がなくなつたから、今度は考へ直していやに堅い事をやるつたつて、それは大してゑらい事にはならないからな』

『ゑらくなくつたつて好いぢやありませんか、夢中で女に惚れてる時に、それを我慢して、世の中のために盡す。それも結構かも知れない。だからゑらい。自分の好きな事を我慢してほかの事をする、だからゑらい。どうも僕にはさうは思へない。結局誰れでも自分の一番好きな事に、どんなかの意味で好きな事を熱心にやるだけですよ、はたから見れば、その人が、それが好きになれた事を羨んだり憎んだりするだけだ。だから、女に興味が持てなくなつたから、自然考へる事が堅くなる。それでも好いぢやありませんか。たゞそれだからと云つて、女に惚れる人を笑ふ事はないと思ふんですが』

『それもさうだな』利雄はまた少時ぢつと考へ込んでゐたが、

『然し好いよ、君なんかやりたいと思ふ事がちやんと決つてゐるやうだから』

『はゝ何が決つてゐるもんですか、本當に決つた時は、ちやんとやつてゐる時ですよ、要するに薄志弱行でさ』岩井は自分を嘲るやうな調子で云つたが、

『あなたの常盤津の方はどうなりました。相變らず熱心ですか』と訊ね返した。

『いや、あれももういやになつた。この五六年、相場と常盤津でぼんやり暮して來たかと思ふと癪にさわつてね』

『さうですかな』岩井は冷たい調子で答へたが、

『明日は然し面白いですね、どんな風な結果になるか、樂しみにして聞きに來ませう』と云つて立ち上つた。いつもな

らば、
『どこかへ行つて晩飯でも喰はうぢやないか』
と云つて止めるのだつたが、利雄はなんだか今日は氣が重かつた。
『さうかね、それぢやまた明後日でも來給へ、結果はちやんと報告するよ』
『えゝ何れ』笑ひながら岩井は歸つて行つた。

石川が××通信社へ訪ねて來たのは、その翌日の二時過ぎだつた。店前には、例の趣意書に活氣を與へられた人々が集つて、新會社の創立、取引所への對抗策などで騷々としてゐたが、利雄はすぐに石川を二階へ導いた。
『どうなつて君、あの方は』挨拶が終るとすぐに石川が訊ねた。
『まあ待給へ、もうぢき判る』利雄はにやりと笑つたが、
『實はね、その男がもうぢきこゝへ來るんだ』
『え、その芳さんと云ふ人が』石川は顏色をかへたが、
『なあに、驚く事はないよ、なにも突き合せようつて云ふのぢやないんだ。家にゐたあの水谷がね、今日芳公をこゝへ連れて來て、色々泥を吐かさせる。それを、君と僕と二人であすこの部屋で聞いてゐようつて云ふんだ。どうだね君、さうすれば、君だつて得心が行くだらう』利雄は石川の肩を叩いて『はゝ』と笑つた。
『そりやちつと殘酷だ』石川は最初やり切れないやうな顔をしたが、例の負惜みが起きて來たのか、
『いや、これも面白いや、自分の女を取つた男の惚けを、横聽しに聞く、それも好いよ、面白い、面白いなく[illegible]

て愉快らしく笑つて見せた。

『ぢやあ向ふの部屋へ行つてゐませうか、西日が射すから少し暑いけど、まあお互に少し我慢をしよう。もう來るかも知れないから』

『あゝ好いとも、少し位い暑いのは我慢すらあね。これより暑い事はありやしない』

石川は皮肉らしく笑つて、突き當りの部屋に入つた。

それは細長い四疊敷の部屋だつた。もと通信事務をやつた時分使つた、大きなデスクが眞中においてあつて、これかゝつた椅子が三脚ほど埃だらけになつて並んで居た。この頃は少しも使はなかつた部屋の中は、變に埃つぽい、いやな匂がこもつてゐた。西向きの硝子窓の向ふには、棧のはづれた物干が、町裏らしい薄ぎたなさを示してゐた。

二人はそこに入ると、利雄が襖をそつとしめた。椅子に腰を下して向き合ふと、何だか人の秘密をさぐる、重大な事件に當面した、探偵小說中の人間のやうな氣持がした。

『可笑しなもんだね』と利雄が云つた。『かうやつてゐると、今にも大變な事が起るのを待つてゐるやうな氣持がする』

『僕は實際變な氣がする』石川の顏は恐ろしく眞面目になつてゐた。

『大丈夫だよ君、大した事はありやしない。相手が何しろ、ひよつ子見たいな若僧だからね。君だつて昂奮するほどの事はないよ』

『然し變だよ』と石川が云つた時、向ふの階段の方で、

『誰れもゐないんだから、こゝへ來てまあゆつくり話をしよう』水谷がわざと大きな聲で云つたのが聞へて來た。

『えゝ有難う』と云ふ若々しい聲がそれに續いて、やがて隣りの部屋へ、座布團を投げ出す音が聞えた。利雄は先きに襖

の隣からそつと覗いた。水谷が氣を利かせたものと見えて、時の主人の芳公は、こちらを後に、はすかけに坐つてゐた。十八だと云ふけれど、一體にませて見えるこの邊の男の常として、もう二十を過ぎたやうな大人びた形をしてゐた。色の白い男だつた。細々とした柔かい毛を角丸に刈つてゐた。細面の鼻の高い役者じみた顔は、如何にも若い藝者に惚れられさうに思はれた。

利雄がそつと身體を引くと、石川も足音を忍ばせて、襖の隙に眼を當てた。しばらくぢつと眺めてゐたが、やがてまたもとの椅子に腰を下すと、かすかな溜息をしてから、利雄の顔を見て、仕方がないやうににやりと笑つた。

『どうしたね店の方は』水谷は先づ眞面目な事から聞き出すやうな風だつた。

『駄目なんですよ。足つたつてね、そんなに大した迷惑をかけてるんぢやないんですけど、どうしても聞いてくれないんです。全く弱つちまいましたよ』芳公がそれに答へた。

『さうかねえ、誰だつてこの島で暮してりや、一度は足ぐらゐ出して浪人するのは有り勝ちの事だから、そんなに心配することはないよ。それで、女の方はあれからどうしたの、君がそんな風ぢやあの人も困つてるだろ』

『へゝ』低い笑ひ聲が聞へて來た。それはきまりの惡いやうでもあれば、どこか得意らしい風にも利雄に聞へた。彼はその時、ちらりと石川の方を見た。腕を組んで心持ち顔を下げて、ぢつと隣りの部屋の話に聞き入つてゐる石川の顔に心の動きがさつと浮んだ。

『笑つてちや判らないぢやないか。構やしないさ、すつかり話し給へ、え、あれから逢つたの』水谷がまた訊ねた。芳公はしばらく默つてゐたやうだつたが、

『え、――本當は一昨日の晩逢つたんです』

『あゝさうか、どこで』

『餘りくしや〳〵して仕方がないもんですから、伊勢平へ行つてよんだんです。それから深川ぢや工合が惡いつて云ふもんだから、自働車で大森へ行つてしまひましてね』

『バカに景氣がよかつたんだね、君はまだそんな景氣があるのかね』

『なあに、みんな女が出してくれたんです』得意を含んだ、はにかむやうな調子だつた。

その時石川が顏を上げた。利雄も思はずちらりと見た。二人の視線がぴたりと合ふと石川は、泣くとも笑ふともつかない變な顏をした。利雄は少し殘酷な氣持がしたが、いまとなつてはもうどうする事も出來なかつた。

隣りの部屋では芳公が、

『今日は暑うござんすね』と云つて、扇子を開いてはたはたと使ひ初めたが、こちらでは團扇一つ使へなかつた。おまけに、一枚開けた硝子戸から、西日が狹い部屋に半分ほども射し込んでくる。蒸されるやうな熱さの中で、汗つかきの利雄は、腕を組んで息を殺してゐた。

『暑いのはこつちのこつたよ』水谷はさう云つて笑つたが、『然し好いね、足を出したつて店を出されたつて、女の子がそんなに可愛がつてくれりや澤山だ。僕なんかもそんな目に會つて見たいや、へゝ』

『ひやかしちやいけませんよ』

『ひやかしやしないさ』水谷は話の途切れるのを恐れるやうに慌てゝ遮つた。『それで、これからあの人はどうしようつて云ふんだね』

『へゝゝどうも變だな』芳公はもぢついてるやうだつたが、『まあ、仕方がないから、どつかまた店へ入れるまで、一

と月か二た月遊んでゐたら好いだらうつて云ふんです。その代り料理屋や待合では逢ふ事は出來ないかも知れないけど、下宿料位ならなんとかしてくれるつて云ふんですけどね、あつしも男ですからね、どうも何だかいやなんです』

『好いぢやないか結構だよ、そんな好いことつてありやしない』

利雄はもう石川を見るに忍びなくなつて來た。彼自身がもう息苦しさに堪へなくつて、いきなり飛び出して、『馬鹿つ』と怒鳴りつけたい衝動が、しきりと起つてくるのを堪へるのがつらくなつた。

『さうはいきませんよ水谷さん、だからね、どつか、ほかの店でも何でも好いんですから、自分の喰ふだけ稼げるやうなとこへ入りたいと思つてあせつてゐるんですけど、お願ひですが本當にどつかありませんかね』話は漸く眞面目に歸つたので、利雄もほつと息をついて石川の方を見た。彼の顏は心持ち蒼ざめて、兩方の眼には涙さへ浮んでゐたが、利雄を見ると、頬をゆがめてにやりと笑つた。

『ない事はないだらうけど、何しろかうして直が立たなくなつたんで、浪人がバカに殖えたからね、私だつて全く弱り切つてしまつてゐるんだ。君は何かね、現物でも定期でも、お客はないかね、お客さへありや、今なら甘くやれるんだが』

『さうですね、私もそれを考へてゐるんです。今んとこ、店にゐた時分の客が一人や二人あるんですけどね、それぢや仕様がありませんから、女に頼んで、遊びに來る人でも少し世話をして貰はうとも思つてゐるんです。四五人ありや、どうにか喰つていけるでせうからね』

『あゝいけるとも、その中に、それからそれへと世話して貰や立派に喰つていけるやうになるよ、その方が君何だぜ、獨立して氣樂にやつて行けるからね、堅い客の十人もあれば下手な現物屋なんかやるより、呑氣でよつぽど金が儲かるよ』

『さうですね、さうしたらまた店の方をお願ひします』

『あゝ好いとも、それぢや行かうか』水谷は立ち上つたやうだつた。

『えゝ、行きませう、どうも色々済みませんでした』
『また今夜あたり、出掛けるんぢやないのかね、はゝ、餘り甘くやつちやいけないぜ』
『へゝ、そんなに行けるもんですか、今日は何ですよ。これからお客のとこへ行つて來やうと思つてゐるんです』
『はゝどうだか、まあ好いや』
二人は笑ひながら階段を下つて行つた。

『あゝやつと行きやがつた』利雄は太い腕をによきりと上げて伸びをすると、いきなり立つて襖を明けた。二人の坐つた座布團が、まだそこにはすつかけに殘つてゐた。
『バカ野郎』と利雄は布團を蹴飛ばして、『石川君、こつちへ來給へ、そこは何しろ西日で暑くつてやり切れない』
彼はまた、公園にのぞんだ、窓際に來て腰を下した。涼しい風がさつと吹き込んだ。胸をはだけて風を入れると、漸く自分に返つたやうな氣持がした。
『どうもいろ／＼有難う』石川は靜かに言つて彼の前に腰を下した。
『はゝ、まああんなわけだ。少し殘酷のやうな氣持もしたが、事實はまあ、あゝなんだ』
『驚いたね。いや全く僕が馬鹿だつた』石川は本當に參つた調子で云つた。
『何しろ相手が藝妓ぢやないか、それをそんなに信じ切れるのは、君が人が好過ぎるからだよ』
『本當にさうだつたよ、然し、あの男は別に憎らしいとも思へないね』
『はゝ、それも負惜みかも知れないね、僕なら飛び出して擲つてやりたい氣になるんだが、結局あの男は、君の事は何も知らないんだからね、女だつて話もしないんだから憎む事はないだらうけれど、然しまあ、餘り好い感じはしまい』

『そんな事はないが、悪いのは女だけだよ』

と云つて、石川は少時考へてゐたが

『ねえ重野君、私が何だ月謝も出すし、少し位は世話をしても好いが、あの人は、常盤津を稽古しないかしら』と云つた。

『常盤津？』利雄は呆れたやうに訊き直した。

『あゝさうだよ、さうしてね、私はこの次ぎのおさらひの時に、あの人と一緒に床(ゆか)へ上つて、乘合船を語つて、女に聞かせてやらうと思ふんだ』

利雄はもう何とも云へなかつた。もし石川があの女を信じてゐたほど、熱烈にこちらも惚れてゐたなら、これからすぐに、女のとこへ行つて自分を欺いてゐたのを責めるか、或ひは手を切るとか云ひ出すだらうと豫想してゐたのに、如何にも悠長に、芳公に常盤津を稽古させて、乘合船、――それは女とすぐに切れるのを恐れる未練からか、それともいやに通がつた負惜みか、利雄は笑ふ事も出來なかつた。

『さうかね』と云つて、彼は默つて腕を組んだ。

『それが君の女に對する復讐かね』少時たつてさう云つた。

『あゝさうだよ、こんな君、耻かしい事はないだろ』石川は眞顏で答へた。

利雄はさつき、あの蒸し熱い部屋で話を聞きながら、この男に對して殘酷だの、氣の毒だのと思つた事を自分で笑つた。

『結構だね、まあやつて見給へ、然し僕はその話の取次ぎは御免蒙る』

『さうかねえ、君には面白くないか知ら』

石川は一寸弱つたやうな顏をしたが、

『さて』と云つて『君、これから僕と一緒にどつかへ交際(つきあ)ない』

『今日は僕は御免蒙る。明日の晩でもまだ遊びに行くよ』

『さう、ぢや僕はこれで失敬しやう。どうも色々有難う』丁寧に頭を下げて石川は立ち上つた。利雄は店前まで送つて行つた。そこでは例の通り、趣意書を中心にだん〲多く集つて來た人達が、血眼になつて出たり入つたり、大騒ぎをやつてゐた。

石川が歸ると、利雄は匆々二階へ上つて、窓際に腰を下してほつと息をついた。

『乘合か、馬鹿にしてやがら』彼は思はず呟いた。

――豆腐が一夜水中に御逗留、イヤこれは〲――などと云ふ、常盤津の乘合船の中に出てくる崗の浮くやうな半可な通人がちらりと頭に浮んだので、

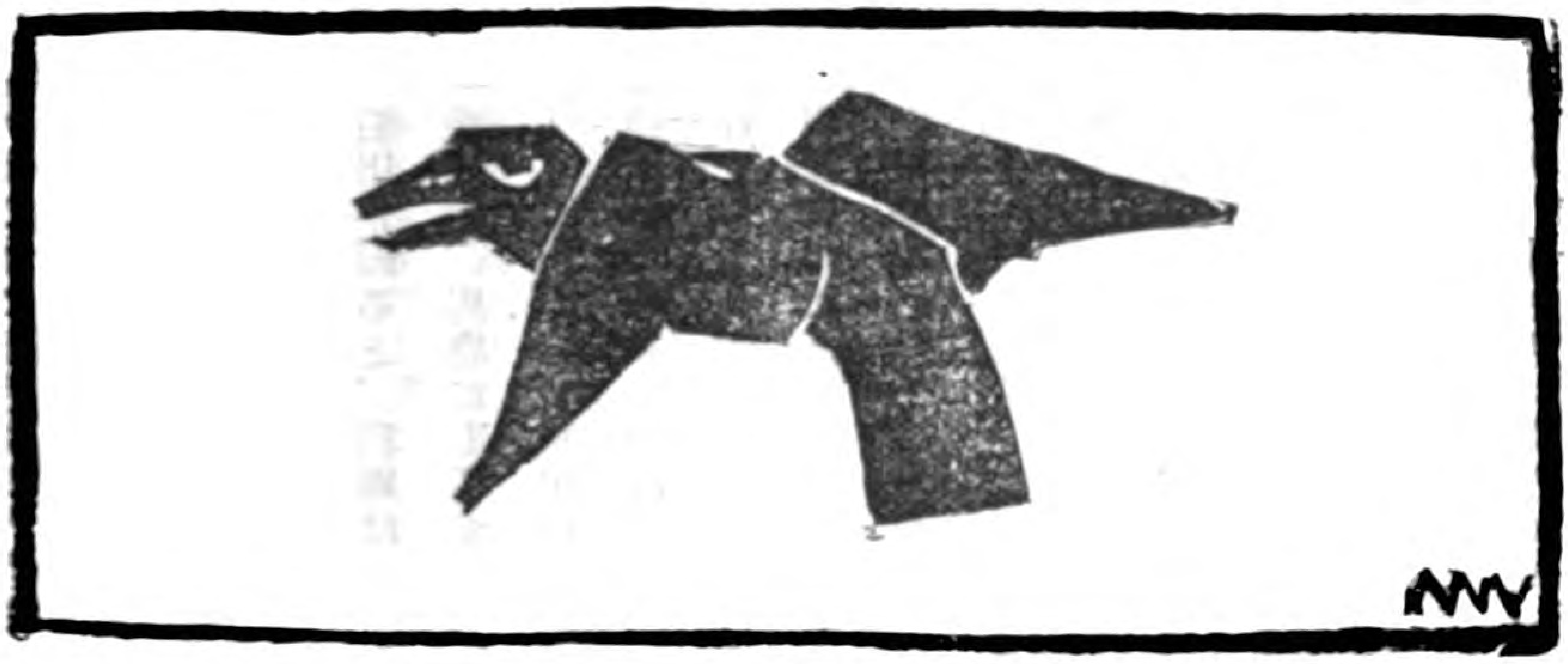
『好く似てら』彼は思はず苦笑した。

明日岩井に話をしたら、彼は何と云ふだらうと思ふと、利雄にはそれが樂みにもなつて愉快にほゝ笑んだ。

兩手を頭の後ろで組んで、利雄はぢつと眼をつぶつた。

『場が立たなくなるぢやありませんか』と云つた中川、『金儲けの嫌いな男』と自分を罵つた伯父、いつもくしや〲した顏をして、理窟ばかり云ふ岩井、あの若僧を引つ張つて來て、べら〲惚氣を喋舌らせる水谷、女を取られて、乘合を語らうと云ふ石川、最後に中心を失つて途惑つてゐる自分まで考へると、凡てこゝに集る者が、まるでみんなちぐはぐで、ばら〲で、この店こそ何だか本當に乘合船のやうに思はれて來た。それもいま正に、破船しさうなぼろ船である。『沈むものならさつさと沈でしまへ、さうしてみんな、ばら〲になるのが好いのだ。その方が、俺ははつきりする』

彼は心で呟いて立ち上つた。兩腕をぐつと上に伸ばして、兩足を突つ張つて、ぐらつく船の上にゐるやうに身體を搖ぶつた。すると堪らなく愉快になつて來て『わはゝゝ』と四邊構はず、大きな聲を上げて哄笑した。



# 天の門

中河與一

## 第一夜

月が低く見えた。大氣のせいであらう。

晴れきつた六月の空の中を、白い雲が帆影のやうに走つてゐた。

私とNとは、とある町角のキネマ・ボックスを出ると、身體のほとぼりを冷えた夜氣の中で洗つた。然し私の眼の中には青白い光の瀧が、わけてもそよぐ花のやうな娘の表情が生き生きと殘つてゐた。二人とも何物かに支配されてでもゐるやうに默つて歩いてゐた。道の上を埃を卷く風が時々よこぎつた。

「君、あの壯大な海岸ね、寫眞に出て來た。あれはオアフの海岸だよ。僕はやつと思ひ出した」

Nは暫くして私にさう云つた。それは蒸し熱い觀覽席にゐる時にも、彼が一寸肘で突いてから私に何かの注意を促した風景ではあつたが。

彼は歩きながらハツキリと過去を想起したかのやうに又呟いた。

「僕は確かに一度歩いた。あそこに違ひない。海岸つゞきのあの廣い草原。信天翁（アルバトロス）があの通りに飛び廻つてゐた」

それから彼はハワイで過した彼の少年時代の記憶に就いて少しばかり話をした。ホノルルの話が出た。高い蛇の木である椰子の話が出た。女王カメハメハの話が出た。

私と彼との交りは——偶然同じやうにK水産會社の下級社員として二人が机を並べた事から初まつた。そして彼のハワイでの生活を聞く事と、私の氣違ひぢみた今日までの經歷を話す事とが、二人の友情を次第に深めてゐた。そして最後には一人の女を二人して愛するやうになるまで。

「ところで」

私は云ひだした。

「君は氣付かなかつたかい」

「何を」

「あの中に出て來た女優がさ、驚くほど芹子さんに似てゐたのを」

「さう、そつくりだつたね。あれ程似てゐりや、いくら僕だつて氣付かない筈はないよ」

背の高いNは嘆くやうにさう云ふと、更らに續けて云つた。

「が、それは兎に角として、いゝ映畫だつたね」

「全くだね、しかしあゝ云ふ陰慘な最後はどんなものだらう」

「僕はいゝと思ふ」

「なぜだ」

「なぜつて、あの激しい三角關係を見ながら、實に人間のしてゐる事があはれになつて來たからな」
「それでは困るぢやないか」
「ところが、反對に困らなくなるんだよ」
　そこで私はNの氣持を推しはかるやうに云つた。
「をかしい事を云ふね」
「だつて戀愛といふものが、所有の觀念で汚されてゐるのが、實によく表現されてゐたぢやないか。あゝ云ふ悲劇は慘酷なら慘酷なほどいゝ」
「ほう、凄い事をいふね」
「しかし君、あの位凄いところを見せないとわからないよ」
「僕には、もう充分だな」
「いや、最後をもつとひどくすると、もつとよくなつたと思ふな」
「ぢや君は、芹子さんを中心にしてゐる吾々も、慘酷な最後に行けばいゝと云ふ意味かね。つまり」
「いや、いや、さういふわけぢやないんだ」
　やがてNは一寸立とまつて煙草に火を點じると、彼一流の空想的な話を初めた。街の上を黑い自働車がしつきりなしに流れてゐた。
「まあ、星が地球よりも總ての點で高い所にあるとすれば、其處では馬鹿馬鹿しい悲劇は無いと思ふんだ。例へばだね。一人の男を爭つて二人の女が苦しんだり、一人の女を爭つて二人の男が見るもあはれな悲劇に陷るといふやうな。

全く平凡なこの悲劇の方程式を、飽きもしないで人間は、同じやうに開闢以來くり返してゐるんだからね。おどろくよ。あの血迷つたぶざまな爭ひを見給へ。星の世界ではきつとこんな事は無いよ。僕はこの單純極まる悲劇を何時まで人間が續けるか不思議でならないんだ」

Nは益々雄辯になつて來た。そしてたてつづけに叫んだ。

「雌蕋が多くの雄蕋をぐるりで眠らしてゐるやうに、女性は一寸の矛盾もなしに吾々をその胸の周圍で眠らせる。それだのに、なぜ吾々は所有しやうとして何時までも爭ふんだらう。……然し金の無いものは所有しやうにも出來ないからな。そしてまた、實際は所有しなくたつていゝんぢやないのかね、君」

話の最後は何時ものやうに彼の主張に變つて行つた。そしてその興奮は靜かに芹子の上に落ちて行つた。月が次第にのぼつて小さくなつた。

私達は肩を摩り合せながら自分達の下宿へ歸ると、長い階段をあがつて、隣り合した貧しい夫々の屋根部屋の中へ這入つた。

一人の愛人を思ひあふ事によつて、私達二人の友情は更らにも深く厚いやうにさへ思はれた。

その夜中である。

突然、私は恐ろしい聲に襲はれた。呻り聲である。胸をおさへられてゐるやうな沈靜な響きである。何處かをひそか

に動物の歩く音がした。

私は不完全なグラグラする寝臺の上に片手をつくと、眼をみはりながら隣室の方へ耳をすました。

Nの部屋らしい。

そして呻いてゐるのはNであるらしい。

私は全身に寒けを感じるとブルブルツと竦みあがつた。

〝la　la　la　la　la　la………〟

續けて多少明瞭な叫び聲が聞えて來た。と寝臺から身體が、床の上へ轉落する音がした。次ぎには床板をザラザラと何かで擦るやうな氣配がした。ひつ搔く音がした。熱病に惱まされてゐるやうな聲が

〝le　le　le　le　le　le…………〟

と續いた。と私の眼に、低い屋根裏のむきだしのまゝの材木が燃えるやうに見えた。私は寝臺から急いで飛びおりた。

Nの身に危險が迫つてゐるのに違ひない。私はバスローブの懐中に短刀をしのばせてから、用心深く自分の部屋を出た。私は彼の爲にならどんな事があつても戰つてやらなければならない。

足音を盗みながら戸口に立つと、私はぢつと鍵穴から恐怖の眼で室の中を撫でまはした。何事もないらしい。たゞNが床の上へ頭をつけたまゝ弱り込んだやうに倒れてゐた。

私は思ひ切つて聲をかけた。

「おいN」

その時、彼はキヤツ！と妙に白けた聲をあげると同時に、恐怖のために身體をわななかした。

私は戸をこじあけた。

Nはふらふらと立ちあがりながら、こちらを見て恐ろしさうにあとしさりした。その顔色は蒼ざめ、頬はわづか二三十分の心勞の爲めに、削り取られたやうにすつかり落ちくぼんでゐた。

「どうしたんだ。おい。どうしたんだ。僕だぜ」

私は机の上の花瓶をとると、水を含んで彼の顔へプッと一吹きの霧を吹きかけた。そしてしつかりと肩をつかんでゆすつた。

彼の唇が氣味わるく慄へだした。そして眼が開いた。と思ふと彼は正體もなくベツトの上へドツと腰をおろした。

「おい僕だぜ」

すると、急に彼は氣付いたらしく平靜にかへつたやうな眼つきをした。

「とても恐ろしい奴が來たんだ。恐ろしい奴」

「何處からだ」

「そ、そ、そこから」

さう云つてNは、私の方を氣味わるく指さした。

「僕だつて」

「いや」

「どうしたんだ」

「扉からさ。とても恐ろしい奴が」

「扉はかかつてゐたぢやないか」

「閉めてあるのに來るんだよ」

「君が來た時には何もゐなかつたかい」

「ゐなかつたとも、それに窓もちやんとしまつてたぢやないか」

私はさう云ひながら、確めるやうにソツと窓にさわつてみた。

「扉を閉めてあるのに來るんだよ。僕が扉の方を見ると、すぐ消へるのに、又扉をあけて這入つて來る」

「なんだつて」

「這入つて來るんだよ。とにかく」

「そんな馬鹿なことが……」

さう云ひながら私は室の中を見廻した。不思議な能力によつてこの部屋に現はれ、そして彼を苦しめる下手人は誰であらうか。

「君、どんな奴なのかね」

「僕の寢臺の上へあがつて來たんだ」

「人間なのか」

「人間だらうか」

Nは反響のやうに、私の言葉をそのまゝとつて聞き返した。

「だつて君は見たんぢやないのか」

「見た。然し恐ろしくつて……」

その時私は、ふと何かに思ひあたると、懐中の中の短刀を離しながら、心からの憐みを感じながら、この友達に云つた。

「そりや君、夢ぢやないのか、夢にうなされてゐたんぢやないのかい」

すると彼は急に思ひついたやうに、眼の前に何物かを眺めてゐるやうに言つた。

「いや夢に關係がないことはない」

そして一片の夢に就て彼は感傷的に物語つた。

「僕はね、眠れないでゐたんだ。それで靜かに横になつてゐた。すると黑い海の中を白い帆船が僕達の方へ走つて來たんだ。僕は帆のはためきで耳がすつかり掩はれてしまつたのを感じた。で船を視界から退けようと骨を折つてゐたんだ。と月が出て來て船を青白い色に變へてしまつた。それで實際のところ僕は助かつたと思つたのだ。何故と云つて、氣付いてみると、僕自身も一隻の古風な船に乘つてゐて、月夜の海をその青白くなつた船と競爭してゐたのだ。ところがやがて青い船は止つてしまつた。よく見ると船は月の光で青くなつたのではない。青い多くの海鳥に——驚くべき澤山の鳥に包まれてゐるんだ。そして、その爲めに進行が全く止まつてゐるんだ。此處までは平生も時々みる夢なんだが。ところで僕は、起きあがつて、その氣の毒な船を更に注意深く眺めやうとしてゐたのだ。と僕の首すぢを捕へる者がある。

「いけないぢやないか、君は。人が弱つてゐるのを喜ぶなんて」

さう云つたのが、どうも君らしいんだ。そして君は、どうやら向ふの船に乘つてゐたといふ氣がするんだ。僕はどうも不氣味でね。君と競爭するなんて……」

「僕と競爭するんだつて」

私はすぐ芹子を中心にしてゐる吾々二人の事を考へた。そして更らに性急にNに尋ねかけた。

「それで怖い奴といふのは」

「いや、そ、そ、それはね、君ではないんだ。僕はそれからまた自然に眠つたんだが、その眠りが淺くなると同時にもう一度前と同じやうな夢をみたんだ。がその夢が次第に遠ざかつてゆくと、君が出る時になつて、今度は君でなしに一人の娘が出て來たんだ。僕はその娘を愛しようとした。いや娘でなかつたかしら。兎に角その親しい顏が、急に口の方から耳の方へまで割れてゆくぢやないか。かと思ふと、恐ろしい顏に變つて、それが僕の寢臺の方へグッと接近して來たのだ。いや、もう止さう。云つてゐると又ちらつきさうな氣がする。こんな陰氣な話は止さう。だが、これだけは君に云つておかう。海の上にのぼつてゐた月が、チラ、チラ、チラと火花のやうに散りこぼれてゆくと、その破片が丁度アラビヤ文字のやうに並んだのだ。そして、それは次ぎのやうに讀めた。

――女性こそは恐るべきものなり。かの蜘蛛の如く男性を食ひ殺しはしないか――

いや夢ではない。夢ではないんだよ。その扉を實際あけて這入つて來たんだから」

Nは手をふつて眼の前をさへぎるやうにした。

私は彼の夢の中から何ものかを探りださうとする焦慮にかられた。彼の悩みは何か芹子の事に關係がありさうに思はれる。然しそれにしても彼の衰弱は劇しすぎるやうに思はれた。

「君やすみ給へ。ね、寢てはどうだね。今晩中僕はとにかく君についてゐよう。だから安心して眠るがいゝ」

私はNを寢臺の上にあがらした。そして自分は堅い椅子の上にかがんでゐた。

とやがて彼は痲醉劑を飲まされたやうに、うとうとと再び眠りに落ちて行つた。

"ke ke ke ke ke………"

初まつた。彼は電流を感じたやうに前半身をあげると、腕で顏を掩ひながら叫んだ。

Nの眼はギラギラと恐怖の爲めにあやしく輝きだした。私はゐたたまらない感情に襲はれた。

と間もなくNの嘲罵は私の頭の上へ投げつけられた。私を明らかに憎惡しだしてゐるやうに思はれる。

"ku ku ku ku ku…………"

私は立ちあがると彼の肩を續けさまに叩いた。そして再び彼を正氣づかしめようとしてつとめた。彼の心象の中をフイルムの青い流れが廻轉してゐるのに違ひない。彼は活動寫眞の刺戟の爲めに芹子の事を思ひ出してゐるのに違ひない。彼は活動寫眞の歸りに何時ものやうに明らかに三角關係の悲劇を嘲笑した。がそれだけにその反作用が、潜在する意識の中で爭つてゐるのではあるまいか。

私は彼の表情を見つめながら、彼が氣の毒になつて來た。かくも心狂ふばかりに女を愛してゐるのであるならば、芹子は勿論、彼の爲めにゆづられなければなるまい……。然しこの考へは、長い間私の心の中で執拗に迷つてゐた。

私は電燈の青い傘をはづすと、彼の顏を見つめながら云つた。

「Nよ、僕は決心した。ハツキリと云ふ。君がそれほど芹子を愛してゐるのなら、僕は君にゆづらう。僕は今の今まで知らないでゐた。君の惱みを見て、僕は恐ろしくなつて來た。若しかしたら君は僕を恐れてゐるんぢやないのか」

とNは汗にぬれた手を差しだして弱々しく私に云つた。

「よし給へ、僕は君が芹子をどんなに愛してゐるか、それをよく知つてゐる。僕の病氣を慰めようと思つて、そんな氣まぐれを云はないでくれ」

その時私の心の水面は、勿論ゆらゆらと芹子に對する愛情のためにゆらいだ。そこで私はNに對する友情を主として云つた。

「だがNよ、僕達の友情は、一人の女の爲めに決して破られるものではない。僕の事などを考へないでハツキリと決め給へ」

それを聞くとNは元氣づいた顏付きをして云つた。

「では君は、芹子の問題以上に僕達の友情の厚さを信じてくれてゐるのか」

私は彼の肩に手を乘せながら云つた。

「吾々は一人の女性の爲めに生活を破るほど馬鹿ぢやないからね」

誠に私達の友情は芹子が美しかつた以上に美しいと私は思つた。

芹子よ！　おん身は心の晴衣裳を用意しなければならない。おん身は花嫁になるのだ。そしてこのあはれなNの胸を訪れてくれなければならない。あの恐ろしいものを見るNの瞳を、その晴れやかな衣裳で包んでくれなければならない。

その夜、私の心はNと芹子との上にある幸福に就いて考へた。

「二人の上に幸福よ、下れよ！」

私は幾度となく呟いた。

人生には幾つかの夜がある。だが吾々は、その夜々を忍耐づよく過さなければならない。私はさう思つた。私の頬の上をしつきりなしに涙が流れおちた。然し私の胸の中は、自分の決心の故に、もの悲しい感激で玲瓏と晴れてゐた。鐵の屋根を打つて雨が降つて來た。

## 第二夜

私は芹子の幻影の爲めに暫くの間眠れなかつた。書出した手紙を見て、彼女が狼狽して吾々を訪問して來はしないかと思ふ懸念の爲めに心が緊張してゐた。

私は幾度となく窓から首を出して鋪道の方を見おろした。人足（ひとあし）が次第に減つて來た。風が涼しいせいか、街路樹の青い葉かげで瓦斯燈がしつきりなしにまたたきしてゐた。

私の心は彼女を自分の前に見出した時、微笑するであらうか、それとも涙を浮べるであらうか。恐らく微笑をもつて迎へながら涙を浮べるに違ひない。そして私は、さりげなくNの愛人として彼女を遇する事に成功するに違ひない。その時いつたい彼女は——十分も違はず二人を同じやうに愛して來た彼女は、どんな態度を示すであらうか………

私は切（せつ）ない心で幾度となく足音がするたびに入口の方を振りかへつた。

と叫び聲である。

"ke　ke　ke　ke　ke………"

聲がつまつて苦しさうに亂れた。

隣室である。續いて音——。アテイックの低い勾配に彼が頭か何かをうちつける音がした。壁がどしんとうちひびいた。倒れる音がした。

私はまたNが苦しみだしたのだと思つた。すると、自分一人が芹子の事を考へつづけてゐた事が、ひどくNに對してすまなかつたやうな氣がして來た。

"chi chi chi chi chi………"

その時、私は彼の心理をこの無意識狀態の中で掴みたい欲望を突然感じた。私は手帖を抽出しから出すと、彼の言葉を熱心に速記しはじめた。

"le le le le le………

chi chi chi chi chi………

ku ku ke ku ku………"

私の手帖には怪しい模様のやうに記號が並列した。と私は鉛筆を走らせながら、ふと思ひがけぬ事を考へた。これは若しかしたら、彼は芹子の事で思ひ惱んでゐるのではないかも知れない。若しも芹子の事で思ひ惱んでゐるとするならば、何故彼は、彼女が既に私から彼に讓られる事を聞かされてゐながら、尙ほ昨夜と同じやうに呻らなければならないのだらう。いや私が芹子の事を考へすぎてゐたのを、彼が第六感によつて感じたのかも知れない。それで彼が惱みだした……いや、そんな筈はない。彼はどうしても彼女とは別の事で苦んでゐるのに違ひない。確かに彼女とは別に……だが、さうだとすれば、彼は一たい何物によつてこんなにも惱まされてゐるのだらうか。

私はこの考へに達した時、芹子がたとへNのものになるべく既にきめられてゐるとしても、うれしくつてうれしくつ

てたまらなくなつて來た。そして私とでも、N以上に芹子を愛してゐると考へられる事が、私の心を明るくした。しかし、では活動寫眞は一たいどんな判斷を彼に與へたのだらう。そして彼がみるといふ夢は果してどういふ事を意味してゐるのだらう。

Nの言葉は尙ほも厳しく、旋廻する獨樂のやうな繰り返しによつて續いた。

私は鋭い耳を冷膽な猫のやうに隣室の方へ傾けてゐた。

"chi　chi　chi　chi　chi……
ki　ki　ki　ki　ki　ki……
ka　ka　ka　ka　ka　ka……
ku　ku　ku　ku　ku　ku……"

私の手帖にはKといふ字が限りなく並びだした。Kといふ字の狂態的な速記が初まつた。書ききれない速力だ。然しK――私はKといふ字を重大に考へた。この字こそ彼の精神に大きい障害を與へてゐるのに違ひない。とNの部屋の混亂は尙ほも加速度的に激しくなつて行つた。床板(ゆかいた)をうつ音がした。ガラスを破(わ)る音がした。つづいて小さい木の折れるやうな音がした。彼は窓に身體をすりつけてゐるのに違ひない。

私は急に不安を感じると、夜着のまゝ走り出て彼の部屋を押しあけた。

「あつ！」

彼の身體がまつさかさまに、小さい窓を中心にして外へ――白い足が低い天井の方へ飛びあがるのを見た。

私はハツとすると、狂氣のやうに走りよつて彼の足を抑へた。と同時に私自身の身體が窓の方へひきづられ、足さへ

が床から離れやうとした。

「おい、どうしたんだ。どうしたんだ」

「許してくれ、許してくれ、逃げなくちやならない」

Nは倒しになつたまゝ空中で叫んだ。Nの頭髮が三階の窓さきで野獸のやうに狂奔した。

私は彼の足をしびれるほど掴みなほすと、身長の高い彼の身體を、力をこめて部屋の中へひきずり込まうとした。

異常な彼の精神力が、恐ろしい力を以つて私の束縛に抵抗して來た。

が、私はやつとで彼を室の中へ曳きあげた。頬から顎へかけて血が流れてゐる。

「おい、しつかりしてくれ、しつかりしてくれ、どうしたんだ」

彼は床の上に倒れたまゝでゐた。がその眼は血走つて火のやうに輝き、頬は益々ゲツソリと抉りとられたやうに落ちてゐた。

「飛びおりてどうしようと云ふんだ、死んでしまふぢやないか」

「捨てといてくれ。また。また。また……」

Nはさう云つて、倒れたまゝ又逃げるやうに手を私の前で泳がした。

「大丈夫だN。君は幻覺を起してゐるんだ。いつたい君はどうしたといふんだ」

Nの身體は痙攣のやうに絶えず慄へてゐた。

私は彼の手をしつかりと握つて私の膝の上におくと、彼の恐怖におののいてゐる眼を見つめながら云つた。

「君は芹子さんの事で苦んでゐるのではないのか」

Nはやつと正氣にかへりかけた。

「恐ろしいものが來たんだ。恐ろしいものが」

「何にも來てやしなかつたぢやないか。僕はさつきから此處にゐたんだが……」

「あゝ僕はどうしたらいゝんだらう。こんな狀態ではとても芹子さんにも逢へやしない」

さう云つてNは一時に淚をハラハラと私の手の上に落した。私は――私はさう思ひたくなかつたが、この友達は氣が遂ひかけてゐるのではあるまいかと考へた。

然し、たとへさうであるにしても、私はどうかして次第に衰弱してゆくこの憐れな友達の惱みを取り去つてやらなければならない――さう決心した。

ドヤドヤと宿の者達が心配さうにあがつて來た。そして口々に云つた。

「どうかしたんですか」

「ひどい音がしたもんだから」

「誰れか怪我でもしたんぢやなかつたんですか」

私は扉の前へ立つと、兩手をひろげて云つた。

「なんでもないんです。どうぞお歸りになつて下さい。僕達だけの間の事でして、それも喧嘩なんかぢやないんですから。どうぞ。えゝ有難う。お歸り下さい」

人々のスリツパの音が階段の下へ消えると、あとから私は荒々しく扉をしめた。

「彰いちやつた。全く」

そんな聲が扉を閉める風で室の中へまぎれ込んで來た。

私はNに〇・七のアダリンを飮ますと、寢台の上へなだめて上らせた。彼は横たはると同時にむさぼるやうに又深い眠りに沈んで行つた。

私は彼の部屋の低い勾配を利用した物置きから、あらゆる危險と思はれる器具を探しだすと、それを嚴重にまとめて鍵のかかる抽出しの中へしまつた。

私はそこで今夜もまた一夜を明かさなければならないと考へた。若し彼が芹子の事で惱んでゐないのだとすれば或ひは彼は芹子や私にさへ秘密にしてゐる恐るべき犯罪でも持つてゐるのではあるまいか。芹子の問題だけで何故に彼があのやうな恐怖に陷る要があるだらうか。彼が船の夢をみるのは單に幼時の追想からだとは考へられない。その夢の中にこそ何か犯罪的な背景が伏在してゐるのではあるまいか。それだからこそ彼はうなされるのではあるまいか。

然し私は考へた。假りに彼からどんな恐るべき犯罪の事實を聞きとつたとしても、自分はその爲めに自分達の友情を裏切るやうな事をしてはならない。それどころか、自分はその爲めに餘計に彼をかばひ、慰め、勇氣づけてやらなければならない。

## 第三夜

午后四時の鋪道である。窓から見ると、すぐ下を華やかなパラソルの洪水がまぶしく流れてゐた。そして女の潮流は、時々石の車道にまで溢れて黑い影を散らしてゐた。渦巻き、停滯し、激し、それは男達の頭と外套とを泡のやうに押し流し、汚點のやうに巻き込んでゐた。

救世軍のラッパがこの時代の洪水をせき止めようとして無駄な骨を折つてゐる。

私は陰欝な屋根部屋から暫く顔を出してゐた。とNの母親があたふたと扉を排して馳り込んで來た。私が電報をうつてあつたからである。

「どんなでございませう。ほんとにでも御厄介さまで、せがれが、ほんとにせがれが」

室に這入るとすぐさう云つてNの母親は私にお辭儀をした。

彼女は寢台に接近して行つた。そして紙のやうに青ざめた息子の顔を見て、心配で今にも倒れさうな表情をした。

「來ましたよ、Nよ。お母さんですよ」

そして息子の額にそつとさはつてみて、手を握つた。Nは心から嬉しさうな顔をした。

「おつ母さんですか。ありがたう。おつ母さんがゐてくれればもう大丈夫です」

私は不思議な事を聞くものだと思ひながら、そんな事を口走るほど氣力の衰へてゐるNの顔をぢつと見てゐた。硝子窓を通して街は次第に日沒の光に燃えだしてゐた。

「おつ母さん、僕はおつ母さんさへゐてくれれば……」

息子の事でもう一杯になつてゐるらしい老人に、私は一寸挨拶をすると、靜かに自分の部屋へひき下つた。そして、昨夜の手帖を机の上にひろげて、Kといふ字をいちいち母音に結びつけてみた。

"ka ki ku ke ko…………"

そして自分の不完全な筆記を或る點まで補はうとした。これは私の偏執的な性格には實にふさはしい仕事であつた。

がこんな事をするなんて、私自身も――私の友人Nと同じやうに、氣が違つてゐるのではないのかと云ふんですか――

けど少し位狂つてゐない人間が何處にゐるだらうか。

私はそこで、斷片的に彼が口走る「チ」の音と「レ」の音とを、それらのカ行の音に更らに組み合してみた。さうする事によつて分裂してゐる彼の言葉の中から何等かの統一した思想を發見することが出來るかも知れないと考へたから。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| カチ | キチ | クチ | ケチ | コチ | チ |
| チカ | チキ | チク | チケ | チコ | レ |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| カレ | キレ | クレ | ケレ | コレ | レ |
| レカ | レキ | レク | レケ | レコ | チ |

……………………………………

右のやうにして私は尚ほ一層複雑な單音の順列的な組合せを算出してみた。

七字ノ中カラ二字ヲ取ル組合セ
- 順列　$_7P_2=42$
- 重複順列　$_7P_2=49$

七字ノ中カラ三字ヲ取ル組合セ
- 順列　$_7P_3=210$
- 重複順列　$_7P_3=343$

七字ノ中カラ四字ヲ取ル組合セ
- ……………………
- ……………………

私はかくして得た無數の音符の中から意味の通じる言葉と思はれるものを三十五個だけ拾ひ出した。そして更らに、それらをNの夢の中での口調（アクセント）と、平生の言行（げんかう）と、生活との關係に於て整理した。そして最も私の想像力を刺戟する十三語を私の第一期の探索の材料として手帖に書き入れた。

——口（クチ）、布（キレ）、吳（ク）れ、血（チ）、稟吝（ケチ）、彼（かれ）、歸（カヘ）れ、散（チ）れ、知覺（チカク）、枯（カ）れ地（チ）、隱（カク）れ、聞（キ）き、機智（キチ）——

先づこれらの十三語の中から何物かを探し出さなければならない。私は机の前に坐つて空想による牽強附會の圖面を製作した。そしてその傍らに疑ひのはさめるあらゆる場合を記入した。

——枯れ地、布、血、口——然し私はこの四字が直覺さす絞殺死體の光景で胸を暗くした。

枯れ地——草原

私の聯想はすぐ「枯れ地」といふ言葉から「草原」といふ言葉に走つた。そして更らにそれは活動寫眞に走つた。彼が感慨深く語つたあのオアフの海岸——信天翁の舞つてゐた草原に就いて考へだした。若しかしたら、彼の惱みは何かあの草原にかかつてゐるのではなからうか。

然し私の親愛なるNの上に、そんな不吉な影よささないでくれ！私はさう祈らずにはゐられなかつた。

が、あのまたたくフイルムの中に現はれた風景は、今も尙ほ私の腦裡にもハツキリと殘つてゐる。

——靑白いスクリーンの中を海鳥の一群が先づ横ぎつた。長い旅をして來たといふ何かの暗示であらう。とその次ぎに、高いマストに旗をつけた一隻のスクーナーが現はれた——船の中にはそこはかとない戀愛の芽が、長い航海の退屈

を飾りだしてゐた――スクーナーの進行につれて一體のさまざまな輝く風景が――パシフイツク・ハイツの怪奇な絶壁の海岸が――次ぎ次ぎに現はれた。船はこの險しい斷崖の何處に船を着けていゝのか迷つてゐるらしい。と草原――怪しい幾年かの祕密を守つてゐるやうな廣いヌワヌの草原が見渡された。鳥が群れて飛んでゐた。甲板に立つてゐる人々は喜びの聲をあげた。

やがてゆるやかに船首がその方角に向けられた。テントが張られた。タローとフアンパアムの大きい密林の中で火のやうなレフアの赤い花が愛撫せられた。そしてこの草原の中に、この建國者達の間に、みぢめな戀愛の悲劇が初まつた。そしてその悲劇の結末は、血によつてあの深い草原の中に放棄せられた………

「いらつしやいますの」

ものに生氣を點ずる晴れやかな聲がした。私はホツとして後をふりかへつた。芹子である。

「何をしていらつしやるの。隨分ご熱心ね。あら、その並べて書いていらつしやる片假名は何ですの」

「何でもないんです。Nの病氣を分析してみようと思つてるんです」

「まあ」

芹子は瞳を輝かしながら、私の傍に立つた。私は心をらくにすると、坐る姿勢をして少しおどけながら彼女の膝を着物の上から接吻した。

「何時の間に這入つてこられたのか、少しも知らなかつた」

「そりや私、貴方をびつくりさしてあげやうと思つて、そつと來たんですもの」

「そいつはひどいなあ、ではその罰に、僕と一緒に活動寫眞に行くんですね」

「えゝ、おうけしてよ。そんな訓なら」
「ちや一寸、Nさんの御見舞に行つてくるわ。そつと行つてあの人もびつくりさしてやらなくちや」
「然しだいぶん惡いんですよ」
「ほんと」
「うそなんか云ふもんですか」
「あーら、なんだかあやしいのね、ますます。二人で私をおどかさうとしてゐらつしやるんぢやなくつて」
「そんなこと」
「さうを、でも」
「ほんとに大分わるいんですよ」
「さうなの」
彼女はさう云ふと、躁いでゐたのを後悔するやうに、一寸くらい顏をした。
「一昨日の夜ね、僕はNと一緒に活動寫眞を見に行つたんです。するとその夜からNは突然病氣になつてしまつたんです」
「あーら、少しも知らなかつたわ。ちやほんとに惡いんですのね」
彼女はそのハッキリした眉の間に心配さうな皺をよせた。そしてムッチリとした指で脣を抑へた。
「大分わるいんです。それでね、もう一度その同じ寫眞を見て來ようと思つてるんです。Nの病氣の源因をさぐる目的で」

「だつて、その活動寫眞がどういふんですの」
「いや貴方そつくりの人が寫眞の中に出て來るんでね」
「まあ、いや」
とその時、隣室からKの聲がした。敏感な挨拶である。
「芹子さんですか」
「えゝ、私なの、すぐまゐりますわ」
芹子はそれから「では一寸、あの人隨分待つてゐたんだわ」さう呟いてから、こだはりもなくNの部屋へ跳んで行つた。彼女のこの種の自由な性格は、吾々の心の中にある窮屈さをらくらくと吹き散らした。
が、私は彼女がゐなくなると、ムキになつて鉛筆を削りだした。次第に室の中が暗くなつて來た。心が折れる。削る。折れる。削る。私は頭を机の上につけながら熱心に尖きをとがらした。
若し彼の幻覺が活動寫眞の刺戟から來てゐるとすれば
一、芹子に似た女優の顏貌からそれは來てゐるのであるか。
二、それともあの草原の風景から來てゐるのであるか。草原だとすれば、それは何かの犯罪に關係でもあるのか。
三、それとも自分の氣付いてゐない何か他の特別な場面から來てゐるのであるか。
やがて私は到頭たちあがると、帽子をとつてNの部屋の前へ行つて聲をかけた。
「僕一寸出かけて來るよ」

中からは何の返事もなかつた。

階段を下りようとしてゐると、扉をあけて芹子の聲が後から追つて來た。

「あーら、連れて行つてくださらないの」

「貴方はゐてやつて下さい。Nのおつ母さんと一緒に。その方がいゝと思ふんです」

芹子は私とNとの間の好意にみちた心の流通を感じると、すなほにうなづいた。

扉をしめる音につゞいて、芹子がNの母親と大きな聲で笑つてゐるのが聞えて來た。私は幸福を感じた。Nはその母親と愛人とを枕もとにおいて、心やすらかに横たはつてゐるに相違ない。Nよ、暫くでも落ちついてゐてくれ。

芹子は或る眼鏡製作會社の女秘書であつた。多くの男達の間にもまれながら、無垢で、生き生きとして、生活に明らかな意志を持つてゐた。

彼女は何時も私とNとを全く同じやうに愛してゐると云つてゐた。

「どうして貴方は、二人の男に同じやうに手を差し出す事が出來るのです」

彼女はやさしい眼付きをして答へた。

「何故それが出來ないの、貴方。聞かして頂戴」

そのたびに私は芹子に幾度か腹をたてた記憶がある。

「いゝえ、わたしは世の中の人を皆好きなんですわ、わたしを愛してくれる人なら猶更ら。そしてわたしは、當然結婚なんてしませんわ。人のものになるなんてこと大嫌ひだから。だつてわたしは決してものではないんですものね」

無束縛を愛するNは、常に彼女のさういふ性格にふれると、驚嘆しながら次のやうに評した。

「實際フエミニズムを押し通す精神力を持つてゐる女だ」

然しNの母親は、明らかに芹子に對して多少の輕蔑を持つてゐるやうに思はれた。が芹子は決してその爲めに彼女自身の氣持を低めてはゐなかつた。

私はやがて幾つかの階段を下りきつた。そしてNの爲めに彼女をとどまらし得た自分をうれしく思つた。しかし何といふ矛盾だらう。私の心の底にはやがて嘗て經驗した事のないほどの烈しい嫉妬がむらむらと起つて來た。私の理性を曇らすこの消極的な感情、爪のやうに胸の中を刺し亂す嫉心。私は自分を見つめながら全く暗然としないではゐられなかつた。

と野の中で人を締め殺す光景を私は心に浮べてゐた。殺された男が半ば狂氣であつてみれば……證據を堙滅する事は決して難しくないではないか……

然し私はさう考へた後に、この考へをいそいでかき消した。そして自分達の心理は誠に鋭い狀態の上にかかつてゐると考へた。これはいつたい、自分は何を考へてゐたのだらうか……彼に對する親切からか、それともその反對か……若しかしたら今自分が考へた事を――彼自身が先づ豫感して、そしてその苦痛の爲めに彼は苦しんでゐるのではあるまいか。やはり彼の惱みは、芹子を中心として吾々が存在してゐるが故に起るのではあるまいか。

鋪道に出ると私は勿論Nの室を下から見あげてみた。曇つた空の中で高い建築が巨大な基のやうに立つてゐた。

私は興奮しながら歩いた。

私が歸りつく頃には、時間の都合できつと芹子はもう居ないに違ひない……然し私はさう考へて、その事を自分へのふさはしい叱責のやうに考へなほした。自分のやうに穢れた考へを一寸でも抱いた者は當然罰せられなければならない。

私は心に拍車の用意をした。

暗い廊下に踏み込むと同時に突然快活な音樂が爆發した。旋律がころがつた。トテツもない喜劇がはじまつてゐた。青白い影が、私の眼の前をしつきりなしに蹂躙した。とやがて私の見ようと思つてゐる寫眞が初まつた。

――スターナーが現はれた。草原が開けた。壯大な風景を背景にした愛慾の傷ましい悲劇が初まつた。

私はいそいで手帖をポケットから取りだすと、書き記してある十三個の單語を絶えず心に準備した。

――そよぐ花のやうな少女が現はれた。私は熱心に注意してゐた。芹子に似た娘である。銀白色の足がちらついた。と優雅に下半身を振りながら、二人の男達と交る交るに踊つた。その事が恐ろしい悲劇の發端となつた。

――と、口――口の大寫しである。一つの花びらのやうな口を求める二つの口である。

私は闇の中で手帖の中の「口」といふ字に忙いで點をうつた。

最後が來た。咲きほこつてゐた花が散つた。娘が殺された。見るも凄慘な死體が草村の中に晒らされた。戀愛の勝利者は反つて癒えがたい悲しみに陥入つた。三角關係の悲劇が更らに血なまぐさい陰鬱な結末となつてすんだ。

私は重苦しい心になりながら「枯れ地」と呟いた。そして次ぎに手帖の中から「散れ」といふ言葉を探しだした。

「散れ。散れ。散れ。散れ……」

私はさう呟いた。すると、さう繰り返してゐる内に、私の心の中はどうしたのかさはやかになつて來た。凄い滿足だと云ふ氣がどこかでした。

としらじらしい電燈が眼を醒した。

私は外に出た。

然し私はNと芹子とに對して「散れ」と命ずる事が出來るだらうか。反つてNは吾々の友情の爲めに、重苦しい感情の爲めに、芹子が散ることをこそ求めてゐたのではあるまいか。芹子さへゐなければ………そしてそれほどにも彼は彼女を愛してゐるといふのが眞實なのではあるまいか。

――ロ、ロ、ロ、ロ、ロ、――私は呟きながら歩いた。探偵のやうな興味と、Nの上にある暗雲をとり去りたい熱心と、その事によつて芹子を喜ばしたい感情とで。

私は道の上で幾度となく行人に衝突した。

下宿へ歸ると、私はすぐNの部屋の扉を押しひらいた。そして芹子の姿を見付けやうとして無益に部屋の中を見廻したと又昨日のS醫師が見えてゐた。背中を戸口の方へ向けたまゝ手を洗つてゐるらしかつた。

「どうも有難うございました」

私は落ちついて聲をかけた。すると醫師は手に水をつけたまゝ私の方へ振りむいて云つた。

「今晩は幻覺が起らないんですがね。もう一時間も待つてゐるんですが」

「ははあ、今日はおつ母さんが見えてゐますからね。それに私達の愛人がさつきまでゐた筈ですから」

「いや、それでね。實は考へてゐたんですが、幻覺の起らない源因は、おつ母さんがゐられるからではないかと思ふん

です。といふのは幻覺の多くの源因が幼時の記憶にあるといふ事は極く一般的な事ですから。そして母親は幼時の絕對ですからね」

なるほど、さう云はれてみると、前にも疑つた事ではあるが、Nは第一夜にもフイルムの上で彼女を見てゐる。且つその夜、私は芹子を彼に讓る事を言明してゐる。それだのに第二夜にも依然として彼の上には不思議な幻覺が現はれてゐる。さうすると、彼は單に芹子に逢つた事の故に今平靜でゐるのではないと考へられる。

「ではNは小供の時の事を何か考へてゐるんでせうか」

「若し私の推定があたつてゐるとすれば……」

そこで私は醫者を寢台から一番遠い椅子に導いた。そして自分の手帖を示して「口」といふ字と「散れ」といふ字に關する自分の考へを說明した。そしてNの草原に對する關心に就いて話した。

「貴方もなかなか神經家ですね」

醫者は笑ひながらさう云つて、更らに續けた。

「いや、風景の夢をみるといふ事は實際少ないんです。若しかしたら、これは母錯綜から來てゐるのかも知れませんよ」

そして私の手帖を受取りながら、彼は更らに何物かを發見しようとするやうに瞳をそそいだ。

やがてS醫師は立ちあがつて、Nの傍らへ行つた。そして額の上に手をのせると、ゆるやかに圓を描いた。顏面開折法が初まつた。長い時間がたつた。

「貴方は最も心に殘つてゐる過去を回想しなければなりません」

Nは眼をつむつたまゝうなづいた。

「見えだしたでせう」

「見えます

「何が見えますか」

「帆船です」

「船がこわいのですか」

「いや船はこわくはないのです」

醫者はNの母親と暫く小さな聲で何かをささやきあつた。そして更に暗示を與へた。

「貴方は子供の時の事を回想してゐるんですね」

「さうです」

その時Nは突然恐怖にみちた叫び聲をあげた。

「おゝ、彼奴だ、彼奴だ」

「なんですか」

「おゝ怖い、大きい……化物です」

「口をよく見て下さい」

"*chi　chi　chi　chi　chi　chi*………………"

彼の言葉は興奮の爲めに再び不明瞭の中に陷入つた。

"*Re　Re　Re　Re　Re　Re*…………………

ku ku ku ku ku ku…………………”

「なにも恐ろしいものではありませんよ。よく見て下さい」

醫者は子供をすかすやうな口調で云つた。

「僕を嚙み殺さうとする。女のくせに」

「ははあ、やはり源因はご婦人にあるやうです」

醫者は吾々の方へ向いて云つた。と同時に再びNは狂暴な動作と速力のある痙攣的な言語不明瞭に落ち入つた。

“ki ki ki ki ki ki…………………”

醫者は冷靜に母親に向つて次のやうな質問をした。

「何かこの方が小さかつた時、五六才の頃に口の大きいものを見て怖がつたことがなかつたでせうか」

「さあ」

「例へばですね、見世物に行つて、ひきつつたとか、それとも寢てゐて、何か夢に驚かされたといふやうな」

母親は暫く考へてゐたが、やつと思ひ當つたやうに答へた。

「思ひ出しました。あれの叫び聲で氣付きました。この子が五つの時でしたでせうか、私達はホノルルに住んでゐたのですが一度ヌアヌにゐる親戚へ連れて行つた事があつたのです。そこにこれの從姉がありまして、夜、冗談に口の大きい獅の面をかぶつてこの子をおどかした事がございました。すると、丁度只今のやうな聲をたてて泣いた事がございました。そしてその夜熱を出したりいたしました」

「なるほど。それでわかりました

醫者はそれから患者に向つて云つた。
「貴方の見てゐるものは口の大きいお面ですよ。よく見て下さい」
それから暫くして、Nの狂暴は靜かな沈默の中に消えて行つた。醫師は再び椅子に腰をおろすと、Nの病狀に關して次のやうな精神分析をこころみた。
「この方はその從姉さんを心ひそかに愛してゐたのです、五才の時に。それだのにその人に激しくおどろかされたので、その事に對する小さい煩悶が潛在意識の中に蓄積してゐたのです。その映像が——活動寫眞によつて非常に現在愛してゐる愛人の口と、昔の風景との錯覺聯想で、意識の外に現はれて來たのです。つまり匿れてゐた記憶が呼びさまされたわけなんです。てつきり、さうに違ひありません。はつきりとわかりました。それから月の破片によつて書かれたといふ文字——女性こそは恐るべきものなり。かの蜘蛛の如く男性を食ひ殺しはしないか——これは、たしか六時倶樂部でウオド博士が演說した有名な言葉だつたと思ひますが、これも恐らくは幼時の女性——從姉に對する愛情と恐怖の錯綜から特に印象強く記憶に殘つてゐた言葉と思ひます。でこの方はウオド博士の演說を外國にゐた時分聞いたか、それともその著述を嘗て讀んだものと思はれます」
そこで私は云つた。
「いや、彼は昔からのフエミニストです。確かにそんな本には注意をよく拂つてゐた筈です」
すると醫者は私の言葉によつて更らに何かの發見をしたやうに云つた。
「恐から恐までよくわかりました。明らかに患者は母錯綜に陷入つてゐたのです。だから母の爲めに船が動かなくなつたといふやうな夢をみたのです。いや、これ程の症狀なら、一週間も治療を續ければ全癒してしまふでせう」

とNが意識を回復した。彼はうすぐらい室を見廻はしてから云つた。

「頭が非常に輕るくなりました」

「さうですか。そりやいゝ工合でした。貴方の幻覺もやがてすつかり癒つてしまふでせう」

私はほつとしながら、扁翻とはためいてゐた妄想の旗を、クルクルと頂點から平靜な心に卷きおろした。そして晴れ晴れとした氣持になると、この非凡な醫者の解釋力に對して敬意を表した。

「私やNのお母さんは勿論、私達の愛人も、きつと貴方の明晰な治療に對して、感謝するに違ひありません。全くありがたうございました」

私はさう云ひながら涙ぐましい興奮で一杯になつてゐた。一人の人間を——たゞならぬ自分の友達を、闇鬱な世界の底からひきあげる事が出來た。

Nの母親はうれしさうに醫者の帽子に熱心にブラッシをかけてゐた。

「では御大切に」

S醫師は母親から帽子を受けとると、鷹揚な靴音を殘して扉の外へ消えて行つた。

## 第四夜

Nは毎日のやうに精神狀態を恢復していつた。

ある宵の口であつた。第六回の治療が終つて醫師が歸つて行くと、Nは寢台の上に起きあがつて私に云つた

「ありがたう。僕は君によつて全く救はれた。僕は窓から落ちかけてゐたんだからね、實際」

私は自分の膝の上へ片方の足を載せながら答へた。

「あの時には全く驚いたよ。が、まあよくなつて何よりだ」

私の胸が花瓶から垂れてゐるえにしだの花にさはつた。

「しかし君」Nが云つた。「僕は芹子さんを改めて君に譲らなければならない。君が僕以上に芹子さんを愛してゐるのを始めて知つたから」

「どうしてだ」

「だつて君が、僕に譲ると云つてからの弱り方がどんなだつたか、僕にはよくわかつたから」

「をかしい事を云ふね、そんな事を云ふのはよし給へ」

「だつて本當だよ。眞劍なんだよ」

「けど君は、フエミニズムに對する理想家ぢやなかつたのか。女性はそんなに譲られたり譲つたりせられるものなのかね」

私は膝の上から片足をおろしながら尚ほ續けて云つた。

「君は何時でも僕に、さういふ風に云つてたぢやないか」

するとNは、初めて生き生きした彼の感情のまゝの言葉で云つた。

「いや、僕は死んでゐた人間だからな。君の友情によつて生き返つたんだからな。だから僕は、芹子さんの事は忘れるつもりなんだ。たゞ一度僕が君の親切をそのまゝ聞かうとしたのは、ほんの僕の病的な氣持からだつたんだ」

「病的、では僕もすなほに君の言葉を受け入れておかう。が然し戀人を獨占しようとしたり、譲りあはうとしたりするや

うな、さういふ病的な感傷こそ止めにしようぢやないか。そして僕達は何時か君が云つたやうに、芹子さんを健康な吾々の愛人としておかうぢやないか。第一彼女自身が吾々が護りあつてゐるのを、そのまゝ受け入れるかどうかさへわからなくはないか。その選擇こそ彼女の役目ぢやないのかね。君はいつも眞實な愛戀こそ天國の門だと云つたぢやないか」

私はかう喋りながら、私とNとの間の友情は、生活の上の意志は、そして私達と芹子との間にある自由な狀態は、又なく天上的で晴れやかで美しいものに思はれて來た。吾々はこれ以外の生き方では、愛が深かければ深いほど益々悲劇的な結果に走るより仕方がない。そしてこの生き方は、美が萬人のものであり、そして美が科學をさへ更らに高めるだらうといふ考へを見事に理論づけてゐるやうに思はれた。

Nは久しぶりで煙草に火をつけると、たのしさうに云つた。

「いや、君の云ふ事はよくわかつた。全くのところ芹子さん自身が結婚を否定してゐるんだからな。それだのに吾々が結婚に就いて話しあつたつて、何の意味もなさないさ」

やがてNは煙の輪を吐くと、蒼ざめた顔を次第に明るくした。

外では初夏の街路樹が風にゆれながら新鮮な香料を人々の胸の上に撒き、人々は胸を張りながら魚族のやうに明るい夜景の中を切つてゐた。

かくて私達は、世の中の夜々の秘密――一人が一人を愛撫しながら、然もきまつてやがて退屈する結婚の習慣――から天上に近く一つの段階をのぼつたやうな氣がして來た。この二人の奇嬌なる性格者にとつては、其時少くともハツキリとさう思はれた。

# 玄鶴山房

芥川龍之介

## 一

……それは小ぢんまりと出來上つた、奥床しい門構への家だつた。尤もこの界隈にはかう云ふ家も珍しくはなかつた。が、「玄鶴山房」の額や塀越しに見える庭木などはどの家よりも數奇を凝らしてゐた。

この家の主人、堀越玄鶴は畫家としても多少は知られてゐた。しかし資產を作つたのはゴム印の特許を受けた爲だつた。或はゴム印の特許を受けてから地所の賣買をした爲だつた。現に彼が持つてゐた郊外の或地面などは生薑さへ碌に出來ないらしかつた。けれども今はもう赤瓦の家や靑瓦の家の立ち並んだ所謂「文化村」に變つてゐた。……

しかし「玄鶴山房」は兎に角小ぢんまりと出來上つた、奥床しい門構への家だつた。殊に近頃は見越しの松に雪よけの繩がかかつたり、玄關の前に敷いた枯れ松葉に藪柑子の實が赤らんだり、一層風流に見えるのだつた。のみならずこの家のある

横町も殆ど人通りと云ふものはなかつた。豆腐屋さへそこを通る時には荷を大通りへおろしたなり、喇叭を吹いて通るだけだつた。

「玄鶴山房――玄鶴と云ふのは何だらう？」

たまたまこの家の前を通りかかつた、髪の毛の長い畫學生は細長い繪の具箱を小脇にしたまま、同じ金釦の制服を着たもう一人の畫學生にかう言つたりした。

「何だかな、まさか嚴格と云ふ洒落でもあるまい。」

彼等は二人とも笑ひながら、氣輕にこの家の前を通つて行つた。そのあとには唯凍て切つた道に彼等のどちらかが捨てて行つた「ゴルデン・バット」の吸ひ殻が一本、かすかに青い一すぢの煙を細ぼそと立ててゐるばかりだつた。……

……

## 二

重吉は玄鶴の婿になる前から或銀行へ勤めてゐた。從つて家に歸つて來るのはいつも電燈のともる頃だつた。彼はこの數日以來、門の内へはひるが早いか、忽ち妙な臭氣を感じた。それは老人には珍しい肺結核の床に就いてゐる玄鶴の息の匂だつた。が、勿論家の外にはそんな匂の出る筈はなかつた。冬の外套の腋の下に折鞄を抱へた重吉は玄關前の踏み石を歩きながら、かういふ彼の神經を怪まない訣には行かなかつた。

玄鶴は「離れ」に床をとり、横になつてゐない時には夜着の山によりかかつてゐた。重吉は外套や帽子をとると、必ずこの「離れ」へ顔を出し、「唯今」とか「けふは如何ですか」とか言葉をかけるのを常としてゐた。しかし「離れ」

の摑の内へは滅多に足も入れたことはなかつた。それは舅の肺結核に感染するのを怖れる爲でもあり、又一つには息の匂を不快に思ふ爲でもあつた。玄鶴は彼の顏を見る度にいつも唯「ああ」とか「お歸り」とか答へた。その聲は又力の無い、聲よりも息に近いものだつた。重吉は舅にかう言はれると、時々彼の不人情に後ろめたい思ひもしない訣ではなかつた。けれども「離れ」へはひることはどうも彼には無氣味だつた。

それから重吉は茶の間の隣りにやはり床に就いてゐる姑のお鳥を見舞ふのだつた。お鳥は玄鶴の寢こまない前から、――七八年前から腰拔けになり、便所へも通へない體になつてゐた。玄鶴が彼女を貰つたのは彼女が或大藩の家老の娘と云ふ外にも器量望みからだと云ふことだつた。彼女はそれだけに年をとつても、どこか目などは美しかつた。しかしこれも床の上に坐り、丹念に白足袋などを繕つてゐるのは餘りミイラと變らなかつた。重吉はやはり彼女にも「お母さん、けふはどうですか？」と云ふ、手短な一語を殘したまま、六疊の茶の間へはひるのだつた。

妻のお鈴は茶の間にゐなければ、信州生まれの女中のお松と狹い臺所に働いてゐた。小綺麗に片づいた茶の間は勿論、文化竈を据ゑた臺所さへ舅や姑の居間よりも遙かに重吉には親しかつた。彼は一時は知事などにもなつた或政治家の次男だつた。が、豪傑肌の父親よりも昔の女流歌人だつた母親に近い秀才だつた。それは又彼の人懷こい目や細つそりした顋にも明らかだつた。重吉はこの茶の間へはひると、洋服を和服に着換へた上、楽々と長火鉢の前に坐り、安い葉卷を吹かしたり、今年やつと小學校にはひつた一人息子の武夫にからかつたりした。

重吉はいつもお鈴や武夫とチヤブ臺を圍んで食事をした。彼等の食事は賑かだつた。「が、近頃は「賑か」と云つても、どこか又窮屈にも違ひなかつた。それは唯玄鶴につき添ふ甲野と云ふ看護婦の來てゐる爲だつた。尤も武夫は「甲野さん」がゐても、[illegible]

鈴は時々眉をひそめ、かう云ふ武夫を睨んだりした。しかし武夫はきよとんとしたまま、わざと大仰に茶碗の飯を掻きこんで見せたりするだけだつた。重吉は小說などを讀んでゐるだけに武夫のはしやぐのにも「男」を感じ、不快になることもないではなかつた。が、大抵は微笑したぎり、默つて飯を食つてゐるのだつた。

「玄鶴山房」の夜は靜かだつた。朝早く家を出る武夫は勿論、重吉夫婦も大抵は十時には床に就くことにしてゐた。その後でもまだ起きてゐるのは九時前後から夜伽をする看護婦の甲野ばかりだつた。甲野は玄鶴の枕もとに赤あかと火の起つた火鉢を抱へ、居睡りもせずに坐つてゐた。玄鶴は、――玄鶴も時々は目を醒ましてゐた。が、湯たんぽが冷えたとか、濕布が乾いたとか云ふ以外に殆ど口を利いたことはなかつた。かう云ふ「離れ」にも聞えて來るものは植ゑ込みの竹の戰ぎだけだつた。甲野は薄ら寒い靜かさの中にぢつと玄鶴を見守つたまま、いろいろのことを考へてゐた。この一家の人々の心もちや彼女自身の行く末などを。……

## 三

或雪の晴れ上つた午後、二十四五の女が一人、か細い男の子の手を引いたまま、引き窓越しに青空の見える堀越家の臺所へ顏を出した。重吉は勿論家にゐなかつた。丁度ミシンをかけてゐたお鈴は多少豫期はしてゐたものの、ちよつと當惑に近いものを感じた。しかし兎に角この客を迎へに長火鉢の前を立つて行つた。客は臺所へ上つた後、彼女自身の履き物や男の子の靴を揃へ直した。(男の子は白いスウエエタアを着てゐた。)彼女がひけ目を感じてゐることはかう云ふ所作だけにも明らかだつた。が、それも無理はなかつた。彼女はこの五六年以來、東京の或近在に玄鶴が公然と圍つて置いた女中上りのお芳だつた。

お鈴はお芳の顔を見た時、存外彼女が老けたことを感じた。しかもそれは顔ばかりではなかつた。お芳は四五年以前には圓まると肥つた手をしてゐた。が、年は彼女の手さへ靜脈の見えるほど細らせてゐた。それから彼女が身につけたものも、——お鈴は彼女の安ものの指環に何か世帶じみた寂しさを感じた。

「これは兄が檀那様に差し上げてくれと申しましたから。」

お芳は意氣後れのしたやうに古い新聞紙の包みを一つ、茶の間へ膝を入れる前にそつと臺所の隅へ出した。折から洗ひものをしてゐたお松はせつせと手を動かしながら、水々しい銀杏返しに結つたお芳を時々尻目に覗つたりしてゐた。が、この新聞紙の包みを見ると、更に惡意のある表情をした。それは又實際文化竈や華奢な皿小鉢と調和しない、惡臭を放つてゐるのに違ひなかつた。お芳はお松を見なかつたものの、少くともお鈴の顔色に妙なけはひを感じたと見え、

「これは、あの、大蒜(にんにく)でございます」と説明した。それから指を噛んでゐた子供に「さあ、坊ちやん、お時宜なさい」と聲をかけた。男の子は勿論玄鶴がお芳に生ませた文太郎だつた。その子供をお芳が「坊ちやん」と呼ぶのはお鈴には如何にも氣の毒だつた。けれども彼女の常識はすぐにそれもかう云ふ女には仕かたがないことと思ひ返した。お鈴はさりげない顔をしたまま、茶の間の隅に坐つた親子に有り合せの菓子や茶などをすすめ、玄鶴の容態を話したり、文太郎の機嫌をとつたりし出した。……

玄鶴はお芳を圍ひ出した後、省線電車の乘り換へも苦にせず、一週間に一二度づつは必ず妾宅へ通つて行つた。お鈴はかう云ふ父の氣もちに始めのうちは嫌惡を感じてゐた。「ちつとはお母さんの手前も考へれば善いのに、」——そんなことも度たび考へたりした。尤もお鳥は何ごとも諦め切つてゐるらしかつた。しかしお鈴はそれだけ一層母を氣の毒

に思ひ、父が妾宅へ出かけた後でも母には「けふは詩の會ですつて」などと白々しい譃をついたりしてゐた。その譃が役に立たないことは彼女自身も知らないのではなかつた。が、時々母の顔に冷笑に近い表情を見ると、譃をついたことを後悔する、――と云ふよりも寧ろ彼女の心も汲み分けてくれない腰ぬけの母に何か情無さを感じ勝ちだつた。

お鈴は父を送り出した後、一家のことを考へる爲にミシンの手をやめるのも度たびだつた。玄鶴はお芳を圍ひ出さない前にも彼女には「立派なお父さん」ではなかつた。しかし勿論そんなことは氣の優しい彼女にはどちらでも善かつた。唯彼女に氣がかりだつたのは父が書畫骨董までもずんずん妾宅へ運ぶことだつた。お鈴はお芳が女中だつた時から、彼女を悪人と思つたことはなかつた。いや、寧ろ人並みよりも内氣な女と思つてゐた。が、東京の或場末に肴屋をしてゐるお芳の兄は何をたくらんでゐるかわからなかつた。實際又彼は彼女の目には妙に悪賢い男らしかつた。お鈴は時々重吉をつかまへ、彼女の心配を打ち明けたりした。けれども彼は取り合はなかつた。「僕からお父さんに言ふ訣には行かない。」――お鈴は彼にかう言はれて見ると、黙つてしまふより外はなかつた。

「まさかお父さんも羅兩峯の畫がお芳にわかるとも思つてゐないんでせうが。」

重吉も時たまお鳥にはそれとなしにこんなことも話したりしてゐた。が、お鳥は重吉を見上げ、いつも唯苦笑してかう言ふのだつた。

「あれがお父さんの性分なのさ。何しろお父さんはあたしにさへ『この硯はどうだ?』などと言ふ人なんだからね。」

しかしそんなことも今になつて見れば、誰にも莫迦々々しい心配だつた。玄鶴は今年の冬以來、どつと病の重つた爲に妾宅通ひも出來なくなると、重吉が持ち出した手切れ話に(尤もその話の條件などは事實上彼よりもお鳥やお鈴が拵へたと言ふのに近いものだつた。)存外素直に承諾した。それは又お鈴が恐れてゐたお芳の兄も同じことだつた。お芳は

千圓の手切れ金を貰ひ、上總の或海岸にある兩親の家へ歸つた上、月々文太郎の養育料として若干の金を送つて貰ふ、――彼はかう云ふ條件に少しも異存を唱へなかつた。のみならず妾宅に置いてあつた玄鶴の秘藏の煎茶道具なども催促されぬうちに運んで來た。お鈴は前に疑つてゐただけに一層彼に好意を感じた。

「就きましては妹のやつが若しお手でも足りませんやうなら、御看病に上りたいと申してをりますんですが。」

お鈴はこの頼みに應じる前に腰ぬけの母に相談した。それは彼女の失策と云つても差し支へないものに違ひなかつた。お鳥は彼女の相談を受けると、あしたにもお芳に文太郎をつれて來て貰ふやうに勸め出した。お鈴は母の氣もちの外にも一家の空氣の擾されるのを惧れ、何度も母に考へ直させようとした。(その癖又一面には父の玄鶴とお芳の兄との中間に立つてゐる關係上、いつか素氣なく先方の頼みを斷れない氣もちにも落ちこんでゐた。)が、お鳥は彼女の言葉をどうしても素直には取り上げなかつた。

「これがまだあたしの耳へはひらない前ならば格別だけれども――お芳の手前も羞しいやね。」

お鈴はやむを得ずお芳の兄にお芳の來ることを承諾した。それも亦或は世間を知らない彼女の失策だつたかも知れなかつた。現に重吉は銀行から歸り、お鈴にこの話を聞いた時、女のやうに優しい眉の間にちよつと不快らしい表情を示した。「そりや人手が殖えることは難有いにも違ひないがね。……お父さんにも一應話して見れば善いのに。お父さんから斷るのならばお前にも責任のない譯なんだから。」――そんなことも口に出して言つたりした。お鈴はいつになく鬱ぎこんだまま、「さうだつたわね」などと返事をしてゐた。しかし玄鶴に相談することは、――お芳に勿論未練のある瀕死の父に相談することは彼女には今になつて見ても出來ない相談に違ひなかつた。

……お鈴はお芳親子の相手をしながら、かう云ふ曲折を思ひ出したりした。お芳は長火鉢に手もかざさず、途絶え

勝ちに彼女の兄のことや文太郎のことを話してゐた。彼女の言葉は四五年前のやうに「それは」を So-rya と發音する田舍訛りを改めなかつた。お鈴はこの田舍訛りにいつか彼女の心もちも或氣安さを持ち出したのを感じた。同時に又襖一重向うに咳一つしずにゐる母のお鳥に何か漠然とした不安も感じた。

「ぢや一週間位はゐてくれられるの？」

「はい、こちら樣さへお差支へございませんければ。」

「でも着換え位なくつちやいけなかないの？」

「それは兄が夜分にでも屆けると申してをりましたから。」

お芳はかう答へながら、退屈らしい文太郎に懷のキャラメルを出してやつたりした。

「ぢやお父さんにさう言つて來ませう。お父さんもすつかり弱つてしまつてね。障子の方へ向つてゐる耳だけ霜燒けが出來たりしてゐるのよ。」

お鈴は長火鉢の前を離れる前に何となしに鐵瓶をかけ直した。

「お母さん。」

お鳥は何か返事をした。それはやつと彼女の聲に目を醒ましたらしい粘り聲だつた。

「お母さん。お芳さんが見えましたよ。」

お鈴はほつとした氣もちになり、お芳の顏を見ないやうに早速長火鉢の前を立ち上つた。それから次の間を通りしなにもう一度「お芳さんが」と聲をかけた。お鳥は横になつたまま、夜着の襟に口もとを埋めてゐた。が、彼女を見上げると、目だけに微笑に近いものを浮かべ、「おや、まあ、よく早く」と返事をした。お鈴ははつきりと彼女の背中にお芳

の來ることを感じながら、雪のある庭に向つた廊下をそはそは「離れ」へ急いで行つた。

「離れ」は明るい廊下から突然はひつて來たお鈴の目には實際以上に薄暗かつた。玄鶴は丁度起き直つたまま、甲野に新聞を讀ませてゐた。が、お鈴の顏を見ると、いきなり「お芳か？」と聲をかけた。それは妙に切迫した、詰問に近い嗄れ聲だつた。お鈴は襖側に佇んだなり、反射的に「ええ」と返事をした。それから、――誰も口を利かなかつた。

「すぐにここへよこしますから。」

「うん。………お芳一人かい？」

「いいえ。………」

玄鶴は默つて頷いてゐた。

「ぢや甲野さん、ちよつとこちらへ。」

お鈴は甲野よりも一足先に小走りに廊下を急いで行つた。丁度雪の殘つた棕櫚の葉の上には鶺鴒が一羽尾を振つてゐた。しかし彼女はそんなことよりも病人臭い「離れ」の中から何か氣味の惡いものがついて來るやうに感じてならなかつた。

## 四

お芳が泊りこむやうになつてから、一家の空氣は目に見えて險惡になるばかりだつた。それはまづ武夫が文太郎をいぢめることから始まつてゐた。文太郎は父の玄鶴よりも母のお芳に似た子供だつた。しかも氣の弱い所まで母のお芳に似た子供だつた。お鈴も勿論かう云ふ子供に同情しない訣ではないらしかつた。が時々は文太郎を意氣地なしと思ふこ

ともあるらしかつた。

　看護婦の甲野は職業から、冷やかにこのありふれた家庭的悲劇を眺めてゐた、――と云ふよりも寧ろ享樂してゐた。彼女の過去は暗いものだつた。彼女は病家の主人だの病院の醫者だのとの關係上、何度一塊の青酸加里を嚥まうとしたことだか知れなかつた。この過去はいつか彼女の心に他人の苦痛を享樂する病的な興味を植ゑつけてゐた。彼女は堀越家へはひつて來た時、腰ぬけのお鳥が便をする度に手を洗はないのを發見した。「この家のお嫁さんは氣が利いてゐる。あたしたちにも氣づかないやうに水を持つて行つてやるやうだから。」――そんなことも一時は疑深い彼女の心に影を落した。が、四五日ゐるうちにそれは全然お孃樣育ちのお鈴の手落ちだつたのを發見した。彼女はこの發見に何か滿足に近いものを感じ、お鳥の便をする度に洗面器の水を運んでやつた。

「甲野さん、あなたのおかげさまで人間並みに手が洗へます。」

　お鳥は手を合せて涙をこぼした。甲野はお鳥の喜びには少しも心を動かさなかつた。しかしそれ以來三度に一度は水を持つて行かなければならぬお鈴を見ることは愉快だつた。從つてかう云ふ彼女には子供たちの喧嘩も不快ではなかつた。彼女は玄鶴にはお芳親子に同情のあるらしい素振りを示した。同時に又お鳥にはお芳親子に惡意のあるらしい素振りを示した。それはたとひ徐ろにもせよ、確實に效果を與へるものだつた。

　お芳が泊つてから一週間ほどの後、武夫は又文太郎と喧嘩をした。喧嘩は唯豚の尻つ尾は柿の蔕に似てゐるとか似てゐないとか云ふことから始まつてゐた。武夫は彼の勉强部屋の隅に、――玄關の隣の四疊半の隅に細い文太郎を抑しつけた上、さんざん打つたり蹴つたりした。そこへ丁度來合せたお芳は泣き聲も出ない文太郎を抱き上げ、かう武夫をたしなめにかかつた。

「坊ちやん、弱いものいぢめをなすつてはいけません。」

これは内氣な彼女には珍らしい棘のある言葉だつた。武夫はお芳の權幕に驚き、今度は彼自身泣きながら、お鈴のゐる茶の間へ逃げこもつた。するとお鈴もかつとした見え、手ミシンの仕事をやりかけたまま、お芳親子のゐる所へ無理に武夫を引きずつて行つた。

「お前が一體我儘なんです。さあ、お芳さんにおあやまりなさい、ちやんと手をついておあやまりなさい。」

お芳はかう云ふお鈴の前に文太郎と一しよに涙を流し、平あやまりにあやまる外はなかつた。その又仲裁役を勤めるものは必ず看護婦の甲野だつた。甲野は顔を赤めたお鈴を一生懸命に押し戻しながら、いつももう一人の人間の、――ぢつとこの騒ぎを聞いてゐる玄鶴の心もちを想像し、内心には冷笑を浮かべてゐた。が、勿論そんな素ぶりは決して顔色にも見せたことはなかつた。

けれども一家を不安にしたものは必しも子供の喧嘩ばかりではなかつた。お芳は又いつの間にか何ごともあきらめ切つたらしいお鳥の嫉妬を煽つてゐた。尤もお鳥はお芳自身には一度も怨みなどを言つたことはなかつた。（これは又五六年前、お芳がまだ女中部屋に寢起きしてゐた頃も同じだつた。）が、全然關係のない重吉に何かと當り勝ちだつた。重吉は勿論とり合はなかつた。お鈴はそれを氣の毒に思ひ、時々母の代りに詫びたりした。しかし彼は苦笑したぎり、「お前までヒステリイになつては困る」と話を反らせるのを常としてゐた。

甲野はお鳥の嫉妬にもやはり興味を感じてゐた。お鳥の嫉妬それ自身は勿論、彼女が重吉に當る氣もちも甲野にははつきりとわかつてゐた。のみならず彼女はいつの間にか彼女自身も重吉夫婦に嫉妬に近いものを感じてゐた。お鈴は彼女には「お孃樣」だつた。重吉も――重吉は兎に角世間並みに出來上つた男に違ひなかつた。が、彼女の輕蔑する一匹

の誰にも違ひなかつた。かう云ふ彼等の幸福は彼女には殆ど不正だつた。彼女はこの不正を矯める爲に(!)重吉に馴れ〻〻しい素振りを示した。それは或は重吉には何ともないものかも知れなかつた。けれどもお鳥を苛立たせるには絕好の機會を與へるものだつた。お鳥は膝頭も露はにしたまま、「重吉、お前はあたしの娘では――腰ぬけの娘では不足なのかい？」と毒々しい口をきいたりした。

しかしお鈴だけはその爲に重吉を疑つたりはしないらしかつた。いや、實際甲野にも氣の毒に思つてゐるらしかつた。甲野はそこに不滿を持つたばかりか、今更のやうに人の善いお鈴を輕蔑せずにはゐられなかつた。が、いつか重吉が彼女を避け出したのは愉快だつた。のみならず彼女を避けてゐるうちに反て彼女に男らしい好奇心を持ち出したのは愉快だつた。彼は前には甲野がゐる時でも、臺所の側の風呂へはひる爲に裸になることをかまはなかつた。けれども近頃ではそんな姿を一度も甲野に見せないやうになつた。それは彼が羽根を拔いた雄鷄に近い彼の體を羞ぢてゐる爲に違ひなかつた。甲野はかう云ふ彼を見ながら、(彼の顏も亦雀斑だらけだつた。)一體彼はお鈴以外の誰に惚れられるつもりだらうなどと私かに彼を嘲つたりしてゐた。

或霜曇りに曇つた朝、甲野は彼女の部屋になつた玄關の三疊に鏡を据ゑ、いつも彼女が結びつけたオオル・バックに髮を結びかけてゐた。それは丁度愈お芳が田舍へ歸らうと言ふ前日だつた。お芳がこの家を去ることは重吉夫婦には嬉しいらしかつた。が、反つてお鳥には一層苛立たしさを與へるらしかつた。甲野は髮を結びながら、甲高いお鳥の聲を聞き、いつか彼女の友だちが話した或女のことを思ひ出した。彼女はパリに住んでゐるうちにだんだん烈しい懷鄉病に落ちこみ、夫の友だちが歸朝するのを幸ひ、一しよに船へ乘りこむことにした。長い航海も彼女には存外苦痛ではないらしかつた。しかし彼女は紀州沖へかかると、急になぜか興奮しはじめ、とうとう海へ身を投げてしまつた。日本へ近

づけば近づくほど、懐郷病も逆に昂ぶつて來る、――甲野は靜かに油つ手を拭き、腰ぬけのお鳥の嫉妬は勿論、彼女自身の嫉妬にもやはりかう云ふ神祕な力が働いてゐることを考へたりしてゐた。

「まあ、お母さん、どうしたんです？　こんな所まで這ひ出して來て。お母さんつたら。――甲野さん、ちよつと來て下さい。」

お鈴の聲は「離れ」に近い緣側から響いて來るらしかつた。甲野はこの聲を聞いた時、澄み渡つた鏡に向つたまゝ、始めてにやりと冷笑を洩らした。それからさも驚いたやうに「はい唯今」と返事をした。

五

玄鶴はだんだん衰弱して行つた。彼の永年の病苦は勿論、彼の背中から腰へかけた床ずれの痛みも烈しかつた。彼は時々唸り聲を擧げ、僅かに苦しみを紛らせてゐた。しかし彼を悩ませたものは必しも肉體的苦痛ばかりではなかつた。彼はお芳の泊つてゐる間は多少の慰めを受けた代りにお鳥の嫉妬や子供たちの喧嘩にしつきりない苦しみを感じてゐた。けれどもそれはまだ善かつた。玄鶴はお芳の去つた後は恐しい孤獨を感じた上、長い彼の一生と向ひ合はない訣には行かなかつた。

玄鶴の一生はかう云ふ彼には如何にも淺ましい一生だつた。成程ゴム印の特許を受けた當座は比較的彼の一生でも明るい時代には違ひなかつた。しかしそこにも儕輩の嫉妬や彼の利益を失ふまいとする彼自身の焦燥の念は絶えず彼を苦しめてゐた。ましてお芳を圍ひ出した後は、――彼は家庭のいざこざの外にも彼等の知らない金の工面にいつも重荷を背負ひつづけだつた。しかも更に淺ましいことには年の若いお芳に惹かれてゐたものの、少くともこの一二年は何度內

心にお芳親子を死んでしまへと思つたか知れなかつた。

「淺ましい?——しかしそれも考へて見れば、格別わしだけに限つたことではない。」

彼は夜などはかう考へ、彼の親戚や知人のことを一々細かに思ひ出したりした。彼の婿の父親は唯「憲政を擁護する爲に」彼よりも腕の利かない敵を何人も社會的に殺してゐた。それから彼に一番親しい或年輩の骨董屋は先妻の娘に通じてゐた。それから或辯護士は共託金を費消してゐた。それから或篆刻家は、——しかし彼等の犯した罪は不思議にも彼の苦しみには何の變化も與へなかつた。のみならず逆に生そのものにも暗い影を擴げるばかりだつた。

「何、この苦しみも長いことはない。お目出度くなつてしまひさへすれば……」

これは玄鶴にも殘つてゐたたつた一つの慰めだつた。彼は心身に食ひこんで來るいろいろの苦しみを紛らす爲に樂しい記憶を思ひ起さうとした。けれども彼の一生は前にも言つたやうに淺ましかつた。若しそこに少しでも明るい一面があるとすれば、それは唯何も知らない幼年時代の記憶だけだつた。彼は度たび夢うつつの間に彼の兩親の住んでゐた信州の或山峽の村を、——殊に石を置いた板葺き屋根や蠶臭い桑ボヤを思ひ出した。が、その記憶もつづかなかつた。彼は時々唸り聲の間に觀音經を唱へて見たり、昔のはやり歌をうたつて見たりした。しかも「妙音觀世音、梵音海潮音、勝彼世間音」を唱へた後、「かつぽれ、かつぽれ」をうたふことは滑稽にも彼には勿體ない氣がした。

「寢るが極樂。寢るが極樂……」

玄鶴は何も彼も忘れる爲に唯ぐつすり眠りたかつた。實際又甲野は彼の爲に催眠藥を與へる外にもヘロインなどを注射してゐた。けれども彼には眠りさへいつも安らかには限らなかつた。彼は時々夢の中にお芳や文太郎に出合つたりした。それは彼には、——夢の中の彼には明るい心もちのするものだつた。(彼は或夜の夢の中にはまだ新しい花札の「櫻

の二十」と話してゐた。しかもその又「櫻の二十」は四五年前のお芳の顔をしてゐた。）しかしそれだけに目の醒めた後は一層彼を見じめにした。玄鶴はいつか眠ることにも恐怖に近い不安を感ずるやうになつた。

大晦日もそろそろ近づいた或午後、玄鶴は仰向けに横たはつたなり、枕もとの甲野へ聲をかけた。

「甲野さん、わしはな、久しく褌をしめたことがないから、晒し木綿を六尺買はせて下さい。」

晒し木綿を手に入れることはわざわざ近所の呉服屋へお松を買ひにやるまでもなかつた。

「しめるのはわしが自分でしめます。ここへ疊んで置いて行つて下さい。」

玄鶴はこの褌を便りに、――この褌に縊れ死ぬことを便りにやつと短い半日を暮した。しかし床の上に起き直ることさへ人手を借りなければならぬ彼には容易にその機會も得られなかつた。のみならず死はいざとなつて見ると、玄鶴にもやはり恐しかつた。彼は薄暗い電燈の光に黄檗の一行ものを眺めたまま、未だに生を貪らずにはゐられぬ彼自身を嘲つたりした。

「甲野さん、ちよつと起して下さい。」

それはもう夜の十時頃だつた。

「わしはな、これからひと眠りします。あなたも御遠慮なくお休みなすつて下さい。」

甲野は妙に玄鶴を見つめ、かう素つ氣ない返事をした。

「いえ、わたくしは起きてをります。これがわたくしの勤めでございますから。」

玄鶴は彼の計畫も甲野の爲に看破られたのを感じた。が、ちよつと頷いたぎり、何も言はずに狸寢入りをした。甲野は彼の枕もとに婦人雑誌の新年號をひろげ、何か讀み耽けつてゐるらしかつた。玄鶴はやはり蒲團の側の褌のことを考へ

ながら、薄目に甲野を見守つてゐた。すると――急に可笑しさを感じた。

「甲野さん。」

甲野も玄鶴の顔を見た時はさすがにぎよつとしたらしかつた。玄鶴は夜着によりかかつたまま、いつかとめどなしに笑つてゐた。

「なんでございます？」

「いや、何でもない。何にも可笑しいことはありません。――」

玄鶴はまだ笑ひながら、細い右手を振つて見せたりした。

「今度は………なぜかう可笑しうなつてな。………今度はどうか横にして下さい。」

一時間ばかりたつた後、玄鶴はいつか眠つてゐた。その晩は夢も恐しかつた。彼は樹木の茂つた中に立ち、腰の高い障子の隙から茶室めいた部屋を覗いてゐた。そこには又まる裸の子供が一人、こちらへ顔を向けて横になつてゐた。それは子供とは云ふものの、老人のやうに皺くちやだつた。玄鶴は聲を擧げようとし、寢汗だらけになつて目を醒ました。………

「離れ」には誰も來てゐなかつた。のみならずまだ薄暗かつた。まだ？――しかし玄鶴は置き時計を見、彼是正午に近いことを知つた。彼の心は一瞬間、ほつとしただけに明るかつた。けれども又いつものやうに忽ち陰鬱になつて行つた。彼は仰向けになつたまま、彼自身の呼吸を數へてゐた。それは丁度何ものかに「今だぞ」とせかれてゐる氣もちだつた。玄鶴はそつと褌を引き寄せ、彼の頭に巻きつけると、兩手にぐつと引つぱるやうにした。

そこへ丁度顏を出したのはまるまると着膨れた武夫だつた。

「やあ、お爺さんがあんなことをしてゐらあ。」

武夫はかう囃しながら、一散に茶の間へ走つて行つた

## 六

一週間ばかりたつた後、玄鶴は家族たちに圍まれたまま、肺結核の爲に絶命した。彼の告別式は盛大（！）だつた。（唯、腰ぬけのお鳥だけはその式にも出る訣に行かなかつた。）彼の家に集まつた人々は重吉夫婦に悔みを述べた上、白い綸子に蔽はれた彼の柩の前に燒香した。が、門を出る時には大抵彼のことを忘れてゐた。尤も彼の故朋輩だけは例外だつたのに違ひなかつた。「あの爺さんも本望だつたらう。若い妾も持つてゐれば、小金もためてゐたんだから。」――彼等は誰も同じやうにこんなことばかり話し合つてゐた。

彼の柩をのせた葬用馬車は一輛の馬車を從へたまま、日の光も落ちない師走の町を或火葬場へ走つて行つた。薄汚い後の馬車に乘つてゐるのは重吉や彼の從弟だつた。彼の從弟の大學生は馬車の動搖を氣にしながら、重吉と餘り話もせずに小型の本に讀み耽つてゐた。それは Liebknecht の追憶錄の英譯本だつた。が、重吉は通夜疲れの爲にうとうと居睡りをしてゐなければ、窓の外の新開町を眺め、「この邊もすつかり變つたな」などと氣のない獨り語を洩らしてゐた。

二輛の馬車は霜どけの道をやつと火葬場へ辿り着いた。しかし豫め電話をかけて打ち合せて置いたのにも關らず、一等の竈は滿員になり、二等だけ殘つてゐると云ふことだつた。それは彼等にはどちらでも善かつた。が、重吉は舅よりも寧ろお鈴の思惑を考へ、半月形の窓越しに熱心に事務員と交渉した。「實は手遲れになつた病人だしするから、せめて火葬にする時だけは一等にしたいと思ふんですがね。」――そんな噓もついて見たりした。それは彼の豫期したよりも

効果の多い證らしかつた。

「ではかうしませう。一等はもう満員ですから、特別に一等の料金で特等で焼いて上げることにしませう。」

重吉は幾分か間の悪さを感じ、何度も事務員に禮を言つた。事務員は眞鍮の眼鏡をかけた好人物らしい老人だつた。

「いえ、何、お禮には及びません。」

彼等は竈に封印した後、薄汚い馬車に乗つて火葬場の門を出ようとした。すると意外にもお芳が一人、煉瓦塀の前に佇んだまま、彼等の馬車に目禮してゐた。重吉はちよつと狼狽し、彼の帽を上げようとした。しかし彼等を乗せた馬車はその時にはもう傾きながら、ポプラアの枯れた道を走つてゐた。

「あれですね？」

「うん、……俺たちの來た時もあすこにゐたかしら。」

「さあ、乞食ばかりゐたやうに思ひますがね。……あの女はこの先どうするでせう？」

重吉は一本の敷島に火をつけ、出來るだけ冷淡に返事をした。

「さあ、どう云ふことになるか。……」

彼の従弟は默つてゐた。が、彼の想像は上總の或海岸の漁師町を描いてゐた。それからその漁師町に住まなければならぬお芳親子も。――彼は急に險しい顔をし、いつかさしはじめた日の光の中にもう一度リイプクネヒトを讀みはじめた。（昭和二・一）

# 婦人

## 紙上放送の夕

（新作講談）斑鳩平次と後藤又兵衞……白柳 秀湖
（怪婦人傳）女賊お君……長谷川伸
（趣味講話）お國訛の民謡の話……松川二郎
（新作落語）椿説長崎土産……正岡 蓉
（放送對話）A氏とB子孃……生方敏郎
（花柳情話）乳房……平山蘆江

## 昭和維新に際し日本婦人に贈る

□女子の政治的任務……河田嗣郎
□松島遊廓問題と婦人……安部磯雄
□この三つの希望……鶴見祐輔
□婦人運動の基調……太田正孝
□悲痛の岐路に立つ……下田將美
□昭和日本と婦人參政……鈴木文史朗

■便所の中で料理をなさる亞米利加の奧様……佐々木指月

■（自傳）黑い繪具（筆者が半生の悲痛極りなき戀愛苦難の歷史であるが、その大膽にして眞率な告白は全讀書階級を驚倒せしめてゐる。）……原 阿佐緒

■異邦人の鏡……千葉龜雄

■日本の政黨政治と國民性……澤田謙

■時評 魚商代表と共託金◇選擧公營論◇「教調洗湯論」◇製絲工場の女工達の話……吉野作造

■長篇 夜曲ホ長調……久米正雄
■短篇 結城病……上司小劍
■長篇 顯現……谷崎潤一郎

二月

東京丸ビル七階
七拾錢税貳錢半

# 公論

號

■短篇 寒椿……豊島與志雄

■短篇 雪……宇野千代

■長篇 愚人の唄……正宗白鳥

振替東京三四
中央公論社

■小說の讀みかた……相馬泰三

■役場で結婚媒介する農村……小山勝清

■世界の女性 印度の女人……古莊國雄

■(奉悼大行天皇)挽歌十章……佐佐木信綱

■(奉祝聖上陛下)大御影……尾上八郎

■毒子の告白（今や異邦萬里の外で餓死に瀕しつゝある筆者が、小說の體を藉りて抑々何を語らんとするか?）……武林文子

■結婚の理想（通り一遍の抽象論に非ず、生理的生活に迄言及せり。）……室伏高信

宵話欄

◇夏のお孃さん……松浦

◇女のゐない國へ行きたい……武川

◇お幾さん……木川

## 酒

三上於菟吉氏、吉井勇氏、宮島資夫氏、牧水氏、岡田三郎氏、水守龜之助氏等の夫人が、酒盃を透して良人を批評する無禮講

……時雨

……よしゐとく子

……宮島麗子

……若山喜志子

……水守榮子

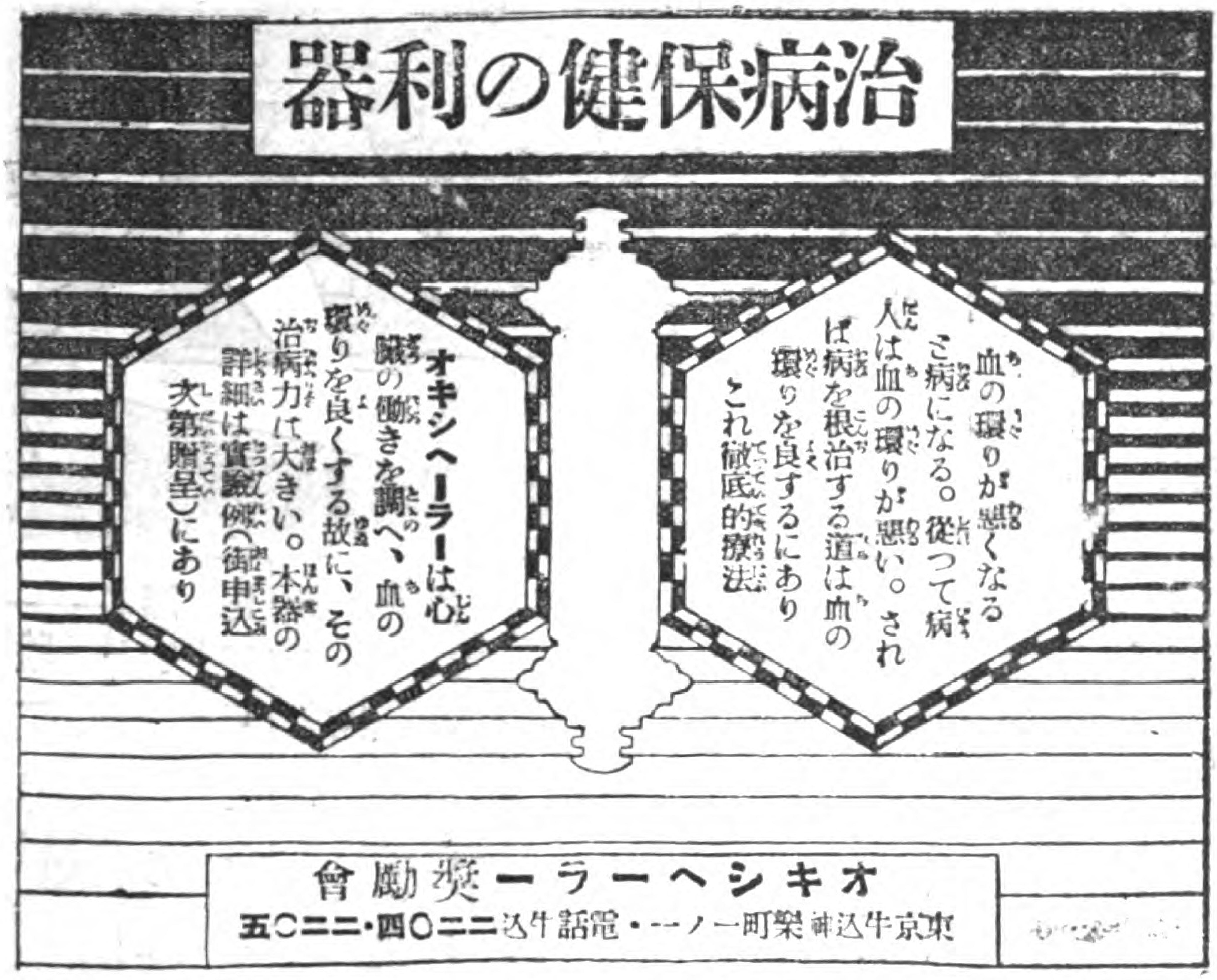
……岡田初代

■和辻哲郎氏に贈る公開狀……山脇敏子

■先帝崩御と新聞報道戰

(一)宮內省詰記者の半狂亂……里木悅郎

(二)葉山に於ける物凄さ……黑河惣





| 定價 | |
|---|---|
| 毎月一回一日發行 | |

| | 定價 | 送料 |
|---|---|---|
| 一冊 | 八十錢 | 參錢 |
| 六冊 | 四圓八十錢 | 送料共 |
| 十二冊 | 九圓六十錢 | 同 |

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和二年一月二十日印刷
昭和二年二月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人　高野敬錄
印刷人　高木鳥三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

東京市丸ノ內ビルヂング七七六區
中央公論社
電話牛込五〇八九番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


滋強飲料
カルピス
カルピスは
時を擇ばず
處を擇ばず
謹みある飲料なればなり

**GHUO KORON** (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.